西隆寺発掘調査報告書

奈良国立文化財研究所

巻首図版

上　第219次全景　東南から　　下　第228次（南）全景　東北から

奈良国立文化財研究所40周年記念学報（学報第52冊）

西隆寺発掘調査報告書

奈良国立文化財研究所　1993

序

奈良朝寺院の最後を飾った西大寺建立とほぼ同じ頃、西大寺の東北に接して官の尼寺である西隆寺が建立されていた。この寺は中世には廃絶し、また再興されることもなかったので、資料豊富な南都諸大寺に比べて、まとまった研究はほとんどなく、その詳細は不明であった。ところが、1970年代前半に西大寺駅周辺の開発に伴って西隆寺跡の発掘調査が行われ、金堂・塔・東門などが明らかとなった。その成果は『西隆寺発掘調査報告』(1976年)として刊行されている。

あれから20年。ショッピングセンターの増築や都市計画街路事業など西大寺駅周辺の開発が再び活発化し、当研究所が西隆寺の東回廊および東北部を中心として発掘を行うこととなった。その結果、寺地東北部では大形の建物が数回建て替えられていることが明らかになり、報告書はこの場所を食堂院と推定している。

寺院の発掘は、各地の国分寺や国分尼寺を含めても、伽藍中枢部の調査が中心であり、寺地周域部の建物配置が発掘調査によってこれほど明確になった例は少ないといえよう。

最後に本調査に関して多くの関係者の御協力を賜ったことに対し、あらためて厚く御礼を申しあげます。

1993年3月15日

奈良国立文化財研究所長

鈴　木　嘉　吉

西隆寺発掘調査報告書

目　次

第Ⅰ章　序　　章 ……1

1　西隆寺の発掘調査 ……1

A　1970年代前半の調査 ……1　　B　1980年代末から90年代初頭の調査 ……1

2　報告書の作成 ……3

第Ⅱ章　西隆寺の歴史 ……5

1　西隆寺の造営 ……5

2　西隆寺の占地と伽藍配置 ……10

3　平安時代以降の西隆寺 ……13

第Ⅲ章　調査概要 ……15

1　西隆寺周辺の調査 ……15

2　調査の概要 ……20

3　調査日誌 ……22

A　第209次調査 ……22
B　第210次調査 ……23
C　第212次調査 ……24
D　第219次調査 ……25
E　第221次調査 ……26
F　第223-4次調査 ……27
G　第227次調査 ……27
H　第228次調査 ……28
I　第223-21次調査 ……30

第Ⅳ章　遺　　跡 ……31

1　遺跡の概観 ……31

2　遺　　構 ……33

A　古墳時代及び古墳時代以前 ……33
B　回廊周辺 ……35
C　食堂周辺 ……40

第Ⅴ章　遺　　物 ……47

1　瓦　　塼 ……47

A　軒丸瓦 ……47
B　軒平瓦 ……56
C　道具瓦・塼 ……65
D　丸瓦・平瓦 ……67
E　文字瓦 ……68

2　土　　器 ……70

A　土壙出土の土器 ……70
B　柱穴出土土器 ……72
C　ＳＧ530および整地土,包含層出土土器 ……73
D　井戸出土の土器 ……77
E　施釉陶器・白磁 ……79
F　特殊土製品 ……81
G　墨書土器・線刻土器 ……82
H　平城京造営以前の土器 ……82

3　木 製 品 ……85

A　ＳＤ529・ＳＧ530出土木製品 ……85
B　井戸ＳＥ491出土木製品 ……86
C　ＳＥ491井戸枠転用の扉板と中方立 ……86

4　金属製品・石製品 ……88
A　金属製品 ……88　B　石製品 ……89
5　土器埋納遺構出土遺物 ……90
第Ⅵ章　自然科学による分析 ……91
1　年輪年代測定 ……91
2　西隆寺におけるプラント・オパール分析 ……92
A　試　料 ……92　C　分析結果 ……92
B　分析法 ……92　D　考　察 ……93
3　西隆寺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析 …94
A　はじめに ……94　F　脂肪酸組成の数理解析 ……97
B　土壌試料 ……94　G　脂肪酸組成による種特異性相関 …98
C　残存脂肪の抽出 ……95　H　酵素抗体法（ELISA法）による
D　残存脂肪の脂肪酸組成 ……95　糖脂質群の認定 ……99
E　残存脂肪のステロール組成 ……96　I　総　括 ……100
第Ⅶ章　考　　察 ……101
1　条坊遺構と西隆寺 ……101
A　西隆寺造営以前の条坊遺構 ……101　B　主要堂塔の配置 ……103
2　寺地と伽藍 ……105
3　遺構変遷と寺地東北部の性格 ……109
4　ＳＥ491出土の扉板とその復原 ……113

5　考古学からみた土器埋納遺構の性格 ……115

A　検出状態 ……115
B　脂肪酸分析結果に対する疑問点の提示 ……116
C　胞衣壷説の矛盾 ……119
D　地鎮め説 ……121
E　まとめ ……122

6　西隆寺創建期の軒瓦 ……123

A　瓦葺建物の抽出 ……123
B　軒瓦の組合せ ……125
C　軒瓦の製作と供給をめぐって …126

7　結　語 ……137

別表・別図 ……139

英文要旨 ……167

挿　図

Fig.

1　西隆寺周辺の平城京条坊と現状図…… 2
2　西隆寺周辺の調査位置図……16
3　6BSR地区　地区割図 ……20
4　第209次調査地域の地区割と主要遺構 ……22
5　第210次調査地域の地区割と主要遺構 ……23
6　第212次調査地域の地区割と主要遺構 ……24
7　第219次調査地域の地区割と主要遺構 ……25
8　第221次調査地域の地区割と主要遺構 ……27
9　第227次調査地域の地区割と主要遺構 ……28
10　第228次調査地域の地区割と主要遺構 ……29
11　第223－21次調査地域の地区割と主要遺構……30
12　西隆寺と現在の秋篠川流路……31
13　調査区の地形と旧秋篠川流路……32
14　ＳＤ350断面図 ……33
15　ＳＤ440断面図 ……33
16　ＳＤ529・ＳＧ530断面図……34
17　ＳＢ536の柱掘形 ……34
18　ＳＣ300模式図 ……35
19　ＳＫ388内出土土器分布図 ……36
20　ＳＸ400平面図 ……37
21　ＳＣ450平面図・断面図 ……38
22　ＳＢ451等模式図 ……39
23　ＳＡ420断面図 ……40
24　ＳＢ480等模式図 ……41
25　ＳＢ490等模式図・断面図 ……42
26　ＳＢ500等模式図 ……43
27　ＳＢ515等模式図 ……44
28　ＳＸ533平面図・断面図 …… 45
29　ＳＢ608平面図 ……46
30　軒丸瓦の外縁形態の分類……47
31　軒丸瓦拓影 1……49
32　軒丸瓦拓影 2……51
33　軒丸瓦拓影 3……55
34　軒平瓦の顎形態の分類……56
35　6663Ｃの凹面拓影……58
36　軒平瓦拓影 1……59
37　軒平瓦拓影 2……61
38　軒平瓦拓影 3……63
39　文字瓦拓影……69
40　柱穴出土の土器……73
41　ＳＥ548・ＳＥ370出土の土器……77
42　土器埋納遺構実測図……90
43　土器・銭貨の出土状況……90
44　ヒノキの暦年標準パターングラフ（下）と井戸部材の年輪変動パターングラフ（上）……91
45　土壌試料採取地点……94
46　残存脂肪の脂肪酸組成……96
47　残存脂肪のステロール組成……97
48　残存脂肪の脂肪酸組成樹状構造図……98
49　残存脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関……98
50　胞衣壷に残存する糖脂質の酵素抗体反応 ……100
51　金堂（左）・東門（右）復原平面図 ……105
52　西隆寺の寺地と建物配置 ……106
53　西隆寺伽藍配置復原図 ……107
54　西大寺建物配置図 ……108
55　Ｃ期の食堂院遺構配置図 ……110
56　西大寺食堂院建物配置復原図 ……110
57　Ｄ期の食堂院遺構配置図 ……111
58　ＳＥ491出土の扉板……113
59　ＳＥ491出土の扉板復原図……114
60　西隆寺出土軒瓦の組成 ……125
61　西隆寺創建期の軒瓦の組合せ ……127
62　6761Ａの笵傷進行と顎形態の変化 …129

表

Tab.

1　各次調査の期間・面積等 ……4
2　丸瓦・平瓦の地区別出土量……67
3　墨書土器一覧表……81
4　西隆寺におけるプラント・オパール分析結果……93
5　プラント・オパールの顕微鏡写真……93
6　土壌試料の残存脂肪抽出量……95
7　試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合……97
8　ヒト赤血球膜の糖脂質……99
9　胞衣壷に残存する血液型糖脂質群の認定 ……100
10　西隆寺関連条坊道路の推定計画線の方程式 ……102
11　西二坊々間路心の実測座標値 ……103
12　西隆寺堂塔等の実測及び推定座標値 104
13　胞衣壷検出例一覧表 ……120

別表・別図

1　軒丸瓦の分類と出土位置 ……140
2　軒平瓦の分類と出土位置 ……146
3　出土瓦の平面分布 ……152

図　　面

PLAN.

1　1989～1991年度西隆寺発掘遺構実測図
2　第209次実測図（東半分）
3　第209次実測図（西半分）
4　第210次実測図
5　第212次実測図
6　第219次実測図
7　第221次実測図
8　第227次実測図
9　第228次実測図（南半分）
10　第228次実測図（北半分）
11　第223－21次実測図

原色写真

巻首図版　上　第219次全景　東南から
　　下　第228次(南)全景　東北から

写　　真

PL.

1　第209次　　ＳＣ300全景 南から
2　第209次　　1 ＳＣ300，ＳＸ400　北から
　　2 ＳＣ300 北から
3　第209次　　1 ＳＸ400　西から
　　2 ＳＢ395，ＳＢ366　北から
4　第210次　　1 ＳＡ420　北から
　　2 ＳＡ420　北から
　　3 ＳＸ430　西から
5　第212次　　1 第212次全景　東南から
　　2 第212次北半　東南東から
6　第212次　　1 ＳＣ450　東南東から
　　2 ＳＢ441，ＳＡ442　東から
7　第212次　　1 ＳＤ451，ＳＤ452　東から
　　2 ＳＸ455　北から
8　第219次　　1 第219次全景　東南から
　　2 第219次全景　北西から
　　3 ＳＢ495，ＳＢ500　西から
9　第219次　　1 ＳＢ495　東から
　　2 ＳＢ480，ＳＢ495　北から
10　第219次　　1 ＳＢ490　東から
　　2 ＳＢ490　北西から
　　3 ＳＢ490の根石　南から
11　第219次　　1 ＳＡ425，ＳＢ500　東から
　　2 ＳＢ490，ＳＢ495　北東から
12　第221次　　1 第221次全景　東北から
　　2 ＳＢ542，ＳＢ541　東から
13　第221次　　1 ＳＢ542，ＳＢ541　東から

		2 ＳＣ450，ＳＸ550　東から
14	第227次	1 ＳＤ429，ＳＸ605　東北から
		2 ＳＡ610，ＳＤ429　西北から
		3 ＳＤ429　東から
15	第228次（南）	1 第228次（南）全景　東北から
		2 ＳＢ510　北から
16	第228次（南）	1 ＳＢ510　北から
		2 ＳＧ530，ＳＤ529　北から
17	第228次（北）	1 ＳＢ505，ＳＢ500　東北から
		2 第228次（北）全景　東北から
18	第228次（北）	1 ＳＢ505，ＳＡ506　東から
		2 ＳＢ500，ＳＢ505　東北から
19	第223－21次	1 第223－21次全景　東北から
		2 ＳＢ540　東から
20	第223－21次	1 ＳＸ533，ＳＡ535　東北から
		2 ＳＸ533，ＳＡ535　西北西から
		3 ＳＧ530，ＳＸ531　西南から
21	井　戸	1 第209次ＳＥ370　北から
		2 第212次ＳＥ448　東から
		3 第219次ＳＥ491　西から

22　大和国西大寺往古敷地図

23　大和国西大寺敷地之図

24　西大寺伽藍絵図

25　西大寺伽藍絵図（西隆尼寺部分の拡大）

26　大和国西大寺敷地図

27　西大寺古伽藍敷地并現存堂舎坊院図

28　軒瓦の組合せ(1)

29　軒瓦の組合せ(2)

30　軒丸瓦(1)

31　軒丸瓦(2)

32　軒丸瓦(3)

33　軒丸瓦(4)

34　軒丸瓦(5)

35　軒丸瓦の製作技法

36　軒平瓦(1)

37　軒平瓦(2)

38　軒平瓦(3)

39　軒平瓦(4)

40　軒平瓦の製作技法(1)
41　軒平瓦の製作技法(2)
42　軒平瓦の製作技法(3)
43　道具瓦(1)
44　道具瓦(2)
45　丸　瓦
46　平　瓦
47　文字瓦
48　土壙出土の土器
49　ＳＧ530出土の土師器
50　ＳＧ530出土の土師器・黒色土器・製塩土器
51　ＳＧ530出土の須恵器
52　ＳＥ491出土の土器
53　硯・特殊土製品
54　仏前具（須恵器・施釉陶器）
55　施釉陶器・白磁
56　墨書土器・線刻土器
57　縄文・古墳時代の土器
58　木製品
59　木製品
60　井戸枠転用の扉板（Ａ・Ｂ材）
61　井戸枠転用の扉板（Ｃ材）
62　井戸枠転用の扉板（Ｄ材）
63　金属製品
64　石製品
65　土器・銭貨の出土状況
66　土器埋納遺構内出土の布の顕微鏡写真
67　プラント・オパールの顕微鏡写真

付　　図

1　遺構全図

西隆寺発掘調査報告書

１９９３

第1章　序　　章

この報告書は、奈良ファミリー建設に伴う西隆寺跡の発掘調査および都市計画道路建設に伴う西隆寺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。

奈良ファミリー建設に伴う調査は、1989年度の第209次調査・第210次調査、1990年度の第212次調査・第219次調査の４回にわたり、発掘面積は3990㎡である。

都市計画道路建設に伴う調査は、1990年度の第221次調査、1991年度の第223－4次調査・第227次調査・第228次調査・第223－21次調査の５回にわたり、発掘面積は2081㎡である。

1　西隆寺の発掘調査

西隆寺跡は、奈良市西大寺東町の一帯にあり、近畿日本鉄道西大寺駅の北東にあたる。西大寺駅は、京都・大阪・奈良・橿原各方面への乗り換え駅として、周辺での宅地開発の進展に伴って、近畿日本鉄道有数のターミナル駅として成長してきた。駅周辺、特に西隆寺跡の位置する駅北東一帯は、ショッピングセンターを核にした商業地区として開発が著しい。現在では、地上５階程度のＲＣ建築が林立する景観となっている。開発に伴う発掘調査は随時行われ、奈良時代末期創立の尼寺である西隆寺、奈良時代の平城京、古墳時代の建物跡の様子が明らかになりつつある。

西隆寺の発掘調査は1970年代前半と1980年代末から90年代初頭の２時期に区分できる。

A　1970年代前半の調査

1960年代に日本住宅公団が計画した平城ニュータウン建設構想を契機として、1970年代前半に西大寺駅周辺は急速な開発ラッシュとなり、駅北口から東へ伸びる市道沿いには、ショッピングセンターや銀行などが建設され、水田は急速に減少することとなった。

この開発に伴い、1971年３月から５月にかけて７件の開発に伴う発掘届が提出され、仮設建物の建築を除く６件について発掘調査を行った。その結果、西隆寺の金堂・塔・東門・南面を画する築地を確認するとともに、西隆寺造営以前の井戸や掘立柱建物を検出し、西隆寺造営に関する木簡の出土があった。その調査成果は西隆寺調査委員会『西隆寺発掘調査報告』（1976年３月）として刊行されている。

B　1980年代末から90年代初頭の調査

(1)　ショッピングセンター改築に伴う調査

1970年代前半の調査の後建設されたショピングセンターが古くなり手狭となったため、改築計画が起こった。今回はショッピングセンターの大幅な増床及び立体駐車場を伴う工事のため、先回には調査対象とならなかった部分にも開発行為が及ぶこととなった。そのため奈良県教育委員会の依頼のもとに、奈良国立文化財研究所が発掘調査を行った。発掘調査は旧ショッピン

グセンターが解体される以前に、開発者の所有地で増床予定部分・立体駐車場予定部分を行い、その後開発者の土地買収に伴って発掘調査を随時行い、1989年9月から1991年3月にかけて合計4回で総面積3990㎡の調査を行った。

(2) 都市計画道路建設に伴う調査

奈良市は都市計画道路整備事業の促進を図っているが、その一環として西大寺一条線の計画が1960年代に決定されていた。

西大寺一条線は西大寺駅北口から東北方向へ約400m延びる幅員20～28mの全く新たな道路であり、このうち北3分の2部分が1992年度までの事業として決定された。事業主体は奈良市で、国庫補助を受けて行われた。当該区を南から便宜的にⅠ～Ⅴ区に分け、発掘調査が可能な状況になった部分について、随時発掘を行った。

発掘調査は奈良市の依頼のもとに奈良国立文化財研究所が行い、1991年1月から1992年2月にかけて、221次（Ⅰ区）・223－4次（Ⅴ区）・227次（Ⅳ区）・228次（Ⅲ区）・223－21次（Ⅱ区）の順に合計5回で総面積2081㎡の調査を行った。

Fig. 1　西隆寺周辺の平城京条坊と現状図

2　報告書の作成

今回報告するのは奈良ファミリー建設に伴う西隆寺跡の調査４回分と、都市計画道路建設に伴う西隆寺跡の調査５回分である。

以下発掘責任者と発掘担当者・発掘関係者を列記する。

次　数	発掘年度	所　長	平城宮跡発掘調査部長	発掘担当者				
第209次	1989	鈴木嘉吉	町田　章	島田　敏男	金子　裕之	巽　淳一郎	寺崎　保広	
					佐川　正敏	村上　隆		
第210次	1989	鈴木嘉吉	町田　章	巽　淳一郎	金子　裕之	寺崎　保広	佐川　正敏	
					村上　隆	島田　敏男		
第212次	1990	鈴木嘉吉	町田　章	杉山　洋	高瀬　要一	山崎　信二	浅川　滋男	
					渡辺　晃宏			
第219次	1990	鈴木嘉吉	町田　章	玉田　芳英	上野　邦一	森本　晋	森　公章	
					小沢　毅			
				松本　修自	金子　裕之	巽　淳一郎	寺崎　保広	
					佐川　正敏	小野　健吉	中村　慎一	
第221次	1990	鈴木嘉吉	町田　章	小野　健吉	金子　裕之	巽　淳一郎	松本　修自	
					寺崎　保広	佐川　正敏		
第223-4次	1991	鈴木嘉吉	町田　章	島田　敏男	毛利光俊彦	舘野　和己	本中　真	
					小池　伸彦	岸本　直文		
第227次	1991	鈴木嘉吉	町田　章	玉田　芳英	上野　邦一	森本　晋	森　公章	
					小沢　毅			
第228次	1991	鈴木嘉吉	町田　章	森本　晋	上野　邦一	玉田　芳英	森　公章	
					小沢　毅	岸本　直文		
				松本　修自	金子　裕之	巽　淳一郎	寺崎　保広	
					佐川　正敏	小野　健吉		
第223-21次	1991	鈴木嘉吉	町田　章	浅川　滋男	高瀬　要一	山崎　信二	杉山　洋	
					渡辺　晃宏			

報告書の作成は1991年度から開始し、遺構関係の整理については遺構調査室・計測修景調査室があたり、遺物については考古第一調査室・考古第二調査室・考古第三調査室が分担し、執筆分担はつぎのとおりである。

第Ⅰ章　　山崎　信二

第Ⅱ章　　舘野　和己

第Ⅲ章　1 小野　健吉　2 杉山　洋　3 山崎　信二

第Ⅳ章　　松本　修自

第Ⅴ章　1 小沢　　毅　2 A・B・D 杉山　洋　2 C・E～H 玉田　芳英

　　3.4 中村　慎一　5 杉山　洋

第Ⅵ章　1 光谷　拓実　2 古環境研究所

　　3 中野　益男・福島　道広・中野　寛子・明瀬　雅子・長田　正宏

第Ⅶ章　1 小野　健吉　2.3.4 松本　修自　5 杉山　洋　6 小沢　毅　7 山崎　信二

英文要旨　佐々木　憲一

絵図類の掲載については西大寺・東京大学文学部の許可を受け、東京大学史料編纂所、同大学文学部佐藤信助教授の協力を得た。なお、布の鑑定については布目順郎氏に依頼し、その成果は結語に記した。

遺構・遺物の写真撮影は佃幹雄・牛島茂が行なったが、プラント・オパールは古環境研究所による。

編集は町田章の指導のもとに山崎信二が担当した。

図面浄書はそれぞれ執筆者が分担し、上田素土子・信夫利子・杉本陽子・松岡緑・吉田佐恵子・吉村純子・吉本妙子の助力があった。

Tab. 1　各次調査の期間・面積等

調査次数	調査地区	地区名	面積(㎡)	調査期間	調査担当者	原　因	報　告
209	西隆寺旧境内	6BSR	1,800	1989 9.28～11.29	島田敏男	奈良ファミリー建設	1989年度概報 奈文研年報1990
210	西隆寺旧境内	6BSR 6AGA	560	1989 11.20～12.12	巽淳一郎	奈良ファミリー建設	1989年度概報 奈文研年報1990
212	西隆寺旧境内	6BSR	600	1990 5. 7～ 6.19	杉山　洋	奈良ファミリー建設	1990年度概報 奈文研年報1991
219	西隆寺旧境内	6BSR	1,030	1990 11. 7～11.22 1991 1.22～ 3.29	玉田芳英 松本修自	奈良ファミリー建設	1990年度概報 奈文研年報1991
221	西隆寺旧境内	6BSR	585	1991 1.22～ 3.14	小野健吉	奈良市都市計画道路	1990年度概報 奈文研年報1991
223－4	右京北辺二坊	6AGR	56	1991 6.13～ 6.14	島田敏男	奈良市都市計画道路	
227	西隆寺旧境内	6BSR 6AGR	500	1991 7. 2～ 7.31	玉田芳英	奈良市都市計画道路	1991年度概報 奈文研年報1992
228	西隆寺旧境内	6BSR	400 300	1991 8. 5～10. 3 10. 3～11. 7	森本　晋 松本修自	奈良市都市計画道路	1991年度概報 奈文研年報1992
223－21	西隆寺旧境内	6BSR	236	1992 1. 6～ 2. 6	浅川滋男	奈良市都市計画道路	1991年度概報 奈文研年報1992

なお、平城宮跡発掘調査部では平城宮跡の発掘調査に次数を付けてきたが、昭和48年の平城京調査以降、平城京でも平城宮調査と同じ続き番号の次数を付け始めた。ただ、南都諸大寺の発掘調査では、薬師寺・大安寺・西大寺など次数を付けてはいなかった。

これら諸大寺の調査も含めて、平城宮・京調査と同じ続き番号の次数を付け始めたのは、1989年の薬師寺東面回廊の調査（第207次）以降のことである。『西隆寺発掘調査報告』（1976年）では、1971年から73年までの調査を第1次～6次と呼んでおり、本報告にかかわる第209次から第223－21次調査を，それぞれ西隆寺第7次～15次調査と呼ぶことも可能である。しかし、2つの次数を連記することは混乱を招く恐れがあり、本報告では第210次から第223－21次の呼称を用いている。

第Ⅱ章　西隆寺の歴史

1　西隆寺の造営

西隆寺が造営されたのは、称徳天皇の時代である。造営の理由・開始を直接告げる史料はないが、『続日本紀』神護景雲元(767)年８月丙午(29)条（以下、史料は特に断らない限り、『続日本紀』）に「従四位上伊勢朝臣老人を造西隆寺長官とす」とあり、５日後の翌月辛亥(４)条には引き続き「従五位下池原公禾守を造西隆寺次官とす」という措置を取ったことが見え、ここに長官・次官が揃ったことから、この時西隆寺の造営が開始されたと理解できる。時に伊勢老人は中衛中將・参河守の任にあり、一方池原禾守は大外記・右平準令であったが、ともにその任のまま西隆寺の造営にも当たることになった。

西隆寺の造営については、西大寺もあわせて考える必要がある。西大寺は前年にあたる天平神護２(766)年12月12日に、称徳天皇が行幸しているのが初見である（同月癸巳条）が、その縁起については宝亀11(780)年12月25日「西大寺資財流記帳」に次のように見える。

それ西大寺は平城宮御宇宝字称徳孝謙皇帝、去る天平宝字八年九月十一日誓願し、将に七尺の金銅四王像を敬造し、兼ねて彼の寺を建てんとす。乃ち天平神護元年を以て件の像を創鋳し、以て伽藍を開くなり（後略）（縁起坊地第一）。

西大寺の創建

これによれば同寺の建立は天平宝字８(764)年９月に、孝謙上皇（称徳）が四王像を発願したのに始まったというが、天平宝字８年９月11日といえば、恵美押勝（藤原仲麻呂）の乱が起こった日である。『続日本紀』同日条は「太師藤原恵美朝臣押勝の逆謀頗る泄る」云々と、乱の勃発とその後の「是夜、押勝近江に走る。官軍追討す」という押勝の敗走を語っている。周知のようにこの押勝の乱は、淳仁天皇及びその下で太師（太政大臣）として権勢を振るってきた押勝側と、孝謙上皇と僧道鏡側との間の対立の結果として生じたものである。したがって上記の上皇の造像誓願は、押勝に対する戦勝を祈願したものであると理解できる。この勅願の西大寺は、翌々年の天平神護２年12月には、重祚した称徳天皇の行幸を迎えたわけであるが、造西大寺司の官人の任命については、その翌年にあたる神護景雲元年２月に、長官に従四位下佐伯宿祢今毛人、次官に正五位上大伴宿祢伯麻呂を当てたのが初見である（同月戊申(28)条）。行幸より造西大寺司の任命が遅れているが、これについては、まず造営されたのは四天王像を安置する四王堂であり、この行幸はその完成を意味し、その後寺地が拡大され、大規模な伽藍造営が始まったのであり、造西大寺司の任命は事業拡大に対応する措置であると見られている（太田博太郎「西大寺の歴史」『奈良六大寺大観　西大寺　全』）。

西隆寺の造営は称徳天皇の意向

そして右の造西大寺司の任命から半年後に、造西隆寺司の任命によって始まった西隆寺の造営は、やはり称徳天皇の意向によるものと考えられる。それは造営の時期がほぼ重なるというのみでなく、西大寺が僧寺であるのに対し、西隆寺は尼寺であり、かつ位置も近接しており、両者はいわば一対になるものと考えられていたと見られるからである。すなわち東大寺に対し

西大寺と名付られたように、尼寺である法華寺に対応するものとして、西隆寺が造営されたわけである。これは称徳天皇と道鏡が、恵美押勝をかなり意識し、その政策を模倣し、対抗しようとする傾向が強かったことを示すものであると、評価されている（岸俊男『藤原仲麻呂』）。

なお『東大寺要録』第１本願章１には天平字８年９月11日条に、西大寺の造営を記した後、「実忠和尚西隆寺別院を立つ」という記事があり、さらに百万塔の造営を伝えている。ここではやはり西大寺・西隆寺の建立を一体的なものと捉えているが、実忠の関わりについては他に所見がない。この「西隆寺別院」に関しては、堀池春峰氏は「西大寺の別院としての西隆寺」の意と解されている（「恵美押勝の乱と西大寺小塔院の造営」『南都仏教史の研究　下』）。これは西隆寺の位置づけについての注目すべき記事と言えよう。

押勝の乱と造西隆寺司長官伊勢老人

ところで上に述べたような西隆寺の性格は、その造営に当たった造西隆寺司の人物にも反映しているように見られる。すなわち長官の伊勢老人は、押勝の乱が勃発した当日の９月11日に、従六位下から一躍従四位下に昇叙されるとともに、中臣伊勢連姓から朝臣姓を賜っている。これは乱の緒戦における勲功者に対する行賞といえよう。そして乱後の10月には参河守になり（同月癸未(20)条）、さらに神護景雲元年８月16日の改元の日に従四位上に昇っている。この時から『続日本紀』では伊勢朝臣として見えるようになる。

なお彼が造西隆寺長官に任ぜられた時、参河守と共にもう一つ兼任していた中衛中将については、その任官時期は不明である。しかし同職の初見は、天平神護元年２月に任じられた石上朝臣宅嗣であるが（同月己巳(８)条）、その位階は従四位下であることからすれば、伊勢老人の補任も従四位下昇叙後のことであろう。神亀５年の中衛府発足以来長く中将は置かれず、宅嗣がその初見であることからすれば、中将の設置は押勝の乱後のことであり、歴代の任官者には乱の功績者が多いという特徴が指摘されている（笹山晴生『日本古代衛府制度の研究』）。老人もその一人である。ただし、老人はその後神護景雲元年８月には中衛中将、同２年６月には外衛中将、翌７月および宝亀２年正月・同５年３月には中衛員外中将として登場し、同９年３月には中衛中将に任じられている（同月丙辰(10)条）。こうした動きを見ると、史料の混乱があると考えられ、実際は神護景雲元年８月丙午条に初見以来、長く中衛員外中将の地位にあったのではないだろうか（笹山晴生前掲書）。

いずれにせよ彼は押勝の乱の功労者として、大きくその地位を前進させた人物であり、彼を造営の長官に据えたことは、西隆寺の造営が乱と関わっていたことを反映するものといえよう。なお造西大寺長官佐伯今毛人も反押勝派の人物であり（宝亀８年９月丙寅(18)条）、彼の補任も、造東大寺司長官の地位にもいたという彼の経歴・能力によるのみでなく、同様の事情も大きく作用したことであろう。ただし造西大寺司の場合、長官の今毛人が従四位下、次官大伴伯麻呂が正五位上という位階であるのに対し、造西隆寺長官伊勢老人が従四位上、次官池原禾守が従五位下であり、長官を比べれば西隆寺は西大寺より高位であるのは注目されよう。

長官・次官の任命の翌神護景雲２年５月には「恵美仲麻呂の越前国の地二百町、故近江按察使従三位藤原朝臣御楯の地一百町を西隆寺に捨入す」という、財政的基盤を整える措置が取られた（同月辛未(28)条）。御楯は仲麻呂の子であり、仲麻呂父子の没官地を施入したことは、同寺の建立の契機に対応するものといえよう。また６月には伊勢老人が伊勢国造になり（同月戊寅(６)条）、７月には池原禾守が播磨介に（同月壬申朔条）、老人が修理長官になったが（同

月戊子(17)条)、それぞれ造西隆寺長官・次官の地位はそのまま兼任した。なおここで伊勢老人が就任した修理長官については、木簡の所でふれることにする。

西隆寺に寺印を与える

宝亀2(771)年8月、僧綱と諸寺の印を鋳造し頒布したが(同月己卯(26)条)、それは大安寺・薬師寺・東大寺・興福寺・新薬師寺・元興寺・法隆寺・弘福寺・四天王寺・崇福寺・法華寺・西隆寺が対象であった。ここで寺印が与えられたことは、それを用いる三綱の存在が前提になるから、既に西隆寺が成立し機能していたことを示している。

同年正月、伊勢老人は皇后宮亮に任じられているが、その際、中衛員外中將は兼任のままであるが、造西隆寺長官については見えない(同月辛巳(23)条)。また一方の池原禾守は神護景雲3年6月に、大外記の任から修理次官に任じられたが(同月庚申(24)条。これについては後述)、造西隆寺次官についての記事はない。またこれ以後も、同司についての記事は『続日本紀』に現れない。これは既に造寺司の任務が一応終了したことを窺わせるものであり、先の寺印の頒布と対応するものと言えよう。したがって西隆寺は宝亀2年8月までには一応の完成を見たと考えられる。

この後の西隆寺について『続日本紀』が語る所は、宝亀9年3月丙寅(20)条の皇太子山部親王の病気のため、東大寺・西大寺・西隆寺で誦経したということのみである。当時における西大寺・西隆寺の地位の高さを示す出来事と言えよう。

そこで他の史料を探すと、正倉院文書に2通、関係文書がある。1つは宝亀6年正月3日「韓国千村解」(『大日本古文書』23－77)である。それによれば造東大寺司の奉写一切経所の経師であった千村は、増壱阿含経三帙第六巻から第十巻までを書写しているが、それは西隆寺から借り出したものであった。またもう1通、年月未詳の「造東大寺司牒」(『同』23－169)がある。これは西隆寺鎮三綱務所に宛てたもので、樓炭経・集異門足論など「経論伍部漆拾弐巻」を奉請したものである。この文書の裏は、宝亀6年正月「奉写一切経所食口案」(『同』23－312)の断簡である(宝亀7年6月9日から10日までの分)。したがって宝亀年間には西隆寺は、多くの経典を有し、造東大寺司の写経所との間で経典の貸借をしていたことがわかる。

造営過程に関する木簡

一方造営過程に関する史料として、木簡がある。かつて東門地区の発掘調査で79点、金堂地区の調査で1点出土した。東門地区では西隆寺造営に伴う廃材や不用品を投棄した、2箇所の土坑状の遺構SX033とSX035から木簡は出土した(西隆寺調査委員会『西隆寺発掘調査報告』。以下、木簡の番号はこれによる)。その中には、

(31)・越中国婦負郡川合郷戸主□□
　・□日浪米五斗120×21×2　051
　　〔五カ〕　天平神護三年

(32)・参河国播豆郡熊来郷物部馬万呂五斗
　・　　景雲元年十月十日168×19×6　032

(29)・紀伊国日高郡南部郷戸主□□石
　・□調塩三斗□□景雲二年207×22×3　011
　　〔徳カ〕

などのように、天平神護3年(＝神護景雲元年)から翌神護景雲2年までの、米・調塩の荷札木簡5点が含まれ、西隆寺の造営が官物を用いた国家的事業であったことを、木簡のうえからも確かめることができる。

ところで木簡に見える年紀等から、木簡群の年代を推定してみると、①まず荷札の年紀は天

平神護3年・神護景雲2年の2年間であること、②（天平）勝宝元年と記したものが1点あるが(49)、これは習書であること、③天平勝宝9歳（＝天平宝字元年）以降宝亀元年9月まで、「首」と「史」に替わる表記として用いられた「毘登」を用いたものがある(35)こと、④「近衛府」の名を記す木簡が3点あるが(43・44・45)、近衛府は天平神護元年2月に、授刀衛を改称して成立したものであることなどから、②の天平勝宝元年は孤立しており、全体として神護景雲年間を中心に、下限は宝亀元年9月であると判断できよう。

このように見てくると、南家からの材の進上を物語る

（4）・南家解　申進上材事　　□□弐張　桙立参枝

・鼠走弐枝　　桧皮□□□□　□□石勝四年六月十四日伊〔賀カ〕□□　(196＋125)×(28)×3　019

にある年紀「四年」は、神護景雲4年（＝宝亀元年）のことと考えられる（これ以外にも「四年」と記す木簡が1点ある(9)）。以上のような造営過程で用いられ廃棄された木簡の年代は、上述した宝亀2年8月には西隆寺は成立していたという推測にも、合致するものである。

木簡に見える修理司

次に木簡に見える修理司について考えよう。修理司の名が見えるのは、次の4点である。

(38)・修理司工丹生豊□

・　古銭卅文　92×27×3　032

(39)・修理司判官息長木人

・新銭廿五文　80×19×2　032

(40)・修理司史生太真□

・　新銭十五文　78×15×3　032

(41)・修理司民領丈部□

・　新銭十□　(52)×(13)×3　039

これらはいずれも銭に付けられた付札であり、それによって、修理司には判官・史生・民領・工のいたこと、彼らが古銭・新銭を出していることがわかる。この場合の銭は、おそらく他の木簡(37)に名が見える「智識銭」であろう。同じように銭の付札に登場する官司としては、大炊寮(37)と近衛府(43)がある。

この修理司は先にも少し触れたように、『続日本紀』に次のような官人の任官記事がある。

〈長官〉

神護景雲2年7月戊子(17)　伊勢朝臣老人（宝亀9年3月丙申(10)も見官）

〈次官〉

神護景雲2年7月戊子(17)　相模宿祢伊波

同　3年6月庚申(24)　池原公禾守・堅部使主人主

宝　亀　3年11月丁丑朔　　軽間連鳥麻呂

同　　5年9月庚子(4)　英保首代作

丁度木簡の時期と重なるように現れ、これ以降史料から姿を消す。『続日本紀』では修理長官・次官とあり、修理司の名はないが、長官・次官は鋳銭司・造東大寺司をはじめとして、令外官の司に用いられた官名であるから、これらが修理司の官人であることは間違いない。

上の長官・次官の名を見ると、造西隆寺司の官人と重なるもののいることが注目される。伊勢老人は任官当時、造西隆寺長官であり、修理長官との兼任であった。もっとも彼はその後い

つの時点かで、造西隆寺長官の任からはずれたらしく、それ以後彼が帯びる官名からそれは消えている。また神護景雲3年6月に次官となった池原禾守は、同元年9月に造西隆寺次官になり、翌年7月にもその職にあった。修理次官に任じられた当時もそうであったか否かは、定かではないが、その任官を伝える『続日本紀』の記事は、彼を大外記と記すのみである。

造西隆寺司と修理司

このように見てくると、大勢として造西隆寺司が見えなくなるのに替わって、修理司が登場してくること、その官人に共通する者がいることがわかる。しかも修理司の智識銭の木簡が特に多いことは、同司と西隆寺造営の密接な関連を示唆するものである。

両司の関係を図示すると、次のようである（○はその上と同一人物）。

〈造西隆寺司〉　　〈修理司〉

長官　　次官　　長官　　次官

伊勢老人（景雲1.8）

池原禾守（景雲1.9）

○（同2.6）　○（同2.7）

○（同2.7）　伊勢老人（景雲2.7）　相模伊波（同右）

池原禾守・堅部人主（同3.6）

軽間鳥麻呂（宝亀3.11）

英保代作（同5.9）

○（同9.3）

造西隆寺司の長官が修理司の長官に、そして前者の次官が後者の次官になっているのである。しかも前者は、後者の初見である神護景雲2年7月の記事を最後に、見えなくなる。こうした両者の関係からすると、前者の西隆寺造営の機能が次第に後者によって担われるようになったと理解できるのではなかろうか。

かつて『西隆寺発掘調査報告』では、西大寺・西隆寺の造営には、造西大寺司・造西隆寺司があたるから、それとは別に置かれた修理司の役割を、両寺造営に伴う京城西北部の条坊の整備などにあたったのではないかと推測したが、修理司を条坊整備に関係すると見る積極的な根拠はない。むしろ平城宮内で「修」「理」あるいはそれらの略体、さらに「司」銘の刻印瓦が出土していることから、同司が宮内の修理にあたったことは確実であろう（森郁夫「平城宮の文字瓦」奈良国立文化財研究所『研究論集VI』）。造寺司と修理司の時期差等の上記の知見からすると、あるいは西隆寺の造営がかなりの早さで進んだことを受けて、西隆寺造営の最終段階から修理司がかわって担当するようになったとも考えられよう。さらに宝亀5年9月に次官になった英保代作が、西大寺兜率天堂を造営した人であること（同2年10月己卯(27)条）からすると、西隆寺にとどまらず、他寺とりわけ西大寺にも関与した可能性がある。

修理司の組織については、『続日本紀』から長官・次官、木簡からは判官・史生・民領・工の存在を知ることができる。この他木簡から窺える造営関係の組織としては、工所(1)・御像所(46)があり、また内匠寮(11)も何らかの関与をしたとみられるし、衛士(8)も動員されたことがわかる。工所には舎人・自進・斐太工が属していたことが知られる。御像所は、仏像作製にあたる組織であろう。工所・御像所はともに、現業部分の組織であり、造西隆寺司あるいは修理司に属したものであろう。造西隆寺司と修理司に関する先の推測に誤りがなければ、両所

は当初は造西隆寺司に属し、後には修理司の下に入ったことになろう。

次に木簡に見える作業内容としては、井戸の掘削(6)あるいは埋め戻し(5)、桧皮の運搬(7)がある。井戸の埋め戻しは、西隆寺造営以前にあった井戸を対象としたものであろう。実際発掘調査では、西隆寺造営以前の奈良時代前半の井戸がいくつか検出されている。

次に木簡から窺える、西隆寺造営の他の特徴を指摘しよう。木簡中に荷札木簡が含まれていることは先に指摘したが、西隆寺が勅願寺であることから、官物が用いられることは当然のこ

智識銭

とである。それ以外に財源として木簡に見えるものに智識銭がある。

(37)・合□智識銭□所入大炊寮助□□

・□

部宿祢人五百文　神護景雲二年十二月　(84)×(15)×1　039

これは大炊寮助某以下数人の官人がまとめて出した智識銭に付けた付札である。この他にも智識銭と明記はないが、それと推測できるものがいくつかある。先の修理司木簡も「新銭」「古銭」の語があり、近衛府木簡(43)にも「新六百八」という新銭のことと見られる記載があることから、いずれも官人の智識銭の付札とみられる。この場合、新銭は天平宝字四年鋳造の万年通宝、ないしは天平神護元年鋳造の神功開宝、古銭は和同開珎である。さらに

(35)　。田辺毘登□嶋

〔進カ〕

□一百文　53×23×5　022

等（他に36・42）は、個人が施入した智識銭であろう。

南家の関与

次に注目されるのが、先に紹介した南家の関与を示す木簡(4)である。そこに見える「四年」は上述のように、神護景雲4年のことである。南家が桙立（方立）・鼠走等の材木を進上したことを示し、智識銭以外にも貴族による施入があったことがわかる。この南家が藤原南家であるとすると、南家で注目されるのは豊成である。豊成は天平宝字8年9月、弟押勝の失脚とともに、大宰員外帥から右大臣に返り咲いた。彼は、それ以前の天平宝字元年7月、押勝を除こうとした橘奈良麻呂の変に加担したとして、大宰員外帥に左遷されたわけであるから、押勝の乱と関わり深い、西隆寺の造営に右大臣復帰後に協力しようとしたとしても、不思議ではない。ただし、豊成は伊勢老人の造西隆寺長官任命後まもなくの、天平神護元年11月に死去しており(同月甲申(27)条)、木簡の神護景雲4年には、既に彼の子供の世代になっているが、上のような関わりから南家として、西隆寺に木材を施入したのであろう。

最後に「宇治銭用」と表裏に記した題籤軸(47)は、宇治における銭の支出を記した帳簿の軸に、その表題を書いたものである。宇治津は近江方面から木材を筏に組んで、瀬田川・宇治川・木津川と経由して、平城京に運んでくる際の中継地であり、また木材の売買が行われていたことも知られる（延喜木工式)。おそらく西隆寺の造営にあたっても、木材の入手を近江方面に求めたことを示すものであろう。

2　西隆寺の占地と伽藍配置

西隆寺の寺地の位置については、長承3(1134)年5月25日「大和国両寺敷地図帳案」(西大

寺文書、『平安遺文古文書編５』2302号、同書は「南寺」とするが、内容からは「両寺」とすべきであろう）に

寺百九

西大寺十六丁[七カ]□段之内十

西隆寺四丁四段敷地

右京一条二坊北辺

一条二坊

九坪一町西隆寺　西小[一反]□□同寺　南小一反同寺

十坪一町同寺　西小一反同寺　南大二反勅

十一坪一町勅

十二坪一町勅

十三坪一町勅

十四坪一町勅

十五坪一町西隆寺

十六坪一町西隆寺　西大二段勅　南小一反西隆寺

とあり、右京一条二坊の九・十・十五・十六坪を占めていたことがわかる。上に見える大・小はそれぞれ大路・小路のことであり、４坪を占めることにより、その中を十字形に走っていた小路を寺域内に取り込んだことがわかる。

西隆寺は右京一条二坊の九・十・十五・十六坪を占地

また鎌倉時代に作られた「大和国西大寺往古敷地図」（ＰＬ.22　東京大学文学部所蔵、東京大学史料編纂所『日本荘園絵図聚影３』10）では、やはり右京一条二坊の九・十・十五・十六坪が一体的な敷地とされ、その中央に「西隆寺」という記載があり、上記のことを裏付けているし、発掘調査の結果もこれに合致する。なおやはり鎌倉時代の「大和国西大寺敷地図」（東京大学文学部所蔵、『同上』９）では、坪ごとに分割されて描かれているが、上と同じ４つの各坪に「寺中」、４坪の中を十字に走る小路の交点に「西隆寺」という朱書が施されている。

次に敷地内の伽藍配置について調べる。鎌倉時代後期、石上英一氏（「西大寺荘園絵図群の研究」『条里制研究３』）によれば永仁５(1297)年頃に作成された「大和国西大寺敷地之図」（ＰＬ.23　東京大学文学部所蔵、『同上』８、）によると、上記の４つの坪は、その周辺と同じくすべて各坪ごとに分割して描かれ、その間を小路が走り、一体的な敷地となっておらず、いずれも「寺領」（＝西大寺領）とされている。そして九坪には「二反大畠一反田／福益／僧坊領有」、十坪には「六反内畠一反」という、田畠に関する記載があり、当時既に西隆寺が退転していることを知ることができる。しかしまた、十坪内に「西隆寺塔」（朱書）、十坪と十五坪の間の南辺に「南大門」（朱書）、十五坪内に「燈爐石」、４つの坪の中央に「金堂」（朱書）の記載がある。坪ごとの分割記載は、西隆寺の西にあった西大寺の敷地についてもなされており、その当時の現実の敷地のあり方を、必ずしも反映しているものではない。むしろ上に引用した記載文字、とりわけ朱書部分から、かつて４坪分の敷地が一体として西隆寺地であり、南辺中央に南大門があり、その内部東側に塔が、敷地中央に金堂が位置していたことを窺うことができる。また実際４坪の外周には道路を横断する部分を除き、墨線の上に重ねて朱線が引かれ寺地の範囲を示している。

なお西大寺には元禄11年の「西大寺伽藍絵図」（ＰＬ.24・25　西大寺所蔵）がある。それは、「元禄十一祀桂月（＝８月）穀旦（＝吉日）、宝亀十一年十二月廿九日絵図流記を以て、謹んで模写するもの也」という由緒を持つように、宝亀11年の絵図流記を模写したというものである。それによると、西大寺の敷地は、東西11町、南北７町あり、その四至は「東は佐貴路を限り、西は京極路を限り、南は一条南路を限り、北は京極路を限る」という。そしてその中央に西大寺、東辺中央に西隆寺が描かれている。その北を限る築地塀は、西大寺境内の東辺を走る「佐貴路」に開く「一条北大路門」から西大寺の境内に入った所にあたり、南辺の築地塀はそれより２つ南の門の位置にあたる。すなわち南北は２町分あり、東西についても西大寺敷地北辺に開く門から判断すると２町分となり、敷地規模はこれまで述べたところと合致する。

佐貴路

ところで、この「佐貴路」とはどの道のことであろうか。先に見た「大和国西大寺往古敷地図」（ＰＬ.22）「大和国西大寺敷地之図」（ＰＬ.23）や弘安３年「大和国西大寺敷地図」（ＰＬ.26　東京大学文学部所蔵、『同上』７）によると、「二坊（西）大路」から東へ３本目の小路、すなわち右京二坊の一・二・三・四坪と五・六・七・八坪との間を走る南北小路部分に、「佐貴路」という記載がある。この小路を西大寺敷地の東限とすることは、諸図一致しているが、この元禄11年の図では、西隆寺がその「佐貴路」に西接して描かれ、あたかも西大寺敷地の東限部分にあるかのようになっていることは、上述した文書や他の敷地図とは整合せず、信用することはできない。しかもこの「佐貴路」は宝亀11年の「資財流記帳」にも見えるが、そこでは西大寺の寺地を「右京一条三四坊に在り、東は佐貴路を限る（後略）」とする。これによれば、佐貴路は西二坊大路のことであり、上の諸図とは矛盾する。おそらく西大寺地にもとの西隆寺地を取り込んだ後においても、西大寺の東限が佐貴路であるという「資財流記帳」の記載により、上の諸図では本来の位置より３町東の小路が佐貴路と誤られたのであろう。

そのうえこの「伽藍絵図」では、西大寺の部分にも、宝亀11年の「西大寺資財流記帳」にはなく、後世に造られた建物も描かれており、この絵図全体として、どこまで宝亀年間の事実を伝えているかは、疑問の点が多い。むしろ江戸時代に往古の盛観を示そうとして作成された想像図であると見られている（『奈良六大寺大観　西大寺　全』）。

しかしそこに描かれた西隆寺の伽藍配置は、唯一現在に残る伽藍配置図であり、また何らかの資料に基づいているとも見られ、西隆寺の伽藍配置を復原するにあたって参考となるものであることは間違いない。そこで西隆寺の伽藍配置を見ると、その四周を囲む築地塀に開く「南大門」「東門」「西門」、それに寺地中央部の「弥陀金堂」、それを取り囲み金堂北の「講堂」に取り付く回廊と、それの南に開く「楼門」、寺地東南部の「宝塔」、西南部の「円通殿」、東北部の「鼓楼」、西北部の「鐘楼」、さらに以上の主要伽藍地区の北側に、東西の築地塀で区画されて、「殿」「坊」「房」「厨」「倉」の建ち並ぶ一郭が描かれている。南大門・宝塔・金堂の位置などは、先の「大和国西大寺敷地之図」（ＰＬ.23）とも一致する。

なおもう１つ西隆寺の伽藍配置を窺わせるものとして、元禄11年作成の「西大寺古伽藍敷地并現存堂舎坊院図」（ＰＬ.27　東京大学文学部所蔵）がある。これは「元禄十一暦八月吉日、弘安二年歳次庚辰古伽藍敷地之図により、現在荒衰之躰を画くもの也」という由緒をもつもので、元禄11年当時の西大寺の荒廃状況を描いている。それには「西隆寺跡」の部分に数カ所礎石の跡が描かれれており、往時の様子を偲ばせるものとなっているが、それらは先の「西大寺

西隆寺跡の部分に礎石

伽藍絵図」（ＰＬ.25）と対比すると、南大門・宝塔・円通殿・楼門・金堂・講堂・殿の位置にあたる。実はＰＬ.25とＰＬ.27は、共に元禄11年８月に描かれたものであり、両者の関係は一見したところでは、ＰＬ.27が現況図、ＰＬ.25が往古の復原図という性格のものである（ただし、厳密な意味での現況図ではないことについては次章でふれる）。したがって両図に見える西隆寺の伽藍配置と礎石の位置が対応関係にあるのも当然のことと言えよう。

したがってこれらの絵図の記載の真偽の程をみきわめるには、発掘調査結果と比較検討する必要がある。そこで1971年から73年にかけての調査結果を見ると、寺地のほぼ中央に金堂跡、東南寄りに塔跡が検出されており、また今回の調査で金堂を取り囲む回廊の東面・北面部分や東門・東面築地塀跡などが見つかり、ほぼ絵図に対応している。絵図にない建物や塀なども見つかっているが、絵図は概念的に主要伽藍だけを描き、全建物を描いたとは考えられないので、その違いをあまり過大に考えることは誤りであろう。したがってこれらの絵図は、何らかの資料に基づき、ある程度西隆寺の伽藍配置の実態を伝えていると評価することができよう。

3　平安時代以降の西隆寺

前章では絵図資料を用いたため、江戸時代にまで言及したが、もう一度時代を遡り、文献史料を見ることにする。平安時代以降の西隆寺に関する史料は多くはない。大同２(807)年７月11日の僧綱所宛「玄蕃寮牒案」（九条家本「隅寺縁起」所収、『平安遺文古文書編10』補３号）には、「一　西隆寺不可隷法華寺事」という項目がある。西隆寺の管轄をめぐって何らかのいきさつがあったことが窺えるが、この問題の決着は元慶４(880)年につけられた。同年５月、「西大寺をして、西隆尼寺を摂領せしむ。この両寺はこれ高野天皇の創建にして、西隆尼寺をもって、西大寺僧等の法衣を浣濯する処となすなり」（『日本三代実録』同月19日壬申条）との措置がとられた。この記事の後半部が事実を伝えるものかは疑わしいが、ここに西大寺が西隆寺を摂領するに至った。西隆寺の勢威の衰退を窺うことができよう。六国史の平安時代に属する部分に西隆寺が登場するのは、わずかにこの記事だけであることも、やはりその衰退ぶりを物語るものと言えよう。そして前章でふれたように、西隆寺のかつての寺地が鎌倉時代になると、西大寺領になる大きな契機はこの措置にあったと考えられるのではなかろうか。

西大寺が西隆寺を摂領

次に『弘仁式』主税及び『延喜式』主税上には、越後国の出挙本稲として「西隆寺料一万束」が見える。同寺料が計上されているのは、越後だけであるが、なぜ越後に設置されたのかは不明である。しかしともかくこれにより、10世紀には西隆寺は存続していたと見られる。なお『伊呂波字類抄』には「西隆寺　桓武天皇御宇－－月、封一百戸施入之」と記されているが、この封戸施入を他の史料で確認することはできない。

10世紀には西隆寺は存続

その後時代はかなり下るが、建長３(1251)年「大和西大寺々領検注帳」（『鎌倉遺文古文書編10』7398号）によると、その中に西隆寺と西大寺を含み、前者は右京一条二坊の六～十一と十四～十六坪の９坪分を占めている。これは諸敷地図に見られたように、「佐貴路」（実際は西二坊大路であるべき本来の佐貴路ではなく、それより３本東の小路）以西の西大寺敷地に含まれる部分の右京一条二坊のうち、南辺の３坪を除いた部分にあたり、４坪を占める西隆寺敷地より一回り大きい。したがってこれを西隆寺とすることについては疑問もあるが、あるいは西隆

寺が伽藍部分の東辺と南辺の、同坊内の地を寺領として有しており、西隆寺が西大寺に摂領されるようになって以後は、その部分も西大寺の寺領とされたのかもしれない。それはともかく、この文書によれば、既にかつての西隆寺の地は田畠になっており、西隆寺が廃絶していたことを物語っている。

建長3年以前に西隆寺は廃絶

さらに文永6(1269)年12月「大和国西大寺田園目録」(『鎌倉遺文古文書編26』19893号)によると、「右京一条二坊九坪一段小」の地は「延応二年庚子二月六日為聖教用途知足房上人寄之」とあり、西隆寺内に含まれる土地が延応2(1240)年に寄進されていることがわかる。また「添下郡右京一条二坊十一坪内一段西隆寺ノ前アリ」、「添下郡右京一条二坊十五坪内二段小未申角西隆寺ニアリ」、「添下郡右京一条二坊十五坪内一段九十歩南辺、西隆寺内門」など、西隆寺に関わる記載があるが、いずれも西隆寺は田地の位置を示す、いわば地名として用いられており、既に西隆寺の寺地であった所が田地になっていることを物語るものである。鎌倉時代作製の「大和国西大寺敷地之図」(PL.23)も、同様に退転後の様相を示すものである。こうして西隆寺は、鎌倉時代の13世紀中頃までには完全に姿を消し、その寺地であった所は田地に転換している。

ところで俊乗坊重源の『南无阿弥陀仏作善集』(奈良国立文化財研究所『俊乗坊重源史料集成』)には、文治3(1187)年頃重源の建てた東大寺浄土堂に安置された「金銅五輪塔一宇」に「奉納御舎利三粒、一粒は聖武天皇御所持の舎利、今二粒は東寺・西龍寺」と記されている。これについては、15世紀後半に成立の菅家本『諸寺縁起集』(南都七大寺巡礼記)の東大寺浄土堂の項にも、仏舎利16粒の由来が見える。それによると、菩提僧正が天竺から将来し、聖武天皇に奉じた1粒が、後に分かれて2粒になったので、1粒は大仏の眉間に、1粒は東塔の宝物となったが、それが焼失して以後は浄土堂に安置した。その後分かれて16粒になった。そして毎日午剋に出して甲乙人に見せる「舎利十三粒の内一粒は、聖武天皇の御所持也、今二粒は、東寺・西龍寺」とある。これらによれば、菩提僧正によってもたらされ、もと「西龍寺」にあった舎利が重源により、浄土堂に安置されるに至ったようである。一方延慶2(1309)年3月には、もと東寺・唐招提寺・西隆寺にあった3粒の舎利が海竜王寺に寄進されている(西大寺所蔵海竜王寺文書)。これらに見られる西龍寺と西隆寺の異同については不明であるが、同一であるなら浄土堂からさらに海竜王寺に施入されたのであろう。いずれにせよ延慶2年当時は、既に西隆寺は廃絶しているが、かつてそこに奉納されていた舎利が信仰されていたことがわかる。

なお江戸時代の史料にも、西隆寺のことが散見する。延宝9(1681)年開板の林宗甫『大和名所記』(和州旧跡幽考)巻5には、「西隆尼寺の跡さだかならず。西大寺の乾(=北西)に尼が谷といふ所あり。これらの所にや」とある。また享保21(1736)年刊行の並河誠所『大和志』(『日本輿地通志』の一部)の西大寺の項にも、『大和名所記』と同内容の記事がある。方角も間違っており、既に当時その跡すらわからなくなっていたことがわかる(福山敏男「西隆寺」『奈良朝寺院の研究』)。そうすると前章でみた元禄11年の「西大寺古伽藍敷地并現存堂舎坊院図」(PL.27)の礎石の描写も、はたして当時のものか疑わしくなる。延宝9年は元禄11年に先立つこと17年であり、その頃跡さえわからなくなっている西隆寺の礎石が、元禄11年になって明らかになるとは考えがたい。したがって、PL.27もその当時の様相を描いたものとは評価できない。前章でこの図を、一応元禄11年当時の現況図としたが、必ずしもその当時のままではなく、おそらく西隆寺の部分は弘安2年の「伽藍敷地之図」によっているのであろう。

第Ⅲ章　調査概要

1　西隆寺周辺の調査

西隆寺の寺地は、右京一条二坊のうち九・十・十五・十六の４坪を占める。この右京一条二坊をはじめ周辺の右京二条二坊、同北辺一条二坊、同二条三坊、同一条三坊、同北辺一条三坊では、奈良国立文化財研究所や奈良市教育委員会などがこれまでに数多くの発掘調査を実施している。それらのうちの主なものの成果の概要について条坊関連遺構など奈良時代の遺構を中心に、以下にまとめておく。なお、右京一条三坊の西大寺関連調査の概要については、『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』（1990・西大寺）の「第Ⅲ部・発掘調査／第Ⅰ章・調査の経過と概要（p47～49）」「付録２・西大寺境内におけるこれまでの調査と概要（p191～193）」にまとめられているので、ここではくりかえさない。

第82－4次（調査位置　右京一条二坊一坪／西一坊大路・調査面積　35㎡）

西一坊大路西側溝を検出。幅1.8m、深さ40㎝。（『昭和48年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』）

第95－9次（右京一条三坊十坪／同十一坪／一条々間路・33㎡）

西大寺造営以前の一条々間路の南北両側溝を検出。道路幅は側溝心々で5.6m。西大寺中大門が予想されたが、その遺構は検出できなかった。（『昭和50年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』）

第95－10次（平城宮〈右京一条一坊十六坪相当〉／西一坊大路・40㎡）

西一坊大路東側溝を検出。溝東肩が未検出のため規模は確定できないが、幅1.4m 以上、深さ40cm 以上。近接する第82－４次調査で検出した西側溝心の位置を考え合わせると、西一坊大路の幅員（側溝心々間距離）は24m 以上あり80尺あるいは70大尺と考えられる。（『昭和50年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』）

西一坊大路幅員

第103－7次（右京一条二坊二坪・800㎡）

右京一条二坊二坪の北辺東部と北辺西部の２ケ所に調査区を設定。奈良時代の遺構としては、東部調査区で掘立柱東西棟建物２棟、掘立柱南北塀３条、東西溝３条などを検出。遺構の重複関係から数時期の遺構変遷が考えられる。また、西部調査区では掘立柱南北塀１条、東西溝４条などを検出。これらの東西溝のうちのいずれかが一条々間北小路の北側溝あるいは南側溝にあたる可能性が高いが、どれをあてるかは検討を要する。なお、発掘調査概報では SD100と SD105をそれぞれ北側溝、南側溝にあてているが、佐伯門推定心の位置などから考えて南に寄り過ぎ、妥当ではない。（『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』）

第103－14次（右京一条二坊四坪／西一坊大路・500㎡）

佐伯門の北方約40～100m で４ケ所の調査区を設定。西一坊大路路面と東西両側溝を検出。

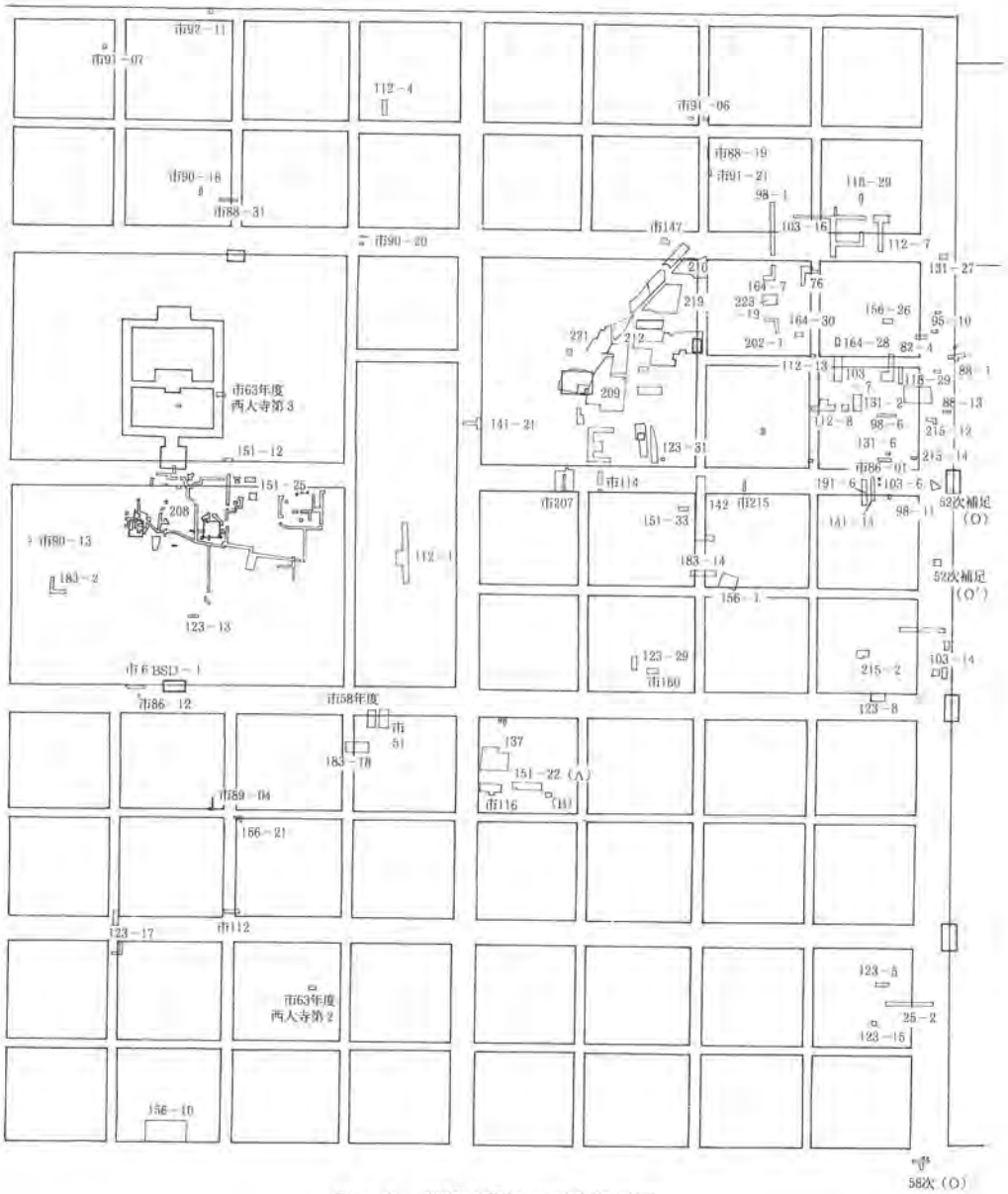


Fig. 2　西隆寺周辺の調査位置図

東側溝は幅3.8～5.6m 深さ0.5～0.8m、西側溝は幅1.5～2.0m 深さ0.2m。道路幅は側溝心々で23.65m、80尺と取れるが、側溝幅が広いため70大尺とも考えられる。右京一条二坊四坪内では、東西に廂をもつ南北棟礎石建物を検出。(『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第103－16次（右京北辺二坊二坪／同三坪／北京極大路・1,300㎡）

右京北辺二坊二坪南西部と三坪南東部での調査。二坪では、大きく3時期に区分できる奈良時代の遺構を検出。このうち、奈良時代初頭にあたる第1期は二坪と三坪が一体として利用されていた時期であり、桁行7間南廂付の東西棟掘立柱建物を中心に、南北棟掘立柱建物、掘立柱塀などで構成され、整然とした配置を示す。第2期には二坪と三坪を区画する小路（西二坊々間東小路）がつくられ、二坪三坪それぞれに掘立柱建物等が建ち、井戸が掘られている。この調査によって、北辺坊も平城京造営当初から継続的に宅地として用いられていたことが明らかになった。なお、発掘調査概報ではSD04を北京極大路北側溝にあてているが、北に寄り過ぎ

北辺坊も継続的に宅地

ており、妥当ではない。(『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第112－1次（右京一条三坊三坪・490㎡）

この場所は西大寺の寺地にあたり、『西大寺伽藍絵図』（元禄11年・1698）では西大寺の付属建物が描かれている。検出遺構のうち奈良時代のものは掘立柱建物3棟、掘立柱塀、溝など。これらが西大寺関連のものなのか、それ以前のものなのかは不明である。(『昭和53年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第112－7次（右京北辺二坊二坪／北京極大路・360㎡）

二坪内で、6間2間の南北棟など3棟の掘立柱建物と掘立柱塀を検出。また、北京極大路北側溝と見られる東西溝を検出。この溝は2時期あり、前期は幅1.8m深さ0.5mの規模、後期は前期の溝を約1.2m北に移し、幅2.2m深さ0.5mの規模である。(『昭和53年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第112－8次（右京一条二坊二坪／西二坊々間西小路・350㎡）

検出遺構は、古墳時代と奈良時代に大別できる。奈良時代の遺構としては、掘立柱南北棟建物3棟、溝3条を検出。建物のうち2棟は、柱筋を揃えて東西に並ぶ。また、溝のうちの南北方向の2条は、西二坊々間東小路の東西両側溝と考えられ、道路幅は側溝心々で8.3m。(『昭和53年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第118－29次（右京一条二坊二坪／西一坊大路・570㎡）

西一坊大路西側溝（幅2.3～3.0m深さ0.6m）を検出。西側溝の西側に平行する南北溝があるが、この2本の溝の間が築地塀と考えられる。(『昭和54年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第123－17次（右京二条三坊十一坪／同十五坪／二条々間路／西三坊々間西小路・150㎡）

二条々間路北側溝（幅4.4m、深さ0.5m）を検出。また、この溝の南約23.5mのところで検出された東西溝は二条々間路南側溝の可能性がある。さらに、西三坊々間西小路東側溝と考えられる幅3.5m、深さ0.7mの南北溝を検出。(『昭和55年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第131－2次（右京一条二坊二坪・207㎡）

弥生時代、古墳時代、奈良時代の遺構を検出。奈良時代の遺構としては、東西溝1条、掘立柱塀1条、土壙などを検出。(『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第131－27次（北京極大路と西一坊大路の交差点・27㎡）

第103－16次調査で検出した北京極大路南側溝の延長部南肩を検出。(『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第137次（右京二条二坊十六坪・750㎡）

十六坪西半中央部での調査。掘立柱建物28棟、塀5条、井戸2基、溝3条、道路1面、土壙などを検出。奈良時代の遺構は4期に区分できる。奈良時代初頭から中頃にあたる第1期と第2期には、十六坪を南北に二等分する位置に側溝心々間距離約3.6mの道路が通っていた。これは、この坪が平城京造営当初から奈良時代中頃にかけては、少なくとも二つの区画に分けて使われていたことを示す。この坪内の建物は、奈良時代をつうじて、3間2間程度の小規模なものが多い。さらに、第2期に属する縦板組の井戸からは鉛ガラス溶解用のるつぼや「田部□嶋」という人名を記した墨書土器が出土した。これらは、この場所の使われ方や居住者を知る手がかりとなる重要な資料である。(『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

鉛ガラス溶解用るつぼ

第142次（右京一条二坊六坪／同十一坪・900㎡）

西二坊々間路の東西両側溝を検出。東側溝は幅1.2m 深さ0.2m、西側溝は幅0.7m 深さ0.1m。道路幅は側溝心々間距離で8.6m。また、六坪内では5間2間の掘立柱南北棟建物1棟を、十一坪内では縦板組と見られる井戸1基を検出した。なお、一条々間路南側溝の存在が想定された調査区北部は、後世の削平が著しく、この溝は確認できなかった。(『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第141－14次（右京一条二坊三坪・113㎡）

調査区北部に一条々間路の存在が予想されたが、関連遺構は検出できなかった。(『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第151－22次（右京二条二坊十六坪・391㎡）

調査区は、十六坪の中央南寄り。掘立柱建物11棟、溝6条、土壙6基、道路などを検出した。奈良時代の遺構は4期に区分できる。奈良時代の初頭にあたる第1期には、十六坪を東西に2分する、幅約9.7m の南北道路が設けられていた。奈良時代前半にあたる第2期には、この道路は同規模で東へ約4.5m 移され、奈良時代後半の第3期まで存続する。奈良時代末にあたる第4期には、この南北道路は機能していなかったようである。この調査区の北西で実施した第137次調査の成果とあわせると、十六坪は奈良時代中頃すぎまでは、少なくとも東西及び南北にそれぞれ2分割されていたことになる。

十六坊は四分割利用

掘立柱建物は、全般に小規模で、第2期に属するものが比較的多い。また、遺物としては第2期の土壙から大量の土器が出土した。こうしたことから、この宅地は貴族の邸宅などではないこと、最も活発に利用された時期が奈良時代の前半であったことを読み取ることができる。(『昭和58年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第156－10次（右京二条三坊十二坪・1340㎡）

調査区は十二坪の南部中央。掘立柱建物15棟、掘立柱塀1条、井戸2基、土壙3基などを検出。奈良時代の遺構は5期に区分できる。第1期には、西廂付き南北棟建物をはじめ7棟の掘立柱建物が建つ。第2期には3棟の掘立柱建物が建ち、第3期には、東西に並び建つ同規模の東西棟建物2棟及び東西両廂付きとみられる南北棟建物の計3棟が建つ。第4期にも東西に並び建つ2棟の同規模東西棟建物など3棟が建ち、第5期には2棟の建物と1基の井戸が設けられる。

この場所の特徴として、各時期の建物配置に比較的計画性が感じられることがあげられる。(『昭和59年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第164－30次（右京一条二坊八坪・90㎡）

奈良時代ないしそれ以降と考えられる、幅5.0m、深さ0.5m の南北溝を検出した。西二坊々間東小路の西、約10m に位置する。(『昭和60年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第183－14次（右京一条二坊六坪／西二坊々間路・180㎡）

西二坊々間路幅員

西二坊々間路の東西両側溝を検出。東側溝は幅1.0m 深さ0.3m、西側溝は幅1.2m 深さ0.1m。道路幅は側溝心々間距離で8.5m。このほかに六坪の西端を画する掘立柱南北塀や六坪内の掘立柱建物などを検出。(『昭和62年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第183－18次（右京二条三坊一坪・425㎡）

一坪中央西辺部での調査。調査区北半部で奈良時代の塀１条・掘立柱建物１棟などを検出したが、南半部は流路跡の砂層であった。調査区西端部で予想された西三坊々間東小路東側溝は確認できなかった。(『昭和62年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第191－6次（右京一条二坊三坪・150㎡）

奈良時代の遺構としては、総柱の掘立柱建物１棟、塀１条、東西溝１条を検出。調査区北部で予想された一条々間路南側溝は確認できなかった。(『昭和63年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

奈良市第114次（右京一条二坊十一坪／一条々間路・80㎡）

南北二つの調査区を設定。十一坪の北端部にあたる南調査区は、全体が流路跡。北調査区では、柱穴、土壙、素掘り溝などを検出したが、いずれも奈良時代末以前にさかのぼるものではないことから、一条々間路の路面上にあたると考えられる。ただし、側溝が未検出のため道路幅などは不明。(『昭和61年度奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』)

奈良市第116次（右京二条二坊十六坪・294㎡）

十六坪南西部での調査。奈良時代に属する検出遺構は、掘立柱建物８棟、井戸１基、溝４条など。これらの遺構は、切り合い関係から４期に区分できる。掘立柱建物は、柱間寸法６～７尺程度が中心で全般に小規模。井戸は隅丸方形で、埋土からは奈良時代後半～末葉の土器とともに、軒丸瓦・軒平瓦が出土した。(『昭和61年度奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』)

奈良市第207次（右京一条二坊十四坪・450㎡）

十四坪北東隅道路側溝

十四坪北東部での調査。一条々間路南側溝（幅2.4m 深さ0.7m）と西二坊々間西小路（幅2.2m 深さ0.5～0.7m）を検出。いずれも溝内の埋土が２層に分かれており、一度掘り直されている。一条々間路南側溝の南には、平行して幅9.0m 深さ0.3m の奈良時代後半と見られる東西溝がある。このほか、四坪内で掘立柱建物２棟、塀１条、井戸３基などを検出。井戸のうちの１基からは奈良時代中頃の土器が、残りの２基からは奈良時代後半の土器が出土した。(『平成２年度奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』)

2　調査の概要

今回報告する地域は、1989年度から1991年度にかけて調査した西隆寺の地域で、調査総面積は6,067㎡である。各調査地区は、奈良国立文化財研究所が行っている平城京発掘調査の地区設定にしたがって、大地区を６ＢＳＲ、中地区を南からＮ・Ｏ・Ｐ・Ｑ・Ｒと定めた。各調査ごとの地区名は以下のとおりである。

各調査の地区名

209次(6BSR-O・P)、210次(6BSR-R、6AGA-Ⅰ)、212次(6BSR-P・Q)、219次(6BSR-Q・R)、221次(6BSR-P・Q)、223-4次(6AGR-A)、227次(6BSR-R、6AGR-J)、228次(6BSR-Q・R)、223-21次(6BSR-Q)

なお、1971年から1973年にかけての西隆寺の発掘調査地区もFig. 3 の中に併せて図示した。この西隆寺第1～第6次の発掘調査総面積は5,434㎡である。

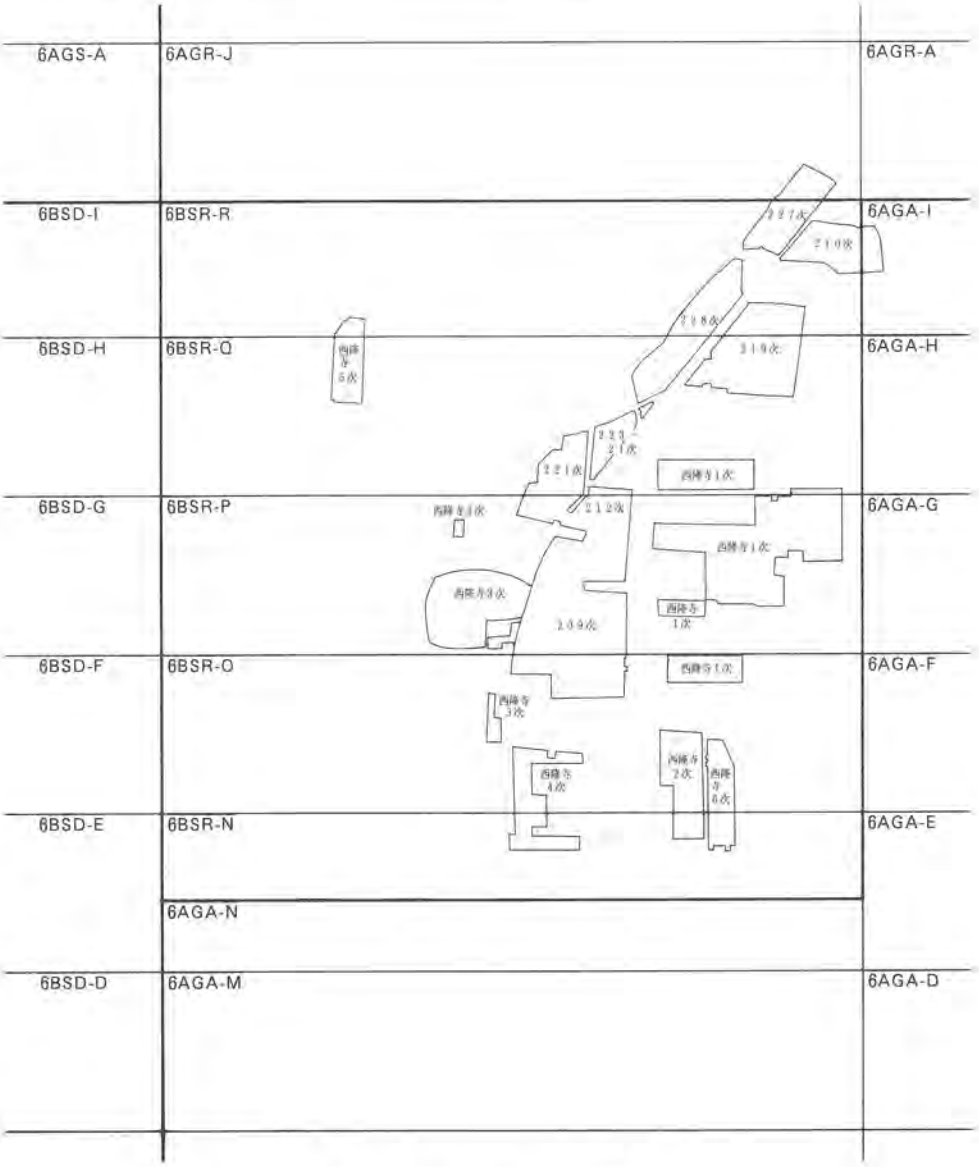


Fig. 3　６ＢＳＲ地区　地区割図

以下では、1989年度から1991年度にかけて調査した地域の、各次数ごとの調査概要を述べる。

第209次調査　金堂跡の東方で調査を行った。金堂の検出を目的とした1972年の第３次調査のトレンチを一部含んでいる。調査区中央で西隆寺東面回廊を南北19間分と、回廊の西雨落溝、回廊を東西へ横断し回廊内の水を排水する暗渠などを検出した。回廊は複廊で、東側柱より東は、後世の地下げにより、東雨落溝や基壇の東端など、回廊に伴う遺構は残っていない。調査区全面で、西隆寺造営以前の掘立柱建物や井戸・土壙を多数検出した。掘立柱建物はいずれも小規模で、金堂下層の調査結果と矛盾しない。また、調査区を東北から西南に流れる古墳時代の溝も検出した。調査区西端で、これに直交する溝もある。　**東面回廊**

第210次調査　寺域を画する築地の東北隅と、築地に伴う雨落溝を検出した。築地より東および北は、秋篠川の旧流路にあたり、遺構は残っていない。そのため築地本体の一部と、北面築地南雨落溝と東面築地西雨落溝を検出したにとどまる。北面築地南雨落溝は築地本体を暗渠でぬけ、東へ流れる。　**築地**

第212次調査　209次の北に接する地点の調査。回廊の東北隅を検出し、回廊建物に伴う土器埋納遺構を検出した。土器は東北隅中央の礎石据え付け掘形の底から出土した。回廊外側では、奈良時代前半の小形の井戸を検出した。下層では調査区南で古墳時代の小規模な掘立柱建物と塀を検出した。調査区北端で縄文晩期の土器を伴うＶ字溝を検出した。周辺に黒色粘質土層が広がり、水田の可能性を推定したが、確証はえられなかった。　**回廊東北隅**

第219次調査　伽藍の東北地区で、大きな建物群が重複していることが判明した。南北両面廂付掘立柱建物を中心とし、北に東西棟建物、東に南北棟建物を配する。中心の建物および東の建物は、当初は掘立柱建物だったものを、後に礎石建物に立て替えている。大型の井戸を伴い、造り替えを経ながら10世紀後半代まで存続した。井戸枠には扉板４枚が転用されていた。　**食堂院**

第221次調査　北面回廊に接する北の地区での調査。北面回廊の北側柱を５間分検出し、その北地区で掘立柱建物６棟と東西塀一条を検出した。掘立柱建物は重複しており、３時期に区分できる。桁行き10間以上の南北棟建物は尼坊の可能性を考えている。　**北面回廊と尼坊**

第227次調査　210次の西に接し、北の寺域を画する北面築地の南雨落溝や西隆寺造営以前の掘立柱東西塀を検出した。　**北面築地**

第228次調査　伽藍の東北地区で、大きな建物群を検出した219次の西に接した場所での調査。北区と南区に分かれる。228次の北区では、219次で検出した中心建物とその北の東西棟建物の北に、さらに１棟の東西棟建物が配置されていることが判明した。　**食堂院**

228次の南区では、西隆寺造営以前の大形の東廂付南北棟建物を検出した。西隆寺寺域内で検出した宅地建物の中では、最も大形のものである。発掘区西端では、古墳時代から西隆寺創建期まで続く池状遺構を検出した。

第223－21次調査　228次の池状遺構の西南部に接する地域での調査。池状遺構の西南部の肩を検出すると共に、南北方向一対の掘立柱で構成された門を検出し、西隆寺東北部分の「院」の西側を画する築地塀のような施設を考えた。また、池状遺構を埋めて整地する段階で作った暗渠や東西塀を検出した。　**食堂院西側の区画**

3 調 査 日 誌

A 第209次調査

6BSR-O・P地区

1989年9月28日～11月29日

9・27 発掘区の設定。

9・28 バックホーによる耕土排土開始。

9・29～10・1 バックホーによる耕土排土。

10・2 発掘区西面の排水溝掘り下げ。床土の下に暗灰褐砂質土の面と、その下約20cmに茶褐色粘土（地山）がある。まず、暗灰褐砂質土の面で遺構検出を行う。

10・3 排水作業及び排水溝掘り下げ。北方の旧発掘区の埋め戻し土を取り上げる。旧遺構面は現検出面より20～30cm下。

10・4 旧発掘区の遺構面までの掘り下げ。地区杭打ち。発掘区東部をバックホーによる耕土排土。

10・5 バックホーによる耕土排土終了。暗灰褐砂質土の面で遺構検出。

10・6～11 遺構検出。現検出面で柱穴はなく、細溝のみ検出。

10・12 47ラインのすぐ西側で、幅30～40cmの範囲に瓦が南北に堆積。断面をみると浅い溝に瓦が詰まっており、回廊西側溝に瓦が投棄され、その底が残っているものと考えられる。また、PKラインの北45ラインで2つの凝灰岩が並んでおり、回廊を横断する暗渠（SX400）と考えられる。

10・13 46ラインのすぐ東で根石を検出。これをたよりに、礎石抜き取り穴を探すと、46ラインのすぐ東で、抜き取り穴が南北方向に並ぶ。47ラインの東を再び精査すると、やはり抜き取り穴が検出された。45ラインより東は一段下がって削平されているが、一部に礎石抜き取り穴の痕跡がある。

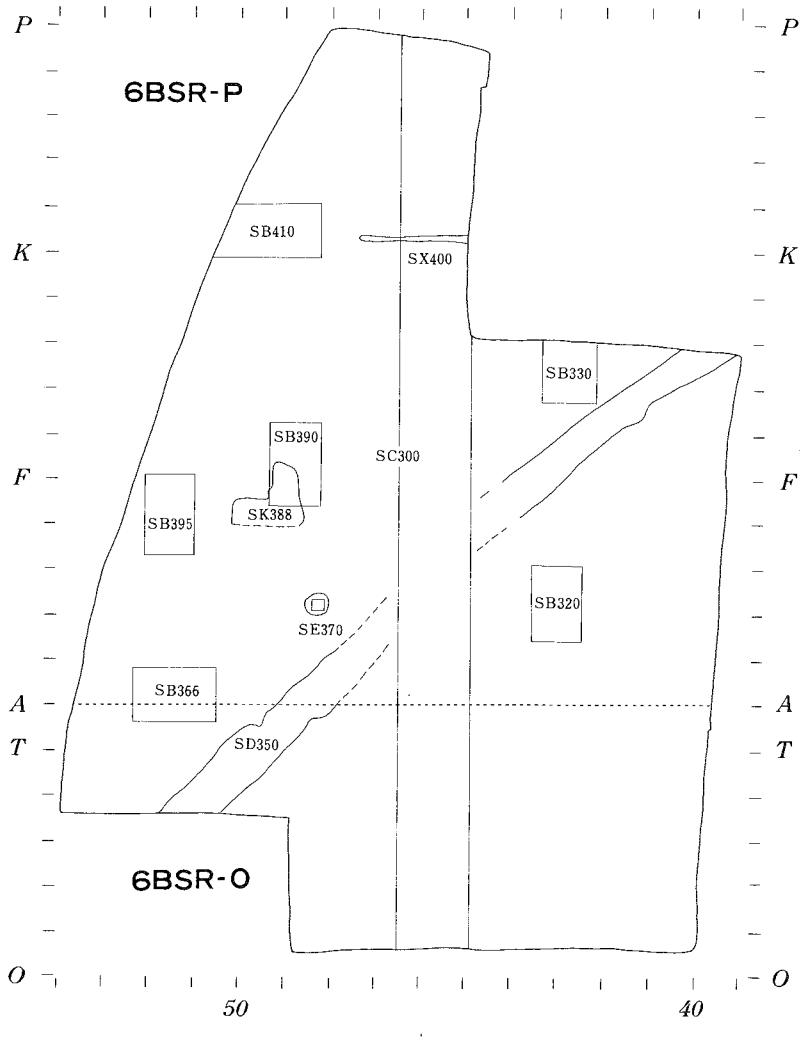


Fig. 4 第209次調査地域の地区割と主要遺構

回廊SC300は複廊と考えられる。

10・16　SC300の検出。

10・17　SC300の検出。PK47では、暗渠延長の底石を検出。底石は玉石が3列に並び、西端が凝灰岩で見切られ、西に延びない。

10・18　瓦のつまった溝は暗渠の手前迄で、その北はみつからない。なかったのか、それとも北側が一段高かったのか。OS以南では、黒灰褐色で炭化物を含む土が広がる。奈良時代前半の土器を多く含む。

10・19　発掘区東側は44～45ラインの中間で奈良時代後半の整地層と考えている層が、後世の削平のため急に段差をもってなくなる。これより東は奈良時代前半の整地層まで下げる。PE49では遺物を多量に含む土壙SK388を検出。写真撮影。

10・20　暗渠SX400の掘り下げ。底石の配列により、回廊の基壇西端が確定した。PG49の土壙完掘。PE49の瓦溜の掘り下げ。

10・21　PE49大土壙（瓦溜）を完掘。

10・23　発掘区東側の遺構検出。細溝が多く、柱穴をみつけてもつながらない。

10・24　発掘区東側、PA～PGライン間に多量の瓦。この瓦を含む層から二彩・金属・炭出土。寺院廃絶時に廃棄されたものか。遺物は黄灰土で取りあげ。

10・25～26　瓦を多量に含む黄灰土の取りあげ。

10・27　黄灰土の取りあげ。清掃作業。

10・30　写真撮影。

10・31　ヘリコプターによる写真測量。写真撮影。

11・1　今日から西半部で西隆寺建立以前の遺構を捜すために、西隆寺造営時の整地土をはずす。

11・2　西側の下層遺構検出。いくつかのピット・柱穴を検出。発掘区南辺で、斜行する黒褐色の土層がある。古墳時代の溝か。

11・4　下層遺構の検出。

11・6　下層遺構の検出。

11・7　柱穴を捜しながら51ラインまで戻る。PI49大土壙の掘り下げ。

11・8　発掘区西端に至る。建物はほぼ確定したが、いずれも小規模である。桁行柱間3間とするものがほとんどである。

11・9　斜行大溝SD350の掘り下げ。溝から布留式土器が出土し、古墳時代の溝と確定した。

11・10　清掃及び写真撮影。

11・15　パスコによるつるべ式測量。

11・16　遺構精査。礎石抜き取り穴は、予想通りいずれも浅い。

11・17　遺構精査。SE370の井戸完掘。写真撮影。

11・18　現地説明会。

11・20　回廊西雨落溝底の瓦堆積をはずす。

11・21　砂入れを行い、発掘調査終了。

B　第210次調査

6BSR-R 地区、6AGA-I 地区

1989年11月20日～12月12日

11・20～25　ユンボによる表土排除。

11・29　発掘区東から遺構検出開始。地区杭打ち。秋篠川の氾濫堆積である暗灰粘土を掘り下げる。暗灰粘土の中には奈良時代の瓦のほかに、16～18世紀の土器を含む。

11・30　暗灰粘土の掘り下げ。

12・1　発掘区中央の暗灰粘土の掘り下げ。土馬片出土。

12・2　暗灰粘土の掘り下げ。14ライン付近は、築地に近いためか瓦は次第に多くなる。南半部では砂層の上に青灰シルトが残る。青灰シルトは築地土壇の下にもぐる。したがって砂層は奈良時代以前の秋篠川の堆積とみることができる。

12・4　土壇裾までの暗灰粘土の掘り下げを完了した。

12・5　土壇上の遺構検出。SB425・SB426を検出。SB425は梁行2間、桁行2間以上の東西棟の

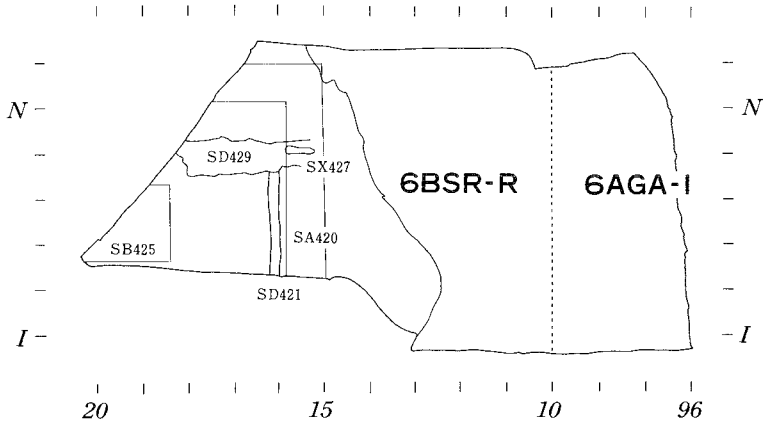


Fig. 5　第210次調査地域の地区割と主要遺構

可能性がある。SB426はSB425に切られる建物で、東西方向に一間分を検出。SB425の柱掘形（RJ18）から9世紀の土師器片出土。また16ラインにおいて、凝灰岩切石を検出。

12・6　西側土壇上の精査。土壇の地山面の上に、茶褐砂質土の整地土があり、築地積土と思われる（築地基壇土SA420の検出）。築地東端を覆う黒灰土・灰褐土を取り去ると、若干抉れた灣曲をなし、これが築地の東雨落溝の可能性もある。RL・RMライン上の土壙を掘り下げ、その下から東西溝SD429を検出した。SD429は昨日検出した凝灰岩切石につながり、築地部分は暗渠SX427になることが判明した。なお、土壙からは奈良末頃の土器が出土している。

12・7　SD429の掘り下げ。暗渠SX427は壊れた凝灰岩側石の上に自然石を積み、蓋には凝灰岩の切石と自然石を使う。午後写真撮影。

12・8　清掃。RM16・17で柱穴を検出し、先に検出していた柱穴と組み合う（SB428）。ヘリコプターによる写真測量。

12・11　SB428の写真撮影。柱穴及び土層の精査。築地想定位置にのる黄褐粘土は積土ではなく、その下に西雨落溝SD421を検出。SD421の写真撮影。

12・12　測量。図面完成。砂入れをして調査を終了した。

C　第212次調査

6BSR-P・Q地区

1990年5月7日～6月19日

5・7～10　ユンボによる表土排除。

5・11　壁面清掃及び溝掘り。

5・14　発掘区南から遺構検出。床土中層までの掘り下げ。西では暗渠の玉石SX446を一部検出する。

5・15　南東部と西張出部で遺構検出。
西張出部は、耕土直下より順に床土をはがす。旧床土下で礎石据えつけ掘形を検出（北面回廊SC450）。基壇内と思われる位置に土師器甕を正位の状態で検出した。東南部では小穴群を検出（後にSB441としてまとまる）。

5・16　南半部は灰色砂を取りあげ、黄灰褐粘土上面で小穴群SB441を検出。柱穴出土の少量の遺物から判断して、古墳時代のものであろう。西張出部では礎石据えつけ掘形底部の検出。

5・17　PP40ラインで井戸SE448を検出。発掘区北半部では、百貨店建設工事に伴う攪乱が著しく、攪乱坑を掘り下げる。SC450上の土師器甕は、写真・実測後取り上げ。

5・18　発掘区北半部の遺構検出。回廊より東の部分を暗灰土として砂層まで掘り下げて奈良時代の遺構面を検出。SE448の写真撮影。昨日取り上げた土師器甕内の底部に銭貨が付着とのこと。

5・19　排水作業。

5・21　PPラインの落ちは東西方向の溝となる。ただし北肩のみ検出。溝は浅く遺物もなく、坪境小路の南側溝SD451の可能性を考える。南西部では東面回廊SC300の東雨落溝SD445を検出した。溝は中央が深くなる。

5・22　東西溝SD452を検出。遺物はない。坪境小路の北側溝であろう。発掘区全体の清掃。

5・23　清掃後に写真撮影。SE448の掘り下げ。横板組の外枠の中に、平瓦を円形に並べ中に刳もの桶を置く内枠がある。外枠と内枠の間の埋土より和同銭2枚出土。

5・24　清掃後にクレーンによる写真撮影及び写真測量。ハイライダーによる写真撮影。回廊部分の拡張区を設定し、表土排土。

5・25　拡張区では礎石据えつけ掘形を検出できず、これにより先に検出した土師器甕を回廊東北隅中央位置にした複廊東北隅が確定した。

5・28　北半部は下層の検出。SE448の掘形を掘り下げ、軒平瓦が出土した。

5・29　北半部で遺構検出。小形の柱穴群出土。はじめ掘立柱建物かと考えたが、方位を異にしており、掘立柱塀二条SA453・454であろう。SD452より新しい。発掘区南半の壁の掘り下げで、3条の流路を断面で確認。

5・30　北半部では砂層の掘り下げ。南半部では一部を黒色粘土層まで下げて遺構検出。

5・31　記者発表。黒色粘土層の掘り下げ。

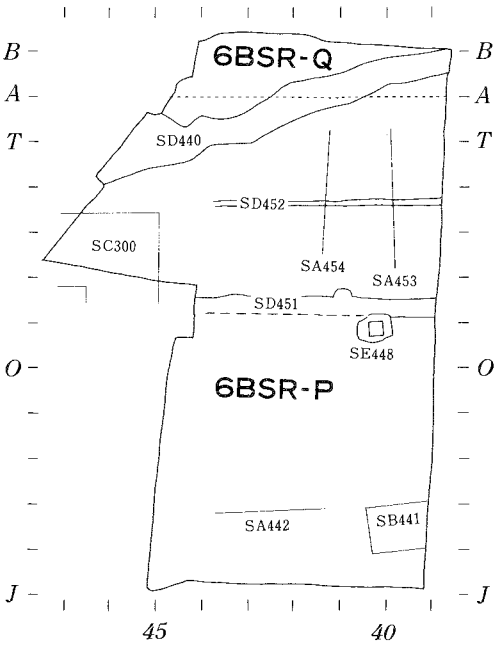


Fig. 6　第212次調査地域の地区割と主要遺構

6・1　調査区北端では溝SD440を検出。

6・2　排水作業。

6・4　SD440の掘り下げ。SD440から縄文時代晩期の土器が出土した。

6・5　北東部分では下層遺構の検出を続ける。縄文晩期から弥生にかけての水田面を想定して精査したが、畦畔の確認ができず、確証が得られない。SD440は、斜行溝となる。

6・6　遺構精査及び実測。

6・7　北面回廊SC450の精査。北側柱東から2番目の据えつけ掘形から漆付着土器出土。クレーンによる写真撮影。

6・8　SD440の掘り下げ。埋土の底近くから縄文時代晩期の船橋式土器が出土した。写真撮影。

6・11～12　SD440の掘り下げ。

6・13　水田面を想定して遺構検出するが、明瞭な畦畔は検出できない。

6・14　SD440の掘り下げ。土層の実測及び写真撮影。

6・15　排水作業。平面実測。

6・16　平面実測。

6・19　実測及び写真撮影。埋め戻し砂入れを行い調査を終了した。

D　第219次調査

6BSR-Q・R 地区

1990年11月7日～11月22日

1991年1月22日～3月29日

11・7　現場縄張り。バックホーによる排土開始。

11・8　バックホーによる排土。東側をやや深く、西側を浅く掘り下げる。

11・9　バックホーによる排土終了。

11・13　発掘調査開始。発掘区南端に排水溝を掘り下げると、壁際で礎石据え付け堀形と根石を3間分検出した。

11・16　遺構検出。遺物包含層（灰褐砂質土）を掘り下げる。

11・17　東西棟建物SB495を検出。また発掘区南半部では、SB490の北入側柱列の一部を検出した。

11・19　東半部の遺構検出。東半部は削平され、古墳時代の斜行溝も残っていない。SB490の北入側柱列を新たに検出。根石の残るものがある。

11・20　SB495の抜き取り穴とRD27区の柱穴掘形（建物としてはまとまらない）に、壁土かと思える黄色と輝緑色の粘土が入り、特徴的。RD27区の穴は、SB500の柱穴により切られており、直接の切り合いではないが、SB500がSB495より新しいと一応判断した。

11・21　柱穴の掘り下げ。

11・22　柱穴の掘り下げ。東半の一段低い柱穴には砂を入れた土のうをつめ全面にシートをかける。市道と東の家の撤去の目途がたつまで、発掘調査を一時中断することになる。

1・22　219次－西区に接して、ほぼ敷地いっぱいに発掘区を設定する。バックホーによる排土開始。

1・23～24　バックホーによる排土。

1・30　発掘調査開始。発掘区北端にコンベアを並べる。排水溝を掘り、南へ2スパン耕土下の灰色砂を削りながら進む。暗褐色粘土の上に橙灰色砂が一層あり、この上面で掘立柱掘形を検出。

1・31　発掘区東端で排水溝を掘り、西側へむかって発掘を行う。建物になる柱穴は、いまのところ

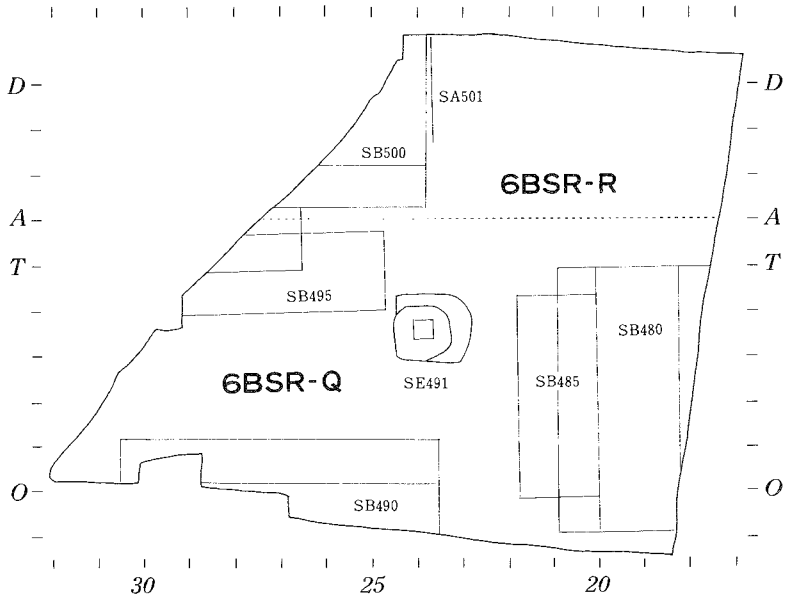


Fig. 7　第219次調査地域の地区割と主要遺構

まだない。

2・1 20ラインで柱穴群を検出。(後に、SC480とSB485の東側柱となる)

2・4 22ラインまで検出。橙灰色砂上では、小穴の他はあまりはっきりした遺構はない。

2・5 24ラインまで検出。SB500とそれに重複するSA501を検出した。

2・6 東へ折り返して、遺構の再検出を行う。井戸SE491の掘り方を検出。

2・7 折り返して遺構検出を続行。西から東へ進み、19〜20ラインまで至る。基本的には橙灰色砂を掘り下げ、暗褐土の上で検出しているが、東北部分では橙灰色砂が分厚く遺構の判別が難しい。20ライン・21ラインで長大な南北棟建物SC480を検出。南北棟の廂部分かと思ったが、これだけ長いと、尼房や回廊の可能性も考慮する必要がある。

2・8 21ラインから東へむかって遺構検出を行う。近代の建物の基礎による撹乱により、遺構検出は手間どる。

2・11 柱穴の配置が複雑で、遺構の規模確定に苦しむ。

2・12 前日と同一箇所の遺構を丹念に精査。

2・13 検出を続行する。ほぼ21ラインまで至る。中央回廊上の遺構SC480は、あまり南北に延びず、しかも他の建物と切り合っているようである。

2・14 21ライン西の瓦を含む南北溝を掘り下げ、その西側を遺構検出。

2・15 西から東に折り返し遺構検出。QR・QS23で大土壙検出。大土壙には井戸が切り合い、井戸SE491の方が新。井戸埋土には大量の瓦と土器片が混じり、土器は9世紀後半から10世紀代のものか。発掘区南半ではSB490の東側柱を検出。

2・18 東から西へむけて遺構検出し、本日は21ラインまで。20・21ラインの柱列は柱間が揃わず、回廊にはなりえないのではないか。SE491の掘り下げを開始。

2・19 SE491の掘り下げ。井戸は、掘形と抜き取り穴が重複し、二時期の可能性が強い。SE491−Bの掘形からは10世紀代の黒色土器が入る。

2・20 発掘区西側の遺構検出。SE491の掘り下げ。

2・21 SB485を検出した。SC480と切り合いSB485が古い。SE491の断面図実測。

2・22 遺構精査。RA22・23区で古墳時代の土器を含む層がある。SD493の延長溝であろう。

2・25 SC480は南から9間分続くことが確定。QT21では、礎石据え付け掘形とおぼしき部分を検出した。

2・26 SE491の掘り下げおよびセクションベルトをはずして遺構検出。

2・27 SE491の掘り下げ及び井戸南方の畔下の検出。2.7mをへだてて2個の円形穴を検出。

2・28 清掃作業。記者発表。雨おさまらず。

3・1 現地説明会へむけての清掃作業と準備。

3・2 現地説明会。

3・4 SA484では掘形に柱根が残り、それに重複する土壙からは西隆寺式軒平瓦2枚が出土。

3・5 QO27・28のコンクリート擁壁ぎりぎりまでの拡張を開始し、SB490の北入側柱列の輪郭全体が明らかになる。

3・6 清掃作業とクレーンによる写真測量。

3・7 発掘区西南部を敷地ぎりぎりのところまで拡張する。SB490の西側柱列の確定をはかるためである。

3・8 南北棟建物SB515を検出した。

3・11 西側拡張区において、SB490の西側柱列を検出し、東西7間になることが判明した。

3・12 SB490の東西に2等分する中軸線に対してSE491と東西対称と思われる位置に、井戸とおぼしき深い掘形のSE492を検出した。

3・13 発掘区西端・南端部の精査。写真撮影。

3・14 SE491の平面実測を行い、井戸内埋土の西半分を掘り下げ始める。

3・15 井戸内埋土は下層が黒灰色粘土で、黒色土器・瓦片・延喜通宝等が出土し、最下層の暗灰砂層から須恵器小壷等が出土した。午後からは井戸の掘形の西半分を掘り下げ始める。

3・16 井戸の掘形の掘り下げ。

3・18 井戸枠の取りあげ。井戸枠を観察すると、下端に造り出しの軸を残し、四面とも扉板の転用であることが判明した。

3・19 遺構精査。南北棟建物SB485とSB480は重複している部分が多く、大部分の柱穴掘形の半分を掘り下げる。

3・20 遺構精査および実測。

3・21 遺構精査および実測。

3・22 SB490の遺構精査では、当初掘立柱の建物であったものを、同位置に同規模で礎石建ちに改めていることが判明した。

3・25 遺構精査。

3・26 西側拡張区の実測を行う。

3・27 遺構精査および発掘区北壁の実測。

3・28 遺構精査および発掘区北西壁の実測。

3・29 発掘調査を終了した。

E 第221次調査

6BSR-P・Q地区

1991年1月22日〜3月14日

1・22 バックホーによる表土排土開始。盛土・耕土・床土(黄褐粘土)の排土を行う。現場小屋建設。

1・23〜25 バックホーによる表土排土。

1・29 地区杭打ち。

1・30　遺構検出開始。

1・31　灰色砂及び黄褐土をはずし暗灰褐砂質土（包含層）上面で遺構検出を行うが、遺構は検出できない。調査区西部では暗灰褐砂質土が薄く、すぐ下層の橙褐砂質土があらわれる。

2・1　黄褐土をはずして暗灰褐砂質土上面で遺構検出を行うが、近・現代の住居布基礎・便所・使途不明の板囲いを検出したのみ。

2・2　ベルコンをトレンチ北部東壁沿いに南北に並びかえて作業開始。45ライン付近までは撹乱がはげしい。

2・4　暗灰褐砂質土上面を検出。発掘区中央で東西棟建物SB541東端を検出。

2・5　QB以北で47ライン付近から西へ進んで遺構検出。QBラインからQFライン付近に広がる淡黄褐粘土で柱穴を検出。

2・6　柱穴群の検出。SB541の東半部、SB542の西側柱、SB543等を検出。QG46地区から45地区にかけて瓦が帯状に散布する。

2・7　SB542の東側柱の一部を検出。帯状に散布した瓦をとりあげる。その下に暗灰砂層があり、さらにその下の淡黄褐粘土上面が遺構検出面である。

2・8　SB541西半部の検出。発掘区北端でも柱穴が見え始める。

2・12　排水作業。QF～QEの暗灰砂層を取り除き、淡黄褐粘土面で遺構検出。柱穴・小穴を多数検出。

2・13　SB542の東側柱、SB544、SA547を検出。

2・14　調査区南端から暗灰砂をはずし、橙褐砂質土上面で遺構検出。PTライン付近で、東西に列ぶ瓦溜りの列SX550を検出した。

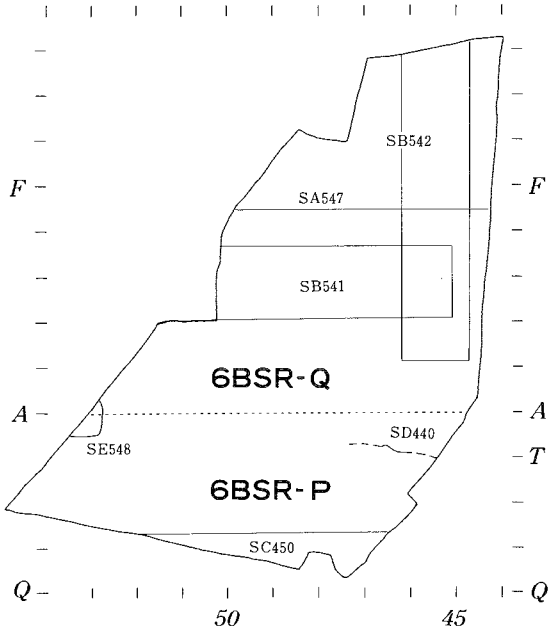


Fig. 8　第221次調査地域の地区割と主要遺構

2・15　南からQC・QBラインまでの遺構検出。遺構は少ない。

2・16　暗灰砂をはずしながら北上し、QCラインから南へ折り返す。調査区西部で柱穴を検出。

2・19　北面回廊SC450の北側柱列を検出。

2・20　SC450の掘り下げ。

2・21　バックホーによる排土運搬。

2・25　清掃作業。

2・26　クレーンによる写真撮影及び写真測量。ラジコンヘリによる写真撮影。地上写真撮影。

2・27　遺構精査。

3・1　排水作業。遺構の清掃。

3・2　排水作業。清掃。現地説明会。

3・4　SC450の遺構精査。講堂東端想定位置では、基壇と認めらるれような積土層は認められない。

3・5　遺構精査。調査区西南部付近（講堂の可能性のある付近）で一段下げるが、顕著な遺構はなかった。

3・6　下層遺構（縄文時代の溝SD440）の検出を目的として発掘区内の一部掘り下げ。

3・7　SE548の検出、掘り下げ。遺物は平城宮土器Ⅶの時期のもの。講堂の存在及びその存続時期について検討が必要である。下層遺構の検出では、SD440の北肩を検出した。下層掘り下げ部を残して砂入れ終了。

3・8　下層遺構検出。

3・12　排水作業。下層遺構の実測。

3・13　バックホーによる埋め戻し。

3・14　埋め戻しを完了した。

F　第223－4次調査

6AGR-A 地区

1991年6月13～14日

6・13　バックホーによる掘削。

6・14　耕土より下は、秋篠川の堆積層が続き、奈良時代の遺構面は現存せず。地表面より約4mまで掘り下げるが、川の堆積層が続く。これより下の掘削は危険な為、掘削を終了する。平面・土層図を作成し調査終了。

G　第227次調査

6BSR-R、6AGR-J 地区

1991年7月2日～7月31日

7・2　発掘区の設定。アスファルトの撤去。

7・3～6　ユンボによる表土排土。

7・8　発掘調査開始。地区杭打ち。

7・9　床土掘り下げ。

7・10　床土掘り下げ及び遺構検出。SD429の北肩を検出。

7・11　Nライン付近の遺構検出。

7・12　南からJAラインまでの黒灰粘質土の掘り下げ。

7・15～17　黒灰粘質土の掘り下げ。

7・19　青灰粘土の掘り下げ。

7・20　青灰粘土の掘り下げ終了。旧秋篠川SD431の南肩を検出。

7・22　礎石据えつけ穴1個SX608、及び築地南雨落溝SD429の再検出。

7・23　SB425の北西隅柱穴の検出。SD429の掘り下げ。

7・24　SD429の掘り下げ。

7・25　清掃。クレーンによる写真測量。地上の写真撮影。SD429の掘り下げ。

7・29　SD429の掘り下げ。

7・30　SD429の掘り下げ終了。清掃後、写真撮影。

7・31　実測。砂入れして調査終了。

H　第228次調査

6BSR-Q・R地区

1991年8月5日～10月3日

10月3日～11月7日

8・5～8・6　バックホーによる表土排土。

8・7　バックホーによる表土排土終了。地区杭打ち。

8・8　発掘調査開始。

8・9　灰褐土の除去。西端部は1段低くなっているらしい。

8・12　灰褐土の除去及び耕土溝の掘り下げを行い、遺構検出を行う。

8・13　灰褐土の除去の続きを行う。

8・16　36ライン東の南北溝以西は包含層がかなり厚い。北西壁から折り返して、遺構検出。包含層には多量の遺物を含む。包含層の一部掘り下げ。

8・17　QR35地区で古墳時代の土器が出土。

8・20　北西壁から折り返しての遺構検出の続きで、柱穴群を検出したが、遺構としてはまとまっていない。

8・21　QN36の土壙の掘り下げ。

8・22　柱穴群出土。後にSB520としてまとまる。36ライン以西の一段低い部分は、土壙状のくぼみが重なり合う。

8・23　SB510の東側柱及び東廂部分を4間分検出した。当初長廊状遺構と理解したが、後に南北棟の東廂部分であることが判明。

8・26～27　34・35ラインでの遺構検出。SB520の西側柱等を検出。

8・28　遺構検出。本日までに確定したのは、SB510の東廂部分、SB520、219次調査検出のSB515の北西隅柱穴、SA512・SB511等である。

8・29　クレーンによる写真測量。地上から写真撮影。

8・30　発掘区西端のSD529の掘り下げ。

8・31　QPラインで土層の掘り下げを行い、黄褐砂質土面上で柱穴を検出できることが判明。

9・2　遺構精査。SA525の検出。QPライン上で礎石据え付け掘形をもつ柱穴群SB521を確認した。

9・3　遺構精査。SB520の掘り下げ。

9・4　SE492該当部分についての拡張を行う。1×2.8m。QPライン以南での遺構精査。

9・5　SE492検出。QPライン以南での遺構精査。

9・6　遺構精査。SE492掘り下げ。

9・7　井戸SE492には抜き取り穴があり、平瓦・丸瓦が多く投げ込まれている。

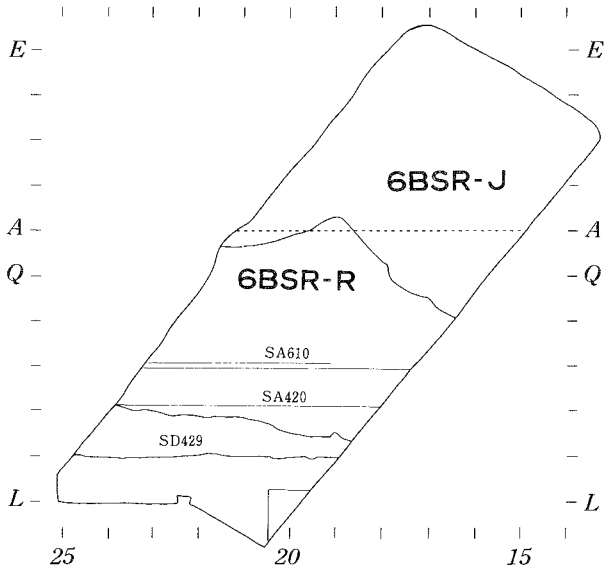


Fig. 9　第227次調査地域の地区割と主要遺構

9・9　SE492の掘り下げ。発掘区西端でのSD529の掘り下げ。

9・10～11　SE492の掘り下げ。当初長廊状遺構と考えていた建物は、南北棟SB510の東廂部分であることが判明。SD529の掘り下げ。

9・12　SE492は、現地表面から3.3mのところまで掘り進んだが、底には至っていない。SD529の掘り下げ。

9・13　排水作業及び遺構精査。

9・17　排水作業。SE492の清掃及び写真撮影。SD529の掘り下げ。

9・18　SD529・SG530の掘り下げ。SE492を発掘調査区側から掘り進む。

9・19　SE492は、崩壊の危険があり、これ以上の発掘を中止し、埋め戻しをはじめる。平面実測。

9・20　SE492の埋め戻し終了。SG530の掘り下げ。

9・21　SG530の青灰色粘質土の掘り下げを続行。

9・24　SG530の掘り下げ。古墳時代の土器出土。

9・25　池状遺構SG530の落ち込んでいる部分は、古墳時代の流路らしく、立木の根が岸に残る。勾玉や馬歯などが出土。

9・26　清掃。SB510及びSG530の写真撮影。

9・27　花粉分析資料の提供。記者発表。

9・30　クレーンによる写真撮影（8月29日）後に検出した遺構についての平面実測。東の方から砂入れを始める。

10・2　遺構精査。砂入れ。

10・3　実測及び写真撮影。砂入れをして調査を終了。

10・3　228次北調査区の発掘区を設定。バックホーによる耕土排土。

10・4　バックホーによる耕土排土終了。

10・18　遺構検出開始。ちょうど東壁沿いに水道管の掘形があり、これを掘って排水溝とする。柱穴を検出しはじめる。

10・19　地区杭打ち。南東から掘り進む。多数の柱穴が出土するも、本日中にはまとまらない。RD29より鬼瓦出土。

10・21　遺構検出を続け、ほぼ北西壁近くまで達する。SA507を検出。西側は黄褐粘土がかぶり、遺構面が不明瞭となってきた。

10・22　折り返して遺構検出。穴・溝を掘り下げる。26ライン以東、29ライン以西では砂地の地山で、その上で遺構検出。SB508には柱根が残存する。

10・23　SA507及びSA506を検出。SA507は北方の建物SB508と一体で、SA506は「院」の北を限る塀となる可能性が大きい。218次検出のSB500は西壁ぎわに北側・北入側妻の柱掘形を検出し、その平面は七間二面、柱間9尺等間の大規

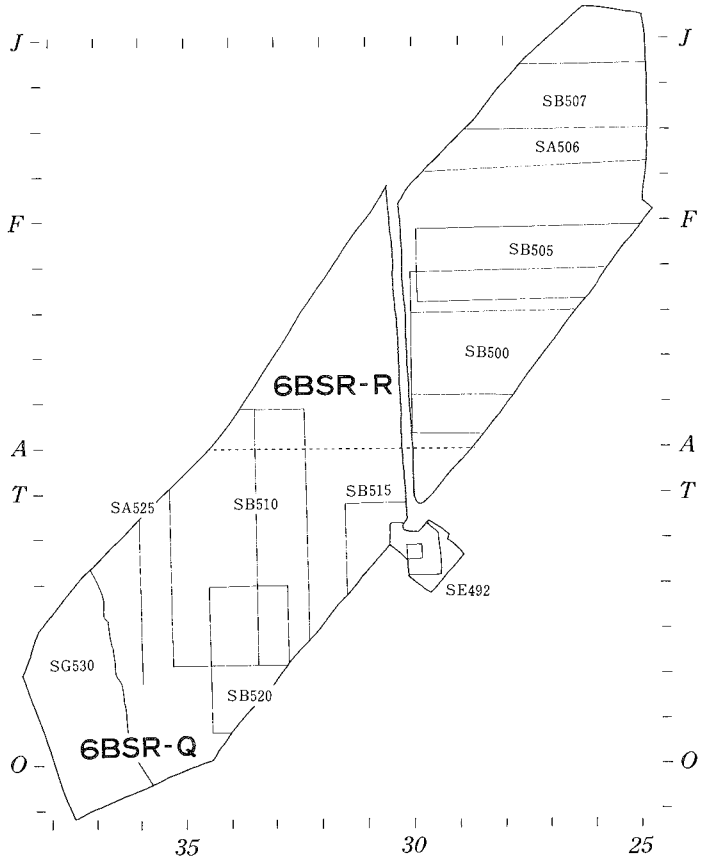


Fig. 10　第228次調査地域の地区割と主要遺構

模なものと判明した。

10・24　南西部分を残して、遺構検出も収束に近づく。ただし、この部分は切り合いがやや複雑である。

10・28　SB505の北側柱を検出。SB500・SB505の性格付けを含めて、これらの建物が西隆寺造営以前か、以降か、時代の限定が重要となってきた。排水作業後清掃し、写真撮影。

10・29　壁面実測。クレーン撮影のためのターゲット打ち、及びクレーン下に敷く鉄板の搬入完了。

10・31　清掃後クレーンによる写真撮影。SB504の検出、SB505の南側柱の検出。

11・ 1　遺構精査。東南壁の柱穴部分の掘り下げ。

11・ 2　遺構精査。計15箇の柱穴を精査。

11・ 5　遺構精査。一部砂入れを始める。

11・ 6　遺構精査及び実測。

11・ 7　砂入れし、現場小屋を撤収する。発掘調査終了。

I　第223－21次調査

6BSR－Q 地区

1992年1月6日～2月6日

1・ 6　発掘区設定。バックホーによる排土開始。

1・ 7　バックホーによる排土終了。壁面清掃及び溝掘り。

1・ 8　地区杭設定。南東部より遺構検出。

1・10　灰褐粘質土の掘り下げ。発掘区西南では柱穴・溝が検出できるが、発掘区東北では遺物包含層が深い。

1・13　掘立柱一対の柱 SB540を検出。

1・14　灰褐粘質土の掘り下げ。SB540に柱根をともなうことが判明。

1・16　発掘区東南部の遺構検出。

1・17　発掘区東北部の遺構検出。

1・18　東西方向の塀 SA535を検出。発掘区東の三角地部分の掘り下げ。

1・20　蛇行溝 SD06の検出。SD06及び SA535の写真撮影。

1・21　SA535は西から3番目の柱掘形に柱根が残り、その脇に木製暗渠 SX533があることが判明。発掘区東の三角地部分の掘り下げ。

1・22　発掘区東北部では暗赤褐砂質土を掘り下げ、発掘区東の三角地部分では青灰砂質土から青灰粘土を底まで下げる。

1・23　遺構検出及び清掃後、写真撮影。

1・27　写真撮影及びクレーンによる写真測量。

1・28　遺構精査開始。SB540の柱根の底に石と瓦を敷いて礎板としている。南側の柱掘形の底部から、西隆寺創建軒丸瓦6235C が出土した。SB540は主要伽藍の整備後の建立を示す。また SA535の柱掘形から6663Cb 及び6710A が出土した。

1・29　遺構精査と SG530の掘り下げ。池の上層埋土から6225E が出土。SG530の埋土内から、橋脚に用いたと思われる平行2列の杭列 SX531を検出。

1・30　排水作業及び遺構精査。SX531の杭は地山まで到達していないものが多い。

1・31　SG530の掘り下げ。発掘区東の三角地部分のトレンチでは多数の木片及び木材が出土。杭も4本地山につきさる。写真撮影。

2・ 1　排水作業。壁面清掃。

2・ 4　昨日からの大雨で壁面崩壊。壁面の整備作業及び壁面実測。

2・ 5　壁面の整備作業及び壁面実測。

2・ 6　平面実測。砂入れして発掘調査を終了。

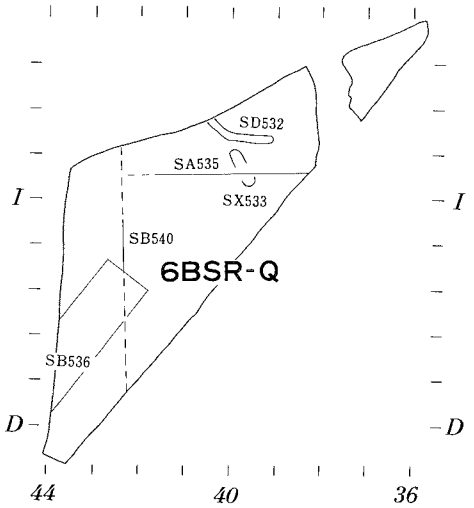


Fig. 11　第223－21次調査地域の地区割と主要遺構

第Ⅳ章　遺　　跡

1．遺跡の概観

1989年９月から1992年２月まで３年間に亘って行われた、百貨店建設用地及び奈良市都市計画道路予定地の調査区は、平城京西隆寺の四町の敷地であった左京一条二坊九・十・十五・十六坪の東半（九・十坪）から、寺地北東隅外側に亘って帯状に及んだ。

現状では、近鉄西大寺駅から東に延びる通称一条通り（奈良生駒線）が、平城京一条々間路、すなわち旧寺地南限に相当し、旧寺地東外側を南北に秋篠川が流れるという関係にある。秋篠川は北西から斜行して京域に至り、京内では流路を改修されて、西一坊大路の一町西側を南北に貫く堀河の役割を担ったと考えられる。現状においても旧一条南大路以南、旧八条大路までほぼ直線的に流路が通っている。旧一条南大路以北は、やや西よりに斜めに蛇行しているが、これが奈良時代当初からの状況か否かは一つの問題であった。付近の発掘調査の結果で、このあたり一帯平城宮の西限近くまで、広く旧流路跡の堆積と推定される砂層が広がっているのを確認しており、古来、この川がかなりな蛇行と氾濫を繰り返してきたことがうかがわれる。

現在の秋篠川

後に述べるように、今回の調査で西隆寺々域北方においては、奈良時代から秋篠川の流路が寺域のすぐ近くまで及んでいたことが判明し、流路は旧一条大路以北は、現状と同様に、以南より西寄りに、すなわち西隆寺の寺地近くにあったと推定されるに至った。このことは、寺地北側に想定される一条北大路（北京極）、さらに北辺坊の様態にも問題をなげかけている。

秋篠川の旧流路

秋篠川と寺地との間には二坊々間路が南北に通り、寺はこれに東門を開くことが旧調査で確認され、また南は一条々間路に南大門を開いていたと推定される。一条々間路は東へ延びてほどなく平城宮佐伯門に至り、また西は二坊大路をこえて西大寺の寺地へと導く。

遺跡は、以上のような周辺の状況下にあり、総じてほぼ平坦で、東南に向かってわずかに傾斜する。遺構面の標高は70.5m～71.5mである。遺構面は６世紀を中心とする古墳時代の遺物包含層を基本とし、東側では砂層を混じえ、部分的に西隆寺造営時の整地層を残す。縄文時代から平安

Fig. 12　西隆寺と現在の秋篠川流路

時代以降にまで及ぶ年代の遺構を多数検出したが、特に南寄りは概して削平が著しく、旧調査においても金堂跡は基壇地覆石の痕跡を、また塔跡は掘込地業をそれぞれ確認したに過ぎなかった。しかし東門には礎石を残しており、また今回新たに回廊と食堂を中心とした一画とを検出し、西隆寺の主要堂塔の大半を確認し、全体の伽藍配置が推定されるに至ったのである。

本報告書における以下の遺構の記述順序は、まず古墳時代の遺構を述べ、奈良時代以降の遺構を大きく回廊周辺と、食堂周辺とに分けて述べることとする。

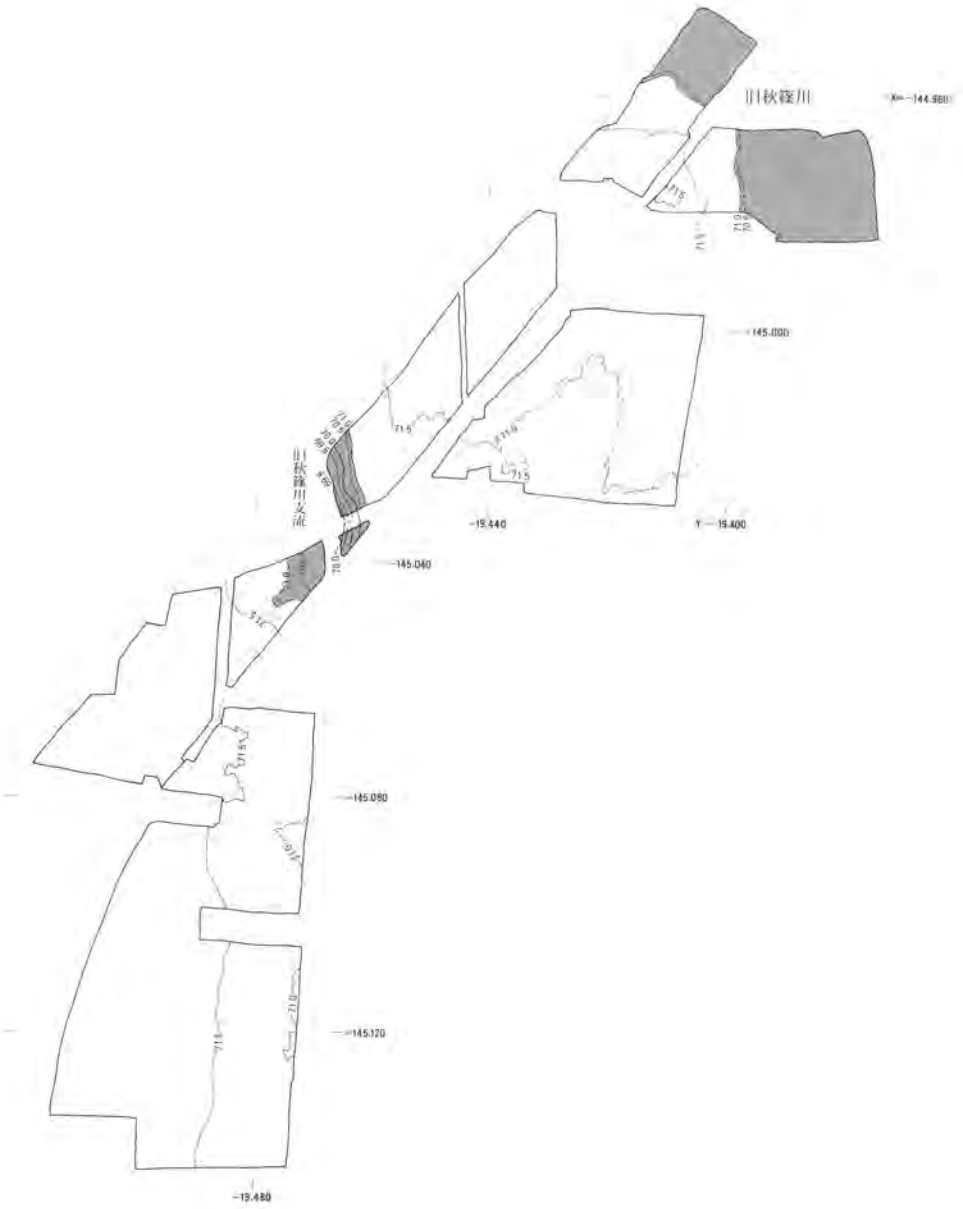


Fig. 13　調査区の地形と旧秋篠川流路

2 遺　　構

A 古墳時代及び古墳時代以前

SD340（PLAN 2）

古墳時代の斜行溝で幅1.8m、深さ0.3mである。次に述べるSD350に対して直行方向に流れる。溝内に暗灰色の砂質土が堆積する。

SD350（PLAN2.3；PL.3）

古墳時代の斜行大溝で幅2～3m、深さ0.45mである。長さ45mにわたって確認し、回廊の内側部分のみ掘り下げた。溝内は暗灰色の粘土質と砂質土が互層に堆積し、6世紀の土器が出土した。水田にかかわる灌漑用水路であろう。

古墳時代の灌漑用水路

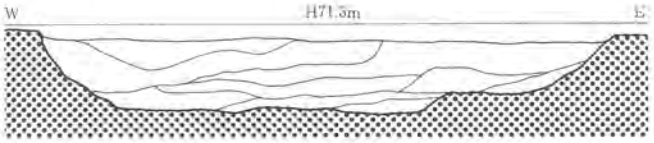


Fig. 14　SD350断面図

SD384・385（PLAN 3）

幅0.2～0.3m、深さ0.1mの古墳時代の斜行溝で、2本の細溝が0.4mの間隔を置いて平行し、斜行大溝SD350とは約12m離れている。細溝に挟まれた隆起部分は水田の畦畔の可能性があろう。

SD412・413（PLAN 3）

幅0.3m、深さ0.1mの古墳時代の斜行大溝で、二条の溝は交差している。SD412はSD350と約28m、SD385とは約20m離れる。SD413は、SD340と約27m離れる。

SD440（PLAN 5）

縄文晩期の溝

縄文時代の斜行溝。212次調査区の北辺にあり、北東から南西にかけてわずかに屈曲しながら、約20mに亘って検出した。221次調査区では一部を検出したに留まるが、さらに西に続くことが判明している。溝の断面は逆台形で、上幅1.7～2m、深さ約1m前後である。溝内は暗灰黒砂質土が堆積する。溝壁が急傾斜すること、溝底が平坦なことからみて、人為的に掘削した溝である可能性が高い。埋土の底近くから縄文時代晩期の船橋式土器、即ち突帯文土器の深鉢1個体が出土した。

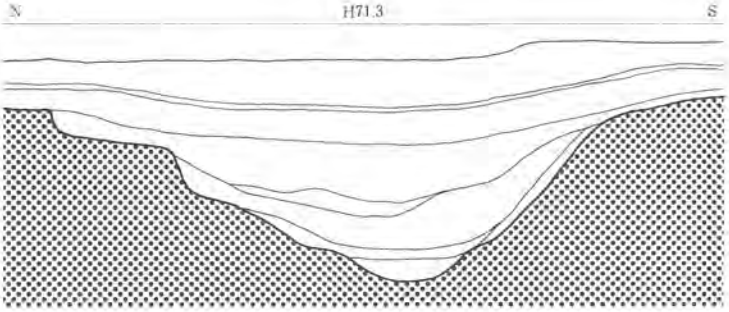


Fig. 15　SD440断面図

SB441（PLAN 5）

古墳時代の掘立柱建物で、棟筋は東から北に4°振れる。掘形は小さく、柱間寸法は1.2～1.5m前後で一定しない。

SA442A・B（PLAN 5 ；PL. 6）

古墳時代の掘立柱東西塀で、SB441の北側柱筋にほぼそろう。方位は東から北に2°振れ、SB441の振れとは2°異なるが、両者は一連のものだろう。2時期の建て替えが認められ、Aは三間、柱間2.5～2.7m、Bは四間、柱間2.4～2.5mである。

SD493（PLAN 6）

第219次調査区の南西から東北方向へ走る、幅3.2m、深さ0.4mの斜行大溝である。埋土に多量の土器を含む。土器の年代は6世紀が中心で、良好な資料がある。このSD493に平行する斜行細溝SD496や、これらに直行する斜行細溝SD494があり、これらも同時期のものであろう。また周辺の小穴群も、この時期に属する小規模な建物遺構となる可能性が高いが、分別は困難である。

SD523（PLAN 9）

幅0.3m、深さ0.35mの東西溝で、後述の池遺構SG530に流れ込む。溝幅に比べ溝の深さがより大きい。SB510の西側柱掘形と重複し、より古い。出土遺物から古墳時代のものと思われるが、性格は不明である。

SD529（PLAN 9・11；PL. 16・PL. 20）

貯水池の下層にある古墳時代の溝

後述するSG530の下層で検出した大規模な溝で、幅3m、深さ0.8mである。蛇行しており、人工的に開削されたものではなく、元々は秋篠川支流ないし分流のひとつであろう。灰褐色砂質土が堆積しており、古墳時代の須恵器・土師器のほか、石製紡錘車、メノウ製勾玉などが出土した。

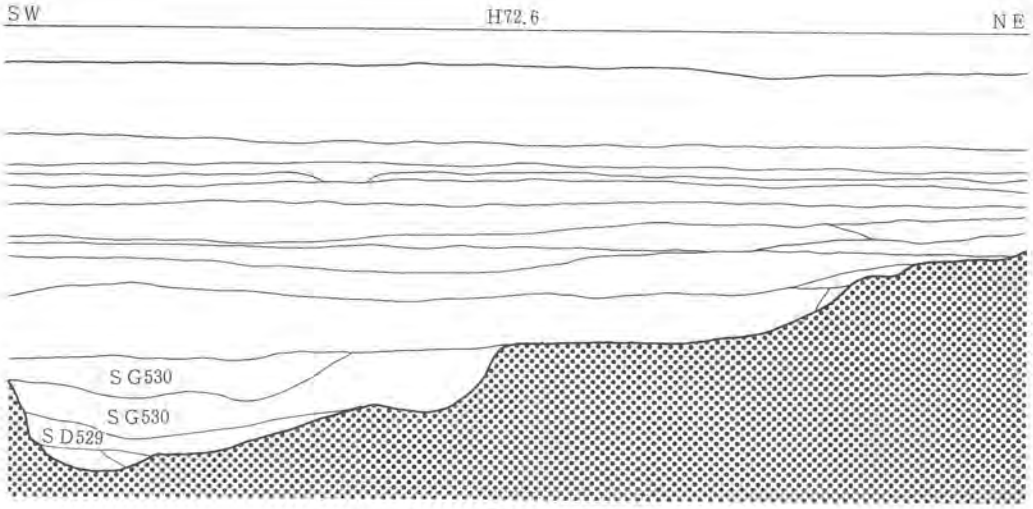


Fig. 16　SD529・SG530断面図

SB536（PLAN11）

古墳時代の掘立柱建物。桁行三間、梁行二間である。棟筋は北から東に37°傾き、柱間寸法は桁行2.2m二間分、1.4m一間分、梁行は1.75m等間である。径0.5～0.6mの掘形と径0.15mの柱痕跡をもつ。（Fig.17）

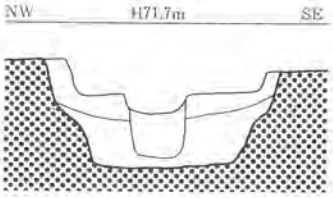


Fig. 17　SB536の柱掘形

SB551（PLAN 7）

一辺約6mの方形に巡る溝で、古墳時代の竪穴住居跡と推定した。

B　回廊周辺

209次

SC300（PLAN 2・3 ；PL. 1 ・PL. 2）

西隆寺東面回廊。基壇土は削平されて残存せず、基壇の掘込地業も認められない。東面回廊は後述する北面回廊とくらべて、遺存状態は悪い。礎石該当位置で検出した１ｍ～1.2ｍの隅丸方形もしくは円形の柱穴は、遺存状態が良い部分で深さ10cm、悪い部分（南から六～八間目の間）では深さ0.1～0.4cmと薄く、色調や土質など下位の整地土層と類似しているため、厳密には礎石抜取り穴か礎石据付掘形かは判断がつかない。かりに、隅丸方形もしくは円形の穴をすべて礎石据付掘形とみると、桁行が南から八間目のみ８尺、他が10尺となる。しかし、回廊が途中で広くなる部分はありえても、狭くなることは通常考えられない。したがって、回廊は複廊で、柱間寸法は桁行10尺等間、梁行８尺であり、柱間の乱れる南から六～八間目の部分は、礎石抜取り穴などの痕跡であると判断した。北面回廊のとりつき部分まで21間分を検出した。西雨落溝はほぼ底面まで削平されていたが、雨落溝の化粧材を抜き取った後に投棄されたと考えられる瓦が、幅0.5～１ｍにわたり帯状に堆積していた（SD360)。堆積した瓦には完成品がなく、細かく割れたものが多い。

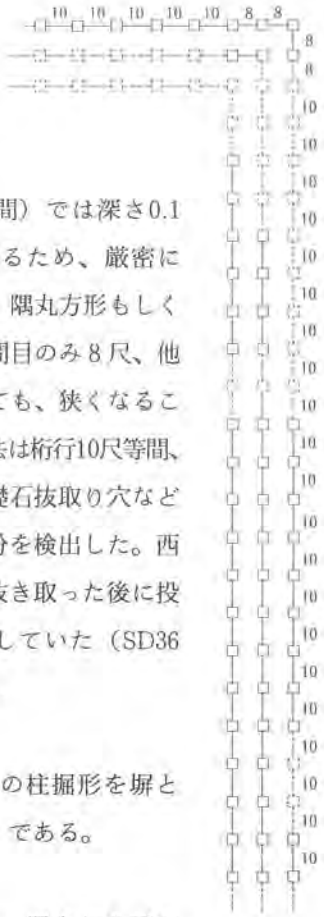


Fig. 18　SC300 模式図

SA305（PLAN 2）

発掘区東南隅に検出された、東西に並ぶ径0.5ｍ前後の三つの柱掘形を塀と推定した。柱間寸法は西が2.1ｍ（７尺)、東が1.35ｍ（4.5尺）である。

SK314（PLAN 2）

SA305の西の土壙で、南北2.2ｍ、東西1.5ｍの長円形である。埋土から瓦が出土。

SB320（PLAN 2）

東面回廊東側で検出された南北棟。桁行三間（総長4.5ｍ)、梁行二間（３ｍ）と推定したが、西半の柱掘形を検出しておらず、柱間寸法は定め難い。検出した柱掘形も大きさが不ぞろいで概して小さく、上質の建物ではない。

SK325（PLAN 2）

SB320の東北にある、東西4.5ｍ、南北4.5ｍの方形土壙。深さ0.15ｍで、東南部は南に張り出す。

SB330（PLAN 2）

発掘区北東で検出された南北棟建物の南端部分。柱間寸法は６尺等間である。212次調査区内には及んでおらず、桁行は三間と推定される。

1）模式図の記号　●柱根をとどめる掘形　◉柱痕跡をとどめる掘形　⊘抜取痕跡あり　○掘立柱掘形　……推定（すべて方位は上が北、縮尺約600分の１）　□は礎石跡

SB352（PLAN 3）

発掘区西南隅で検出した掘立柱建物の東北部分。東西・南北各一間を検出した。柱間寸法は東西1.8m（6尺）、南北2.1m（7尺）である。

SE353（PLAN 3）

SB352に重複する井戸。井戸枠は抜き取られている。径2m以上の規模を持ち、埋土部分を1m掘り下げたにとどまる。

SD360（PLAN 2・3）

東面回廊SC300の西側の帯状の瓦堆積で、検出された回廊の北部を除いた全長に及ぶ。雨落溝の痕跡と推定される。

SB365（PLAN 2）

東西棟建物の東妻部分。梁行二間で柱間寸法は1.5m（5尺）である。

SB366（PLAN 2）

桁行三間、梁行二間、東西棟掘立柱建物。北東部は削平されており、柱掘形が失われている。残る掘形の一辺は0.4mと概して小さい。柱間寸法は1.8m（6尺）等間である。

SE370（PLAN 2・3；PL.21）

西隆寺造営直前の井戸

SC300の西側で検出された井戸。井戸枠を残している。井戸枠は東西0.9m、南北0.8mの長方形で、四隅に柱を立て、横桟を通して、桟の外側に縦板を張る。埋土から土師器杯A・甕、須恵器杯B・壺L・壺Qが出土した。この井戸廃絶後、その上位に瓦溜りが形成される。

SB380（PLAN 3）

SB366の北方にある東西棟建物の東妻部分。梁行二間で柱間寸法は7尺等間である。

SK388（PLAN 2・3）

SB395の東側で検出された不整形の土壙で、深さ0.2m。灯明皿として使用されたと推定される奈良時代末期の土師器をはじめ、完形の土器が大量に出土した。

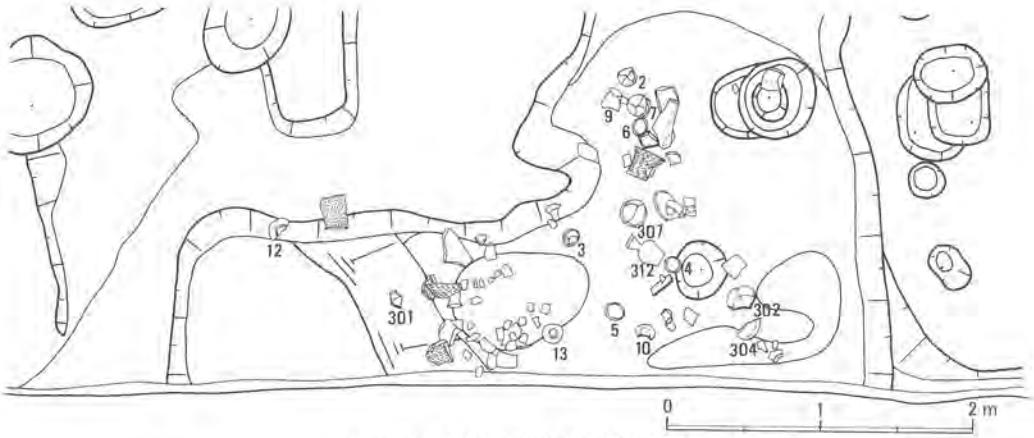


Fig. 19　SK388内出土土器分布図

SB390（PLAN 2・3）

SK388の北側に重複する南北棟建物。桁行三間、梁行二間で、柱間は1.8m（6尺）等間である。柱掘形は不整形で、径0.3m前後と小さい。

SB395（PLAN 3）

発掘区西端にある南北棟建物。桁行三間、梁行二間、柱間寸法は6尺等間である。柱掘形は

略方形で一辺0.6～0.7mと比較的大きく、径0.25mの柱痕跡を留めるものがある。西側柱の柱掘形は金堂下層にあたり、未検出である。柱掘形から須恵器杯Bが出土した。

SA399（PLAN 2・3）

SB401に重複する東西塀で、五間分を検出した。西端の柱掘形は径0.8m。柱間寸法は2.4m（8尺）等間である。金堂部分の調査区には、西延長部が検出されておらず、金堂の下層となるものと思われる。

SX400（PLAN 2・3；PL. 2・4）

暗　　渠

SC300を東西に横断する暗渠。底石に挙大の偏平な川原石を並べ、側石に凝灰岩を立て、底面は東に向かって傾斜する。西側に川原石の底石と上面を揃えて凝灰岩を据える。底石の状況をみると、回廊西側柱から西へ1.2mの位置を境として、東では川原石がほぼ2列に並んでいるのに対して、西では3列に並んでおり、この境目が基壇端にあたると推定される。すなわち西側柱心からの基壇の出は4尺となる。また、暗渠西端が西雨落溝の西端と考えられ、この上に凝灰岩の雨落溝側石を立てたと推定される。同様に回廊基壇化粧も凝灰岩であった可能性が高い。回廊西側柱心から暗渠西端の凝灰岩の内側まで2.1m（7尺）、基壇西端から西雨落溝西肩まで0.9m（3尺）である。後者の部分が雨落溝もしくは犬走りとなろう。暗渠底石のレベルは、雨落溝抜取り跡の底面より深く、雨落溝と暗渠が交錯する部分では、暗渠を雨落溝より一段深くし、暗渠以北の排水を集めていたと推定される。

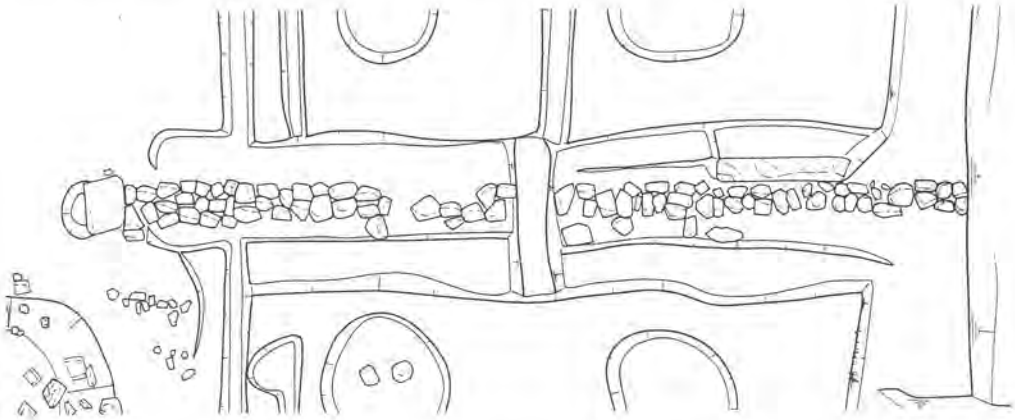


Fig. 20　ＳＸ400平面図　0　1　2m

SB401（PLAN 2・3）

SB390北方の南北棟建物。桁行三間、梁行二間と推定され、北妻はSK405に破壊されている。柱間寸法は、桁行が1.8m（6尺）等間、梁行は1.95m（6.5尺）とやや広い。

SK405（PLAN 2・3）

SB401・410と重複する大土壙で、南北6m、東西6m以上の規模を有する。深さは0.3mあり、多量の瓦が出土した。

SB410（PLAN 2・3）

SK405北の東西棟建物で、南側柱の掘形は、SK405の底面にかろうじて痕跡を残す。桁行二間以上で、以西は発掘区の西にのびる。柱間寸法は2.25m（7.5尺）等間、梁行は二間、各1.8m（6尺）である。

SC450（PLAN 5・7；PL. 6）

回廊東北隅

本調査区では北面回廊 AC450と東面回廊 SC300のとりつき部分、即ち回廊東北隅を検出した。全体として遺構の残りは悪いが、礎石該当位置にある隅丸方形もしくは円形の穴は深さ約20cm残り、210次調査の東面回廊より遺存状態はよく、土層の検討の結果、礎石据付掘形と判断した。隅二間分は、桁行・梁間とも8尺等間である。

SD445（PLAN 2・5）

東面回廊の東雨落溝。奈良時代の遺構面が西南隅に部分的に残っており、南北5mほどを検出した。幅は0.7～1mである。回廊心から溝心まで約3.5m（12尺）であり、回廊西側の状況とやや異なる。

SE448（PLAN 5）

西隆寺造営以前の井戸

発掘区東端にある小型の井戸。削平されて浅く、横板組の井戸枠一段が残る。底に平瓦を円形に並べ、中に刳りものの桶を置き水溜とする。外側に使用していた平瓦は12枚残り、半截したものが多い。埋土から和銅開珎が2枚出土しており、開削は奈良時代前半にさかのぼる。

SK449（PLAN 5・7）

回廊東北隅中央部分、即ち北面・東面回廊の棟通りの交点部分で検出された土器埋納遺構を SK449と呼ぶ。この部分の礎石据付掘形は、東西1m、南北1.3mの長円形を呈し、深さ0.2mである。詳しくは、第V章第5節で述べる。

SD451（PLAN 5；PL. 7）

北面回廊東方の素堀りの東西溝。幅0.5m、深さ0.2～0.3m。東西16m分検出した。西隆寺造営頃の SK455と重複しており、SD451の方が古い。右京一条二坊九・十坪の坪境小路心の想定線より北約15mに位置し、坪境小路に関連するものとみるには距離が離れすぎる。九坪内での区画溝であろう。

SD452（PLAN 5；PL. 7）

素堀りの東西溝で、SD451の南約6mの位置にある。

SK455（PLAN 5・7）

回廊北東隅に近い位置で検出された浅い土壙。平面は東西に長く、長辺2.3mの楕円形で、須恵器横瓶・壺などが出土した。いずれも内面に漆が付着する。SD452と重複し、より新しい。出土した土器は西隆寺造営時のものである。

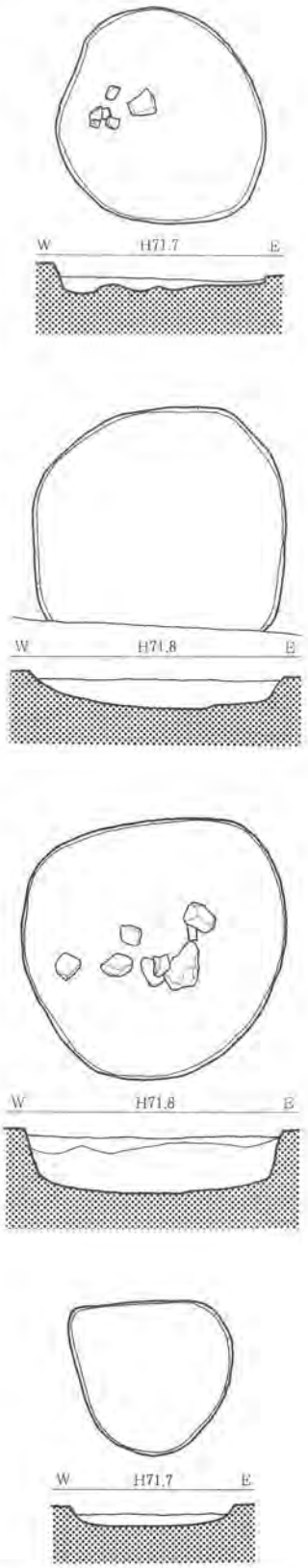


Fig. 21　SC450平面図・断面図

SC450（PLAN５・７）

北面回廊。東面回廊取り付き部まで五間分を検出。柱間寸法は桁行10尺等間、梁行は８尺である。礎石据付掘形の形状は径1.5ｍ前後の不整円形もしくは長円形で、厚さ0.15～0.2ｍの埋土がレンズ状に残る。

北面回廊

SB541（PLAN７；PL.12）

掘立柱東西棟建物。桁行七間以上、梁行二間の掘立東西棟建物。柱間寸法は桁行2.1ｍ（７尺）等間、梁行2.4ｍ等間（８尺）。出土遺物から西隆寺に先立つ時期の建物である可能性も残すが、東西に長い形状から西隆寺造営に伴う仮設的な尼坊と推定する。柱掘形から平城宮土器編年Ⅲ以前の土師器杯底部、同抜取穴から平城宮Ⅲ・Ⅳ期の土師器杯Ａが出土。

SB542（PLAN７；PL.12）

桁行九間以上、梁行二間の南北棟建物。柱間寸法は桁行、梁行とも2.1ｍ（７尺）等間である。柱掘形は一辺１ｍ前後の隅丸方形。SB541を建て替えた、西隆寺尼坊と推定される。

尼坊

SB543（PLAN７）

東西二間南北二間の総柱建物。柱間寸法は東西方向５尺５寸、南北方向６尺５寸である。SB541と重複し、より新しい。

SB544（PLAN７）

掘立柱総柱建物。桁行三間、梁間二間。柱間寸法は桁行1.8ｍ（６尺）、梁行2.1ｍ（７尺）。柱穴掘形から９～10世紀の土師器杯が出土した。SB542と重複し、柱穴の重複はないが、遺物からより新しく、SB543と同時期と推定される。

SB545（PLAN７）

掘立柱建物の南妻部分。柱間寸法は2.1ｍ（７尺）等間である。SB542と柱間寸法が等しく、しかも南妻柱筋をそろえており、SB542と並列する西隆寺尼坊と推定した。

SB546（PLAN７・11）

東西棟掘立柱建物で、東端は223－21次調査区で検出された。桁行四間以上、柱間2.4ｍ（８尺）等間、梁行二間、各2.1ｍ（７尺）である。

SA547（PLAN７）

掘立柱東西塀。柱間寸法は2.65ｍ（９尺）等間、四間分を検出した。

SE548（PLAN７；PL.21）

調査区南部西端に位置する井戸。掘形の南北約２ｍ、井戸枠の

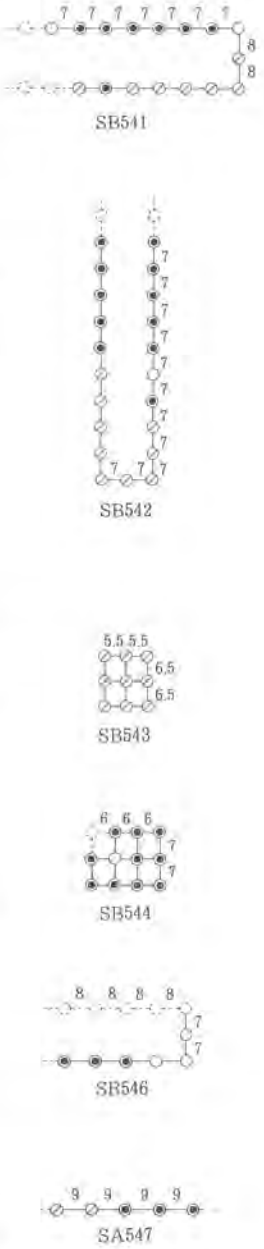


Fig. 22　ＳＢ541等模式図

講堂は9世紀初頭この場所に存在しない

横板を止めていたとみられる2本の杭の距離約0.9m。埋土からは、土師器皿A・須恵器杯B・緑釉陶器が出土した。平城宮土器Ⅶ（9世紀初頭）の段階で、この場所に井戸が存在していたことは明らかである。

SK549（PLAN 7）

調査区西南部の土壙。平面は径2m強の不整形で、埋土から平城宮軒瓦編年1期の軒平瓦6664Gaが出土しており、西隆寺に先立つ時期の遺構と推定される。また、湧水が激しく掘り下げが十分できなかったが、井戸であった可能性も残る。

SX550（PLAN 5・7；PL.13）

北面回廊SC440北側の瓦溜りで、10ケ所あり、回廊廃絶に伴うものであろう。

C　食堂周辺

210次

SA420（PLAN4・8；PL. 4）

東面築地

西隆寺々地の東を画す築地塀で、次に述べる西側雨落溝SD421と、東側部分との間に、幅1～1.2m、厚さ0.2mの基底部としての積土を残す。残存する積土は、西側雨落溝まで達するので、犬走り部分を考えると築地基壇土自体ではなく、築地基底部と考えるのが妥当である。

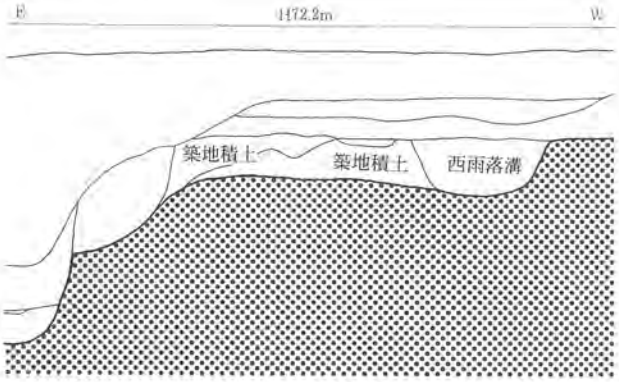


Fig. 23　SA420断面図

SD421（PLAN 4・8）

築地塀SA420の西側の雨落溝。幅約0.7m、深さ0.4m。溝底は南から北に向かって低くなる。後述する東西溝SD429に鍵の手状にとり付き、以北には延びない。大量の丸・平瓦が出土した。

SA425（PLAN 4・8）

219次調査で南端を検出している南北塀の一部。柱間寸法は2.4m（8尺）で、210次調査区内に北端の二間、219次調査区内に南端の三間を各々検出しており、総長十四間（33.15m）となる。SB426と重複し、より古い。

SB426（PLAN 4・8）

SA425と重複する建物の北東隅部分で、東西方向に一間分を検出した。柱間寸法はいずれも3.0m（10尺）である。

SB428（PLAN 4・8）

建物の南東隅部分で、東西・南北にそれぞれ一間分ずつを検出した。方位は方眼方位から著しく振れる。柱間寸法は東西2.4m（8尺）、南北2.1m（7尺）であり、掘形の径は約0.6m、径0.15mの柱跡を留める。方位の振れ及び検出状況から判断して奈良時代以前の可能性がある。

SD429（PLAN 4・8）

西隆寺敷地内の北端を東西に流れる溝で、東面築地下を石組の暗渠（SX430）としてくぐり、寺域外への排水を行う。築地とりつき部分は何度も冠水したものとみえ、溝の肩がやや広がる。溝底はSD421よりも約0.5m程低い。総長17mを検出したが、西にゆくほど広くなる。227次調査区西端では3m以上に広がって断面はU字形となり、埋土は上下二層に分かれる。軒丸瓦6225A、軒平瓦6663Cb、6721Hbを含む多量の瓦片および奈良時代後半の土器が出土した。

SX430（PLAN 4・8；PL. 4）

東面築地下の石組暗渠

SD429に連なる暗渠。暗渠部分は西側の入口のみに石組と底石が残る。底石と側石は自然石で、蓋に凝灰岩の切石を使っている。自然石の側石は、溝底面よりやや上位の土の上にのっており、後世の修復の可能性がある。暗渠入口に当たる、南北に据えられた2個の凝灰岩切石は、幅0.2m、長さは合わせて0.9mあり、暗渠の外法寸法に対応するものと考えられる。暗渠上面のレベルは、東面築地の西雨落溝SD421北端の溝底より0.1m低く、SD421が北流し、暗渠によって東へ排水することがわかる。

SD431（PLAN 4・8）

秋篠川旧流路にあたり、西隆寺廃絶後、寺地ぎわまで大きく氾濫した状況がうかがわれる。

219次

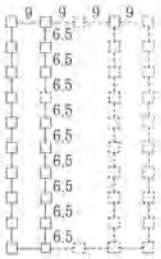
SA425（PLAN 6；PL. 11）

210次調査で北端を検出している南北塀の一部。柱間寸法は2.4m（8尺）である。柱穴平面は一辺0.9m（3尺）の正方形である。柱穴から遺物の出土はなく、時期は不明。

SB480（PLAN 6；PL. 9）

南北棟礎石建物

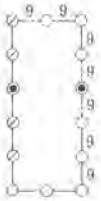
南北棟礎石建物。西側柱・入側柱の礎石据付穴ないし抜取り痕跡九間分と、東入側柱の礎石据付穴一つを検出した。桁行は九間以上となり、柱間寸法は1.9m等間で尺の完数値にはならず、6尺5寸と推定し得るほか、ある距離を等分した結果とも考えられる。梁行は2.7m（9尺）等間である。遺構は形状、深さ共に一定せず、礎石据付掘形と抜取り穴を混合して検出したものと考えられる。北妻柱の遺構は検出されておらず、また以北は旧流路の砂層にあたり検出が困難であったこともあって、北により長く延びていた可能性もあり得るが、北に接した東西溝SD484は、後述するようにこの建物の北雨落溝の可能性が高い。



SB480

SD484（PLAN 6）

SB480北側の東西溝。調査区の東端から西へ7mに亘って検出し、幅0.6m、深さ5cmで、瓦辺を多く含む。SB480の柱筋から1.5mをへだてて並行しており、その北雨落溝であろう。



SB485

SB485（PLAN 6）

南北棟掘立柱建物で、桁行五間、2.65m（9尺）等間。梁行も2.65m（9尺）二間である。柱掘形は一辺1～1.2mのやや南北に長い長方形を呈し、深さは遺構検出面から0.35～0.5cmである。柱痕跡は直

Fig. 24　SB480等模式図

径25cm前後あり、東側柱はSB480と多く重複し、SB485が古い。柱筋は北で西に振れる。

SD486（PLAN 6）

SB480の西雨落溝。SB4809西側筋から溝心まで1.0m。幅0.6m、長さ10mにわたり、多量の瓦片を含む。SB480に葺かれた瓦が落下して、堆積したものであろう。

SB490A・B（PLAN 6 ; PL. 10・11）

食　堂

調査区南端の東西棟建物で、桁行七間、北側および北入側柱を検出した。当初掘立柱の建物（A）を、同規模、同位置に礎石建物（B）に改めている。桁行の柱間は2.95m（10尺）等間、廂の出も10尺である。身舎妻柱は東側のみを検出したが、柱穴は他に比してきわめて浅い。当初の柱掘形は一辺0.9～1.2mの略方形で、柱痕跡は径30cm。柱を抜き取った跡に根石を置き、礎石を据えている。本建物跡は西隆寺食堂に比定される。

SE491A・B（PLAN 6 ; PL.21）

扉板の転用材をもつ井戸

当初横板の、いわゆるせいろ組と呼ばれる上質の構造の井戸（A）を、後に内側に縦板を添え立てて改修している（B）。掘形は一辺3.6m前後の隅丸方形。深さは検出面から2.4mである。Bに用いられた板材は、四面とも扉板の転用であることが判明し、西隆寺の建築の様相の一端をうかがうに足る貴重な資料となった。若干の木製品および延喜通宝の他に、埋土から多量の土器類が出土した。9世紀後半代の緑釉陶器片を含む。抜取り穴と井戸底の土器類はほぼ同時期のもので、年代は延喜通宝の年代よりもさらに新しい。

SE492（PLAN 6）

219次・228次発掘区の中間に位置する井戸で、掘形は一辺約3mの方形。掘形内の埋土は硬質の粘土で、強固に作られている。井戸枠は横板組で一辺1.2mの方形に組むが、保存状態が悪く、詳しい構造は不明。現地表面から3.3mのところまで掘り進んだが、底には至らず、崩壊の危機があったためそれ以上の発掘は中止した。深さ2.3mの抜き取り穴があり、平瓦・丸瓦が多く投げ込まれていた。埋土出土の土器より西隆寺造営時には埋まっていたと考えられる。

SB495（PLAN 6・10 ; PL. 9）

東西棟掘立柱建物で、桁行五間、2.65m（9尺）等間、梁行2.65m（9尺）二間であり、柱筋は方眼方位より北で西へ2°弱振れる。柱掘形は一辺約1mの略方形を呈し、深さは0.6m前後である。いずれの柱穴にも明瞭な抜取り穴が認められ、その中に黄色土が混入しているのが、方位と共にSB485と共通する特徴である。

SA501（PLAN 6）

後述するSB500の東に接する位置にある南北塀で、柱筋方位は北で西に振れる。発掘地区内では二間分を検出し、さらに北に延びてSA506にとりつくと推定される。柱間は2.7m（9尺）等間である。

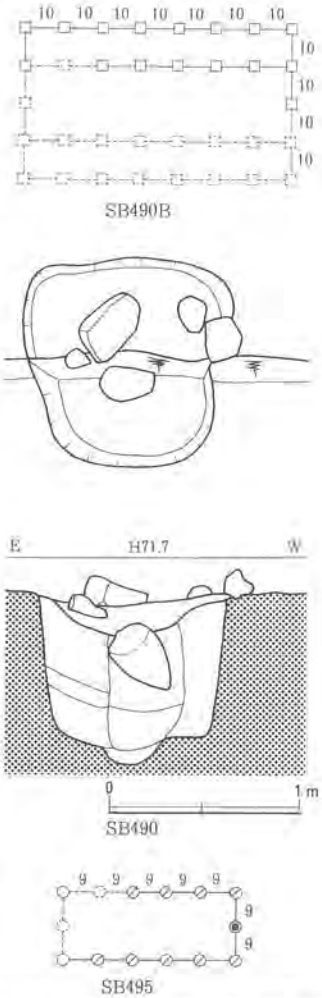


Fig. 25　SB490等模式図・断面図

SB500（PLAN 6 ・10；PL.11・17・18）

桁行七間、東西棟南北二面廂付きの掘立柱建物である。柱間は、桁行・梁行共に2.65m（9尺）等間である。このSB500には、建物前方に中央三間と柱筋をそろえた四つの柱穴があり、これらを階隠と推定した。側柱との距離は3.9m（13尺）である。柱間10尺のSB490とは梁行の柱筋が一致しないが、建物東西中軸線が一致する関係にある。両者の方位が等しく、また、妻柱間の距離が26.7m（90尺）となることには計画性が認められ、同時期と推定される。

SB504（PLAN 6 ・10）

SB500・505に重複する東西棟建物。桁行三間、総長4.5m。梁行は二間で、2.6mである。尺による計画性が認められず、柱穴の重複はないが、西隆寺よりも新しい時期のものと推定した。

SB505（PLAN10；PL.17・18）

東西棟建物で、西妻から桁行六間分を検出し、周囲の遺構との関係から桁行七間と推定される。廂を持たず、桁行は2.1m（7尺）、梁行は2.4m（8尺）等間である。SB500と重複してより古く、柱筋は北で西に振れる。

SA506（PLAN10；PL.18）

東西塀、柱間は3.0m（10尺）等間。四間分を検出した。SB500と同様の振れを持ち、東に延びてSA501に連なり、SB500の後方を画すると推定される。

SB507（PLAN10）

東西棟建物で、桁行三間分を検出し、桁行五間、梁行二間と推定される。桁行は2.7m（9尺）等間である。

SB509（PLAN10）

建物の西南隅にあたり、東西・南北各一間を検出した。柱間はいずれも1.8m（6尺）である。

SB510（PLAN 9 ；PL.15・16）

桁行七間、梁行二間の南北棟掘立柱建物。東に片廂を持つ。柱間寸法は桁行は2.4m（8尺）等間。梁間3.0m（10尺）、廂の出は3.3m（11尺）。柱掘形は方形で一辺約1m。西側柱から西へいずれも12尺の位置に、柱筋をそろえて凝灰岩2ケ所、その抜き取り穴と思われるもの1ケ所を伴い、縁束の可能性を残す。西側柱列の柱掘形は、西隆寺創建時の整地土を

南北二面廂付き掘立柱建物と階隠

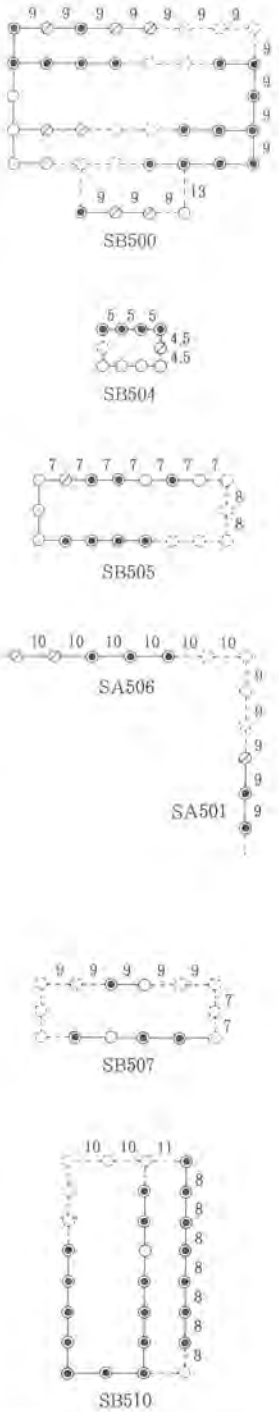


Fig. 26　ＳＢ500等模式図

西隆寺造営以前の掘立柱建物

除去した段階で検出されたので、西隆寺造営以前に位置づけられる。

SB511（PLAN 6 ・ 9）

SB510に重複する南北棟掘立柱建物。梁間二間総長2.9m、桁行二間総長2.9mで、柱掘形は小さい。SB510より古く、奈良時代以前の可能性がある。

SB511

SA512（PLAN 9）

南北塀で、三間分を検出した。柱間は4～5尺で一定せず、柱穴も小規模である。SB511に重複し、より古い。

SA512

SD513（PLAN 9）

東西溝。ごく浅く、幅は1.2mである。西端で南に折れ、浅い窪み状の溝SD514、SD516に連なる。

SB515（PLAN 6 ・ 9）

桁行六間、東片廂付南北棟掘立柱建物。柱間は桁行2.06m（7尺）等間、梁行2.4m（8尺）二間、廂の出3.3m（11尺）である。SE492を埋め立てた後に建てられており、また、SB490・495と重複し、SB495より二段階新しい。以上の点から、時期は西隆寺廃絶以降に位置づけられる。

SB515

SB517（PLAN 9）

掘立柱建物の東南隅と推定。比較的大きな柱掘形2つを確認した。柱間は9尺とみられる。SD510と掘形が重複し、より新しく、奈良時代後半に推定した。

SB517

SB520（PLAN 9）

南北棟掘立柱建物。梁行二間柱間8尺、桁行五間以上、柱間7尺弱である。SB510・521と重複する。方位は後述するSA525と等しく、北で西に振れており、SG530と同様の傾きをもち、その影響が考えられる。これはSB495・505とも共通した傾向であり、それらと同時期に位置づけて矛盾はない。

SB520

SB521（PLAN 9）

礎石建物の北西部分。東西棟と推定され、梁間二間、柱間各2.1m（7尺）、桁行三間以上、柱間1.65m（5.5尺）等間である。礎石は残存していないが、掘形内に根石を多数留める。東方のSB490と北側柱筋を揃えており、同様に礎石建のSB490Bとの同時存在の可能性が高い。

SB521

SB522（PLAN 9）

南北棟掘立柱建物の北西部分と推定され、梁間二間桁行二間以上。SB521と重複するが柱掘形の重複はない。SB490の場合と同様に、SB521はこのSB522を建て替えたものであり、本遺構はSB490Aと同時期に推定される。

SB522

SA525（PLAN 9）

SG530の東岸にそう南北塀。北から三間分の柱間は2.7m（9尺）等間である。以南にもいくつかの柱掘形があり、南に延びる可能性もある。

SA525

Fig. 27　S B 515
等模式図

223－21次

SG530（PLAN 9・11；PL.20）

SD529を利用して作られた池状の貯水施設。深さは１m以上に及ぶ。幅は15mで両岸共に急勾配であり、人工的なものと考えられる。SA525、ないしはSB510との関係からみても、奈良時代前半まで存在したことは確実である。埋土から軒瓦・土器が出土しており、その年代からみて、西隆寺造営に際して埋め立てられたと推定される。 池状の貯水施設

SX531（PLAN11；PL.20）

平行する２列の杭列。地山まで達していないものもあり、層位から奈良時代前半に属する仮説の橋脚と推定した。

SD532（PLAN11）

素掘の蛇行溝で、東から流れてややカーブしつつ折れ曲がり北流する。東端で幅108cm、深さ15cm、北端で幅192cm、深さ55cmであり、その埋土には大量の土器・瓦を含む。

SX533（PLAN11；PL.20） 木樋

SA535の下層に検出された木樋。幅30cm、長さ210cmを留め、底板の厚さ５cm、側板の厚さ３cmである。木樋は北側の蛇行溝SD532と南側の土壙状遺構SX534をつなぐものと考えられるが、明瞭な流路は検出できなかった。このSX533は後述するSA535の西から３番目の柱掘形と重複しており、柱掘形は木樋の側板にそって掘り込まれている。したがって木樋の据え付けが先で、柱の据え付けが後である。しかし、木樋の側板を破壊せずに柱を掘り込んでいることからみると、SX533とSA535とは同時併存の時期があるだろう。また、柱掘形からは6663－Cb形式、その東隣の木樋掘形からは6710－A形式の軒平瓦が出土している。SX533とSA535の築造年代は、西隆寺創建期と考えられる。

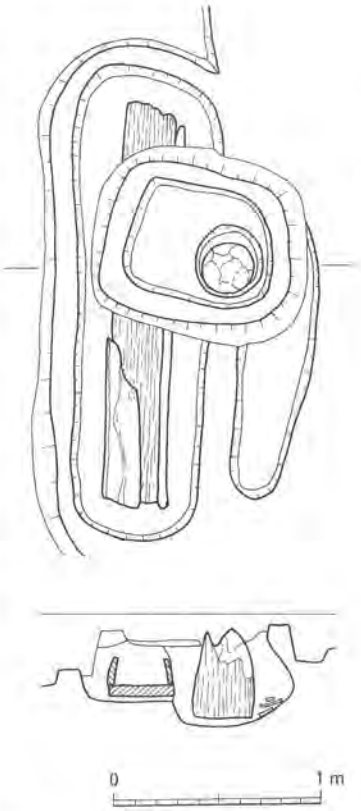


Fig. 28　SX533平面図・断面図

SA535（PLAN11；PL.20）

東西塀で、三間分を検出した。東は発掘区外に延び、西は、門SB540の北に想定される築地にとりつくと推定される。柱間は2.4m（８尺）等間、柱掘形の一辺は60cm～70cmで、径28cmの柱根を留めるものがある。掘形からⅢ期の軒瓦及び須恵器壺Ｌが出土。

SB540（PLAN11；PL.19） 棟門

掘立柱の一間門で、棟門であろう。柱間は3.0m（10尺）、柱掘形は一辺１mの方形で、いずれも径25～28cmの柱根を留める。底に石・瓦を敷いて礎盤とする。南北に築地塀を伴うものと推定される。

SA600（PLAN 4 ・ 8）

北面築地　西隆寺北面築地。築地本体、あるいは寄柱、築土用支柱などの痕跡は全く残されていないが、ほぼ直角に高まりを残した、秋篠川旧流路の侵食の状況、ならびに後述する門の柱礎石据え付け穴SX607の存在から、その位置を国土方眼座標Y＝－144.960.10を心とすると推定した。しかしこの南雨落溝と考えられる前述のSA429は、心々距離で約5.2m南へ隔たることとなって、やや疑問を残す。なお、その北側の秋篠川旧流路跡SD431には、奈良時代の瓦片が大量に投棄された状況で出土しており、かなり早い段階でこの位置に流路が及んでいたことがうかがわれる。

SX605（PLAN 4 ・ 8 ; PL. 14）

SD429にかかる橋状の施設。SD429の岸なりに沿った四つの掘立柱穴からかなり、平面は整った四角形ではない。柱掘形は径60cm前後の不整形である。西隆寺創建当初ではなく、かなり遅れた時期のものと考えられるが、この北正面の築地には門の遺構がなく、SD429と北面築地との間にやや空閑地をとっていたと推定される。

SB608（PLAN 8）

北面築地に開く門　北面築地に開く門の礎石据付掘形と推定される土壙。調査区西端で検出されたため門の形式・規模は不明。一辺1.2mの略方形で、多数の根石を留める。

SA610（PLAN 4 ・ 8 ; PL.14）

SA600の下層に重複する東西塀。SB608よりも古い。五間分を検出し、掘形は概して小さい。柱間寸法は2.1m（7尺）を基本とするが、多少の出入りがある。奈良時代前半に位置付けられ、九坪北側の閉塞施設に比定される。東方は削平されているが、同じく奈良時代前半の、九坪東端の南北塀に比定されるSA425に連なる可能性があろう。

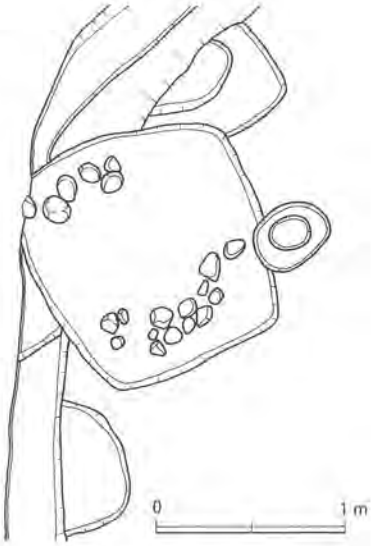


Fig. 29　SB608平面図

第V章　遺　　物

1　瓦　　塼

数次にわたる発掘調査により、大量の遺物が出土しているが、その大半が瓦塼である。ここでは、西隆寺の寺域全体における瓦使用の実態を明らかにするために、奈良国立文化財研究所で保管している過去の調査資料を加えて、一括して述べる。以下、出土点数の表記は全体を対象とし、今回の百貨店増床と都市計画道路建設に伴う調査で出土した点数を（　）内に示す。

A　軒　丸　瓦（PL.30～35, Fig.31～33）

軒丸瓦は339（187）点出土している。このうち型式が判明するものは299(167)点あり、25型式45種に分けることができる。ほとんどが奈良時代に属するが、ほかに平安時代前期に下る資料が１点ある。軒丸瓦の外縁形態の分類は、基本的に『平城宮発掘調査報告XIII』[(1)]（以下、『平城宮報告XIII』のように略記する）にしたがうものとするが、直立縁については、あらたに直立縁Ⅰ・直立縁Ⅱの区別を設けた（Fig.30）。

外縁形態の分類

三角縁　内面が内傾するが、上面に平坦部をつくらないもの

傾斜縁Ⅰ　内面が直線的に内傾して、上面に平坦部をつくるもの

傾斜縁Ⅱ　内面が内彎して匙面をなし、上面に平坦部をもつもの

傾斜縁Ⅲ　内面が外反し、上部に平坦面をつくるもの

直立縁Ⅰ　内面が直立気味に立ち上がるが、上面が丸みをもつもの

直立縁Ⅱ　内面が直立気味に立ち上がり、上部に広く明瞭な平坦面をもつもの

Ⅰ　単弁蓮華文軒丸瓦（奈良時代）

6125型式　**A種**15(７)点が出土。中ぶくらみの中房内部に１＋８の蓮子をおき、外側に量感のある13弁の蓮弁を配する。外区内縁は珠文、外縁は素文の直立縁Ⅰである。文様の地と同じ面に、笵端の痕跡が残る（PL.35）。また、笵端の後方が逆にくぼみ、枷型の使用を示す例が

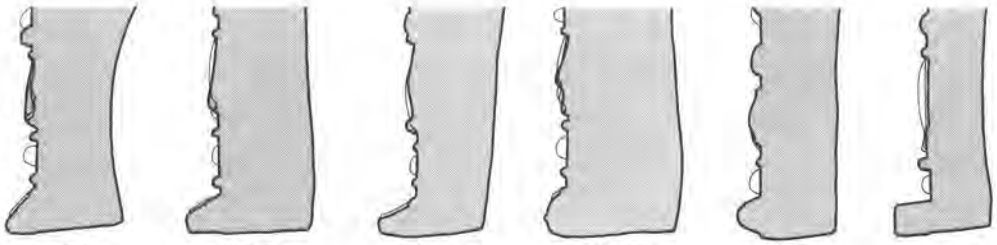


Fig.30　軒丸瓦の外縁形態の分類

（1）　毛利光俊彦・花谷浩「平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」（『平城宮報告XIII』1991年）251～342頁。

見られる。丸瓦部凸面と瓦当裏面はタテ方向のナデ調整。接合部内面に工具による押圧調整痕が残る。やや軟質で、灰黒色を呈するものが多い。

6133型式　間弁がなく、外区内縁に珠文をめぐらす。外区外縁は素文である。A種7(3)点、C種1(1)点、D種1(0)点、N種16(11)点、O種1(0)点、P種4(0)点が出土した。このうちA・C・Oの3種は外区を内外縁を分ける圏線をもつが[1]、D・N・Pの3種は欠く。**A種**は、中房蓮子が1＋5、周囲に12弁の蓮弁を配する。外縁は厚手の傾斜縁Iである。軟質で灰黒色を呈する。**C種**は中房蓮子が1＋6で、13弁の蓮弁をもつ。外縁は厚手の傾斜縁I。丸瓦部は、凸面をタテ方向にヘラケズリし、凹面から瓦当接合部にかけてタテ方向のナデ調整を施す。接合粘土の部分には、指ないし工具による押圧調整痕が残る。瓦当裏面はやや中くぼみとなり、ナナメ方向のヘラケズリ調整。下半部は円周に沿ってヘラケズリを行う。いくぶん軟質で、灰白〜灰黒色を示す。**D種**は、1＋6の蓮子をおく中房の外側に、16弁の蓮弁を配する。外縁は厚手の傾斜縁I。瓦当裏面は中くぼみとなる。比較的硬質で淡灰色を示す。**N種**は、中房蓮子が1＋4、蓮弁数は16である。外縁は高い直立縁II。丸瓦部の凸面はタテ方向のヘラケズリ、凹面から瓦当裏面にかけてはタテ方向のナデ調整を施す。瓦当裏面下半部の円周に沿って、ヘラケズリを行うものもみられる。やや軟質で、灰白〜灰黒色を呈する。**O種**は中房蓮子が1＋6、12弁の蓮弁をもち、外縁は傾斜縁Iである。瓦当は厚く、軟質で灰白〜灰黒色を示す。**P種**は、中房蓮子が1＋4で、蓮弁数は16。外縁は直立縁IIである。丸瓦部凸面はタテ方向のヘラケズリ、凹面はタテ方向のナデ調整を施す。瓦当裏面は不定方向のナデ調整を行うものと、タテ〜ナナメにヘラケズリするものとがある。比較的硬質で、灰〜灰白色を呈する。

6134型式　間弁をもち、外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をめぐらす。**Aa種**1(1)点が出土。1＋8の蓮子をおく中房の周りに、12の蓮弁を配する。外縁は厚みのある傾斜縁Iである[2]。瓦当裏面はやや中くぼみとなり、タテ〜ナナメ方向のヘラケズリ調整。下半部は円周に沿ってヘラケズリする。文様の地と同じ高さに笵端の痕跡が残る。硬質で淡灰色を示す。

II　複弁蓮華文軒丸瓦（奈良時代）

6225型式　外区内縁を圏線文とし、外縁に凸鋸歯文をめぐらす。大きめの中房内部に1＋8の蓮子をおき、まわりに8弁の蓮弁を配する。A種16(6)点、E種1(1)点が出土。**A種**は、弁区の地が盛り上がり、弁端が尖る。外縁は傾斜縁Iで、平坦面の幅が広い。横置きの成形台を使用し、粘土の積み上げによって瓦当部をつくる成形台一本造りである。瓦当と丸瓦の接合痕跡がなく、積み上げた粘土が水平方向に剥離した状況を示す（PL.35）。丸瓦部外面はタテ方向のナデ調整、瓦当裏面にはタテまたはヨコ方向のナデ調整を行う。灰色の硬質のものもあるが、概して軟質で、灰白色を呈するものが多い。**E種**は、文様の地が平坦で、外縁は低く幅広い平坦面をもつ直立縁IIである。本例は下半部の破片であるが、他の資料でも丸瓦の接合痕跡はなく、A種と同じ製作技法が推定されている（『平城宮報告XIII』274頁）。瓦当表面には、笵詰め以前についた布目が残る。他にも同様の例がみられることから、この種の軒丸瓦の製作技法における特徴を示すものかもしれない。硬質で灰〜灰黒色を呈する。

積み上げによる瓦当の成形

瓦当表面の布目

(1)　西隆寺調査委員会『西隆寺発掘調査報告』1976年（以下『西隆寺報告』と略記）では、O種について「外区内外縁の圏線をもたず高い直立縁」とする（33頁）が、誤りである。

(2)　『平城宮報告XIII』では、「直立縁に近」いとしている（263頁）。

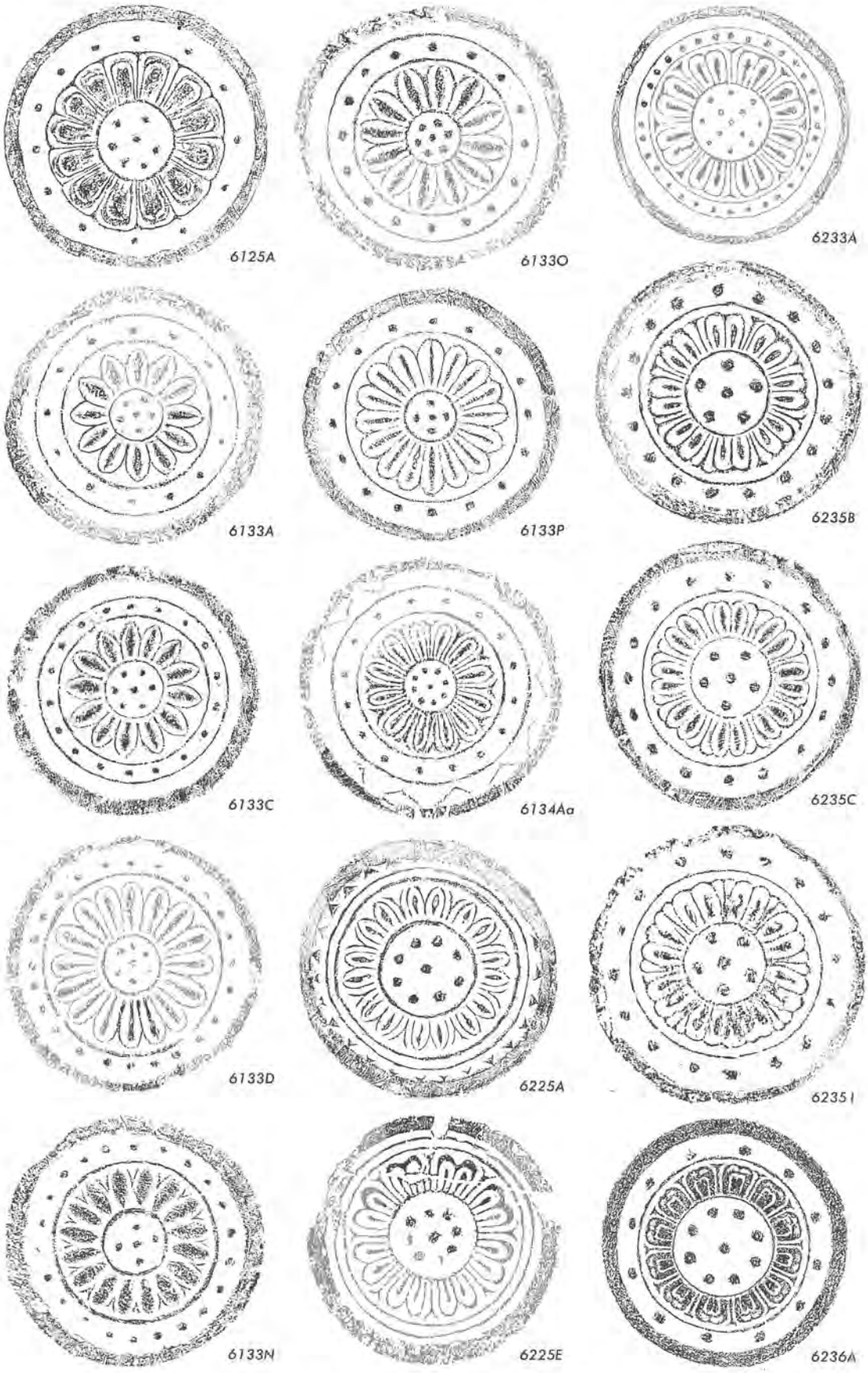


Fig. 31　軒丸瓦拓影 1

6233型式　中房内部に１＋４＋８の蓮子をおき、まわりに８弁の蓮弁を配する。外区内縁は珠文、外縁は素文である。**A種**１（１）点が出土。外縁は傾斜縁Ｉで、上部の平坦面はケズリ調整による。丸瓦の接合はかなり深く、凸面にタテ方向のヘラケズリないしナデ調整を施す。灰赤褐色を呈し、ごく硬質である。藤原宮式。

西隆寺で最も多い軒丸瓦

6235型式　いわゆる東大寺式の軒丸瓦である。低い中房のまわりに８弁の蓮弁をおき、外区内縁は珠文、外縁は素文となる。Ｂ種１（１）点、Ｃ種111(62)点、Ｉ種25(11)点が出土している。あわせて型式の判明する軒丸瓦の46.2％（軒丸瓦総数の40.7％）に達し、群を抜いた数量を示す。**B種**は、中房蓮子が１＋５で、蓮弁の照りむくりが大きい。中房の地は外区内縁に比べて高く、外縁は直立縁Ｉである[1]。丸瓦部凸面にタテ方向のヘラケズリ、凹面から瓦当裏面上半にかけてはタテ方向のナデ調整を施す。瓦当裏面下半の外周部はヘラケズリ、その内側はヨコ方向のナデ調整である。比較的硬質で、灰黒～灰赤褐色を呈する。**C種**は、ふくらみをもった中房内部に１＋５の蓮子をおく。外縁は直立縁Ｉである。丸瓦部凸面の調整は、タテ方向のヘラケズリ。丸瓦部凹面から瓦当裏面にかけては、タテ方向のナデ調整を施すものがほとんどだが、瓦当裏面を不定方向に細かくヘラケズリするものもある。また、瓦当裏面が中くぼみとなる例もみられる。文様の地と同じ高さに笵端痕跡が残るが、笵端の後方が一段下がるものも存在することから、枷型の使用が想定される（PL.35）。概して軟質であり、灰白～灰黒色を示す。軒丸瓦の中では出土量が最も多く、型式・種の判明する軒丸瓦の37.8％（軒丸瓦総数の32.7％）を占める。Ｉ**種**[2]は、Ｃ種と同じくふくらみのある中房内部に１＋５の蓮子をおき、外縁も直立縁Ｉで共通する。外区内縁の幅はＣ種に比べて広く、珠文帯の地が盛り上がる。また蓮弁は子葉と弁端が高く突出し、間弁は小さめである。調整手法はＣ種と一致しており、同様に笵端痕跡を残す例が認められる。灰白～灰黒色を示し、軟質である。

6236は6235に後出する型式

6236型式　基本的な文様構成は6235型式に近いが、子葉を分ける弁中央の界線をもたず、また蓮弁数も８弁以外のものを含む。Ａ種４（２）点、Ｄ種10（７）点、Ｆ種25(14)点、Ｈ種１（１）点が出土。**A種**[3]は、径の大きな中房内部に１＋８の蓮子をおき、まわりに12弁の蓮弁を配する。蓮弁の盛り上がりが大きく、外縁は直立縁Ｉ。西隆寺から出土した資料は、いずれも笵全体が西大寺塔の創建に伴う同笵例にくらべて著しく摩耗している。ただし、西大寺からは同程度に摩耗が進んだものも出土しているので、そうした製作時期の遅れる一群が両方へ供給されたことがうかがえる。文様の地と同じ面に笵端痕跡が残り、丸瓦部凸面はタテ方向のヘラケズリののち、瓦当近くをヨコ方向にハケメ調整するのが特徴的である（PL.35）。この技法は、西大寺から出土する同笵資料のうち笵の摩耗が進んだものにも認められるが、一方、笵が摩耗していないものでは観察されない。丸瓦部凹面から瓦当裏面にかけては、不定方向のナデ調整を行う。比較的硬質のものと軟質なものがあり、灰黒～灰白色を呈する。**D種**は、やや中高の中房内部に１＋７の蓮子をおく。蓮弁は８弁であるが、平板で線的な表現となる。外区内縁は珠文、外縁は素文の直立縁Ⅱである。瓦当裏面には、不定方向のナデ調整を施す。灰～暗灰色の硬質のものと、灰白～灰黒色の軟質なものとがある。**F種**は、中央が盛り上がった中房内部に１＋６の蓮子を配する。蓮弁は９弁となり[4]、一段低くした中心部に子葉を近接して並べる。外区内

（１）『平城宮報告XIII』では、傾斜縁Ｉとする（255頁）。
（２）『西隆寺報告』では6235Cと混同している。
（３）『西隆寺報告』で6236Eとしたものは、6236Aである。
（４）『西隆寺報告』は10弁とする。９弁が正しい。

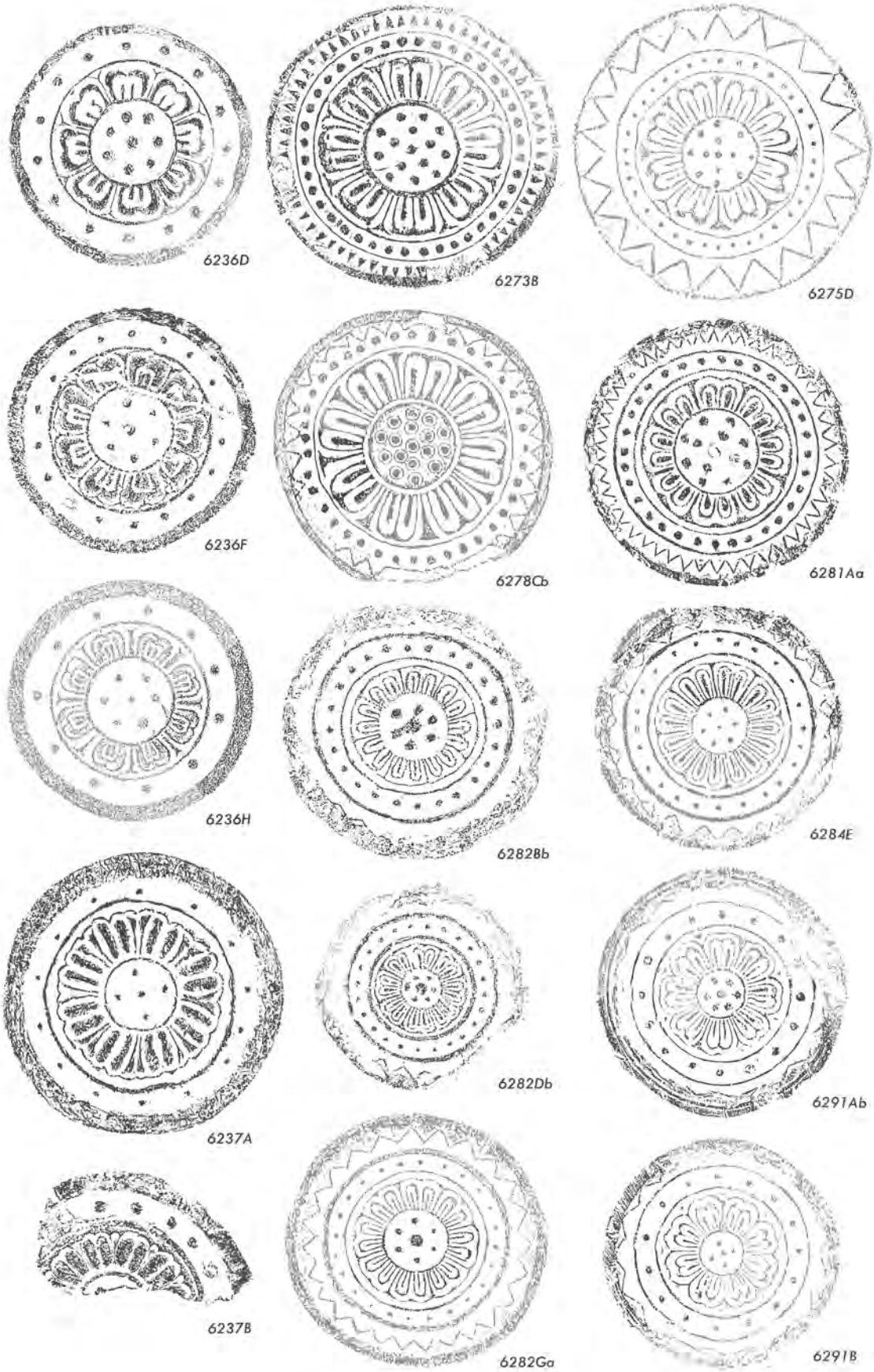


Fig. 32　軒丸瓦拓影 2

縁は珠文、外縁は素文の直立縁Ⅱであるが、高さは比較的低い[1]。文様の地と同じ高さに笵端痕跡が残る（PL.35）。丸瓦部の凸面はタテ方向のヘラケズリ、凹面から瓦当接合部にかけてはタテ方向のナデ調整を施す。瓦当裏面は不定方向のナデ調整。概して軟質なものが多く、灰黒～灰白色を呈する。**H種**は、平坦な中房に１＋６の蓮子をおき、まわりに８弁の蓮弁を配する。蓮弁の盛り上がりが大きく、Ａ種に似るが、外側の珠文帯の幅が広い。外縁は素文の直立縁Ｉである。軟質で淡灰黒色を呈し、胎土・焼成ともに西大寺出土資料と近似している。

6237型式　外区内縁に珠文をおき、外縁は素文とするが、内区の蓮弁は子葉が退化して全体に長くふくらんだ形状となる。Ａ種10（９）点、Ｂ種１（１）点が出土。Ｂ種は、食堂地区の調査で出土した新種である。**Ａ種**は、中房蓮子が１＋４、８弁の蓮弁をもつ。外縁は直立縁Ⅱ。蓮子・外区珠文および内外区を分ける圏線が細いものと、太くなったものの二種類があるが、笵に手を加えたものかどうかは不明。前者が４点、後者が３点あり、ほかに判別しがたいものが３点ある。丸瓦部凸面はタテ方向のヘラケズリ、凹面から瓦当裏面にかけてはタテ方向のナデ調整を行う。文様の地と同じ高さに笵端痕跡が残り、その後方に枷型の木目が観察される例がある（PL.35）。焼成は甘く、灰褐～灰黒色を呈する。**Ｂ種**は上半部のみの破片であるが、中房に推定１＋４の蓮子をおき、まわりに10～12弁の蓮弁を配する。外縁は直立縁Ⅱである。丸瓦部凸面にタテ方向のヘラケズリを施す。やや軟質で、灰白色を呈する。

6273～6281は藤原宮式

6273型式　内区に８弁の蓮弁をおき、外区内縁を珠文、外縁を凸鋸歯文とする藤原宮式の軒丸瓦である。**Ｂ種**３（２）点が出土。突出した中房内部に１＋５＋９の蓮子を配する。外縁は三角縁である。文様の地と同じ高さに笵端痕跡が残り、その後方に枷型の「あたり」がある（PL.35）。丸瓦と瓦当の接合部の内外面には、指頭押圧調整を施す（PL.35）。灰色の硬質なものと、軟質で灰黒色のものとがある。

6275型式　内区に８弁の蓮弁をおき、外区内縁に珠文、外縁に粗い線鋸歯文をめぐらす。藤原宮式。**Ｄ種**２（１）点が出土している。突出した中房に１＋４＋８の蓮子を配し、外縁は傾斜の緩い三角縁である。瓦当は薄手で、裏面にナナメ方向のナデ調整を施す。硬質で灰色を呈する。

6278型式　扁平な内区に８弁の蓮弁をおき、外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をめぐらす。藤原宮式。**Cb種**１（０）点が出土している。Ca種の蓮子・珠文を深く彫り込んで立体的にしたもの。低く突出した中房に１＋６＋10の蓮子を配し、外縁は傾斜縁Ｉである。瓦当裏面にナナメ方向のナデ調整を行う。ごく硬質で、灰～灰赤褐色を呈する。

6281型式　内区に８弁の蓮弁をおく藤原宮式であるが、間弁は独立せずに界線状に蓮弁の周囲を囲む。外区内縁は珠文、外縁は細かい線鋸歯文である。**Aa種**１（０）点が出土。突出した中房内部に１＋４＋８の蓮子を配し、外縁は三角縁である。文様の地と同じ高さに笵端痕跡が残る（PL.35）。丸瓦部の凸面調整は、タテ方向のヘラケズリとナデの併用。凹面は瓦当寄りの部分にタテ方向のナデ調整を施す。丸瓦部の成形は粘土紐を用いており、凹面の継ぎ目にヨコナデを加える。瓦当裏面の下半は不定方向のナデののち、タテ方向のヘラケズリ調整。ごく硬質で、灰～暗灰色を呈する。

6282型式　文様の基本的な構成要素は6281型式と共通するが、中心を囲む中房蓮子が一重と

（１）『平城宮報告XIII』は、6236Ｆと次に述べる6237Ａが、ともに外縁上面をヘラケズリするとしている（256頁）が、筆者の観察ではそうした調整痕跡は認められない。笵自体がこうした面を有していたとみるべきである。

なる。Bb種3(1)点、Db種2(2)点、Ga種1(1)点が出土。**Bb種**は、摩滅したBa種の内区文様に手を加えたもの。中房蓮子は1＋6で、中心のものが大きい。外縁は厚みのある傾斜縁Ⅰである。接合粘土がごく厚く、瓦当裏面の丸瓦の取り付き部分内側が台形を呈する。軟質で灰黒～灰白色を示す。**Db種**は小型品。中房蓮子は1＋6で、中心の蓮子が大きい。外縁は厚みのある傾斜縁Ⅰである。Da種の蓮弁を彫り込んだため、中房の外周部が周環状にくぼむ。丸瓦部凸面にはタテ方向のヘラケズリを施す。やや軟質で灰白～灰黒色を呈する。**Ga種**は全体に中高である。中房の蓮子は1＋6で、やはり中心のものが大きい。外縁は厚みのある傾斜縁Ⅰ。軟質で黄灰色を呈する。

6284型式　6282型式とよく似た文様であるが、中心の蓮子が小さい。**E種**1(0)点が出土[1]。突出した中房内部に1＋6の蓮子をおき、外縁は傾斜縁Ⅱである。文様の地と同じ面に笵端痕跡が残る。瓦当裏面はナナメ方向のナデ調整。比較的硬質で、内部は暗灰～灰白色であるが、表面は燻し焼きにより黒色を呈する。なお、6284Eの中房中心蓮子を大きく彫り直したものが、6282Faであることが明らかになっている[2]。したがって、中心蓮子の部分を欠く本例については、6282Faの可能性もあるわけだが、表面を黒く燻焼する手法は、平城宮第一次大極殿第Ⅰ期に認められる特徴である[3]。よって、この点から6284Eとみてよい。

6291型式　内区に8弁の蓮弁をおき、外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をめぐらす。間弁は界線状につながって蓮弁の周囲を囲む。A種2(1)点、B種1(0)点が出土している。**A種**のうち1(0)点はAb種であり、もう1点はAa・Abの区別が不明。直径に比して厚めの瓦当を有する。小型の凸中房の内部に1＋6の蓮子を配し、内区の地が全体に盛り上がる。外縁は傾斜縁Ⅲで、頂部に1条の凸線をもつ。瓦当裏面はタテ～ナナメ方向のヘラケズリ。灰白色を呈し、比較的硬質である。**B種**[4]は、中房蓮子が1＋4で、A種にくらべると文様が平板である。外縁は厚手の傾斜縁Ⅰ。丸瓦部凸面はタテ方向のヘラケズリを施し、瓦当寄りに一部ヨコ方向のヘラケズリを加える。瓦当接合部の凹面は、不定方向のナデ調整。硬質で淡灰色を呈する。

6301型式　いわゆる興福寺式の軒丸瓦である。内区に照りむくりのある8弁の蓮弁をおき、間弁は独立する。外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をめぐらす。B種1(1)点、C種1(1)点が出土している。**B種**は中房蓮子が1＋5＋9で、外縁は傾斜縁Ⅰ。丸瓦部の凸面にタテ方向のヘラケズリを施し、凹面はタテ方向のナデ調整を行う。比較的硬質で、淡橙灰色を呈する。**C種**は中房蓮子が1＋5＋10、外縁は同じく傾斜縁Ⅰである。丸瓦部は凹凸両面にタテ方向のナデ調整を施す。淡青灰色を示し、ごく硬質である。

6304型式　小さな凸中房に1＋6の蓮子をおき、まわりに8弁の蓮弁を配する。間弁は界線状に蓮弁を囲む。外区内縁に珠文、外縁に粗い線鋸歯文をめぐらす。A種1(1)点、Eb種1(1)点、L種1(0)点、種別不明1(0)点が出土している。**A種**は、外縁が傾斜縁Ⅱ。軟質で灰白色を呈する。**Eb種**も外縁は傾斜縁Ⅱ。瓦当裏面下半にナナメ方向のナデ調整を施す。比較的硬質で、灰黒色（表面）～灰白色（内部）を示す。**L種**は、鳥衾としての使用が想定される大型品である。やはり外縁は傾斜縁Ⅱ。外縁の上端から約8㎜の位置に笵端痕跡があり、そ

鳥衾用の大型品

(1)『西隆寺報告』では6284Cとするが、6284Eが正しい。
(2) 佐川正敏ほか「平城宮式軒瓦の同笵関係の調査」(『奈良国立文化財研究所年報1992』1993年。
(3) 佐川正敏「中国の軒平瓦の成形・施文技法を考える」(『日本中国考古学会会報』第2号)1992年。
(4)『西隆寺報告』で6291Aとしたものは、6291Bである。

高い位置の笵端痕跡

れより後方をタテ方向にヘラケズリする。したがって、笵端は文様の地に比べてかなり高い。瓦当裏面はナナメ方向のナデ調整。比較的硬質で、暗灰色（表面）～灰白色（内部）を呈する。

6307型式　外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をおくが、間弁をもたない。**D種**1（0）点が出土。直径が小振りな反面、瓦当は分厚い。中房蓮子は1＋4、蓮弁は8弁で線的な表現となり、中心に向って高まる。外縁は傾斜縁Ⅰ。横置きの成形台を使用し、瓦当部の粘土を積み上げた一本造りである。瓦当裏面は無調整で、成形台にかぶせた布目が残り、粘土の積み上げ痕跡が認められる（PL.35）。ごく硬質で、青灰色を呈する。

6308型式　低く突出した中房のまわりに8弁の蓮弁をおき、外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をめぐらす。間弁は独立する形式である。B種1（0）点、C種2（1）点が出土。**B種**[1]は、中房蓮子が1＋6、外縁は低い傾斜縁Ⅱである。丸瓦の接合痕跡がなく、積み上げた粘土が剝離した状況を示す。横置きの成形台を使用した一本造りと考えられる。丸瓦部凸面にタテ方向、凹面にタテ～ナナメ方向のナデ調整を行う。比較的硬質で、淡灰色を呈する。**C種**は、中房蓮子が1＋6、外縁は傾斜縁Ⅱであるが、上部の平坦面の幅が広い。弁央と間弁の外側に楔形の突起を有する。丸瓦部凸面はタテ方向のヘラケズリ、凹面から瓦当裏面にかけてはタテ方向のナデ調整を施す。断面に丸瓦を接合した痕跡がなく、B種と同様の成形台一本造りと推定される。ただし粘土の積み上げ痕跡は認められない。淡灰～淡灰褐色を示し、比較的硬質である。

6311型式　6308型式によく似るが、中房が突出せず、圏線で画される。また、概して蓮弁の照りむくりが大きく、外区の珠文と線鋸歯文が細かい。Ba種2（1）点、F種2（2）点が出土。**Ba種**は、中房蓮子が1＋6、外縁は高い傾斜縁Ⅱである。丸瓦部外面にタテ方向のヘラケズリないしナデ、凹面にタテ方向のナデ調整を施す。軟質で、灰白～灰褐色を呈する。**F種**は、外区の珠文と線鋸歯文が粗く、6308型式に近い。中房蓮子が1＋6、外縁は傾斜縁Ⅱである。丸瓦部から瓦当にかけての部分が分厚く、積み上げた粘土が剝離したものがみられる。横置きの成形台を使用した一本造りであろう。比較的硬質で、灰褐～淡灰色を示す。

6313型式　甍棟所用と考えられる小型の軒丸瓦である。中房に大粒の蓮子を1個おき、まわりに4弁の蓮弁を配する。外区内縁は珠文、外縁は線鋸歯文である。Aa種2（1）点、H種2（1）点が出土。**Aa種**は間弁が独立し、外縁は傾斜縁Ⅱである。青灰色の硬質のものと、黄灰色の軟質のものとがある。**H種**[2]は、間弁が連続した界線状となって蓮弁を囲む。外縁は厚手の傾斜縁Ⅰで、上端に1条の凸線がめぐる。また、文様の地と同じ高さに笵端痕跡が残る。丸瓦部凸面はタテヨコ両方向のナデ、瓦当裏面はナナメ方向のナデ調整が施される。淡灰～暗灰色を示し、比較的硬質である。

甍棟所用の小型品

6316型式　間弁と蓮弁中央の凸線がなく、分離した子葉を輪郭線で囲む。**K種**[3]3（2）点が出土。圏線で区画した中房内部に1＋8の蓮子をおき、まわりに9弁の蓮弁を配する。外区内縁は珠文、外縁は線鋸歯文であるが、外縁形態が直立縁Ⅱのため、後者は不明瞭である。丸瓦部凸面にタテ方向のヘラケズリを施す。淡灰色の比較的硬質なものと、軟質で灰白～灰黒色を示すものとがある。

（1）『西隆寺報告』では6308Aとするが、6308Bが正しい。
（2）『西隆寺報告』では6314としていたもの。その後型式設定を変更した。
（3）『西隆寺報告』では6316Dbとするが、Dbは中房が突出する点で異なる。ただし、笵を彫り直した可能性がある。

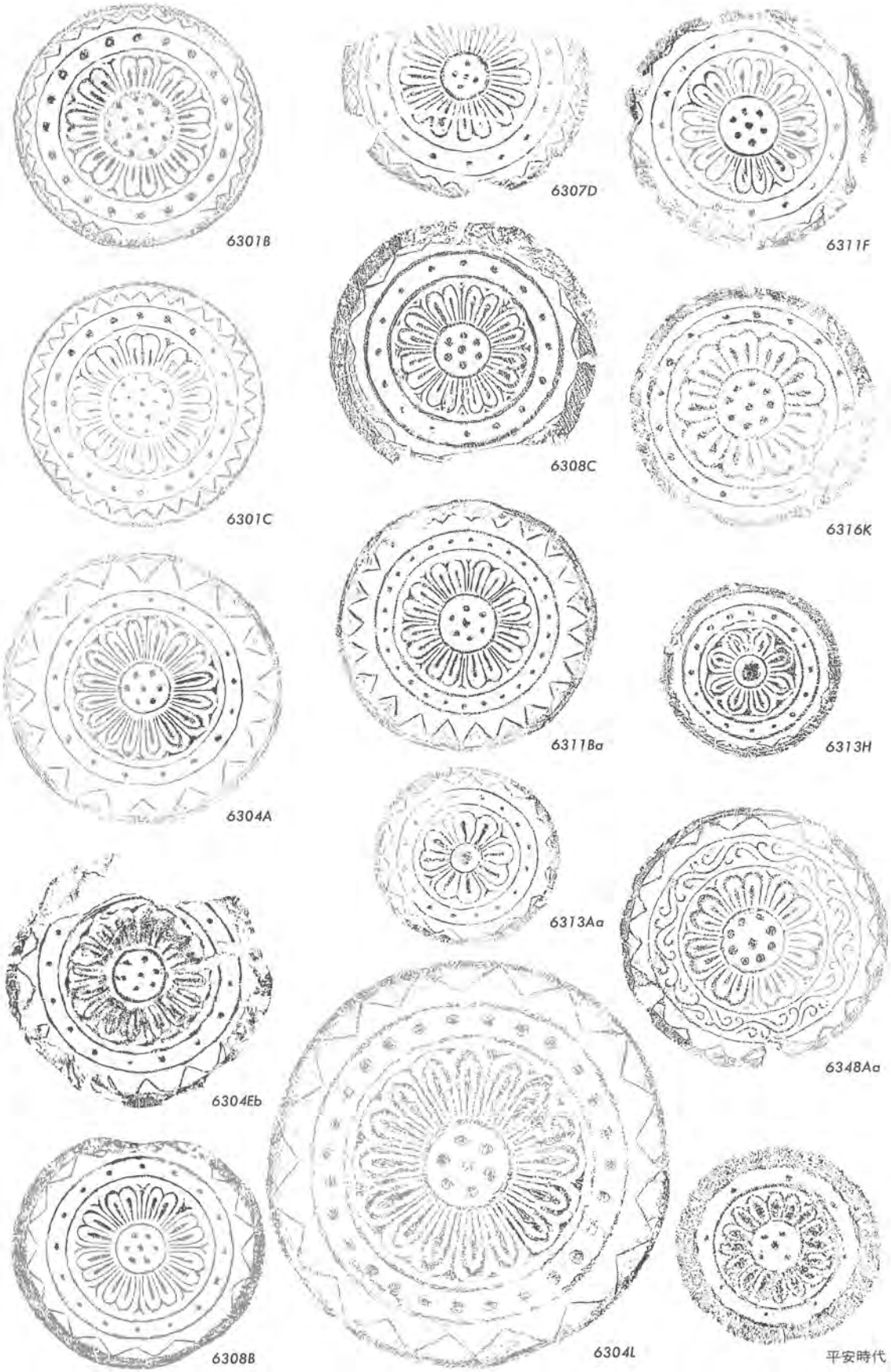


Fig. 33　軒丸瓦拓影 3

6348型式　外区内縁に唐草文、外縁に線鋸歯文をめぐらす。**Aa種**1(1)点が出土し、ほかにAa・Abの区別がつかないものが3(3)点ある。突出した中房に1＋8の蓮子をおき、まわりに7弁の蓮弁を配する。外縁は緩い傾斜縁Ⅰ。文様の地と同じ高さに、笵端の痕跡が残る(PL.35)。丸瓦部凸面はタテ方向のヘラケズリ、瓦当裏面はナナメ～ヨコ方向のナデ調整を行う。暗灰～灰褐色を示す硬質なものと、軟質で灰白～淡橙灰色を呈するものとがある。

Ⅲ　平安時代の軒丸瓦

平安時代前期の軒丸瓦が1(1)点出土している。圏線で囲んだ中房内部に1＋5の蓮子をおき、まわりに16弁の単弁蓮華文を配する。複弁8弁が変化したものであろう。間弁はなく、蓮弁が相互に接する。外区内縁にまばらな珠文をめぐらし、外縁は素文で、広い直立縁Ⅱである。瓦当のほぼ全周にわたって笵端痕跡が残る(PL.35)。笵端の位置は、文様の地と同じ高さである。軟質で、灰黒～灰白色を呈する。

B　軒　平　瓦 (PL.36～42, Fig.36～38)

軒平瓦は471 (218) 点出土している。このうち型式が判明するものは448(206)点あり、28型式44種に分けることができる。すべて奈良時代に属する。軒平瓦の顎形態は、段顎・直線顎・曲線顎の三つに大別されるが、軒丸瓦の外縁形態と同じく『平城宮報告報告XIII』にしたがって、以下のように分類した (Fig.34)。

顎形態の分類

段顎ⅠL　顎面と平瓦部の段差が大きく、顎の長さが瓦当の厚さを越えるもの

段顎ⅠS　顎面と平瓦部の段差が大きく、顎の長さは瓦当厚とほぼ同じかそれ以下のもの

段顎Ⅱ　顎面と平瓦部の段差が小さく、直線顎に近いもの

直線顎　平瓦部凸面から瓦当面まで直線的にのびるもの

曲線顎Ⅰ　平瓦部凸面から瓦当面まで連続した曲線をなし、明確な顎面をもたないもの

曲線顎Ⅱ　曲線顎のうち、平瓦部凸面の瓦当沿いに明確な顎面をもつもの

Ⅰ　幾何学文軒平瓦

6543型式　**A種**1(0)点が出土。笵型を用いず、瓦当面をヨコナデしたのち、ヘラによって格子文様を描く。施文順序は、右上がりの平行沈線が先、左上がりの平行沈線が後である。曲

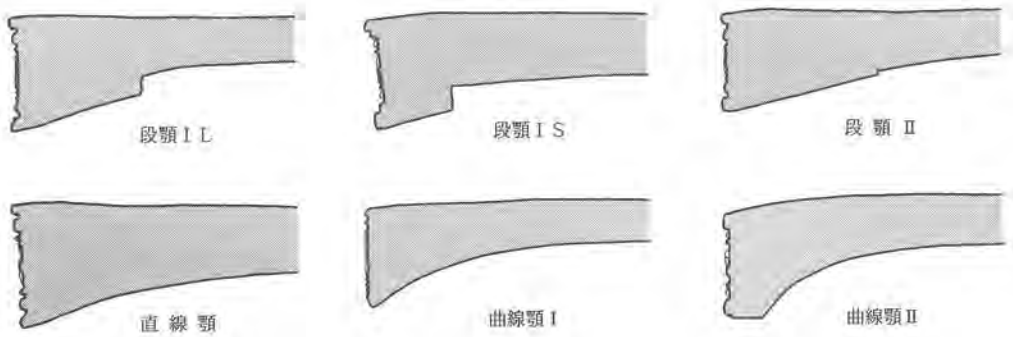


Fig. 34　軒平瓦の顎形態の分類

線顎Ⅱだが、顎面から平瓦部凸面にかけての屈曲は弱い。凸面調整はタテ方向のヘラケズリで、瓦当付近は凹凸両面にヨコ方向のヘラケズリを加える。青灰色を示し、硬質である。

Ⅱ　偏行唐草文軒平瓦

6641型式　内区に左から右へ流れる偏行唐草文をおき、上外区に珠文、下外区と脇区に線鋸歯文を配する藤原宮式。C種6(5)点、E種1(0)点が出土している。ともに平瓦の凸面に顎部の粘土を貼りつけ、次いで段を削りだした「貼りつけ削り出し段顎[1]」である。**C種**は段顎**IL**。凸面はタテ方向のヘラケズリののち、顎部とその付近にヨコ方向のナデ調整を施す。凹面調整はタテ方向のナデを主体とし、瓦当近くにヨコナデを加える。暗灰色の硬質なものと、やや軟質で灰白～灰黒色を呈するものとがある。**E種**も段顎**IL**。顎部はヨコナデ、凹面の瓦当寄りはヨコ方向のヘラケズリを施す。硬質で青灰色を呈する。

6641～6643は藤原宮式

6642型式　内区に左から右へ流れる偏行唐草文をおき、外区と脇区はいずれも珠文とする。藤原宮式。**A種**1(1)点が出土している。貼りつけ削り出しによる段顎**IL**である。顎部にヨコナデ、凹面の瓦当寄りにヨコ方向のヘラケズリを行う。比較的硬質で青灰褐色を示す。

6643型式　6642型式の内区の偏行唐草文の向きが逆転したもの。C種1(0)点、D種2(2)点が出土している。ともに貼りつけ削り出しによる段顎**IL**である。**C種**は、平瓦部がごく薄く、凸面にヨコナデ、凹面の瓦当近くにヨコ方向のヘラケズリを施す。凸面にはわずかにタテの縄叩きが残る。比較的硬質で、淡橙灰色を呈する。**D種**は、瓦当面の左端に顕著な笵割れがある。凸面調整はヨコナデ、凹面の瓦当寄りにヨコ方向のヘラケズリを行う。暗灰～灰白色を示し、比較的硬質である。

6652型式　内区に右から左へ流れる偏行唐草文をおき、外区と脇区はいずれも珠文とする。**A種**3(3)点が出土。いずれも段顎**IS**である。笵の大きさが瓦当面よりひとまわり小さく、外縁に段差を生じている。凸面はタテ方向の縄叩きののち、顎部とその付近にヨコナデを施す。凹面は全面をタテ方向にナデ調整し、瓦当近くにヨコナデを加える。側面には、成形の際の糸切痕が残る（PL.40)。比較的硬質で淡灰～灰白色を呈する。法隆寺や押熊瓦窯などから同笵資料が出土しており、顎形態は法隆寺のもの[2]が段顎**IS**、押熊瓦窯のものが直線顎である。笵傷の上では先後関係を確認できないが、前者から後者への移行が想定される。

Ⅲ　均整唐草文軒平瓦

6663型式　花頭形の垂飾りを上向きのC字形中心葉で囲む。唐草は3回反転で、外区を圏線文とする。A種15(13)点、B種2(1)点、C種15(8)点、F種1(1)点、I種1(1)点、種別不明のもの3(3)点が出土。**A種**は、顎形態を知りうる11点のうち、8点が曲線顎Ⅰ、3点が曲線顎Ⅱである。笵の大きさが瓦当面よりも小さい。凸面は、タテの縄叩きののち瓦当寄りの部分をヨコナデし、曲線顎Ⅱの資料は、さらにヨコ方向のヘラケズリを行って狭い顎面を作り出す。凹面は、タテ方向のナデにつづいて、瓦当近くにヨコナデを加える。側面に成形時の糸切痕を残すものが多い（PL.40)。また、両側縁の上端を焼成後に打ち欠く例がしばしばみ

6625と組む6663型式

(1)　奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』1978年、90頁。

(2)　法隆寺227A。毛利光俊彦・佐川正敏・花谷浩『法隆寺の至宝　瓦』（昭和資財帳15）小学館 1992年。

られる（PL.40）。A 種の曲率が大きいため、屋根を葺く際に支障となった部分を打ち欠いたものと推定される。比較的硬質で、灰～暗灰色を呈する。**B 種**は、曲線顎Ⅰと曲線顎Ⅱが１点ずつある。やはり笵の大きさが瓦当面に比べて小さい。凸面にはタテの縄叩きが残り、瓦当寄りの両面をヨコナデする。淡灰色の比較的硬質のものと、軟質で灰白色を示すものとがある。**C 種**は、Cb と確定できるのは３点にすぎないが、顎形態を知りうるものは全て曲線顎Ⅱであることから、いずれも Cb と推定される。凸面は、タテの縄叩きののち瓦当寄りをヨコナデし、ヨコ方向のヘラケズリによって顎面を形成する。凹面には、広くヨコナデ調整を施す。側縁の上端を焼成後に打ち欠き、凹面に凸型台の木目を残す例がある（PL.40, Fig.35）。この木目がヨコナデ調整の上に重複することから、まず凸型台上で成形したのち、おそらく凹型台を用いて凹面調整を行い、再度凸型台の上にのせたものと推定される。凸面ないし側面の調整のためであろう。灰～暗灰色の比較的硬質なものと、灰白色の軟質なものがあるが、後者が多い。**F 種**は、幅約1.4㎝と比較的広い顎面をもつ曲線顎Ⅱ。凸面調整は、瓦当からやや離れた位置にタテ方向のナデ、瓦当近くにヨコナデを施し、ヨコ方向のヘラケズリによって顎面を作り出す。凹面の瓦当寄りは、ヨコ方向のヘラケズリ。比較的硬質で灰白～灰黒色を呈する。**I 種**は直線顎である。凸面はタテ方向の縄叩きののち、瓦当寄りの部分をヨコナデする。凹面は、瓦当近くにヨコ方向のヘラケズリを施す。側面に凸型成形台の立ち上がりの端部があらわれており、成形が一枚作りによることを明瞭に示している。成形台の幅が瓦の幅に比べてやや小さいために、段差が生じたものである。軟質で灰黒色を示す。

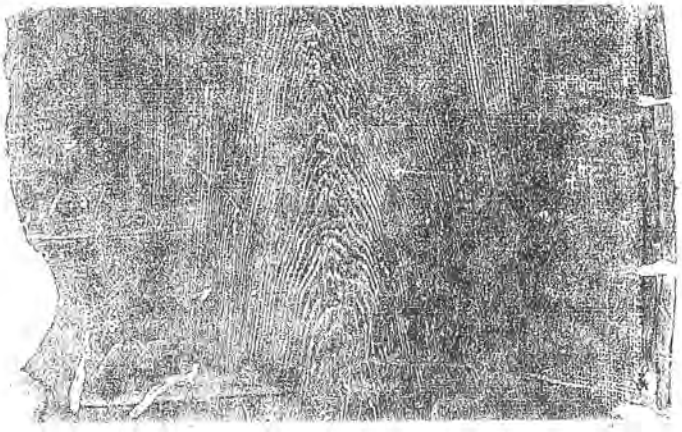


Fig. 35　6663Cの凹面拓影　1：3

凸型台の木目痕

6664型式　内区文様は6663型式と共通するが、外区を珠文とする。C 種７（６）点、D 種１（０）点、Ga 種１（１）点、I 種１（０）点、K 種２（１）点、種別不明２（１）点が出土している。いずれも、笵の大きさが瓦当面よりも小さい。**C 種**は段顎 IL。側面に糸切痕の残る例があり（PL.40）、この個体は、平瓦部の厚さが中央部で薄く、側縁に近い部分で厚くなっている。糸切痕の存在とあわせて、製作が一枚作りによることを示すものとみられる。凸面の平瓦部にはヨコの縄叩きが行われており、顎部付近をヨコナデする。凹面はヨコ方向のヘラケズリ調整。やや軟質で、内部は灰白色だが、表面は炭素の吸着により黒～灰黒色を呈する。**D 種**は段顎 IS であり、顎部にはヨコナデを行う。軟質で灰白色を示す。**Ga 種**は、段顎 IL である。瓦当厚はほぼ一定だが、C 種と同様に平瓦部が中央で薄く、両側縁に近い部分で極端に厚くなる。一枚作りであろう。本例の側面調整はヘラケズリであるが、平城宮第一次大極殿院出土の同笵例では側面に糸切痕を残している[(1)]。平瓦部凸面はヨコ方向の縄叩きで、顎部付近にヨコナデを施す。凹面はヨコ方向のヘラケズリ調整。やや軟質で、灰白色を示す。**I 種**は顎部が剝離する

（1）『平城宮報告Ⅻ』に指摘がある（306頁）。

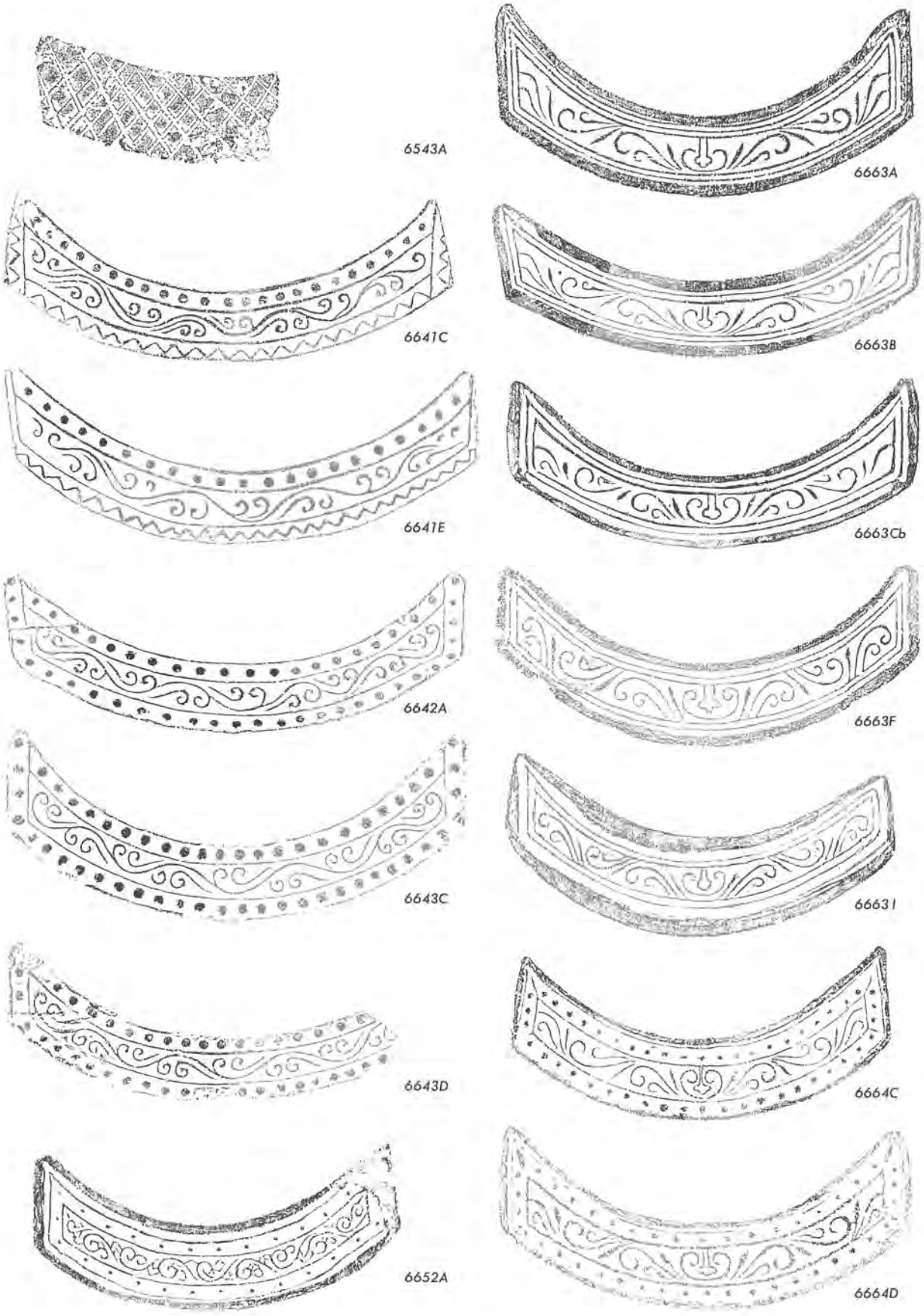


Fig. 36　軒平瓦拓影 1

が、段顎IL であろう。凹面の瓦当付近をヨコ方向にヘラケズリする。模骨痕がわずかに残っており、桶巻作りと考えられる。京都府木津町の瀬後谷遺跡から同笵例が出土しているが、その製作は粘土紐桶巻作りによっている[1]。灰白～灰黒色を呈し、軟質である。**K 種**も段顎IL。顎部は剝離しているが、剝離面に糸切痕が認められるものがある。本例では不明であるが、平城宮出土の同笵資料には明確な模骨痕をもつ例があり、粘土板桶巻作りと推定される。やや軟質で、灰白～灰黒色を示す。

6665型式　6664型式に類似するが、唐草文第3単位の主葉が巻き込み、脇区界線に取りつかない。**A 種**1(0)点が出土。段顎IL である。笵の大きさが瓦当面よりも小さい。平瓦部凸面はヨコ方向の縄叩きを行い、顎部をヨコナデする。凹面はナナメ方向のナデ調整で、瓦当付近にヨコ方向のヘラケズリを加える。灰色を呈し、比較的硬質である。

6668型式　6664型式に似るが、やや小型で、中心飾りの花頭形の両端が尖る。**A 種**2(0)点が出土。段顎IL である。笵の大きさが瓦当面よりも小さい。平瓦部凸面は細かいタテの縄叩きを行い、顎部をヨコナデする。凹面にはヨコ方向のヘラケズリを施す。暗灰色を示し、ごく硬質である。同笵資料が京都府瀬後谷遺跡から出土しているが、それらは粘土紐桶巻作りによる。左右の唐草文第1単位に笵割れを生じたものと、それがないものの二種類があるが、本例は瓦当遺存部がちょうど二つの笵割れにはさまれた部分に一致し、前者の段階と考えられる。

6675型式　「个」字形を上向きの中心葉で囲む。唐草は4回反転で、上外区に珠文、下外区と脇区に線鋸歯文を配する。**A 種**1(1)点が出土。段顎IL である。顎部にヨコナデ、凹面は瓦当寄りの部分にヨコ方向のヘラケズリを施す。暗灰色を呈し、ごく硬質である。

6681型式　中心の垂飾りの縦線が1本で、外区を圏線文とする。唐草は3回反転。**B 種**[2] 2(1)点が出土している。直線顎である。笵の大きさが瓦当面よりかなり小さく、外縁に明瞭な段差を有する。凸面はタテ方向のナデ調整で、瓦当近くに一部ヨコナデを加える。凹面はヨコ方向のヘラケズリ。淡灰褐色の比較的硬質のものと、軟質で灰白色を呈するものとがある。

6682型式　内区文様は6681型式と共通するが、外区を珠文とする。**A 種**1(1)点が出土。段顎IS である。笵の大きさが瓦当面よりも小さい。顎部にヨコナデ、凹面にヨコ方向のヘラケズリを施す。暗灰色を示し、比較的硬質である。

6685型式　文様構成は6682型式に近いが、小型で、唐草文の第3単位がともに脇区界線に取りつく。B 種[3] 1(0)点、C 種3(3)点が出土。**B 種**は段顎IS。平瓦部凸面はタテの縄叩きを行い、顎部にヨコ方向のナデないしヘラケズリを施す。凹面はヨコ方向のヘラケズリ調整。比較的硬質で、灰色を呈する。**C 種**も段顎IS である。笵の大きさが瓦当面よりも小さい。平瓦部凸面はタテの縄叩きで、顎部にヨコナデを加える。凹面はナデ調整。側面に糸切痕が残る例がみられる。淡灰色の比較的硬質のものと、軟質で灰白～灰黒色を示すものとがある。

壹棟所用の小型品

6691型式　花頭形垂飾りの軸部が1本となる4回反転の均整唐草文。A 種4(2)点、D 種1(1)点が出土している。**A 種**は曲線顎II。笵の大きさが瓦当面よりも小さい。顎面の幅が約7㎜と狭いものと、15㎜ほどの広いものがある。前者の凸面調整はタテ方向のヘラケズリで、ヨ

(1)『木津町瀬後谷遺跡』京都府埋蔵文化財調査研究センター現地説明会資料　No.91－13　1991年。石井清司氏のご厚意により、後述の6668A とあわせて実見の機会を得た。

(2)『西隆寺報告』では6681A とするが、6681B が正しい。

(3)『西隆寺報告』では6685A とするが、6685B が正しい。

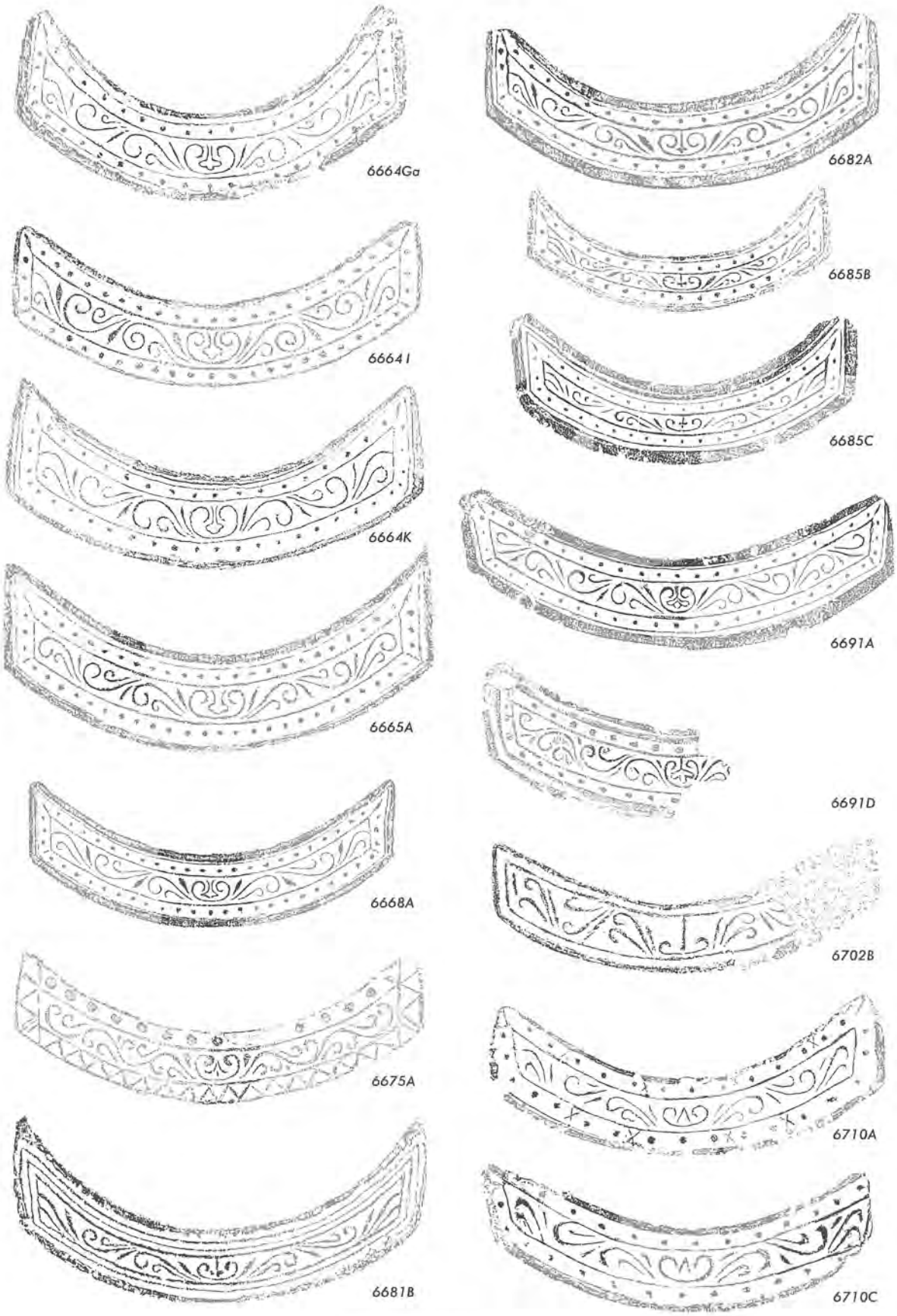


Fig. 37　軒平瓦拓影 2

コ方向のヘラケズリにより顎面を作り出す。凹面はヨコ方向のナデ調整。後者は平瓦部凸面にタテの縄叩きを行ったのち、タテ方向のナデ調整を施し、さらに瓦当寄りに広くヨコナデを加える。凹面はヨコ方向のヘラケズリである。青灰色の硬質のものと、軟質で灰白～灰褐色を呈するものがみられる。**D種**は瓦当中央部の小片である。硬質で淡灰色を示す。

6702型式　内区文様は6681型式に近いが、外区の圏線文を欠く。また唐草文の第3単位は、主葉と第1支葉がともに巻き込んで、脇区界線に取りつかない。**B種**1(1)点が出土。きわめて顎面の広い曲線顎Ⅱである。凸面はタテの縄叩きの後、タテ方向のヘラケズリを施し、さらにヨコ方向のヘラケズリを加えて顎面を作り出す。凹面は、瓦当寄りの部分にヨコ方向のヘラケズリを行う。比較的硬質で淡灰色を呈する。

6710型式　逆V字形を上向きの中心葉で囲む中心飾りをもつ。唐草は3回反転で、外区を珠文とする。A種5(4)点、C種3(0)点が出土。**A種**は、上外区と下外区の珠文の間に、各4個の「×」を入れる。直線顎である[(1)]。凸面はタテ方向のヘラケズリののち、瓦当寄りの一部にヨコナデを加える。凹面はヨコ方向のヘラケズリ調整。比較的硬質で、灰黒色～淡灰色を示す。**C種**も直線顎。摩滅のため不明瞭であるが、凹凸両面の瓦当近くにヨコ方向の調整を加える。灰白～淡灰黒色を呈し、軟質である。

6721型式　「小」字形の三葉文を、左右に分離した中心葉が囲む中心飾りをもつ。唐草は5回反転で、外区に細かい珠文を配する。C種7(3)点、D種3(0)点、Gb種3(2)点、Hb種2(1)点、種別不明2(2)点が出土している。**C種**は曲線顎Ⅱ。外縁の外側の凹凸両面に笵端痕跡が認められ、瓦当面に笵押捺以前の細かい布目が残る例がある(PL.40)。笵端の位置は、文様の地と一致する。凸面はナナメの縄叩きののち、タテ方向のナデまたはヘラケズリを加え、さらにヨコ方向のヘラケズリによって顎面を作り出す。凹面はヨコ方向のナデないしヘラケズリ調整。側面に、凹面から連続する布目を残す例がみられる(PL.40)。暗灰色の比較的硬質なものと、軟質で灰白～灰黒色を示すものがある。**D種**も曲線顎Ⅱである。C種に比べて顎面の幅が広い。同じく外縁の外側の凹凸両面に、文様の地と同じ高さで笵端痕跡が認められる(PL.40)。凸面はタテ方向のヘラケズリで、顎面と凹面の瓦当近くはヨコ方向のヘラケズリ調整。暗灰色の比較的硬質のものと、軟質で灰白色を呈するものがある。**Gb種**は直線顎である。凸面はタテ方向のヘラケズリが瓦当まで及ぶ。凹面の瓦当寄りはヨコ方向のヘラケズリ調整。硬質で淡灰色を示す。**Hb種**は曲線顎Ⅰ。6721Haが直線顎であるのに対し、6721Hbが曲線顎Ⅱの形態をとることが指摘されている[(2)]が、後者の中に、そうした顎面の広い曲線顎Ⅱとは別に、明確な顎面をもたない例も存在することを示すものである。凸面はタテ方向のヘラケズリ、凹面は瓦当近くにヨコ方向のヘラケズリを施す。また、凹面に文様の地と同じ高さで笵端痕跡が残る。やや軟質で灰白色を呈する。

外縁外側の笵端痕跡

6727型式　基部が連接した三葉文を上向きの中心葉で囲んだ中心飾りをもつ。唐草文は3回反転で、外区を珠文とする。**B種**3(0)点が出土。いずれも段顎**IS**である。平瓦部の凸面に、粘土を貼り足した状況がよくわかる(PL.41)。貼付粘土は中央部が薄く、側縁に近い部分で厚くなっている。側面と顎部外面に同様の糸切痕を残す例があり(PL.41)、後者は凸型台上

(1)『西隆寺報告』は、6710A・Cをともに段顎とする(38頁)が、誤りである。

(2)『平城宮報告XIII』302～303頁。

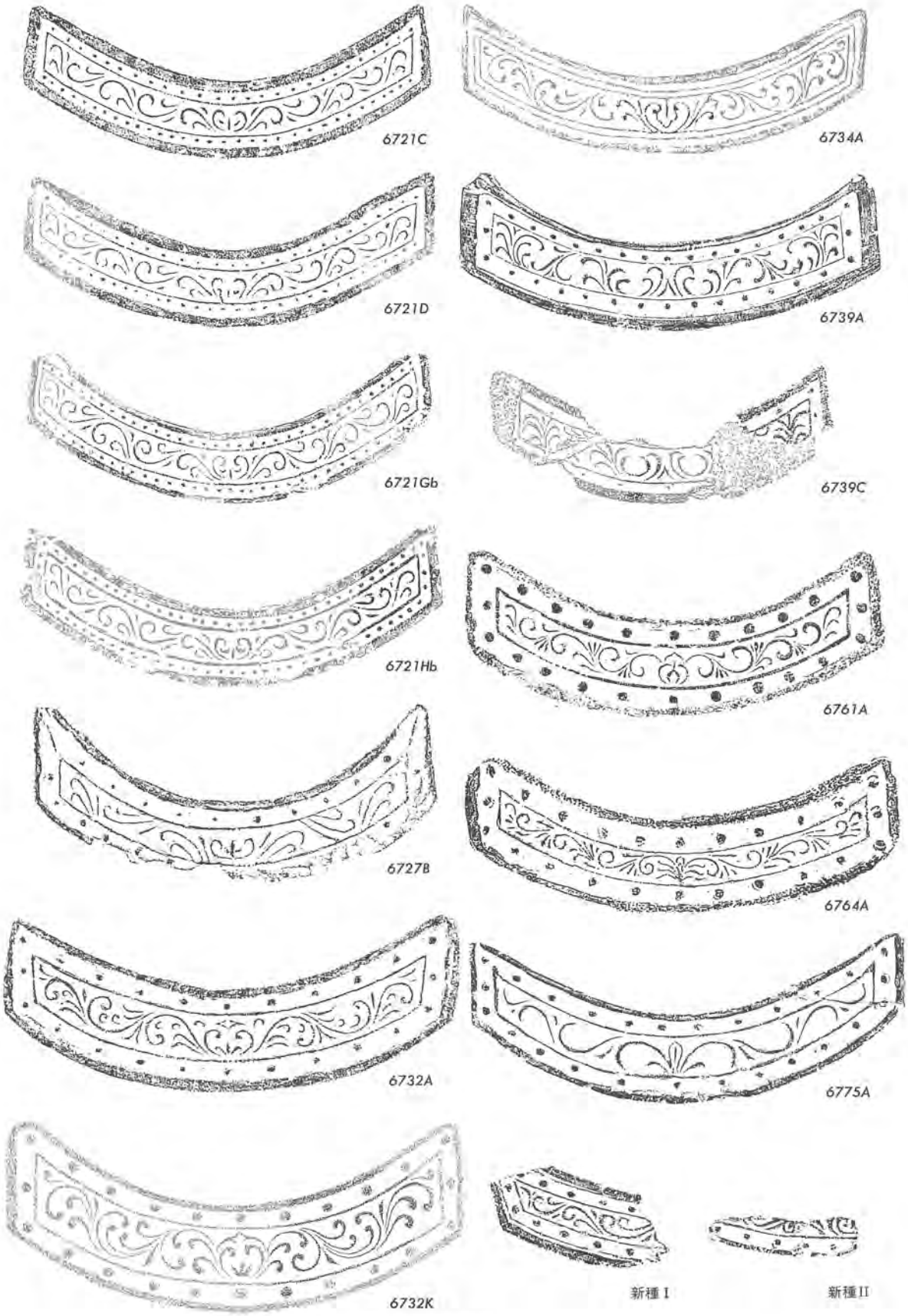


Fig. 38　軒平瓦拓影 3

で顎部を削りだした際の痕跡と考えられる。また側面の糸切痕に先行して、側縁の凹面側を面取りする例が認められる。この場合は凹型台上の作業と推定されるので、凸型台から凹型台に移して成形と調整を行ったのであろう。平瓦部凸面にはタテの粗い縄叩きが残り、顎部はヨコナデ調整。凹面の瓦当近くには、板の木口などを用いたとみられるナナメ方向の調整を施し、その後タテまたはヨコ方向のヘラケズリを加えている。青灰色のごく硬質のものと、いくぶん軟質で灰白～淡灰褐色を示すものとがある。

6732型式　いわゆる東大寺式の軒平瓦である。中心飾りは、三葉文を上向きの中心葉で囲み、その上に松葉状の対葉をおく。唐草は3回反転で、外区は珠文とする。A種4(4)点、K種1(1)点が出土。**A種**は、顎面の幅が広い曲線顎Ⅱである。笵の大きさが瓦当面より小さく、外縁に段差を有する。平瓦部凸面にはタテの縄叩きを行い、瓦当寄りの部分をヨコナデする。凹面の瓦当近くはヨコ方向のヘラケズリ調整。やや軟質で灰白～灰黒色を呈する。**K種**は直線顎である。凸面はタテ方向のヘラケズリが瓦当までおよび、凹面の瓦当寄りの部分にヨコ方向のヘラケズリを施す。硬質で灰黒～淡灰褐色を呈する。大粒の砂粒を含む粗い胎土をもち、技法的特徴とあわせて、西大寺出土の同笵資料と強い共通性を示す。

6734型式　下向きの桐葉形を上向きの中心葉で囲んだ中心飾りをもつ。唐草は3回反転で、6732型式とよく似た特徴を備えるが、外区は圏線文とする。**A種**1(1)点が出土。中心飾りの部分の小片である。砂粒を多量に含む粗い胎土をもち、やや軟質で橙灰色を呈する。

6739型式　左右各3葉の唐草を背中合わせにした中心飾りを有する。唐草は3回反転で、外区に珠文をおく。A種13(7)点、C種2(0)点が出土。**A種**は、隅木蓋瓦に転用したもの1(0)点を含む(PL.43-4)。顎形態は曲線顎Ⅱである。凸面は細かいタテの縄叩きで、瓦当寄りに広くタテ方向のヘラケズリを施したのち、ヨコ方向のヘラケズリによって顎面を作り出す。凹面は、瓦当に近い部分にヨコ方向のヘラケズリ調整を加える。側面に、凹面から連続する布目を残す例がみられる(PL.41)。暗灰色の硬質のものと、軟質で灰白～灰黒色を示すものがある。**C種**は小型品で、珠文も小粒である。中心と右端部の小片が出土。直線顎である。凸面は、全体にタテ方向のヘラケズリを行ったのち、瓦当寄りの一部に軽くヨコ方向のヘラケズリを加える。やや軟質で灰白色を呈する。

6761型式　桃実形の中心飾りの両側に、5回反転の唐草文を配する。唐草文の第2支葉が3葉構成となるのが特徴である。外区は珠文とするが、珠文帯の地がまるく盛り上がる。**A種**224(80)点が出土。軒瓦全体の中で群を抜いた数量を示し、型式の判明する軒平瓦の50.0%(軒平瓦総数の47.6%)に達する。曲線顎Ⅱと直線顎の二種類があり、凸面に縄叩きを行うものと、叩きを行わずタテ方向のヘラケズリを主体とするものに大別される。瓦当面の笵傷の進行状況によって第Ⅰ～第Ⅲ段階に区分することができ、それに対応するかたちで顎形態や調整手法の変化をたどることが可能であるが、この点については後述する。凹面調整は瓦当寄りの部分に限られ、いずれもヨコ方向のヘラケズリである。淡灰～暗灰色の比較的硬質のものと、軟質で灰白～灰黒色を呈するものがある。なお、中門・南大門地区から1(0)点、隅軒平瓦が出土している(PL.43-8)。右半部の破片で、隅棟の向って左側に使用されたもの。少なくともどちらかの門が、入母屋または寄棟の屋根構造であったことを示すものとみられる。焼成前にヘラで平瓦部をナナメに切り落としている。顎形態は直線顎である。凸面はタテ～ナナメ方

西隆寺で最も多い軒平瓦

隅軒平瓦

向、凹面はヨコ方向のヘラケズリを施す。

6764型式　上向きの単弁文の左右に、各3葉の小葉を配した中心飾りをもつ。唐草文は5回反転で、第2支葉は6761型式と同じく3葉構成である。平坦で幅広い外区に珠文をめぐらす。**A種**46(24)点が出土しており[1]、軒平瓦としての出土量は6761型式に次ぐ。すべて曲線顎Ⅱで、顎面の幅は広めだが、顎面から平瓦部にかけての屈曲が比較的強い。凸面の茅負の外方にあたる部分にタテ方向のヘラケズリを施し、顎部付近はさらにヨコナデを加える。ヘラケズリの行われない部分には、タテの縄叩きののち瓦当寄りの小範囲にヨコの縄叩きを重ねている例が大半である（PL.41）。ただし、ヨコの縄叩きの範囲が広く、残存部についてはタテの縄叩きが認められない例もある（PL.41）。淡灰色の比較的硬質のものと、軟質で灰白～灰黒色を示すものがあるが、後者の比率が高い。

出土量の多い6764

6775型式　上向きの単弁文を中央におく三葉文を中心飾りとする。唐草文は4回反転で、外区に珠文を配する。**A種**44(18)点が出土しており、6764型式にほぼ匹敵する。顎形態には、曲線顎Ⅱと直線顎の両者がある（PL.41）。前者は、顎面と平瓦部の境界が、ヨコ方向のヘラケズリによって明確な稜をなすものと、不明確なものに分れる。顎面の幅は比較的広い。ただし、平瓦部は瓦当から最大25cm離れた部分まで確認できるが、縄叩きを残す例は皆無である。いずれも、凸面全体をタテ方向のヘラケズリによって調整したのち、茅負の外に出る部分に広くヨコナデを施している。凹面は、瓦当近くの小範囲をヨコ方向にヘラケズリする。瓦当面右端に笵割れを生ずる以前のものと、それ以後のものがあるが、ともに明確な稜をもつ曲線顎Ⅱの形態をとる例があり、顎形態の変化と笵傷進行の関わりについては明らかでない。青灰～暗灰色の硬質のものと、軟質で灰白～灰黒色を呈するものとがある。

出土量の多い6775

新　種　新種の軒平瓦が2（2）点、東面回廊地区から出土している。ともに中心飾りが不明なため、型式を確定することができない。**新種Ⅰ**は、左半部の破片で、内区文様はおそらく4回反転の均整唐草文であろう。外区には珠文をめぐらす。顎面から平瓦部にかけての屈曲が弱い曲線顎Ⅱ。凸面はタテ方向の調整が施されるが、摩滅のため不明瞭である。凹凸両面ともに、瓦当近くの一部にヨコナデ調整を加える。淡灰黒色を示し、軟質である。**新種Ⅱ**は、中心飾りの一部とその左側の唐草文の下部がわずかに残る。3回反転以上の均整唐草文で、外区は珠文とする曲線顎Ⅱであるが、新種Ⅰと同じく、顎面から平瓦部にかけての屈曲が弱い。顎部付近はヨコナデ調整。やや軟質で、淡灰黒色を呈する。

C　道具瓦・塼（PL.43～44）

鬼　瓦　あわせて8（6）点あり、Ⅰ～Ⅲの3型式に分けることができる。いずれも西隆寺独特のものと考えられる。4（3）点は小片のため型式不明。**鬼瓦Ⅰ**（PL.43-1）は、左上部の破片が金堂地区から1（0）点出土している。曲率からみて、比較的小型の鬼瓦であろう。界線の外側に小型の珠文をめぐらし、外縁は低い直立縁である。主文の復元は難しいが、文様構成からは鬼面文でないと思われる。裏面は不定方向、側面はカーブに沿ったヘラケズリを施す。硬質で青灰色を呈する。**鬼瓦Ⅱ**（PL.43-2）は、小型の鬼面文鬼瓦である。東面回廊地区と北面回廊地区から1点ずつ、計2（2）点が出土。別個体である。2本の界線で区画した外区に

（1）『西隆寺報告』では、6761型式と混同している。

珠文をめぐらし、明瞭な外縁をもたない。管見によるかぎり同笵例はないが、南都七大寺式の範疇に含めてよいと思われる。裏面に上方から斜め下に向ってまるい穴があけられている。棟端に固定するための仕口であろう。摩滅のため調整手法は不明。軟質で灰白色を呈する。**鬼瓦Ⅲ**（PL.43-3）は、比較的大型の鬼面文鬼瓦である。食堂地区から1(1)点が出土している。左半部の破片。眉と目が高くつり上がり、鼻は欠失するが、上顎の歯の一部が見える。外縁は低く、広い平坦面をもつ。裏面はヨコ方向主体、側面はカーブに沿ったヘラケズリを施す。灰～灰褐色を示し、比較的硬質である。

軒平瓦を焼成後に転用

隅木蓋瓦　軒平瓦6739Aを転用したものが1(0)点、東門地区の井戸SE010埋土中より出土している（PL.43-4）。焼成後に狭端側を大きくV字形に打ち欠く。凸面を上にして使用したものと考えられるが、打ち欠きを除いてとくに仕口は認められず、隅木への固定方法は不明。硬質で暗灰色を呈する。

面戸瓦　通常の蟹面戸1(1)点（PL.43-5）と、特殊な作りの面戸瓦と考えられるもの1(1)点（PL.43-6）がある。ともに食堂地区からの出土。前者は、丸瓦の胴部を利用して成形しており、ヘラで輪郭を切り取ったのち、裏面を大きく面取りする。ヘラケズリの及ばない部分には、丸瓦成形時の糸切痕が残る。硬質で青灰色を呈する。後者は、丸瓦の玉縁とそれに続く胴部の一部を利用したものである。玉縁から2㎝ほど下の部分に、凸面側から途中まで截線を入れて、焼成前に分割している。分割面は凸面側にヘラの截面、凹面側に破断面が残る。全体の形状から、玉縁を下にして用いた面戸瓦と推定しておきたい。軟質で灰黒色を示す。

塼　あわせて43(28)点が出土している。中門・南大門地区の8点、東面回廊地区の8点、食堂地区の12点が目を引くが、中でも中門・南大門地区は調査面積に比べて出土量が多い。全長を知りうる資料はなく、幅の判明するものが3点存在するにすぎない。それぞれの幅と高さは、16.6×8.1、15.0×8.3、14.3×8.0㎝である。おそらく全長が幅の2倍ほどの直方体となるものと思われる。厚さは、8㎝前後の厚手のものと、6㎝内外の比較的薄手のものに大きく二分することができる。厚さのわかる資料のうち、17点が前者、9点が後者である。粘土の剝離状況からみて、いずれも箱状の型枠に粘土を詰め込むことにより成形したものと推定される。表面にはヘラケズリないしナデ調整が認められる。灰～青灰色の硬質のものもあるが、概して軟質で灰白～灰黒色を呈する（PL.43-7）。

二種類の製作法

熨斗瓦　平瓦を焼成後に二つに打ち割ったもの（Ⅰ類）と、当初から熨斗瓦としての使用を意図したもの（Ⅱ類）に分けることができる。**Ⅰ類**（PL.44-1～3）は、破片では平瓦との判別が難しく、正確な実数をつかみがたい。そこで、東面回廊地区の井戸SE448の壁に使用されていたものを、代表としてあげることにする。ここでは熨斗瓦10点と平瓦3点が使用されていたが、熨斗瓦は全てⅠ類に属する[(1)]。全長33～37㎝、幅は中央部で14㎝内外である。いずれも凸面にタテ方向の縄叩きを施し、その後の調整は行っていない。叩き締めに際して、離れ砂の使用が認められる例がある。凹面は、両端と両側縁の内側を薄くヘラケズリする。灰～青灰色の硬質なものと、軟質で灰白～灰黒色を示すものとがある。**Ⅱ類**（PL.44-4～6）は、41(9)点が出土している。中門・南大門地区への集中が著しい。全て焼成前の平瓦の中央に、凹面側

(1)　井戸の曲率にあわせて平瓦を分割した可能性も想定されるが、相互に接合する例が皆無であることから、本来熨斗瓦として用いられたものと考えてよいであろう。

からタテ方向の浅い截線を入れて、焼成後に分割したもの。全長を知りうる資料はないが、側縁から截線までの幅は、ほとんどが12～14cmの範囲に収まる。截線の深さは3～10mm程度で、5mm前後のものが多い。この部分は平滑な面をなすが、これに続く凸面側は、分割の際の破断面となる。分割が截線の位置で行われず、横にずれた例も多い。凸面は、やはりタテ方向の縄叩きの後、調整を加えていない。凹面も無調整のものが主体だが、端面の内側を薄くヘラケズリする例もみられる。青灰～暗灰色の硬質なものと、軟質で灰黒色を示すものとがある。

D　丸瓦・平瓦（PL.45～46）

丸瓦は破片数にして23,777(16,583)点、3,994.0(1,296.9)kg、平瓦は同じく104,207(79,044)点、13,283.5(9,240.6)kgにおよぶ大量の資料が出土している。地区別の内訳は、Tab. 2 に示すとおりである。整理が充分に進んでいないため、ここでは完形品ないしそれに近いものを中心として、主な特徴を述べるにとどめる。

丸　瓦　全長36cm前後の比較的短いものと、39cm内外の長いものとがある（平均38.0cm）。全て玉縁式で、玉縁長5～6.5cm、胴部中央幅は15～16cmの範囲に収まるものが多い。胴部長の平均は32.2cm。凸面はタテの縄叩きののち、胴部にタテ方向のナデ、玉縁部から肩部にかけてヨコ方向のナデ調整を加えるのを基本とする。凹面は、広端と胴部両側縁の内側を面取りするものが多く、玉縁の端部と両側縁の内側にも面取りを施す例がある。ほとんどが粘土板を使用しているが、ごく一部に粘土紐を用いた資料も認められる（PL.45-5）。また、玉縁部の凸面に2条の凸線をもつ資料が、東門地区と東面回廊地区からそれぞれ1点ずつ出土している（PL.45-6～7）。暗灰色の硬質なものと、軟質で灰黒～灰白色を呈するものとがある。　**玉縁の凸線**

平　瓦　全長32～34cm（平均33.2cm）、広端幅25～27cm、狭端幅22～24cmの範囲に含まれるものが多い。凸面はタテ方向の縄叩きを施し、その後の調整を加えていない。凹面は、無調整のものと、四辺の内側を薄くヘラケズリするものとがある。観察の対象としたものは、全て粘土板を用いた一枚作りによっており、凹面が平滑で糸切痕が残る。また凸型成形台の上においた布の端が表れている例がある。なお、焼成前の平瓦の広端部中央にV字形の切り欠きを入れ

Tab. 2　丸瓦・平瓦の地区別出土量

	丸瓦		平瓦	
	点数	重量	点数	重量
中門・南大門地区	5,996	1,205.1kg	17,990	2,918.9kg
金堂地区	100	18.6kg	567	68.2kg
東面回廊地区	8,336	1,028.0kg	42,901	4,199.8kg
北面回廊地区	786	112.8kg	4,969	557.3kg
塔地区	155	21.1kg	594	52.9kg
東門地区	1,099	235.9kg	3,201	699.3kg
食堂地区	4,929	716.3kg	19,790	2,604.4kg
北辺築地地区	2,399	575.9kg	11,039	1,838.1kg
西南地区	133	15.7kg	345	41.0kg
西北地区	481	64.6kg	2,811	303.6kg
計	23,777	3,994.0kg	104,207	13,283.5kg

たものが1点、北辺築地地区から出土している（PL.46-5）。全長38.5cm、広端幅28.8cmの大型品。この他、隅棟に接する部分に用いた隅平瓦が東門地区から1点出土しており（PL.46-6）、凸面が縄叩きではなく格子叩きであるものも少数ながら認められる（PL.46-7）。青灰色の硬質なものと、軟質で灰～灰黒色を示すものとがある。

隅平瓦

E 文字瓦（PL.47, Fig.39）

刻印を押捺したものが28(2)点、ヘラ書きによるものが2(0)点出土している。すべて奈良時代に属する。刻印の種類には「大」「雇(?)⊥」「⊥」「T」「理」「上」「李」「住(?)」「＋」があり、ヘラ書きはともに「＋」である。

「**大**」(1・2) a・bの2種類があり、合計10点が出土。ともに逆字で、文字だけの陽刻である[1]。こうした逆字の「大」の刻印をもつ瓦は、西大寺からも出土している[2]が、同一の刻印はない。「大(a)」(1)は、中門・南大門地区から2点、東門地区から2点の、計4点が出土。平瓦凹面の中央部上端近くに押捺されている[3]。広端を上にしたものと推定される。軟質で灰白～灰黒色を示す。「大(b)」(2)は、東門地区から3点、金堂地区から2点、東面回廊地区から1点の、計6点が出土した。平瓦凹面の中央部、広端を上にした状態で上端近くに押捺する。淡灰色の比較的硬質のものもあるが、概して軟質で灰黒～灰白色を呈する。

「**雇(?)⊥**」(3) 東門地区から3点、中門・南大門地区から1点の、計4点が出土している。逆字で、文字だけの陽刻である。平瓦凹面のほぼ中央、広端を上にした状態で上端近くに押捺する。うち1点は、熨斗瓦としての利用を意図して、タテの截線を入れたもの。灰黒～灰白色を示す軟質なものが多い。

「⊥」(4) 東門地区から一点出土した。文字だけの陽刻。平瓦凹面のほぼ中央、広端を上にした状態で上端近くに押捺されている。「雇(?)⊥」の一部である可能性もあるが、前者とは刻印が異なる。比較的硬質で灰黒～灰白色を示す。

「T」(5) 中門・南大門地区から1点出土。文字だけの陽刻である。平瓦凹面の向って左上隅に押捺されている。「⊥」の可能性もあるが、その場合は右下隅の押捺ということになる。他の刻印瓦が、いずれも端面を上にした状態で正位となるように、その上端近くに押捺されていることから見て、「T」と判断しておく。狭端・広端のどちらを上にしたのかは不明。軟質で灰黒色を呈する。

平城宮とまったく同一の刻印

「**理**」(6～9) あわせて4種類、5点が出土している。いずれも平城宮にまったく同一の刻印を使用した例があり、分類はそれにしたがう[4]。全て正字で、正方形に近い刻印の輪郭があらわれている。「理(g)」(6)は、中門・南大門地区と金堂地区からそれぞれ1点ずつ出土。平瓦の狭端を上にした状態で、凹面の右上隅に近い位置に押捺する。青灰色の硬質なものと、灰白色のやや軟質なものとがある。「理(i)」(7)は、金堂地区から1点出土している。平瓦の凹面に押捺されているが、位置は不明。やや軟質で灰白色を示す。「理(j)」(8)は、金堂地区から1点出土。平瓦の狭端を上にした状態で、凹面の右上隅に押捺する。比較的硬質で淡灰色

(1) 文字の正逆と陽刻・陰刻は、瓦の面における状態でいうものとする。
(2) 西大寺『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』1990年。
(3) 以下、押捺位置については、文字を正位とした状態でいう。
(4) 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所基準資料V 瓦編5』1977年。

を呈する。「理(k)」(9)は、中門・南大門地区から1点出土している。やはり平瓦の狭端を上にして、右上隅に近い部分に押捺する。灰黒〜灰白色を示し、軟質である。

「上」(10)　金堂地区から2点、食堂地区から1点の、計3点が出土している。正字で、文字だけの陽刻。平瓦の左上隅に近い部分に押捺されているが、狭端・広端のどちらを上にしたのかは明らかでない。やや軟質で灰白〜灰黒色を呈する。

「李」(11)　中門・南大門地区から2点が出土している。逆字で、文字だけの陽刻である。平瓦の広端を上にした状態で、凹面の上部中央やや左寄りの部分に押捺する。やや軟質で灰黒〜灰白色を呈する。

「住(?)」(12)　中門・南大門地区から1点出土している。逆字で、文字だけの陽刻。平瓦の凹面に押捺するが、位置は明らかでない。軟質で灰白〜灰黒色を呈する。

「＋」(13〜15)　刻印の「＋」(13)が中門・南大門地区から、ヘラ書きの「＋」(14)は東門地区、「＋」(15)は金堂地区から、それぞれ1点ずつ出土した。刻印は文字だけの陽刻。平瓦凹面の端面近くに押捺するが、狭端・広端の区別は明らかでない。軟質で灰黒〜灰褐色を呈する。ヘラ書きの2点も、書かれた位置は平瓦凹面の端面近くである。ともに横画を先、縦画を後としている。刻線の状況からみて、刻印瓦と異なり、端面を下にした状態で書かれたものと推定される。軟質で灰黒〜灰白色を示す。

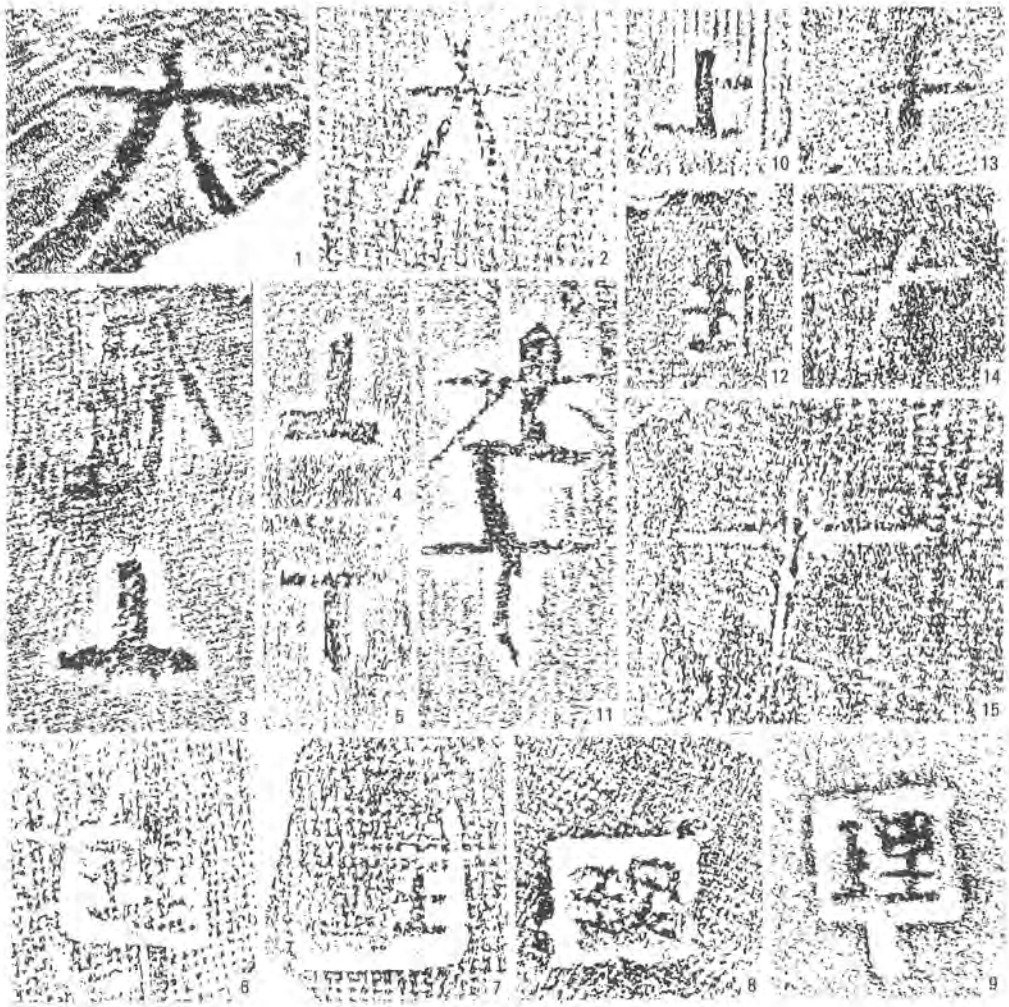


Fig. 39　文字瓦拓影　1：1

2　土　　器

西隆寺の8次にわたる調査では、整理箱で400箱に達する土器が出土した。量的に多数を占めるのは奈良・平安時代の土師器、須恵器であるが、他に二彩・三彩・緑釉・灰釉の施釉陶器、黒色土器、製塩土器、硯・土馬などの特殊土製品、唐の白磁、および平城京造営以前の縄文土器、古墳時代の土師器・須恵器がある。土器は、土壙・井戸などの遺構や整地土、包含層から出土したが、ここでは西隆寺関係の遺構、および整地土、包含層出土の土器を中心に述べ、その後に平城京造営以前の土器について記すこととする。

土器の記述に当たっては、器種名・調整手法・年代などについては、基本的に既刊の『平城宮報告』に従う[1]。記述の煩雑を避けるため、最初に土器の調整手法について記しておく。土師器の食器類は削りの有無および部位によって、a・b・c・e手法に分けている。a手法は口縁部をよこなでし、底部外面は不調整のもの、b手法は口縁部をよこなでし、底部外面を削るもの、c手法は削りが口縁部まで及ぶもの、e手法は口縁部直下を幅狭くよこなでし、以下が不調整のものである。なお、c手法の中にはe手法を削るものも存在し、e-c手法として区別しておく。また、へら磨きの有無によって0～3手法を分けている。0手法はへら磨きを行なわないもの、1手法は口縁部外面、2手法は底部外面、3手法は口縁部と底部の全面をへら磨きするものを示す。このa～c・e手法と0～3手法の組み合せによって、a_1手法などと調整手法を表現する。

調整手法

また、色調、胎土の差によって、土師器を2群、須恵器を6群に分けている。土師器Ⅰ群土器は灰褐色を呈し、砂を殆ど含まない精良な胎土、Ⅱ群土器は灰褐～暗褐色を呈し、微小な砂を含む胎土で、京内の遺跡からはⅠ群土器は殆ど出土しないという特徴がある。須恵器の群別の詳細はここでは省略するが、それぞれ陶邑、生駒、播磨、猿投、美濃などの産地の差を反映したものである。

年代は奈良時代の土器を平城宮土器Ⅰ～Ⅴに、平安時代初頭、平城上皇還都の時期の土器を平城宮土器Ⅶと区分しているが、編年の詳細、および実年代については『平城宮報告』XⅢ・XⅣに最近の調査成果を踏まえて記してあるので、そちらも合わせて参照されたい。

図示にあたっては、実測図は1／4、写真は2／5の縮尺を基本とし、適宜他の縮尺も用いた。実測図に付した番号は写真図版でも共通している。1～199は土師器、201～299は黒色土器・製塩土器・縄文土器・埴輪、301～499は須恵器、500番台は施釉陶器・白磁、600番台は特殊土製品とした。

A　土壙出土の土器（PL. 48）

今回の西隆寺の調査では、土器がまとまって出土した土壙は多くない。これは、回廊や食堂院などの伽藍中枢部を対象としたことによると思われるが、その中で、東面回廊の周辺に西隆寺関係の土器および西隆寺以前の右京一条二坊九坪の宅地の時期の土器を出土する土壙が点在していた。

(1)　奈良国立文化財研究所『平城宮発掘報告Ⅶ』1976、『平城宮発掘報告XⅢ』1991

1）SK388出土土器（1～13・301～312）

ＳＫ338からは、奈良時代末の土器がまとまって出土した。土師器杯Ａ・Ｂ、Ⅲ Ｃ、椀Ｄ、甕、須恵器杯Ａ・Ｂ、杯Ｂ蓋、Ⅲ Ａ、鉢Ａ、平瓶、壺Ｌがある。 奈良時代末の土器

土師器　杯Ａ（11）　杯ＡⅡが１点出土した。a_0手法で調整し、暗文はない。

杯Ｂ（12）　口径16.2cmの杯ＢⅢ。内面と口縁部外面をよこなでし、底部外面を粗くなでる。口縁端部はやや外反する。口縁部内面に炭化物が付着し、灯火器として使用している。

Ⅲ Ｃ（1～10）　口縁部外面を幅狭くよこなでし、底部外面を不調整のｅ手法で調整する。口縁部のなでは強く、外反気味となる。底部を平坦に仕上げる平底系のもの10点と、丸く仕上げる丸底系のものが５点ある。平底系のものは砂粒を若干含む胎土で、暗赤褐色を呈する。丸底系のものは精良な胎土で、淡黄灰色を呈する。平底系７個体と丸底系４個体の口縁部内面に炭化物が付着し、灯火器として使用したことがわかる。

椀Ｄ（13）　口径17.8cm、高さ3.4cm。b_0手法で調整する。口縁部内面に炭化物が付着する。Ⅲ Ｃの平底系のものと胎土が酷似する。

須恵器　杯Ａ（301）　口径15.2cmの杯ＡⅢ。底部外面はヘラ切り不調整。

杯Ｂ（308）　口径14.0cmの杯ＢⅢ。内面は磨滅して平滑となり、赤色顔料が付着する。朱の硯として使用したものであろう。

杯Ｂ蓋（305～307）　いずれも口縁部が笠形のＢ形態となる杯ＢⅢ蓋。305・306は、ゆるく屈曲する口縁部をロクロなでで調整する。307は口縁端部を除く頂部外面をロクロ削りで調整する。ロクロは反時計回り。胎土に硬い長石粒を多く含む。

杯Ｃ（303・304）　土師器杯Ａをまねた器形で、口縁端部が肥厚する。内外面をロクロなでで調整するが、底部外面はヘラ切り不調整。

Ⅲ Ａ（302）　口径20.6cm、高さ3.5cm。口縁部はやや外反し、内外面をロクロなでで調整する。底部はヘラ切り不調整。

鉢Ａ（309・310）　309は口径22.0cm。外面に密な磨きがある。Ⅱ群土器。310は口径24.4cm。焼成は不良で、表面の磨滅が著しく、調整手法は明確ではない。口縁端部は丸くおさめ、309の垂直に切りおとしたような形態とは異なる。

壺Ｌ（312）　高台を付けない器形で、口縁端部を欠失。口頸部と胴部上半をロクロなで、胴部下半はロクロ削りで調整し、底部は不調整。肩部と頸部に灰がかかるが、釉化していない。

平瓶（311）　大型の平瓶の口頸部。石英粒を含む胎土で、口縁端部に灰がかかる。

2）SK371出土土器（14～21）

東面回廊ＳＣ300横の土壙ＳＫ371からは、土師器椀Ａが10個体まとまって出土した。このうちの８個体がほぼ完形に復元できる。これらは、口径12.6cm～13.2cm、高さ3.8cm～4.1cmとほぼ同大で、調整もほぼ同じである。精良な胎土を用い、焼成も堅緻で赤褐色を呈する。c_1手法で調整し、底部外面の削りは特に強いために底がやや上げ底気味となる。外面の磨きは粗い。完形の８個体のうち、３個体の口縁部内面に炭化物が付着し、灯芯を安定させるために口縁部の一部を打ち欠いたもの（16・18）も見られる。出土状況は、直径約20cmの小穴から重なるように出土しており、祭祀的な用途が推定される。

3) **SK455出土土器**（313～317）

西隆寺造営時の土器

ＳＫ455からは、須恵器壺Ｋ・Ｌ、横瓶が出土した。全ての個体の内面と、一部の断面に漆が付着する。これらは、漆を運搬する容器として使用した後、一括して廃棄されたものと思われる[1]。漆が付着した須恵器片は、回廊の礎石据え付け掘形内からも出土しており、西隆寺造営に伴なう漆工房が近くにあり、回廊建立直前に操業を終えたと考えられる。

壺Ｋ（313•314）　肩の張る体部に細い頸部がつく器形で、２個体ある。いずれも口頸部から肩部の破片で、完形に復せるものはない。

壺Ｌ（315）　高台の残る破片が１点、肩部の破片が２点、頸部の破片が２点の計５個体ある。精選された胎土で、灰白色に焼き上がり、自然釉の見られる個体と、砂粒を多く含む胎土で、暗灰色に焼き上がる個体の２種がある。

横瓶（316・317）　２点あるが、口縁部の形状や成形、調整手法が異なる。316はやや小型の横瓶。体部の一部には縄叩きの跡が残り、一部にはカキ目調整も見られる。最終的に全体をなでて調整する。内面もなでで調整するが、成形時の凹凸が残る。317は外面に平行叩き目、内面に同心円当て具の痕跡を残す。外面は、叩きの後になで調整を行なうが、部分的で、平行叩き目が良く残る。

4) **SK361出土土器**（22・318・319）・**SK406出土土器**（23・320～323）

西隆寺造営以前の土器

いずれも平城宮土器Ⅲに属し、西隆寺造営以前のものであるため、ここでは一括して報告する。土師器杯Ａ、須恵器杯Ａ・Ｂが出土した。

土師器　杯Ａ（22・23）　22は口径16.0cm、高さ3.3cmの杯ＡⅣ。a_0手法で調整し、内面に放射暗文がある。底部外面には「十」の線刻がある。23は口径20.6cmの杯ＡⅡ。b_0手法で調整し、内面に放射暗文がかすかに残る。

須恵器　杯Ａ（318）　口径17.6cm、高さ3.6cm。口縁部の内外面をロクロなでし、底部外面はヘラ切り不調整のままである。

杯Ｂ（319～323）　杯ＢⅡ（322•323）と杯ＢⅢ（319～321）がある。

Ｂ　柱穴出土土器（fig.40）

1) **回廊SC300・450出土土器**（24・25・324～326）　回廊の礎石抜取り穴からは、瓦を含むかなりの量の遺物が出土したが、土器は少ない。東面回廊ＳＣ300からは、須恵器杯Ｂ（325）と杯Ｂ蓋（324）、壺Ｍ（326）が各１点。北面回廊のＳＣ450からは、土師器ⅢＡ（25・26）２点が出土した。

土師器　ⅢＡⅠ（24・25）　24が口径16.2cm、高さ2.1cm。25が口径17.8cm、高さ2.1cm。いずれもｅ手法で調整する。24の口縁端部には炭化物が付着する。

須恵器　杯Ｂ（325）と杯Ｂ蓋（324）はいずれもⅡ群土器。326は壺Ｍ。内外面とも暗灰色を呈し、肩部に自然釉がかかる。猿投窯の製品か。

土師器ⅢＡは、平城宮玉手門付近の土壙ＳＫ1623出土土器[2]と類似し、９世紀後半の年代が与

(1) 奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』1989
(2) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅻ』1985

えられる。回廊の廃絶時期を示す遺物であろう。須恵器杯Bと杯B蓋は奈良時代前半に属する。東面回廊の西側では、奈良時代前半の井戸や掘立柱建物を検出しており、回廊廃絶後に周辺の遺物が混入したものだろう。

2) SB541出土土器（26）　口径19.2cm、高さ3.9cmの土師器杯A。b。手法で調整するⅡ群土器で、口縁部外面はなでによる凹凸を残す。暗文はない。平城宮土器Ⅲ～Ⅳ。北側柱の東から6本目の柱穴の柱抜取穴から出土した。

3) SB395出土土器（327・328）　須恵器杯Bが2点が出土した。327は北妻柱掘形出土。口径12.0cm、高さ4.7cm。328は東北隅柱掘形出土。口径12.5cm、高さ4.3cm。平城宮土器Ⅲ～Ⅳか。

4) SA535出土土器（329）　須恵器壺Lで、高さ13.9cm、径13.4cm。頸部中位から上を欠失する。胴部下半はロクロ削りで調整する。底部外面に「×」の焼成前の線刻がある。東から2番目の柱掘形から出土。

C　SG530および整地土，包含層出土土器（PL. 49～51）

西隆寺の東北部、第228次調査区の西端から第223-21次調査区にかけては、池状のくぼみSG530が広がっている。これは、古墳時代の溝SD529を平城京造営以後もそのまま残して池としたもので、西隆寺の造営に伴って埋められる。SG530の埋土、およびそれを埋めた整地土と包含層、および包含層に掘りこんだ土壙SK538からは大量の土器が出土し、この地域の変遷と利用形態を物語る格好の資料である。ここでは、SG530埋土・整地土・包含層の順に奈良時代以降の土器について記述し、SD529出土の古墳時代の土器については後述する。なお、仏具として使用した須恵器・施釉陶器については施釉陶器の項に記載した。

1) SG530出土土器　SG530の埋土は大きく3層に分かれ、上・中層から奈良時代の土器が出土した。

土師器（27～36・75・79・83・84）　杯A・B、杯B蓋、杯C、ⅢA・B・C、椀A・C、

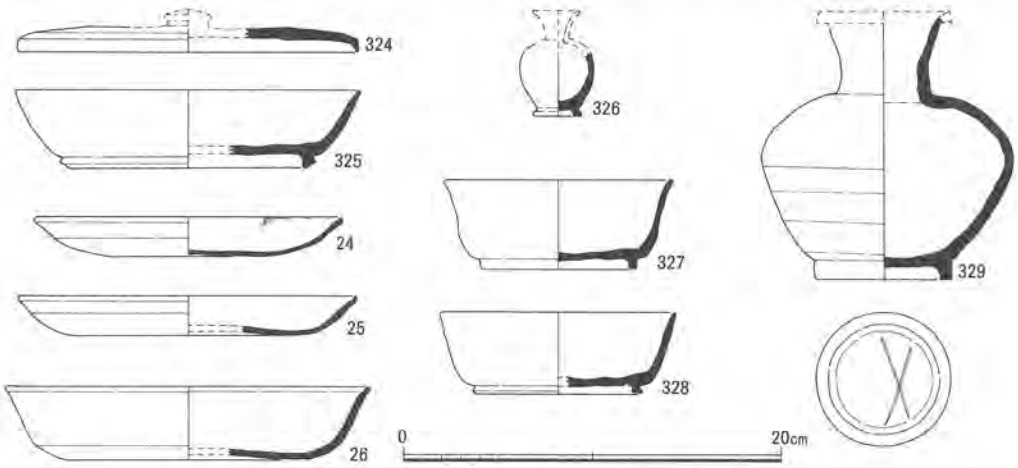


Fig. 40　柱穴出土の土器

ＳＧ530の主体は平城宮土器Ⅲ・Ⅳ

高杯、鉢の食器、壺Ａ・Ｂの貯蔵器、甕の煮沸器がある。平城宮土器Ⅰ・Ⅱ・Ⅴを一部含むが、主体は平城宮土器Ⅲ・Ⅳである。

杯Ａ（29）　b_0手法で調整する。暗文はない。

杯Ｂ（34）　器高の高い器形の杯ＢⅠ-1。風化が著しいが、外面に磨きが残る。磨きを施す蓋（33）が伴う。

杯Ｃ（30）　b_0手法で調整し、口縁端部は内傾する。

椀Ａ（27）　c_0手法で調整する椀ＡⅡ。底部に墨痕があるが、判読できない。

Ⅲ Ａ（31・32）　31はⅠ群土器で、b_0手法で調整する。32はc_0手法で調整するⅡ群土器。

Ⅲ Ｂ（35）　口径28.8cm。口縁部外面をよこなでし、口縁端部は外反する。

Ⅲ Ｃ（28）　口縁部に炭化物が付着し、灯火器として使用している。

高杯（36）　脚部の破片。裾部に磨きがある。平城宮土器Ⅴに属し、上層の土器が混入したものか。

壺Ａ（75）　球形の体部に短い口縁部を付す薬壺形の器形で、口径19.4cm、高さ23.2cm。口縁部と胴部外面を密に磨き、内面には細かい刷毛目がある。把手は１箇所のみ残存するが、２箇所に付くものと思われる。平城宮土器Ⅰに属する。

鉢（79）　口縁部の小破片で、口縁部の一部を外方に押し出して片口を付ける。内外面は刷毛目で調整する。丸底の器形になると思われる。平城宮土器Ⅰ～Ⅱ。

甕（83・84）　内面をよこなで、胴部外面を刷毛目で調整する。84は風化が著しいが、口縁部内面にも刷毛目がある。

須恵器（330～345）　杯Ａ・Ｂ、杯Ｂ蓋、杯Ｘ、椀Ｂ、Ⅲ Ａ・Ｃ、鉢Ａ、平瓶、壺Ａ、壺Ａ蓋、壺Ｅ・Ｋ・Ｌ・Ｍ、甕がある。土師器に比べて、出土量は少ない。

杯Ａ（330・331）　330はⅠ群土器の杯ＡⅢ。331は口縁端部がやや外反し、底部外面は不調整。平城宮土器Ⅰ～Ⅱ。

杯Ｂ（339・340）　340は口径18.6cmの杯ＢⅠ。339は口径14.0cmの杯ＢⅢ。

杯Ｂ蓋（335～338）　口縁端部が屈曲するもの（335・336・338）としないもの（337）がある。337は頂部外面をロクロ削りし、自然釉が降着する。338は内面を硯として使用している。

杯Ｘ（341・342）　杯Ｃに高台を付した器形で、口縁端部に巻き込みがある。出土例は極めて少ないが、長屋王邸北の二条大路上の溝ＳＤ5100に類例がある[1]。341には針で施したような鋭い線刻がある。

椀Ｂ（334）　残存高9.1cmで、口縁端部を欠失する。胴部下半と底部外面はロクロ削りで調整し、低い高台を付ける。

Ⅲ Ｃ（333）　口縁端部が平坦な面をなし、底部は丸みを帯びる。平城宮土器Ⅱ。

壺Ａ（344）　球形の体部に短い口縁部を付す器形。胴部下半をロクロ削りする。

壺Ａ蓋（343）　口縁端部は丸みを帯びる器形で、つまみを欠失する。内外面に自然釉が降着する。

壺Ｍ（345）　球形の体部に細い口縁部を付す小型の壺で、口縁端部を欠失する。

---

(1) 奈良国立文化財研究所『平城京長屋王邸と木簡』1991、出土土器の詳細については、現在正式報告書を準備中。

2) 整地土出土土器　ＳＧ530の上には、西隆寺の造営に伴うと考えられる整地土があり、そこから若干の土器が出土した。平城宮土器Ⅳ・Ⅴにわたる。

ＳＧ530の上の整地土から平城宮土器Ⅳ・Ⅴが出土

土師器（37～45）　杯Ａ・Ｂ、杯Ｂ蓋、杯Ｃ、ⅢＡ、椀Ａ・Ｃ、甕がある。

杯Ａ（37）　口径18.2cmの杯ＡⅠ。c_1手法で調整する。

杯Ｂ（44・45）　44は内外面をよこなでし、口縁部外面には粗い磨きがある杯ＢⅡ。45は杯ＢⅠ-1で、風化が著しいが、c_1手法で調整していると思われる。

杯Ｂ蓋（43）　風化が著しいが、外面に磨きがある。

椀Ａ（41・42）　41は椀ＡⅢ、42は椀ＡⅡ。ｃ手法で調整し、磨きの有無は不明。

ⅢＡ（38～40）　40はa_0手法で調整するⅢＡⅠ。口縁端部に巻き込みがある。38・39はⅢＡⅡで、38はc_0手法、39はb_0手法で調整する。

須恵器（346～359）　杯Ａ・Ｂ、杯Ｂ蓋、ⅢＡ・Ｃ、平瓶、壺Ｌ・Ｍ、甕がある。

杯Ａ（354）　口径10.0cmの杯ＡⅣ。

杯Ｂ（349～353）　杯ＢⅢ（349～351）・ＢⅤ（352・353）がある。内外面をロクロなでで調整するが、350は底部外面をロクロ削りする。

杯Ｂ蓋（346・347）　346は頂部外面がヘラ切り不調整、346は全面をロクロなでで調整する。

平瓶（355）　偏平な体部で、把手は付さない。口頸部を欠失する。胴部外面はロクロ削りを行ない、底部は不調整。外面に自然釉が降着する。

壺（356・357）　356は壺Ｌで、口頸部の接合は二段接合。肩部以下をロクロ削りする。357は壺Ａまたは壺Ｑの底部で、内外面ともにロクロなでで調整する。他に、漆の付着した壺Ｌの口頸部がある。

壺蓋（348）　壺Ｌなどの長頸壺の蓋と思われる。全面をロクロなでで調整する。

甕Ａ（358）　口縁部から体部上半の破片。外面に平行叩き、内面に当て具の痕跡が残る。

甕Ｃ（359）　外反する短い口縁部を付す広口の甕。外面に平行叩き、内面に同心円状の当て具の痕跡が残る。底部外周をロクロ削りする。

黒色土器（202・203）　椀、鉢Ｘがある。包含層出土のものを含めて、全て黒色土器Ａ類。

椀（203）　c_1手法で調整し、内面には密な磨きを施す。

鉢Ｘ（202）　風化のために調整の詳細は不明であるが、口縁部付近をよこなでし、内面には縦方向の磨きがある。胎土には砂粒を多く含み、焼成も不良。

製塩土器（207～209）　砲弾形の器形になると思われ、外面は不調整、内面は不定方向のなでで調整する。胎土には砂粒を大量に含む。

3) 包含層出土土器　西隆寺造営後、この地域はＳＢ522およびそれを建て替えたＳＢ521とＳＡ539にはさまれた空閑地であり、塵芥処理用の一角として利用されたらしく、包含層からは大量の土器が出土した。年代的には平城宮土器Ⅴ～Ⅶにわたるが、主体を占めるのは平城宮土器Ⅴで、図示したものはほとんどがこれにあたる。

土師器（46～69・76～78・80～82・85～88）　杯Ａ・Ｂ、杯Ｂ蓋、杯Ｅ、ⅢＡ・Ｂ・Ｃ、椀Ａ・Ｃ、高杯、盤、壺Ｂ、甕がある。

杯Ａ（46～51）　50・51は杯ＡⅠ。c_1手法で調整するが、51は風化のため、外面の磨きは

不明瞭。46～49は杯AⅡ。49はa$_0$手法、46～48はb$_0$手法で調整する。ただし、46・47は削りの範囲が口縁部中程まで達し、長岡宮土器によく見られる、c手法の削りが口縁上端まで及ばないc′手法と呼ぶものに近い。

杯E（52・53）　外面全体を粗く磨く、c$_3$手法で調整する。胎土に微小な雲母を混入する。

ⅢA（54～59）　ⅢAⅠ（58・59）、ⅢAⅡ（54～57）がある。58はb$_0$手法で調整するⅠ群土器、それ以外はⅡ群土器で、55はa$_0$手法、54・57はb$_0$手法、56・59はc$_0$手法で調整する。

ⅢC（63～66）　平底で浅い器形（63～65）と、丸底に近く深い器形（66）がある。灯火器として使用したもので、63・64・66には炭化物が付着する。

椀A（60～62）　c手法で調整するが、風化が著しく、磨きの有無ははっきりしない。62には底部外面に「井」の焼成後の線刻がある。

高杯（67）　脚部の破片。口縁部外面と裾部外面に磨きがある。

盤B（68・69）　盤BⅠ（69）と盤BⅡ（68）がある。両者ともに口縁部外面を縦方向に削り、その上に粗い磨きを施すc$_1$手法で調整する。

壺B（76～78）　内面はよこなで、外面は口縁部を幅狭くよこなでし、以下は不調整で残す。

甕（80～82・85～88）　口径により、甕AⅠ（85・86）、甕AⅡ（80～82）、甕AⅢ（87・88）に分かれる。外面を刷毛目、内面をよこなでで調整するのを基本とするが、80・81・86には内面にも刷毛目がある。88は内面と口縁部外面をよこなでするが、胴部外面は不調整。胴部の一部に磨き状の痕跡がある。

須恵器（360～385）　杯A・B、杯B蓋、ⅢA・C、鉢A、壺E・M、甕がある。

杯A（378・379）　378は口径12.4cmの杯AⅣ。379は口径13.4cmの杯AⅢで、底部外面はヘラ切り、口縁部外面下半はロクロ削りの後、ロクロなでで調整する。

杯B（367～377）　杯BⅡ（367～370）・BⅢ（371～375）・BⅣ（377）・BⅤ（376）がある。高台は底部外周に接して付くものが多い。

杯B蓋（360～366）　杯BⅡ～Ⅴ蓋があり、それぞれ杯BⅡ～Ⅴに伴う。ほとんどのものは、口縁端部が屈曲し、下方への突出も鈍い。365は、口縁端部が鋭く突出する、愛知県猿投窯の製品である。

ⅢA（380・381）　380は口径16.6cm、381は口径15.8cm。380は底部外面をロクロ削りで調整する。

鉢A（385）　Ⅱ群土器で、外面をロクロ削りする。内外面ともに、ロクロを利用したと思われる磨きを密接に施す。外面に重ね焼きの痕跡がある。

黒色土器（201・204～206）　杯A、椀、鉢Aがある。

杯A（201）　須恵器杯Aに近い器形。外面は口縁部付近をよこなでし、それ以下を削る。内面は風化が著しいが、密な磨きを施していると思われる。

椀（204）　整地土出土の203とほぼ同様のもので、c$_1$手法で調整し、内面には密な磨きを施す。

鉢A（205・206）　205はc$_3$手法で調整。内面は口縁部付近に磨きが残存するが、それ以下は風化のため不明。口縁部の1箇所に焼成後の穿孔がある。206はc$_3$手法と思われるが、風化のためにはっきりしない。内面には密な磨きがある。胎土に金雲母を混入する。

4) SK538出土土器（70～74）　ＳＫ538は包含層に掘り込んだ埋土に炭が混入する土壙で、少量の土師器が出土した。出土土器は、包含層の主体の土器よりはやや新しい特徴を示し、長岡京の時期のものと思われる。　長岡京の時期

杯Ａ（71）　口径17.8cmの杯ＡＩ。ｃ。手法で調整する。

椀Ａ（70）　口径14.2cmで、ｃ。手法で調整する。

ⅢＡ（72・73）　72はｃ。手法で調整するⅢＡⅡ。73はａ。手法で調整するⅢＡＩで、口縁端部に巻き込みがある。

ⅢＢ（74）　口径28.8cm。ｂ。手法で調整し、口縁端部は強く外反する。

Ｄ　井戸出土の土器（fig.41, PL.52）

1) SE370出土土器（90～92・387～389　）

ＳＥ370の埋土からは、土師器杯Ａ、ⅢＣ、甕、須恵器杯Ｂ、壺Ｌ・Ｑが出土した。　西隆寺造営直前の土器

土師器　杯Ａ（90）　ｂ。手法で調整し、暗文はない。

甕（91・92）　２点出土した。口縁部から内面にかけてなで調整、外面は縦方向の刷毛目調整を行なう。91は口径20.1cm、92は口径29.8cm。

須恵器　杯Ｂ（387）　Ｉ群土器で、口径10.8cm、高さ3.4cmの杯ＢＶ。

壺Ｌ（389）　高台部と肩部に陶片の融着がある。肩部には厚く自然釉がかかり、高台部へと流下する。

壺Ｑ（388）　胎土は砂粒を多く含む特徴的なもので、ＳＫ455から出土した壺Ｌに類似したものがある。肩部全面に降灰が見られるが、釉化はしていない。

SE548出土土器（89・386）

ＳＥ548は、北面回廊ＳＣ450の北、講堂推定地にある井戸。埋土からは、土師器ⅢＡ、須恵器杯Ｂ蓋各１点と緑釉陶器（PL.55-515）が出土した。平城宮土器Ⅶに属する。　平城宮土器Ⅶ

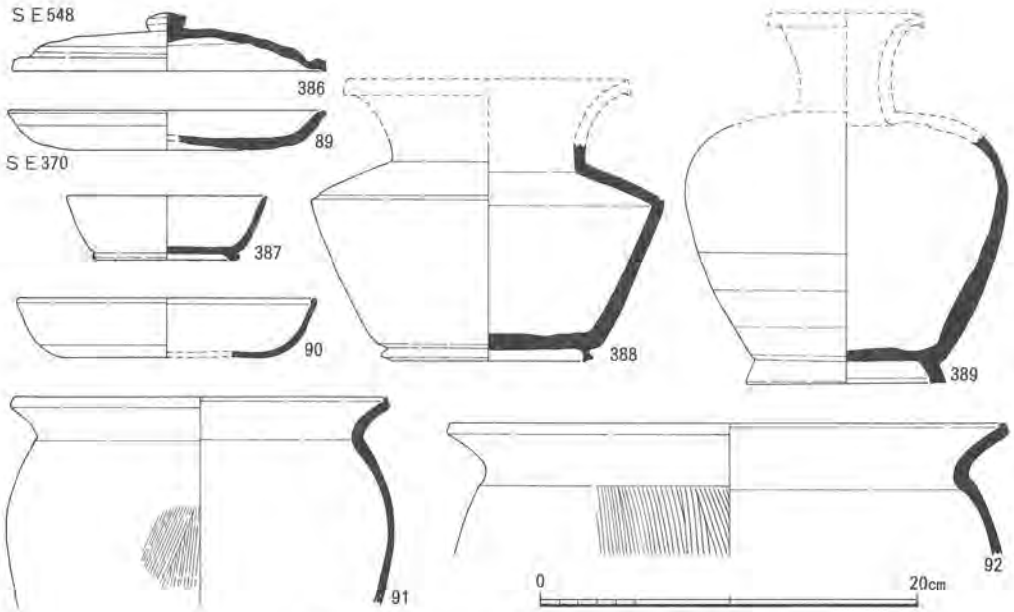


Fig.41　ＳＥ548・ＳＥ370出土の土器

土師器　皿A（89）　口径17.5cm、高さ2.1cm。e 手法で調整し、口縁直下を強くよこなでする。

須恵器　杯B蓋（386）　口径16.6cm、高さ3.2cm。口縁端部が強く屈曲し、灰褐色を呈する。

3）SE491出土土器（PL. 52）

10世紀後半の土器

ＳＥ491は伽藍東北部のＳＢ490とＳＢ495の間にある井戸。掘形には２時期あり、改修を行なっている。改修後には扉板を転用して井戸枠としており、枠内から10世紀後半の良好な一括の土器が出土した。

a）井戸掘形出土土器（93・390～392）　土師器甕A、須恵器杯B蓋、壺Lと灰釉陶器椀（PL. 55-521）が出土した。

土師器　甕A（93）　小型であるが器壁は比較的厚い。体部外面に細かい刷毛目がある。

須恵器　杯B蓋（390・391）　端部の屈曲しないA形態（390）と、端部の強く屈曲するB形態（391）各１点がある。390は奈良時代後半、391は平安時代初頭の年代が考えられ、井戸の改修の年代差を示すものであろう。

壺L（392）　口縁部の破片。口縁端部の作りが非常に鋭く、焼成は良好。一部に自然釉がかかる。胎土は緻密で、灰白色を呈し、播磨産か。

b）井戸埋土出土土器（94～111・210～220・393～395）　土師器杯A４点、皿A６点、甕４点、鍔釜５点、須恵器高杯、壺M、大鉢各１点、黒色土器A類椀11点、B類椀２点と圏足円面硯（PL. 53-609）が出土した。

土師器　椀A（94）c_1手法で調整する。奈良時代末のものである。

杯A（99～102）　口径16cm前後の杯AⅠ（102）と12cm前後の杯AⅡ（99～101）がある。暗灰褐色を呈し、器壁が薄く、口縁端部が巻き込んで上方へ突出する一群（102）と、器壁が厚く、端部内面が凹端面をなす一群（99～101）とがある。体部は底部から直線的に立ち上がり、口縁端部はよこなでによってやや屈曲するが、皿ほど強い屈曲とはならない。底部内面には粗い刷毛目の残るもの（100）がある。内面は体部中位から上をよこなで、外面は口縁部のみを強くよこなでし、それ以外は不調整となるｅ手法により調整する。

皿A（95～98）　口径の違いで12.5cm前後の皿AⅠ（97・98）と11cm前後の皿AⅡ（95・96）がある。杯Aと同様、厚手の一群（95・97）と薄手の一群（96・98）がある。いずれもｅ手法により調整するが、口縁部の屈曲が強く、一部では「て」字状を呈するものもある。

甕（103～106）　球形の体部に強く外反する口縁部を持つ。口縁端部は内側に大きく丸く巻き込む。体部外面の一部に粗い刷毛目を残すものがあるが、大部分は粗いなで調整を行なう。内面は当て具によると思われる凹凸が顕著である。胎土は砂粒を多く含む粗いもので、焼成もあまい。

鍔釜（107～111）　甕と比べて器壁が厚く、胴部の最大径が中央やや下よりとなる。口縁端部の巻き込みも大きく、口縁部の外反も著しい。体部外面には、ごく一部に粗い刷毛目を残すものがあるが、多くは粗いなで調整となる。口縁部内面はなで調整とし、体部への屈曲部に、

横方向の刷毛目が入る。体部内面は、甕同様、当て具によると思われる凹凸が顕著である。胎土は砂粒を多く含む。

須恵器　高杯（393）　脚部と杯部の接合部の破片。杯部内面には、同心円の当て具痕を残す。脚部内外面はロクロなでで調整する。高杯としたが脚部が低い高盤の器形かもしれない。

壺M（395）　残存高8.9cmの小型の壺。底部に糸切り痕を残す。

鉢（394）　外面は粗い削り、内面はロクロなでで調整する。高台が付いていた痕跡がある。内外面に釉を薄く刷毛塗りし、渦巻文などを施文する。釉は白色で、十分に釉化してはいない。

黒色土器　椀（210～220）　13点出土した。ほとんどが内面のみを黒化処理するＡ類であるが、内外面全体を黒化処理するＢ類が２点（219・220）のみ出土している。

210～218はＡ類で、口径15cm前後の椀ＡⅠと13cm前後の椀ＡⅡ（214）がある。いずれも体部は内彎し口縁部が厚くなる。口縁端部内面には１条の沈線の入るものが多い。底部は厚く、断面三角形の低い高台が付く。内面は、体部内面を水平、底部をジグザグに比較的丁寧に磨くが、外面の磨きはきわめて雑である。底部外面に墨書のあるものが２点（217・218）あるが、判読できない。内面に別の個体の高台の一部が窯着するもの（215）がある。

219・220はＢ類で、器形や作りがＡ類と異なる。体部は直線的に立ち上がり、「ハ」字形の高くしっかりした高台が付く。磨きは内外面とも非常に丁寧で、高台内面まで磨きを施す。

ＳＥ491から出土した一群の土器は、10世紀後半の年代が与えられ当該期の大和における土器編年の指標となっている薬師寺西僧坊出土土器[1]とよく似た様相を示している。それは、杯・皿がそれぞれ法量の大小で２種類に分類され、杯においては西僧坊でみられたａ～ｄの４種のうちａ・ｂの２種が共通する点や、黒色土器ではＡ類がほとんどで、Ｂ類が少量である点などである。ただし、ＳＥ491出土土器では杯の法量が若干小さくなり、高台付の杯・皿が見られないなど、やや新しい要素も指摘でき、薬師寺西僧坊が火災にあった天禄４年（973）より新しい10世紀後葉の年代を与えることができる。この様に、年代的には西僧坊出土土器とほぼ同時期であるが、器種構成は両者に著しい違いがある。ＳＥ491出土土器では、土師器杯・皿と黒色土器椀が同量見られるとともに、土師器甕や鍔釜が多い。ＳＥ491出土土器の様相から見ると、西隆寺の伽藍東北部の一郭は僧坊とは異なった機能を持った施設であると推定される。

Ｅ　施釉陶器・白磁（PL. 54・55）

施釉陶器には、二彩・三彩・緑釉・灰釉がある。土壙や井戸・溝・包含層などからの出土があるが、特に伽藍東北部のＳＧ530を埋めた整地土、包含層からは仏具として使われたものが多数出土し（501～509・386）、この一郭が仏堂的な性格を持つことを示しているので、まずそれについて述べ、その後に他の地域から出土したものについて記すこととする。

仏具として使用

緑釉椀（501～505）　501は底部の破片で、淡緑色の釉がかかる硬陶。削り出しによる蛇ノ目高台を持つ。底部に三叉トチンの痕跡がある。502は淡緑色の釉がかかる軟陶で、山城系と思われる。外面は底部も含めて全面ロクロ削りを行ない、底部に三叉トチンの痕跡がある。503は軟陶で、全面に淡緑色の釉がかかるが、釉調は淡褐色に変色している。体部下半と底部をロクロ削りする。504は硬陶で、削り出しの高台も含めて全面に灰緑色の釉を施すが、外面と内

(1)　奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告』1987

面の一部に無釉部があり、漬けがけであると思われる。505は貼り付け高台を持つ軟陶。内外全面に施釉し、本来は濃緑色の釉調であったと思われるが、灰黒色に変色している。風化が著しく、トチンの痕跡は不明。

須恵器皿（386）　口縁部の破片で、暗赤褐色を呈し、焼成は非常に堅緻である。内面に降灰がみられる。愛知県猿投窯の製品で、9世紀前半、井ケ谷14号窯期のものであろう。504・505の様な小型の椀と組み合わせて托として使用したと考えられるため、この項に含めた。

二彩火舎（506）　口縁部と体部の一部の破片で、透明釉と緑釉を斑点状に施す。

三彩鉢（507）　鉄鉢形の器形で、同一個体の二片から図上復元した。釉の剥落が著しいが、外面は透明釉と緑釉を縞状に施し、内面は透明釉上に緑釉を点状に施す。内面の一部に褐釉がわずかに残る。

灰釉多嘴壺（508）　胴部の破片で、復元高約11cmの小型品。口頸部は肩部のものも含めて残存していない。外面には暗灰緑色の釉が厚くかかり、内面にはロクロ水挽きのしぼり痕がある。肩部の口頸部を付すための穴は2回にわたって穿孔している。

緑釉多嘴壺（509）　軟陶で、外面全面に濃緑色の釉を施す。口頸部は、肩部に1ヶ所のみ残る。風化が著しく、釉はかなり剥落している。現状では緑釉のみが残存しているが、二彩陶器であった可能性もある。

二彩椀（510）　外面と内面上半に緑釉と透明釉を鹿の子状に施し、内面下半は透明釉のみ施す。外面下半と底部はロクロ削りを行なう。興福寺一乗院出土の二彩鉢[1]や正倉院宝物の磁鉢と同一のものである。

二彩陶器（516）　器形は確定できないが、底部の破片がある。大型の皿か鉢になると思われ、緑釉と透明釉を斑点状に施す。外面には焼き台の痕跡があり、円形に釉が剥離している。ＳＥ492出土。

緑釉陶器（511～515・517）　511は椀の破片で、軟陶。体部下半をロクロ削りする。512は硬陶で、削り出しの高台部。椀か皿になると思われる。ＳＤ484出土。513は軟陶で、壺か水注であろう。胴部に二条の浅い沈線を入れる。ＱＴ22区包含層出土。514は軟陶の皿。全面をロクロなでで仕上げる。ＱＧ45区瓦溜出土。515は軟陶の皿または椀の底部。ＳＥ548出土で、9世紀初頭の年代が考えられる。517は椀の底部と思われ、削り出しによる蛇ノ目高台を持つ。胎土は硬質で、焼成も堅緻である。釉は銀化しており、一見すると二彩陶器のような外観を呈する。ＱＱ17区の包含層から出土。

灰釉陶器（518～523）　調査区全域からおよそ10点出土したが、実測できるものは少ない。器形的には、椀（521・522）、皿（518・519）、段皿（520）などがある。518・521～523は底部内面を露胎で残し、523には重ね焼きの痕跡がある。521はＳＥ491の掘形から出土し、底部に刻線がある（PL.56）。内面は硯として使用したために磨滅しており、一部に墨痕が残る。519はＱＨ44区包含層、518・520・522・523はＱＧ46区周辺の瓦溜出土。

白磁椀（524）　胴部下半から底部の破片。高台は削り出しによる。胎土は白色、精良で、内外面ともに白色の釉を施すが、高台の接地面は露胎で残す。高台の作りがやや雑になっており、唐末～五代の年代が考えられる。東面回廊西方の溝ＳＤ416出土。

(1)　奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報1964』1964

F　特殊土製品（PL. 53）

圏足円面硯（601～603・605～609）　601は口径約8cmの小型品。海部はわずかにくぼませて陸部と区別する。脚部にハ字状の線刻がある。ＰＢ41区の包含層出土。602は脚部から陸部にかけての破片。脚部との境には二条の突帯をめぐらし、突帯の上方には沈線を入れる。脚部の透かしは10箇所と思われる。ＱＱ36区の包含層出土。603は陸部、海部の破片。陸部は上方に突出し、海部との境に低い突線をめぐらす。透かしは20箇所に復元できる。胎土には微小な黒色粒子が混入し、北陸地方の製品の可能性がある。ＱＨ38区の包含層出土。606は残存する透かしの形状が一様ではなく、十字形、または花形のものになるかも知れない。608・609は脚部の破片で、線刻がある。608はＱＧ45区の瓦溜、609はＳＥ491出土。

獣形硯（604）　陸部から海部と左前足の一部にかけての破片で、頭部は欠失する。陸部と海部の境には欠損が著しいが波形の突帯を施し、各波の境にはＶ字形のくり込みがわずかに残る。海部は使用により磨滅している。脚は別に成形したものを貼り付けており、削りによって三本指の表現をする。頭部を欠失するのでどの様な獣形になるかは不明であるが、三本指の表現からみて、猫科の動物になる可能性がある。これまで平城京から出土した獣形硯としては、左京四条四坊九坪[1]、右京八条一坊十四坪の羊形硯[2]、平城宮の鳥形硯[3]、亀形硯があるが、三本指の表現を持つものとしては、これが初例である。ＱＩ36区の包含層出土。

三本指の表現

ミニチュア土器（610～612）　610は土師器の竈。胴部の破片で、ひさしを貼り付ける。ＳＫ388出土。612は土師器の甕。610の様な竈と組み合わせて使用したもの。ＱＪ39区の包含層出土。611は須恵器壺の口縁部。外面に自然釉が降着する。北面築地の南雨落溝ＳＤ429出土。

男根状土製品（613）　灰白色を呈する土師質の焼成で、男根を表現する。全面をなで調整で仕上げるが、亀頭部の付け根は削り出しで表出する。先端に深さ2cm程の刺突がある。基底部には剥離痕があり、本来は塑像などの一部であったものか。

土馬（614・615）　調査区全域から10点あまり出土したが、全形をうかがえるものは少ない。614は粘土板から頸部、四肢、尾部をつまみ出して成形したもので、胴部横断面は腹部面がくぼむ形となる。左前脚と頭部、尾部の一部を欠失する。竹管による刺突で目を表現し、たずなの表現も痕跡的に残るが、口の表現は省略する。全面をなで調整している。奈良時代中頃の時期で、ＳＧ530出土。615は胴部の破片で、左後脚と右前脚の一部が残存する。全体に小型化し、調整も雑になる。平安時代初頭の時期で、ＰＤ41区の包含層から出土。

土製円板（616）　土師器壺Ａと思われる破片を利用したもので、外面に磨きがある。周縁を擦って円形に整形している。ＳＤ417出土。

土錘（617）　円筒状の器形で、土師質。心棒に粘土板を巻き付けて成形したものと思われ、内面にしぼり痕がある。風化が著しい。ＱＥ46区の包含層出土。

紡錘車（618）　土器片を利用したのではなく、当初から紡錘車として製作したもの。一面は凸面を呈し、他面は平坦である。ＳＫ361出土。

---

(1)　奈良国立文化財研究所『平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告』1983
(2)　奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』1989
(3)　奈良国立文化財研究所『平城京展』1989

須恵器特殊皿（619）　小破片のために全形は不明であるが、径約35cmの大型の皿の縁部に復元径11cmほどの小型の皿を付したもの。小型の皿は１箇所のみ残存するが、本来は大型の皿の口縁部をめぐって多数付いていたものと思われる。小皿の中心部と、大皿の外面から小皿に向けての２箇所に刺突がある。あるいは、仏具として使用したものかと思われるが、詳細は不明。東面築地ＳＡ420すぐ東方の、ＲＬ14区暗灰粘土出土。

G　墨書土器・線刻土器（PL. 56）

調査区内の溝、包含層などから、およそ30点の墨書・線刻土器が出土した。ほとんどが須恵器で、灰釉陶器・黒色土器が少量あり、土師器に記したものは僅少である。総じて文字が不明瞭で、判読できるものは少なく、記載内容もまとまったものではない。主なものの釈文をTab. 3に示すが、代表的なものについて説明しておく。

397は須恵器杯Ｂ蓋。つまみ部に「廾」の墨書がある。平城宮土器Ⅲか。

398は須恵器杯Ｂ。底部外面に「㐅」の墨書がある。

399は須恵器杯Ｂ。底部外面に「九」を線刻する。内面には漆が付着している。

400は須恵器杯Ｂ蓋。墨痕が薄く、判読が困難であるが、外面に「大」、内面に「連」や記号などを習書する。

401は須恵器杯Ｂ蓋。頂部外面に「天」の墨書がある。内面を硯として使用している。

Tab. 3　墨書土器一覧表

番号	内容	器種	部位	出土地区・遺構	番号	内容	器種	部位	出土地区・遺構
22	×	土師器　杯Ａ	底部外面	ＳＫ361	401	天	須恵器　蓋	頂部外面	ＱＩ39
62	廾	土師器　椀Ａ	底部外面	ＳＧ530	402	□	須恵器　杯Ｂ	底部外面	ＱＪ40
217	□	黒色土器　椀	底部外面	ＳＥ491	403	卅ヵ	須恵器　杯Ａ	底部外面	ＱＪ39
218	□	黒色土器　椀	底部外面	ＳＥ491	404	火	須恵器　蓋	頂部外面	ＱＪ38
391	□	須恵器　杯Ｂ	頂部外面	ＳＥ491	405		須恵器　蓋	頂部外面	ＱＪ38
397	廾	須恵器　蓋	つまみ	ＱＪ39	406	之	須恵器　壺	底部外面	ＱＪ38
398	㐅	須恵器　杯Ｂ	底部外面	ＱＭ37	407	×	須恵器　壺	底部外面	ＰＡ52
399	九	須恵器　杯Ｂ	底部外面	ＱＩ38	408	×	須恵器　蓋	つまみ	ＯＰ44
400	大 連□□	須恵器　蓋	内外面	ＰＣ41	521	□	灰釉陶器　椀	底部外面	ＳＥ491

H　平城京造営以前の土器（PL. 57）

1）縄文時代の土器（221）

縄文晩期末葉の土器

東面回廊東方の溝ＳＤ440から、突帯文土器の深鉢１個体が出土した。口縁部から胴部にかけての破片で、全周の約1/4ほどが残る。口縁端部からやや下がった位置に１条、胴部に１条の計２条の突帯を施し、突帯上に篦状工具でＤ字形の刻み目を入れる。口唇部に刻み目は入れない。外面は、２条の突帯間は、巻貝条痕を行なった上になでによる調整、胴部の突帯以下は不調整で、粘土紐の継目が残る。内面は巻貝条痕で調整。色調は暗褐色で、胎土に角閃石は含まない。晩期末葉の船橋式土器で、この時期の土器としては、大和盆地北部では初めての出土である。なお、ＳＤ440は断面形がＶ字形をした人為的に掘った水路で、京都大学構内遺跡[1]な

(1)　京都大学埋蔵文化財調査研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』1984

どにも類例がみられ、稲作農耕の開始を考える上で、極めて重要な遺構である。

2）古墳時代の土器（112～128・414～426）

a）ＳＤ529出土土器　ＳＧ530の下層には前身の古墳時代の溝ＳＤ529があり、その埋土から大量の古墳時代の土器が出土した。土師器、須恵器があり、年代的には５世紀末から７世紀初頭にわたる。これらの土器は層位的に出土したものではないために、器種ごとに説明を行なうが、必要なものについては年代も合わせて記すこととする。

土師器　杯（112）　小さな平底で、口縁部が内彎しながら開く器形。底部は削りで調整し、体部外面に細かい刷毛目が一部残る。外面の底部付近に黒斑がある。胎土に雲母を多量に含む。

椀（113・114）　丸底の偏平な体部に、外反する短い口縁部を付す器形。113は口径12.2㎝、内外面をよこなでで調整する。114は口径14.5㎝、底部外面を削りで調整し、黒斑がある。焼成は良好で、胎土に多量の雲母を含む。

高杯（115～118）　115は杯部の破片で、段を持ち、口縁部は直線的に外反する。段上には放射状の線刻がある。116は内彎しながら開く杯部で、内外面をよこなでし、脚部との接合部付近には指押さえがある。117は段を持って外反する杯部と脚部の破片。杯部外面上半はよこなで、下半は不調整で、内面には細かい磨きがある。118は脚部の破片。粘土板をしぼって成形した痕跡が明瞭で、外面にねじり痕、内面にはしぼり痕がある。

小型丸底壺（119）　やや偏平な球形の体部に直線的に外反する口縁部を付す器形。底部を欠失する。外面の調整は、口縁部は縦方向、体部は斜め方向の刷毛目を施した上に横方向の磨きを行ない、口縁端部はよこなでする。内面は、口縁部は斜め方向の刷毛目、胴部上半は不調整、口縁部と体部の接合部と胴部下半は削りを行なう。

甕（120・121）　120は小型の甕。球形の体部で、内外面に細かい刷毛目を施し、外面に黒斑がある。121は卵形の体部を持つ長胴の甕。口縁部には、外面が縦方向、内面は横方向の刷毛目がある。胴部は、外面は縦方向の刷毛目、内面は縦方向のなでで、底部外面はなで、内面は削りで調整する。外面には黒斑があり、煤が付着する。

須恵器　杯身（409～411）　蓋と身が組み合う杯で、図示したものは全て身。蓋は小破片のものが出土しているだけである。409は口縁部の立ち上がりが高く、端部は内傾する面を持つ。底部外面をロクロ削りし、ロクロは反時計回り。６世紀中葉のものであろう。410・411は口縁部の立ち上がりが低く、内傾して端部は丸くおさめる。底部外面をロクロ削りし、中央部が尖る形態となる。ロクロの回転は410が反時計回りで、411が時計回り。７世紀初頭に位置づけられる。

把手付椀（412）　底部から胴部下半の破片で、把手は欠失するが、接合痕が残る。底部外面は不調整、胴部下端は手持ち削りで調整し、胴部上半と内面はロクロなでで調整する。

瓹（413～416）　球形の体部で外反する二重口縁を持ち、胴部に１箇所穿孔がある。413は胴部下半をロクロ削りし、ロクロは時計回り。胴部に櫛描列点文がある。414はやや大型のもので、胴部外面下半はロクロ削りを行ない、内面には叩きの当て具痕がある。ロクロは時計回り。口縁部と胴部に櫛状工具による波状文がある。また、穿孔の下には３条の焼成前の線刻がある。415は口縁端部と底部を欠失する。口縁部には櫛描波状文、胴部には２条の凹線を入れ、

その間に櫛描列点文を施す。いずれも6世紀前半のものであろう。416は小さな平底となり、口頸部もやや長い。胴部下半と底部はロクロ削りし、ロクロは時計回り。口頸部に2箇所、浅い凹線がある。413～415よりやや新しく、6世紀末から7世紀初頭の年代が考えられる。

b）その他の遺構・包含層出土土器

122・127はO地区の斜行溝ＳＤ370出土。122は土師器鉢。丸底で、口縁部は2段に外反する。風化が著しいが、胴部外面に横方向の磨き、内面に放射状の暗文が残る。222は朝顔形埴輪の口縁部。風化が著しく、調整は不明。

123はＳＢ521の礎石据付け穴出土の土師器高杯。裾部を欠失する。杯部と脚部の接合部には、外側に厚く粘土を貼り付けて補強する。風化が著しく、細部の調整は不明であるが、杯部内外面に刷毛目が残る。

417・418は、後述するＳＤ524を切る土壙ＳＫ526出土の杯身で、2個体が近接して出土した。底部外面をロクロ削りし、ロクロは時計回り。器形、法量ともにＳＧ530出土の410に似る。

419はＳＧ530東岸にあり、北流して西折し、ＳＤ523となってＳＧ530に注ぐ蛇行溝ＳＤ524出土の須恵器杯蓋。口径12.6㎝、高さ4.9㎝。天井部と口縁部の境の稜は短く、鋭さに欠ける。口縁端部は内傾する凹面を持つ。天井部は丸みを帯び、全面を入念にロクロ削りする。ロクロは時計回り。5世紀末から6世紀初頭のものである。

124～126はＳＫ497出土。124は土師器高杯の脚部で、外面に縦方向の磨きがある。内面にはしぼり痕があり、裾部内面には刷毛目を施す。125は土師器小型丸底壺。口頸部が長く、器高全体の約半分を占める。口頸部は内外面ともによこなで、胴部外面下半を削りで調整し、胴部上半には磨きを施す。胴部内面に刷毛目が残る。126は土師器甕。風化が著しく調整は不明。

127はＱ地区の斜行溝ＳＤ493出土の土師器甕。口縁部は二重口縁となり、胴部内面は削りで調整する。外面の調整は、風化のために不明。

420はＳＫ527出土の須恵器瑤。口頸部を欠失する。体部外面下半に平行叩き目、内面に当て具痕が残る。胴部中位には沈線を1条入れ、その上に櫛描列点文、下に櫛描波状文を施す。底部外面にヘラ記号があり、肩部には自然釉が降着する。

421はＱＴ22区包含層出土の須恵器高杯。口径19.0㎝、高さ13.7㎝、脚部高6.2㎝。杯部は半球形でやや浅い。杯部の中央やや上に2条の突帯を付し、突帯の上下には凹線を入れる。突帯下には櫛描波状文を施す。脚部には、長方形の一段の透かしを4箇所に入れ、端部は段をなさず、丸みを帯びる。杯部の底面付近をロクロ削り、他をロクロなでで調整する。ロクロは時計回り。5世紀末から6世紀初頭の年代が考えられる。

3　木　製　品

今回報告する木製品は219次調査で検出した井戸ＳＥ491と223-21次 調査および228次調査で検出したＳＤ529・ＳＧ530からの出土品である。板状品・棒状品などを含め60点余りが出土したが、その多くは腐朽・破損が著しく、ここでは図化に堪えられるもの23点のみを報告する。

Ａ　ＳＤ529・ＳＧ530 出土木製品（PL.58, PL.59）

古墳時代の槽

槽（PL.58-1）　ＳＤ529から杉の板材10枚ほどとともに出土した。出土層位から古墳時代後期の遺物と思われる。長軸方向に折損し、ほぼ一半のみが残る。平面は楕円形に復元しうる。比較的平坦な底部から緩やかに傾斜しつつ口縁部が立ち上がる。木口面の口縁が肥厚する。内外面ともに腐食が進行し、加工痕等は不明瞭である。現長91.2cm、復元幅39.2cm、復元高10.4cm。ヒノキ材を横木取りで製作する。

部材（PL.58-2）　ツガ属心持材の表面を丸く仕上げ、２カ所に仕口を入れる。背面は折損し原形は不明であるが、平面に仕上げられていたようである。２カ所の仕口は梯子の足掛け状を呈するが、身に対して垂直となる面が対向しており、梯子にはなりえない。建築部材であるとすれば、垂木の反りを部分的に補正する‘枕’である可能性がある。長さ70.4cm。ＳＤ529出土。

支柱（PL.58-3・4）　３はヒノキの心持丸太から作る。一木梯子の足掛け状の段を削り出す。段の上面は身に対して垂直面をなす半円形を呈する。その段は幅6.8cm、奥行き2.0cmと小さく、実際に足掛かりとすることは不可能であることから、横木を受ける段と考えられる。上端木口は斧で切断されているが、本来はさらに上方へ伸び、そこにも段が削り出されていたものとすれば、２本の支柱に横木をわたす組梯子の支柱となる可能性がある。下部は腐食が進行し、原形は不明。現長92.0cm。４は二葉松類幼木の股部を利用した一種の支柱の上端破片。一枝を角状に残し、その枝に対向する幹に足掛け状の段を削り出す。この股と段とを利用して横木をわたしたものであろう。背負梯子の上端破片である可能性もある。下端は折損し全長は不明。現長21.2cm。３・４ともＳＤ529出土。

杭（PL.58-5•6•7）　５は完形品。カヤ柾目材の一端を両面からはつり落とす。長軸方向のほぼ中央に奥行き1.7cmほどの段を残し、上部ははつり落とし、下部は斜めに削り込む。全長19.2cmと小型であることから支柱などの用途は想定しがたく、杭の一種と考えておく。６はＳＧ530の埋土内に打ち込まれた状態で検出された。奈良時代後半の橋脚に用いられた杭列ＳＸ531の一本である。丸棒の先端を削り落とし、尖頭状に仕上げる。アカガシ亜属の心持材。現長16.4cm。７は奈良時代後半の木製暗渠ＳＸ533を固定する杭として用いられていたものである。二葉松類の心持材の一端を削り落とし尖らせる。尖端部をのぞき腐朽が著しく、表層部分は剝落する。現長37.6cm。

大足枠木（PL.58-8）　断面長方形のスギ角材に長方形の孔を穿ったもの。上下両端が折損する。足板を取り付ける枠の縦木にあたる。横木をはめ込むほぞ穴が７つ以上穿たれる。ただし、これと組み合うべき他の部材は発見されておらず、用途は確定的ではない。現長45.0cm、幅5.6cm、厚さ3.0cm。ＳＤ529出土。

曲物底板（PL.58-9）　ヒノキの板目材製の曲物底板が１点出土している。腐食が著しく、加工痕は不明瞭で、側板との結合方法も判然としない。復元径36.4cm、厚さ0.9cm。ＳＤ529出土。

杓子（PL.59-11）　奈良国立文化財研究所編『木器集成図録　近畿古代編』でＢ型式と分類される杓子形木器の先端部破片である。ヒノキ板目板を薄く削り、先端を半円形に作る。かなり腐食が進む。現長17.2cm。ＳＤ529出土。

加工板（PL.58-10，PL.59-12）　10はクリの板目材を包丁形に仕上げたもの。完形品。腐食が著しく、加工痕・使用痕ともに不明瞭で、用途は特定できない。12はヒノキの割板を不等脚台形に仕上げ、一側縁の下端を湾曲気味に削り落とす。上部は折損するが、一側縁に半円形の削り込みがある。円形の枘穴となるか、さらに細長く続くものかは不明。支脚のような用途が想定できる。現長28.0cm、厚さ1.1cm、最大幅8.4cm。ＳＤ529出土。

Ｂ　井戸ＳＥ491 出土木製品（PL.59）

匙（PL.59-13）　ヒノキの細板を薄く削って作る匙形木器の完形品。先縁を半円形にするもので、『木器集成図録』にB型式と分類されるものである。明確な使用痕は認められない。長さ11.6cm。

尖端棒（PL.59-14）　ヒノキの薄板から割りとった角棒。一端は折損するが、他の一端を尖らす。現長18.3cm。

箸（PL.59-15）　ヒノキの木片を小割にした後、棒状に整形したもの。完形品。断面は六角形を呈する。上下両端がやや細くなる。長さ15.9cm。

加工棒（PL.59-16）　ヒノキの割材を隅丸長方形の細棒に加工したもの。一端を折損する。残りの一端は斜めに削り落とす。用途不明。現長26.7cm。

柄杓柄（PL.59-17）　ヒノキの割材を断面方形の細棒に加工したもの。一端を折損する。先端は断面円形に細く尖らせる。この井戸からは曲物側板の小破片数点も同時に出土しているが、この柄と組む柄杓の身の部分の残片であろう。現長29.6cm。

斎串（PL.59-18）　祭祀具としては斎串１点が出土している。ヒノキの柾目薄板を上端を圭頭状、下端を剣先状に作ったもので、両側面の５カ所に三角形の切り欠きを施す。『木器集成図録』でＣⅥ型式と分類されるもの。現長44.0cm。

Ｃ　ＳＥ491井戸枠転用の扉板と中方立（PL.60～62）

井戸ＳＥ491の井戸枠にはヒノキの扉板が転用されていた。材の上半は腐朽していたが、下半ではいずれも当初の幅を完存していた。幅の寸法からＡ～Ｃ材とＤ材の２種に分類できる。Ｄ材のみは他と細部手法も異なり、別の建物か違う部位に用いていたものと推定される。以下、各材の所見を述べる。

Ａ材（PL.60-20）は井戸枠の北側板として用いられていたものである。幅約90cmの一枚板に幅9.5cmの角材を本実矧ぎで継ぎ足して一枚の扉板とする。下端から約37cmの位置に枘穴状のくり込みをいれ、釘で打ちとめ、その釘頭を埋め木で隠す。また、下端から118cmの位置には枘穴が切られており、太枘をはめ込んでいたようである。下端木口には端喰を埋め込み補強する。端喰を固定した鉄釘の脚部の破片１点が打ち込まれたままの状態で残っていた。軸部分は

破損したものとみえ、その部分を切り取って後補している。ここでも釘頭を埋め木で隠す。現長177.8cm、幅98.4cm、厚さ6.5cm である。

B材（PL.60-19）は井戸枠の東側板として用いられていたもので、一枚板からなる。A材とほぼ同じ規格で、幅99.6cmを測る。厚さはA材よりも若干厚く7.2cmある。下端木口に埋め込みの端喰をもつ。それを固定する釘穴が3カ所残るが、釘そのものは失われている。また、下端には直径6.8cmの軸が造り出されている。軸を含む現長は165.6cm。

C材（PL.61-21）は井戸枠の南側板として用いられていたもので、ほぼ同一寸法の4枚の板を本実矧ぎで接合し、一枚の扉板に仕立てている。下端から60cmほどの位置で突出する側が入れ違いになっている。また、下端から約38cmの位置には枘穴を切り、太枘をはめ込む。2枚目と3枚目との間にはその太枘の破片が残る。下端木口には端喰が埋め込まれ、釘で固定される。A材と同様、軸部を後補しているが、本材では埋め木によって釘頭を隠すことはしていない。軸を右に見る面の下端から5.0cmの位置に水平方向に風蝕差の境界線がはしっている。蹴放ち（上端であれば楣）のあたりを示すものである。現長149.6cm、幅96.4cm、厚さ6.1cm。

D材（PL.62-22）は井戸枠の西側板として用いられていたもので、2枚の板を本実矧ぎで接合する。下端から24.4cmの位置には枘穴を穿ち、太枘をはめ込む。2枚の板の幅は29.2cmと59.6cmで、それぞれほぼ1尺と2尺に復元できる。B材と同じく作り出しの軸が残る。その直径は7.2cmである。他の材と異なり端喰はない。本材の最大の特色は、横桟と八双金物の釘痕を残す点である。まず、軸を右に見る面（この面を仮りに表面とする）では、横桟は下端から33.6cm、92.4cmをそれぞれ中心線とする位置に、その上下両端を釘でとめる手法で装着される。裏面では下端から40.0cm、94.0cmの位置に横一列に釘止めされる。一方、八双金物は、釘痕だけではなく、部分的に残るあたりの線から、その大体の形状をも知りうる。すなわち、先端が突出するいわゆる出八双である。下端から27.2cmを中心線とする位置に、表裏いずれも11本の釘を用いて装着されるが、裏面では先端がやや右上がりに取り付けられている。ところで、表面で見るかぎり、下段の横桟を留める釘の下列と八双金物を留める釘の上列が同じ水平位置にあり、両者が同時に装着されていたとは考え難い。その先後関係は判断しかねるが、一方から他方へ付け代えられたことが判る。なお、裏面の下端右寄りには焦げ痕がみとめられる。ただし、扉として使用されていた時点で火熱を受けたものであるかどうかは不明である。

中方立　扉板に関連する遺物として、扉の中方立とも呼ぶべき遺物が出土している（PL.62-23)。井戸枠を固定する支柱として利用されていたもので、幅12cm、厚さ6cmほどのヒノキ角材を、一面を「凸」字形に仕上げ、もう一面の両角を面取りする。一端は完存するが、一側縁を斜めにはつり落としている。中方立としての使用を終えた後の加工であろう。もう一端は腐朽・欠損する。現長124.8cm。

4　金属製品・石製品

A　金属製品（PL.63）

鉄釘（PL.63-1～10）　鉄釘は計10点出土している。銹化の進むものが多い。1～6は折頭釘である。上端を叩きのばし、ほぼ直角に曲げて釘頭としたものである。2・3・6の3点がほぼ完形、残りの3点は下端を折損する。銹化のあまり進んでいないものについては表面観察によって、また銹化の進んだものについては折断面の観察から脚の断面形が判るものではいずれもほぼ正方形を呈する。大きさには大・中・小の別がある。出土地点は1がＱＨ44区暗灰砂層、2と6は井戸ＳＥ419掘形埋土、3はＱＲ21区橙灰砂層、4と5はＱＨ46区瓦溜である。方頭釘としては、7と10の2点がある。7は銹化が著しい。脚が頭部の一方に偏在する。ＱＥ47区東西溝1から出土。現長9.3cm。10は井戸ＳＥ491の井戸枠として転用されていた扉板に打ち込まれていたもの。下部の大半を折損する。円頭釘に分類できるのが8と9の2点である。8は井戸ＳＥ491掘形内より出土。現長7.7cm。9は東西溝ＳＤ429上層から出土。現長8.0cmである。

不明鉄製品（PL.63-11～14）　11はやや湾曲する小型の棒状品の一端近くに瘤状の突起のあるもの。長さ5.4cm。ＱＮ22区灰白砂層出土。12は東西溝ＳＤ429下層から出土した小型の棒状品。表面に繊維状のものが巻かれてあったような痕跡が残る。長さ4.7cm。13は断面がほぼ三角形を呈する小型の棒状品。一端で折損する。何らかの工具破片であろう。ＰＣ51区暗褐砂質土層出土。14は厚さ約3mmの鉄片。刃部を研ぎ出してはおらず、利器の破片ではない。ＱＮ26区橙灰砂層から出土。

銭貨（PL.63-15～18，PL.63-20）　井戸ＳＥ448の井戸枠外から2点の和同開珎が出土した（15・16）。ともに鋳上がりはよい。いずれも「開」の字の門構えを「門」につくる「隷開和同」である。17・18の2点の延喜通寶は改修後の井戸ＳＥ491埋土からの出土品である。いずれも鋳上がりが悪く、銭文も不鮮明である。延喜通寶は皇朝銭のうち11番目に発行されたもので、その始鋳は延喜7（907）年。その後、約半世紀の長期にわたり鋳造が行われた。この銭貨の出土によりＳＥ491のおおよその年代が与えられる。PL.63-20に載せる5点の銭貨は土器埋納遺構ＳＫ449内に置かれた土師器甕の内部に納入されていたものである。5点のうち1点は離れているが、他の4点は互いに固着しており、破損の危険があるため分離することが不可能であった。分離している1点は神功開寶である。功の傍を「刀」につくりその第2画を長くのばす「長刀」で、開の門構えは「門」につくる。他の4点のうち2点は表面観察およびＸ線透視により、和同開珎および萬年通寶であることが判る。和同開珎は「隷開和同」、一方の萬年通寶は銭文が不鮮明で種類は特定できない。残る2点は銭文不明である。

青銅飾り金具（PL.63-19）　厚さ約2mmの青銅薄板の表面に文様を鋳出したもの。ほぼ完形で、現長2.1cm、幅2.2cm。三葉状の小花文を中心に配し、その両側を唐草文がとり囲む文様構成をとる。三葉文の上部には透かし孔を穿つ。その用途を特定することは難しいが、仏像光背あるいは厨子など仏教関係の器物にとり付けられる飾り金具である可能性が高い。ＱＮ35区茶褐土層出土。

仏教関係の飾り金具

B　石製品（PL.64）

敲石（PL.64-1.2）　鉱物や混和剤などを敲きつぶしたとみられる敲石が２点出土。１は石英斑岩の河原石を利用したもので、おそらく使用の結果、ほぼ半分に割れている。現長8.8㎝、幅6.2㎝、厚さ6.1㎝で、比較的平坦な両面に深さ１～２㎜の敲打によるくぼみが残る。ＱＲ32区灰褐土出土。２は溶結凝灰岩の自然礫を緩やかな稜を持つ扁球形に整えたもので、比較的平坦な２面に６㎜、３㎜ほどの敲打によるくぼみが残るほか、その２面に直行する他の１面にも稜線沿いに敲打の痕跡が残る。長径6.0㎝、短径5.9㎝、厚さ4.4㎝。ＱＲ32区灰褐土出土。

古墳時代の勾玉

勾玉（PL.64-3）　装身具としては、勾玉１点が出土。瑙瑪製でやや白濁するが、ほぼ透明である。長さ2.2㎝、幅1.2㎝。胴中部での長径6.5㎜、短径5.0㎜である。片面から穿孔している。池状遺構ＳＧ530から出土。平面形は「コ」の字形に近く、古墳時代後期の遺物と考えられる。

紡輪（PL.64-4•5）　紡織具としては石製紡輪２点が出土した。いずれもＳＧ530からの出土である。４は緑色片岩ないしは緑色溶結凝灰岩製でほぼ完形品。直径4.3㎝、厚さ1.1㎝の截頭円錐台形を呈する。重さ26g。斜面はやや内凹する。穿孔は両面から行われており、孔の直径は上・下面とも5.8㎜である。上面の孔周囲に刺突により直径1～1.5㎜、深さ0.5㎜ほどの窪みを穿つ。下面には孔をとり囲むように不整円形が、さらにその外側に放射状の弧線文様が線刻される。５は緑色片岩製で、上・下面ともほぼ半ばが剥落している。直径4.8㎝、厚さ0.8㎝、重さ28gで、やはり両面から穿孔されており、孔径は8.0㎜である。上面には交差二重線が放射状に並ぶ線刻が、下面には４と同じく孔を中心とする放射弧線の線刻が施される。

砥石（PL.64-6～12）　砥石は計７点が出土している。6・7の２点は比較的大形の柱状品である。６はほぼ方柱状を呈するが、一面の半ば以上が欠損。現長14.7㎝、幅・厚さとも3.2㎝である。方柱の対向する二面の全面が使用により摩耗しているほか、他の一面の下半部にも研ぎ減りが認められる。採石時ないしは整形時のものと思われる削り痕が残り、一面には若干の付着物がある。砂岩製で、いわゆる荒砥にあたろう。ＱＰ20区橙灰砂層出土。７は現長15.0㎝、幅2.6㎝、厚さ3.6㎝で、砂岩製である。対向する二面と上端面が平滑であるが、他の面は折損。平滑面には若干の研ぎ傷が認められるほか、一面の上端近くは敲打のためか表面がつぶれる。８は断面長方形の定型的な砥石で、石材も一般的に見られる流紋岩製である。いわゆる中砥にあたろう。長軸方向の四面いずれも平滑な使用面となる。上下両端面には凹凸があり、研磨には使用されていない。現長8.6㎝、幅4.5㎝、厚さ3.7㎝である。ＱＥ46区暗灰砂層から出土。９と10はいずれも石英斑岩ないしは花崗斑岩製で、やや多孔質な点に特徴がある。ともに断面長方形で、長軸方向の四面を使用する。９は現長5.3㎝、幅5.0㎝、厚さ3.3㎝で、上下両面は湾曲気味に研ぎ減る。かなり使い込まれており、折損部での厚さは0.5㎝しかない。ＯＰ47区茶灰土層からの出土。10は上下両端を欠損。現長は5.0㎝、幅4.9㎝、厚さ1.8㎝を測る。長軸方向の4面を使用する。特に一側面は研ぎ減りで若干内凹する。ＰＫ48区の整地土層からの出土。11はアプライト製の長条形砥石である。断面は正方形に近い。上端は折損しているが、孔が穿たれており、紐などを通して吊り下げたものであろう。長軸方向の四面を使用する。ＰＫ49区整地土から出土。12は流紋岩（？）製の小型の砥石である。長軸方向の四面および下端面を使用する。上下両面は非対称に研ぎ減る。折損部での厚さは0.5㎝。ＰＧ51区暗灰褐土から出土。

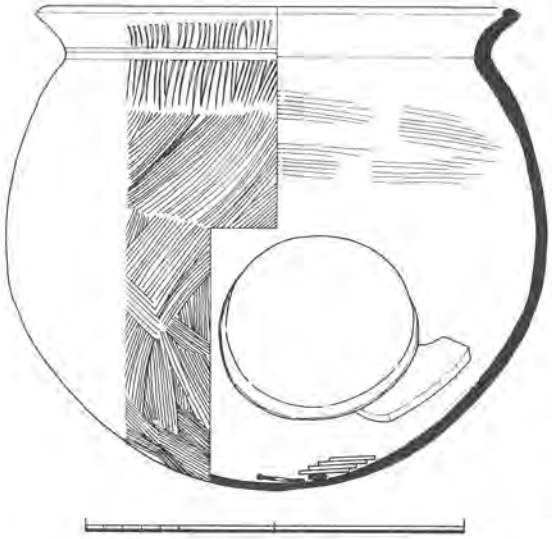
5　土器埋納遺構出土遺物

回廊ＳＣ330東北隅中央の鬼門の位置にあたる礎石据付掘形の底から、土師器甕Ａが正立した状態で出土した（Fig42）。内部には土が充満していたが、慎重に土を取り除いたところ、甕の底部で銅銭５枚と織物の断片・土師器皿Ｃ１点・土師器甕胴部破片３点を検出した（Fig. 43）。銅銭は和同開珎・萬年通宝・神功開宝各１枚、銭文不明銭２枚である。

埋納当時の状態を復原すると、まず甕の底部に布に包んだ銅銭をおき、上に土師器皿Ｃをかぶせ、甕胴部破片で蓋をしたと推定される。銅銭は重なって検出されており、紐で連ねられていたようだ。出土状態からみて回廊建立時に礎石据付掘形底部に置いたもので、この上に根石が置かれ礎石が据え付けられたと推定できる。

埋納時期は銭貨から神功開宝の初鋳年である天平神護元年（765）を遡らない。今回出土した土師器甕Ａは、外面が縦方向のハケメ調整、内面が一部にハケメを残すものの大部分がナデ調整となる。また口縁部から胴部へのくびれ部に強いヨコなで調整がはいるといった特徴をもつ。これまでの平城宮出土の土器の編年研究によって、土師器甕Ａについてもほぼその変遷が明かとなってきている。口縁部の外反度、口縁端部の肥厚度、胴部最大径がやや下寄りとなる点などから、平城宮土器編年第Ⅳ～Ⅴ期に位置づけられ、天平宝字末年から宝亀年間を中心とする年代観が推定され、銭貨の結果と矛盾しない。礎石据え付けの直前という、遺構の上からの年代とも矛盾しない。

Fig. 42　土器埋納遺構実測図



土器の年代は平城宮土器編年第Ⅳ～Ⅴ期

Fig. 43　土器・銭貨の出土状況

第Ⅵ章　自然科学による分析

1　年輪年代測定

年代測定を行った試料は、井戸ＳＥ491の井戸枠の東側板として用いられていたＢ材（材種はヒノキ）である。幅99.6cm、厚さ7.2cm。下端に直径6.8cmの軸が造り出されており、軸を含む現存長165.6cm。計測年輪数は192層、軸部のほうが樹皮方向、端部のほうが樹心方向になった板である。その形状は一部に辺材部をとどめるＢタイプの試料である。

この井戸枠の部材については、かつて扉板として使用したものを、井戸枠に転用したことが明かとなっている。扉板の軸部に刻まれている19層分の年輪幅については、現状のままで数値を計測しても意味がない（計測値は年輪に対して直角方向でなければならないが、軸部は円形をなす）ので、軸部分以外の計測値（173層分）を図示した(Fig.44)。

結果　板材の年輪変動パターンとヒノキの暦年標準パターンとを照合したところ、相方の年輪変動パターンは、西暦527年～699年の間で照合が成立した。したがって、板材の残存最外年輪年代は、西暦699年にさらに軸部に占める19層分の年輪を加算して、西暦718年と確定できた。板材に残存していた辺材部の幅は、約2.6cmである。普通、樹令200～300年のヒノキの辺材幅は、3.0cm前後であることからして、この板材の年輪年代は、比較的伐採年代に近い年代を示していることになる。

残存最外年輪年代は西暦718年

この井戸枠は発見当初、西隆寺の堂に用いていた扉板を転用したものと考えられていた。しかし、本試料の伐採年代は、西暦718年に十数年を経過した年代が考えられ、西隆寺の創建年代である神護景雲元年（767）まで新しくなることは推定しにくい。

この扉板がかつていかなる建物に使用されていたのかは今後検討すべき問題であるが、部材の伐採年代は西隆寺創建期を更に遡るものである可能性が高い。

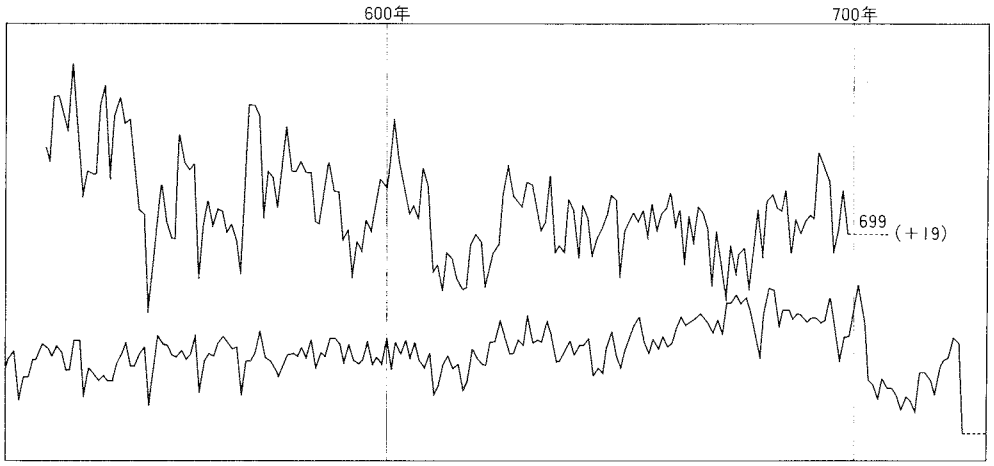


Fig.44　ヒノキの暦年標準パターングラフ（下）と井戸部材の年輪変動パターングラフ（上）

2　西隆寺跡におけるプラント・オパール分析

A　試　料

試料は、古墳時代とされる斜行大溝および斜行小溝内部の堆積物である。これらの遺溝は、当時の水田耕作に伴う用水路である可能性が考えられていた。なお、試料は遺跡調査の担当者によって採取され、古環境研究所に送られてきたものである。

B　分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原1976）」をもとに、次の手順で行った。

(1)　試料土の絶乾（105℃・24時間）

(2)　試料土約１ｇを秤量，ガラスビーズ添加（直径約40μｍ、約0.02ｇ）

　※電子分析天秤により１万分の１gの精度で秤量

(3)　電気炉灰化法による脱有機物処理

(4)　超音波による分散（300W・42KHz・10分間）

(5)　沈底法による微粒子（20μｍ以下）除去、乾燥

(6)　封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

(7)　検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中のプラント・オパール個数を求めた。

C　分析結果

プラント・オパール分析結果を表１に示す。なお、稲作の検証が主目的であるため、同定および定量は、イネ・ヨシ属・タケ亜科・ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる）・キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な５分類群に限定した。巻末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

＜参考文献＞

藤原宏志．1976．プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，９：15－29.

藤原宏志．1979．プラント・オパール分析法の基礎的研究（3）－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O.sativa L.）生産総量の推定－．考古学と自然科学，12：29－41.

藤原宏志．杉山真二．1984．プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17：73－85.

D　考察

古墳時代とされる斜行大溝内部の堆積物（黒褐色土）および斜行小溝内部の堆積物（PH45）について分析を行なった。その結果、両者からイネのプラント・オパールが検出された。密度は、前者では試料1gあたり700個と低い値であり、後者でも3,800個とやや低い値である。このことから、当時はこれらの溝の周辺で稲作が行われており、そこから溝内にイネのプラント・オパールが混入したものと推定される。

斜行大溝周辺で古墳時代の稲作

Tab. 4　西隆寺におけるプラント・オパール分析結果

（単位：個／g）

試料名	イネ	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
斜行大溝（黒褐色土）	700	2,100	20,700	700	0
斜行小溝（PH45）	3,800	2,800	26,900	900	0

Tab. 5　プラント・オパールの顕微鏡写真（PL. 67　参照）

NO.	分類群	地点	試料名	倍率
1	イネ	小溝	PH45	400
2	イネ	小溝	PH45	400
3	ヨシ属	小溝	PH45	400
4	ヨシ属	小溝	PH45	400
5	タケ亜科（ネザサ節）	小溝	PH45	400
6	タケ亜科（ネザサ節）	小溝	PH45	400
7	タケ亜科（ネザサ節）	小溝	PH45	400
8	ウシクサ族	小溝	PH45	400
9	不明（キビ族類似）	太溝	黒褐色土	400
10	不明	小溝	PH45	400
11	表皮毛起源	太溝	黒褐色土	400
12	海綿骨針	小溝	PH45	400

3　西隆寺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析

A　はじめに

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、長期間地中に埋蔵されると圧力・水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡・泥炭遺跡・貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと[1]、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子[2]、約5千年前のハーゼルナッツ種子[3]に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した[4]。

脂肪とは、有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質・単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類・含量ともに脂質中では最も多い。脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持ち、さらに動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸とステロール組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持つ

この「残存脂肪分析法」を腐朽分解の進んだ、考古学的実証の困難な遺跡の解明に適用し、出土遺物に残存する脂肪を分析することによって、西隆寺跡から出土した土器の性格を解明しようとした。

B　土壌試料

西隆寺は奈良時代に造営されたもので、その寺院の回廊の北東の隅から甕が出土した。甕内底部からは銭5点が底にほぼ接した状態で見つかっており、この甕は胞衣壺と推定さ

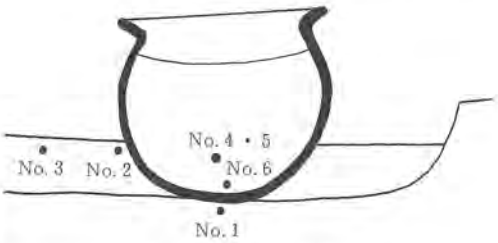


Fig. 45　土壌資料採取地点

(1) R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle: Food identification of samples from archaeological sites, *Archaeophysika.*,10巻,1979,p260.
(2) D.A.Priestley,W.C.Galinat and A.C. Leopold, Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed, *Nature*, 292巻, 1981, p146.
(3) R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle: Analyse frühgeschichtlicher Gefässinhalte, *Naturwissenschaften*, 70巻, p33.
(4) 中野益男：「残存脂肪分析の現状」,『歴史公論』第10巻 (6), 1984, p124.

れている。遺構内での土壌試料採取地点をFig. 45に示す。甕の外側の土で甕の底に接した部分のものを試料No. 1、同じく甕の外側の土で甕の側面に接した部分のものを試料No. 2、甕の外側の土で試料No. 2から少し離れた部分のものを試料No. 3、甕の内部の土で底からやや離れた部分のものを試料No. 4とNo. 5、甕の内部の土で銭に接した底の部分のものを試料No. 6とした。

C　残存脂肪の抽出

土壌試料15～415gに3倍量のクロロホルム―メタノール（2：1）混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム―メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1％塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量をTab. 6に示す。抽出率は0.0007～0.0786％、平均0.0230％であった。この値は出土土器を胞衣壺と判定した平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した胞衣壺内土壌試料の平均抽出率0.0199％[(1)]とほぼ同率で、古墳時代の胞衣壺と判定した平城京右京三条三坊一坪から出土した土師器試料の0.0039％[(2)]、出土土器を胞衣壺と判定した岡山県津寺遺跡から出土した土器および土壌試料の0.0028％[(3)]、出土土器を胞衣壺もしくは骨壺と判定した宮城県郷楽遺跡から出土した土器試料の0.0013％、土器内土壌試料の0.0062％[(4)]よりは高い。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成されていて、遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪の結合したトリグリセリド・ステロールエステル・ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

D　残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪に5％メタノール性塩酸を加え、125℃封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分離し、ヘキサン―エチルエーテル―酢酸（80:30:1）またはヘキサン―エーテル（85:15）を展開溶媒とするケイ酸薄層ク

Tab. 6　土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No.	試　料　名	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率（%）
1	甕の外側の土（下の土）	415.5	2.9	0.0007
2	甕の外側の土（接した土）	229.6	2.1	0.0009
3	甕の外側の土（離れた土）	326.5	4.9	0.0015
4	甕の内部の土（底からやや遠い土）	124.1	14.7	0.0118
5	No.4と同じ	43.2	19.2	0.0445
6	甕の内部の土（底の土）	14.5	11.4	0.0786

（1）中野益男・中岡利泰・福島道広・中野寛子・長田正宏「平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した胞衣壺の残存脂質について」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書―昭和63年度』1989,p5.

（2）中野益男・長田正宏・中野寛子・福島道広「平城京右京三条三坊一坪から出土した古墳時代前期の土師器に残存する脂質について」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書―平成元年度』1990,p79.

（3）中野寛子・明瀬雅子・長田正宏・中野益男・福島道広「津寺遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」（未発表,岡山県古代吉備文化財センターより刊行予定）

（4）中野益男・福島道広・中野寛子・長田正宏「郷楽遺跡から出土した埋設土器に残存する脂肪の分析」（未発表,宮城県教育委員会より刊行予定）

ロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。[1]

残存脂肪の脂肪酸組成をFig. 46に示す。残存脂肪から11種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸（C16: 0）・パルミトレイン酸（C16: 1）・ステアリン酸（C18: 0）・オレイン酸（C18: 1）・リノール酸（C18: 2）・アラキジン酸（C20: 0）・エイコサモノエン酸（C20: 1）・ベヘン酸（C22: 0）・エルシン酸（C22: 1）・リグノセリン酸（C24: 0）の10種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー—質量分析により同定した。

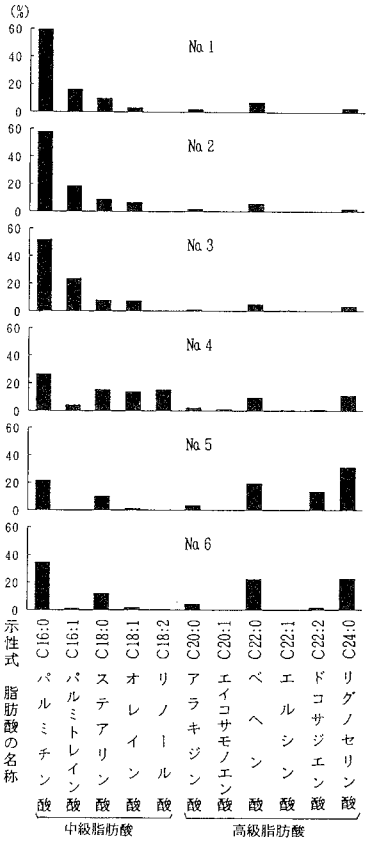


Fig. 46　残存脂肪の脂肪酸組成

6試料中甕外試料である試料No. 1～No. 3と甕内試料である試料No. 4～No. 6は明らかな相違を示した。試料No. 1からNo. 3はほぼ同じで、中級脂肪酸のパルミチン酸が約52～59％と最も多く、次いでパルミトレイン酸・ステアリン酸・オレイン酸の順に分布していた。これは植物腐植に多く由来する脂肪酸組成パターンを示している。一般に考古遺物にはパルミチン酸の分布割合が高い。これは長い年月の間にオレイン酸・リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が酸化されてパルミチン酸を生成するためで、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来ていると推定される。また高等動物、特に臓器・脳・神経組織・血液・胎盤に特徴的にみられるベヘン酸・リグノセリン酸などの高級脂肪酸は試料No. 1～No. 3で約8～10％と比較的少なかった。

動物性脂肪の残存を示す脂肪酸組成パターン

試料No. 4からNo. 6は動物性脂肪が残存していることを示唆する脂肪酸組成パターンであった。試料No. 4は他の試料No. 5・No. 6とは多少異なる脂肪酸組成パターンを示した。最も多く分布していたのはパルミチン酸で約27％、次いでステアリン酸・オレイン酸・リノール酸がほぼ同程度分布していた。ステアリン酸・オレイン酸・リノール酸の分布割合は植物脂質にはない脂肪酸パターンで、血液成分に近いと考えられる。高級脂肪酸であるベヘン酸・リグノセリン酸は各々10％前後分布していた。試料No. 5とNo. 6はほぼ同じで、典型的な動物性脂肪が残存する谷状の脂肪酸組成パターンを示した。特にベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸の含量は両者の合計で約45～50％という高いものであった。しかしNo. 5とNo. 6では高級脂肪酸に少し違いがあり、No. 5はドコサジエン酸を多く含んでいた。

以上のことから甕内の土壌試料には動物性遺体が残存していた可能性が高い。

E　残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン—エチルエーテル—酢酸（80:30: 1）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン—無水酢酸（1：1）を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の

(1) M.Nakano and W.Fischer: The Glycolipids of *Lactobacillus casei* DSM 20021, *Hoppe-Seyler's Z.Physiol. Chem.*, 358巻,1977,p1439.

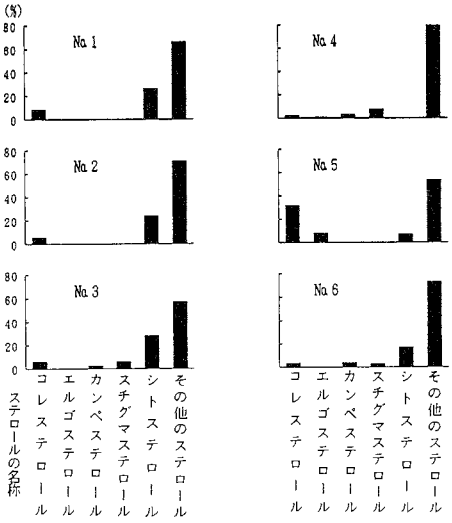


Fig. 47　残存脂肪のステロール組成

主なステロール組成をFig. 47に示す。残存脂肪から5～26種類のステロールを検出した。このうちコレステロール・エルゴステロール・カンペステロール・スチグマステロール・シトステロールなど7種類のステロールをガスクロマトグラフィー—質量分析により同定した。

各試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは試料No. 1～No. 4とNo. 6の試料で約2～8％分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは4～8％含まれている。試料No. 5ではコレステロールは約32％という高率で分布していた。植物由来のシトステロールは試料No. 1からNo. 3では約24～28％分布し、試料No. 5で約7％、No. 6で約17％分布していた。しかし、試料No. 4では全く検出されず、コレステロール以外のその他のステロールが約90％近くを占めていた。その他のステロールの大部分は動物性ステロールと推定される。現在更に検討を加えているところである。

土壌試料のコレステロール（動物性）とシトステロール（植物質）の分布比をTab. 7に示す。一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壙で0.6以上[1],土器・石器・石製品で0.8～23.5をとる[2,3]。試料No. 1からNo. 3ではその値が0.2～0.3で動物遺体の存在を示唆するものではなかった。試料No. 5はその値が38.5という非常に高いものであった。試料No. 6は甕内底部土壌であるにもかかわらず分布比が0.2と低く、動物性脂肪の存在を示す脂肪酸の結果とは一致しなかった。これは試料No. 6が銭のあった底の部分の土壌で、その上面の試料No. 4・No. 5との間に粘土層があるので、その影響があるのかもしれない。

Tab. 7　試料に分布するコレステロールとシストステロールの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール／シトステロール
1	8.05	26.08	0.31
2	5.51	23.99	0.23
3	6.30	28.32	0.22
4	2.10	-	-
5	31.59	6.91	38.50
6	3.35	16.99	0.20

F　脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行なって各試料間の類似度を調べた。同時に平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した胞衣壺試料、平城京右京三条三坊一坪から出土した土師

（1）中野益男・伊賀　啓・根岸　孝・安本教傳・畑　宏明・矢吹俊男・佐原　真・田中　琢「古代遺跡に残存する脂質の分析」『脂質生化学研究』第26巻,1984,p40.

（2）中野益男「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」『真脇遺跡—農村基盤総合設備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団，1986，p401.

（3）中野益男・根岸　孝・長田正宏・福島道広・中野寛子「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」『ヘロカルウス遺跡』北海道文化財研究所調査報告書，第3集，1987，p191.

器試料および人間の胎盤試料に残存する脂肪酸の類似度とも比較した。

各試料間の脂肪酸組成の類似度をパターン間距離にして表した樹状構造図をFig. 48に示す。試料No. 1・No. 2・No. 3と平城京右京三条三坊一坪から出土した土師器壺試料は相関行列距離が0.2以内でA群を形成した。試料No. 4は人間の胎盤試料、平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した胞衣壺および胞衣壺内底部土壌試料とともに相関行列距離0.2以内でB群を形成した。試料No. 5とNo. 6は同じく相関行列距離0.2以内でC群を形成した。このことから試料No. 4採取位置に胎盤様のものが存在していた可能性がある。従って、出土土器試料は胎盤を埋納していた胞衣壺である可能性が強い。

試料No. 4はB群を形成

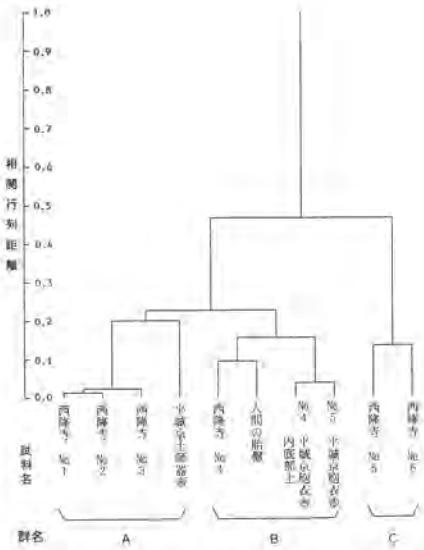


Fig. 48　残存脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

G　脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸・オレイン酸・リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分によれば、第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液・脳・神経組織・臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。土壌資料の残存脂肪から求めた相関図をFig. 49に示す。試料No. 1・No. 2・No. 3はA群を形成し、第2象限の原点から離れた位置に分布した。この群は動物性脂肪の存在を示唆する位置に分布していることなり、植物腐植を示す位置とは一致しなかった。これは土壌の特性と関係するのかもしれない。試料No. 4は単独でB群を形成し、第2象限の原点から少し離れた動物性脂肪の位置に分布した。試料No. 5とNo. 6はC群を形成し、第1象限の原点から遠く離れた位置に分布した。従って、いずれの試料も第1、第2象限内に分布し、試料中には動物性脂肪が含まれていたことがわかる。

いずれの試料も動物性脂肪を含む

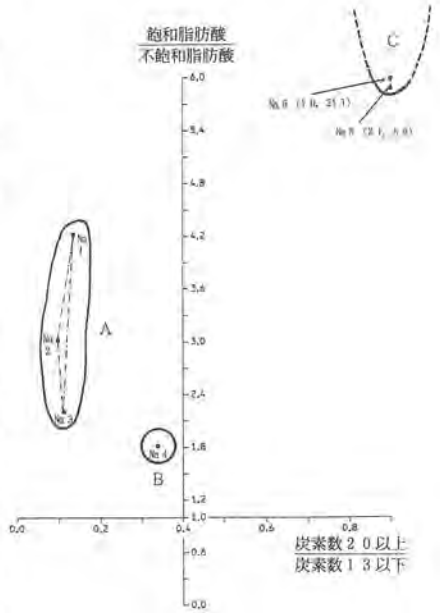


Fig. 49　残存脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

H　酵素抗体法（ELISA法）による糖脂質群の認定

哺乳動物赤血球膜は特異な糖脂質で構成されている。Tab. 8に見られるように、ヒト赤血球膜には糖鎖構造の異なる糖脂質がいくつもある[1]。こうした糖脂質の化学構造、とくに糖鎖構造は動物種ごとに異なる。この糖鎖の違いを抗原抗体反応によって読み取り、動物種を認定することができる。ヒト胎盤には、4つの主要なガングリオシド（G-1、G-2、G-3、G-4）があり[2]、その末端にはシアル酸を持っている。その主要な化学構造は、次に示すような糖鎖構造を持つガングリオシドのGM$_1$およびGM$_3$に類似する。

ヒト胎盤はシアル酸を持つ

$$GM_1 : Gal1 \xrightarrow{\beta} 3\,GalNAc1 \xrightarrow{\beta} 4\,Gal1 \xrightarrow{\beta} 4\,Galc \xrightarrow{\beta} Cer$$

$$\begin{array}{c} \uparrow \\ \alpha\,3 \\ NeuNAc \end{array}$$

$$GM_3 : NeuNAc2 \xrightarrow{\alpha} 3\,Gal_1 \xrightarrow{\beta} 4\,Galc \xrightarrow{\beta} Cer$$

いずれも末端にN－アセチルノイラミン酸（シアル酸、NeuNAc－）を持っている。ポリクロナール抗体の抗GM$_1$および抗GM$_3$を用いて、このシアル酸を測定した。この測定には抗GM$_1$、抗GM$_3$に特異な酵素を標識した酵素抗体法（enzyme－linked immunosorbent assay : ELISA法）を用いた[3]。

クロロホルム－メンタノール混合溶媒で抽出・分離したクロロホルム層とFolch水層を0.4Nメタノール性科苛性ソーダを用いてアルカリ処理し、グリセロリン脂質などのエステル化合物を除去する。得られたアルカリ安定脂質の糖脂質からケイ酸カラムクロマトグラフィーおよび陰イオン交換体のDEAE－セファデックスA－25カラムクロマトグラフィーにより、古代ガングリオシドを分画・精製した。このものを抗原としてポリプロピレン製のマイクロタイタープレートウエルの内面に固着させ、ウサギ由来のポリクロナール抗体の抗GM$_1$、抗アシアロGM$_1$、抗アシアロGM$_2$、抗GM$_3$、抗フォルスマンと反応させた。末結合抗体を除去後、二次抗体としてペルオキシダーゼ標識抗免疫グロブリン抗体（抗ウサギIgG）と反応させる。末結合標識抗体を除去後、発色基質の5－アミノサリチル酸と過酸化水素で発色させてからマイクロプレート光度計で490nmの吸光度を測定した。

ELISA法による抗GM$_1$に対する反応吸光曲線をFig. 50に示す。甕の外側の土壌の試料No. 3は強い吸光度を示さな

Tab.8　ヒト赤血球膜の糖脂質

Glc-Cer	Ceramide monohexoside
Gal-Glc-Cer	Ceramide dihexoside
Gal-Gal-Glc-Cer	Ceramide trihexoside
GlcNAc-Gal-Glc-Cer	Amino-ceramide-trihexoside
GalNAc-Gal-Gal-Glc-Cer	Globoside I
GalNAx-GalNAc-Gal-Gal-Glc-Cer	Para-Forssman-antigen
Gal-GlcNAc-Gal-Glc-Cer	Paragloboside
Gal-Gal-GlcNAc-Gal-Glc-Cer	P_1 antigen
GalNAc-Gal(Fuc)-GlcNAc-Gal-Glc-Cer	A antigen（A型）
or Gal-Gal(Fuc)-GlcNAc-Gal-Glc-Cer	B antigen（B型）
NeuNAc-Gal-Glc-Cer	Hematoside（H型）
NeuNAc-Gal-GlcNAc-Gal-Glc-Cer	Sialyl paragloboside

Cer : セラミド, Gal : ガラクトース, Glc : グルコース, GalNAc : N-アセチルガラクトサミン, GlcNAc : N-アセチルグルコサミン, Fuc : フコース, NeuNAc : N-アセチルノイラミン酸, NeuNGc : N-グリコリルノイラミン酸

（1）山川民夫「糖脂質の研究より」『学術月報』第31巻(6), 1978, p43.

（2）T.Taki, K.Matsuo, K.Yamamoto, T. Matubara, A.Hayashi,T.Abe and M.Matsumoto : Human placenta gangliosides, *Lipids*, 23巻, 1988, p192.

（3）内貴正治・佐内豊・岩森正男・滝孝雄・鈴木明身・楠進「免疫科学的手法」『続生化学実験講座・複合糖質研究法』第4巻, 東京化学同人, 1986, p95.

かったが、甕内部の土壌の試料No.4、試料No.5からは、高い吸光度が認められた。この反応から、甕内部の底部には古代ガングリオシドGM$_1$が広く分布していることがわかった。抗GM$_3$に対しても同様の反応結果を得た。これは、抗GM$_1$および抗GM$_3$が末端にあるシアル酸が認識されたことになる。従って、ヒト胎盤に分布するG－1、G－2などのガングリオシドの末端にあるシアル酸を認識したことになる。この抗体反応から甕内部の底部には、胎盤に由来する古代ガングリオシドが分布していたと判断された。

シアル酸を認識

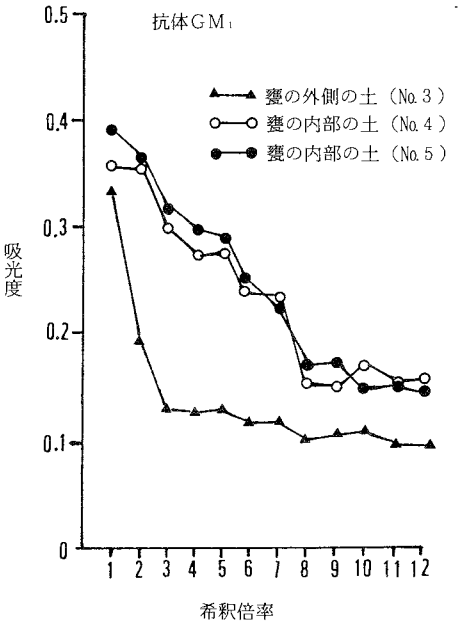


Fig. 50　胞衣壺に残存する糖脂質の酸素抗代反応

この他、脳・神経組織に分布するアシアロGM$_1$およびアシアロGM$_2$を見るために抗アシアロGM$_1$および抗アシアロGM$_2$と反応させた。反応により吸光度は認めたが、活性は低かった。臓器に分布する抗ホルスマンに対しては、抗原の存在を示す反応を示した。これらの抗体反応から、胎盤以外の他の臓器の可能性は少ないと推測された。胎盤の血液型を調べるためにヒト・ウサギ・ヒツジ由来抗血清の抗A血清・抗B血清およびウサギ由来の抗ホルスマン血清を用いて酵抗体反応を行なった。甕の外側の土壌は抗A血清・抗B血清・抗ホルスマン血清とも反応を示さなかったが、甕の内部の土壌は抗A血清と抗ホルスマン血清と反応した。

胎盤はA型

胎盤はA型と判定された。胞衣壺と推定される甕から血液型が判定できたのは、これが初めてである。

Tab.9　胞衣壺に残存する血液型糖脂質群の認定

試料No.	ヒト由来抗血清		ウサギ由来抗血清		ヒツジ由来抗血清	血液型
	抗A血清	抗B血清	抗A血清	抗ホルスマン血清	抗B血清	
1	－	±	－	±	－	－
2	－	－	－	－	－	－
3	－	－	－	－	－	－
4	＋	－	＋	＋	－	A
5	＋	－	＋	＋	－	A
6	＋	－	＋	－	－	A

＋：ペルオキシダーゼ標識酵素反応陽性　－：ペルオキシダーゼ標識酵素陰性
±：ペルオキシダーゼ標識酵素反応微陽性

I　総　括

以上、西隆寺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析を行なった。残存する脂肪酸の分析および数理解析の結果、試料No.4、No.5、No.6には動物性脂肪が残存している可能性が強い。特に試料No.4には胎盤様のものが残存していた。また、ステロールの分析と数理解析の結果試料No.4とNo.5の位置には動物性脂肪が多量に残存していた可能性が強い。

出土土器の内部の土壌に分布する糖脂質群を酵素抗体法により分析したところ、ヒト胎盤に由来する古代ガングリオシドが認定された。出土土器の外側の土壌には古代ガングリオシドは検出されなかった。胎盤の血液型はモノクロナール抗体を用いた酵素抗体反応によりA型と判定された。これらの成績からこの出土土器にはヒト胎盤に類する動物性遺体が埋納されていたと判定した。

第Ⅶ章　考　　察

1　条坊遺構と西隆寺

西隆寺の造営が神護景雲元年（767）に開始され、右京一条二坊九・十・十五・十六坪の4町を占めていたことは、本書「第Ⅱ章・西隆寺の歴史」で述べているとおりである。

西隆寺の寺地を取り囲む条坊道路は、南は一条々間路、北は北京極大路、東は西二坊々間路、西は西二坊大路であるが、西隆寺造営以前にはこの寺地を東西及び南北に二分するかたちで、西二坊々間西小路と一条々間北小路が通っていた。本節では、まず、西隆寺の四周を巡りあるいは横切っていたこの6本の条坊道路の配置について述べた後、西隆寺の主要堂塔の配置計画についてこれらの条坊遺構との関連もふくめながら述べる。

A　西隆寺造営以前の条坊遺構

(1)　南北方向の条坊

西隆寺第3次調査（金堂地区の調査）において金堂直下で検出した南北溝ＳＤ095、同ＳＤ110及びその間に挟まれた道路ＳＦ105の各遺構は、西二坊々間西小路とその東西両側溝に比定されている[(1)]（『西隆寺発掘調査報告』1976）。同書では、奈良時代の条坊計画線の振れをＮ0°15′41″Ｗ（北で0°15′41″西に振れる）、造営尺を0.296ｍと仮定したうえで、ＳＦ105（の心）が西二坊々間西小路の計画線よりも「20尺ほど西へずれて」いることを指摘し、「右京二坊の西半部に限られた条坊計画と施工の誤差」と結論づけている。

西二坊々間西小路

西隆寺と西大寺の寺地を含む右京一条及び二条の条坊計画線の推定復原については、その後『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』（1990）で、1)条坊計画線の振れを南北方向Ｎ0°19′50″Ｗ、東西方向Ｗ0°18′58″Ｓ、2)南北方向計画線では朱雀門心（Ｘ＝－145994.50、Ｙ＝－18586.32）東西方向計画線では玉手門心（Ｘ＝－145753.54 、Ｙ＝－19093.26 ）を基準とすることを仮定条件として、右京の二条大路以北の推定条坊計画線を方程式であらわす試みを行っている。この仮定条件をそのまま採用して算出した西隆寺関連の6本の条坊道路の推定計画線の方程式はTab.10のとおりである。

これによれば西二坊々間西小路推定条坊計画線の方程式は、

$$X = -\cot 0°19'50''\,Y - 3529173.929$$

であり、遺構検出位置のＸ座標値の一つＸ＝－145110.80 を代入すると、Ｙ＝－19523.83となる。この地点の実測Ｙ座標値はＹ＝－19529.05 なので、推定条坊計画線より5.22ｍ（17～18尺）西へずれていることになり、『西隆寺発掘調査報告』とおおむね同様の結論を得る。

---

(1)　1990年の奈良市第207次調査で西二坊々間西小路と一条々間路の交差点の西南角で南北溝ＳＤ03が検出された。溝心の座標値はＸ＝－145231.00でＹ＝－19531.89となり、ＳＤ110の南延長線上にあたる。これが西二坊々間西小路西側溝であることは間違いない。

Tab.10　西隆寺関連条坊道路の推定計画線の方程式

西二坊々間路	X＝－cot0° 19′ 50″ Y－3506086.010
西二坊々間西小路	X＝－cot0° 19′ 50″ Y－3529173.929
西二坊大路	X＝－cot0° 19′ 50″ Y－3552261.848
北京極大路	X＝tan0° 18′ 58″ Y－144848.986
一条々間北小路	X＝tan0° 18′ 58″ Y－144982.188
一条々間路	X＝tan0° 18′ 58″ Y－145115.390

ところで、西隆寺の東を走る西二坊々間路、西を走る西二坊大路の実際の遺構と推定条坊計画線との関係はどうであろうか。まず西二坊々間路は平城宮跡第142次調査と同第183-14次調査でTab.11のような実測値を得ている。それぞれの路心位置のＸ座標値を、西二坊々間路の条坊方程式　　X＝－cot0°19′50″Y－3506086.010

西二坊々間路

に代入してみると、第142次調査ではX＝－145287.00でY＝－19389.62 、第183-14次調査ではX＝－145328.00でY＝－19389.38 の計算値を得る。これは実測値とほぼ一致している。すなわち、西二坊々間路は推定条坊計画線どおりに施工されていたわけである。

西二坊大路

次に西二坊大路である。西二坊大路関連の条坊遺構としては奈良市第213-3次調査で東側溝ＳＤ102が検出されており、ＳＤ102心の実測値はX＝－146200.00 でY＝－19647.88 である(『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書・平成２年度』)。西二坊大路の道路幅については、遺構として確認されていないが、西一坊大路が70大尺、西三坊大路が60大尺という例から、60大尺あるいは70大尺と考えて差しつかえないだろう。ここで60大尺（１大尺＝0.296ｍ×1.2＝0.3552ｍ）と仮定して、奈良市第213-3次調査の東側溝実測地点での路心の座標値を算出すると、X＝－146200.00でY＝－19658.54を得る。このＸ座標値X＝－146200.00を西二坊々間路推定条坊計画線の方程式　　X＝－cot0°19′50″Y－3552261.848

に代入すると、計算値Y＝－19650.75を得るので、実際の西二坊大路は推定条坊計画線よりも7.79ｍ（26尺）西にあったことになる（道路幅70大尺と仮定するとさらに西にあったことになる)。

以上の結果から、西二坊々間路、西二坊々間西小路、西二坊大路と条坊計画線との関係をまとめてみると以下のようになる。

①西二坊坊間路が推定条坊計画線通りに施工されているのに対し、西二坊大路と西二坊々間西小路は推定条坊計画線より大きく（17～26尺）西にずれた位置に施工されている。

②西二坊大路と西二坊々間西小路が大きく西にずれた原因は不明であるが、同方向へのずれであることから西二坊々間西小路は西二坊大路を基準にして位置を設定されたと考えられる。(2)

(2)　西二坊々間西小路西側溝は推定条坊計画線から約27尺西にずれた位置にある。このことから、西二坊大路心から450尺東の位置に西二坊々間西小路西側溝を設定した可能性はなくはないが、西二坊大路東側溝(市調査ＳＤ102)と西二坊々間西小路西側溝(ＳＤ110)の検出地点は約1090ｍ離れており、ただちに断定はできない。なお、平城京条坊道路の位置設定について、山中章が「南北条坊道路の小路は、(中略)東または西側溝に条坊計画基準線をおく例がある。」と述べている（「古代条坊制論」－『考古学研究』38巻4号／1992）が、これも幅20尺前後の小路のどの部分が条坊計画基準線と合致するかは仮定条件次第であり、必ずしも説得力をもつものではない。

Tab.11　西二坊々間路心の実測座標値

	X	Y
西二坊々間路心（第142次）	−145287.00	−19389.14
〃　　（第183-14次）	−145328.00	−19389.10

(2)　東西方向の条坊

奈良市第207次調査は、一条々間路と西二坊々間西小路の交差点付近の調査であり、一条々間路南側溝（ＳＤ02）と西二坊々間西小路西側溝（ＳＤ03）を検出している。

東西方向の条坊道路である一条々間路は、これまで第95-9次調査で南側溝（ＳＤ100）、北側溝（ＳＤ101）を検出している。『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』では、その位置が一条々間路の推定条坊計画線の方程式から相当北にずれていることについて、「平城京造営当初、平城宮の推定西面北門から秋篠川まで60ないし70大尺程度で延びる一条々間路が秋篠川以西では路心を北によせながら一気に幅を狭めていたが、西大寺及び西隆寺の造営時期にあわせて秋篠川以西でも以東と同様の幅に拡幅された」という主旨の試論を提出している。しかし、市調査ＳＤ02の検出と西隆寺南面築地ＳＡ160の存在から、この試論の後半部は否定しなければならない。また、ＳＤ100と市調査ＳＤ02の計測値から一条々間路南側溝の振れを計算すると、国土方眼に対してW0°48′22″Ｓの振れを持つことになる。この角度は、推定条坊方程式に用いた東西方向の振れに比べて30′以上大きい値であり、この溝が一直線で通っていたとすれば、この一帯では条坊設定に際しての測量の誤差が相当大きかったこと、換言すればそれほど正確を期した測量が行われていなかったことを示している。

一条々間路

また、『西隆寺発掘調査報告』では、西隆寺南面築地ＳＡ160の南側で北肩を検出した東西溝ＳＤ260が一条々間路北側溝である可能性をしめしている。もし、そうだとすると市調査ＳＤ02の実測値と考え合わせて、一条々間路の道路幅（側溝心々間距離）が16～17ｍであったことになるが、その場合道路心の位置が推定西面北門心の推定位置と比べて相当北となる（Ｘ座標値で約10ｍ北）。これは西隆寺に南面する一条々間路を西隆寺側（右京一条二坊十・十五坪）に拡幅したためと考えておきたい。

Ｂ　主要堂塔の配置

西大寺蔵の「西大寺伽藍絵図」（元禄11年・1698）は、西隆寺の伽藍配置を描いた唯一の絵図である。この絵図は、奥書きによれば、宝亀11年（780）の絵図流記を模写したものというが、その信憑性については、「第Ⅱ章西隆寺の歴史」でのべているように若干の問題点を残す。しかし、この絵図に描かれた西隆寺の堂塔のうち、寺地の中軸線上の「弥陀金堂」（以下「金堂」という）、寺地東南部の「宝塔」、寺地の東面に開く「東門」の遺構が西隆寺第１～６次の発掘調査において、また金堂を取り囲む回廊のうち東面回廊と北面回廊が第209・212・219次の各発掘調査において検出されたことにより、この絵図が一定の信頼を置くに足るものであることが明らかになっている。これらの堂塔の配置計画については、『西隆寺発掘調査報告』で、西隆寺の伽藍中軸線が西二坊々間西小路心に設定されていること及び東門心が金堂心の東440尺、北110尺、塔心が金堂心の東250尺、南210尺の計画であることがすでに指摘されている。ここでは、主に今回の一連の発掘調査によって、新たに明らかになった堂塔の配置計画を以下

に示しておく。なお、配置計画の検討の基礎資料となる、堂塔位置等の実測座標値及び推定座標値はTab.12のとおり。

①金堂心から東面回廊棟通りまで及び金堂心から北面回廊棟通りまでの計画寸法は、それぞれ130尺、110尺である（金堂心－東面回廊棟通りの実測距離、金堂心－北面回廊棟通りの推定距離はそれぞれ38.85m、32.50m）。

②東門心は、北面回廊棟通り延長線上に設定され、中軸線からの計画寸法は440尺である（中軸線－東門心の実測距離は129.98m）。東門心が一条々間北小路心の延長線上に来ない（推定条坊計画線の方程式では東門心の位置は一条々間北小路心の北約11.4mの位置にあたる）のは、この設定方法のためである。

③金堂心から南面築地心までの計画寸法は300尺である（金堂心－南面築地心の推定距離は89.20m）。

④中軸線から東面築地心までの計画寸法と西面築地心までのそれとは、等しくなかったと見られる。東面築地心までの計画寸法は440尺（東面築地は東門棟通りに取り付く）であるが、西面築地心までの計画寸法がもし440尺であるとすれば西面築地は西二坊大路の路面上に来ることになる。中軸線から西面築地心までの計画寸法としては410尺がもっとも妥当性を持つ。すなわち、西隆寺寺地の東西幅は850尺であった可能性が高い[(3)]。

⑤寺地の南北方向の計画寸法は790尺と見られる（築地東北隅－同東南隅の推定距離は233.21m）。900尺に比べて相当短い寸法になっている理由としては、北京極大路が相当大きい路面幅を有していた可能性が考えられる。

Tab.12　西隆寺堂塔等の実測及び推定座標値

	X	Y
金堂心	−145110.80	−19529.05
塔心	−145172.82	−19454.61
東門心	−145077.84	−19399.07
東面回廊棟通り	−145110.80	−19490.20
回廊東北隅	−145078.25	−19490.30
南面築地心	−145199.50	−19433.00
築地東北隅	−144966.10	−19399.80
築地東南隅（推定）	−145199.31	−19398.37

塔心と東門心の座標値は『西隆寺発掘調査報告』による。金堂心の座標値は、西隆寺第3次調査（金堂地区）と一部重複した場所を調査した第209次調査の成果に基づき『西隆寺発掘調査報告』で採用している座標値を修正したもの。東面回廊棟通り、回廊東北隅（東面回廊棟通りと北面回廊棟通りとの交点）、南面築地心、築地東北隅の座標値は、実測図からの読み取り値（読み取り単位5cm）。築地東南隅の推定座標値は、傾き tan0° 18′ 58″ で南面築地心を通る直線と傾き－cot0° 19′ 50″ で東門心を通る直線との交点の座標。

(3)　奈良市第213-3次調査で検出した西二坊大路東側溝心（X＝−146200.00, Y＝−19647.88）を通り傾きが−cot0°19′50″の南北方向の直線と、東門心（X＝−145077.84, Y＝−19399.07）を通り傾きがtan0°18′58″の東西方向の直線との交点との座標値を求めるとX＝−145079.25, Y＝−19654.35を得る。この点と東門心との距離は255.28mであり、1尺＝0.296mで計算すると862.4尺となる。したがって、西隆寺西面で西二坊大路の道路幅を縮めていない限り西隆寺寺地の東西幅はこの値より短いはずである。側溝の幅、築地の幅等を考えると西隆寺寺地の東西幅は850尺の可能性が高い。

2　寺地と伽藍

西隆寺が平城京左京一条二坊の北西四町（九・十・十五・十六坪）を占めたことは、種々の史料からも明らかである。これまでの調査で、金堂・塔・東門などの主要遺構の位置が確定し、上記四町の占地は正しく裏付けられている。まず、1976年刊行の『西隆寺』発掘調査報告書によって旧調査区の成果を要約しよう。

金堂は、奈良時代前半に十坪・十五坪を分かった坪境小路とその中心をそろえており、寺地の東西中心に位置する。基壇の規模を、旧調査では127×79尺としていたが、再検討の結果、東西は129尺（38.2m）が妥当と考えられ、復原平面もFig. 51のように改訂した。

金堂基壇は129×79尺

東門は、二条々間路に面して開くことは明らかであるが、寺地東面での位置は、南北中心に当たらず、やや北へずれていることが判明している。東門の遺構は、親柱筋と西控柱筋の切石の礎石計八個を存し、平面を完全に復原し得る。三間一戸の門で、桁行の柱間寸法は中央間十四尺、脇間九尺、梁行は十尺等間である。僧門であり、八脚門と推定される。遺構面を勘案すると基壇は低く、また宮城門と比較すれば明らかに規模も劣るが、切石の礎石を用いるなど、京内寺院にふさわしい格式を備えていたことが想像される（Fig. 51）。

東門は三間一戸の八脚門

寺地東面の築地塀は、この門の棟通りにとりつき、新しく調査した寺地東北隅部分での知見を合わせると、そのまま東北隅まで直線状に伸びることがわかる。従って東門は築地面からかなり道路側に張り出すこととなり、道路との間に一定の幅の犬走りを取っていたのであろう。築地の規模は明らかではないが、やはり東北隅の暗渠（ＳＸ429）の状況から、その基底幅を６尺程度と推定した。

東門を入ると、バラス敷の道路（ＳＦ006）が寺域内を西へ導く。その南北は12.7ｍをへだてて両側とも築地塀（ＳＡ004・005）で画されており、寺域内が区画されていたことが明かである。

南側の区画内には、南方に塔が所在する。塔の遺構ＳＢ050は長辺約６ｍの、南北にやや長い方形平面の地業であって、その位置と基壇規模がおおよそ推定されるにすぎない。また、塔

塔は長辺６ｍの方形平面の地業を検出

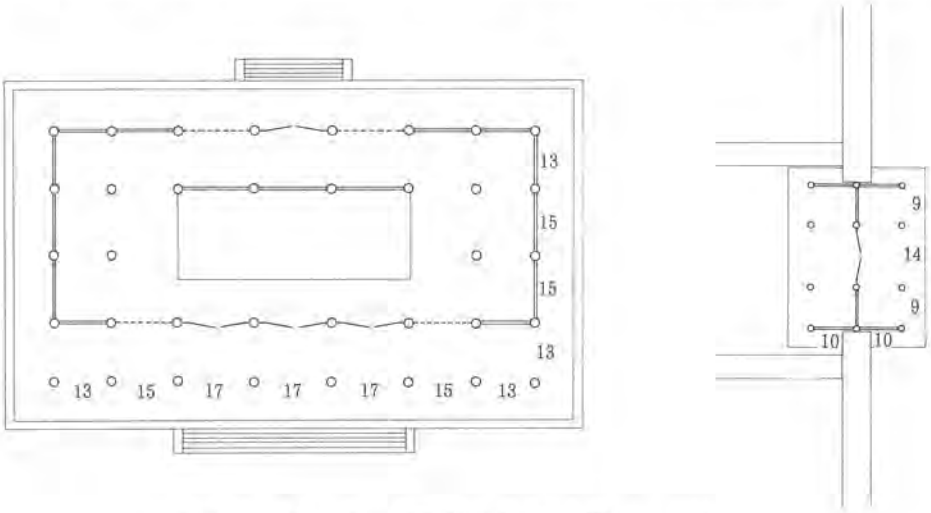


Fig. 51　金堂（左）・東門（右）復原平面図（1：500）

の周辺一帯には、他の建物などはほとんどない。

以上の成果に加えて、新調査においても多大な知見を得た。特に道路ＳＦ006の北側の区画内に、整然とした配置を持つ、まとまった建物群があることが判明した。これについては次節で詳述する。

一方、道路予定地と、その周辺という調査の性格から、新調査の発掘区は伽藍中心部から寺地東北隅へ斜め帯状に亘り、寺地内の利用状況を、全域に亘って推測する手がかりが得られたことも大きな成果となった。まず、寺地と伽藍の関係について述べよう。

寺地は、すでに述べたように四町分、したがって一坊の四分の一の一辺900尺の正方形の内に収まる。[1] いま、回廊で囲まれた伽藍の規模を復原すると、東西は心々で260尺であり、基壇の出を勘案すると、およそ82m（275尺）となる。すなわち、寺地全体の東西幅の中央１／３が、伽藍にあてられていると考えることができる。

東門は北面回廊の棟通りにその心を合わせており、寺地の南北中心よりやや北に位置するが、いずれにせよこれに続く東西道路によって、寺地の残り東側１／３は大きく南北に二分された区画となる。当然、西側も対称に南北二つの区画となることが考えられるが、寺地の西半には発掘調査はほとんど及んでおらず、ひとつの推定に留まる。主伽藍の北側をどう解釈するかは問題があるが、講堂・尼房の所在する、主伽藍と一連の区域と考え、以上をまとめると、概念図に示したような伽藍地及び四区画による寺地の構成が想定されよう。(Fig. 52)

寺地内の区画

このような寺地内の区画を「院」と称していたことは、東大寺や西大寺など、いずれも当代の寺院の史料によって明らかである。近接する西大寺においては、東西三町、南北四町の十二町分を、ほぼ条坊に従う町ごとに区画し、中央四町分に東西両塔・薬師金堂・弥勒金堂などの主要堂塔を配し、東西に計八院を構えていた。[2]

主伽藍復原

次に主伽藍の復原を試みよう。ほぼ確定しているといい得るのは、金堂の基壇範囲と、東北隅を含めた東面・北面の回廊の一部の柱位置である。また旧調査第４次の調査区北端で、回廊の南雨落溝となる可能性を持つ東西溝ＳＤ192が検出されており、これらからまず回廊の規模を推定すると、棟通り間で東西260尺（77.6m）、南北286尺（84.8m）となる。東面回廊は隅を含まずに27間となる。北面回廊が講堂にとりつくか否かは確定できないが、調査の知見では否定的な要素があり、復原図では金堂背後で閉じると仮定した。

中門・南大門の平面を示す史料はないが、中門は「西大寺伽藍絵図」に、ことさら「楼門」と記載があることにいくばくかの

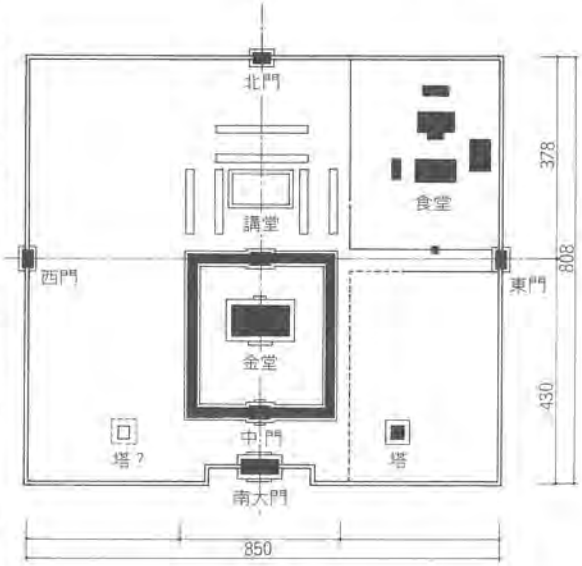


Fig. 52　西隆寺の寺地と建物配置（１：4000）

(1)　東西は築地心々で金堂中軸線から東側440尺、西側410尺、計850尺に復原される。

(2)　宮本長二郎「奈良時代における大安寺・西大寺の造営」（『西大寺と奈良の古寺』昭和58年１月）

真実の伝承を認めて、東門とほぼ同規模の三間の楼門と推定し、一方南大門は、東大門よりひとまわり大きい五間の門を想定した。南大門は、南側の道路の状況を勘案し、南面築地よりやや引込んで建つと推測した。講堂の規模及び位置は、尼坊に推定した建物ＳＢ542・545がその仮定の根拠である。

塔院の可能性

西隆寺の伽藍配置において特色となる点は、塔の位置である。西隆寺の塔は回廊の外にあって、しかも寺地のかなり南寄りに位置する。これは東大寺や唐招提寺、さらには興福寺などにも通ずる要素である。その位置からいって、塔自体の周囲に独立した回廊を持つ余地は少ないとはいえ、西隆寺の東南の院は全体が塔院であった可能性もありえよう。今次の発掘調査の主要部となった東北の院は、その位置と建物配置から、次節に述べるように食堂院と推定できる。残る西北・西南の院については、全くの仮説となるが、西大寺の例に照らしあわせれば、政所院ないしは正倉院であったことが考えられよう。

このように、寺地を東西三等分する全体の配置計画や、院による構成は、西大寺との共通性が高く、その強い影響を物語っていよう。また一方では、伽藍配置に、規模こそ違え特に東大寺との強い類似性があるのは注目される。法華寺が塔二基であることを考えあわせると、西隆

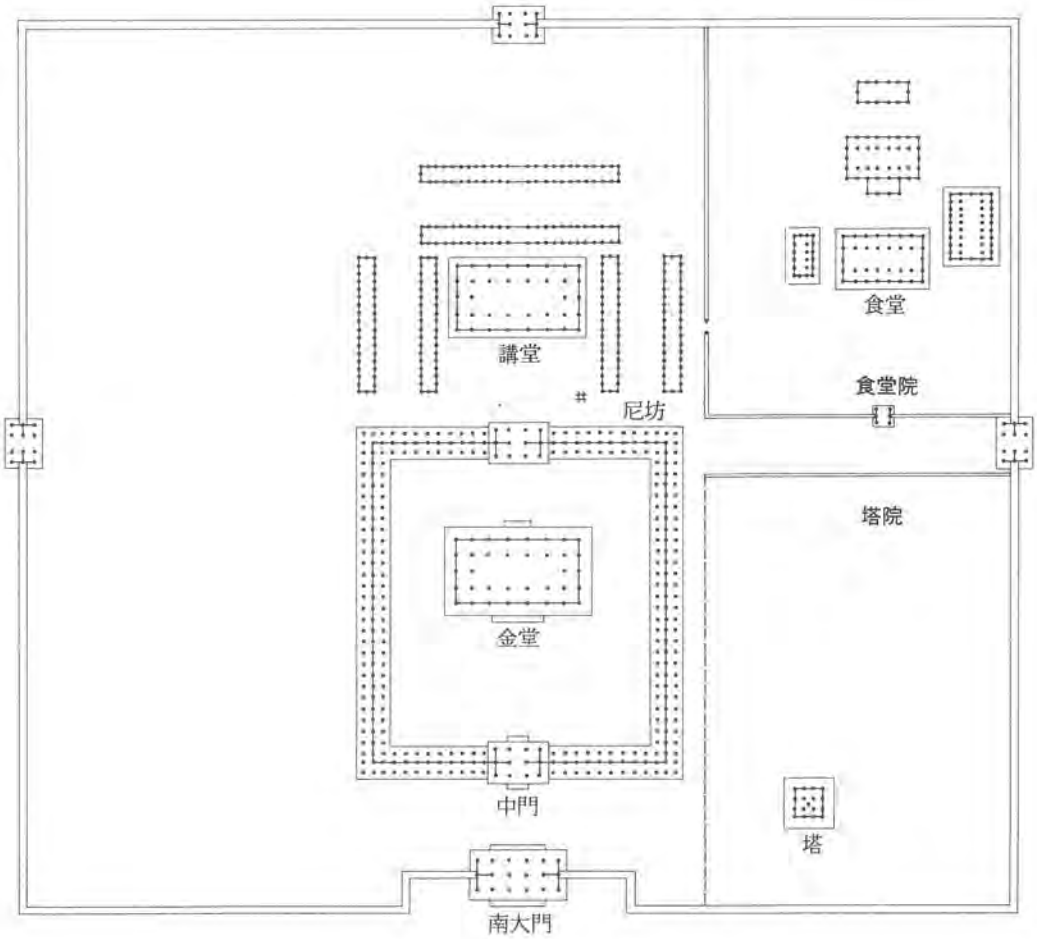


Fig. 53　西隆寺伽藍配置復原図（1：2000）

寺も、ＢＳ050と東西対称の位置にもう一基の塔を想定すべきかも知れない。

なお、上にも引用した「西大寺伽藍絵図」（西大寺蔵）に描かれた西隆寺の伽藍図についてであるが、金堂・回廊・塔の位置関係は発掘成果とほぼ等しく、『西隆寺発掘調査報告書』においても、「少なくとも主要堂塔の配置では真実を伝えたものとしてよい」との評価を与えている。しかし、寺地に比して回廊一画の規模が甚しく大きい点をはじめとして、東門の形式と規模、寺地東北部の様相などは、発掘調査成果とは一致しない。ただし、塔の周囲に建物が見られないこと、金堂・講堂の背後に多数の堂舎を描くことなどには大勢として調査成果と共通するものがあり、史料としてのこの絵図の限界と同時にある程度の価値をも示している。

いずれにせよ、西隆寺が上記のような構成を持つ四町占地の大寺として奈良時代後期に成立し、少なくとも東北の食堂院の一画は10世紀まで生き続けたことは明らかとなった。なお講堂・中門・南大門などが明らかでないうらみはあるものの、伽藍の主要堂塔ばかりでなく、寺地周辺部の様相までがこのように発掘調査によって明らかとなった例は少ない。

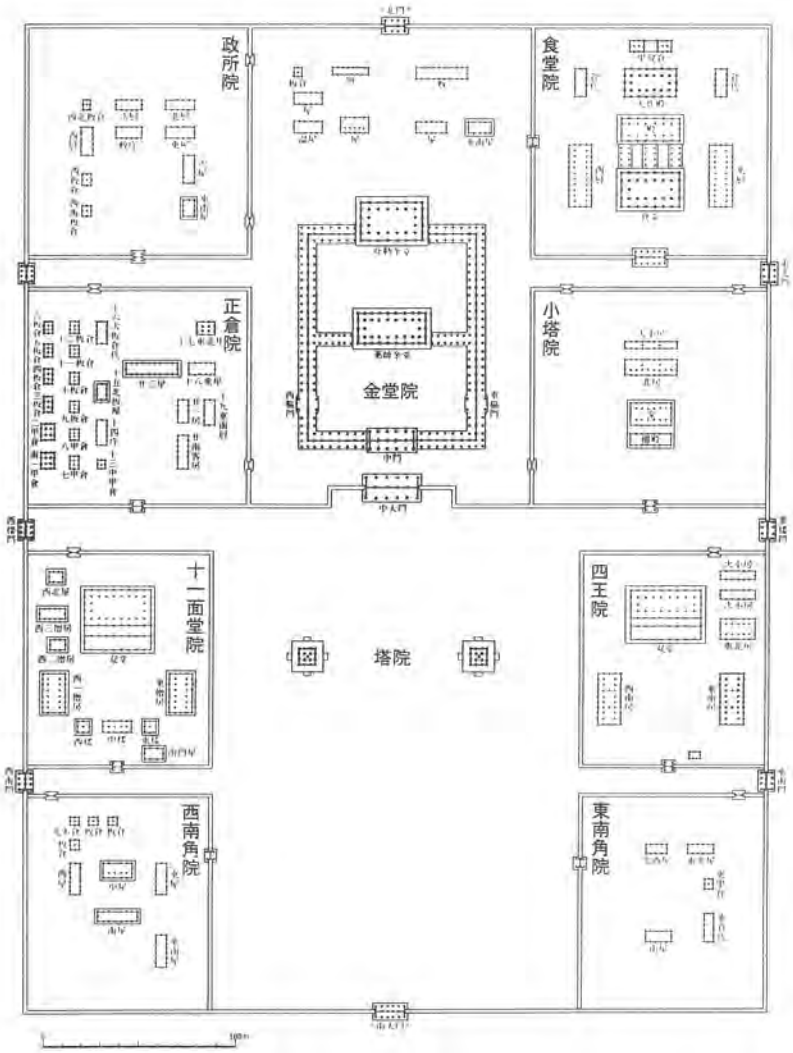


Fig. 54　西大寺建物配置図（1：4000）

3　遺構変遷と寺地東北部の性格

すでに前節で触れたように、新調査によって寺地東北に一院が検出され、食堂院と推定した。本節ではこの部分を中心として全体の遺構の時期区分を述べ、次いで食堂院推定の根拠を述べる。

［A期］　古墳時代。南西から東北に斜行するいくつかの大溝と、これに直交あるいは平行する小溝、及びその周辺の多くの掘立柱建物からなり、このあたり一帯が6世紀を前後とする古墳時代の水田ないし集落であったことを示す。

なお、より古い縄文時代の斜行溝（ＳＤ440）や、布留式土器の時期の遺構も見られることをつけ加えておく。

西隆寺造営前の平城京の宅地

［B期］奈良時代前～中期。西隆寺造営前の平城京の宅地にあたる。坪境小路側溝（ＳＤ095・110）の存在によってこの四町が一町以下の宅地に分割されていたと想定できる。九坪には七間一面南北棟の建物（ＳＢ510）、十坪には同じく七間一面東西棟の建物（ＳＢ040）があっていずれも井戸（ＳＥ492・060）を伴ない、それぞれの主屋と推定される。ただし十坪に小規模な建物がいくつかあるほかは全般に遺構は少なく、宅地としての建物密度は低い。

一方、十五坪にはＳＢ120、ＳＥ130があり、池ＳＧ140を伴なう。また、十六坪ではその一部ではあるがＳＢ200を検出し、柱間の規模などからも主屋に相当するものと推定される。その北方にはやはりこの時期の井戸ＳＥ203がある。以上、後に西隆寺の宅地となる四坪にはいずれも建物と井戸が配され、各一町以下の宅地であったことはほぼ裏付けられたといって良いであろう。しかしその敷地のいずれもが、あまり建物数が多くない様相を示しているのは、九坪内に池状の施設ＳＧ530があることとあわせて、この地域の特殊性ないしは開発途上の状況を示しているのかも知れない。九坪の坊間路に面する位置の掘立柱塀ＳＡ425も、宅地の外周を画するとするには、築地と比べるとやや貧弱な施設であるが、同様の状況は左京三条二坊（長屋王邸）でも見られる。

［C期］　西隆寺造営期。奈良時代後期。西隆寺造営に伴なって、この地の様相は一変する。伽藍内外は言うに及ばず、敷地内のすべての建物は破却され、整地を行なって寺地となる。

まず伽藍北方では、廻廊地面から14.5mをへだてて、桁行七間以上の東西棟ＳＢ541が建てられ、その北は東西塀ＳＡ547で画される。ＳＢ541の東妻は廻廊東面よりわずかに西に位置するが、伽藍に付属した施設と見なされよう。その位置と桁行が長いことからは、僧房の機能が最もふさわしいが、次期にこれを南北棟に建て替えて整備が進む状況をみると、仮設的なものの可能性もあり得よう。ＳＡ547の北方にも、さらに東西棟ＳＢ546が配される。

さて、絵図や、当時の伽藍配置の類型からは、北面廻廊ＳＣ450は講堂にとりつくのが当然と考えられるが、少なくとも金堂と同等ないしはそれ以上の規模の講堂の遺構は、調査区内には検出されていない。また、次期に位置付けた廻廊北方の井戸ＳＥ548は、遺物からいってこ

の時期まで遡る可能性を有しており、いずれにしてもやはり金堂と同規模ないしそれ以上の講堂が回廊に連なるという想定には否定的な事実である。したがって講堂の解明には伽藍中軸上のさらに北方の調査が不可欠であり、北面回廊が講堂にとりつかずに、金堂周囲で完結する可能性も今後考慮する必要があろう。

次に寺地東北部では、池状の湛水施設ＳＧ530が整地に伴って埋め立てられ、四周を築地塀で画した一院が形成される。その当初の建物配置は、Fig. 55のようである。すなわち、桁行七間の大規模な建物ＳＢ490Ａを中心として、その背面三方を囲むように３棟の桁行五間の建物（ＳＢ485・495・520）が配され、さらに北方に桁行七間の建物ＳＢ505が建つ。ＳＢ505は塀で囲まれている。

中心建物ＳＢ490Ａ

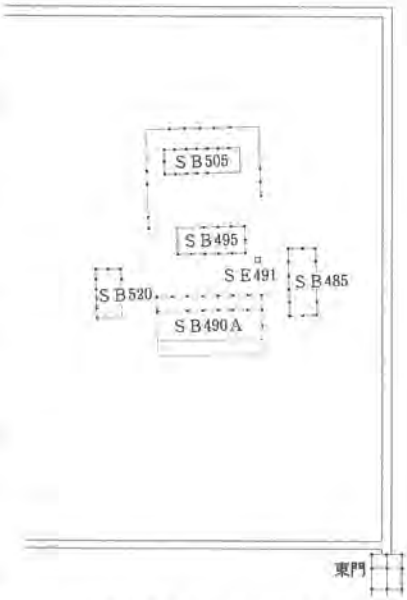


Fig. 55　Ｃ期の食堂院遺構配置（1：1500）

食堂院　この中心建物ＳＢ490を西隆寺食堂と、またこの院を食堂院と推定する。その主要な根拠は、次の三点である。

①ＳＢ490Ａは次期に同位置・同規模で礎石建の建物ＳＢ490Ｂに建て替えられ、長期に亘って存続した大規模な堂であること。

②その位置が、伽藍東北にあること。食堂を伽藍中軸から東方にはずして建てることは、奈良

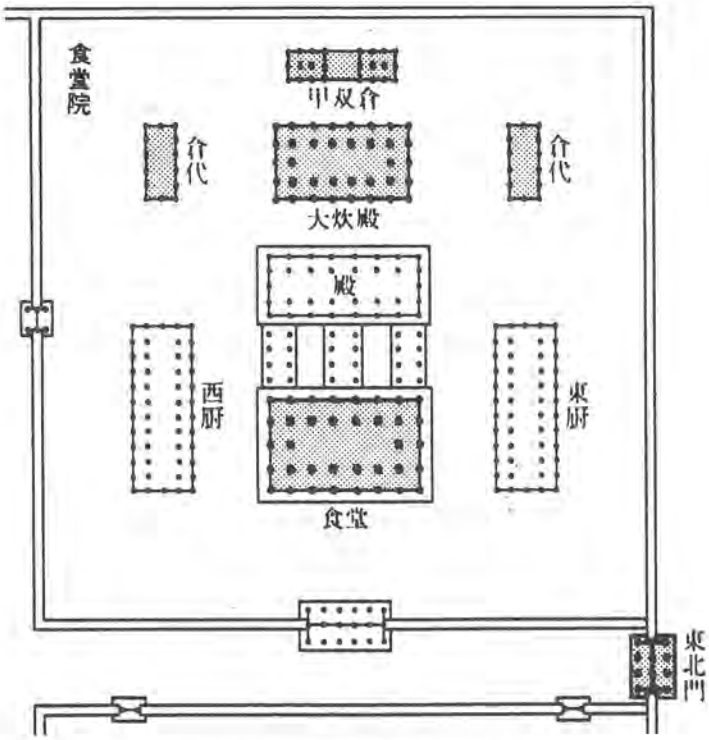


Fig. 56　西隆寺食堂院建物配置復原図（1：1500）

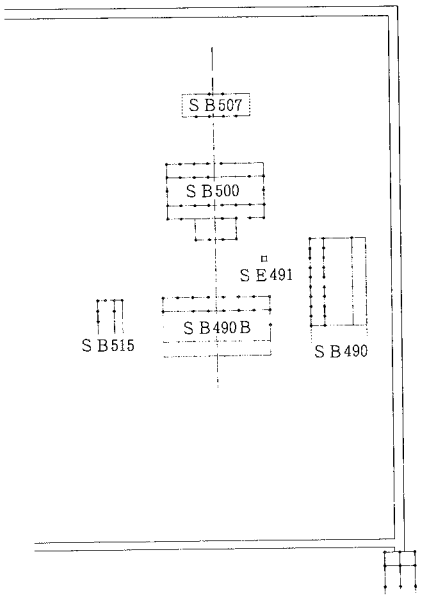


Fig. 57　D期の食堂院遺構配置図（1：1500）

時代の新風と考えられ、興福寺・東大寺などで食堂はこの位置にあり、また史料から、西大寺も食堂院は寺地の東北隅に復原されている。

③院内の建物配置・構成が、西大寺に近似すると考えられること。西大寺の「資財帳」では食堂院の構成建物を、「瓦葺食堂（一宇）、桧皮殿、桧皮雙軒廊（三宇）、瓦葺大炊殿、東桧皮厨、瓦葺倉代、西桧皮厨、瓦葺倉代、瓦葺甲雙倉、中間、馬屋房」と数え上げており、これをもとに宮本長二郎はFig. 56のような復原図を提出している。これをFig. 55の遺構配置図と比較すると、ほぼ同一の構成であることは瞭然であり、ＳＢ490を食堂、ＳＢ495を「殿」、ＳＢ505を「大炊殿」、ＳＢ485を「東厨」、ＳＢ520を「西厨」に比定しうるものと思われる。倉代・甲倉の類は検出されていないが、院内の未発掘部分に充分あり得るところで、横板組の上質の井戸ＳＥ491の存在も、食堂院にふさわしいものである。南限の築地塀ＳＡ004には、食堂中軸線上に当然南門を開いていたのであろう。一方、院の西限については、食堂西方やや南寄りに掘立柱の棟門ＳＢ540が検出されており、痕跡は残さないが、この南北に当然築地塀が連なっていたものと想定した。したがって食堂院の規模は、四周の築地の心々で東西80.4ｍ（270尺）、南北111ｍ（375尺）とみなされる。

食堂は食事をする所

殿は配膳室
大炊殿は食堂院の管理棟

厨は食物を調理する所

この時期の食堂院の遺構の存続期間であるが、尼坊に比定したＳＢ541と同様に、比較的短時間であったと推定される。その根拠は、１）まず食堂自体を含めすべての建物が掘立柱建であり、この後礎石建に改められているものが多いこと、２）建物の方位が、いずれも北で西にかなり（約１°30'）振れていること、３）柱抜取穴に、整地土と推定される黄色土を含んでいるものが多いこと、などである。特に２）の方位の振れは、伽藍廻廊や想定東面築地の方位と比較しても顕著なものであり、「殿」に推定した建物ＳＢ495ないしはＳＢ505と、次期のＳＢ500（七間二面）とを比較しても、仮設的な状況を示しているといえよう。

［Ｄ期］　奈良時代末期から平安時代初頭にかけて。西隆寺々域内が整備された時期。

伽藍北方では南妻をそろえて２棟の南北棟建物ＳＢ542・545が建つ。ＳＢ542は桁行10間以上で、さらに北に伸び、ＳＢ545も同等の規模と推定される。これらは、ＳＢ541の建て替えによる整備をされた尼坊と推定され、西方にも伽藍中軸線を心として対称に配されたと考えられよう。ＳＡ545の西南にはＳＥ548があって講堂の位置に疑問を投げかけているのはすでに述べた所である。遺構面は全般に削平がみられるとはいえ、他の礎石建物は随所でその痕跡を留めており、西隆寺においては尼坊が一貫して掘立柱建であったことは注目されよう。

東北方の食堂院の区画はそのまま存続しているが、建物はFig. 57のように大改修を受ける。食堂は礎石建に改められ、その西方にも小規模な礎石建物が付加される。東厨の位置には礎石建九間二面南北棟という建物ＳＢ480が建ち、大規模な厨としてここに機能が集約されたと推

食堂院の大改修

定したが、西大寺資材帳の記載からはむしろこれに大炊殿を比定すべきかも知れない。「殿」は位置をやや後退させて七間二面の建物ＳＢ500となり、後方に後殿ＳＢ507を従える。食堂・殿・厨の中間に位置する井戸ＳＥ491Ｂは、扉板を井戸枠の補強材として付加するなどの改修を受けながら、10世紀まで存続したことが遺物から確かめられており、それはこの食堂院そのものの廃絶時期にも示唆を与える。

食堂・厨が礎石建となったこの時期の食堂院こそ、その完成された姿と言うべきであろう。「殿」が食堂に匹敵する規模となったことも、資材帳に記す西大寺の状況と相等しい。さらに

階　隠　このＳＢ500には、建物前方に中央三間と柱筋をそろえた四つの柱穴があり、これらを階隠と推定した。側柱との距離は3.9m（13尺）であるが、これはこの建物が床張りで、おそらく周囲に縁を巡らし、さらに木階をとりつけていたことを示すのであろう。床高・縁の出を共に5尺程と仮定すると、階隠内にこれに見合う木階を設けることができる。古代の建物遺構に階隠が確認された例はまれで、食堂院の「殿」の建物にこのように具体的なイメージを与え得たことはいささかの意義があろう。

なお、上記の四つの柱穴については、独立した三間の目隠塀という推定があり得ると思われるが、あえてそれを採らなかったのは、先に引用した復原案（Fig. 56）の通り、西大寺の場合は食堂と殿とが三条の軒廊で結ばれ、むしろ密接なつながりを保っていたと考えられるためであり、ことさらその中間を閉ざすような塀を設けることはふさわしくないと判断したのである。東大寺・興福寺も、食堂とその後方の建物は軒廊で結ばれていたと復原されている。

［Ｅ期］　平安時代以降　伽藍北方では、僧坊が建っていた場所に、倉と推定される二棟の総柱建物ＳＢ543・544が建つ。僧坊が失われ、倉がとって代わったのであるが、これをもって回廊一郭も廃絶したとする根拠にはならない。むしろ寺地が縮小され、本来院を形成していた倉の機能がここまで近接してきた可能性を考えたい。

一方、旧食堂院では食堂ＳＢ490と重複して南北棟片廂の建物ＳＢ515およびそれに連なる塀ＳＡ522・525が、また殿ＳＢ500と重複して小規模な建物ＳＢ504が、それぞれ検出されており、いずれも食堂院廃絶後のものと推定したが、その時期について手がかりに乏しく、確定しがたい。井戸ＳＥ491も、この時まだ利用されていた可能性も大いにあり得よう。

しかしいずれにせよ、西大寺の衰退と同様に、平安時代に西隆寺がその勢力を急速に弱めていった状況は看取される。奈良時代後期に創建され、迅速に造営され、寺地内がくまなく整然と整備された、大伽藍といい得るほどの寺勢をほこったこの寺も、すでに第Ⅱ章で述べた通り、鎌倉時代には田畠に帰していたと推測される。近世元禄十一年の年記がある、「西大寺伽藍敷地并現存堂舎坊院図」には、未だその礎石を地上に留めていた様子が描かれている。しかしこれらの礎石もすべて失なわれ、現代その跡は都市のビルの下に没し去ろうとしている。

4　ＳＥ491出土の扉板とその復原

井戸ＳＥ491の井戸枠内側には、四面に板材が添え立てられており、扉板の転用であることが判明した。それぞれの材の上半は腐朽していたが、下半ではいずれも当初の幅を完存していた。各材は、片側の端面を丸く仕上げ、その下端に軸を造り出す。幅の寸法からＡ～Ｃ材とＤ材の２種に分類できる。Ｄ材のみは他と細部手法も異なり、別の建物か、あるいは違う部位に用いていたものと推定される。

Ａ　材

各材の所見を述べると、まずＡ・Ｂ材は同一規格で、厚さ７㎝弱の板材からなる。Ａ材は軸部分を破損したとみえ、その部分を切り取って後補している。後補材の短辺部分は目違で本体と接合し、長辺の端面二ケ所に角穴をあけ、穴内に釘を打って留め、埋木をしている。また扉の召し合わせ側の端部、幅９㎝の部分も本体と別木であるが、接合部分は本実矧で、さらに釘留めの上埋木を施しており、木口の端喰のおさまりからみて、当初からこの形で全幅を形成していたと考えられる。

Ｂ　材

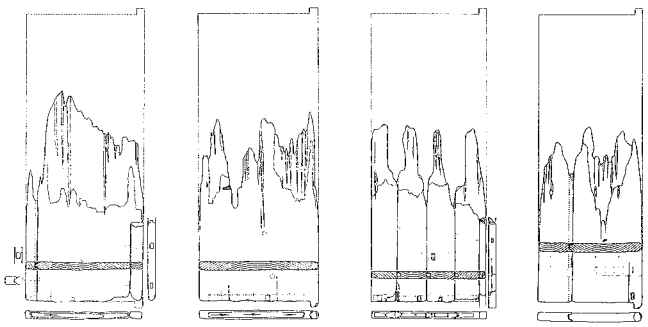
これに対してＢ材は完全な一枚板であり、造り出しの軸も残されている。全幅99.5㎝で、木口の端喰は80.5㎝に及び、三ケ所で釘留めとする。表裏の面のいずれにも、金具や桟の痕跡が一切認められず、戸締りのための仕口もないため、現在残されている部分は、扉の上側にあたるのではないかと推定される。Ａ・Ｂ材のように木口に埋め込みの隠し端喰をもつのは法隆寺金堂及び五重塔所用の扉と同等の手法で、貴重な実例を加えた。

Ｃ　材

Ｃ材はＡ・Ｂ材と同幅であるが、ほぼ同一寸法の４枚の板を本実矧で接合し、一枚の扉板に仕立てている。総幅96.5㎝と、Ｂ材よりやや短い。四材の接合方法は本実矧と太枘の併用であって、表面りには桟などの痕跡を留めず、すべて見え隠れで処理している。また矧合わせの造り出しを、下端から60㎝前後で凸凹逆にしており、綿密な手法といえる。扉の全長に対して、この寸法が規則性を持っていると推定すれば、240㎝、あるいは300㎝前後という全長の復原値を得る。法隆寺金堂の扉の縦溝の寸法の比率（0.33）からは、後者が妥当となるが、この材の厚さ（約７㎝）は、法隆寺金堂のそれ（約10㎝）よりかなり薄く、前者の可能性もあり得る。一方太枘の位置は、下端から約38～40㎝の所にあり、その上少なくとも60㎝の間には仕口がないので、全体で３～４箇所であったと推定される。

Ｄ　材

Ｄ材はやや幅がせまく、２枚の板をＣ材と同様に本実矧で接合し、横桟と八双金物の釘跡を共に残す点が他と異なる大きな特色であるが、端喰はない。総幅889mmは３尺、２枚の板幅はそれぞれ２尺と１尺、また横桟の間隔も２尺に復原され、きわめて規格的な造りであることも注目に値する。八双金物の形状は、法隆寺東院夢殿の旧扉金具や、唐招提



Ａ材　Ｂ材　Ｃ材　Ｄ材

Fig. 58　ＳＥ491出土の扉板

寺金堂所用のものに類似した、おだやかな出八双に復原されるが、およそ扉板の半分にも及ぶ長さをもつ点は常識を覆すものであり、当代に実用をこえた扉の飾りとしても八双金物が活用されたことがうかがわれる。この材の場合は、横桟の間隔が一定で、かつ上下のあきが等しいと仮定すれば、全長の適当な復原値として245cm、304cmという二つの値が得られ、C材の場合とほぼ一致するのは注目されよう。法隆寺伝法堂の場合、扉々の柱間寸法12尺（天平尺）に対して長押間の内法寸法は8尺であり、扉幅は約114cmであるので、扉の復原長として8尺という値は充分に可能性があるといえる。いずれにせよ、全長10尺の扉（A～C材）は主要堂塔に、8尺の扉（D材）は床張りなどの堂に用いられたと考えると、その意匠の差も理解されよう。また、軸の欠損の状況からは、かなり長期に亘って使用されたこと、またD材の表面に焼損の跡がみられることからは、その廃絶の状況もうかがわれる。なお、これらの扉板の他に、中方立とも呼ぶべき材の断片が出土しており、古代の扉口の工法の一例として貴重である。

八双金物

A～C材とD材の意匠の差

今回の発見は、井戸への転用材として平城京では宮跡内外を通じて初めての例である。法隆寺金堂、五重塔所用のものと、その規模や端喰の技法が一致し、一枚板のものとして年代的にもそれらに次ぐ古さをもつこと、さらに複数の材を集成する手法や、八双金物、横桟などの細部技法、さらには当時の修理の技法をも知ることができたことの意義は大きい。また、その規模と意匠からは、上記のように西隆寺内の堂に用いていたものの可能性が高いと思われるが、年輪年代の測定結果とは必ずしも合致せず、宮内など他の場所から運びこまれた可能性も検討しなければならない。

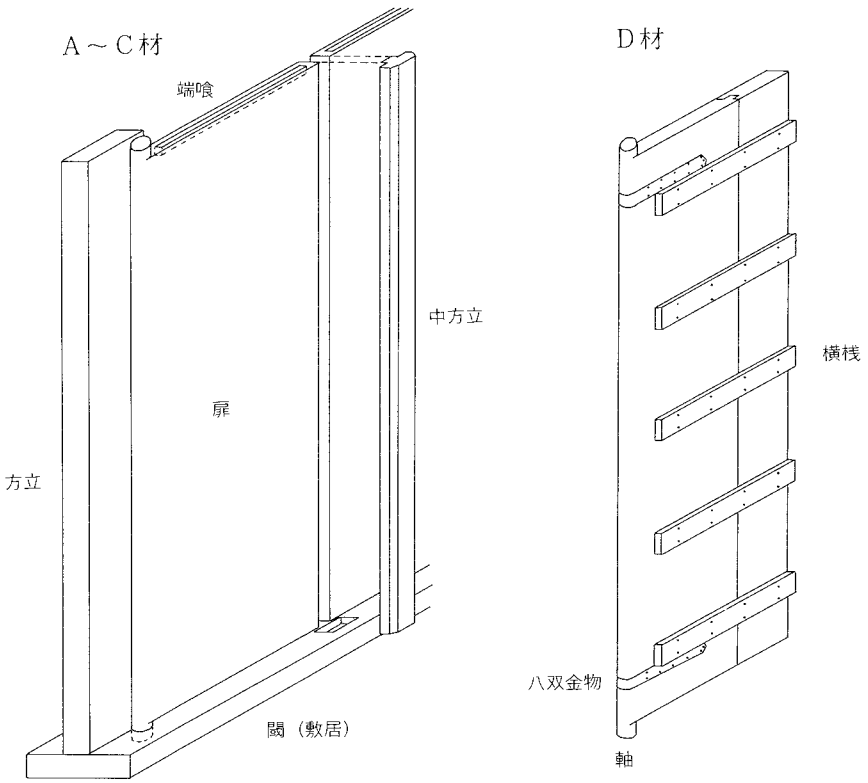


Fig. 59　SE491出土の扉板復元

5　考古学からみた土器埋納遺構の性格

212次調査で回廊東北隅から土器埋納遺構ＳＫ499が発見された。調査担当者は、発見当初これを、回廊建立もしくは主要伽藍の安寧静謐を願う地鎮め遺構と考えた。ところが埋納土器内の土壌６点をサンプルとした脂肪酸分析の結果、そのうちの３点から動物性脂肪酸が検出され、土器内には胎盤に類する動物遺体が埋納されていたと判定されるに至った[(1)]。現在は本遺構を巡って、胞衣壺とする見解と地鎮め遺構とする見解が対立する形となっている。

本項ではこれまで脂肪酸分析の結果ばかりが強調され、一部に、出土状態や出土遺構まで誤って伝えられるに至っている現状に鑑み、調査担当者として、本遺構の調査成果を明確に提示し、その性格判断を行おうと考えるものである。

まず第一に、本遺構の検出状態を確認するとともに、埋納時期を確定する必要があると考える。第二に、脂肪酸分析の結果に対する疑問点を提示する。次に、これまで発掘調査で検出された胞衣壺の類例を検討し、胞衣壺説の矛盾点を提示する。最後に、地鎮め遺構の可能性を示唆しておく。

Ａ　検出状態

土器埋納遺構ＳＫ499は、複廊である回廊の東北隅、中央柱穴で検出した。出土状態等の詳細は土器埋納遺構の項を参照されたい。本例の性格を考えようとするとき、まずその埋納時期を確定することが必要となる。時間的な前後関係から言えば、回廊建立前、回廊建立時、回廊建立後のいずれかである。

回廊建立前　　今回の一連の調査によって、回廊周辺には奈良時代前半に遡る小規模な掘立柱建物や土壙が点在し、居住地として使われていたようだ。本遺構を胞衣壺と考えた場合、居住地のこうした小形掘立柱建物の近傍に埋納したとするのが、もっとも考えやすい。しかし、本遺構の土師器甕Ａが平城宮土器編年Ⅳ～Ⅴ期に位置付けられる限り成立する可能性はない。

回廊建立後　　この場合も回廊建立前とする考えと同様の困難がある。回廊建立後ほどなくして主要伽藍は徐々に衰微していったようだ。しかし回廊北東の池状遺構ＳＧ530上層からは９世紀の遺物が出土するとともに、井戸ＳＥ491からは10世紀後半代の供膳・煮沸形態の土器が多量に出土している。主要伽藍の東北部では、長らく何らかの生活が続けられた可能性がある。それらの人々が回廊衰微後に土器を埋納する可能性は否定できない。

しかしまず土師器甕Ａは平城宮土器編年Ⅳ～Ⅴ期のものであり、この種の土器が伝世することは考えがたい。遺構の上からも、検出された楕円形の土壙はその位置はもちろんのこと、形態・埋土等、一連の回廊礎石据え付け掘形と何等変わるところがない。また新しい土壙が切りあっている可能性も、平面検出・断割り調査、いずれの結果からも否定せざるをえない。

つまり本遺構の時期として矛盾なく解釈できる考え方は、唯一、回廊建立時に埋納したとする次の考えかたである。土器埋納遺構は回廊建立時に礎石据え付け穴を開削し、根石を据えるまでのきわめて短い間に埋納されたものである。

回廊建立時に埋納

(1)「西隆寺跡から出土した土器に残存する脂肪酸分析」『1990年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1991

B　脂肪酸分析結果に対する疑問点の提示

脂肪酸分析はズコーシャと帯広畜産大学に依頼し、両者の署名入りの報告書を受領している。ここでの記述は、すべてこの報告書の内容に対するものである。

報告書によれば、脂肪酸分析は、次の手順で行われている

1. 資料の採取
2. 脂肪酸の抽出
3. 脂肪酸組成の検討
4. ステロール組成の検討
5. 脂肪酸組成の数理解析
6. 脂肪酸組成の種特異性相関

残念ながら、脂肪酸の分析値そのものに対して、批判を加える力量は持ち合わせていない。しかし少なくとも、分析値の解釈に対しては、科学的な推論の過程における問題点や疑問点を指摘することができる。

各段階それぞれについて、疑問を提示する。

1. 資料の採取

№1から№6まで6点の資料が採取されている。このなかで1から3が土師器甕の外。4から6が土師器甕の中である。さて問題点は2点ある。まず先にも述べたように、この甕は、表土直下で検出された。具体的には、表土から土器口縁部まで50cm内外しかない。つまり地表面に非常に近い場所に埋納され、かつ蓋などの遮蔽物がない状態の甕は、地上からの様々な汚染をひじょうに受けやすい状態であった。この地点の調査以前の状態を順に遡っていくと、百貨店の商品搬入口近くの廃品置き場、百貨店建設にともなう事務所兼作業員宿舎、個人住宅出入り口に近い庭であった。とくに百貨店に関わる前二者の時期には、動物質を含む雑多な汚染をたいへん受けやすい地であったことがわかる。

発掘地は現代の汚染を受けやすい地であった

第二に、こうした汚染の有無を判定するために、6カ所の資料採取を行ったと推量されるが、この地は、秋篠川によると思われる砂層を基盤にしており、回廊の基壇もこの砂層で形成される。とくに土器埋納遺構の発見された場所は、砂層に加え、下層に秋篠川の旧流路があり、非常に水引のよい、汚染物質の透過しやすい地層である。つまり汚染物質があったとしても、甕の外では透過して検出されない可能性が高い。したがって、甕の外の資料1～3で動物性脂肪酸が検出されなかったことを根拠に、汚染がなかったと結論付けることは困難である。調査前の土地利用状態より考えて、動物質を含む汚染を受けていた可能性を想定する必要がある。

2. 脂肪酸の抽出

この段階には、問題となる点は存在しない。甕の中の土が、抽出率0.0188から0.0786%であったことは、他の分析例に比べ、分析の確度がより高いものと考えるに足る結果である。ところがこの結果は、ステロール組成の分析値と一致しない。つまり、脂肪酸はたくさん抽出されたが、なかのステロールは少なかったという矛盾した結果となっている。

3. 脂肪酸組成の検討

ここで問題となるのは、甕内の土No.4から6の試料の示す脂肪酸組成の理解である。分析結果には、「試料No.4は他の試料No.5、No.6とは多少異なる脂肪酸組成パターンを示した」と記される。つまりNo.4は、No.5、6に比べ、「もっとも多く分布していたのはパルミチン酸で27%、次いでステアリン酸、オイレン酸、リノール酸がほぼ同程度分布していた。」とされる。これについて報告は「ステアリン酸、オイレン酸、リノール酸の分布割合は植物脂質にはない脂肪酸パターンで」と述べる。しかし一番多いはずのパルミチン酸は、報告によれば「主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物からきていると推定される。」という。脂肪酸組成を動物由来とするか植物由来とみるかで、報告書中に既に矛盾を含んでいる。No.5と6は甕の外のNo.1から3と明らかに組成の違うことが、提示された棒グラフから推量されるが、No.4はそのどちらにも属さない特殊な組成と考えるのが至当であろう。

試料No.4の特殊性

個々の数値に関しても、No.4の特殊性がうかがえる。No.5と6は「典型的な動物性脂肪が残存する谷状の脂肪酸組成パターンを示した。特にベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸の含量は、両者の合計で45～50%という高いものであった。」とされるが、問題のNo.4では、ベヘン酸、リグノセリン酸の比率が低く、パルミチン酸の比率が高い。報告は、「甕内の土壌試料には動物性遺体が残存していた可能性が高い。」と結論づけるが、正確には、No.5、6には動物性遺体が残存していた可能性が高いと言うべきであろう。

4. ステロール組成の検討

ここでもNo.4の特殊性が浮き彫りにされる。報告では、「植物由来のシトステロールは（中略）試料No.4ではまったく検出されず、コレステロール以外のその他のステロールが約90%近くを占めていた。その他のステロールの大部分は動物性ステロールと推定される。」と述べる。しかし、分析値を見ると、コレステロールは2.10%と試料6点のうち最低の数値を示す。少なくともこの結果から「その他のステロールの大部分は動物性ステロールと推定される。」というのは分析結果から逸脱していると言うべきである。またシトステロールがまったく検出されないことから、No.4はステロール含有量が異常に少なかったと考えるべきだろう。資料の分析量自体が少ないとき、含有量の相対的な評価は、当然不安定なものになる。少なくともコレステロール2.10%という数値を無視して、シトステロールが検出されなかったことをもって、動物性遺体の存在を推定することは、無謀であるといわざるを得ない。

さらに脂肪酸組成で動物性遺体が残存していた可能性が高いとされたNo.6では、コレステロールとシトステロールの分布比が低い。報告も「動物性脂肪酸の存在を示す脂肪酸の結果とは一致しなかった。」と述べ、この事実を認めている。これは脂肪酸組成からみた結果と明らかに矛盾している。これに比べNo.5のコレステロール31.59%という数値は、No.4・6と比べ異常に高い。No.4～6も甕の中とは言え、脂肪酸組成とステロール組成の結果が矛盾するなど、試料の安定性に疑問があると言わざるを得ない。

5. 脂肪酸組成の数理解析

報告では明言しないが、図にあげられるクラスター分析の手法を見れば、この分析の目的が

奈辺にあるか、一目瞭然である。今回の分析は、試料がどういった物資の脂肪酸に由来するのかを見るのではなく、“試料のいずれが、人間の胎盤と似た組成をもっているか”という観点から行われている。報告のはじめの部分では、「この甕は胞衣壺と推定されている。」と断言されている。全分析結果の底流に、この先入観が流れている。これまで述べたとおり、この先入観のために、分析結果にかなり無理な解釈が加えられていると言わざるを得ない。

土器埋納遺構の発見当初は、地鎮め遺構の可能性を考えており、胞衣壺の可能性は低いものと考えていた。試料の提供に当たってどういう経緯があったかは今となっては不明であるが、試料提供の時点で、かような錯誤が生じたとすれば、調査担当者として深く反省せねばならないと考える。

実際のクラスター分析では、“試料のいずれが、人間の胎盤と似た組成をもっているか”という観点から分析資料を選定している。今回採集した資料6点と比較されているのは、いずれも同じ分析者によって、胞衣壺と判定された、平城京右京三条三坊一坪の土師器壺資料1点、平城京左京五条五坊十坪の土師器壺資料1点と人間の胎盤である。分析方法が、各資料間の相対的な相関係数から、類似度を樹状構造図として表わすものである限り、結果は分析をする以前に決定している。胞衣壺に類似する以外の結果が得られるはずはないのである。

6. 脂肪酸組成の種特異性相関

種特異性相関の分析においても、報告の内容に自己矛盾が存在する。報告は「第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物」が分布すると述べる。「試料No.4は単独でB群を形成し、第2象限の原点から少しはなれた動物性脂肪の位置に分布した。」と述べる。図でみる限り、第2象限の原点に近い位置と思えるのだが。少なくともNo.4の位置が、動物性脂肪の分布域にはいることを数値で示すべきであろう。

以上を総合して、総括として分析結果のまとめが行われる。

まず報告は、「試料No.4、No.5、No.6には動物性脂肪が残存している可能性が高い。」とする。

試料No.4についての疑問

先にも述べたように、No.5については問題ない。No.4の解釈が問題となる。No.5・6とくらべ、ベヘン酸やリグノセリン酸と言った高級脂肪酸が少なく、オイレン酸やステアリン酸が多いという特異性を、動物性脂肪として解釈して良いのだろうか。そう解釈するのなら、少なくとも根拠を明示すべきだろう。

「また、ステロール分析と数理解析の結果試料No.4とNo.5の位置には動物性脂肪が多量に残存していた可能性が高い。」とする報告は、No.5については首肯されるものの、No.4については疑問が多い。「特に試料No.4には胎盤様のものが残存していた。」という結果も、クラスター分析が、胎盤以外の他の脂肪酸との相関行列距離を検討していない限り、にわかに信じるわけにはいかない。

個々にあげた疑問のいずれもが、胞衣壺の可能性が高いとする先入観から生じたものであることは多言を要しない。さらに同じ分析者が別の機会に次のように述べている。「脂肪酸およびコレステロールだけでは、動物種を正確に判定することが困難な場合がある。」[(1)]と。つまり

(1) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　昭和63年度』1989

今回の分析では、なんらかの理由（おそらく埋納後の汚染によるものだろう）によって、分析値が不安定で、これだけで埋納物を特定することは困難な場合に相当するのであろう。

C　胞衣壺説の矛盾

上記2では胞衣壺説の大きな根拠となっている脂肪酸分析の結果が、いろいろな矛盾をはらんでいることを述べた。次に考古学や民俗学の上からこれまで考えられている胞衣壺の範疇で、今回の土器埋納遺構を理解することができるかの検討を行っておきたい。

1. 胞衣壺の概念

画期となった水野正好氏の論考[(1)]以来、胞衣壺について次のような共通理解が得られていると考える。

まず1．胞衣壺とは、後産を容器にいれ、副納品とともに埋納したもの。2．埋納の場所は、民俗例では、人のよく踏む場所と踏まない場所という、相反する二例が知られている。3．副納品は、民俗例では、男児は筆・墨・銭。女児は針・糸・銭である。以上の3点について、順次、今回の土器埋納遺構との対比を試みる。

後産の埋納　後産の埋納である限り、出産という行為が西隆寺で行われたと考えざるを得ない。しかしこれがいかに困難な想定であるかは多言を要しないであろう。さきに述べたように、土器埋納遺構は、回廊建設時の、礎石据え付け穴を掘削してから、根石を据えるまでのきわめて短期間に埋納される必要がある。回廊の柱建立に伴うなんらかの建築儀礼を考える以外に、このタイミングで埋納できる可能性はないといって良いだろう。また回廊建立中に、すでにこの地で尼僧の生活が営まれていたと考えることができるであろうか。

回廊建立時に後産の埋納を想定するのは困難

埋納場所　民俗例では、人のよく踏む場所の場合、建物の出入口・土間、馬屋、産所、便所の近くなどの事例がある。逆に人の踏まない場所としては、墓地のなかというのが多い。出土例でみると前者、人のよく踏む場所というのが多い。奈良時代の胞衣壺の典型例として有名な、平城京右京五条四坊三坪では、SB025の入口と推定される柱の脇に埋納され、平城京右京八条一坊十四坪では掘立柱建物SB1534の出入口の庇部分に埋納された。最近にわかに事例の豊富になった、近世の町屋の場合、入口や通り庭と呼ばれる土間に複数の胞衣壺が埋納される場合が多い。これまでの出土例を見る限り、少なくとも寺院の境内から発見された例はない。ただ、中世後半からは寺院境内に墓地が営まれるようになる。この場合、寺院境内から胞衣壺が発見される可能性はあろう。しかしこれも墓地の近辺に埋納したもので、寺院に埋納したわけではない。

副納品　民俗例で見られるような、男児は筆・墨・銭、女児は針・糸・銭という整った副納品がみられる出土例は極めてまれである。とくに、今のところ、女児の胞衣壺と確認された例はない。男児の例でも、筆・墨・銭がそろうのは、古代では平城京右京五条四坊三坪が唯一である。墨・銭が残る例は、平城京右京八条一坊十四坪、鳥取県米子市諏訪遺跡群が知られる。胞衣壺と考えられる例の多くは銭貨の出土をもって胞衣壺と推定している。水野氏の引用する『玉藻』の記事に、銭文を上にした銭貨5枚の上に、絹に包んだ胞衣を、埋納するとあ

(1)　水野正好「想蒼籬記壹叢」『奈良大学紀要』第13号　1984

る。この記事を根拠に、銭貨5枚の出土した土器埋納遺構を胞衣壺とする例が多い。本例も銭貨5枚が布に包まれている。

Tab.13には、私の今までに確認できた古代の胞衣壺の検出例をあげた。もちろんここにあ

Tab.13　胞衣壺検出例一覧表

遺　跡　名	遺構名・埋納容器		埋　納　物	建　物
平城京左京三条二坊十五坪(1)	SX105	須恵器壺A・同蓋	なし	SB104の西
平城京左京三条二坊十六坪(2)	SX38	土師器甕A・須恵器杯B蓋	墨	SB37の南西
平城京左京三条三坊一坪(3)	SX16	須恵器杯B・同蓋	和同4・不明銭1	SB62南西隅
平城京左京五条一坊八坪(4)	SX48	須恵器杯A・同蓋	なし	SB43の北
平城京左京五条五坊十坪(5)	SX17	須恵器杯A・同蓋	和同5	SB03の北西
平城京左京四条二坊十六坪(6)	SX07	土師器甕A・須恵器杯B蓋	なし	SB01北廂内
平城京左京四条四坊十一坪(7)	SX14	須恵器杯B・同蓋	和同2	SB03の南
平城京左京八条一坊三坪(8)	SX3388	土師器甕A・須恵器皿A	なし	SB3360の北
	SX3434	須恵器杯B・同蓋	なし	SB3420の南
平城京右京五条四坊三坪(9)	SX17	須恵器壺A・同蓋・和同4・筆管1・墨1		SB025
平城京右京八条一坊十四坪(10)	SX1535	須恵器杯B・同蓋	和同5・墨	SB1534
長岡京右京五条二坊十五町	SX07	土師器甕・土師器皿	和同1・萬年1・神功2 不明銭1・絹織物	離れて掘立柱建物
	SX08	土師器甕・土師器皿	神功1・不明銭4・絹織物	
小畑十郎殿谷(11)		土師器甕・須恵器杯B蓋	富壽神宝1・不明4銭・布	
津寺遺跡高田山調査区(12)		土師器甕A・須恵器杯B蓋	和同5	
馬屋（岡山県山陽町）(13)		須恵器杯B	和同4	
諏訪遺跡群西山ノ後地区(14)		土師器甕	和同3・鉄刀子1・鉄鋤先1・墨	小形掘立柱建物

(1) 奈良市埋蔵文化財概要報告書 平成2年度 1991
(2) 奈良市埋蔵文化財概要報告書 平成3年度 1992
(3) 奈良市埋蔵文化財概要報告書 平成元年度 1990
(4) 奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和59年度 1985
(5) 奈良市埋蔵文化財概要報告書 昭和63年度 1989
(6) 奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度 1984
(7) 奈良市埋蔵文化財概要報告書 昭和60年度 1987
(8) 平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告書 1985　1989
(9) 平城京右京五条四坊三坪発掘調査概報　1977
(10) 平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告 1989
(11) 龍野市教委『小畑から出た皇朝銭入りの壺』1992
(12) 岡山県埋蔵文化財報告21 1991
(13) 『吉備の考古学的研究（下）』1992
(14) 米子市諏訪遺跡群発掘調査概報Ⅱ 1981

げたのは、発掘担当者が胞衣壺として報告しているもので、個々に胞衣壺か否かの検討がすんでいるわけではない。これらの諸例を見ても、実に様々な内容を持っており、胞衣壺の実態をこれだけの考古資料から明らかにするのは、これまた無謀のそしりを免れえない。ただ銭貨5枚の埋納は比較的共通した特徴と言える。

しかし銭貨5枚の埋納をもってして胞衣壺の根拠とできるだろうか。5という数は、陰陽五行説に由来し、東西南北と中央という方位に由来するものである。とすれば、かならずしも胞衣壺のみに限られるわけではない。福岡県鞍手町汐干掛遺跡第5号墳墓[1]では、奈良時代の火葬骨蔵器を埋納した土壙の底の中央と四隅に和同開珎等が埋納してあった。5という数自体が聖的であるのだ。近世の例であるが、和歌山県高野山金剛峯寺宝性院の地鎮め遺構[2]は、敷地の中央と東西南北の5カ所に、折敷に載せた5枚の皿を埋納している。

少なくとも、銭貨5枚の出土をもって胞衣壺とする根拠は薄弱といわざるを得ない。筆・墨・銭がそろい胞衣壷の典型例として有名な平城京右京五条四坊三坪では、銭は4枚しか出土していないのである。墨・銭・鉄刀子・鉄鋤先が出土した鳥取県米子市諏訪遺跡群でも銭貨は3枚である。

2. 古代の穢感

民俗事例では血に伴う穢は、死に伴う穢と同様、重大な穢と認識される。血に由来する穢、つまり赤不浄は、民俗的にもっとも深い穢とされる地方もある[3]。寺院のそれも仏の空間であることを示す結界である回廊に、血の穢である胎盤を埋める行為が許されるであろうか。

以上に述べたように、この土器埋納遺構を胞衣壺だとする見解は、これまで胞衣壺に対してもたれてきた共通理解に対して、根本から再考を迫るものであるとともに、民俗学的な常識をも書き換えざるを得ないという非常に重大な意味を持つのである。

そうまでして脂肪酸の分析結果に固執する利が果たして我々にあるだろうか。脂肪酸分析の結果自体に、さきに述べたような疑問点がいくつかある以上、少なくとも胞衣壺説を一つの説として、他の説とともに冷静に判断する必要があるように思われる。

D　地鎮め説

寺院跡における地鎮め遺構は、これまでかなりの出土例が知られている。特に古代では東大寺、興福寺、元興寺など、南都七大寺をはじめかなりの類例が知られている。ただその多くは、金堂や塔といった中心伽藍から、金・銀・鏡・玉といった華麗な遺物を含む大規模な地鎮め遺構が検出されるというものだった。今回の検出例は、仮に地鎮め遺構だとすれば、回廊発見の地鎮め遺構として唯一の事例といえる。そのためこれまでの発掘成果で比較すべき検出例がない。しかしこれまでの発掘成果で、おぼろげながら地鎮め遺構の階層性が見えてきている。まずもっとも簡便なものとして土器だけを使用するものがあげられる。平城京右京八条一坊十四

地鎮め遺構の階層性

(1) 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸ』1978

(2) 元興寺文化財研究所『高野山発掘調査報告書』1982

(3) 波平恵美子『ケガレ』東京堂出版　1986

坪のＳＸ1579•1592•1593が類例である。古代に限らず近年、土器だけを使用した祭祀遺構の検出例が増えている。次が土器を容器とし、銭貨を伴うものである。平城京右京八条一坊十四坪のＳＸ1400や平城京左京二条六坊十二坪のＳＸ3150があげられる。この中に胞衣壺か判断に苦しむ例が多い。そして中心堂塔で行われる金・銀・鏡・玉を用いた地鎮め遺構がある。

今回の土器埋納遺構が地鎮め遺構だとすれば、回廊の地鎮めとして階層性がより明瞭となろう。ただこれまでの主要堂塔の地鎮め遺構では、地の神に賄賂として種々の貴重品を捧げ、建物の安寧静謐を願うのが通例と考えられた。回廊の場合、ややそれらとは様相を異にする。回廊は主要堂塔を取り囲み、仏の空間として他の境内地と区別する機能を持つ。この結界としての機能の中でも、東北隅というその埋納位置には、特別の意味が込められていたと考えられる。掘立柱建物にあっても、たとえば平城京左京四条四坊九坪のSB2390のように、東北隅の柱穴から銭貨の出土する例が二・三知られている。(1)

東北隅のもつ意味

陰陽道において東北は陰悪の気が集まり、百鬼が出入りする方角、鬼門として特別の意味ある方角として知られる。そこに鎮物を置くというのは、伽藍全体の安寧静謐を願うためには、格別の方法と理解されたのだろう。今回検出された土器埋納遺構を理解する上で、回廊の東北隅に埋納されたという事実を、より積極的に理解することができよう。

E　まとめ

以上の結果を箇条書きにまとめておく。

1．本土器埋納遺構は、発掘結果からみて、回廊建立時に礎石据え付け穴を開削し、根石を据えるまでのきわめて短い間に埋納されたものである。

2．脂肪酸分析の結果は、土器内に動物性脂肪の存在していた可能性を示唆している。しかし今回の分析結果から、それを人間の胞衣に由来するものと特定することは困難である。

3．これまでの考古学的な成果からしても、この土器埋納遺構を胞衣壺と断定するに足る資料はない。

4．むしろさまざまな状況証拠からみて地鎮め遺構と考える方が理解しやすい。

脂肪酸分析の結果だけが胞衣壺を示唆しており、それ以外の状況証拠はことごとく地鎮め説に有利なものとなっている。ただ本稿中で何回も述べたように、本遺構を地鎮め遺構と考えるにしても積極的な根拠があるわけではない。地鎮めと考えた方が矛盾が少ないと言うに留まる。

本稿では脂肪酸分析の結果に重大な疑義のあることを述べた。しかしその疑義の発生は主として、資料提供の際の相互の情報提供が円滑に行われなかったことによると考えねばならないだろう。われわれ考古学研究者が分析資料を提供する際に起こりがちな問題である。今回は情報提供の不足がいかに分析結果を誤らせるかの好例を提供してしまったようだ。

それと同時に考古学研究者が心しなければならない問題に、自然科学的な分析結果をいかに認識し、推論過程に組み込んで行くかである。そして今回私が批判したように、自然科学的な分析であるからこそ、確実な点は何か、推測はどの部分であるかを明瞭に区別しなければならない。〝科学的〟だからという理由だけで文章すべてを無批判に受け入れていいわけではないだろう。

(1)　奈良国立文化財研究所『平城京左京四条四坪九坪発掘調査報告』1983

6　西隆寺創建期の軒瓦

A　瓦葺建物の抽出

西隆寺の発掘調査面積は、過去の調査を含めて４町の寺域の約20％に達している。中軸線上の建物は金堂以外未確認であり、西半部についても調査が及んでいるのはごく一部にすぎないが、寺域東半部の様相はかなり明確となった。

軒瓦の総量　軒丸瓦の総合計は339点、軒平瓦は同じく471点あり、発掘面積１ａ（100㎡）あたりの軒瓦の平均出土点数は、7.0点である。この数値を平城宮と比較すると、瓦葺建物群として創建された第一次大極殿院の12.0点と、総瓦葺と桧皮葺の両者を含む内裏の5.2点の中間に位置することがわかる。これには西隆寺創建以前のものも含んでおり、西隆寺における軒瓦分布をそのまま示すわけではないが、遺構の上で西隆寺以前の明確な瓦葺建物が認められないことと、後述するように当該時期の瓦自体が全体の中では僅少であることを勘案すれば、西隆寺創建時の状況とそれほどかけ離れたものではないとみられる。ともあれ、瓦葺建物のみから構成される場合に比べて、低い数値であることは間違いない。西隆寺の場合は、軒瓦の分布に場所によってかなり粗密がある（152～153頁）こととあわせて、瓦葺建物とそれ以外の建物の二種類があったことをうかがわせる。ただし、軒瓦の使用状況に建物ごとの差が認められるとしても、桧皮葺の場合にも甍棟として軒瓦を使用する例があるため、軒瓦の数量は必ずしも瓦葺か否かを判定する材料とはならないことも事実である。そこで、軒瓦以外の丸瓦・平瓦の状況を指標として瓦葺建物を抽出することにしよう。

丸・平瓦の総量と比率　まず丸瓦と平瓦の総量についてであるが、過去の調査の総合計で、丸瓦は3,994.5kg（23,777点）、平瓦は13,283.5kg（104,207点）が出土している。今回数量把握の方法として、重量と点数（破片数）を計量したが、充分な接合作業を経ていないため、後者については個体数との関係を明らかにしがたい。ここで丸瓦と平瓦の比率を求めると、重量比が1：3.33であるのに対し、破片数では1：4.38となる。ところが、別に西隆寺出土の完形に近い資料から復元的に求めた1個体の平均重量は、丸瓦が2.5kg、平瓦が3.2kgであり、1個体あたりの重量で平瓦の方が重いことは間違いない。したがって、重量から推定される個体数の上では、平瓦の占める割合が重量比よりも小さいことになる。ちなみに、総重量をそれぞれの平均重量で割って完形品に換算すると（以下「重量比換算個体数」とする）、丸瓦は1,598点、平瓦は4,151点に相当するという結果が得られる。両者の比は1：2.60である。

丸・平瓦の平均重量

重量比換算個体数の算出

こうして導きだされた重量比換算個体数は、厳密な個体数の復元が不可能な現状においては、個体数比算出の手段として、最も実情に即した数値と考えられる。丸瓦と平瓦の遺存率が大きく異なるのでなければ、両者の平均重量比の認定における大きな誤差がないかぎり、個体数の比は正しく反映されるはずである。それに対して、単なる破片数の場合は、1個体が平均して何片の破片となるのか（以下「細片化指数」とする）が全く不確定であり、大略の傾向はつかめても、個体数比としては必ずしも信頼に値しない。丸瓦・平瓦という種別の違いによる細片化指数の差についても考慮の対象外となる。ところが、今回破片数の比（1：4.38）と重量比

換算個体数の比（1：2.60）の乖離を生んだ要因は、実は丸瓦と平瓦の細片化指数の差であったと考えられる。これは別の方法によって検証する必要があるが、厚さが同程度の場合、丸瓦に比べると扁平で平面投影面積の大きい平瓦は割れやすく、しかも細片化しやすい傾向にあることは疑いない。そのため、破片数の比では、平瓦が実際の個体数の比以上に大きな割合を占めることになったものと推定される。また個体数比復元の手段としては、このほかに隅数を数える方法も行われているが、その場合も隅を含む破片の遺存率の如何という不確定要素が介在するうえに、隅を含まない破片は操作の対象外におかれることになる。一方、単なる重量比の場合は、個体重量の違いにより、個体数比に直結しないことは言うまでもない。

丸・平瓦の比 1：2.6

以上の点から、瓦という規格化された大量の遺物の個体数比を復元する方法としては、重量比換算個体数を用いるのが現状では最も有効であり、欠点が少ないと考える。よってここでは、重量比換算個体数による数量比1：2.60を、西隆寺の丸瓦・平瓦の個体数比とみることにしたい。この数値は、平城宮第二次大極殿院において復元されている[1]比率（丸瓦47,700枚・平瓦119,900枚、両者の比率は1：2.51）に近い。

平瓦の葺足の推定　両者の個体数の比は、葺足の違いに関係する。屋根に葺く際に、丸瓦の場合は玉縁の長さだけが重複部分となるので、丸瓦の胴部長がそのまま葺足（非重複部分）となる。古代の平瓦の場合、この葺足をどの程度とっていたのかという点について、必ずしも見解が一致しているわけではない。しかし、丸瓦と平瓦の個体数比が1：2.60ということは、丸瓦の葺足が平瓦の葺足の2.6倍であることを示すものと考えることができる。すると、西隆寺出土の丸瓦の胴部平均長は、32.2cmであるので、平瓦の葺足の平均は、32.2／2.6＝12.4cmと算出される。これは、平瓦の平均長33.2cmの37％（12.4／33.2＝0.373）に相当する。先に挙げた平城宮第二次大極殿院の分析では、同じく38～40％という結果が得られているので、ほぼそれと等しいことになる。

平瓦の葺足は 37 ％

丸・平瓦の分布　西隆寺は、出土瓦が平安時代初期を最後としてそれより後代のものを含まないことから、比較的早く廃絶し、寺地は次第に水田化したものと推定される。その際に、大量の瓦を遠く離れた場所にまで運んだとは考えがたく、発掘調査によって得られた瓦の分布は、西隆寺廃絶当時の状況に近いと思われる。また、西隆寺創建以前の瓦葺建物は確認されていないので、丸・平瓦の大量使用は、基本的に西隆寺創建に伴うものとみてよく、それは溯って創建当時の状況を示すと考えられる。

そこで、発掘調査時に設定した3m方眼ごとに丸瓦と平瓦の出土量（重量）を図示すると、この両者の分布はほぼ完全に一致することがわかる（154～155頁）。すなわち中門・南大門地区、食堂地区の井戸SE491と池SG530のほか、北面築地と東面回廊・北面回廊に沿って顕著な集中を見せる。食堂地区のSE491とSG530から出土した瓦については、食堂院の築地などに葺かれていたとみることもでき、食堂本体に由来するものとは速断できないが、それを除く中門・南大門・回廊・外郭築地に関しては、瓦葺であったと考えてよい。また、東門・金堂・塔については、調査区内で丸・平瓦の出土量がとくに多いわけではないが、周辺にかなり多くの未調査区を残しているため、その部分に多くの瓦が含まれていることは充分想定しうる。他の南都諸大寺との比較の上からも、未確認の講堂とともに、いずれも瓦葺であったとみるべきであろ

中門・南大門・回廊・外郭築地は 瓦 葺

(1) 佐川正敏「第Ⅱ期遺構の造営瓦とその年代」（『平城宮報告XIV』96～117頁）。

う。なお、これらは基本的に一定量の軒瓦を伴うが、北辺築地地区のみは、丸・平瓦が大量に出土しているのにもかかわらず、軒瓦の出土量はきわめて僅少である。本来、築地の場合は棟から軒先までの距離が短く、屋根面積に対する軒の総延長の割合は、通常の堂宇に比べてかなり大きい。したがって軒瓦を使用したとすれば、丸・平瓦に対する軒瓦の比率は相対的に高くなるはずであり、逆に軒瓦の比率が著しく低いということは、築地の屋根には軒瓦を使用していなかったことを示すものとみてよい。

築地の屋根には軒瓦を使用していない

B　軒瓦の組合せ

西隆寺創建期の軒瓦　西隆寺の調査で最も多く出土した軒丸瓦は6235型式（B・C・Iの3種がある）、軒平瓦が6761型式（A種のみ）である。それぞれ総数の40.7％と47.6％に達し、型式の判明するものに限れば、前者は46.2％、後者は50.0％の割合を占めることになる。また、6235型式の中ではC種が最も多く、総数の32.7％を占める（以下、出土点数の比率は、総数に対する数値とする）。したがって、6235C－6761Aが西隆寺創建の主要な軒瓦の組合せをなしたことは疑いない。分布の上でも、この両者は、調査区の全域にわたってほぼ一致した状況を示しており（156～157頁）、胎土・焼成にも共通性が認められる。なお、6761Aの出土点数が6235Cに比べて多いのは、丸・平瓦の場合と同様に、軒平瓦が軒丸瓦よりも細片化しやすいことに原因を求めることができる。軒瓦の総数において、軒丸瓦339点・軒平瓦471点という懸隔が存在するのは、この証左にほかならないであろう。

6235C－6761Aの組合せ

点数で6761Aに次ぐ軒平瓦は、6764A（9.8％）であり、6775A（9.3％）もほぼ拮抗した数量が出土している。一方、軒丸瓦で6235Cに次いで多いのは、6235Iと6236F（ともに7.4％）である。これらに続く軒丸瓦は6133Nと6225A（ともに4.7％）、軒平瓦は6663Aと6663C（ともに3.2％）で、数量的にはかなり少なくなる。よって、軒瓦が種と種の次元で一対一の対応

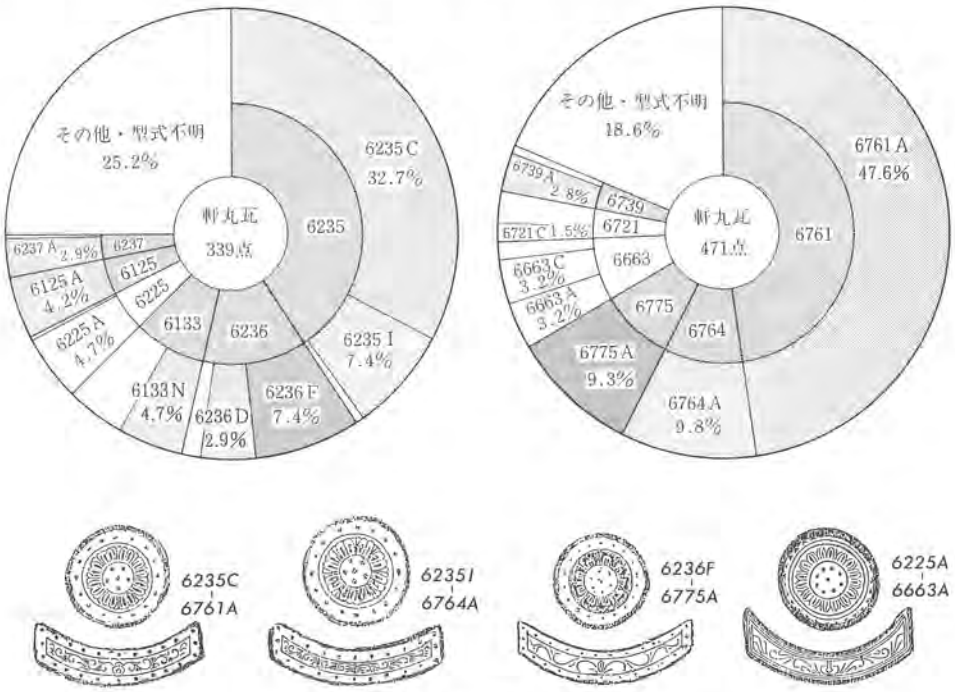


Fig. 60　西隆寺出土軒瓦の組成

をしたとすると、比率上、6764A・6775Aは、6235I・6236Fと組む可能性が高い。

6235I－6764Aの組合せ

そこで、158～159頁の図に掲げたこれらの分布を検討すると、まず軒丸瓦6235Iは中門・南大門地区に多く、食堂地区でもある程度認められるが、東面回廊や塔地区には少ないことが知られる。それに対して6236Fは、中門・南大門地区では少なく、東面回廊（東面回廊西側のものは金堂に葺かれていた可能性がある）や塔地区に多い。次に軒平瓦では、6764Aが中門・南大門地区や食堂地区に多く、東面回廊における分布は比較的まばらであるのに対し、6775Aは逆に東面回廊の西側（金堂の東側）に集中を見せる。したがって分布の上では、6235I－6764A、6236F－6775Aという組合せを復元することができる。

6236F－6775Aの組合せ

このほか、東面回廊周辺や塔地区に多く、一方中門・南大門地区で分布が稀薄なものとしては、軒丸瓦6125A（4.2%）・6236D（2.9%）を挙げることができる（160頁）。また、6133N（4.7%）・6237A（2.9%）も、塔地区でこそ認められないが、これと同様の分布を示している（161頁）。6236Fを補完するかたちで用いたものであろう。以上の軒瓦は、年代や出土量から見て、基本的に西隆寺創建に伴うものと考えられる。

西隆寺以前の軒瓦　西隆寺創建以前の軒瓦については、数量や分布の上で明確なまとまりを捉えがたいものが大半である。宅地内の建物の甍棟などにおける部分的な使用が想定されるが、その中にあって注意を引くのは、軒丸瓦6225型式と軒平瓦6663型式である。この両者は出土量も比較的多く（6225は5.0%、6663は7.9%）、とくに6225Aと6663Aは、食堂地区や東門周辺で一致した分布を示している。西隆寺以前におけるまとまった使用ないしは、一括的な再用をうかがわせる。なお、6225Aについては本来6663Cと組み、6663Aは6308A・Bと組むことが明らかにされている[(1)]が、西隆寺の調査における6308A・Bの出土は6308B1点（0.3%）に限られ、6663Aと組むとは考えがたい。6663Cの分布が6225A・6663Aとは重複しない点からみても、当該地域の6663Aに対応する軒丸瓦は6225Aであった可能性が高い。ここでは、製作当初からの組合せであったかどうかは別にして、6225Aには6663Aを主体とする6663型式が組み合わされたものと推定しておく。

6225A－6663Aの組合せ

C　軒瓦の製作と供給をめぐって

西隆寺創建期の軒瓦が、型式・種によって分布を異にしていることは先に述べたが、そうした状況はどのような背景のもとに生まれたものだろうか。これに関しては、大きく分けて二つの原因を想定することができる。まず第一は、製作が同時期であっても、軒瓦の使用場所が堂塔ごとに区別されていた場合である。第二は、創建期の中でも微妙な時期差が存在し、それが堂塔の建立や屋根葺の工程の先後関係と結びついていた場合である。ところが、実際に西隆寺の軒瓦の分布を検討すると、特定の軒瓦が単一の堂塔に集中する例はなく、逆に一つの建物について複数の種の軒瓦が使用されている例が数多く認められる。つまり、創建時の主体をなす軒瓦のみならず、補完的なものを含めて、軒瓦の生産と供給は、多対多の対応関係にあったわけである。これらの事実は、前者の仮説では説明が難しいと思われ、後者の仮説が成立する可能性を示唆している。そこで、西隆寺創建にあたって製作された軒瓦間に、こうした時期差の存在を認めることができるかどうか、検討することにしよう。

(1)　毛利光俊彦・花谷浩「平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」（『平城宮報告XIII』）251～342頁。

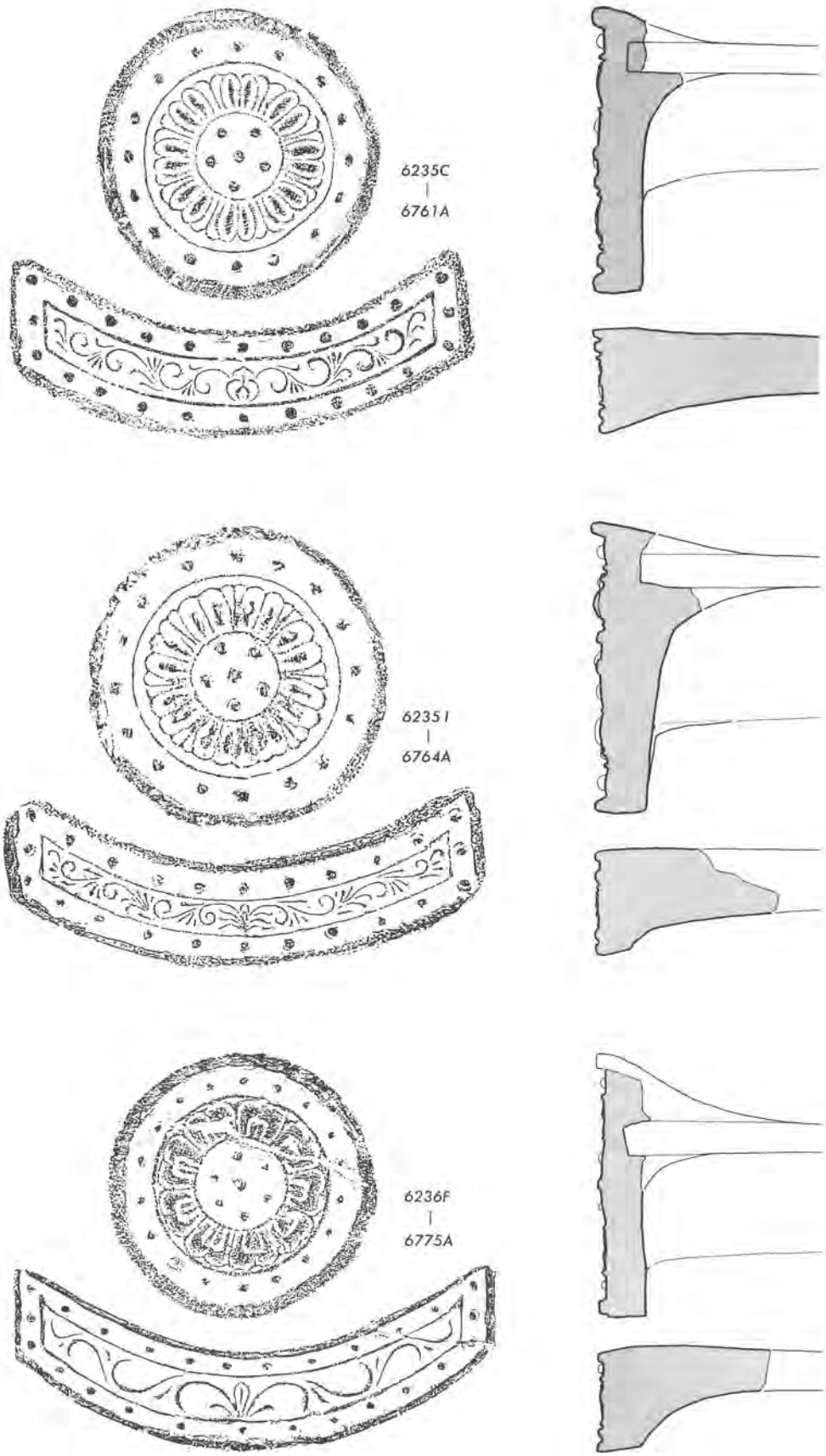


Fig. 61　西隆寺創建期の軒瓦の組合せ

6761Aの笵傷進行と製作技法の変化　西隆寺の創建は、『西隆寺報告』が指摘するように、神護景雲年間（767～770）を中心としており、宝亀二年（771）には、ほかの諸大寺とともに寺印を頒たれていることから、この頃にはほぼ寺観を整えつつあったと考えられる。したがって創建期の軒瓦の年代も、基本的にこれに一致することは疑いない。ただ、西隆寺の最終的な完成年次については必ずしも明らかでないため、下限に関しては幅をもたせる必要があるが、少なくとも長岡遷都後に造営が継続されたとみる理由はない。宝亀年間（770～780）には軒瓦の製作も終了していた可能性が高いと思われる。

このように短い期間の中での時期差の指標としては、笵傷進行に着目するのが有効である。ここでは、出土点数が軒瓦中最も多く、かつ調査区のほぼ全域にわたって広く分布する軒平瓦6761Aを取り上げて、笵傷進行とそれに伴う製作技法の変化を追究することにしたい。

まず、6761Aの笵傷進行は、第Ⅰ～第Ⅲの3段階に区分することができる。それぞれにおける調整手法および顎形態の特徴は、次のとおりである。

凸面にタテ＋ヨコの縄叩き

第Ⅰ段階：　顎形態は曲線顎Ⅱに限られる（Fig.62-1）。顎面の幅は1.5～2.0cmで、ヨコナデ調整により平瓦部にかけて強く屈曲する。凸面のほぼ全体にタテの縄叩きを行ったのち、瓦当寄りの部分に幅5cm内外のヨコの縄叩きを重ね、それから瓦当までの範囲（8～12cm程度）にヨコナデまたはタテ方向のヘラケズリを施す。

凸面にタテ方向のヘラケズリ

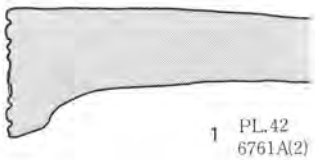
第Ⅱ段階：　顎形態は直線顎が大半であり、顎部がふくらみをもつもの(Fig.62-2)と、瓦当下端から凸面にかけて直線的にのびるもの(Fig.62-3)の二種類がある。このほかに曲線顎Ⅱの例も少数認められるが、第Ⅰ段階のものとは異なり、顎面後端が明確な稜をなし、そこから平瓦部にかけての屈曲が小さい（Fig.62-4）。顎面自体が、第Ⅰ段階のように強いヨコナデによって作り出されるのではなく、ヨコ方向のヘラケズリによって成形されている点からも、別の手法と見るべきであろう。したがって同じ曲線顎Ⅱといっても、第Ⅰ段階とは隔たりがあり、続く第Ⅲ段階の調整手法に連続するものである。なお凸面には、全面にわたってタテ方向のヘラケズリが施される。ほとんどの場合、叩きは認められないが、直線顎の個体の一部に、わずかにタテの縄叩きを残す例が存在する。この狭端面には、凹面から連続する布目が残る（PL.42）。

凸面にタテ方向のヘラケズリ縄叩きはない

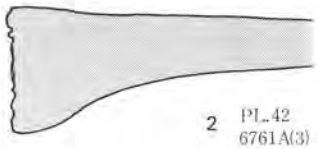
第Ⅲ段階：　顎形態には、直線顎と曲線顎Ⅱの両者があるが、直線顎が多い。前者は、瓦当下端から凸面にかけて直線的にのびる(Fig.62-5)。後者の顎面は、第Ⅱ段階と同じくヨコ方向のヘラケズリによって作り出されたもので、顎面から平瓦部への屈曲が弱い(Fig.62-6)。凸面は、全面にタテ方向のヘラケズリが施されており、叩きを残す例はない。直線顎の個体には、狭端面に凹面から連続する布目を残すものがある（PL.42）。

以上のように、6761Aの調整手法と顎形態は、笵傷の進行によって示される時間の経過とともに、明らかに変化していることがわかる。つまり、第Ⅰ段階と第Ⅱ段階の間に大きな画期があり、凸面にタテ＋ヨコの縄叩きを明瞭に残すものから、全面にタテ方向のヘラケズリを加えるものに移行する。顎形態も、第Ⅰ段階が曲線顎Ⅱに限られるのに対し、第Ⅱ・第Ⅲ段階では直線顎が主流となる。曲線顎Ⅱの場合も、第Ⅰ段階の顎は彎曲が大きく、ヨコナデによって作

笵傷進行 第Ⅰ段階

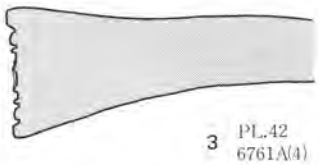


1 PL.42 6761A(2)

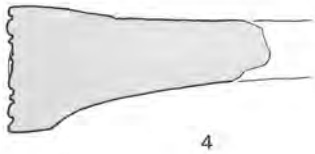


2 PL.42 6761A(3)

笵傷進行 第Ⅱ段階

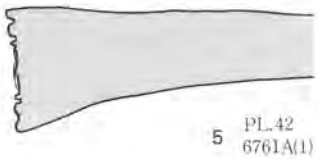


3 PL.42 6761A(4)

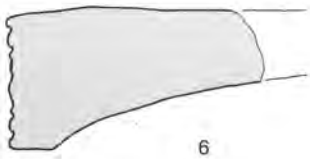


4

笵傷進行 第Ⅲ段階



5 PL.42 6761A(1)



6

Fig. 62　6761Aの笵傷進行と顎形態の変化

り出されているが、第Ⅱ・第Ⅲ段階の顎は屈曲が弱く、ヨコ方向のヘラケズリによって成形されている。なお第Ⅱ段階には、直線顎でありながら凸面に縄叩きを残す例や、顎部にふくらみを有する例があり、過渡的な状況を示すものとみられる。前者には、狭端面に凹面から連続する布目を認めることができ、同様の例は第Ⅲ段階の直線顎の資料にも存在する。また、笵傷進行上は第Ⅱ段階・第Ⅲ段階のいずれか確定しがたいが、凸面のヘラケズリが及んでいない部分（瓦当から19cm以遠）に明瞭な布目をとどめる例がある（PL.41）。したがって、第Ⅱ・第Ⅲ段階の製作技法は、基本的に次のように復元することができよう。

6761Aの第Ⅱ・Ⅲ段階の製作技法の復元

(1) 凸型の成形台上に長い布をおく。狭端側の布端は成形台の外となる。

(2) 成形台上に粘土板を置き、布を狭端から凸面側に折り返して、布の上から手掌で押圧調整する。狭端面が無調整でありながら、凹凸両面に対してほぼ直角となる点からみて、成形台の狭端部は、立ち上がりを有していたと考えられる。

(3) 凸面の全体にわたって、タテ方向のヘラケズリを施す。一部のものは、その後瓦当側にヨコ方向のヘラケズリを加えることにより、顎面を作り出す。

もちろん笵傷そのものからは進行段階を確定しえない個体も数多く、上記のような笵傷進行の区分と製作技法上の画期が、完全に一致する確証はない。しかし、少なくとも6761Aの製作技法の変化が、時期差と結びついていることは確実である。逆に言えば、製作技法は時間的な先後関係を示していることになる。ここでは、笵傷進行段階が直接的には不明であっても、製作技法の特徴から推定可能なものを加えて、6761Aを大きく古段階（笵傷進行の第Ⅰ段階）と新段階（笵傷進行の第Ⅱ・第Ⅲ段階）の二つのグループに分けることにしたい。なお、6761Aが創建軒平瓦の中心をなすことから、このうち古段階のものの製作が、西隆寺創建当初の神護景雲年間には開始されていたことは間違いないであろう。

6761Aの分布　次に問題となるのは、こうした先後関係が分布の違いと結びつくのかどうかという点である。そこで、6761Aを古段階と新段階に分けて、それぞれの分布を図示してみよう（162～163頁）。すると、古段階に属するものは、東門と中門・南大門地区への集中が著しく、それ以外の場所にはほとんど分布しないことがわかる。一方、新段階のものは、中門・南大門地区にこそある程度の集中を見せるが、むしろ東面回廊の東と西（金堂の東）における出土が顕著であり、塔の周辺にも分布する。つまり、時期の違いによって明らかに分布状況を異にしているわけである。これは、瓦分布を供給先の堂塔位置の反映とみる以上、異なる堂塔に供給されたことを示すものと考えざるをえない。

古段階の6761Aは東門と中門・南大門地区へ集中

6764A・6775Aの製作技法と年代　このように6761Aが、製作時期によって供給先を異にしたとすると、同じく西隆寺の主要な創建軒平瓦でありながら、分布状況の異なる6764Aと6775Aの間に、時期差が認められるかどうかが問題となる。そこで両者の製作技法を比較すると、まず6764Aは顎形態が全て曲線顎Ⅱで、顎部から平瓦部にかけての屈曲が強く、その部分の調整はヨコナデによっている。また凸面には、ほぼ全体にタテの縄叩きを行った後、瓦当寄りの部分にヨコの縄叩きを加えるという手法が認められる。つまり、6761Aの古段階と一致した特徴をそなえていることは間違いない。一方、6775Aは、顎形態に直線顎と曲線顎Ⅱの両者があるが、後者の顎面にはヨコ方向のヘラケズリによって作り出されたものが存在する。そして凸面は、縄叩きの残る例が全くなく、全てタテ方向のヘラケズリが施されている。これらの特徴

は、6761Aの新段階と一致するものである。

したがって、6764Aと6775Aの製作技法には明瞭な差違があり、それぞれ6761Aにおける新旧の製作技法と対応することがわかる。これは、6761Aの製作技法の相違が時期差の反映であることから、6764Aと6775Aの時間的先後関係を示すものとみてよい。つまり、6764Aは6761Aの古段階に、6775Aは6761Aの新段階に併行する時期にあてることができる。

6764Aは古段階併行
6775Aは新段階併行

以上の検討により、西隆寺創建期の軒平瓦6761A・6764A・6775Aには、製作時期の違いがあり、それに対応して供給された堂塔も異なることが明確となった。6761Aの古段階およびそれに併行する時期と考えられる6764Aは、中門・南大門地区や東門地区に多く分布し、一方、6761Aの新段階と6775Aは、金堂と東面回廊付近に集中を見せる。

6235C・Iの年代　先に述べたように、これらの軒平瓦と組み合うと考えられる軒丸瓦は、ほぼ同様の分布状況を示している。すなわち、6764Aに対応する分布を示すものとしては6235Iがあり、6775Aに対応するものとしては6236Fが挙げられる。6761Aと組む6235Cは、笵傷進行による製作時期の区分は行えなかったが、6761Aの新旧に対応する様相を呈したことは確実であろう。また、6125A・6133N・6236D・6237Aの分布状況は6775Aに近く、6236Fを補完する役割を果たしたものと推定される。それでは、これらの軒丸瓦においても、軒平瓦の場合のような先後関係を認めることができるだろうか。

まず、6235Cと6235Iについて検討しよう。6235型式は東大寺式の軒丸瓦であるが、外縁形態に傾斜縁Iと直立縁の二種類があり、後者が新しい（『平城宮報告XIII』255～256頁）。今回、直立縁については、上面が丸みをもつ直立縁Iと、上面が平坦面となる直立縁IIに二分したが、6235C・Iは、いずれも直立縁Iである。この両者を比較すると、6235Iの方が弁形など祖型に近い要素をもち、6235Cの弁端はやや萎縮した形状を示す。また、蓮弁の突出や間弁の大きさなどにもわずかな違いはあるが、全体として文様構成は非常によく似ており、明確な時期差は認めがたい。ごく近接した作笵年代を想定することができ、調整手法の一致とあわせて西隆寺創建当初から並行して製作が行われていたと考えられる。

6236D・Fの年代　6235型式の蓮弁中央の界線が消失したものが6236型式である。文様の上から、6235型式に後出する型式であることは疑いない。この中で、最も古く位置づけられるのは、A・E・Hであろう（『平城宮報告XIII』256頁）。6236Eは、照りむくりが明瞭な8弁の蓮弁をもち、祖型である6235型式に近い。また6236Aは12弁、6236Hは8弁の蓮弁をもつが、ともに弁の盛り上がりが大きく立体的で、中房蓮子や珠文との対応関係も整斉である。いずれも、外縁は直立縁Iの形態をとる。

6236型式各種の年代の細分

『平城宮報告XIII』は、このうち6236A・Hを天平宝字八年（764）発願の西大寺四王堂所用とみて、天平神護年間（765～767）頃の年代（平城宮軒瓦編年の第IV期前半末頃）を与えている。ところが、西大寺出土瓦の分析[1]では、これと組み合う軒平瓦6732Q・Z（・K・R）は、ほぼ神護景雲年間（767～770）と推定される金堂院所用瓦6732M・Nに比べて、明らかな退化が認められ、それらに後続するものであることが判明した。『西大寺資財流記帳』によれば四王

(1) 小沢毅「西大寺の創建および復興期の瓦」（西大寺『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』1990年、152～168頁）。以下『西大寺報告』とする。なお、刊行が前後したが、『西大寺報告』は『平城宮報告XIII』以降の調査成果を含む。

堂が桧皮葺であることからも、四王堂本体所用とは考えがたい。むしろ分布状況とあわせて、宝亀年間（770〜780）に造営の主体があった塔所用とするべきであり、したがって、それらと組む6236A・Hにも、大略宝亀年間の年代を与えるのが妥当である。

すると、6236型式の中でも蓮弁の表現が平板となり、中房蓮子や珠文との対応関係も不整な6236D・Fは、少なくとも神護景雲年間に溯ることはないと考えられる。宝亀年間の中でも、やや降る時期に位置する可能性が高いといえよう。よって、これと組み合う軒平瓦6775Aの年代も、その頃に求めるのが妥当と思われる。そこで6236型式をA・E・Hという前半のグループと、D・Fという後半のグループに二分すると、前者の外縁形態が直立縁Ⅰであるのに対し、後者は直立縁Ⅱであることが注意される。これは、直立縁Ⅱが直立縁Ⅰよりも遅れて出現したことを示すものにほかならない。つまり、6236型式における外縁形態の変化を指標とすれば、直立縁Ⅱの出現時期は宝亀年間のうちに求められることになる。

直立縁Ⅱの出現時期

6133N・6237A・6125Aの年代　こうした見解に立って、他の軒丸瓦をあらためて検討すると、6133Nと6237Aは外縁が直立縁Ⅱであり、やはり宝亀年間に位置づけることができる。前者は、弁端が界線でとぎれるなど、6133型式の中でも後出的な様相を呈しており、この年代観と矛盾しない。また後者の内区文様は、6236型式の変化したものとして捉えることができ、やはり上記の年代観を支持するものとみられる。一方、6125Aは、外縁形態こそ直立縁Ⅰであるが、内区と外区を分ける界線がなく、神護景雲年間に溯らせることは困難であろう。直立縁Ⅰ自体は、長岡宮7133型式などの延暦以降の瓦にも認められる[(1)]ことから、直立縁Ⅱに取ってかわられたのではなく、直立縁Ⅰ・Ⅱが併存する状況が続いたものと推定される。

軒瓦の供給先　以上の検討により、西隆寺創建期の軒丸瓦・軒平瓦の双方において、製作時期の差が存在することが明らかになった。すなわち、神護景雲年間を中心とする造営初期のものと、それより遅れる宝亀年間のものとに大別することができる。そして、前者が中門・南大門地区や東門といった外周部に多く分布するのに対して、後者は金堂・東面回廊や塔に集中する傾向を見せる。したがって、製作時期による違いが、供給先の差と密接に結びついていたことは疑いない。前者に属する軒瓦としては、6235Ⅰ－6764Aがあり、一方後者に属するものとしては、6236F－6775Aのほか、軒丸瓦6125A・6133N・6236D・6237Aが挙げられる。なお西隆寺創建瓦の中心をなす6235C－6761Aは、6761Aの笵傷進行と分布が示すように、この両方にまたがっており、製作期間が神護景雲から宝亀年間にかけての比較的長期にわたっていたことが確実である。ここで、堂塔ごとに所用軒瓦を整理すると、次のようになる。

製作時期の違いは供給先の差

南大門：6235C－6761A（古段階・新段階），6235Ⅰ－6764A
東　門：6235C－6761A（古段階）
金　堂：6235C－6761A（新段階），6236F－6775A，6125A
回　廊：6235C－6761A（新段階），6236F－6775A，6125A，6133N，6236D，6237A
塔　：6235C－6761A（新段階），6125A，6236D，6236F

堂塔の建立と瓦供給　それでは、上記の供給関係は、どのような造営状況の下で生まれたものだろうか。これについては、いくつかの解釈が可能であるが、軒瓦の製作時期の差と供給先の堂塔の結びつきを合理的に説明しうる仮説としては、次の三つに絞ってよいと思われる。

(1)　向日市教育委員会『長岡京古瓦聚成』（向日市埋蔵文化財調査報告書第20集）1987年。

1) まず考えられるのは、製作時期の先後がそのまま堂塔の建立順序を表しているとみるものである。つまり、南大門や東門の建立が先行して進められたために、製作時期の早い瓦がそれらに葺かれたのに対し、金堂や回廊・塔は建立が遅れ、新しく作られた瓦が葺かれたとみるわけである。 供給先の違いは建立順序か

2) 次に、製作時期の差は供給時期の差を示すとするものである。これによれば、堂塔の建立は並行して進められたとみてよいが、堂塔によって軸部・小屋組の完成や屋根葺の時期が異なるため、屋根葺の工程に入ったものから順次、製作時期の早い瓦が供給されたということになる。つまり、小型の建物である東門などは早く屋根葺の工程に入ったのに対し、大型の金堂や構造の複雑な塔は遅れたと想定されるわけである。なお金堂を囲む回廊については、作業工程上、金堂より造営を遅らせた可能性があり、必ずしも建物の造営工事の開始を同一時点におく必要はない。 供給順序か

3) これらとは別に、製作時期の新旧は堂塔建立の先後とそのまま結びつくのではなく、堂塔によって所用瓦の意識的な選択が行われたとみる考え方がある（瓦の製作時期の違いに対応するかたちで供給先堂塔に差が認められることから、全く無関係であったとは考えがたい）。この場合、先にも述べたように、建物と軒瓦型式の対応は多対多の関係にあるので、その選択の対象は特定の軒瓦型式としてではなく、製作時期の新旧にあったと推定される。つまり、金堂・塔や回廊という伽藍中枢部に新しく製作された瓦を使用し、東門など外周部には製作時期の古い瓦を葺いたということになる。 意識的な選択か

1）は、瓦製作の先後関係に基づく単純な解釈ではあるが、伽藍中心部の造営が未着手の状態において、外周部分の造営開始を想定する点で問題が多い。とりわけ外周部の整備が門にとどまらず、築地などの囲繞施設を伴うとすれば、資材搬入のうえで支障をきたすことになりかねない。奈良時代における伽藍の造営順序の詳細は必ずしも明らかでないが、たとえば西大寺では金堂の造営が塔に先行したと推定される。また飛鳥寺や山田寺のような初期の寺院では、『日本書紀』や『上宮聖徳法王帝説』裏書から、まず金堂を建立したことが知られており、大官大寺についても発掘調査の結果から同様の知見が得られている。したがって、堂塔の建立に順序があったとすれば、むしろ金堂など中心伽藍の造営が先行したと見るのが自然であろう。1）の仮説が成立する可能性は低いと思われる。

2）は、瓦の製作時期と供給時期の関係を整合的に解釈できる点では、1）の仮説とかわらない。堂塔の造営が同時並行で行われたとみてよいかが問題となろうが、西隆寺のように、数年ないし遅くとも十数年のうちには完成をみた寺院に関しては、むしろ造営工事は寺域の各所で並行していたと考えた方が無理がない。早期の完成をめざして工事が開始されたとすれば、工程上の必要性を除いて、各堂塔の造営開始時期にもとくに先後を想定する必要はないと思われる。なお、この想定においては、南大門の所用瓦が6761Aの古段階を主としながら、新段階のものもかなり含むというような中間的様相についても、屋根葺の時期を新旧の中間に位置づけることにより、合理的に説明することができる。

3）は、瓦の製作時期と屋根葺の時期の対応を認めない点で、上の二つの仮説に比べるとやや整合性に欠ける。とりわけ西隆寺のように、造営開始から完成までの期間が短いものについては、製作された瓦の新旧がどれほど意識されていたのか、疑問である。むしろ、中心伽藍を

重視するのであれば、瓦においても製作時期の新旧の区別よりは、文様の斉一性つまり単一型式の採用の方が、視覚上すぐれた効果をもたらしたであろう。しかし、現実にはそうした考慮は払われていないのである。堂塔によってとくに瓦を選択したとは考えにくい。また屋根葺の工程をどの時点に想定するのかという点に関わるが、外周部の瓦葺が伽藍中心部に先行して行われたとすれば、製作時期の新旧は供給時期に一致することになり、堂塔による選別とみなす理由はなくなる。一方、伽藍全体の屋根葺の工程を中心部の完成後と想定すると、そのときまで大量の瓦を全て貯留していたことになり、その理由を説明しがたい。

製作時期の違いは供給時期の差

以上のような比較検討の結果、1）3）は、総合的な観点からみたとき、やや無理な部分があるのに対し、2）は最も欠点が少なく、成立する可能性が高いとみられる。ここでは、2)の仮説を採って、瓦の製作時期の違いは供給時期の違いに結びついていたと考えておきたい。ただし、瓦製作と屋根葺の工程を比較すれば、前者が後者に比べて長期間を要したことは間違いなく、また後者の工程に入るためには一定量の瓦の貯留が不可欠である。したがって、製作と供給の先後関係は、必ずしも完全に一致するものではなく、そうした貯留分の形成と供給の過程の中で、製作時期との齟齬をきたす場合も当然ありえたと考えられる。瓦の製作時期の先後と分布が、大局的にはよく対応しながらずれを生じているのは、ここにも一因があるのであろう。ともあれ、上記の想定が正しいとすれば、短い造営期間の中で堂塔の屋根葺の順序を復元しえたという点で、本項の検討は充分に意味をもちうるものと思う。

軒平瓦の製作と工人集団　最後に、西隆寺の瓦の製作にあたった工人集団について若干触れておきたい。西隆寺創建時の軒丸瓦と西大寺創建時の軒平瓦は、それぞれ6235－6732型式という東大寺式の系統に属し、両寺の軒瓦の製作に造東大寺司下の工人が関わった可能性が指摘されている[(1)]。6732型式については岡本東三の先駆的研究があり[(2)]、これを承けて花谷浩は、平城宮・京の軒平瓦全体の詳細な分析を行うなかで、6732型式を「東大寺系」「西大寺系」「宮系」に三分した。そして「東大寺系」とそれを祖型とする「西大寺系」の6732型式が、製作技法の上で共通の特徴を備えるのに対し、「宮系」は異なる技法によっていること、西隆寺の軒平瓦は「宮系」6732型式と同一の技法によって製作されたことを指摘している（『平城宮報告XIII』288～291・310頁）。つまり、西大寺と西隆寺は隣接した地にほぼ並行して造営されたが、両寺の軒平瓦は技法的系譜を異にすると認識したのである。そしてそれは、造西隆寺司と修理司の密接な関連にうかがえるように、西大寺の造営を担った造西大寺司と西隆寺の造瓦組織の違いを反映するものとして捉えられている（『同上』367頁註168）。

平城宮系以外の技法の存在

軒丸瓦に関しては、技法上、東大寺式として特定しうるだけの特徴を抽出するにいたっていないので、軒平瓦の製作技法から、こうした見解の妥当性を検証することにしよう。まず花谷が述べるように、西隆寺から出土する軒平瓦に平城宮系の技法が認められることは間違いない。6761Aの古段階のものや6764Aの顎形態が、ヨコナデによって作り出された曲線顎IIで、かつ凸面に特徴的なタテ＋ヨコの縄叩きを行う点など、平城宮から出土する6732型式（6732A・C・L・O）と共通する要素といえる。ただし、ここで注目しておきたいのは、西隆寺に平城宮系以外の技法による軒平瓦が存在する事実である。つまり、6761Aの新段階のものや、それと併

(1) 岡本東三「瓦塼類」（『西隆寺報告』72～74頁）。

(2) 岡本東三「東大寺式軒瓦について―造東大寺司を背景として―」（『古代研究』9）1976年。

行する年代が想定される6775Aは、顎形態が直線顎を主体としており[1]、凸面は全面にタテ方向のヘラケズリを加えている。これは、明らかに平城宮系とは異なる東大寺系（6732E・F・G・Hほか）・西大寺系（6732K・M・N・Q・R・Z[2]）軒平瓦の特徴である。とくに『平城宮報告XIII』が「凸面布目押圧技法」と呼ぶ、叩きを行わない特殊な技法が、6761A新段階に確実に認められることは重要である。これについて、花谷は西大寺の軒平瓦のなかに存在することを指摘している（307頁）が、その後の検討によれば、西大寺および東大寺の6732型式は、全てこの技法で製作されていたと考えてよい[3]。つまり、西隆寺の軒平瓦は、花谷が想定したように平城宮系の技法に限られるのではなく、平城宮系の技法によったものと、東大寺・西大寺系の技法によるものの両者が存在したことになる。

この両者は、6761Aの笵傷進行が示す時間的経過や、それに対応する6764Aと6775Aの時期差にみられるように、同時に存在したのではなく、当初平城宮系の技法で製作されていたものが、東大寺系の技法に変化したことは疑いない。したがって、こうした技法上の差が、その製作にあたった工人集団の違いを反映するものであるとすれば、西隆寺の造営事業の途中で、軒瓦の製作に関与した工人集団が変化したことになる。その時期は、対応する軒丸瓦の年代観などからみて、おそらく宝亀の初頭ないし前半であろう。すなわちこれを画期として、西隆寺の軒瓦の製作が、平城宮系の技術をもつ工人の手から、東大寺・西大寺系の技術基盤に立つ工人の手に移されたと考えることができる。

平城宮系の技法から東大寺・西大寺系技法へ

西大寺と東大寺の軒平瓦における共通した特徴は、かつて岡本が指摘したように、造東大寺司下の瓦工が造西大寺司下に組み込まれたことを示すものとみられる。すると、西隆寺の軒平瓦の製作技法がそれらと共通するのは、同様に造瓦組織の上での関連が存在したことを示している可能性が高い。ちなみに、西隆寺では東大寺所用軒瓦の出土例はないが、西大寺との間にはしばしば同笵関係が認められる（6235C・I，6236A・D・F・H，6316K，6732K，6739C，6761A）。文字瓦においても、平城宮に類例のない「大」の刻印瓦が両寺から出土しており[4]、西大寺と西隆寺の造営は、たんに時期的に並行するというだけではなく、関与した工人集団を含めて、かなり密接な関係のもとに行われた状況がうかがえる。こうした点から見れば、造西大寺司下の瓦工が西隆寺の軒瓦の製作に携わった可能性は充分に想定されよう。

西大寺との緊密な関係

そこで、西大寺の造営工事の進捗過程を、『続日本紀』にみえる行幸や叙位記事から復元すると、神護景雲三年（769）に薬師金堂、宝亀二年（771）に弥勒金堂の完成を推定することができる[5]。したがって、塔の造営や周辺の整備はその後も続いて行われたと考えられるが、金堂院については、宝亀年間の前半にはほぼ完成を迎えつつあったとみてよい。とすれば、それら

(1) 曲線顎IIの場合も、凸面全体にタテ方向のヘラケズリを行った後に、ヨコ方向のヘラケズリによって顎面を削り出しており、技法的には東大寺や西大寺のものに近い。

(2) 6732Zについては、『平城宮報告XIII』以後、種の設定を変更している（『西大寺報告』102頁参照）。

(3) 『西大寺報告』161頁。その後、亀田博氏のご厚意により、東大寺境内の防災施設工事に伴う発掘調査で出土した資料を実見する機会を得たが、6732型式に縄叩きの認められる例はなく、凸面および狭端面に布目を残す資料がかなり存在する。

(4) 『西大寺報告』126～127頁。西大寺からは、このほかに「西」の刻印瓦が4種類出土している。「大」とともに、西大寺ないし造西大寺司を示すものであろう。

(5) 太田博太郎「西大寺の歴史」（『西大寺』奈良六大寺大観 第14巻、9～20頁）1973年。

の所用瓦の製作にあたった造西大寺司下の瓦工が、引き続いて西隆寺の瓦製作に投入された蓋然性は高いといえるのではないだろうか。

この場合、西隆寺造営の前半期を担った瓦工集団との関わりが問題となるが、そこで改めて注目されるのが、文字瓦（刻印瓦）の存在である。このうち「理」の刻印をもつ瓦は、平城宮からまとまって出土しており、「修」「司」の刻印瓦とあわせて、その製作に修理司が関与したことがほぼ確実である[1]。これが西隆寺からも出土している事実に注目したい。両者は、押捺対象の平瓦を含めてほとんど同じ特徴を備えており、狭端を上にした状態で押捺する点も共通する。少なくとも同一の工人集団の製作とみて矛盾はない。すると、文字瓦においても、修理司を仲立ちとして、西隆寺と平城宮は強く結びつくことになる。一方、「大」をはじめとする西隆寺の他の刻印瓦は、基本的に広端を上にした状態で押捺しており、また刻印も文字だけの陽刻で、しかも逆字が多い。この点でも「理」が刻印の輪郭をもつ正字であるのとは顕著な違いを見せている。「大」については西大寺との関係を想定して誤りないと思われるが、以上の点から両者の系統が異なることは明らかであって、西隆寺の文字瓦には、修理司系のものと造西大寺司系のものという二系統が存在したことになる。

文字瓦における二系統

これらは、軒平瓦の製作技法から推定した平城宮系と西大寺系という二系統の工人集団を考えあわせると、きわめて示唆的であるといえる。うち一方の系統がともに西大寺系であることからみても、こうした文字瓦における二系統は、軒平瓦における二系統に対応する可能性が非常に高いからである。その場合、対応関係から西大寺系工人集団に対比されるもう一方の工人集団は平城宮系であり、また修理司系であったことになる。つまり両者は、所管官司は違っても、工人集団としては基本的に同一であったとみることができよう。

西隆寺の軒平瓦の製作が、平城宮系の工人から西大寺系の工人の手に移されたと考えられることは先に述べた。したがって、系統を異にするこれらの工人集団は、同一工房で瓦製作に従事することは基本的になかったと推定される。上記の観点からすれば、造西隆寺司下で西隆寺造営の前半期を担った平城宮系の瓦工は、西大寺系の瓦工と交代して修理司の管轄下に移された可能性が高い。「理」の刻印瓦が西隆寺と平城宮の双方で出土するのは、まさにこうした事情を物語るものではないだろうか。もちろん修理司の主たる職務対象が平城宮にあったことは疑いなく、「修」「理」「司」の文字瓦が平城宮内の各所で多数出土する事実もこれを裏づけているが、その一部が西隆寺にも供給された事実は、時期的な問題を含めて軽視できないと思われる。少なくとも所管の工人集団との関わりの上で、両官司が緊密な関係にあったことは確実であろう。もっとも文字瓦については資料数の制約があり、製作技法からの検討も現状では限界があることは否めない。しかし、造西隆寺司と修理司が完全に別の組織として併存したのではなく、前者から後者への変化が想定されるという本書第II章の考察は、以上の検討によっても充分に裏づけられるものと思う。そして、そうした平城宮系の瓦工集団の組織変革は、出土瓦から推定される造西大寺司下の東大寺・西大寺系瓦工集団の西隆寺造営への関与と不可分の関係にあったと考えられるのである。

造西隆寺司と修理司

(1) 森郁夫「平城宮の文字瓦」（奈良国立文化財研究所『研究論集VI』）1980年。

7　結語

西隆寺は称徳天皇の時代の神護景雲元年（767）に、西大寺に2年遅れて造営が開始されている。西大寺造営は藤原恵美朝臣押勝が近江に敗走した日に発願され、称徳女帝自らが東大寺に匹敵する西の大寺を作ろうとしたものであり、伽藍の主要部分が東西3町・南北4町の12町分を持つ破格の規模の大寺であった。一方、西隆寺は東大寺に対する法華寺と同じく、西大寺（僧寺）に対する4町分の寺地をもつ尼寺として、国家によって造営されたのである。

西隆寺と西大寺の類似点

寺院成立の事情と造営時期の重複そして位置が近接するため、西隆寺は西大寺と多くの類似点があると考えられる。本報告では寺地東北部の性格を食堂院と考えたのであるが、これは主として西大寺伽藍との比較から導き出された結論である。西大寺の食堂院については、鎌倉時代の「大和国西大寺往古敷地図」や永仁5年（1297）頃作成の「大和国西大寺敷地之図」では弥勒金堂の東に記載されている。西大寺では「西大寺資財流記帳」には金堂院として薬師金堂と弥勒金堂の記載があるのみで、講堂の記載がない。それ故、北方に位置する弥勒金堂を講堂に相当するものと考え、その東に食堂院があった可能性がきわめて高い。西隆寺では北面回廊の調査の際に井戸ＳＥ548を検出し、少なくとも9世紀初頭の段階ではこの場所に講堂がなかったことが判明し、講堂はさらに北方に位置する可能性が高くなった。したがって、西隆寺も講堂の東に食堂院が存在することになり、金堂・講堂・食堂の配置が西大寺と西隆寺で同一である可能性が高く、さらに東大寺も同一の配置となっている。

次に西隆寺の塔であるが、東塔は1971年に発掘調査されており、また元禄11年作成の「西大寺古伽藍敷地并現存堂舎坊院図」では東塔と共に西塔と考えられる位置に礎石が描かれている。この図は本書第Ⅱ章で述べているように元禄11年を遡る弘安2年の「伽藍敷地之図」に、西隆寺部分はよっているとみた方がよいであろう。西隆寺も西大寺と同じく東西両塔であった可能性が高いのである。このような両寺における伽藍配置の共通性と共に、相違点も指摘しておく必要があろう。

西隆寺と西大寺の相違点

まず、西大寺と西隆寺では伽藍の規模が全く異なっている。西大寺は伽藍の主要部分だけで、12町分あり、西隆寺は4町分の寺地を持つにすぎない。次に、東西両塔が西大寺では金堂院の南に位置するのに対し、西隆寺では金堂の東南・西南方向に位置する点が異なっている。以上伽藍配置における西大寺と西隆寺の共通点と相違点を述べたが、次に遺物について述べる。

第Ⅶ章6節によれば、西隆寺の軒平瓦の製作を主として6761Ａの変遷からみると、はじめ平城宮系の技術（平瓦部凸面に縄叩きを行う）をもつ工人の手によっていたが、宝亀年間には東大寺・西大寺系の技術（平瓦部凸面全面にタテ方向のヘラケズリを行う）基盤に立つ工人の手に移されたようである。そして西隆寺では東大寺との間に同笵関係はなく、西大寺との間に6型式10種（6235Ｃ・Ｉ，6236Ａ・Ｄ・Ｆ・Ｈ、6316Ｋ、6732Ｋ、6739Ｃ、6761Ａ）の同笵関係があり、造西大寺司下の瓦工が西隆寺の軒瓦の製作に関与した可能性が強いとしている。さらに、文字瓦などから西隆寺造営初期に瓦製作を行った平城宮系の瓦工は、後に修理司の管轄下に移され、それと交代して西大寺系の瓦工が造西隆寺司下で瓦製作を行ったと論じている。西隆寺の瓦にみられる西大寺的なものと平城宮的なものとの識別は瓦自体の研究においても更に

深められる必要があるが、他の遺物（例えばＳＥ491出土の扉板）や遺構においても検討すべき課題であろう。

土器埋納遺構

最後に土器埋納遺構について述べよう。脂肪酸分析からは胞衣壺とされ、発掘担当者は「考古学からみた土器埋納遺構の性格」の中で地鎮め説を主張している。後者は前者に反論しているが、それは２年前に発表された『1990年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』所収の分析に対して行ったものである。前者は、その後「酵素抗体法(ELISA法)による糖脂質群の認定」の項を追加し、それは本書に追加して収録してある。この認定法によれば、「胎盤はＡ型と判定された」のである。ところで、この土器埋納遺構の特殊な点は、建物の柱位置に据えられていることである。Fig.13の胞衣壺検出例一覧表の中にあげられている例をみても、柱穴に接した位置は多くあるが、柱穴位置に据えられた例は皆無である。土器の埋納時期は、回廊建立以前、回廊建立時、回廊建立後のいずれかであるが、土器の年代からいって、西隆寺造営以前に据えることは無理があり、回廊建立時か回廊建立後のいずれかとなる。もし、回廊建立時に胞衣壺を埋納した場合、柱の下の礎石直下に胞衣壺を埋めることにどれだけの意味があるだろうか。また一方、回廊建立後に土器を埋めたとすれば、平城宮土器編年Ⅳ～Ⅴ期に製作された甕が、回廊の礎石が抜き取られた後の長期間の伝世の後に埋められたことになる。いずれにしても、この問題についての検討はひきつづき行われる必要があろう。

布片の鑑定

なお、土器埋納遺構内の布片については、布目順郎氏に鑑定を依頼したので、以下にその概要を記す。

(1)布の織り密度は経12～13本、緯12本（1cmにつき）である。奈良時代の麻の織り密度の平均は経11本、緯８本であり、奈良時代の絹の織り密度の平均は経49.8本、緯34.3本である。布の織り密度から判断して、絹以外の繊維製品と判断できる。

(2)出土した布片は純白である。染色していない絹は、はじめ純白であり、次第に黄褐色に変色し、最後に焦茶色になる。ただ奈良時代の絹織物の高級品の中には化学的処理を行い、時代を経ても純白を保つ例がある。しかしこれは特殊例であり、出土した布片が絹織物の高級品とは考えられない。従って、色からみても、絹以外の繊維製品と判断できる。

(3)顕微鏡による側面観察では腔所があり、絹以外の植物繊維による布と判断できる。

以上から判断して、絹以外の植物繊維による布であることは間違いないが、それではどの繊維であるかという点では厳密には不明である。

まず、出土布片に捩れ試験（twist test）を行ったが、反応はない。twist testは、水で濡らした繊維の１端をつまんで他端を上にして立て、電球などの温かいものに近づけると乾燥するにつれて、大麻・亜麻・苧麻・黄麻・もめんの５種は左旋又は右旋する。ところが出土布片は反応がなく、この５種以外の植物繊維による布となる。従って、出土布片は穀(かじ)・楮(こうぞ)・藤(ふじ)・楓(しな)の木本植物による繊維であろうと推定される。楮または穀の樹皮繊維は木綿(ゆう)と呼ばれ、織布の方は太布と呼ばれる。出土布片を顕微鏡による側面観察をすると、腔所とともに微細なる縦皺がみられる。手持ちの楮または穀の顕微鏡観察では、微細なる縦皺は認められない。この微細なる縦皺は、植物がもつ本来的なものか、後から生じた皺であるかがよくわからない。以上、出土布片はどの繊維であるかという点では、不明な点を残すことになった。ただ、本例が太布である可能性はあると結論しておきたい。

別　表・別　図

1　軒丸瓦の分類と出土位置 (1)

型式・種		直径	内区 中房径	内区 蓮子数	内区 弁区径	内区 弁幅	内区 弁数	外区広	外区 内縁 幅	外区 内縁 文様	外区 外縁 幅	外区 外縁 高	外区 外縁 文様	全長	外縁形態
6125A		175	52	1＋8	115	21	T13	30	16	S13	14	6	－		直立縁Ⅰ
6133B		168	34	1＋5	96	17	T12	36	19	S13	17	9	－	400	傾斜縁Ⅰ
C		159	40	1＋6	101	17	T13	29	16	S18	13	8	－		傾斜縁Ⅰ
D		157	40	1＋6	111	17	T16	23	14	S24	9	8	－		傾斜縁Ⅰ
N		167	44	1＋4	110	14	T16	29	17	S22	12	11	－		直立縁Ⅱ
O		175	38	1＋6	110	21	T12	33	18	S16	15	9	－		傾斜縁Ⅰ
P		167	36	1＋4	117	15	T16	25	13	S16	12	8	－		直立縁Ⅱ
6134Aa		161	36	1＋8	96	11	T12	32	19	S16	13	13	LV16		傾斜縁Ⅰ
6225A		166	68	1＋8	116	36	F 8	25	12	K	13	8	RV26	373	傾斜縁Ⅰ
E		165	61	1＋8	119	30	F 8	23	11	K	12	6	RV		直立縁Ⅱ
6233A		154	55	1＋4＋8	114	29	F 8	24	11	S32	13	11	－	405	傾斜縁Ⅰ
6235B		183	56	1＋5	123	31	F 8	30	19	S16	11	8	－		直立縁Ⅰ
C		175	56	1＋5	119	25	F 8	28	16	S16	12	8	－		直立縁Ⅰ
I		182	54	1＋5	124	30	F 8	29	19	S16	10	9	－		直立縁Ⅰ
6236A		158	66	1＋8	114	20	F12	22	11	S12	11	9	－		直立縁Ⅰ

T－単弁　F－複弁　S－珠文　K－圏線文　HK－偏行唐草文
LV－線鋸歯文　RV－凸鋸歯文　（　）は推定による

型式・種	中門南大門地区	金堂地区	東面回廊地区		北面回廊地区	塔地区		東門地区	食堂地区			北辺築地地区		西南地区	西北地区	個数		%	
	西隆寺4次	西隆寺3次	209次	212次	221次	西隆寺2次	西隆寺6次	西隆寺1次	219次	223-21次	228次	210次	227次	202-14次	西隆寺5次				
6125A	2	1	6			4		1	1							15		4.2	
6133B		2	2					1	1						1	7		2.1	
C										1						1		0.3	
D								1								1		0.3	
																	30		8.8
N		1	7		1			2		1	1	1			2	16		4.7	
O								1								1		0.3	
P	1							3								4		1.2	
6134Aa									1							1		0.3	
6225A		2				2		6			1	4	1			16		4.7	
																	17		5.0
E										1						1		0.3	
6233A			1													1		0.3	
6235B									1							1		0.3	
C	48		27	1	4				11	17	2				1	111	137 (138)	32.7	40.4 (40.7)
I	14		6		3				2							25		7.4	
6236A			1					2	1							4		1.2	

（　）は種別不明を加えた数値

軒丸瓦の分類と出土位置 (2)

型式・種		直径	内区 中房径	内区 蓮子数	内区 弁区径	内区 弁幅	内区 弁数	外区広	外区 内縁 幅	外区 内縁 文様	外区 外縁 幅	外区 外縁 高	外区 外縁 文様	全長	外縁形態
6236D		163	56	1＋7	107	29	F 8	28	16	S15	12	9	—		直立縁Ⅱ
F		159	56	1＋6	106	28	F 9	27	16	S18	10	6	—		直立縁Ⅱ
H		161	58	1＋6	103	25	F 8	29	15	S11	14	10	—		直立縁Ⅰ
6237A		171	48	1＋4	123	25	F 8	24	12	S14	12	14	—		直立縁Ⅱ
B		182	46	(1＋4)	113	10	F	35	18	S	10	8	—		直立縁Ⅱ
6273B		180	64	1+5+9	128	32	F 8	26	13	S40	13	12	RV64		三角縁
6275D		196	54	1+4+8	108	28	F 8	44	13	S36	31	14	LV21		三角縁
6278Cb		183	62	1+6+10	137	34	F 8	23	11	S39	12	9	LV33		傾斜縁Ⅰ
6281Aa		173	55	1+4+8	109	26	F 8	32	14	S32	18	10	LV46	490	三角縁
6282Bb		162	45	1＋6	86	31	F 8	38	20	S24	15	9	LV24	361	傾斜縁Ⅰ
Db		132	27	1＋6	64	24	F 8	34	20	S24	14	9	LV24	341	傾斜縁Ⅰ
Ga		160	46	1＋6	90	24	F 8	35	17	S24	18	11	LV25		傾斜縁Ⅰ
6284E		155	38	1＋6	93	24	F 8	31	15	S24	16	10	LV		傾斜縁Ⅱ
6291Ab		161	33	1＋6	87	24	F 8	37	18	S16	19	8	LV16	370	傾斜縁Ⅲ
B		150	32	1＋4	88	18	F 8	31	16	S15	19	7	LV		傾斜縁Ⅰ

T－単弁　F－複弁　S－珠文　K－圏線文　HK－偏行唐草文
LV－線鋸歯文　RV－凸鋸歯文　（　）は推定による

型式・種	中門南大門地区	金堂地区	東面回廊地区		北面回廊地区	塔地区		東門地区	食堂地区			北辺築地地区		西南地区	西北地区	個数		%	
	西隆寺4次	西隆寺3次	209次	212次	221次	西隆寺2次	西隆寺6次	西隆寺1次	219次	223-21次	228次	210次	227次	202-14次	西隆寺5次				
6236D			6			3			1							10		2.9	
F	3		10		1	5		2	1	2					1	25	40 (43)	7.4	11.8 (12.7)
H			1													1		0.3	
6237A			7	1	1			1								10	11	2.9	3.2
B										1						1		0.3	
6273B						1			1					1		3		0.9	
6275D							1		1							2		0.6	
6278Cb								1								1		0.3	
6281Aa		1														1		0.3	
6282Bb								2						1		3		0.9	
Db											2					2	6	0.6	1.8
Ga				1												1		0.3	
6284E		1														1		0.3	
6291Ab		1							1							2	3	0.6	0.9
B								1								1		0.3	

（　）は種別不明を加えた数値

軒丸瓦の分類と出土位置 (3)

型式・種		直径	内区 中房径	内区 蓮子数	内区 弁区径	内区 弁幅	内区 弁数	外区広	外区 内縁 幅	外区 内縁 文様	外区 外縁 幅	外区 外縁 高	外区 外縁 文様	全長	外縁形態
6301B		166	48	1+5+9	106	25	F 8	30	15	S20	15	8	LV30		傾斜縁Ⅰ
C		160	48	1+5+10	102	26	F 8	29	16	S20	13	8	LV33	383	傾斜縁Ⅰ
6304A		162	35	1+6	99	37	F 8	31	15	S17	16	16	LV16		傾斜縁Ⅱ
Eb		154	33	1+6	97	32	F 8	29	12	S16	17	13	LV	345	傾斜縁Ⅱ
L		255	61	1+6	159	43	F 8	48	23	S27	25	14	LV17		傾斜縁Ⅱ
6307D		158	30	1+4	98	25	F 8	30	15	S17	15	8	LV25		傾斜縁Ⅰ
6308B		162	36	1+6	93	25	F 8	37	13	S16	24	7	LV16	377	傾斜縁Ⅱ
C		176	37	1+6	98	23	F 8	39	16	S16	23	8	LV		傾斜縁Ⅱ
6311Ba		162	43	1+6	92	27	F 8	33	13	S26	20	13	LV23	376	傾斜縁Ⅱ
F		159	38	1+6	99	23	F 8	30	13	S16	18	8	LV16	368	傾斜縁Ⅱ
6313Aa		123	24	1	71	32	F 4	26	16	S16	10	8	LV16	312	傾斜縁Ⅱ
H		117	22	1	68	15	T 8	25	11	S16	8	5	LV		傾斜縁Ⅰ
6316K		160	46	1+8	110	28	F 9	25	12	S16	14	8	LV		直立縁Ⅱ
6348Aa		181	47	1+8	105	37	F 7	38	23	HK	15	7	LV19		傾斜縁Ⅰ
平安時代		136	35	1+5	84	8	T16	26	11	S 8	15	7	−		直立縁Ⅱ

T－単弁　F－複弁　S－珠文　K－圏線文　HK－偏行唐草文
LV－線鋸歯文　RV－凸鋸歯文　（　）は推定による

型式・種	中門南大門地区	金堂地区	東面回廊地区		北面回廊地区	塔地区		東門地区	食堂地区			北辺築地地区		西南地区	西北地区	個数	%
	西隆寺4次	西隆寺3次	209次	212次	221次	西隆寺2次	西隆寺6次	西隆寺1次	219次	223-21次	228次	210次	227次	202-14次	西隆寺5次		
6301B										1						1	0.3
																2	0.6
C			1													1	0.3
6304A			1													1	0.3
Eb											1					1	0.3
																3 (4)	0.9 (1.2)
L								1								1	0.3
6307D	1															1	0.3
6308B		1														1	0.3
																3	0.9
C		1	1													2	0.6
6311Ba						1				1						2	0.6
																4	12
F									1							2	0.6
6313Aa							1			1						2	0.6
																4	12
H								1		1						2	0.6
6316K								1		1	1					3	0.9
6348Aa									2	1			1			4	1.2
平安時代					1											1	0.3
型式不明	2	8	8	2	2	3		4	5	2	1				3	40	11.8
総数	(72)	19	(87)	5	13	19	2	(32)	31	(32)	10	5	2	2	8	(339)	100

（　）は種別不明を加えた数値

2　軒平瓦の分類と出土位置 (1)

型式・種		瓦当面 上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇区幅	脇区文様	外縁の高さ	全長	顎形態
6543 A					61											曲線顎Ⅱ
6641 C		292	64	299	52	24	HK	13	S23	15	LV19	16	LV4	2	397	段顎ＩＬ
E		314	63	306	50	24	HK	15	S21	12	LV26	—	LV	2		段顎ＩＬ
6642 A		(325)		(314)	46	21	HK	12	S20	13	S19	(19)	S 5	2		段顎ＩＬ
6643 C		305	78	309	51	25	HK	13	S22	13	S23	19	S 4	5	383	段顎ＩＬ
D			60		46	19	HK	14	S	13	S	19	S 4	2		段顎ＩＬ
6652 A		245	54	249	57	20	HK	19	S11	19	S11	21	S 3	7	333	段顎ＩＳ
6663 A		284	77	286	57	27	KK	15	K	15	K	16	K	2		曲線顎Ⅰ 曲線顎Ⅱ
B		283	66	295	59	23	KK	18	K	18	K	17	K	2	253	曲線顎Ⅰ 曲線顎Ⅱ
C		280	72	282	53	26	KK	14	K	13	K	19	K	3	376	曲線顎Ⅱ
F		290	66	297	55	30	KK	13	K	12	K	16	K	3		曲線顎Ⅱ
I		(260)	(57)	(266)	58	24	KK	13	K	21	K	15	K	2		直線顎
6664 C		240	62	252	51	24	KK	14	S21	13	S21	15	S 3	4	376	段顎ＩＬ
D		240	60	269	60	22	KK	20	S17	18	S19	18	S 3	5	358	段顎ＩＳ
Ga		263	80	265	60	23	KK	20	S17	17	S17	19	S 3	6	371	段顎ＩＬ

HK－偏行唐草文　KK－均整唐草文　S－珠文　K－圏線文
LV－線鋸歯文　脇区幅は左右の平均または一方の値　（　）は推定による

型式・種	中門南大門地区	金堂地区	東面回廊地区		北面回廊地区	塔地区		東門地区	食堂地区			北辺築地地区		西南地区	西北地区	個数		%	
	西隆寺4次	西隆寺3次	209次	212次	221次	西隆寺2次	西隆寺6次	西隆寺1次	219次	223-21次	228次	210次	227次	202-14次	西隆寺5次				
6543 A		1														1		0.2	
6641 C			2								1			2	1	6	7	1.3	1.5
E	1															1		0.2	
6642 A										1						1		0.2	
6643 C							1									1	3	0.2	0.6
D							1							1		2		0.4	
6652 A									2		1					3		0.6	
6663 A			1	1				2	9	1	1					15	34 (37)	3.2	7.2 (7.9)
B											1				1	2		0.4	
C		3	3		1	2		1		3			1		1	15		3.2	
F									1							1		0.2	
I											1					1		0.2	
6664 C		1	4	1								1				7		1.5	
D		1														1		0.2	
Ga					1											1		0.2	

（　）は種別不明を加えた数値

軒平瓦の分類と出土位置 (2)

型式・種		瓦当面 上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇区幅	脇区文様	外縁の高さ	全長	顎形態
6664 I		236	51	276	52	24	KK	16	S21	12	S21	15	S 3	4	383	(段顎 IL)
K		265	66	284	62	28	KK	16	S17	18	S19	19	S 4	6	400	段顎 I L
6665 A		237	68	297	58	27	KK	18	S23	13	S25	21	S 3	3		段顎 I L
6668 A		244	52	252	47	22	KK	14	S22	11	S23	15	S 3	3		段顎 I L
6675 A		267	59	272	49	26	KK	11	S15	12	LV17	16	LV1	1		段顎 I L
6681 B		274	80	273	55	22	KK	15	K	18	K	16	K	3	355	直線顎
6682 A		264	78	273	52	24	KK	15	S17	13	S17	16	S 3	5	350	段顎 I S
6685 B		200	51	204	38	13	KK	12	S15	13	S15	14	S 1	4	327	段顎 I S
C		235	54	231	52	20	KK	21	S17	11	S17	20	S 2	5		段顎 I S
6691 A		286	55	293	55	25	KK	14	S21	16	S21	21	S 3	4	345	曲線顎 II
D					65	25	KK	20	S	20	S	21	S 3	3		(曲線顎 II)
6702 B		271	35	273	49	31	KK	9	—	9	—	10	—	2		曲線顎 II
6710 A		264	55	270	56	22	KK	15	S13 ×4	19	S11 ×4	19	S 3	4	347	直線顎
C		266	48	280	55	25	KK	14	S12	16	S13	18	S 3	5	355	直線顎

HK－偏行唐草文　KK－均整唐草文　S－珠文　K－圏線文
LV－線鋸歯文　脇区幅は左右の平均または一方の値　(　)は推定による

型式・種	中門南大門地区	金堂地区	東面回廊地区		北面回廊地区	塔地区		東門地区	食堂地区			北辺築地地区		西南地区	西北地区	個数		%	
	西隆寺4次	西隆寺3次	209次	212次	221次	西隆寺2次	西隆寺6次	西隆寺1次	219次	223-21次	228次	210次	227次	202-14次	西隆寺5次				
6664 I	1															1	12 (14)	0.2	2.5 (3.0)
K							1							1		2		0.4	
6665 A		1														1		0.2	
6668 A		1					1									2		0.4	
6675 A					1											1		0.2	
6681 B			1												1	2		0.4	
6682 A											1					1		0.2	
6685 B							1									1	4	0.2	0.8
C									1		2					3		0.6	
6691 A			1		1			1							1	4	5	0.8	1.1
D									1							1		0.2	
6702 B									1							1		0.2	
6710 A		1								2		2				5	8	1.1	1.7
C								3								3		0.6	

（　）は種別不明を加えた数値

軒平瓦の分類と出土位置 (3)

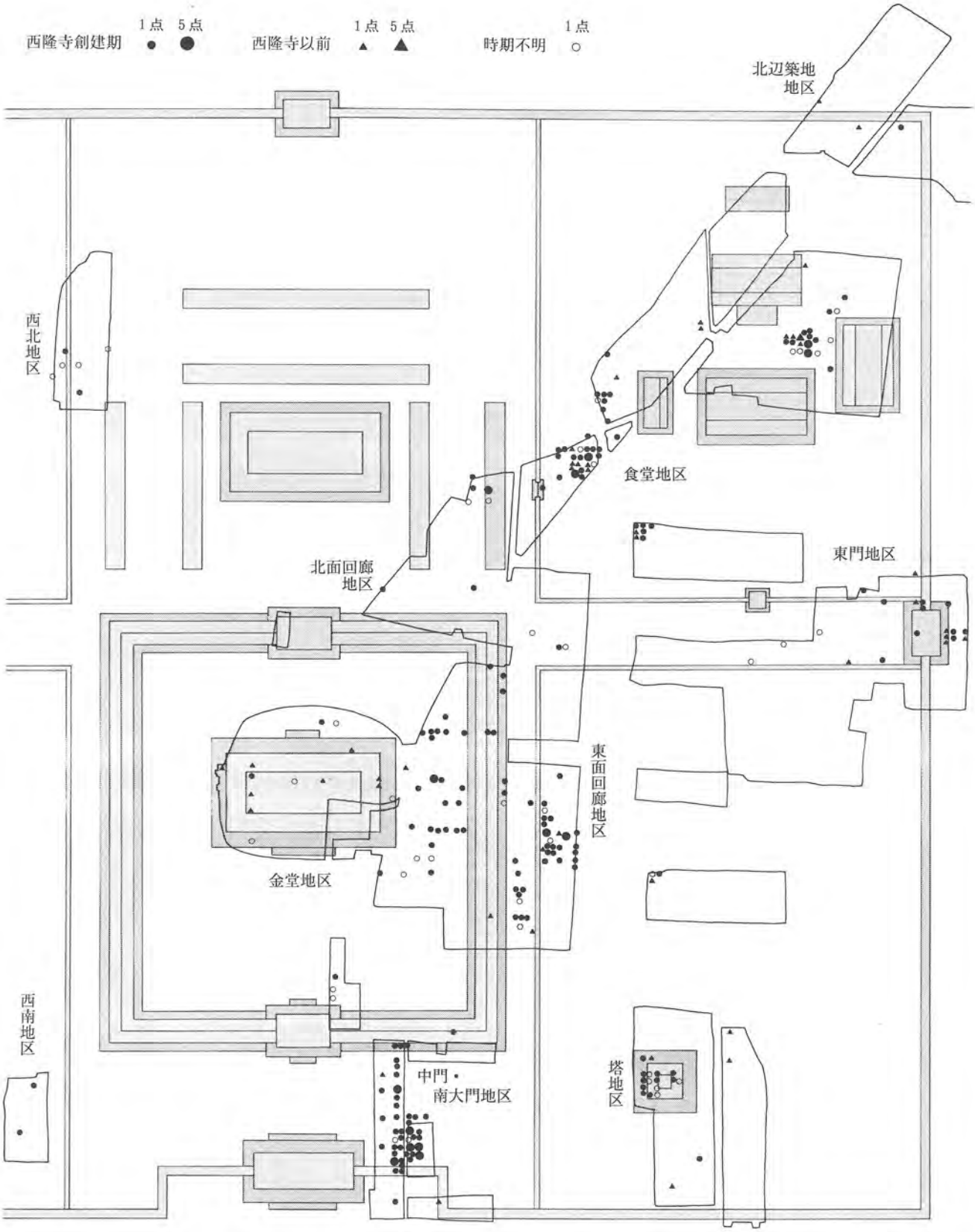
型式・種		瓦当面 上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇区幅	脇区文様	外縁の高さ	全長	顎形態
6721 C		265	49	280	53	25	KK	15	S26	13	S32	14	—	3	359	曲線顎Ⅱ
D		272	54	277	53	22	KK	14	S26	17	S32	13	—	3		曲線顎Ⅱ
Gb		260	60	280	47	24	KK	11	S34	12	S35	10	—	3	368	直線顎
Hb		285	69	293	51	21	KK	14	S33	16	S34	13	S 3	3		曲線顎Ⅰ
6727 B		266	78	270	55	25	KK	18	S10	16	S13?	18	S 1	5		段顎ⅠS
6732 A		285	47	305	69	36	KK	15	S 9	18	S 9	22	S 3	4	382	曲線顎Ⅱ
K					72	39	KK	18	S 9	15	S 9	19	S 3	3		直線顎
6734 A		262	53	274	48	26	KK	9	K	13	K	20	K	4		(直線顎)
6739 A		280	50	280	60	25	KK	15	S15	21	S13	23	S 3	4	380	曲線顎Ⅱ
C		221	37	(224)	53	26	KK	13	S	14	S	16	S 3	2		直線顎
6761 A		274	52	280	65	29	KK	19	S 9	20	S 9	21	S 3	5	359	曲線顎Ⅱ 直線顎
6764 A					66	24	KK	23	S 9	20	S 9	23	S 3	4		曲線顎Ⅱ
6775 A		294	53	294	62	29	KK	16	S10	18	S10	18	S 3	3		曲線顎Ⅱ 直線顎
新種Ⅰ					52	20	KK	15	S	17	S	19	S	4		曲線顎Ⅱ
新種Ⅱ							KK			12	S			2		曲線顎Ⅱ

HK－偏行唐草文　KK－均整唐草文　S－珠文　K－圏線文
LV－線鋸歯文　脇区幅は左右の平均または一方の値　(　)は推定による

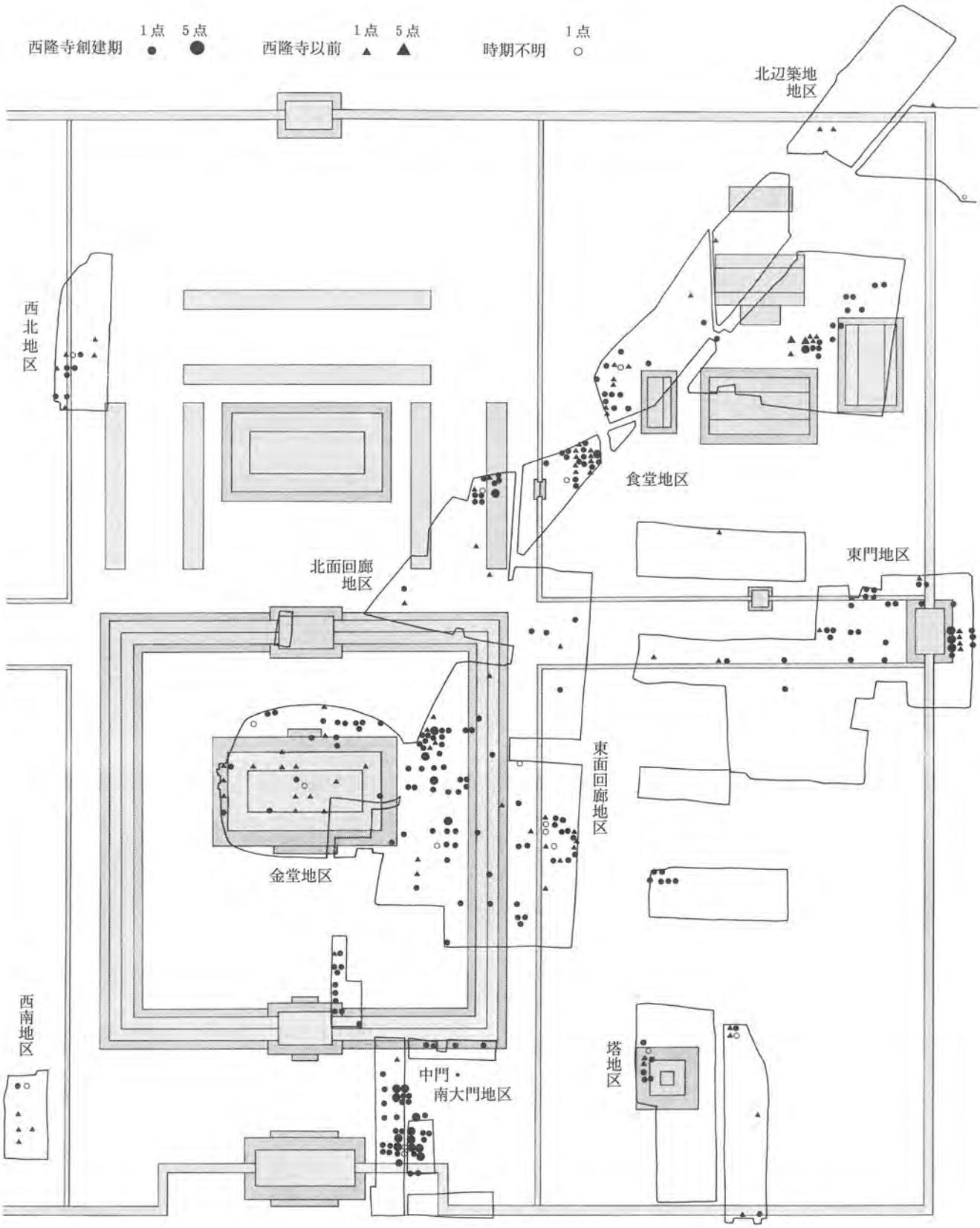
型式・種	中門南大門地区	金堂地区	東面回廊地区		北面回廊地区	塔地区		東門地区	食堂地区			北辺築地地区		西南地区	西北地区	個数		%	
	西隆寺4次	西隆寺3次	209次	212次	221次	西隆寺2次	西隆寺6次	西隆寺1次	219次	223-21次	228次	210次	227次	202-14次	西隆寺5次				
6721C		3	1					2		1						7		1.5	
D		3														3	15 (17)	0.6	3.2 (3.6)
Gb		1								1	1					3		0.6	
Hb													1		1	2		0.4	
6727B		2						1								3		0.6	
6732A			3							1						4	5	0.8	1.1
K									1							1		0.2	
6734A											1					1		0.2	
6739A			2		1		1	5	3	1						13	15	2.8	3.2
C	1							1								2		0.4	
6761A	73	20	46	4	6	5		43	9	11	4				3	224		47.6	
6764A	11	6	4		4			3	5	5	6				2	46		9.8	
6775A	5	12	13	1	2			8	1	1					1	44		9.3	
新種Ⅰ			1													1		0.2	
新種Ⅱ			1													1		0.2	
型式不明	3	4	6		1	1	1	1		2	1	1		1	1	23		4.9	
総数	95	(61)	(90)	7	(19)	8	7	71	(35)	(31)	(22)	4	2	(6)	13	(471)		100	

（　）は種別不明を加えた数値

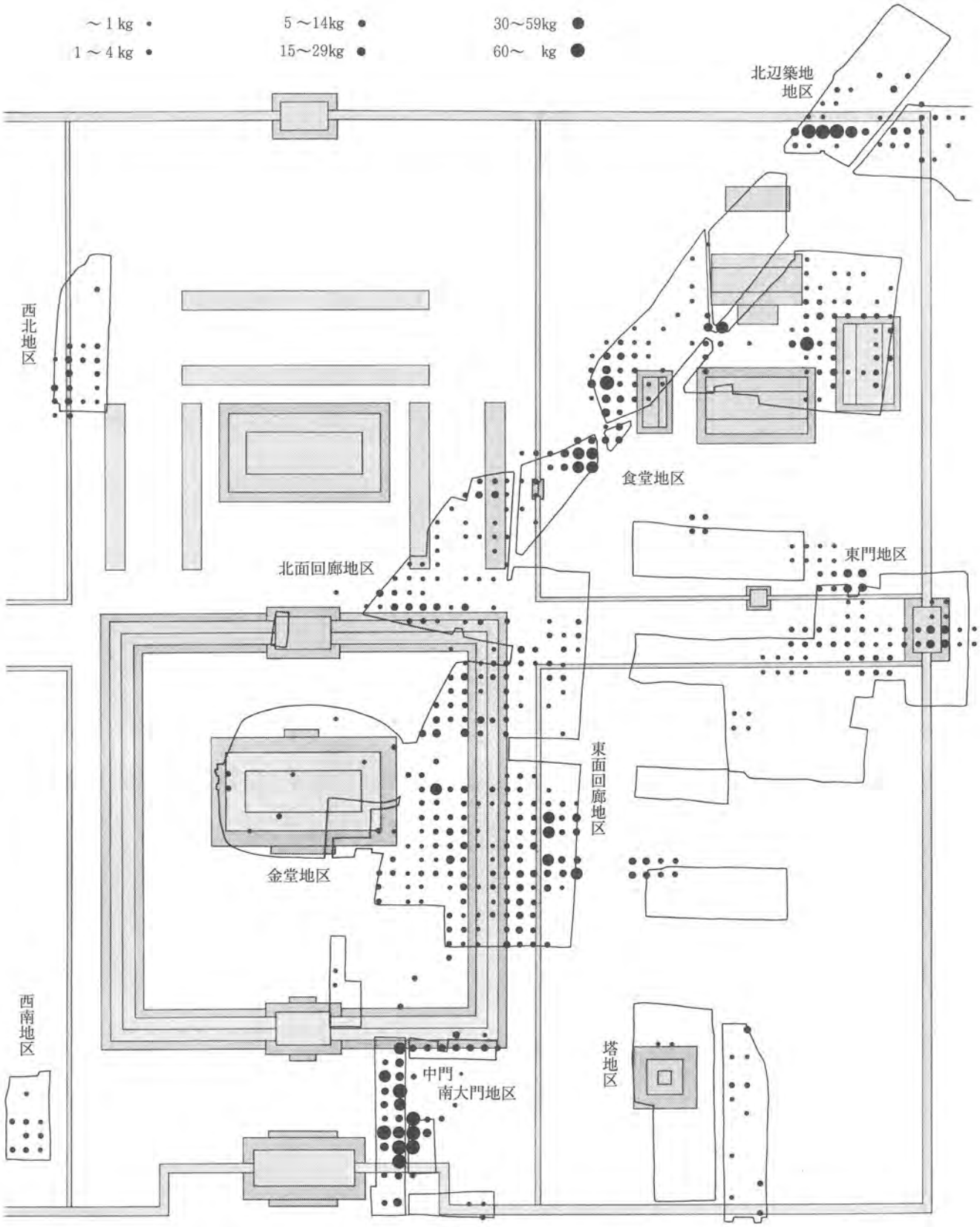
3　出土瓦の平面分布 (1)　　軒丸瓦　　1 : 1200



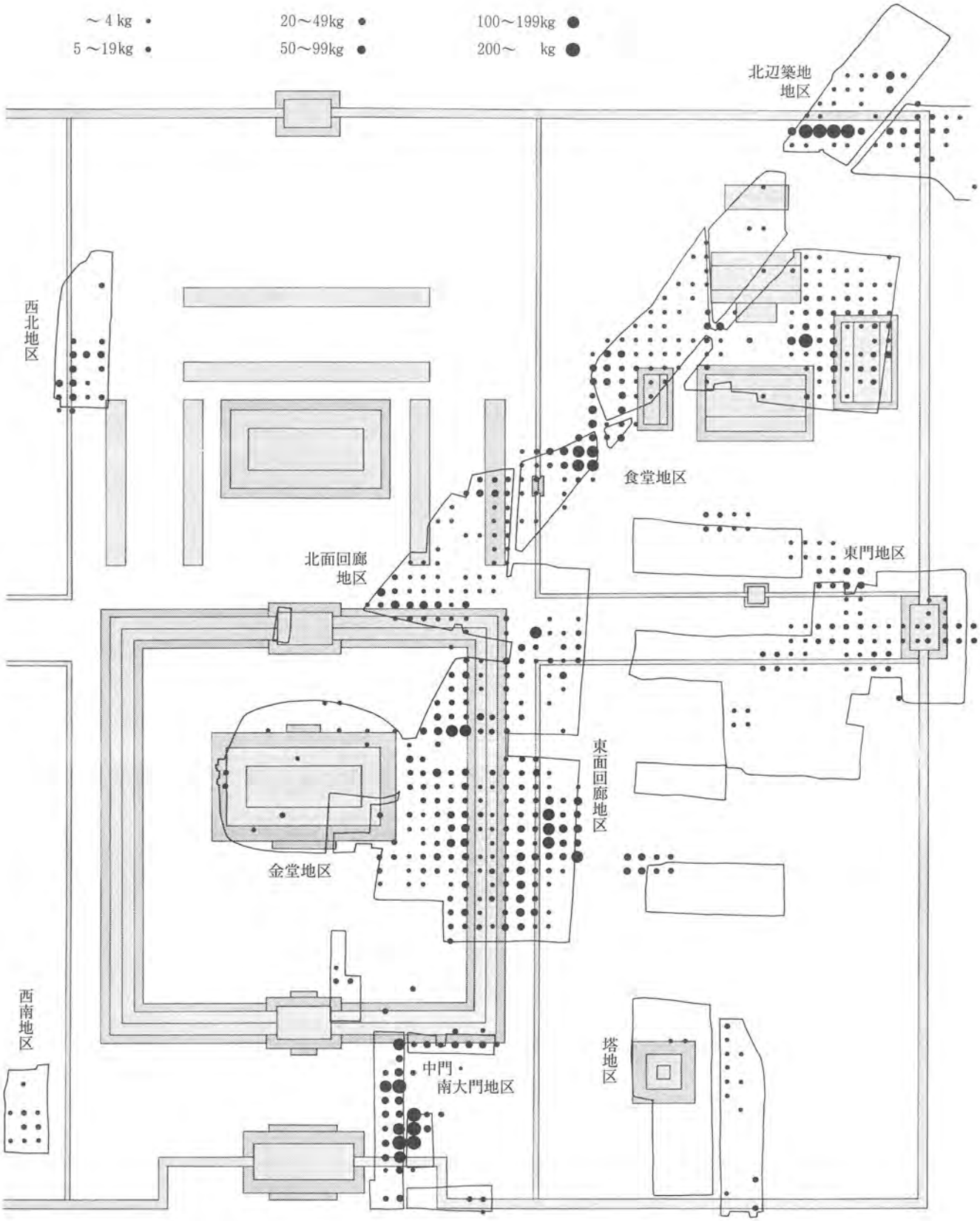
出土瓦の平面分布 (2)　軒平瓦　1：1200



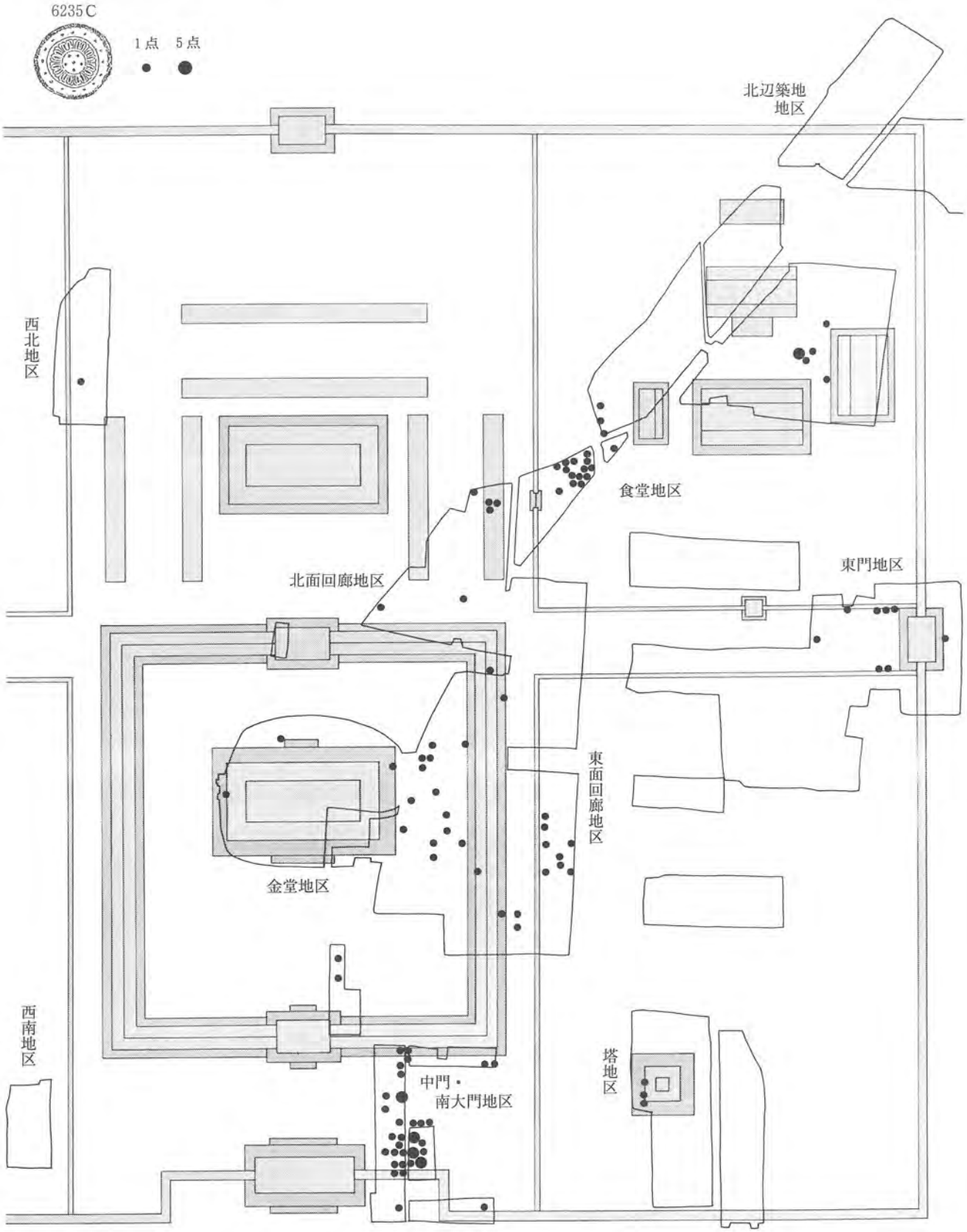
出土瓦の平面分布 (3)　丸瓦　1 : 1200



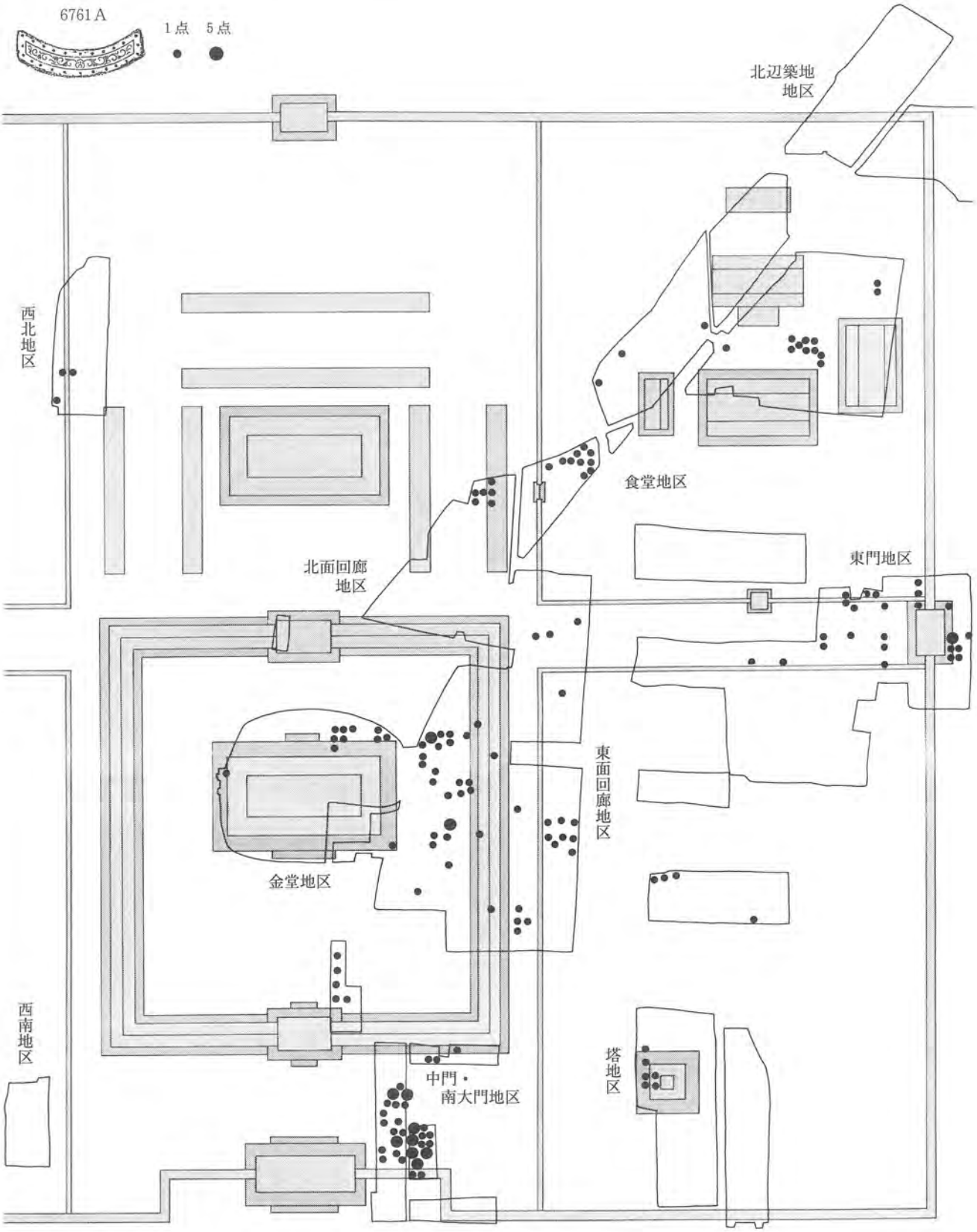
出土瓦の平面分布 (4)　平瓦　1 : 1200



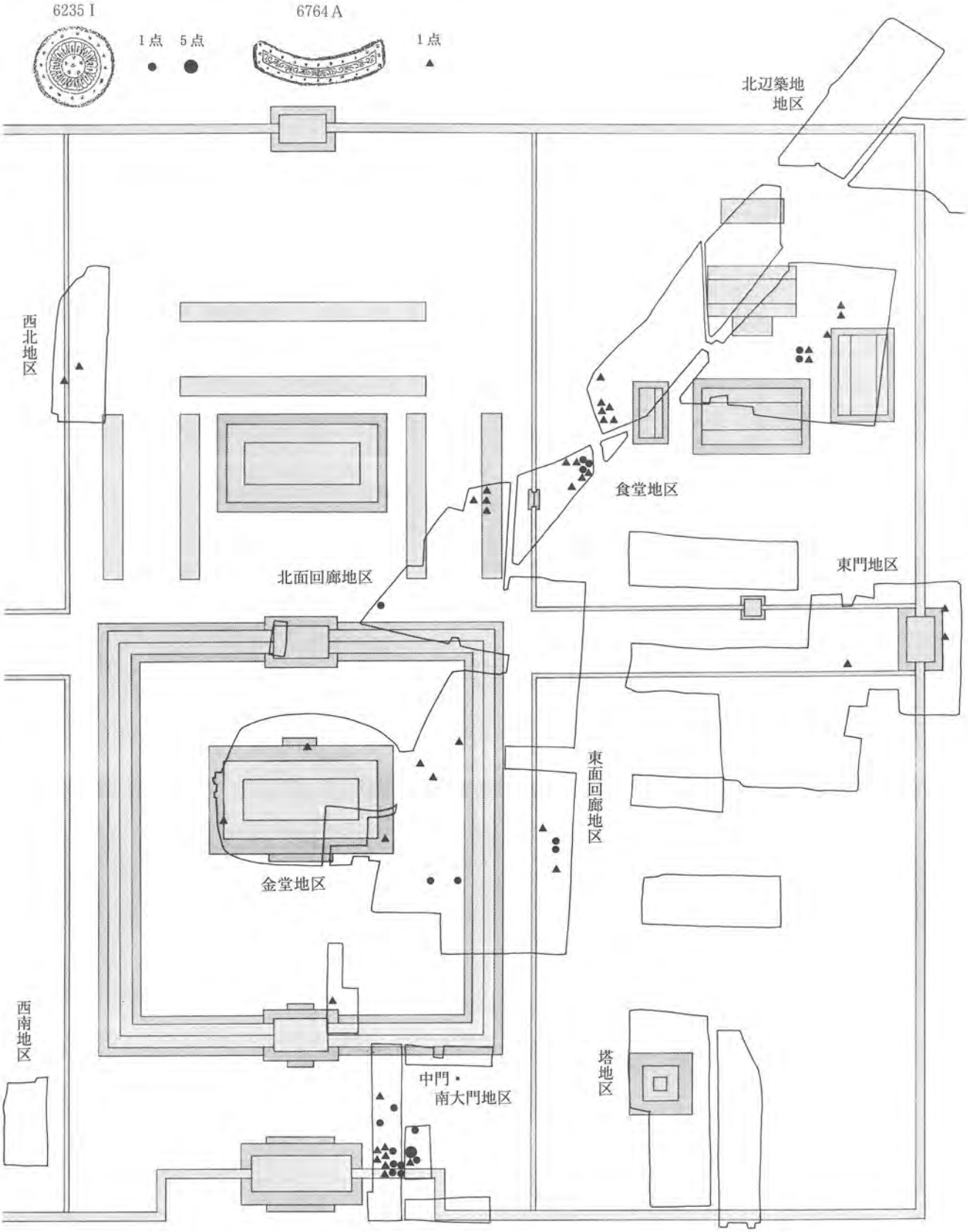
出土瓦の平面分布 (5)　6235C　1 : 1200



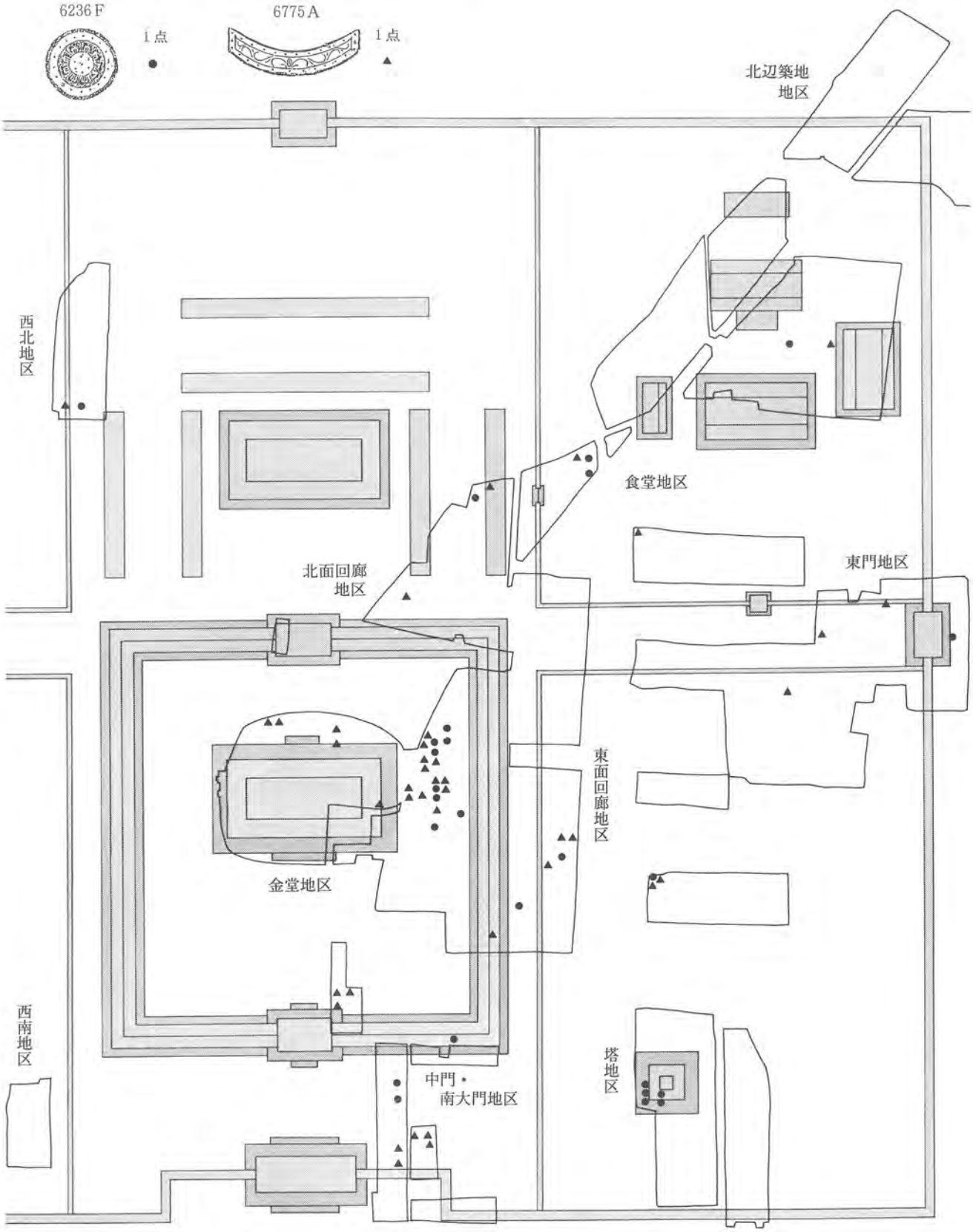
出土瓦の平面分布 (6)　6761A　1 : 1200



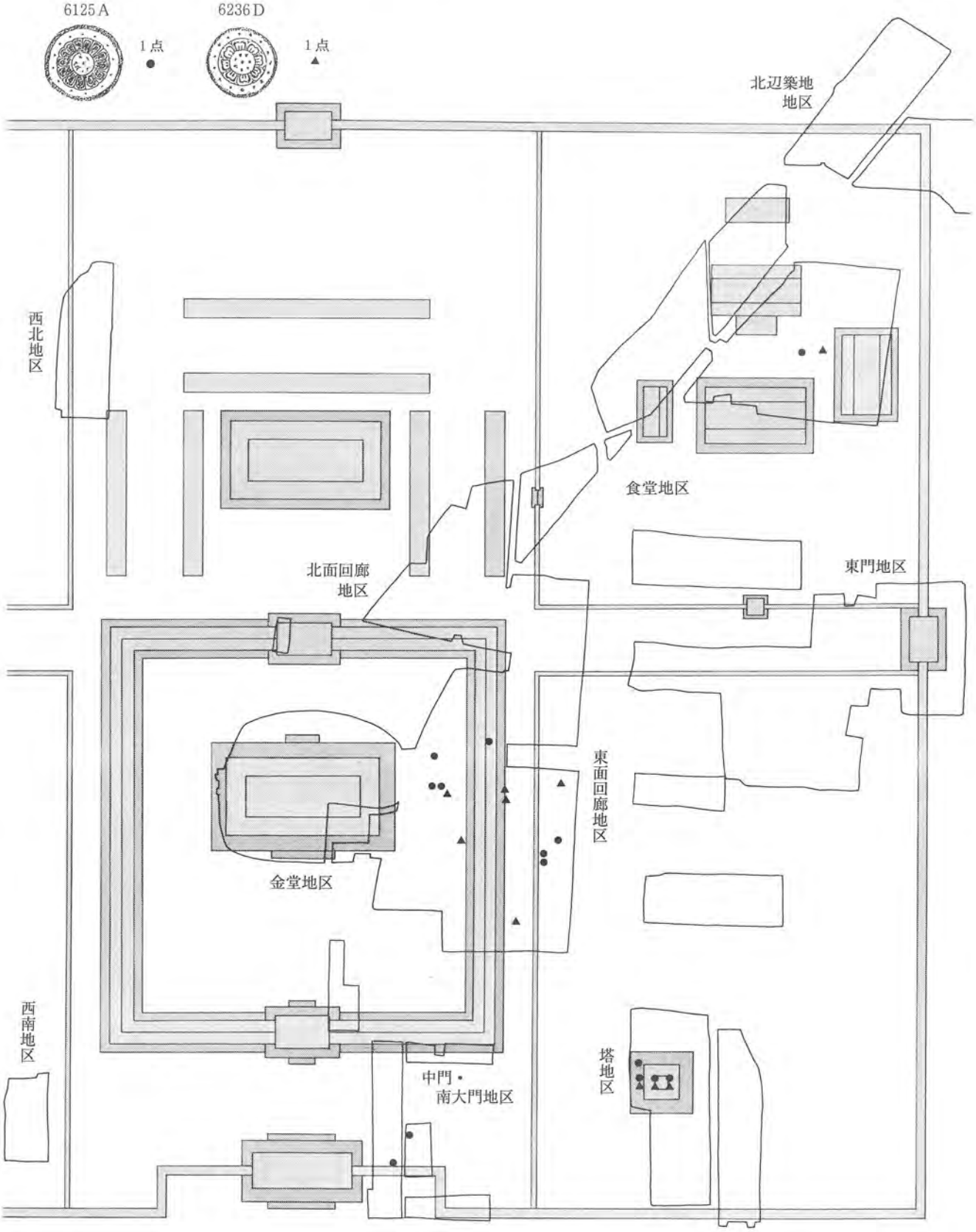
出土瓦の平面分布 (7)　6235 I －6764 A　1 : 1200



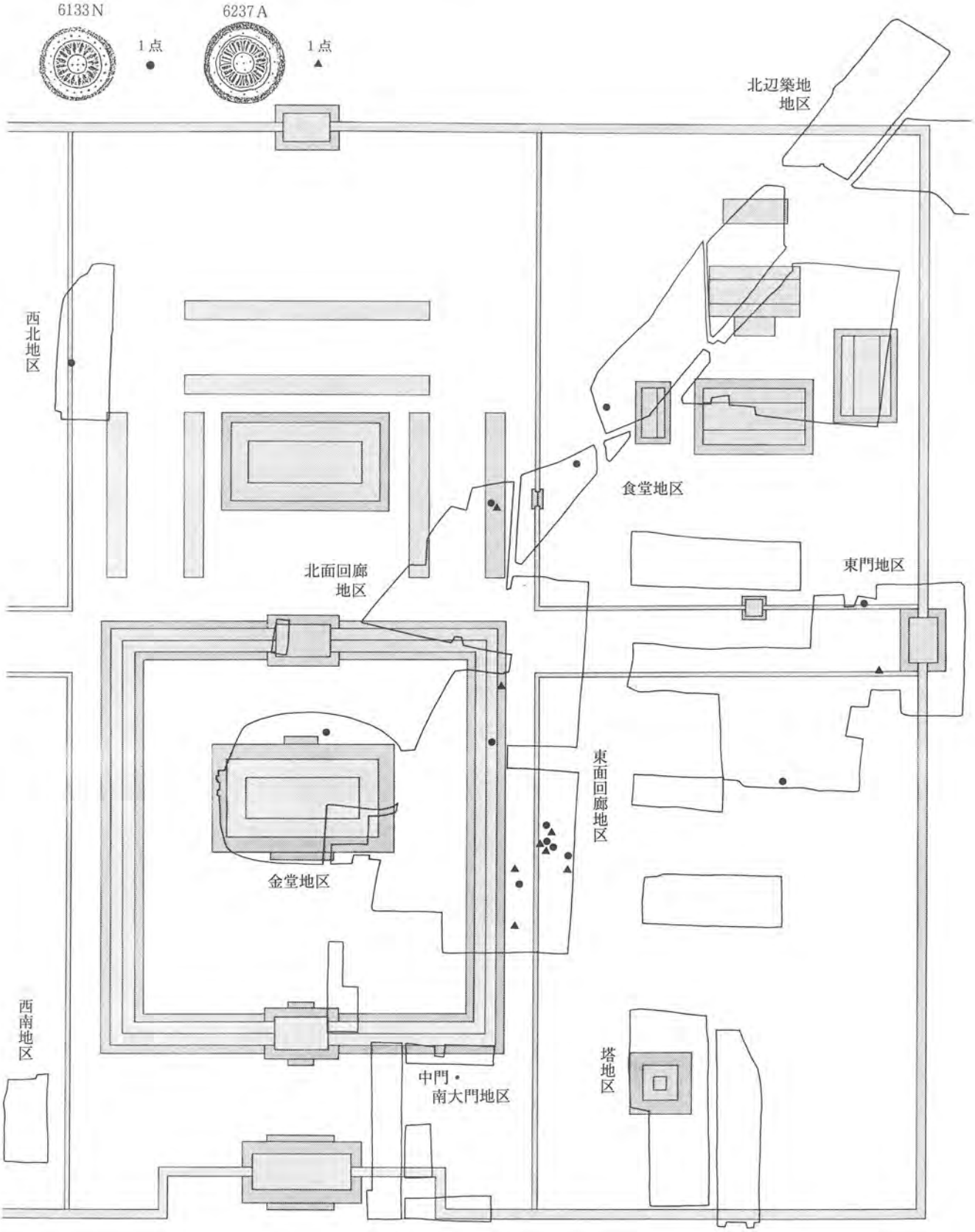
出土瓦の平面分布 (8)　6236F－6775A　1：1200



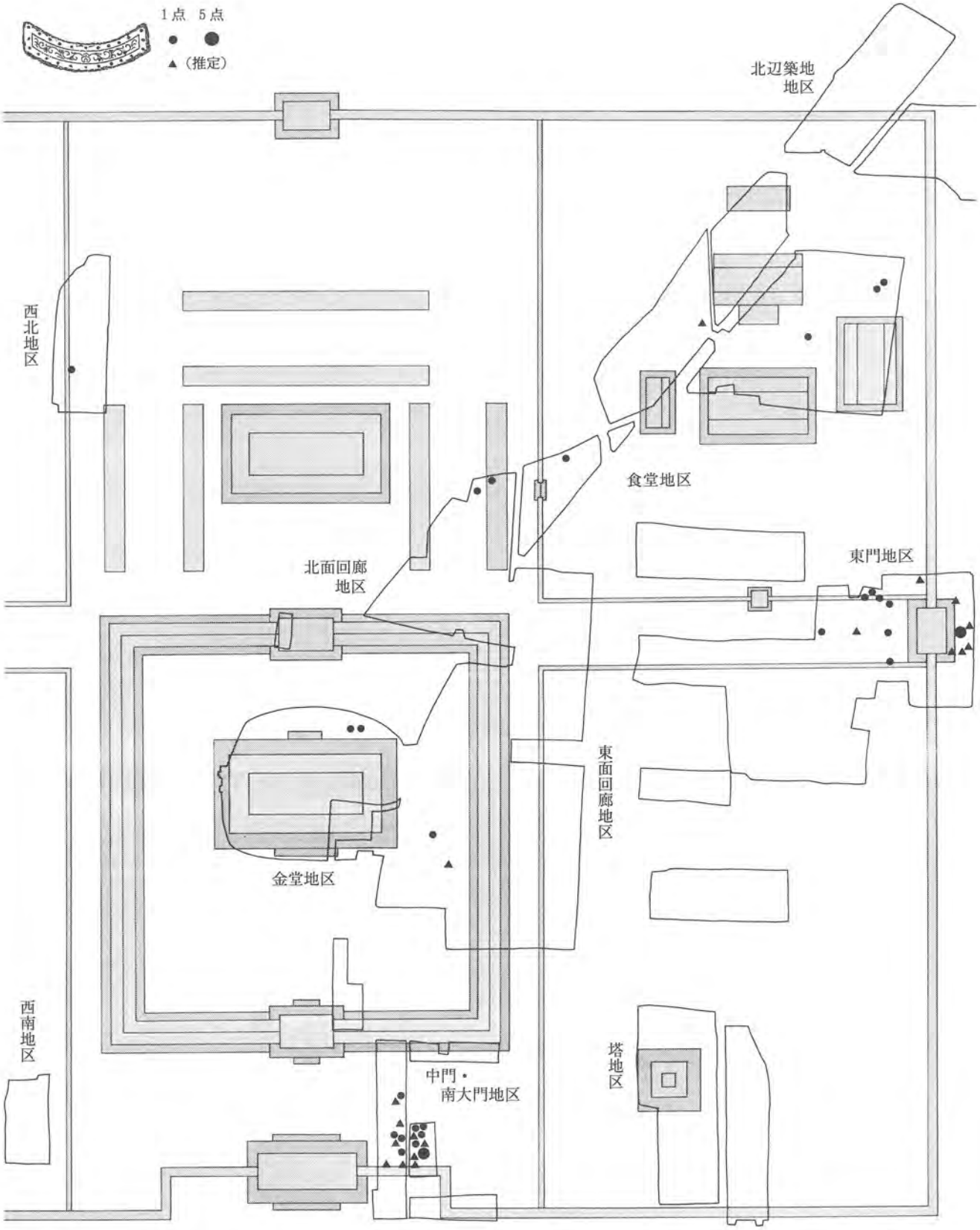
出土瓦の平面分布 (9)　6125A・6236D　1：1200



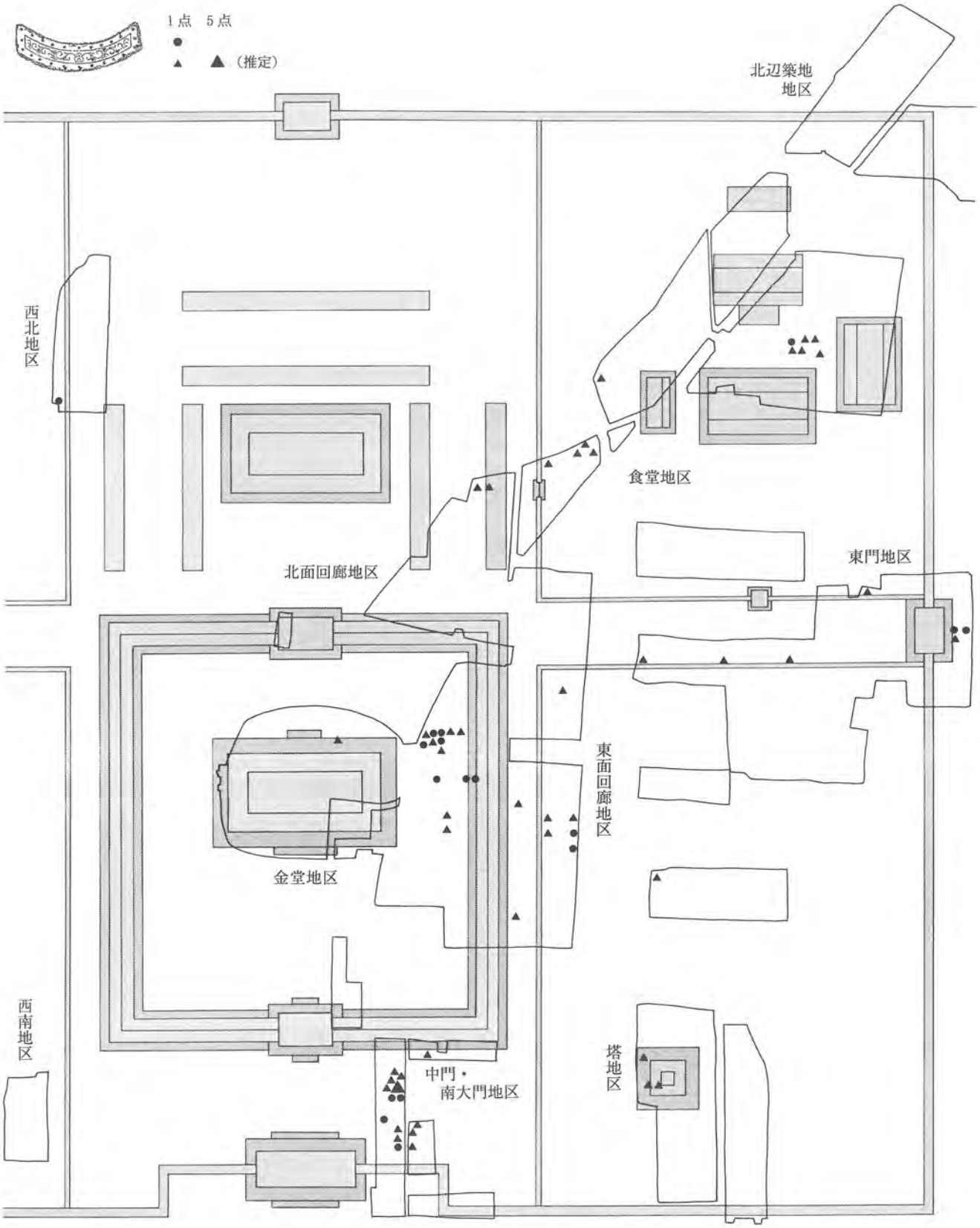
出土瓦の平面分布 (10)　6133N・6237A　1：1200



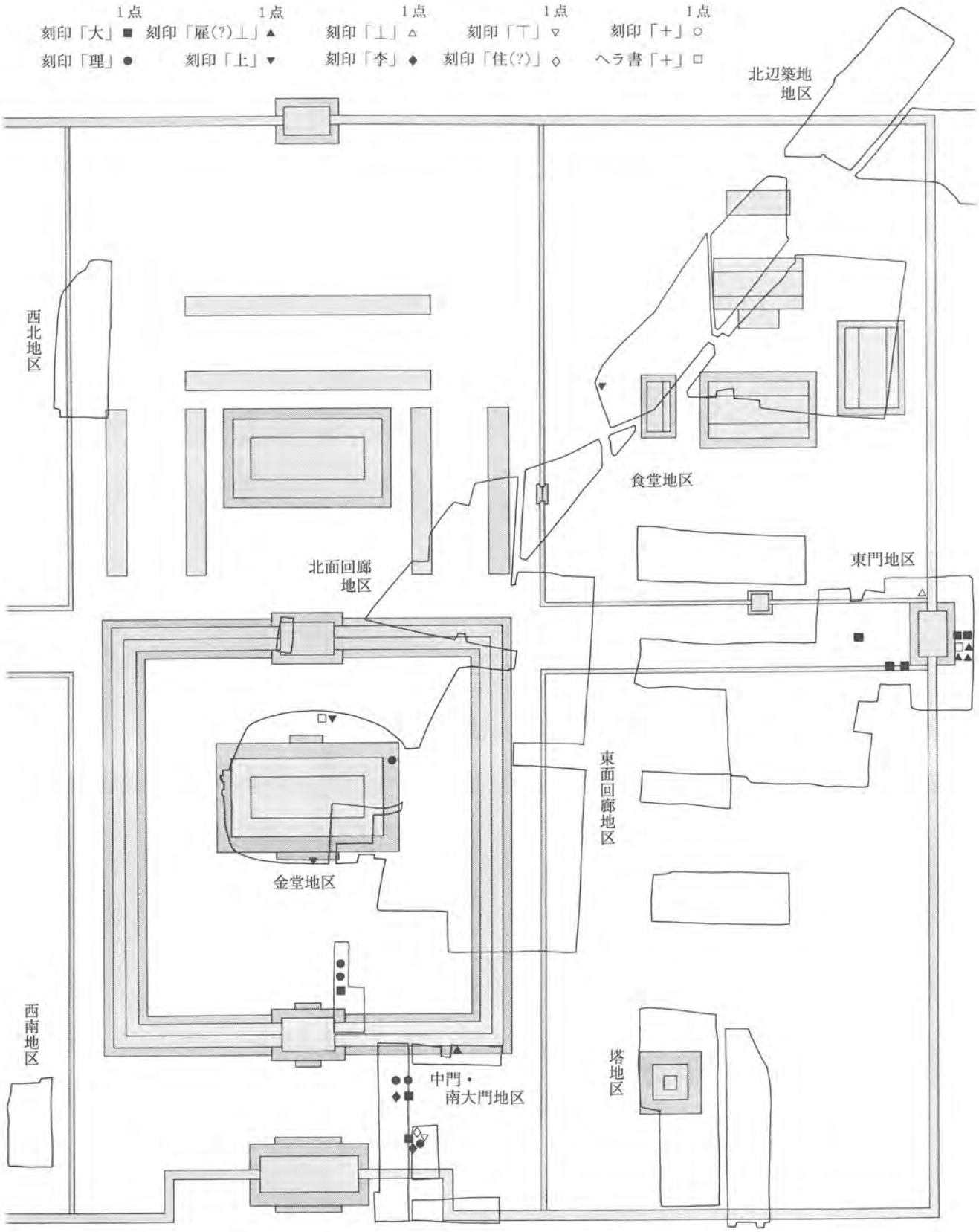
出土瓦の平面分布 (11)　6761A　笵傷進行第Ⅰ段階　1：1200



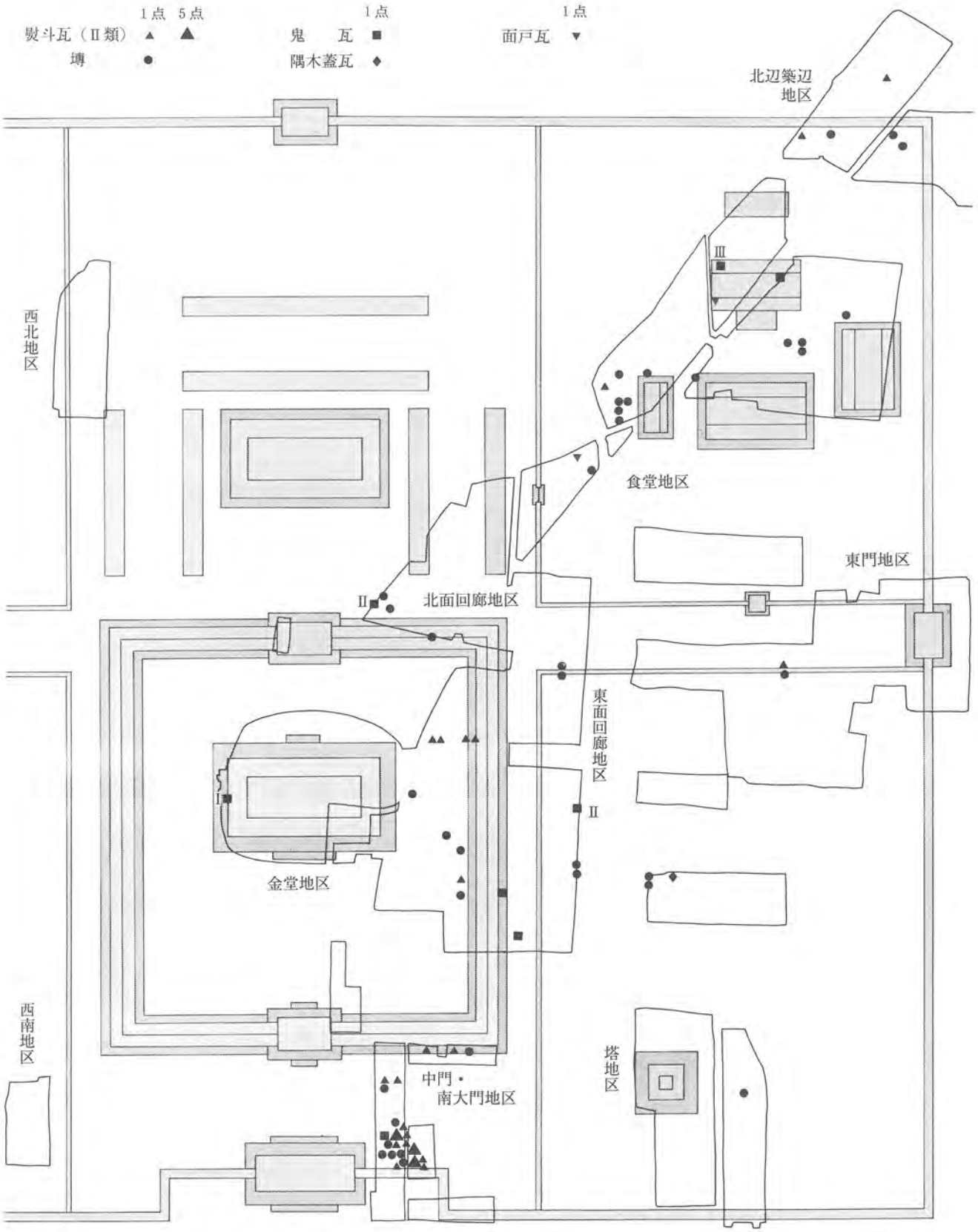
出土瓦の平面分布 (12)　6761A　笵傷進行第Ⅱ・第Ⅲ段階　1：1200



出土瓦の平面分布 (13)　文字瓦　1：1200



出土瓦の平面分布 (14)　道具瓦　1：1200



RESEARCH REPORTS OF NARA NATIONAL
CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE, No. 52

EXCAVATIONS AT SAIRYŪ-JI, AN ANCIENT NUNNERY IN NARA, JAPAN

English Table of Contents and Summary

Nara National Cultural Properties Research Institute (Nabunken)
1993

Note

Throughout the table of contents and the text, we use the following abbreviations: SA for feces and walls, SB for buildings, SC for corridors, SD for ditches, SE for wells, SG for ponds and reservoirs, SK for pits, and SX for other miscellaneous features, including ritually buried pottery and wooden troughs. We distinguish two types of structures, a post-hole type and base-stone type. In the former, a supra-structure is supported by pillars directly planted into the ground, and in the latter a supra-structure is supported by pillars standing on base stones.

Excavations at Sairyū-ji: an Ancient Nunnery in Nara, Japan

1993

Table of Contents

Chapter I : Introduction 1
1 History of investigations 1
A Investigations carried out between 1971 and 1973 1
B Investigations carried out between 1989 and 1991 1
2 Preparation of the site report 3

Chapter II : History of Sairyū-ji 5
1 Construction of the nunnery 5
2 Selection of the construction site and the arrangement of the nunnery compound 10
3 Sairyū-ji after the ninth century 13

Chapter III : Investigations 15
1 Excavations in the vicinity of the nunnery site 15
2 Overview of the investigations reported in this volume 20
3 Excavation log 22
A 209th Heijō excavation in the Nara Palace and Capital 22
B 210th excavation 23
C 212th excavation 24
D 219th cxcavation 25
E 221st excavation 27
F 223-4th excavation 27
G 227th excavation 28
H 228th excavation 28
I 223-21st excavation 30

Chapter IV : Site 31
1 Overview 31
2 Archaeological features 33
A Features dating prior to the seventh century A.D. 33
B Corridors surrounding the image hall and their vicinity 35
C Dining hall of the nunnery and its vicinity 40

Chapter V : Artifacts 47
1 Roof tiles and tiles 47

A Round eaves tiles 47
B Flat eaves tiles 56
C Miscellaneous roof tiles excluding the eaves tiles; tiles 65
D Round and flat roof tiles 67
E Roof tiles with inscriptions 68
2 Pottery and miscellaneous clay objects 70
A Pottery discovered in pits 70
B Pottery discovered in post holes 72
C Pottery discovered in reservoir SG530, earth filling the reservoir, and occupation debris accumulated over the leveled reservoir ... 73
D Pottery discovered in wells 76
E Glazed pottery and white porcelains 79
F Ink stones, penis-shaped clay objects, circular saucer-like objects, spindle-whorls, etc. 80
G Pottery with inscriptions in ink 81
H Pottery dating prior to 710 A.D. 82
3 Wooden objects 85
A From reservoir SG530 85
B From well SE491 86
C Frames of well SE491 recycled from door boards 86
4 Metal and stone objects 88
A Metal objects 88
B Stone objects 89
5 Artifacts associated with the feature of ritually buried pottery SX449 90

Chapter VI: Scientific Studies 91
1 Dendrochronology 91
2 Analysis of plant opal discovered at the Sairyū-ji site 92
A Samples 92
B Method 92
C Results 92
D Discussion 93
3 Analysis of fatty acid remaining on pottery surface 94
A Introduction 94
B Soil samples 94
C Extraction of remnant fat 95
D Fatty acid composition in the remnant fat 95
E Sterol composition the remnant fat 97
F Quantitative analysis of the fatty acid composition 98
G Correlation of species for fatty acid composition 98
H Determination of glycolipids class by enzyme-linked immunosorbent assay (ELISA) method 99

I Summary 100

Chapter VII: Discussion 101
1 Sairyū-ji and the *jōbō* gridiron urban system 101
A *Jōbō* gridiron urban system before the construction of Sairyū-ji 103
B Arrangement of major buildings in the Sairyū-ji temple compound 103
2 Selection of the site for a new temple and its compound 105
3 Northeastern section of the compound which can be interpreted as a dining hall complex 109
4 Door boards discovered in well SE491 and their reconstruction to original door boards 113
5 Nature of the feature of ritually buried pottery SX449: an archaeological standpoint 115
A Context of discovery 115
B Questions raised against the results of fatty acid analysis 116
C Problem with the hypothesis that placenta was buried 119
D Ground-breaking ritual hypothesis 121
E Summary 122
6 Eaves tiles at Sairyū-ji in the 760's and 770's 124
A Structures roofed with tiles 124
B Pairs of round and flat eaves tiles 124
C Production and procurement of eaves tiles 128
7 Conclusions 137

Supplementary tables, supplementary figures

English table of contents and summary

List of Figures

1 Streets and avenues of the ancient Nara Capital in the vicinity of Sairyū-ji and the present condition 2
2 Excavation units in and around Sairyū-ji 16
3 Grid assignment in the excavation unit 6 BSR 20
4 Grid assignment and major features during the 209th Heijō excavation 22
5 Grid assignment and major features during the 210th excavation 23
6 Grid assignment and major features during the 212th excavation 24
7 Grid assignment and major features during the 219th excavation 25
8 Grid assignment and major features during the 221st excavation 27
9 Grid assignment and major features during the 227th excavation 28

10 Grid assignment and major features during the 228th excavation ····· 29
11 Grid assignment and major features during the 223-21st excavation ··· 30
12 Sairyū-ji and the present route of Akishino stream ····· 31
13 Topography of the excavated area and an earlier route of Akishino stream ····· 32
14 Kofun Period ditch SD350: stratigraphic cross section ····· 33
15 Jomon Period ditch SD440: stratigraphic cross section ····· 33
16 Kofun Period ditch SD529 turned into reservoir SG530 in the early Nara Period: stratigraphic cross sections ····· 34
17 Pit dug to install one of the pillars of Kofun Period building SB536 ··· 34
18 East-side corridor SC300 of Sairyū-ji: a model ····· 35
19 Distribution of pottery sherds in depressed area SK388 (late Nara Period) ····· 36
20 Covered conduit (underdrain) SX400 underground of SC300: plan ····· 37
21 North-side corridor SC450 of Sairyū-ji: plan and stratigraphic cross section of the foundation ····· 38
22 Post-hole type buildings, including SB541 (late Nara Period): models ····· 39
23 East-side tamped earth wall SA420 enclosing the Sairyū-ji compound: stratigraphic cross section of the foundation ····· 40
24 Buildings, including base-stone type SB480 and post-hole type SB485: models ····· 41
25 Buildings, including base-stone type SB490 and post-hole type SB495: models; a cross section of a pit dug to install a base stone for SB490 ····· 42
26 Post-hole type buildings, including SB500, 504, and 505: models ····· 43
27 Post-hole type buildings SB515 and parts of other buildings: models ····· 44
28 Wooden trough SX533 and preserved basal portion of a pillar for fence SA535: plans and stratigraphic cross sections ····· 45
29 One of the base stones for pillars of the north-side gate SB608: plan ····· 46
30 Classification of the rim morphologies of round eaves tiles ····· 47
31 Round eaves tiles: wet rubbings 1 ····· 49
32 Round eaves tiles: wet rubbings 2 ····· 51
33 Round eaves tiles: wet rubbings 3 ····· 55
34 Classification of the cross sectional morphologies of "jaws" [eaves part] of flat eaves tiles ····· 56
35 Top surface of flat eaves tile type 6663C: wet rubbings ····· 58
36 Flat eaves tiles: wet rubbings 1 ····· 55
37 Flat eaves tiles: wet rubbings 2 ····· 61
38 Flat eaves tiles: wet rubbings 3 ····· 63
39 Roof tiles with seal impressions and inscriptions ····· 69

40 Pottery discovered in post holes 73
41 Pottery discovered in wells SE548 and SE370 77
42 Feature of ritually buried pottery SX449 90
43 Context of the discoveries of pottery and coins in the feature 90
44 Standard chronology of *hinoki* cypress (top) and ring patterns obtained from frame B of well SE491 91
45 Where samples were taken for fatty acid analysis 94
46 Fatty acid composition in remnant fat 96
47 Sterol composition in remnant fat 97
48 Branching-tree diagram for fatty acid composition among samples taken from Sairyū-ji, Nara Palace, and a human 98
49 Correlation of species for fatty acid composition 99
50 Enzyme-linked immunosorbent assay of glycolipid remaining on the pottery surface 99
51 Reconstructed plans of the image hall (left) and eastern gate (right) of Sairyū-ji 105
52 Site of Sairyū-ji and arrangement of buildings in the compound 106
53 Reconstructed plan of the Sairyū-ji temple compound 107
54 Arrangement of individual structures in the Saidai-ji temple compound 108
55 Features of the dining hall complex dating to the late 760's and 770's 110
56 Arrangement of structures in the dining hall complex at Saidai-ji 110
57 Features of the dining hall complex after the structural modification toward the end of the eighth century 111
58 Door boards discovered in well SE491 113
59 Reconstruction of the door boards discovered in well SE491 114
60 Ratio of different types of eaves tiles 126
61 Pairs of round and flat eaves tiles at Sairyū-ji in the 760's and 770's 127
62 Development of a fissure on a mold used for the type 6761A flat eaves tiles and change in the "jaw" morphology 129

List of Tables

1 List of individual excavations: dates, durations, areas 4
2 Total numbers of round and flat tiles according to excavation grids 67
3 List of pottery with inscription in ink 81
4 Results of plant opal analysis of samples taken at Sairyū-ji 93
5 List of microscopic photographs of plant opals 93
6 Extracted amount of fat remained in soil samples 95
7 Ratios of cholesterol and sitosterol in six samples 97

8 Glycolipid in the membrane of human erythrocyte ····· 100
9 Determination of blood type glycolipids class remaining on the pottery surface ····· 100
10 Equations for planned lines of streets and avenues under the *jōbō* gridiron urban system in the area of the Sairyū-ji compound (equations to designate individual lines on the coordinate system) ··· 101
11 Mapped coordinates of the central axis of the alley in the middle of the west first column avenue and west second column avenue ····· 102
12 Mapped and estimated coordinates of temple structures at Sairyū-ji, including the pagoda and image hall ····· 104
13 List of discovered jars containing placenta ····· 121

Supplementary Tables and Figure

1 Classification of round eaves tiles and locations of their discoveries ····· 140
2 Classification of flat eaves tiles and locations of their discoveries ····· 146
3 Spatial distribution of roof tiles according to types in the excavated areas ····· 152

Plans

1 Archaeological features related to Sairyū-ji excavated from 1989 to 1991
2 Archaeological features excavated during the 209th excavation (eastern half)
3 Archaeological features excavated during the 209th excavation (western half)
4 Archaeological features excavated during the 210th excavation
5 Archaeological features excavated during the 212th excavation
6 Archaeological features excavated during the 219th excavation
7 Archaeological features excavated during the 221st excavation
8 Archaeological features excavated during the 227th excavation
9 Archaeological features excavated during the 228th excavation (southern half)
10 Archaeological features excavated during the 228th excavation (northern half)
11 Archaeological features excavated during the 223-21st excavation

Color plates

Frontispiece: General view of excavation unit (219th excavation), from southeast (top)
General view of south excavation unit (228th excavation), from

northeast (bottom)

Plates

1 Sairyū-ji feature excavated during the 209th excavation
East-side corridor SC300 surrounding the image hall, general view from south

2 Sairyū-ji features excavated during the 209th excavation
  1 East-side corridor SC300 and covered conduit SX400 underground of SC300, from north
  2 East-side corridor SC300, from north

3 Sairyū-ji features excavated during the 209th excavation
  1 Covered conduit SX400, from west
  2 Post-hole type buildings SB395 and SB366, from north

4 Features excavated during the 210th excavation
  1 East-side tamped-earth wall SA420 enclosing the whole nunnery compound, from north
  2 East-side tamped-earth wall SA420, from north
  3 Covered conduit SX430 underground of SA420, from south

5 Excavated unit during the 212th excavation
  1 General view, from southeast
  2 Northern half of the excavated unit, from east-southeast

6 Features excavated during the 212th excavation
  1 North-side corridor SC450 of Sairyū-ji surrounding the image hall, from east-southeast
  2 Kofun Period building SB441 and fence SA442, from east

7 Sairyū-ji features excavated during the 212th excavation
  1 East-west ditches SD451 and SD452, from east
  2 Ritually buried pottery SX449 in the northeastern corner of the corridor surrounding the image hall, from north

8 Excavated unit and Sairyū-ji features during the 219th excavation
  1 General view, from southeast
  2 General view, from northwest
  3 Post-hole type buildings SB495 and SB500, from west

9 Sairyū-ji features excavated during the 219th excavation
  1 Post-hole type building SB495, from east
  2 Base-stone type building SB480 and post-hole type building SB495, from north

10 Sairyū-ji features excavated during the 219th excavation
  1 Dining hall SB490, from east
  2 Dining hall SB490, from northwest
  3 Cobbles supporting a base stone for SB490, from south

11 Sairyū-ji features excavated during the 219th excavation

1 Post-hole type north-south fence SA425 and SB500, from east
2 Dining hall SB490 and post-hole type building SB495, from northeast

12 Excavated unit and Sairyū-ji features during the 221st excavation
1 General view, from northeast
2 Post-hole type buildings SB542 and SB541 (nuns' dormitories?), from east

13 Sairyū-ji features excavated during the 221st excavation
1 Post-hole type buildings SB542 and SB541, from east
2 North-side corridor SC450 and scatter of roof tiles SX550 presumably fallen from SC450, from east

14 Sairyū-ji features excavated during the 227th excavation
1 Ditch SD429 parallel to SC450 and post-holes SX605 interpreted as a bridge crossing SD429, from northeast
2 Post-hole type fence SA610 and ditch SD429, from northeast
3 Ditch SD429, from east

15 Excavated unit (south unit) and a feature during the 228th excavation
1 General view of the south unit, from northeast
2 Early Nara Period post-hole type building with roofed veranda SB510, from north

16 Excavated features in the south unit during the 228th excavation
1 Post-hole type building SB510, from north
2 Late Kofun Period ditch SD529 turned into early Nara Period reservoir SG530, from north

17 Excavated unit (north unit) and Sairyū-ji features during the 228th excavation
1 Post-hole type buildings SB505 and SB500, from northeast
2 General view of the north unit, from northeast

18 Sairyū-ji features in the north unit during the 228th excavation
1 Post-hole type building SB505 (administrative office for dining hall?) and fence SA509 enclosing SB505, from east
2 Post-hole type buildings SB500 and SB505, from northeast

19 Excavated unit and Sairyū-ji features during the 223-21st excavation
1 General view, from northeast
2 Post-holes SB540 (gate to the dining hall complex?), from east

20 Features excavated during the 223-21st excavation
1 Wooden trough SX533 and post-hole type fence SA535 oriented east-west, from northeast
2 Wooden trough SX533 and post-hole type fence SA535, from west-northwest
3 Early Nara Period reservoir SG530 and two rows of posts SX531 which can be interpreted as a bridge, from southwest

21 Wells
1 SE370 excavated during the 209th excavation, from north

2 SE448 excavated during the 212th excavation, from east
3 SE491 excavated during the 219th excavation, from west

22 *Yamato no Kuni Saidai-ji Ōko Shikichi-zu* [Map of the Saidai-ji temple compound in Yamato (Nara), indicating the locations of Saidai-ji and Sairyū-ji in the first ward, western sector of the Nara Capital, drawn in the Kamakura Period (1192-1333)]

23 *Yamato no Kuni Saidai-ji Shikichi no Zu* [Map of the Saidai-ji temple compound in Yamato (Nara), indicating the locations of Saidai-ji and Sairyū-ji in the first ward, western sector of the Nara Capital, ca. 1297]

24 *Saidai-ji Garan Ezu* [Illustration of the Saidai-ji temple compound (1698)]

25 *Saidai-ji Garan Ezu* (with focus on the part of the Sairyū-ji nunnery)

26 *Yamato no Kuni Saidai-ji Shikichi-zu* [Map of the Saidai-ji temple compound in Yamato (Nara), indicating the locations of Saidai-ji and Sairyū - ji (1280)]

27 *Saidai-ji Ko-Garan Shikichi narabi Genzon Dōsha Bōin Zu* [Illustration of temple structures in Saidai-ji that survived until the Tokugawa Period and their vicinity (1698)]

28 Pairs of round and flat eaves tiles (1)

29 Pairs of round and flat eaves tiles (2)

30 Round eaves tiles (1)

31 Round eaves tiles (2)

32 Round eaves tiles (3)

33 Round eaves tiles (4)

34 Round eaves tiles (5)

35 Production techniques of round eaves tiles

36 Flat eaves tiles (1)

37 Flat eaves tiles (2)

38 Flat eaves tiles (3)

39 Flat eaves tiles (4)

40 Various surface features of flat eaves tiles which indicate the production techniques

41 Various surface features of flat eaves tiles which indicate the production techniques

42 Various surface features of flat eaves tiles which indicate the production techniques

43 Ornamental ridge-end roof tiles and miscellaneous roof tiles other than eaves tiles

44 Ridge tiles

45 Round roof tiles

46 Flat roof tiles

47 Roof tiles with inscriptions

48 Pottery excavated in pits

49 Eighth century Haji pottery (earthenware) excavated from reservoir

SG530, earth filling the reservoir, and debris accumulated on it

50 Eighth century Haji pottery, black earthenware, and pottery used for salt production excavated from reservoir SG530, earth filling the reservoir, and debris accumulated on it

51 Eighth century Sue pottery (stoneware) excavated from reservoir SG530, earth filling the reservoir, and debris accumulated on it

52 Pottery excavated in well SE492

53 Ink stones, penis-shaped clay objects, circular saucer-like objects, spindle whorls, etc.

54 Pottery utensils used for Buddhist ceremonies (Sue stonewares and glazed stonewares)

55 Glazed stonewares and white porcelains

56 Pottery with ink inscriptions

57 Pottery dating to the Jomon and Kofun Periods

58 Wooden objects

59 Wooden objects

60 Door boards recycled to frames (A and B) of well SE491

61 Door board recycled to a frame (C) of well SE491

62 Door board recycled to a frame (D) of well SE491

63 Metal objects

64 Stone objects

65 Context of the discovery of pottery and coins in ritually buried pottery SX449

66 Fabric discovered in SX449: microscopic photographs

67 Plant opals: microscopic photographs

Supplementary Plan

Excavated features

Excavations at Sairyū-ji, an Ancient Nunnery in Nara

SUMMARY

This report summarizes the results of archaeological investigations carried out at the site of Sairyū-ji 西隆寺, an eighth to tenth century nunnery in Nara, Japan. Prior to the expansion and remodeling of a major department store and the construction of streets, staff of the Nara National Cultural Properties Research Institute (Nabunken) conducted eight excavations between 1989 and 1991 in the areas of the corridors surrounding the image hall, the dining hall and a part of the tamped-earth walls enclosing the compound. These excavations confirmed the existence of the east-side corridor at the previously anticipated location, and moreover, clarified changes in the arrangement of structures in the dining hall complex located to the northeast of the nunnery compound. Since Sairyū-ji is not well documented in written sources, the results of these excavations will shed new light on researches into ancient temples in Japan.

Overview of the Site

It is historically known that the construction of the Sairyū-ji nunnery began in 767 A.D. during the reign of Empress Shōtoku 称徳. The nunnery was a national temple in a pair with the Saidai-ji 西大寺 monastery, and it occupied the ninth, tenth, fifteenth, and sixteenth blocks of the second ward on the first row avenue in the western sector of the ancient Nara Capital (in use 710-784), which was confirmed archaeologically during six excavations between 1971 and 1973, opening the area of 5434 sq. meters in total[1].

These excavations also revealed the foundations of the image hall, the pagoda, and the eastern gate. The image hall was situated on the north-south axis of the nunnery compound, which was along the alley between the tenth and fifteenth blocks. It was, however, a little off to the south of the east-west central axis of the compound. The foundation platform of the image hall measured 38.2 by 23.4 meters. The supra-structure can be reconstructed to a seven by four bay building standing on base stones.

Approximately 100 meters to the southeast to the image hall was the pagoda. The foundation of the pagoda measured six meters north-south by less than six meters east-west. The foundation platform was not preserved.

The eastern gate was situated a little off to the north of the east-west

1 KUROSAKI Tadashi, Editor. 1976. *Sairyū-ji Hakkutsu Chōsa Hōkoku* [Report of Excavations at Sairyū-ji]. *Ad Hoc* Committee for the Sairyū-ji Investigations, Nara.

central axis of the nunnery compound, roughly 140 meters to the east of the image hall. The gate was elaborately constructed; the supra-structure of the gate was supported by four major pillars and eight minor pillars on base stones.

Inside of the eastern gate was a paved alley leading west to the center of the compound. The alley was 12.7 meters in width, and both sides were marked by tamped-earth walls. This suggests that the nunnery compound was divided into smaller areas enclosed by tamped-earth walls.

These major structures in the nunnery were already completed by 771 when the imperial government granted the official seal of Sairyū-ji. Historic sources record that Sairyū-ji was under the administration of Saidai-ji by 880, which indicates that the influence of Sairyū-ji had declined. Although Sairyū-ji still remained as of the tenth century, *Yamato Saidai-ji Jiryō Kenchū-chō* [Notebook of Examinations on the Saidai-ji Territory in Nara] dated to 1251 records that the site of Sairyū-ji was used as agricultural lands, meaning that Sairyū-ji had ceased to exist by that time.

The excavations, the results of which are reported in this volume, opened an area adjacent to and to the east of the image hall, and seven separate areas to the north and northeast of the image hall, all together 6067 sq. meters in total. In these areas, a part of the east-side corridor and the northeastern corner of the corridor enclosing the center of the Sairyū-ji compound, a complex of buildings related to the Sairyū-ji dining hall, and the northeastern corner of the tamped-earth wall enclosing the whole Sairyū-ji compound were discovered. These significant results have added greatly to our knowledge about the Sairyū-ji nunnery.

Features Dating Prior to Sairyū-ji

Prior to the Nara Palace (710)

Features dating prior to the construction of the Nara Palace in 710 include a final Jomon Period ditch (ca. tenth to fifth centuries B.C.) (SD440) and a middle and late Kofun Period fence (SA442), buildings (e.g. SB441, SB536, SB551), and ditches (e.g. SD350, SD493, SD529, and a few minor ones), which are dated to the fifth and sixth century A.D. The Jomon Period ditch can be interpreted as being man-made owing to similar discoveries from the Yayoi Period (ca. fifth century B.C. to A.D. third century). The Kofun Period ditches may have been for irrigation purposes. Surrounding ditch SD350 of 3 meters in width, 0.45 meters in depth, for example, there are minor ditches parallel to and perpendicular to it, approximately 20 to 24 meters apart, which might have demarcated individual rice paddies. There were a group of residences surrounding ditch SD529 in the sixth century.

Nara Period before Sairyū-ji was constructed (710 to 767)

Residences occupying the second ward on the first row street of the

western sector of the Nara Capital were discovered. A noteworthy example was SB510, a north-south oriented post-hole type structure with a roofed veranda (*hisashi* 廂)[2] on the east side, which was the largest structure in this area of the Nara Capital dating to this phase. The Kofun Period ditch SD529 was turned into the reservoir SG530 during this phase, and was filled up when the construction of Sairyū-ji began in 767.

Features Related to Sairyū-ji (767 to ca. tenth century)

Corridors surrounding the image hall

Parts of the north-side and east-side corridors surrounding the image hall of the Sairyū-ji nunnery were discovered. The corridors were "double or composite" corridors[3] (*fukurō* 複廊) of 16 *shaku*[4] 尺 or 4.8 meters in width. The north-side corridor is reconstructed to be 260 *shaku* or 77.8 meters, and the east-side corridor to be 286 *shaku* or 84.8 meters. The east-side corridor had 27 bays or spaces between two columns. It remains in question whether or not the north-side corridor was connected to a lecture hall of the nunnery, which is presumed to have been situated due north of the image hall.

Dining hall complex in the northeastern part of the nunnery

Between the corridor surrounding the image hall and the tamped-earth wall enclosing the entire nunnery compound in the northeastern part was a dining hall complex. The complex was built after the reservoir SG530 was filled, and the ground was leveled. The complex was enclosed by a tamped-earth wall in four directions. Careful stratigraphic analysis made it possible to discover that the structures in the dining hall complex were once modified although it was impossible to determine the calendrical date.

Phase a (before the structural modification)

The main hall of this complex was the post-hole type building SB490A, a northern part of which was revealed during our excavation. It was oriented east-west and was seven bays in width (70 *shaku* or 21 meters). SB490A was surrounded by three post-hole type buildings SB485, SB495, and SB520 in three directions (to the east, north, and west respectively). All of them were five by two bay buildings. Behind SB495 to the north was a seven by two bay post-hole type building (SB505, 14.7 by 4.8 meters in plan), which was enclosed itself by a fence (SA506).

Owing to the close similarity in the structural arrangement to that of the Saidai-ji dining hall complex which was well recorded in historic sources, the

---

2 *Hisashi* is a narrow aisle-like area outside of the core (*moya*) of a building. Throughout the text it is referred to as a "roofed veranda."

3 Although a single structure, a *fukurō* is divided into two corridors by an earthen wall with windows. The whole structure is supported by three rows of columns.

4 A unit of length in premodern Japan. During the Nara Period, one *shaku* equaled approximately 30 cm.

main hall SB490A is attributed to be a *jikidō* (食堂 dining hall), SB495 to be a *tono* (殿 pantry), SB505 to be an *ōitono* (大炊殿 administrative building), SB485 to be a *higashi no kuriya* (東厨 eastern kitchen), and SB520 to be a *nishi no kuriya* (西厨 western kitchen).

Phase b (after the modification)

The Sairyū-ji dining hall complex was completed during this phase when the major buildings, including the dining hall and the kitchen(s), were turned into heavily constructed structures standing on base stones. SB490A was replaced with a base-stone type building of the same size with a roofed veranda (SB490B). To the west of SB490B, the western kitchen SB520 was once demolished, and instead, the minor base-stone type building SB521 was erected near the site of SB520. The eastern kitchen SB485 was replaced with the base-stone type building SB480. It was oriented north-south, and was a nine by four bay building with roofed verandas on both the east and west sides. The nature of SB480, however, still remains in question as to whether it was a large kitchen or an administrative building. The pantry SB495 was replaced with a large post-hole type building of seven by four bays, with roofed verandas on both the north and south sides (SB500), whose function probably remained as a pantry.

In a space between the dining hall, administrative building, and kitchens was the large well SE491. The use of this well continued until the tenth century, which suggests that Sairyū-ji existed until then.

Tamped-earth walls enclosing the nunnery compound

It is likely that the entire nunnery compound was enclosed by tamped-earth walls. A part of the east-side wall (SA420) and traces of a part of the north-side wall were excavated. The width remains unknown. The discovery of a base stone on the north-side wall (SB608) suggests that a gate was provided on the north side.

Discussion: Nature of the Sairyū-ji Nunnery

Sairyū-ji was erected in a pair with Saidai-ji by Empress Shōtoku's order in the late Nara Period (the 760's and 770's). The former was meant to be a national nunnery, and the latter to be a national monastery. For this reason, the temple compounds of the two were anticipated to be very similar. Indeed, the excavations revealed that the Sairyū-ji dining hall complex was extremely similar to that of Saidai-ji. Roof tiles excavated at Sairyū-ji also strongly suggest a close relationship with Saidai-ji. Sairyū-ji and Saidai-ji were found to share six types of eaves tiles produced with ten molds (e.g. Fig.61, a pair of types 6235C and 6761A). Since none of the Sairyū-ji eaves tile types were used in Tōdai-ji, it is likely that craftsmen in charge of the roof tile production for Saidai-ji were involved in the production of roof tiles for Sairyū-ji in the 770's. (In the 760's when the construction of Sairyū-ji started, however, the roof tile

production for Sairyū-ji was conducted by craftsmen who were involved in the roof tile production for the Nara Palace.)

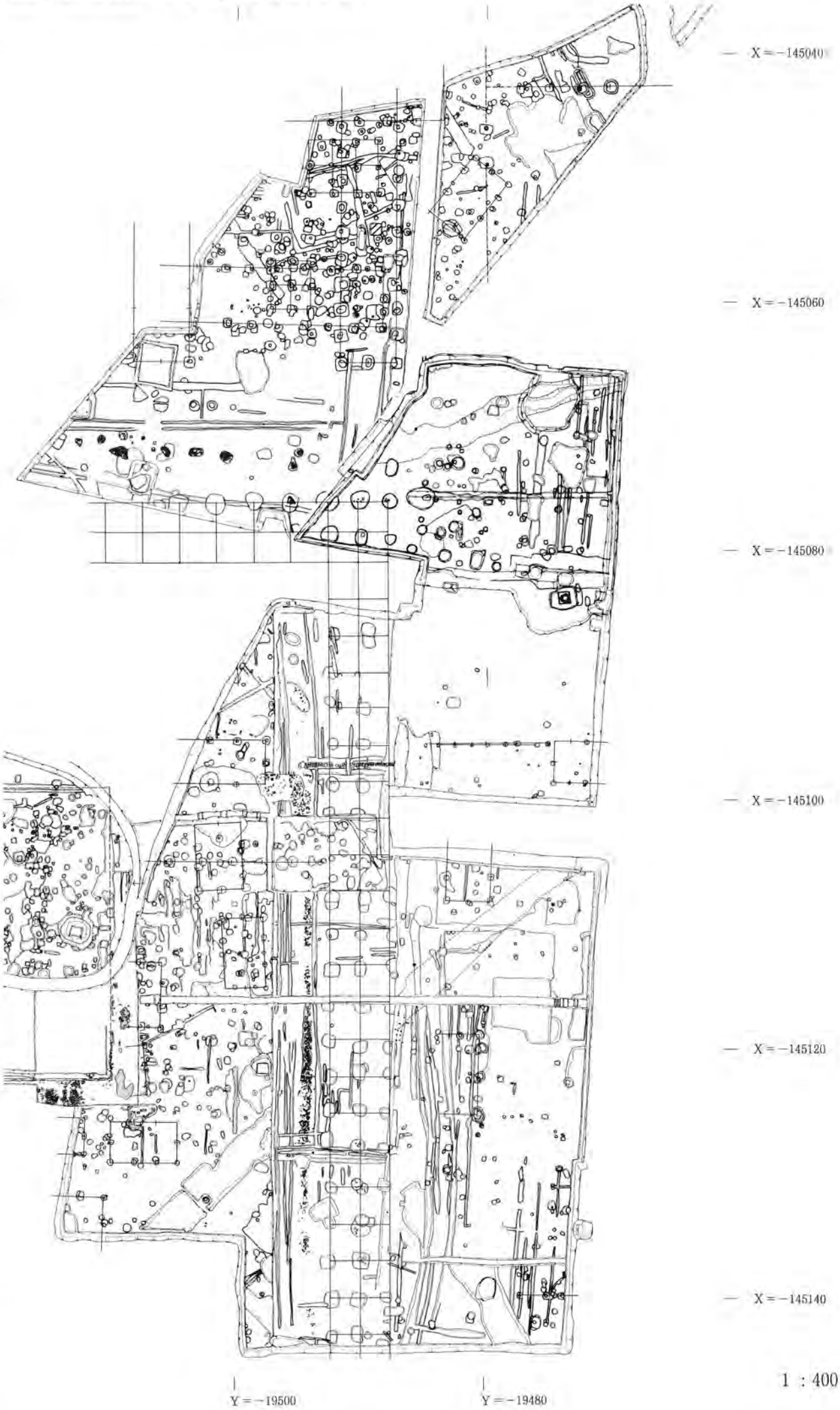
Despite these similarities of Sairyū-ji to Saidai-ji, Sairyū-ji had some unique features. Excavations yielded types of eaves tiles that were not used at Saidai-ji (e.g. Pl. 30, type 6125A and Pl. 39, type 6775A). The Sairyū-ji compound was much smaller than Saidai-ji, estimated at 260 by 230 meters for the former as opposed to 400 by 500 meters for the latter. The arrangement of buildings in the Sairyū-ji nunnery was different from that of Saidai-ji. For example, while the former only had one image hall surrounded by corridors, the latter had two which were connected by corridors. Accordingly, the specific nature of Sairyū-ji in comparison to Saidai-ji still remains to be debated, and the excavations have provided data contributing to this debate.

In conclusion, eight excavations carried out between 1989 and 1991 contributed to understanding about the Sairyū-ji nunnery which is not well recorded in historic sources. The excavations resulted in the discoveries of the east- and north-side corridors surrounding the image hall, the dining hall complex, and the northeastern corner of the tamped-earth walls enclosing the nunnery compound. These results revealed some aspects of Sairyū-ji which were shared with Saidai-ji, and also some aspects which were unique to Sairyū-ji. The results will be useful in interpreting the nature of this nunnery.

図 面・写 真

1．遺構には一連番号をつけ、その前にSA:築地・塀、SB:建物、SE:井戸、SD:溝、SK:土坑、SF:道路、SX:その他などの分類記号を付記する。
2．遺構の実測は国土方眼第Ⅵ座標を基準とし、高さの基準は標高である。
3．遺構の寸法数字はm単位である。
4．PLAN1の実測図の縮尺は1/400でその他は1/200である。
5．遺物写真のPL.番号は、対向ページの実測図にもおよぶことにする。

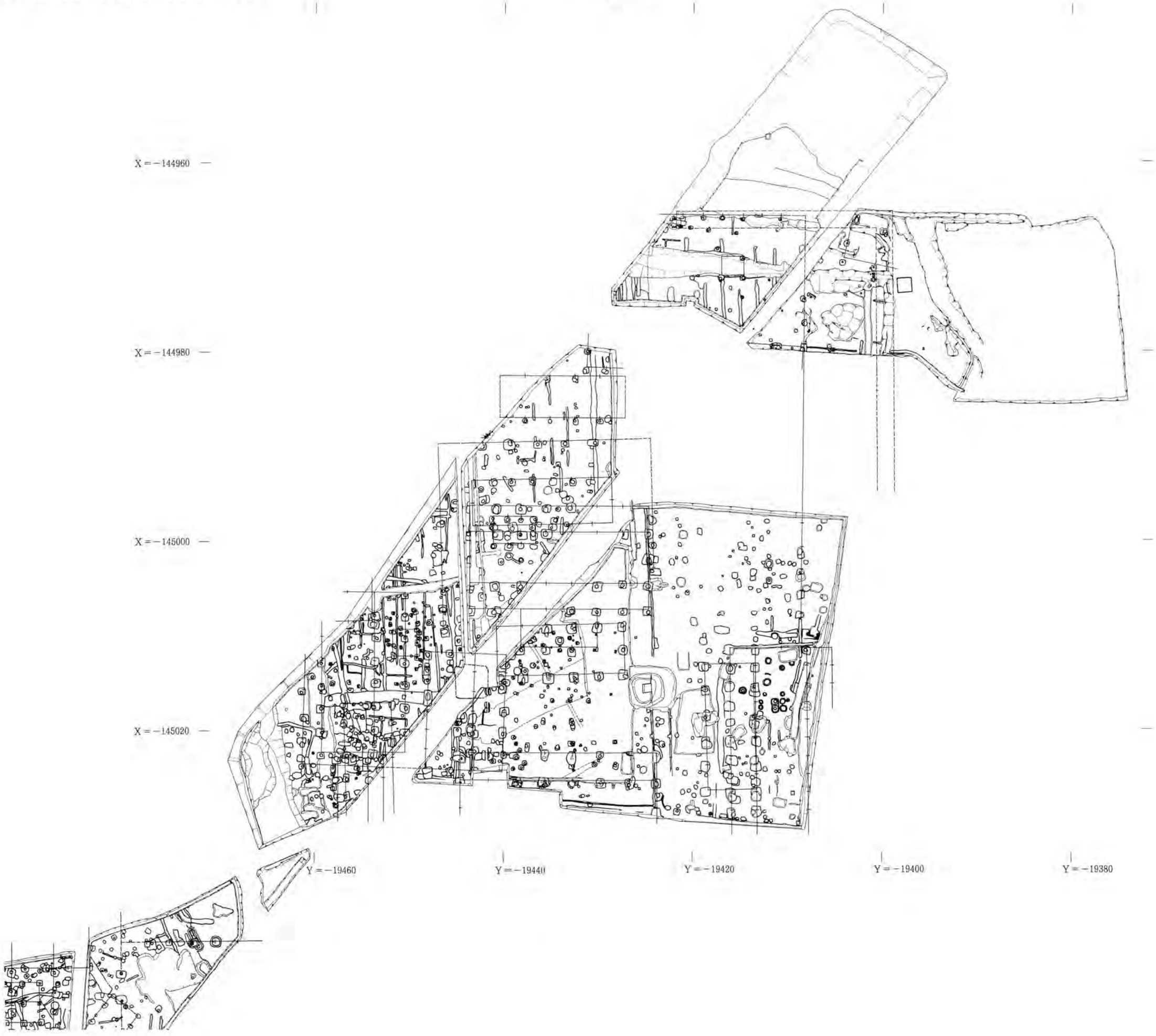
1989～1991年度西隆寺発掘遺構実測図（南半分）



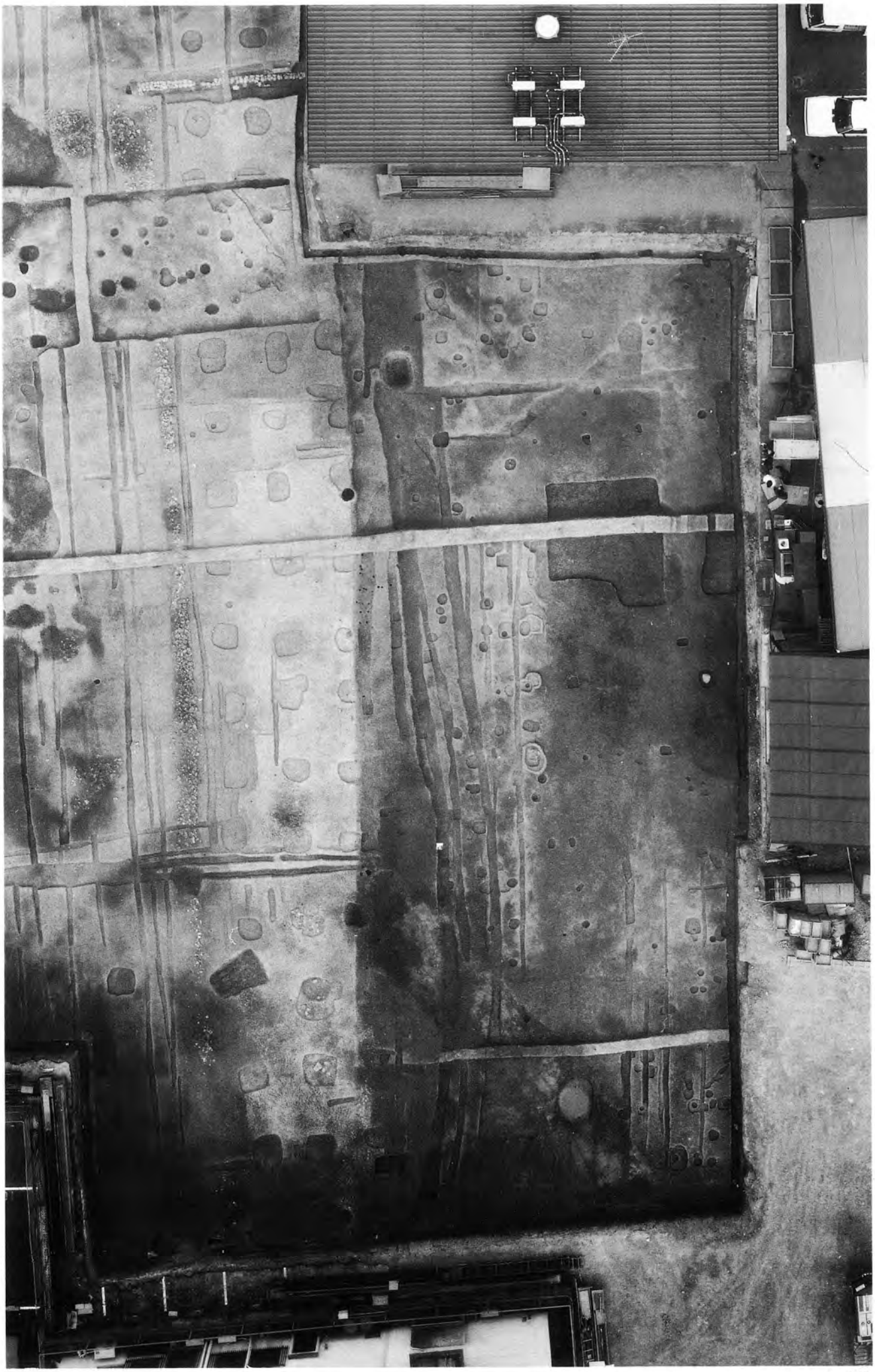
1 : 400

1989～1991年度西隆寺発掘遺構実測図（北半分）

PLAN. I



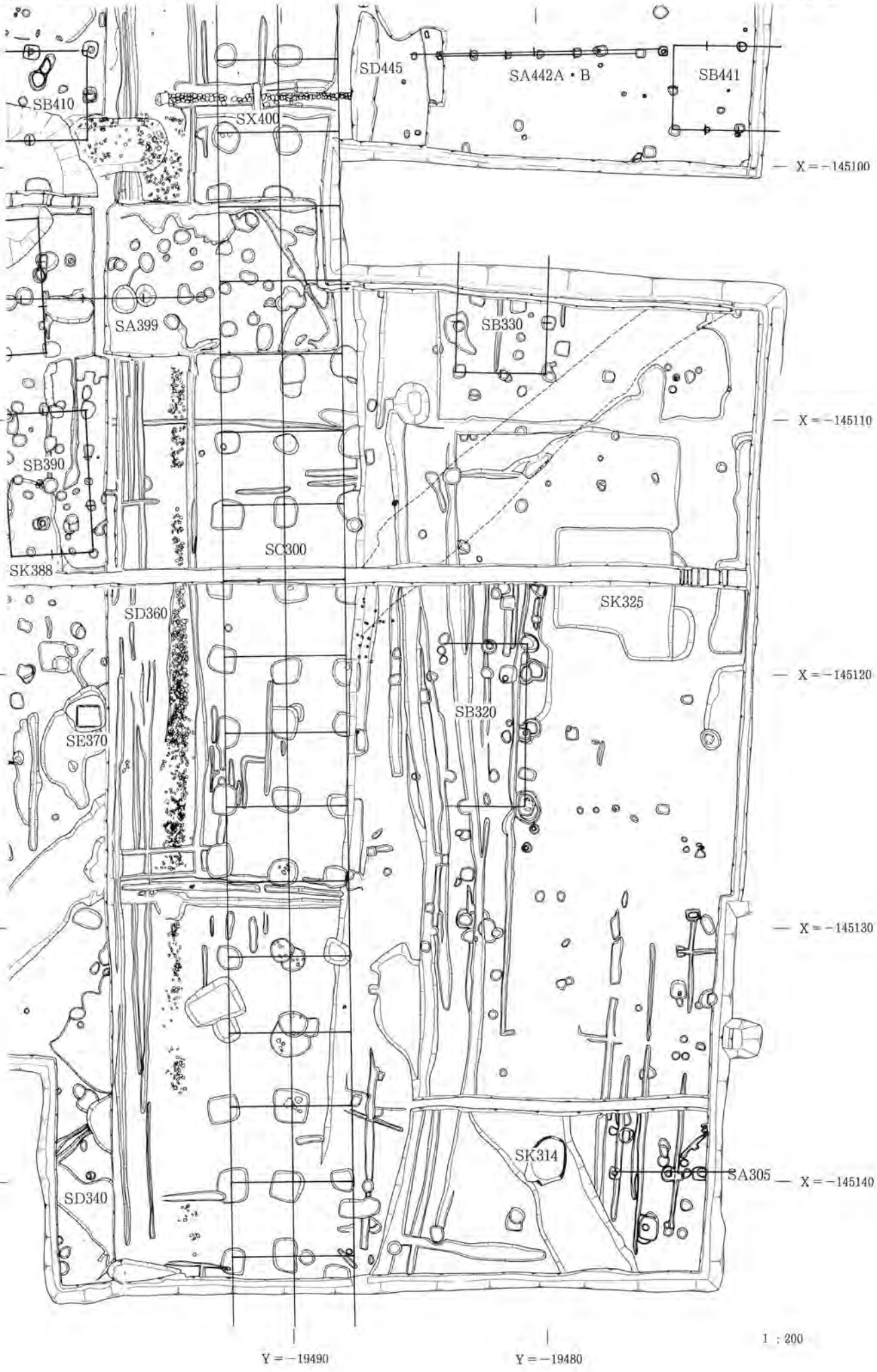
第209次垂直写真（東半分）



1 : 200

第209次実測図（東半分）

PLAN. 2



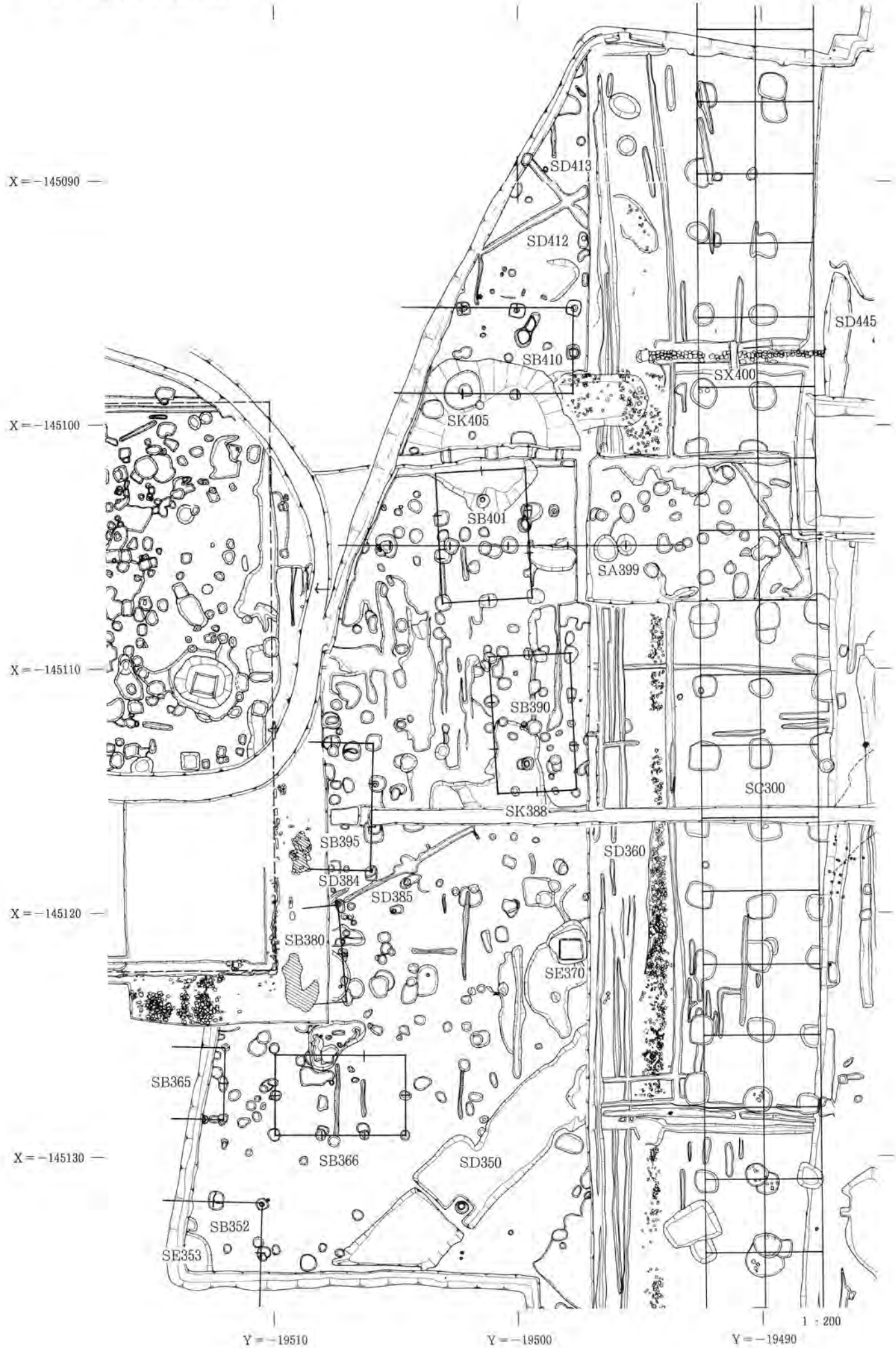
1：200

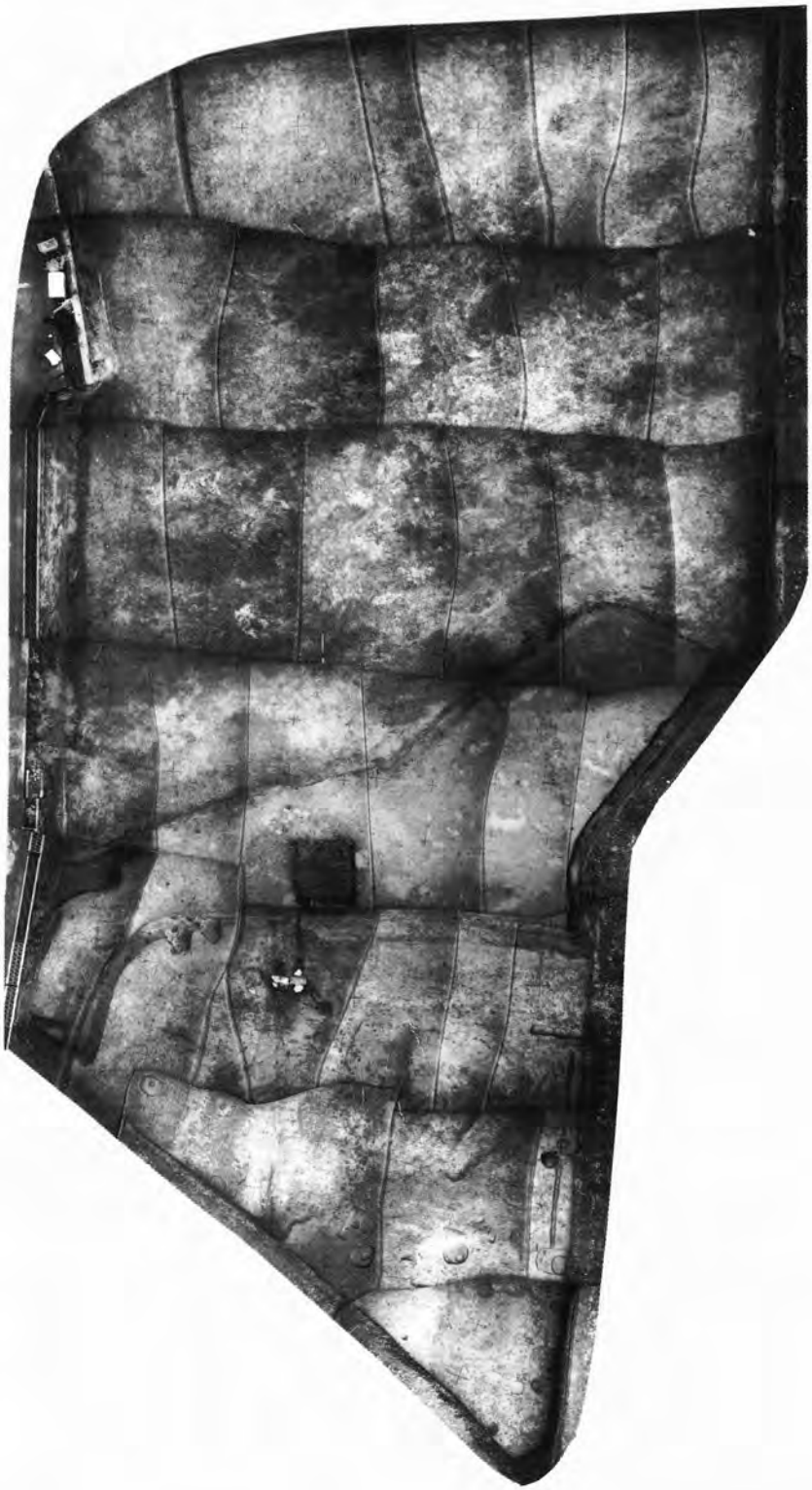
第209次垂直写真（西半分）

1 : 200

第209次実測図（西半分）

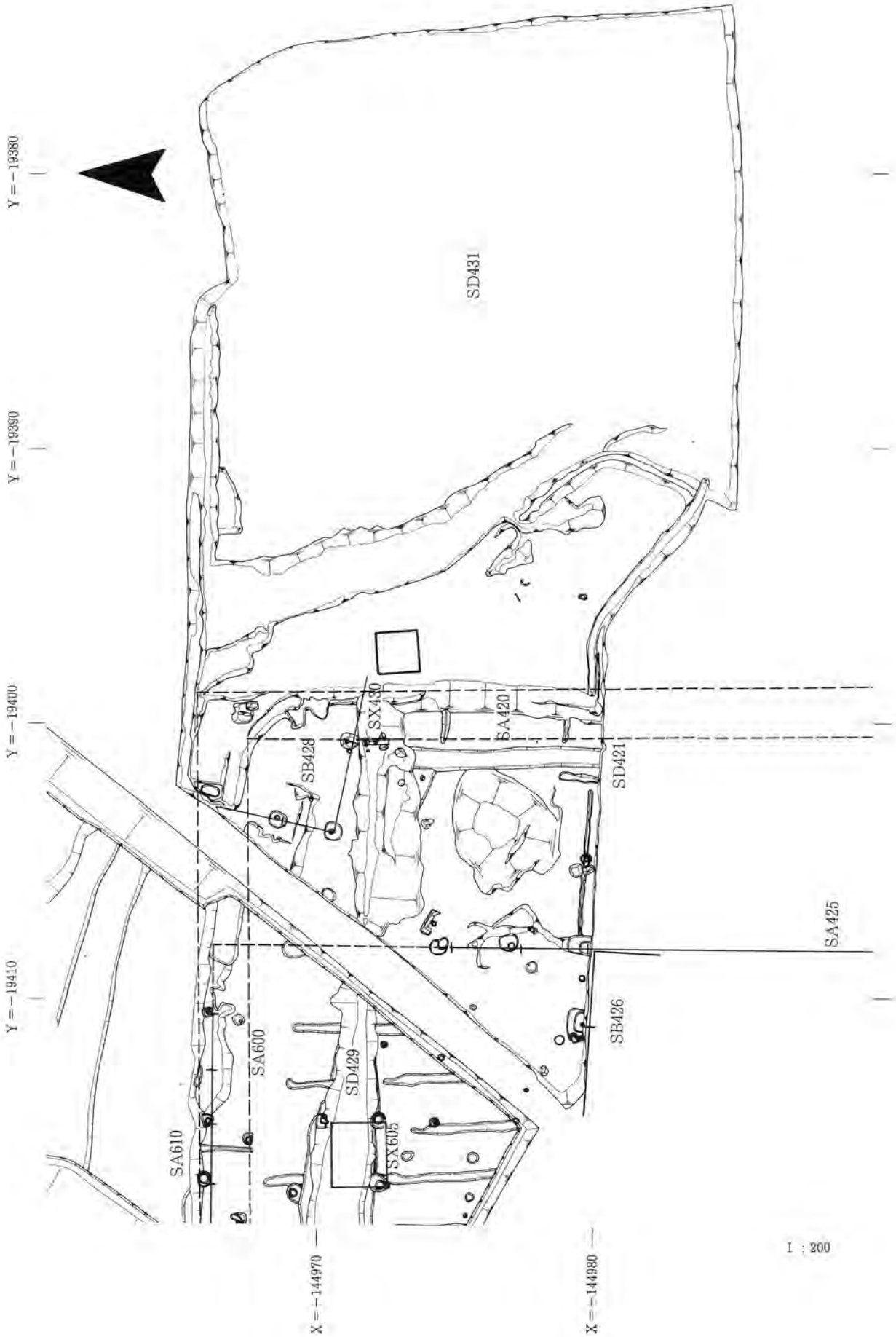
PLAN. 3



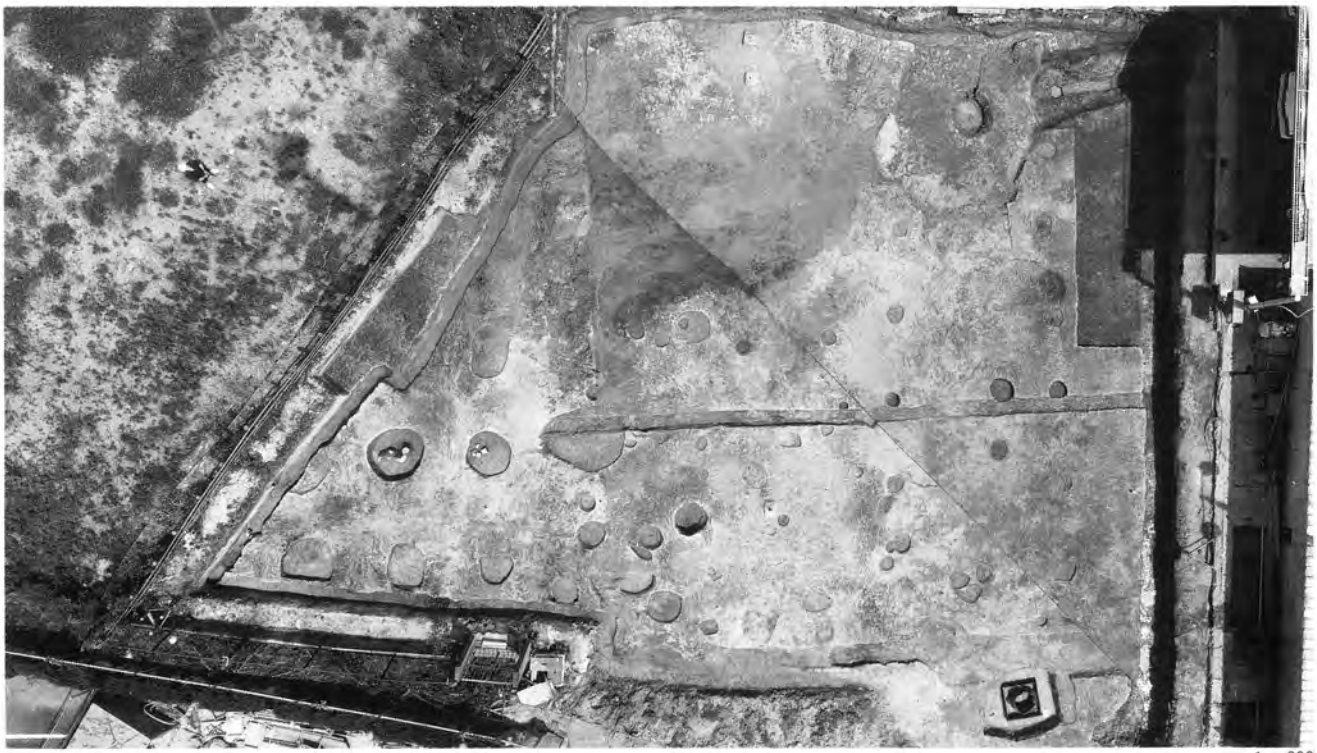


1 : 200

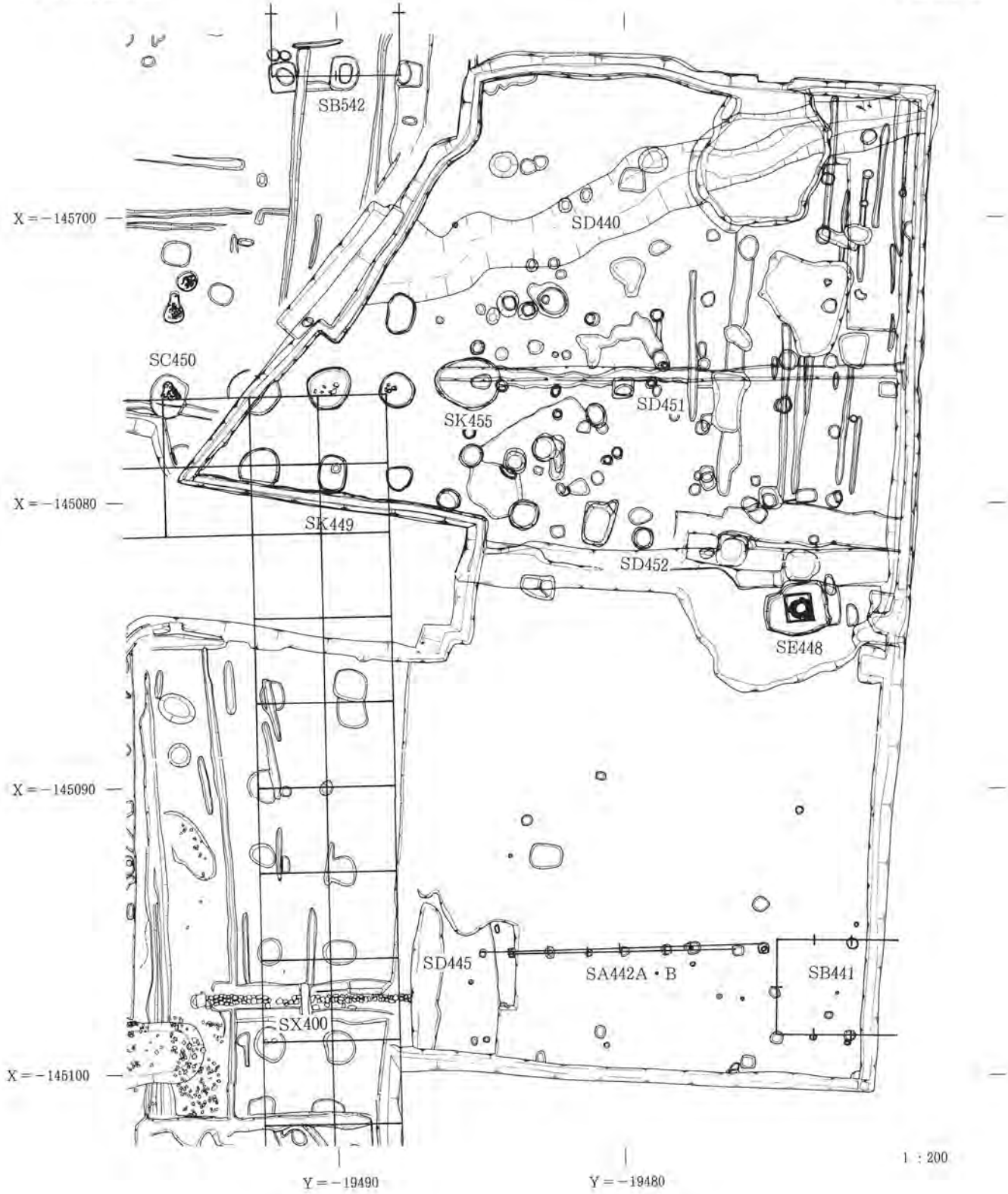
本調査区では周辺状況からヘリコプターあるいはクレーンによる垂直写真の撮影が不可能であったため、「ハネツルベ方式」により撮影した。ハネツルベ方式とは井戸のハネツルベからヒントを得た撮影方法で、三脚支持のポールの一端にカメラを懸架し、他端にカウンターウェイトを吊るしてバランスをとりながら撮影する方法である。この方式ではカメラを最大で地上６ｍの高さまでしか持ち上げられないため画角が小さく、したがって調査区全域を網羅するには写真の枚数が多くなる。上掲の写真は多数の垂直写真をモザイク合成したものである。


Y=−19380
Y=−19390
Y=−19400
Y=−19410
X=−144970
X=−144980
SD431
SX430
SA420
SB428
SD421
SA425
SB426
SA600
SD429
SX605
SA610
1 : 200

第212次垂直写真(上)　第212次下層写真（下）



1 : 200

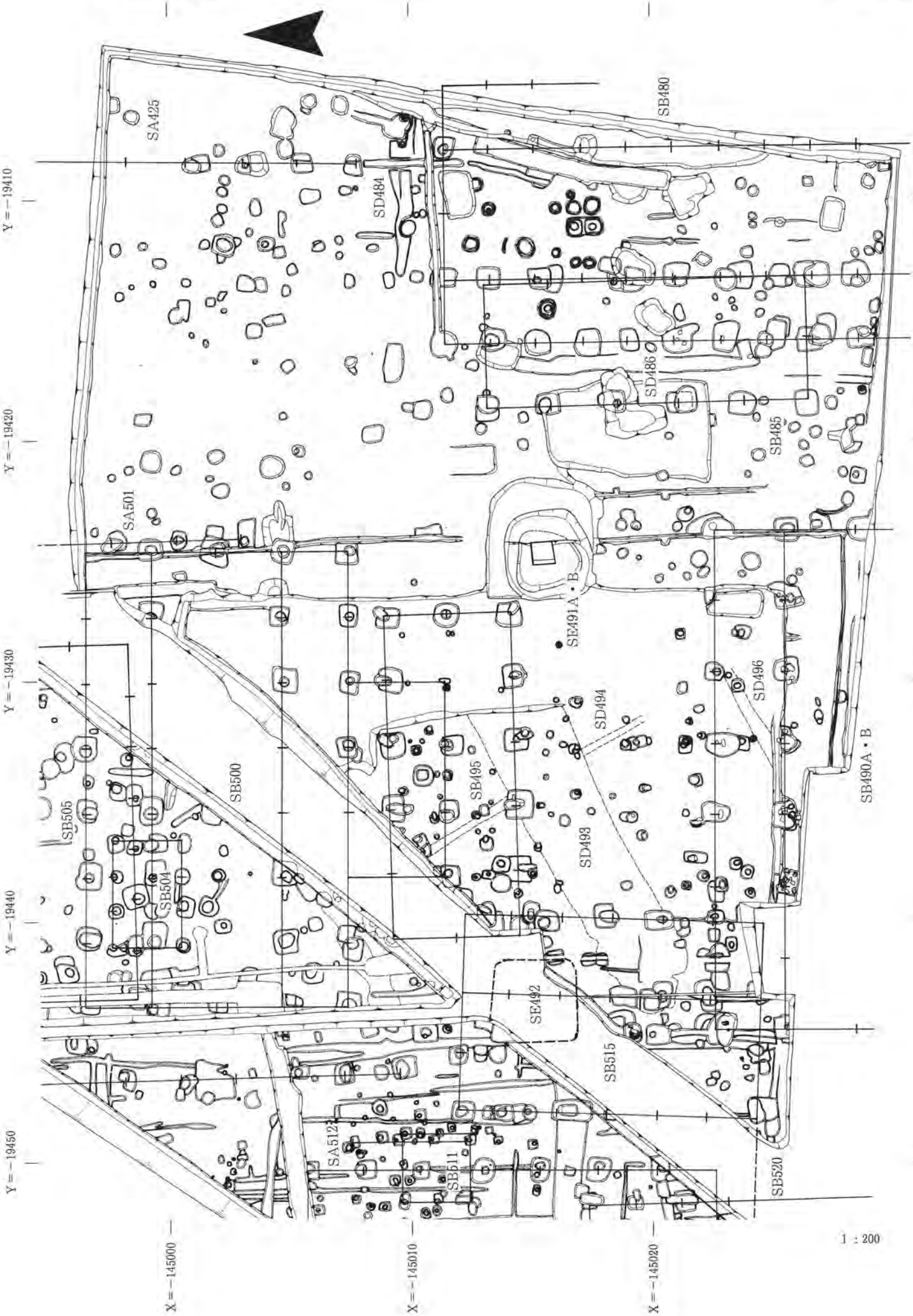

SB542
SD440
X＝－145700
SC450
SK455
SD451
X＝－145080
SK449
SD452
SE448
X＝－145090
SD445
SA442A・B
SB441
SX400
X＝－145100
Y＝－19490
Y＝－19480
1：200

第219次垂直写真

1 : 200

第219次実測図

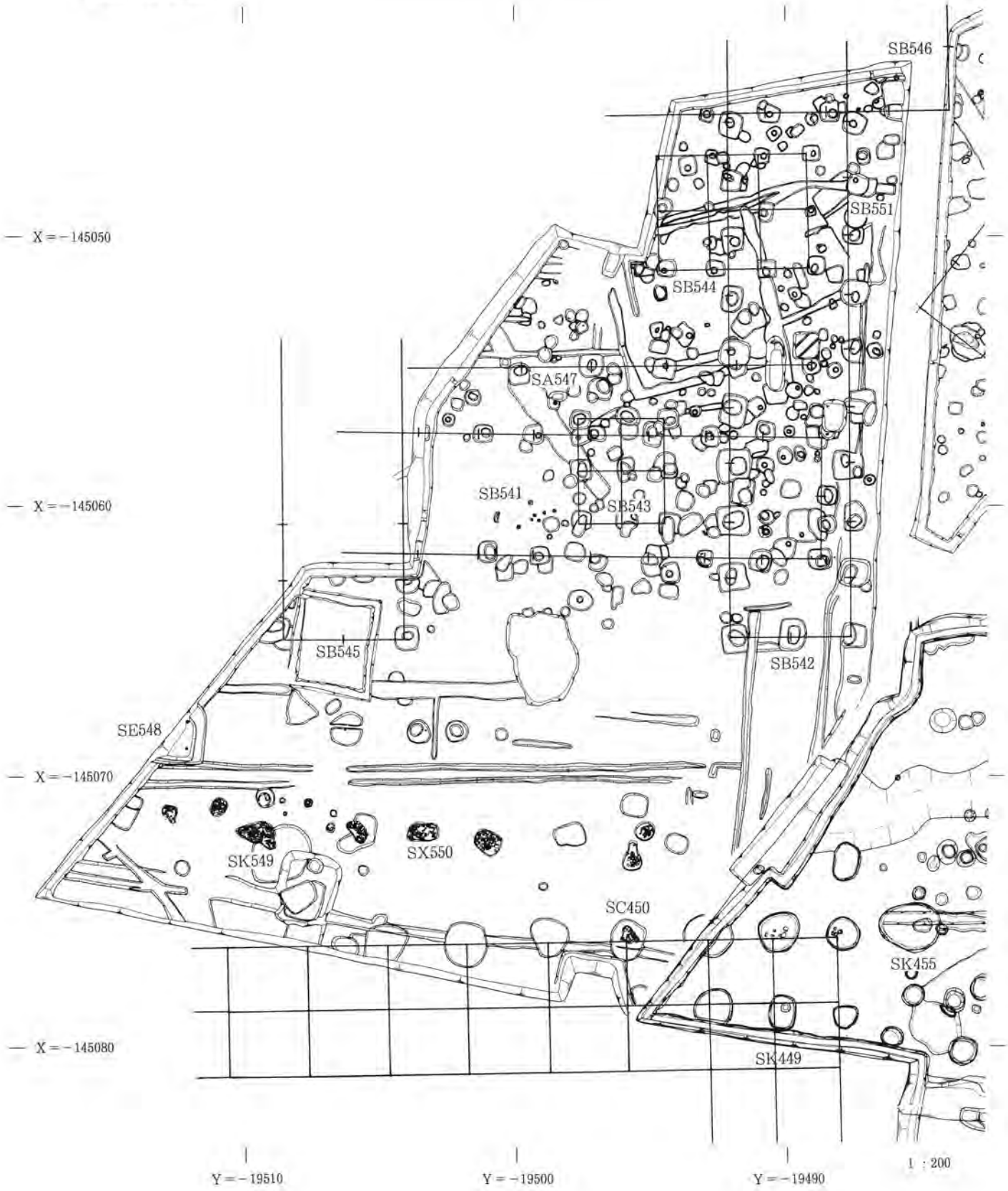
PLAN. 6



1 : 200

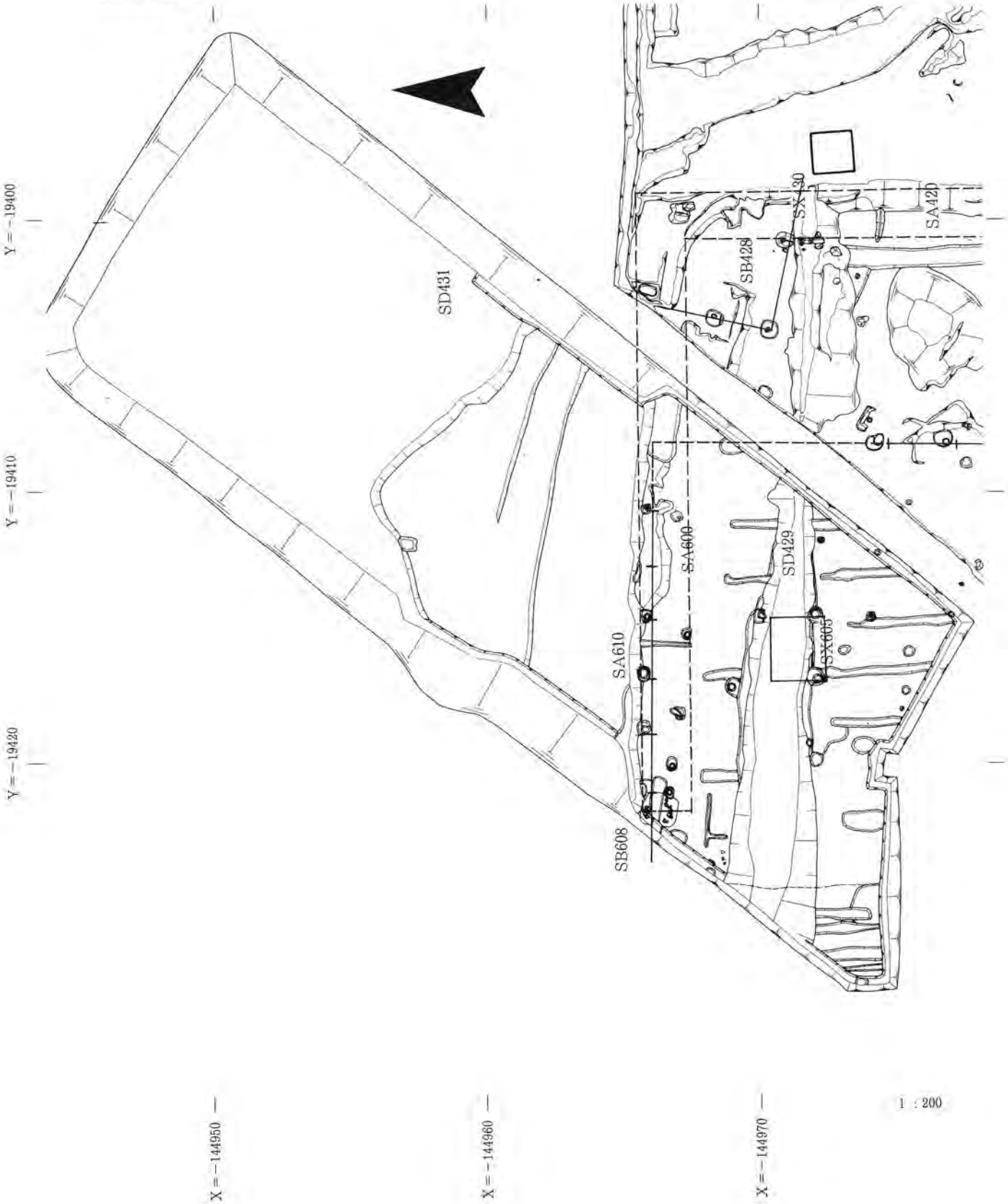
第221次垂直写真

1 : 200


SB546
SB551
X=−145050
SB544
SA547
SB541
SB543
X=−145060
SB545
SB542
SE548
X=−145070
SK549
SX550
SC450
SK455
X=−145080
SK449
Y=−19510
Y=−19500
Y=−19490
1 : 200

第227次垂直写真

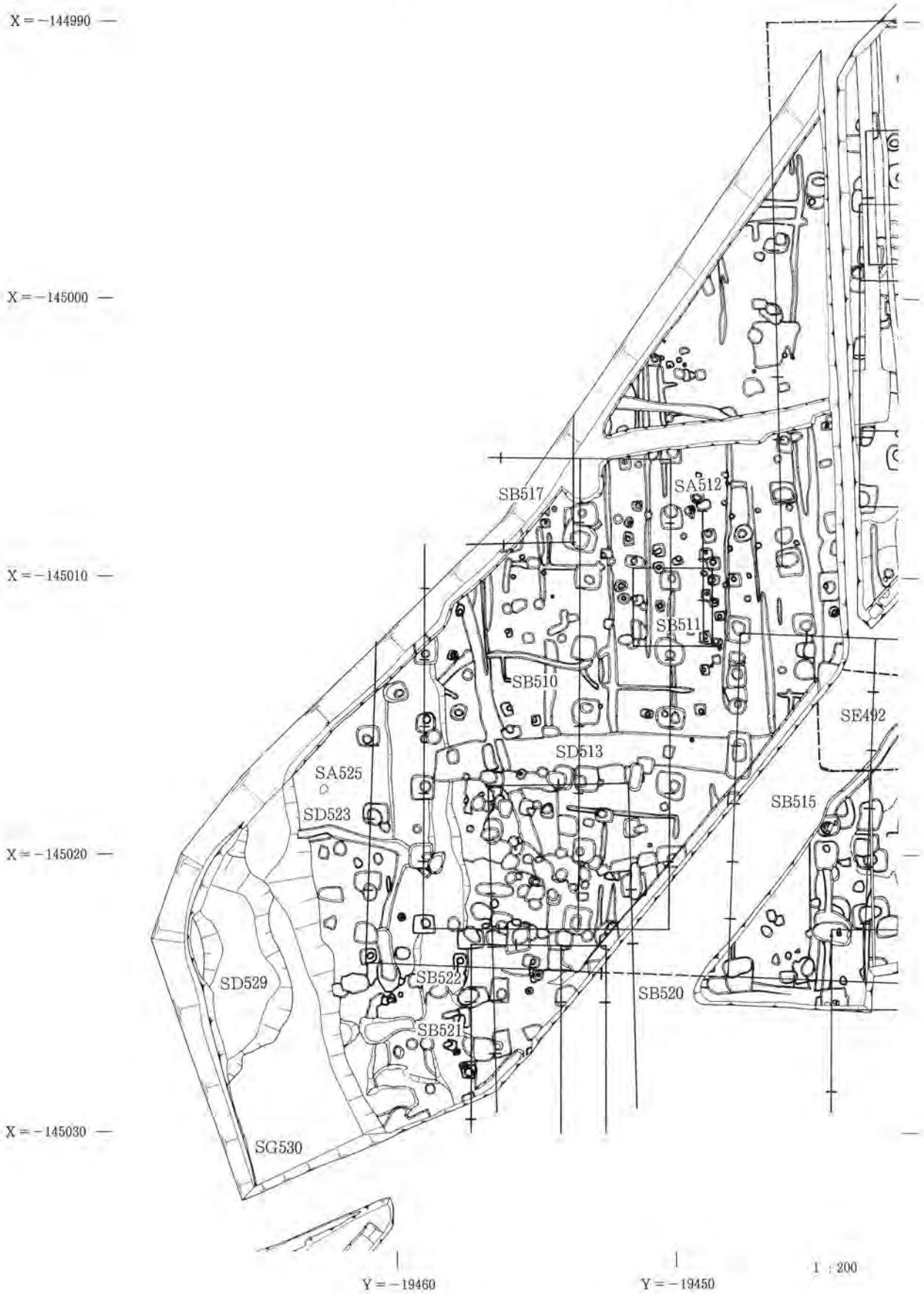
1 : 200


SD431
SB428
SX430
SA420
SA600
SD429
SX605
SA610
SB608
Y = −19400
Y = −19410
Y = −19420
X = −144950
X = −144960
X = −144970

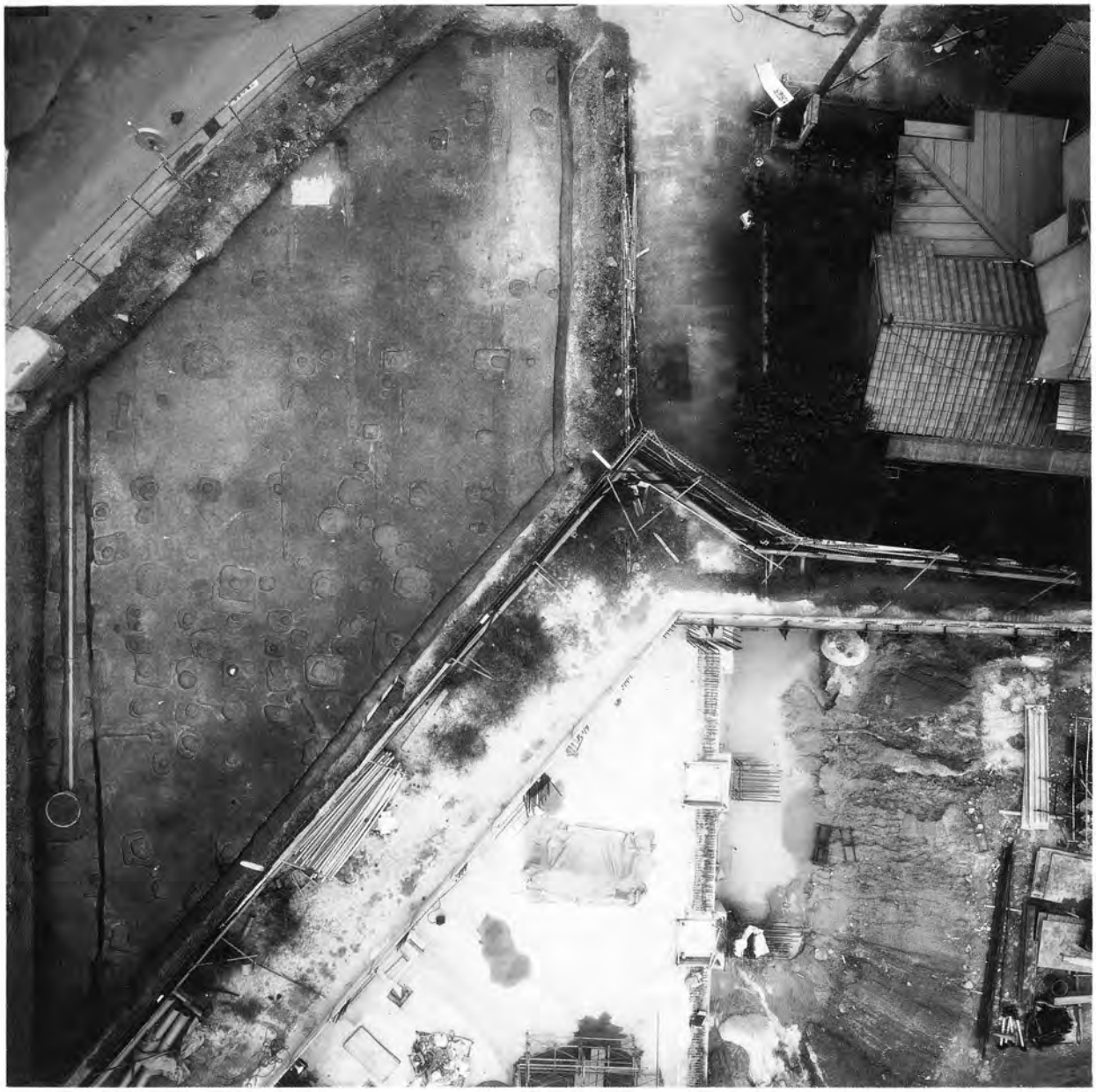
1 : 200

第228次垂直写真（南半分）

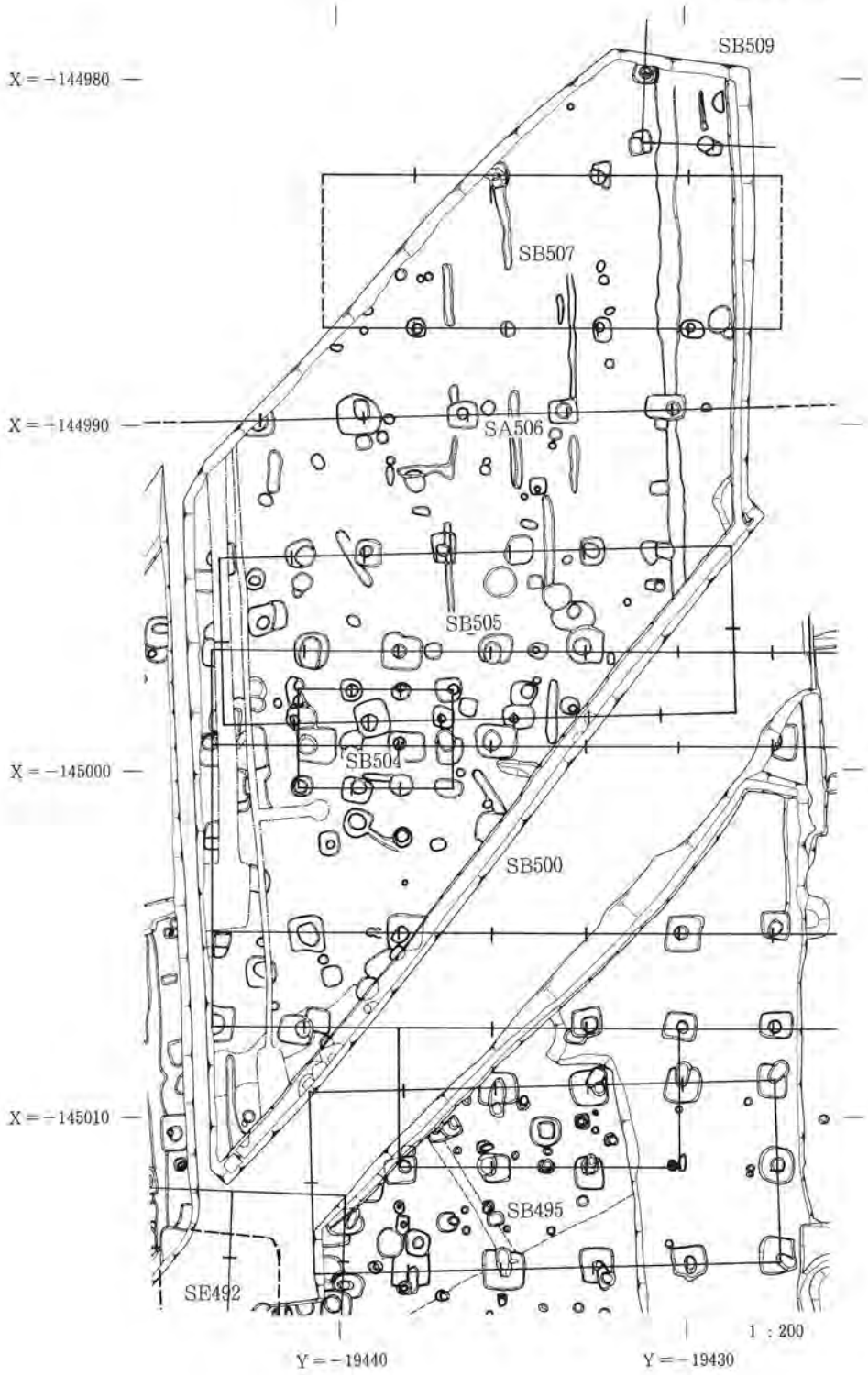
1 : 200


X＝−144990
X＝−145000
X＝−145010
X＝−145020
X＝−145030
SB517
SA512
SB511
SB510
SE492
SD513
SA525
SD523
SB515
SD529
SB522
SB521
SB520
SG530
Y＝−19460
Y＝−19450
1：200

第228次垂直写真（北半分）



1 : 200


SB509
X＝−144980
SB507
X＝−144990
SA506
SB505
SB504
X＝−145000
SB500
X＝−145010
SB495
SE492
1 : 200
Y＝−19440
Y＝−19430

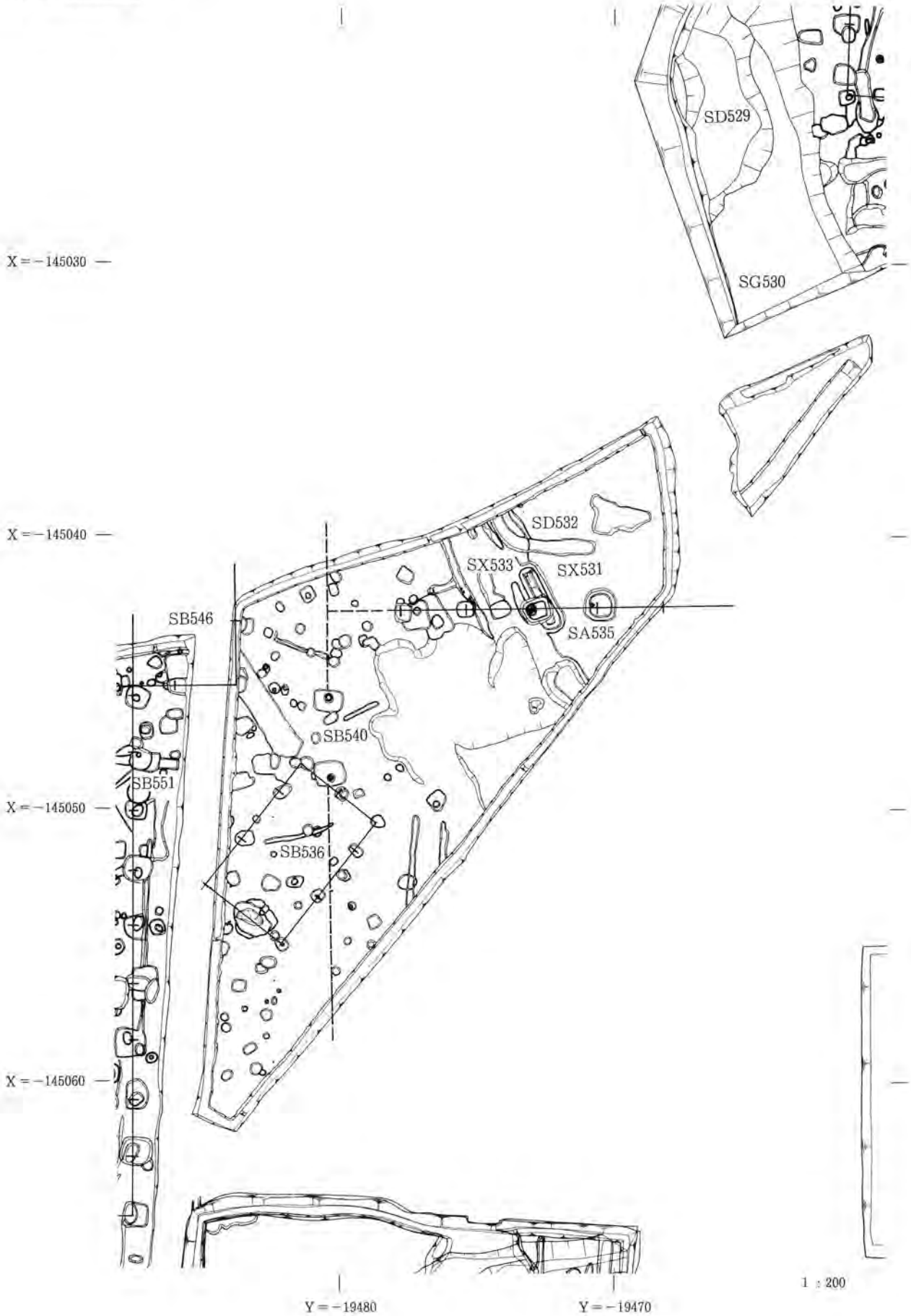
第223－21次垂直写真

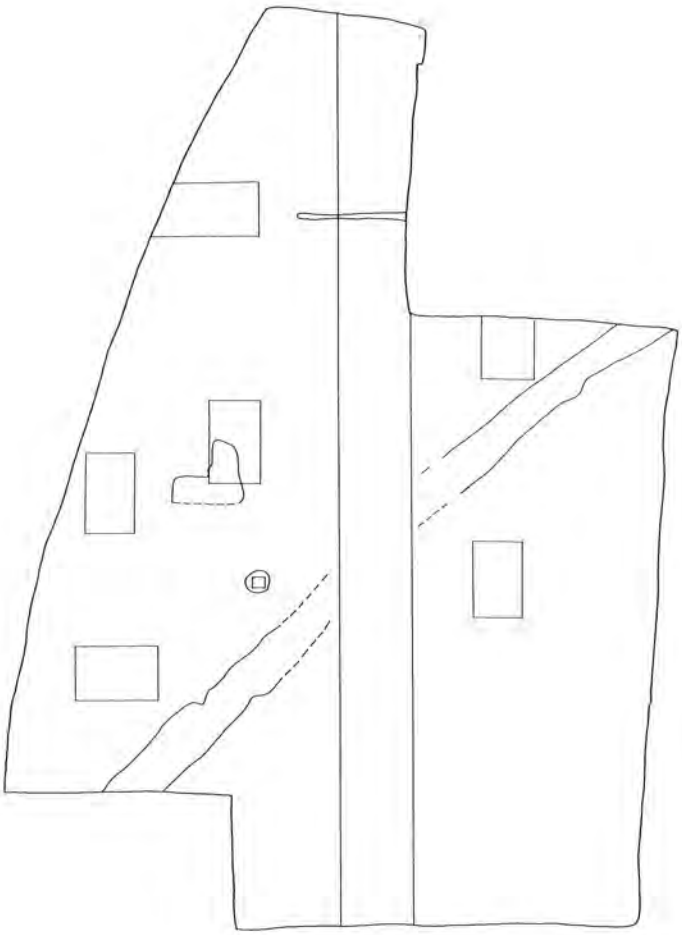
1 : 200

本調査区では周辺状況からヘリコプターあるいはクレーンによる垂直写真の撮影が不可能であったため、「ハネツルベ方式」により撮影した。ハネツルベ方式とは井戸のハネツルベからヒントを得た撮影方法で、三脚支持のポールの一端にカメラを懸架し、他端にカウンターウェイトを吊るしてバランスをとりながら撮影する方法である。この方式ではカメラを最大で地上６ｍの高さまでしか持ち上げられないため画角が小さく、したがって調査区全域を網羅するには写真の枚数が多くなる。上掲の多数の垂直写真をモザイク合成したものである。

第223－21次実測図

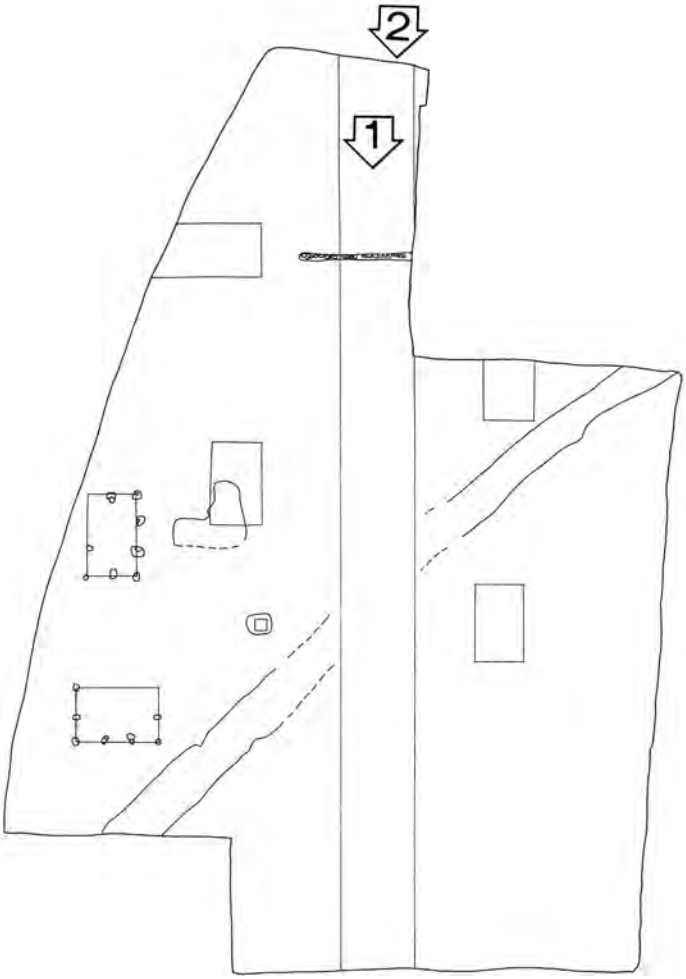
PLAN. 11

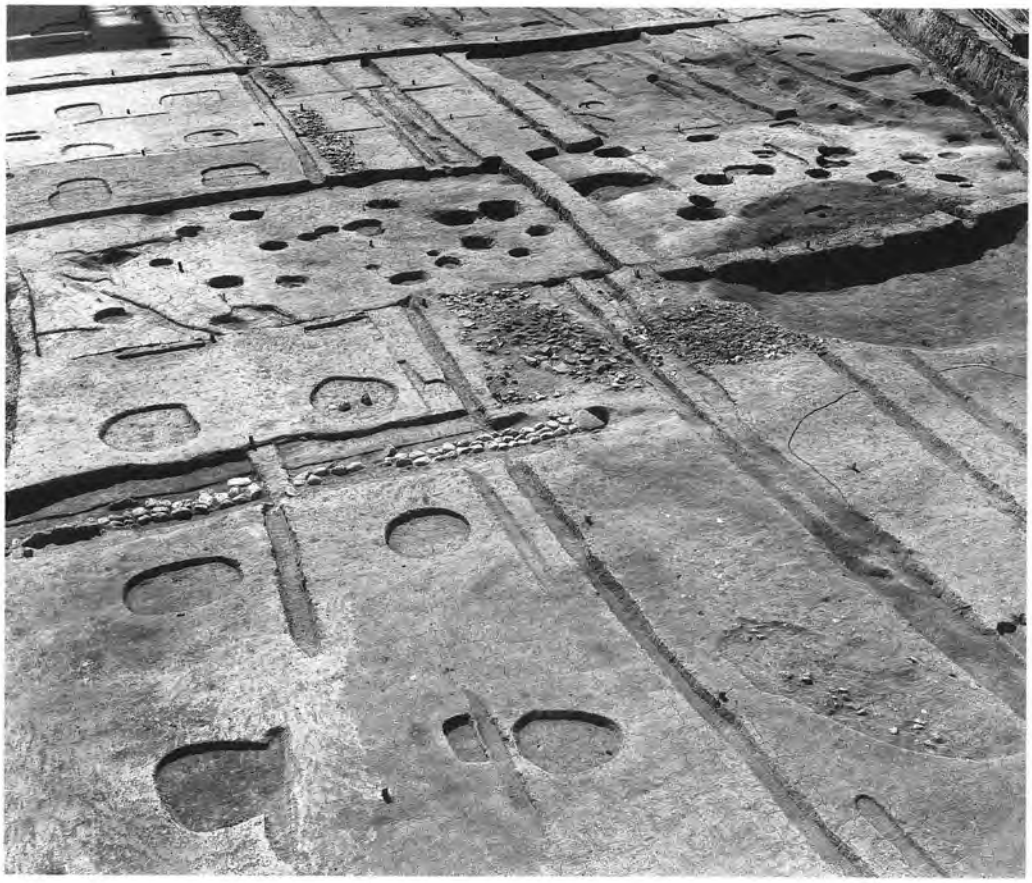




1

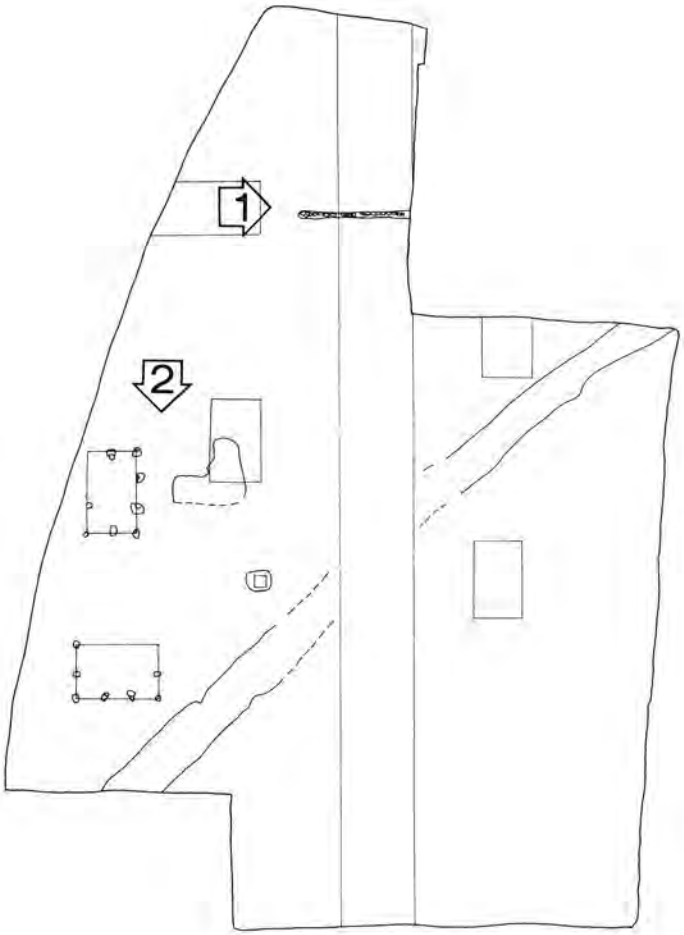
ＳＣ300全景南から


2
1



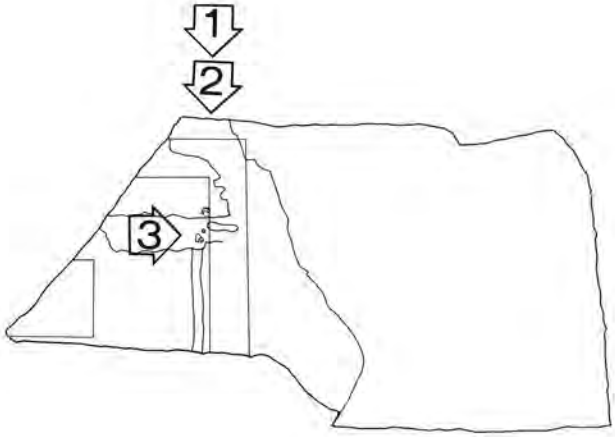
1．ＳＣ300，ＳＸ400
北から

2．ＳＣ300
北から

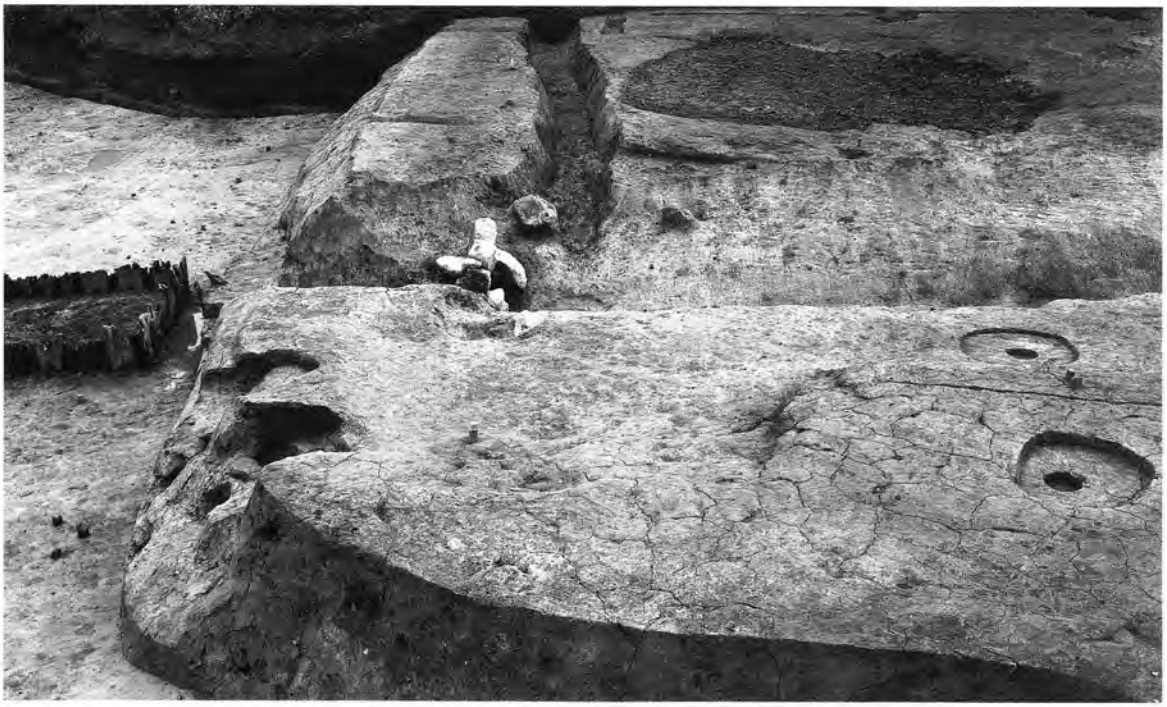

1
2

1．ＳＸ400
西から

2．ＳＢ395，ＳＢ366
北から

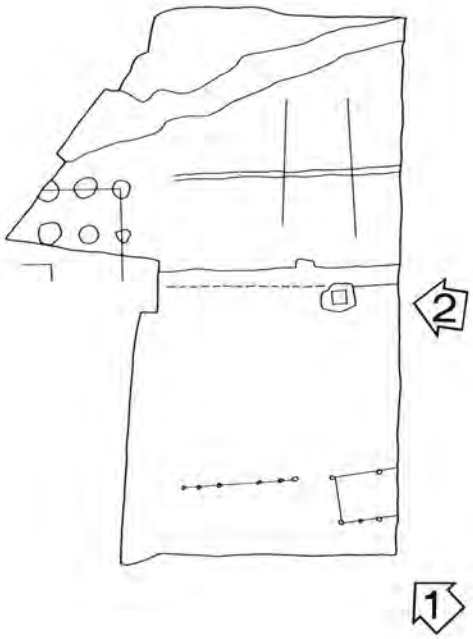

1
2
3

1．ＳＡ420
北から



2．ＳＡ420
北から

3．ＳＸ430
西から


2
1

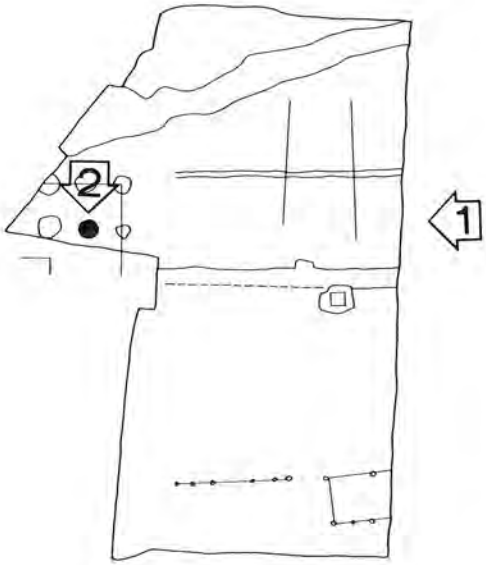
1．第212次全景
東南から

2．第212次北半
東南東から

1
2

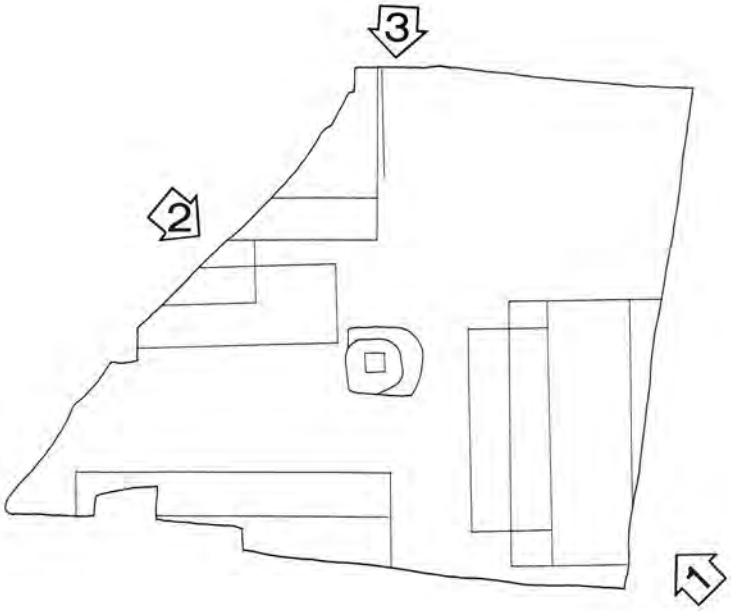
1. ＳＣ450
東南東から

2. ＳＢ441
ＳＡ442
東から


2
1

1. SD451
SD452
東から

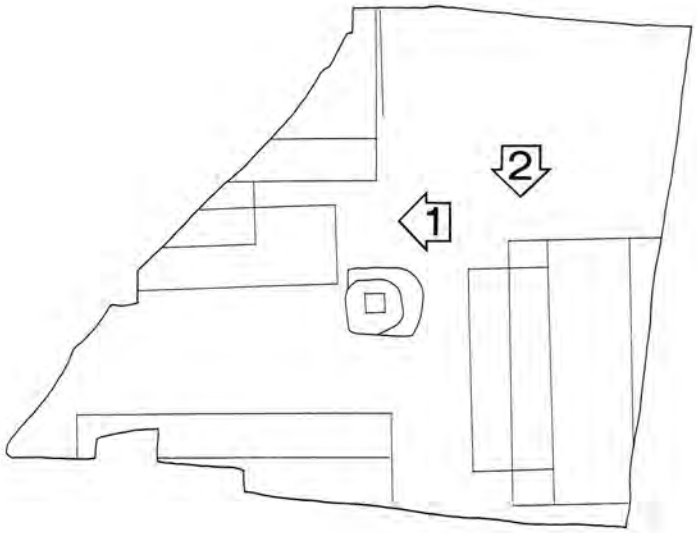
2. SX449
北から


3
2
1

1．第219次全景
東南から

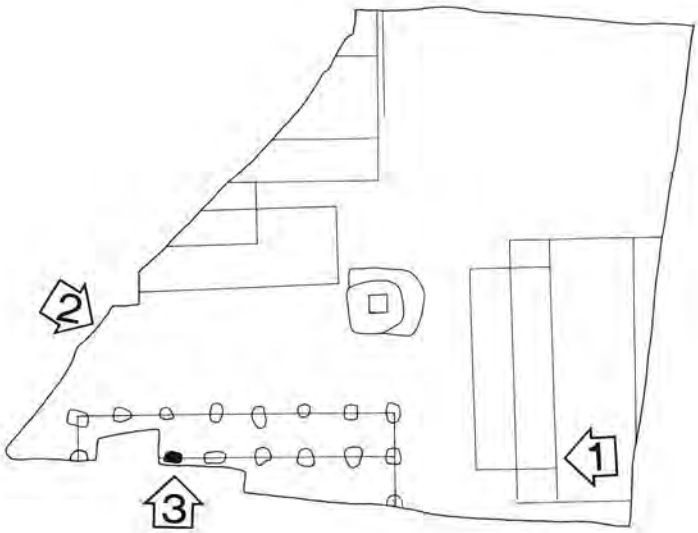
2．第219次全景
北西から

3．ＳＢ495
ＳＢ500
北から


2
1

1．ＳＢ495
東から

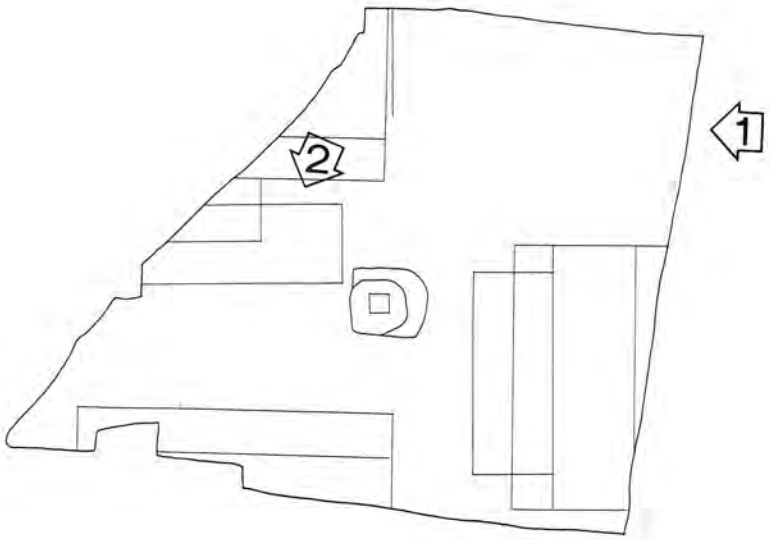
2．ＳＢ480
ＳＢ495
北から


2
1
3

1．ＳＢ490
東から

2．ＳＢ490
北西から

3．ＳＢ490
の根石
南から


1
2

1. ＳＡ425
ＳＢ500
東から

2. ＳＢ490
ＳＢ495
北東から

1
2

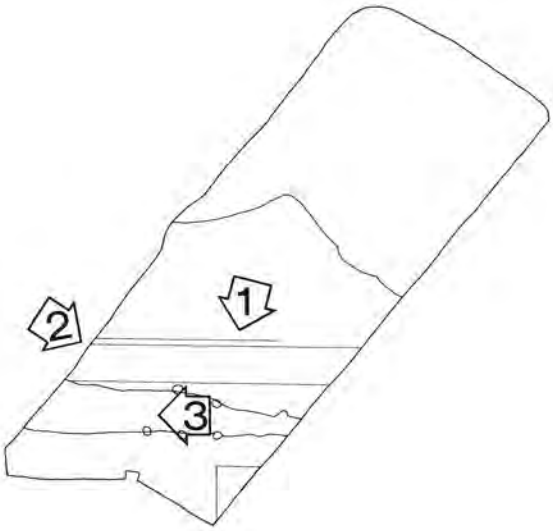
1．第221次全景
東北から

2．ＳＢ542
ＳＢ541
東から

1
2

1. ＳＢ542
ＳＢ541
東から

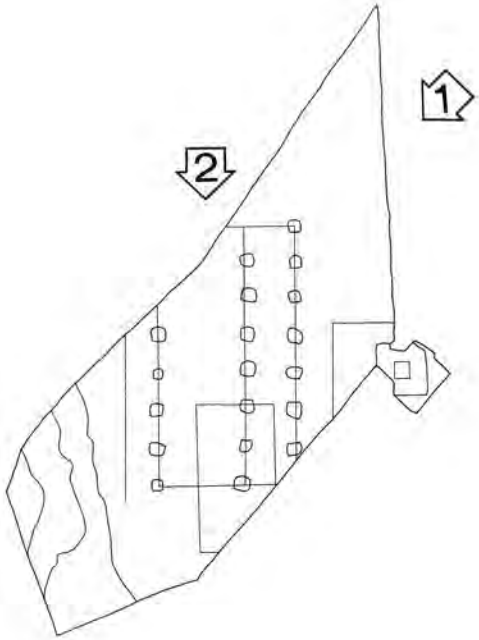
2. ＳＣ450
ＳＸ550
東から


1
2
3

1. ＳＤ429
ＳＸ605
東北から

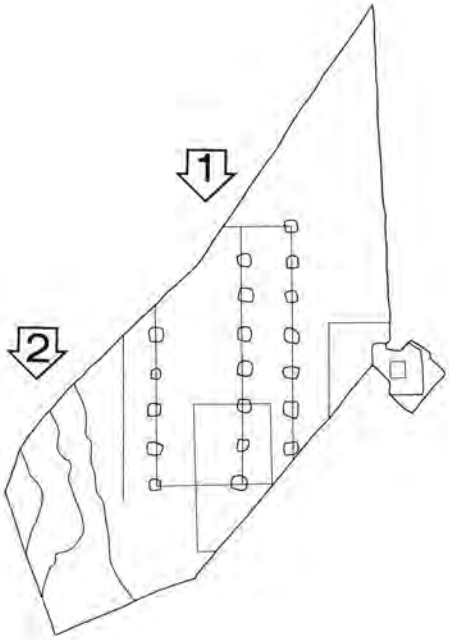
2. ＳＡ610
ＳＤ429
西北から

3. ＳＤ429
東から


1
2

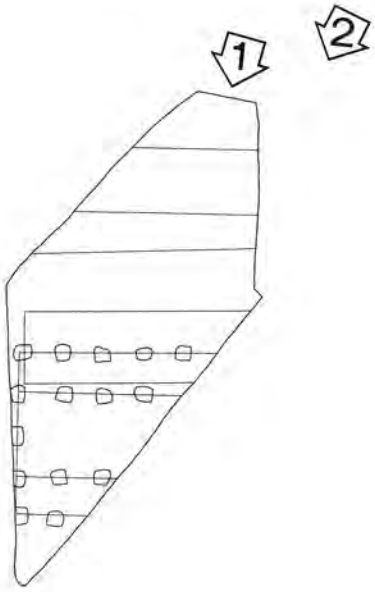
1．第228次（南）全景
東北から

2．ＳＢ510
北から


2
1

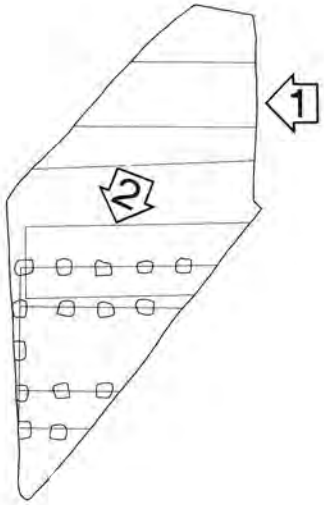
1. ＳＢ510
北から

2. ＳＧ530
ＳＤ529
北から


1
2

1．ＳＢ505
ＳＢ500
東北から

2．第２２８次
（北）全景
東北から


2
1

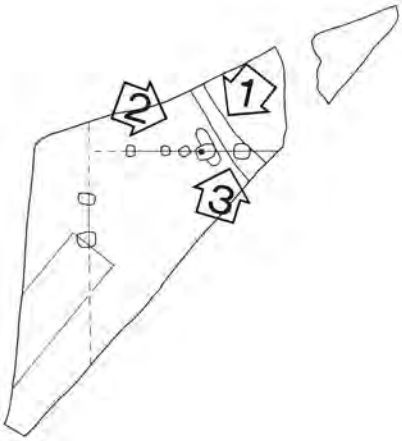
1. ＳＢ505
ＳＡ506
東から

2. ＳＢ500
ＳＢ505
東北から

1
2

1．第223－21次
全　景
東北から

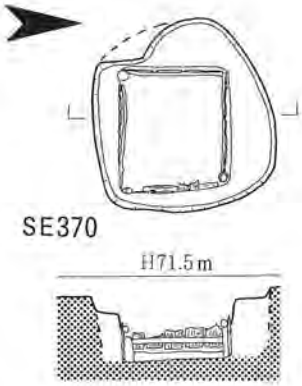
2．ＳＢ540
東から

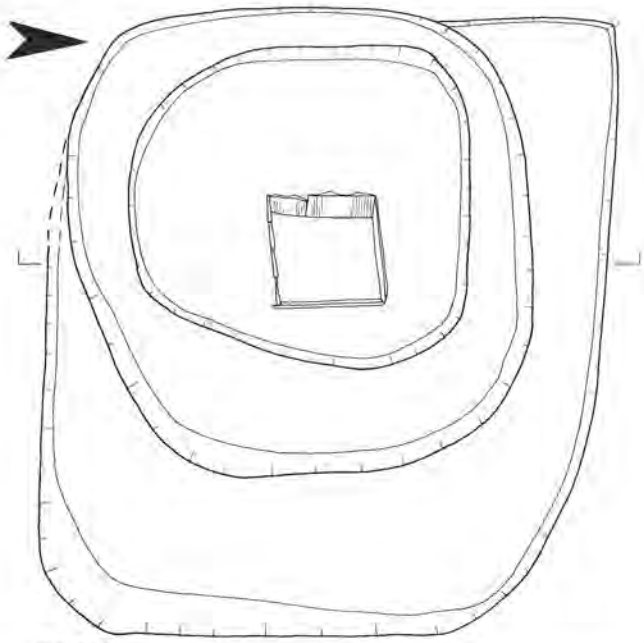

2
1
3

1．ＳＸ533
ＳＡ535
東北から

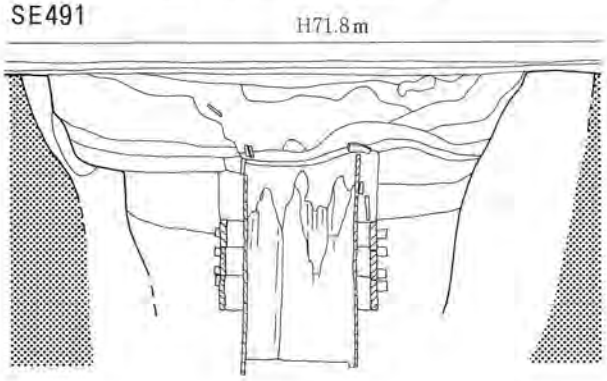
2．ＳＸ533
ＳＡ535
西北西から

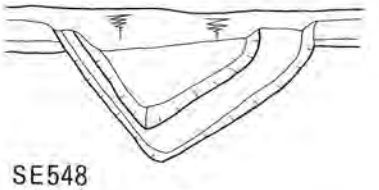
3．ＳＧ530
ＳＸ531
西南から



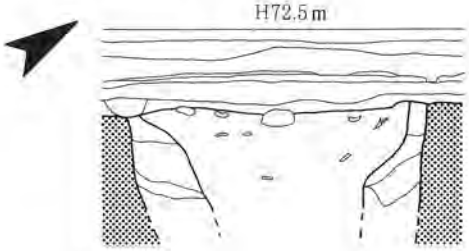


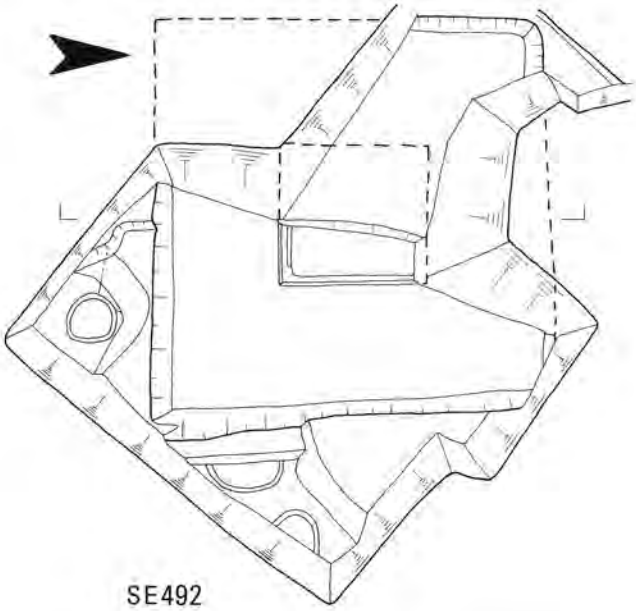
SE491



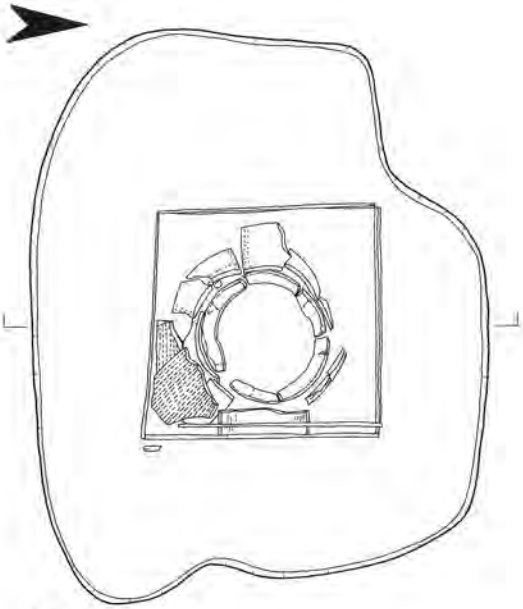


SE548

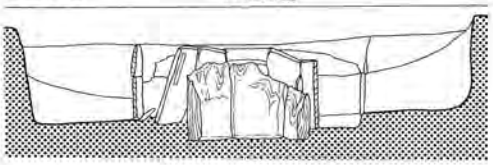


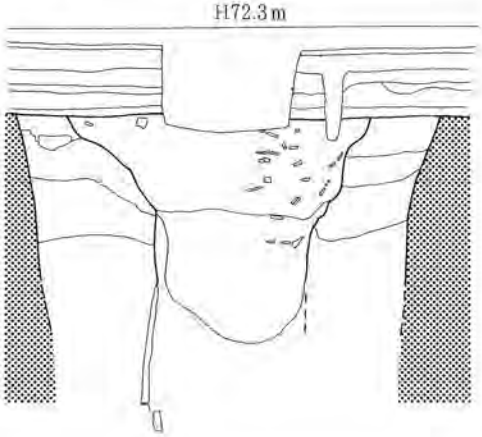


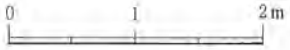
SE492



SE448



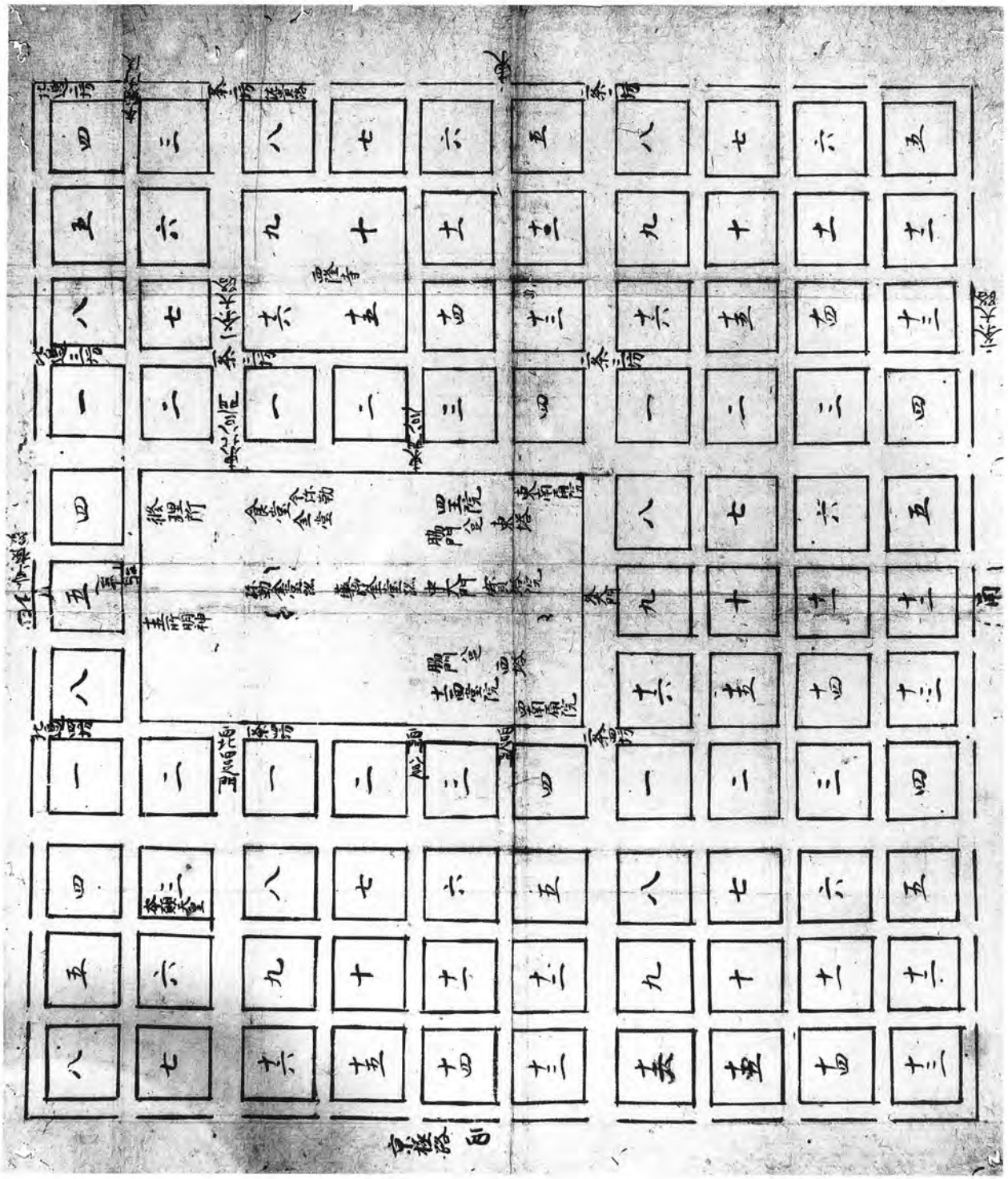


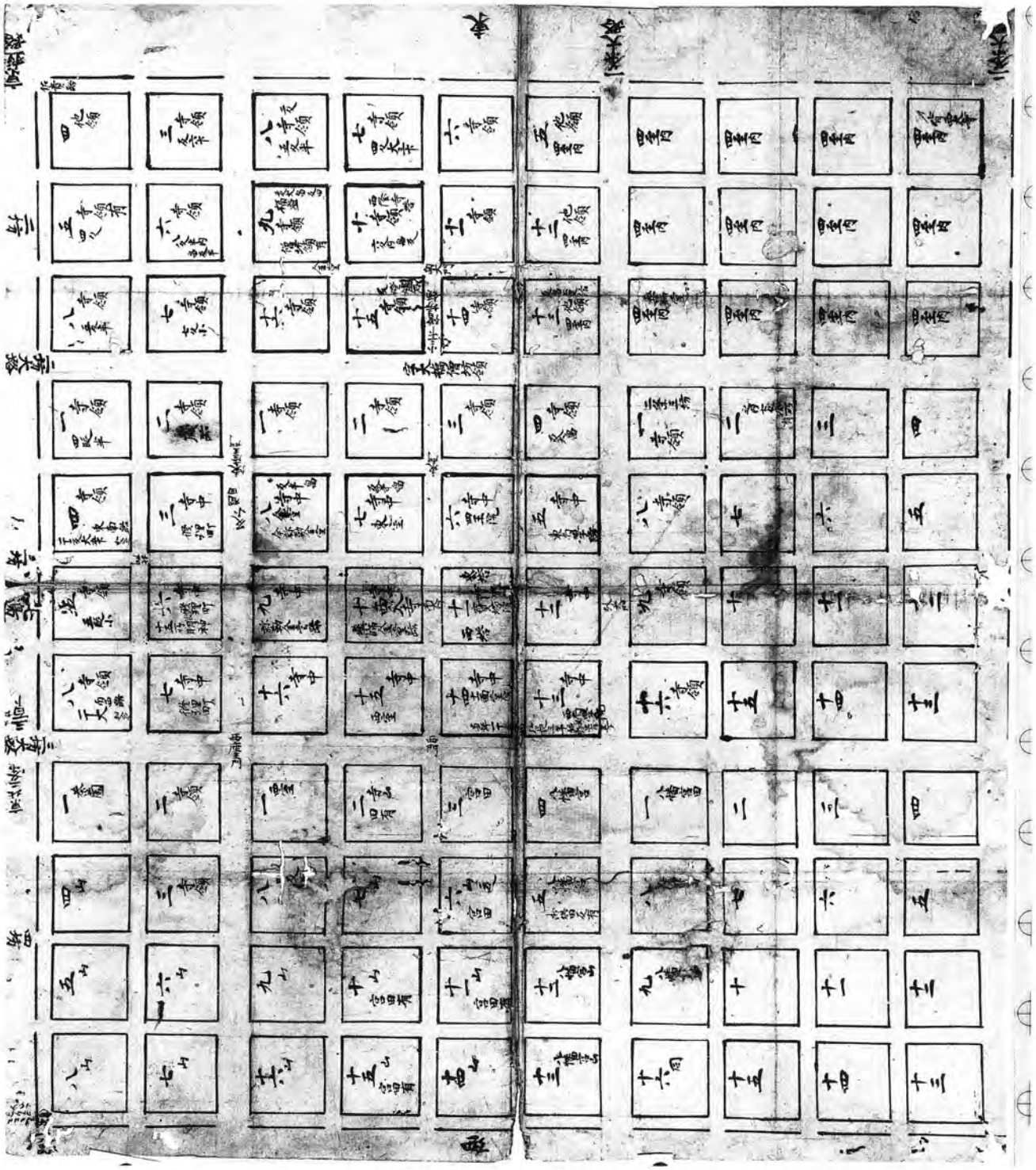


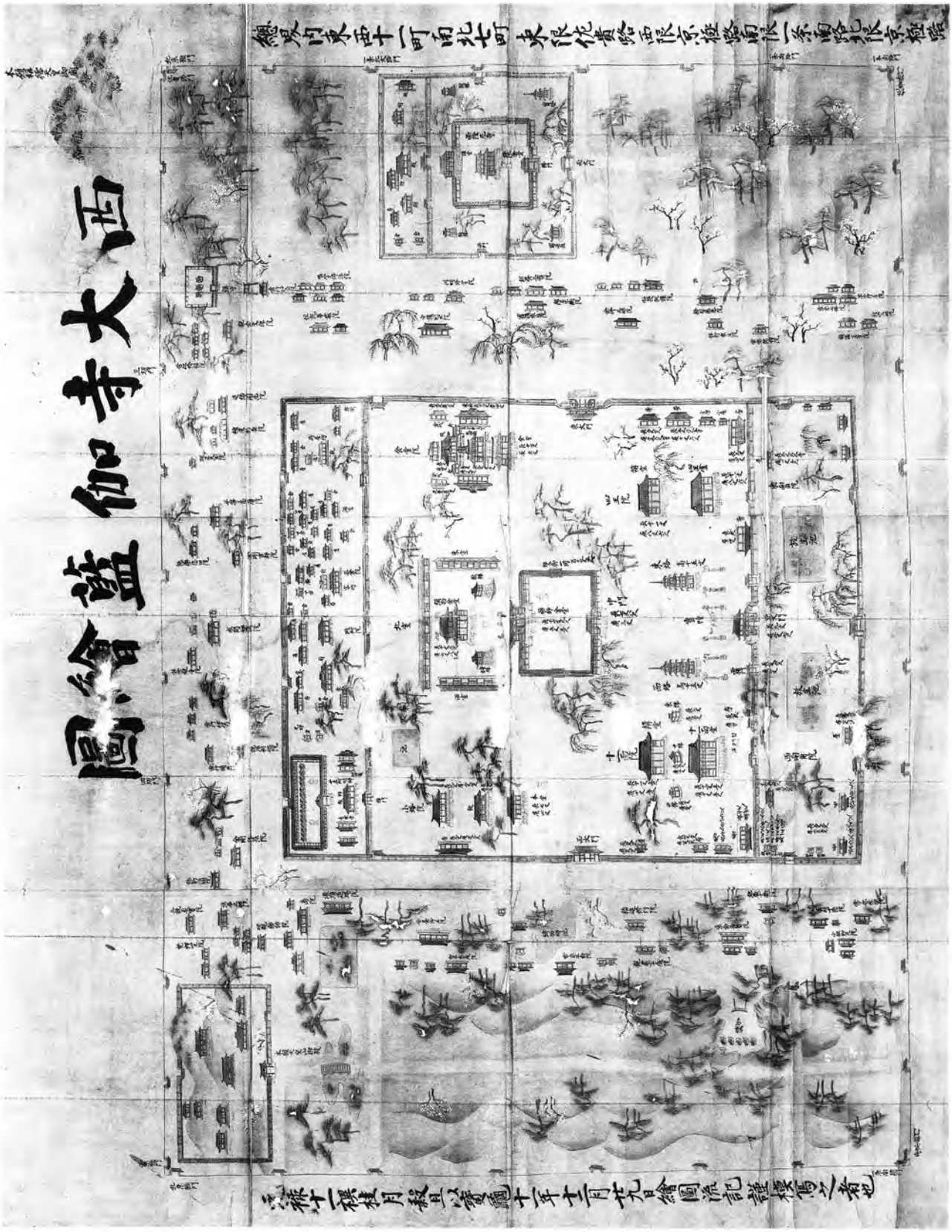
1．第209次ＳＥ370　北から

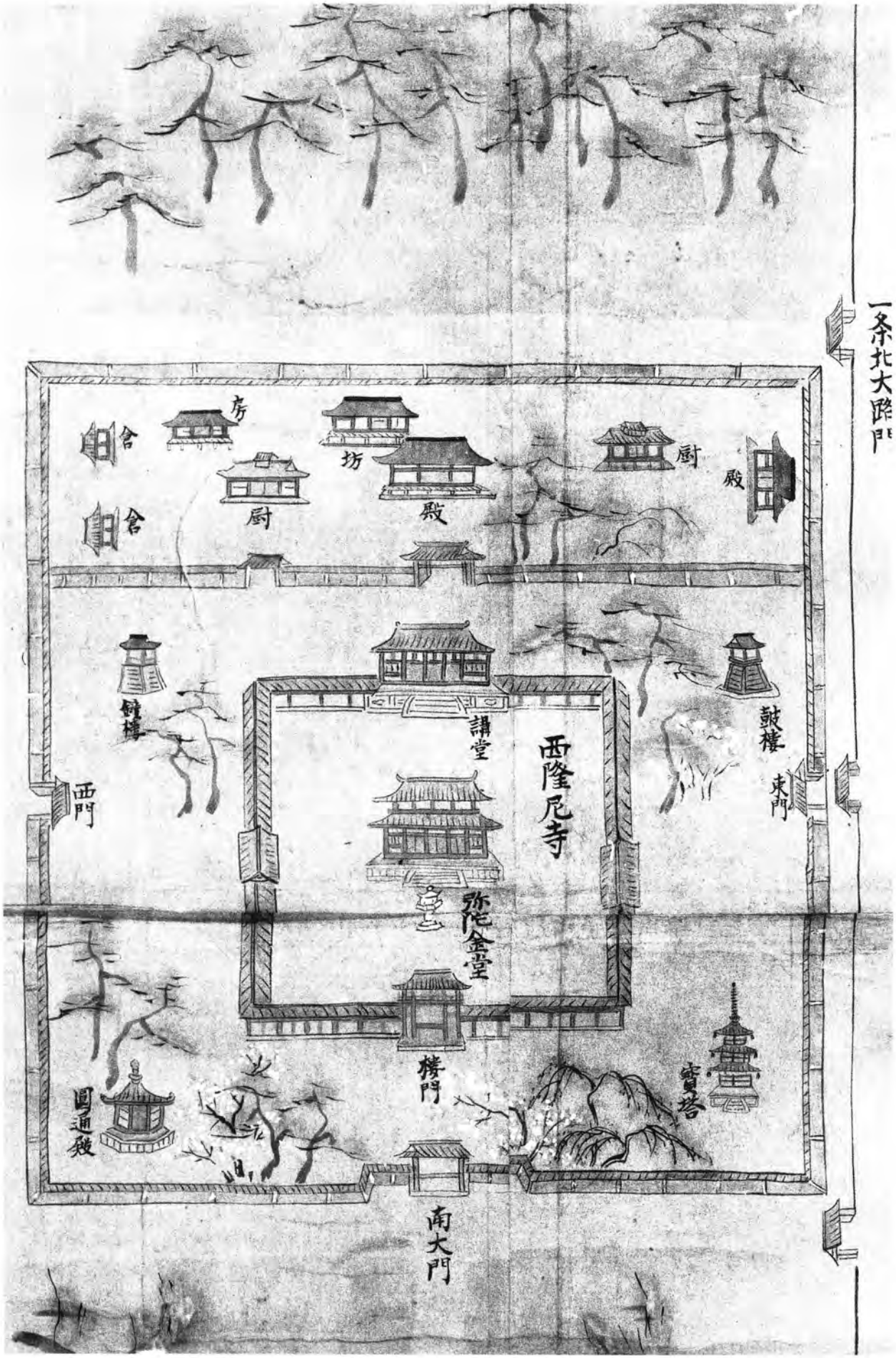
2．第212次ＳＥ448　東から

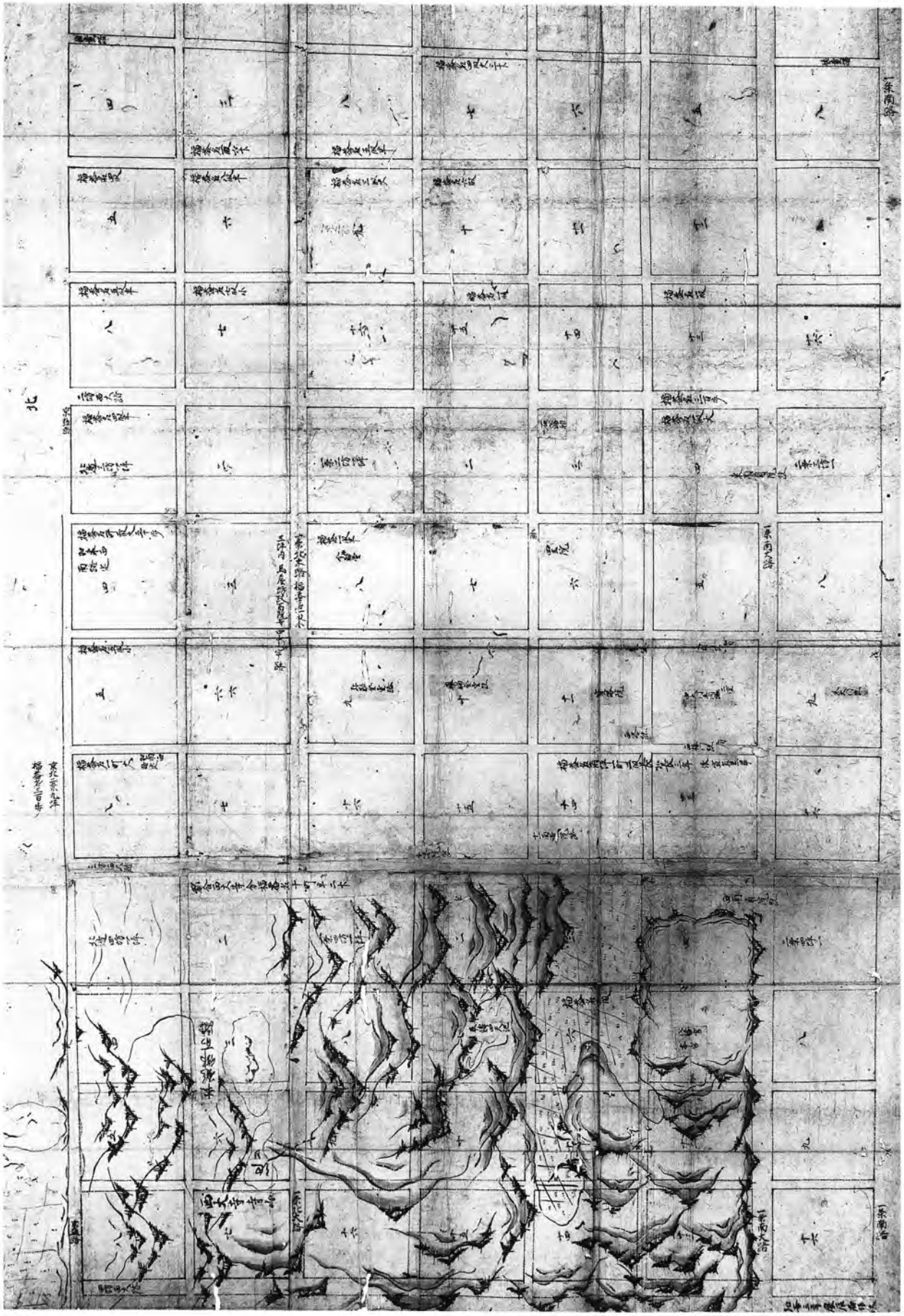
3．第219次ＳＥ491　西から

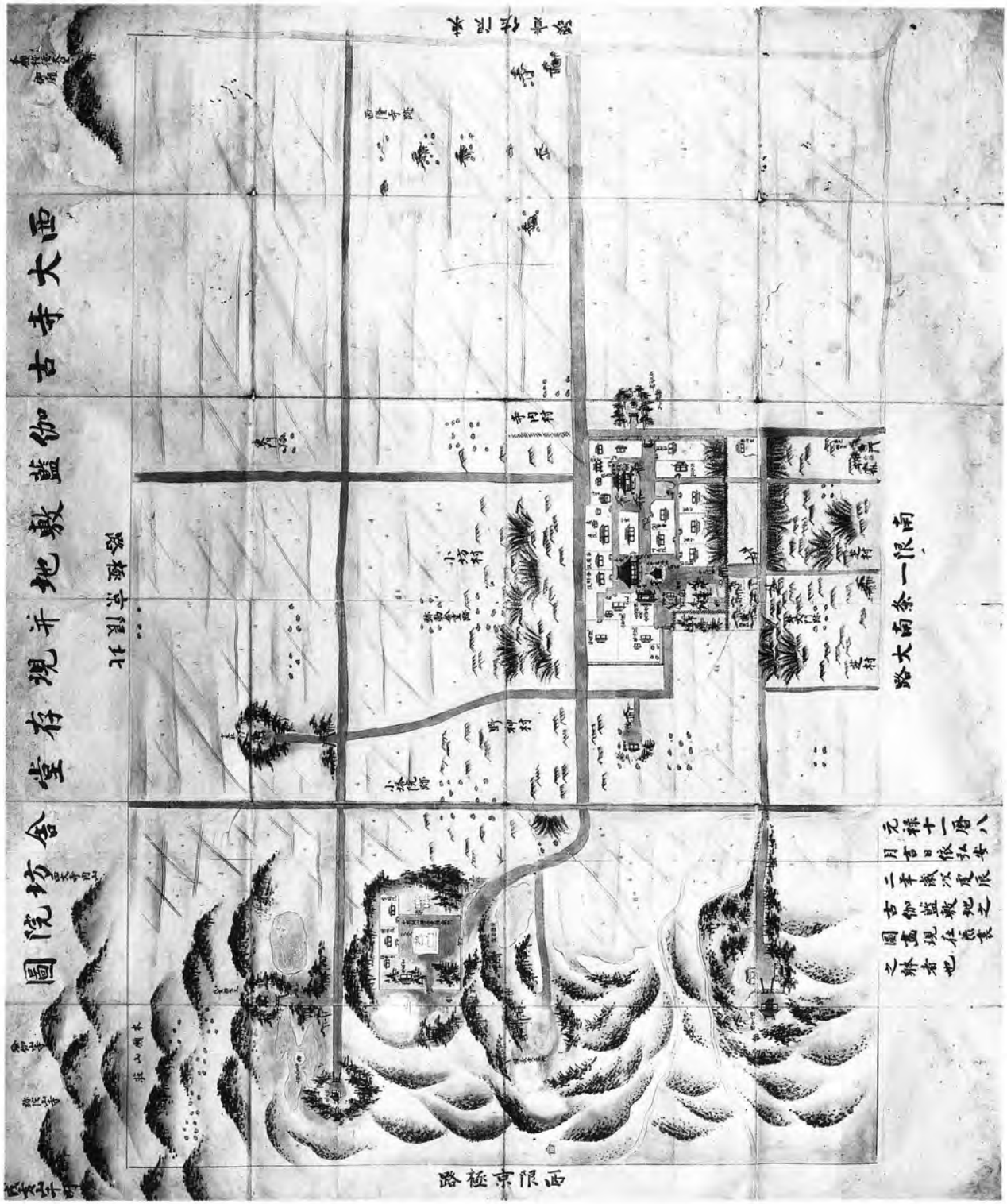





西大寺伽藍絵図


一条北大路門
房
倉
倉
坊
殿
厨
厨
殿
鐘楼
講堂
西隆尼寺
鼓楼
東門
西門
弥陀金堂
楼門
宝塔
圓通殿
南大門




西大寺古伽藍敷地并現存堂舎坊院図
西限京極路
南限大路条一
元禄十二年八月二十日依弘安寺
之図直現住状寄
之旧古伽藍敷地之

6235C
6761A

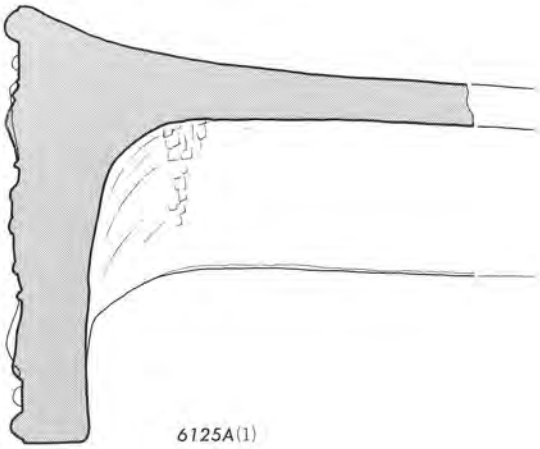
62351
6764A

2 : 5

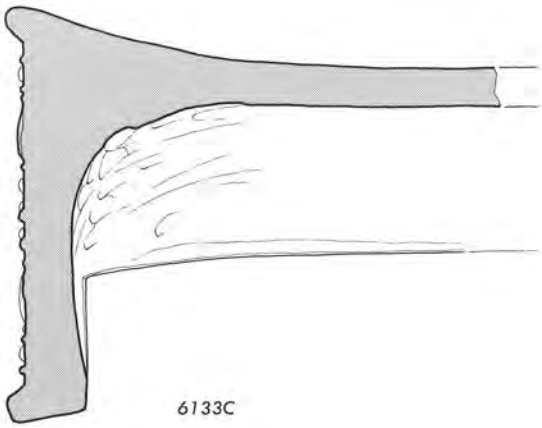
6236F
6775A

6225A
6663A

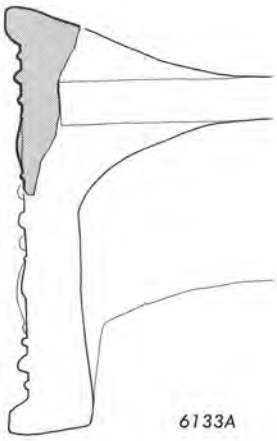
2 : 5



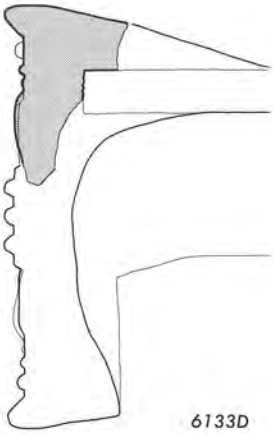
6125A(1)



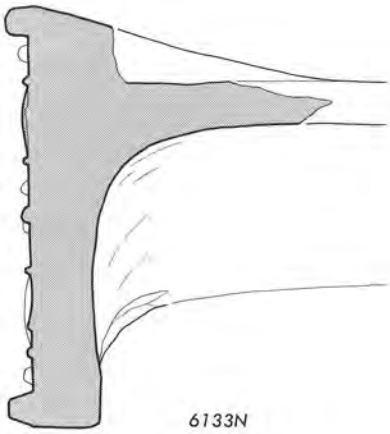
6133C



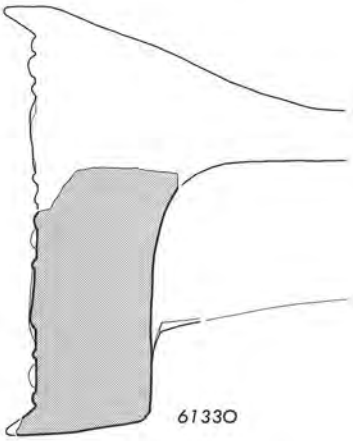
6133A



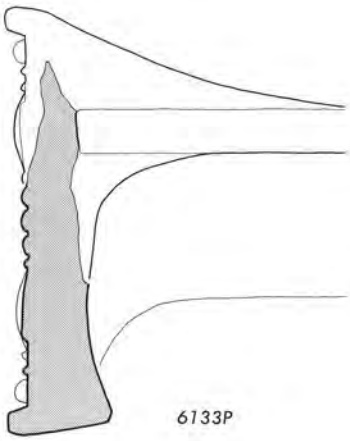
6133D



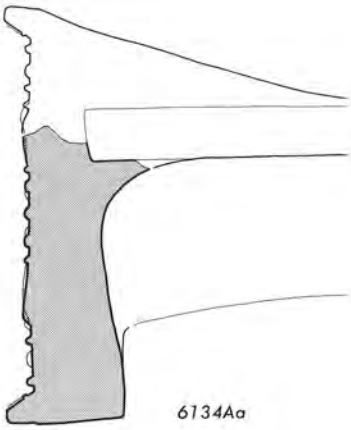
6133N



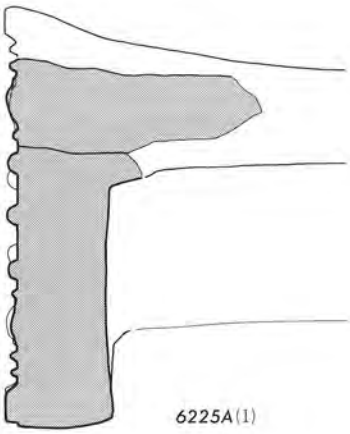
6133O



6133P



6134Aa



6225A(1)

1 : 3

6125A(1)

6133C

6133A

6133N

6133D

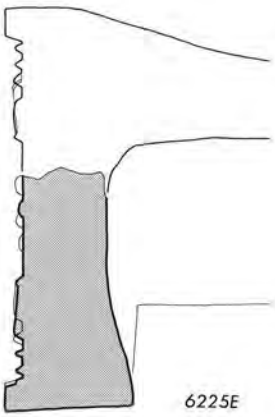
6133P

6133O

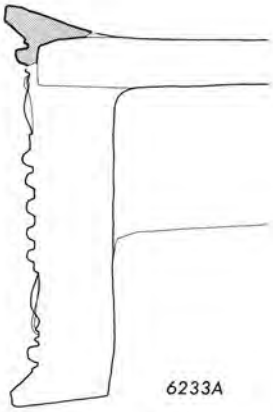
6134Aa

6225A(1)

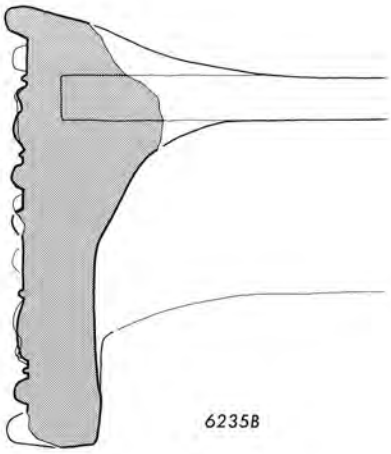
1 : 3



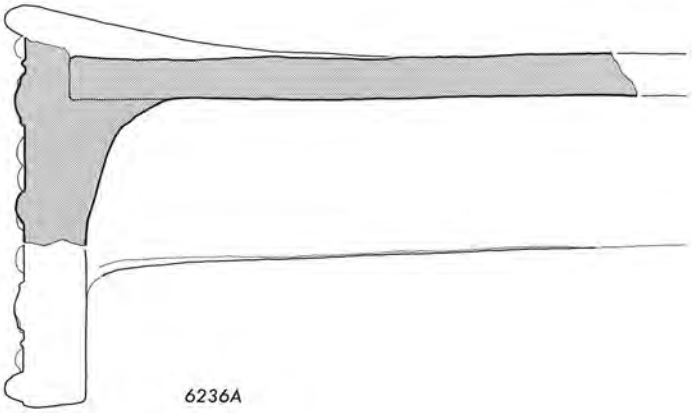
6225E



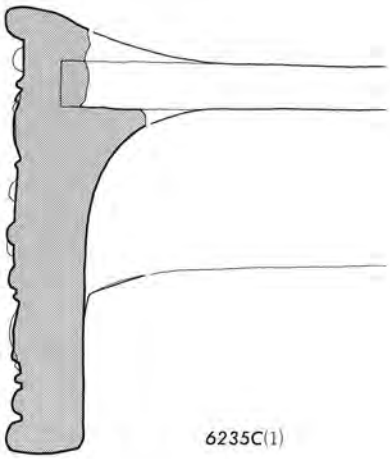
6233A



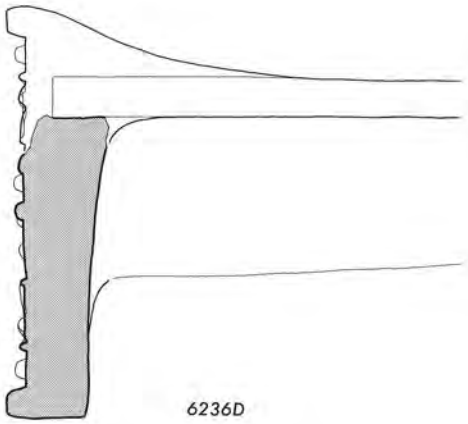
6235B



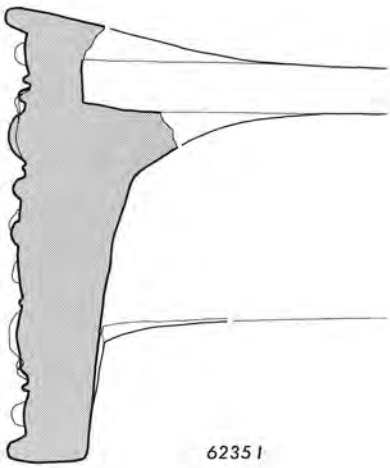
6236A



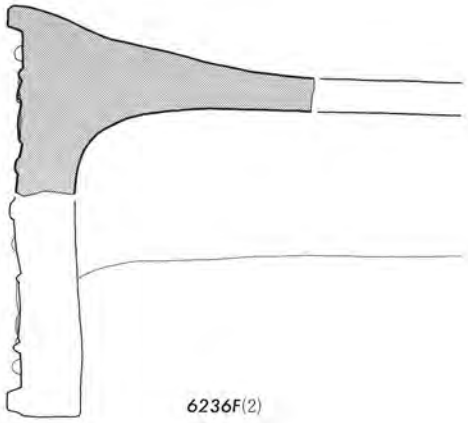
6235C(1)



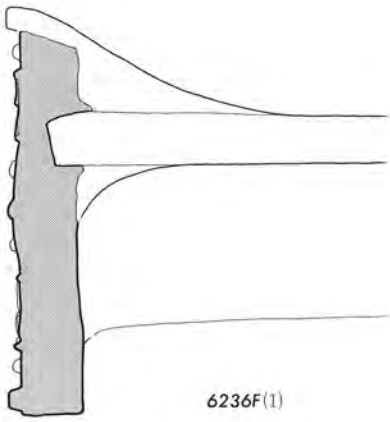
6236D



6235 I



6236F(2)



6236F(1)

1 : 3

6225E

6235B

6233A

6235C(1)

6236A

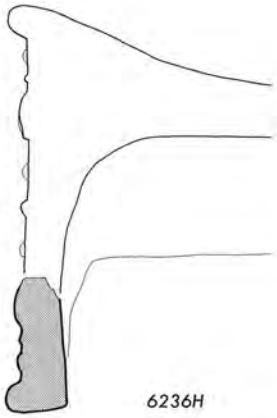
6235I

6236D

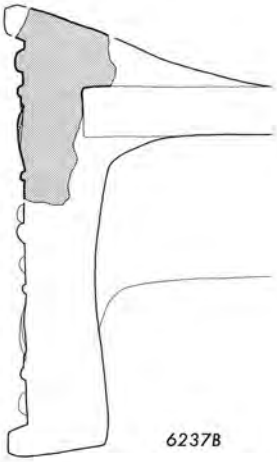
6236F(1)

6236F(2)

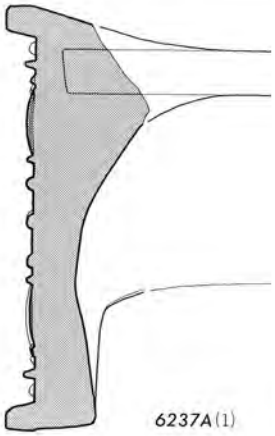
1 : 3



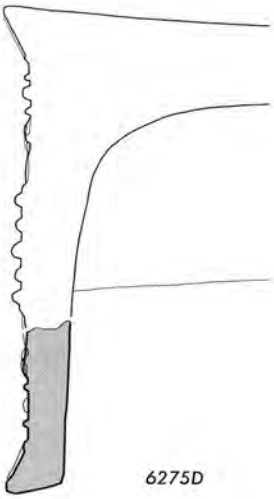
6236H



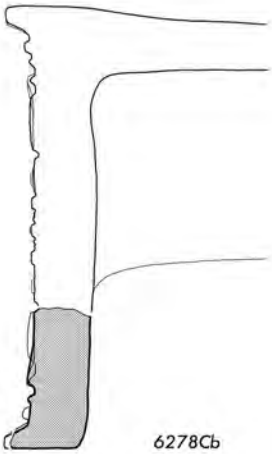
6237B



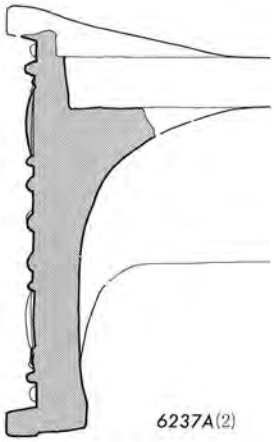
6237A(1)



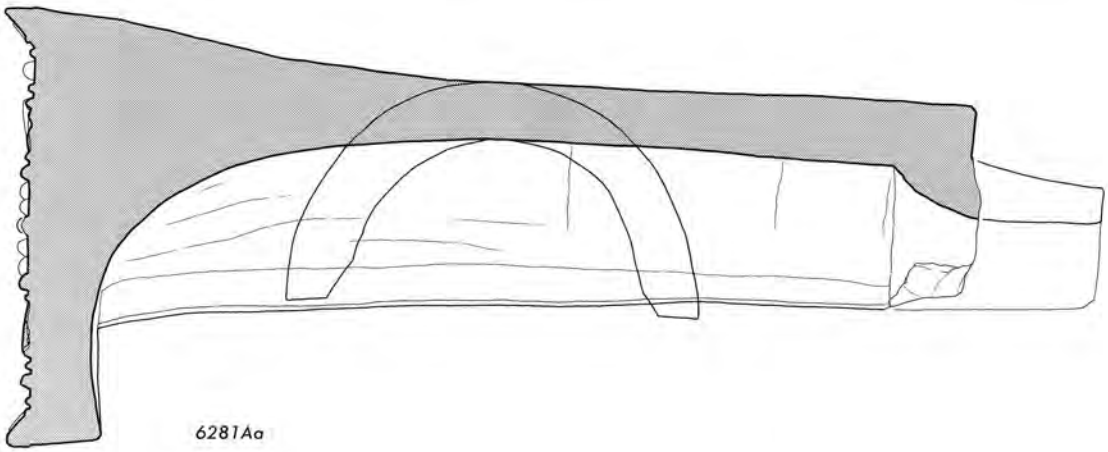
6275D



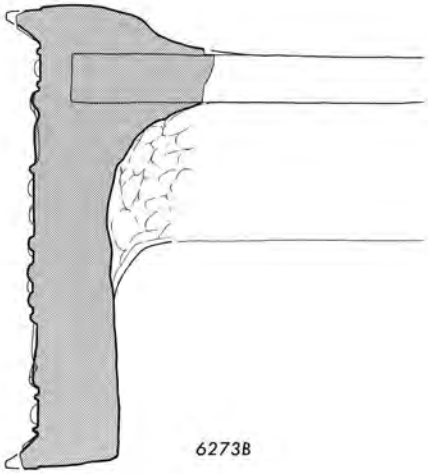
6278Cb



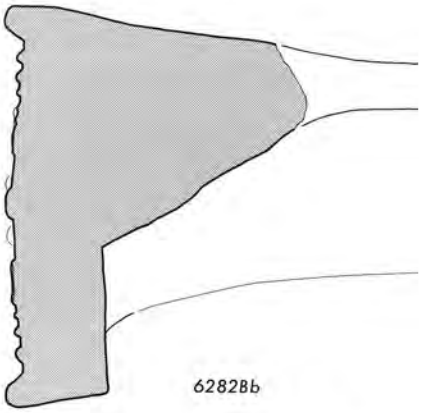
6237A(2)



6281Aa



6273B



6282Bb

1 : 3

6236H

6237A(1)

6237B

6237A(2)

6275D

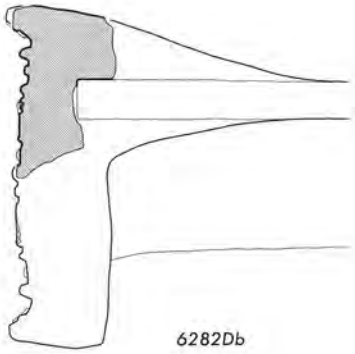
6281Aa

6278Cb

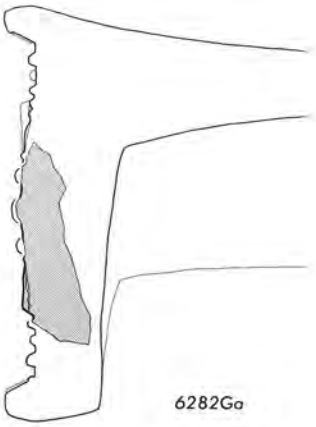
6273B

6282Bb

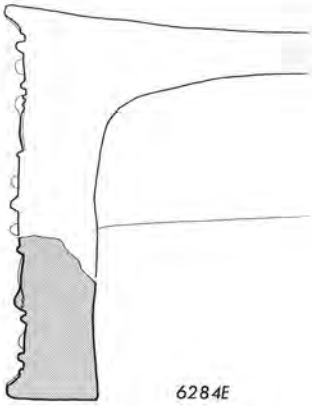
1 : 3



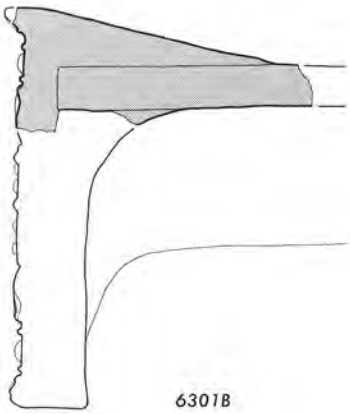
6282Db



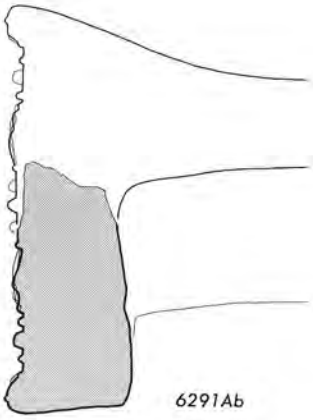
6282Ga



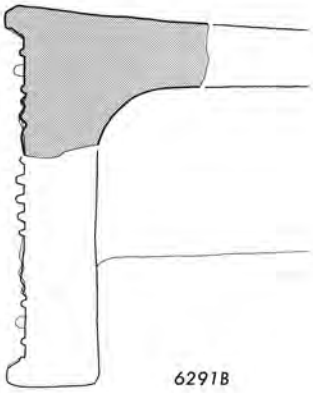
6284E



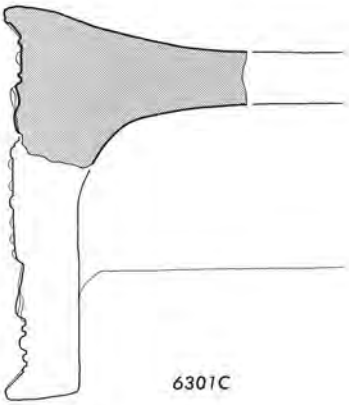
6301B



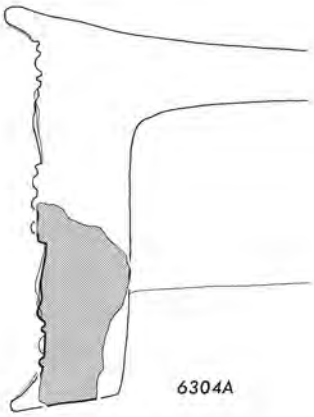
6291Ab



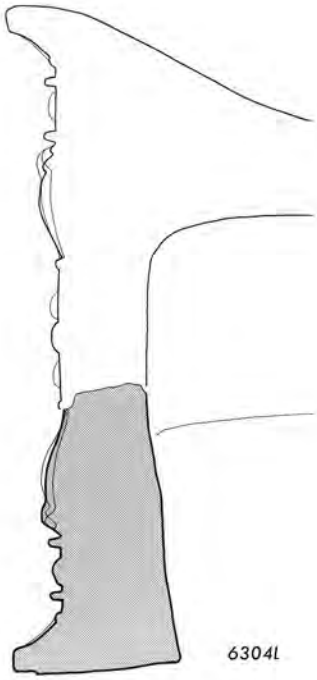
6291B



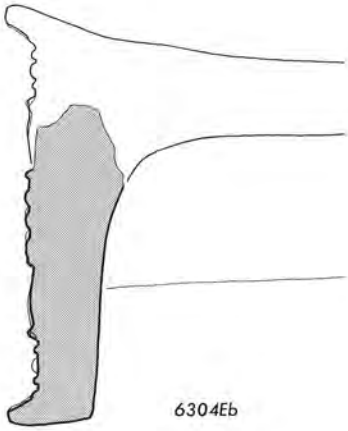
6301C



6304A



6304L



6304Eb

1 : 3

6282Db

6284E

6282Ga

6291Ab

6301B

6291B

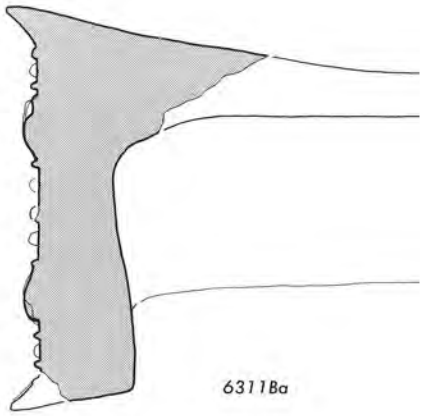
6301C

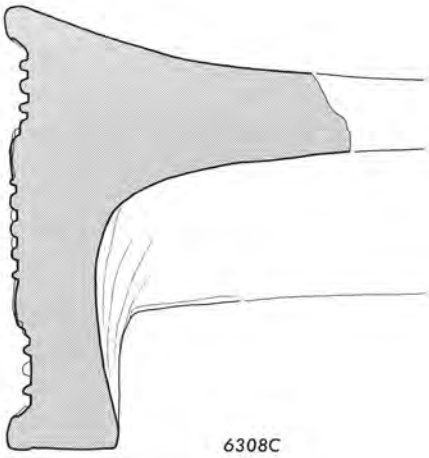
6304A

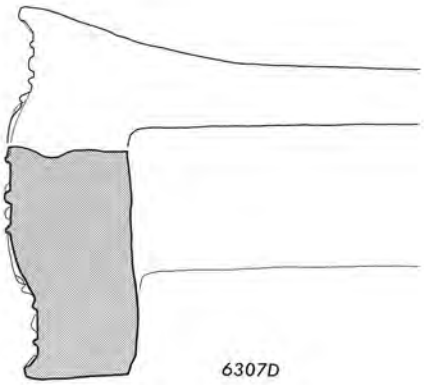
6304Eb

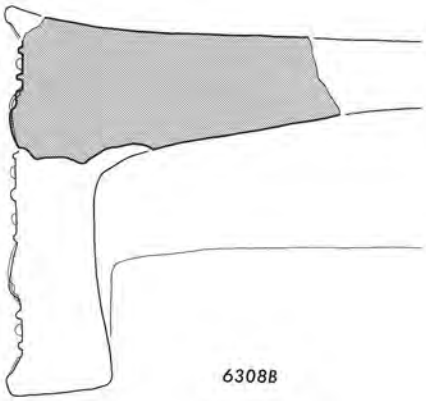
6304L

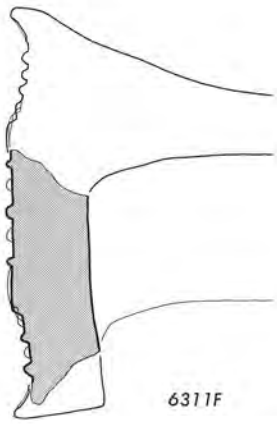
1 : 3

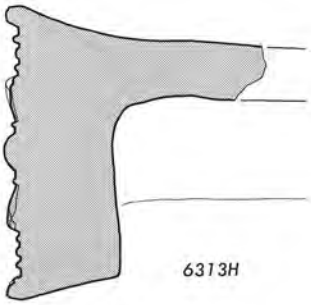

6311Ba

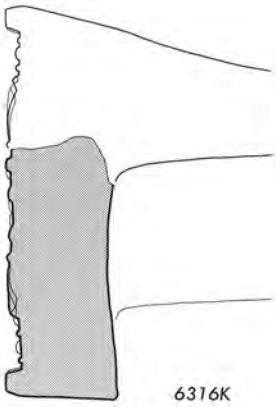

6308C

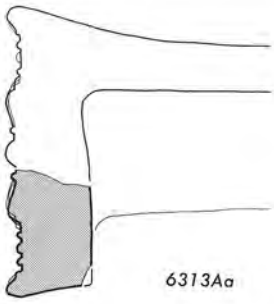

6307D

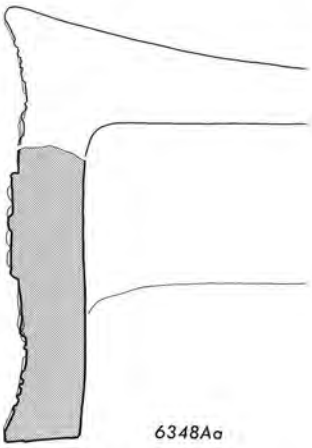

6308B

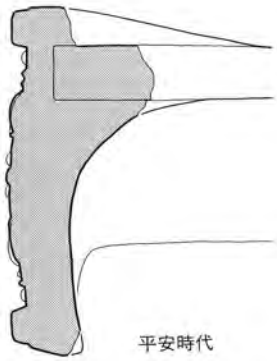

6311F


6313H


6316K


6313Aa


6348Aa


平安時代

1 : 3

6311Ba

6308C

6307D

6308B

6311F

6313H

6313Aa

6316K

6348Aa

平安時代

1 : 3

6125A(2)

6235C(2)

6225A(1)

6236A

6237A

6236F(3)

6281Aa

6273B

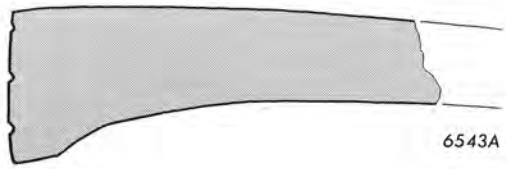
6307D

6273B

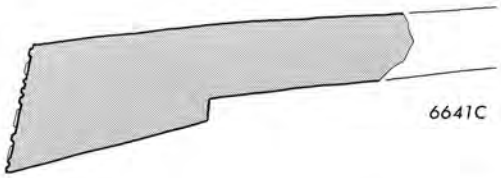
6348Aa

平安時代

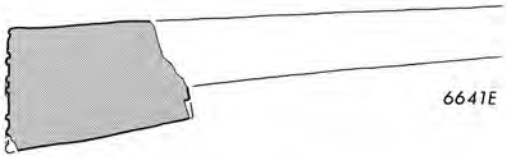
1 : 3



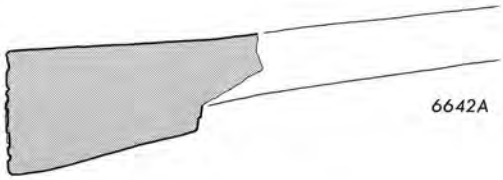
6543A



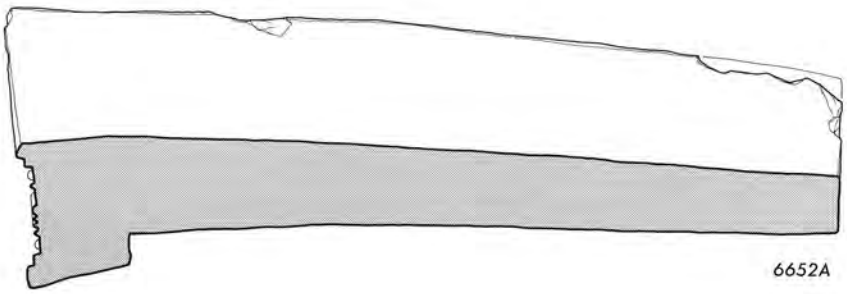
6641C



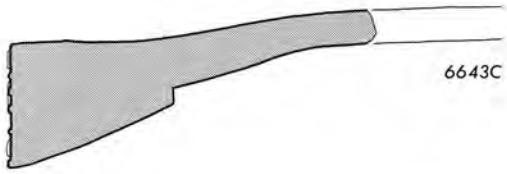
6641E



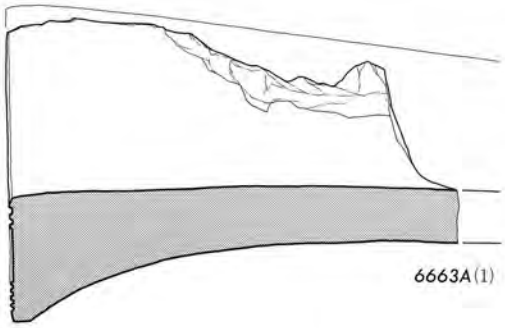
6642A



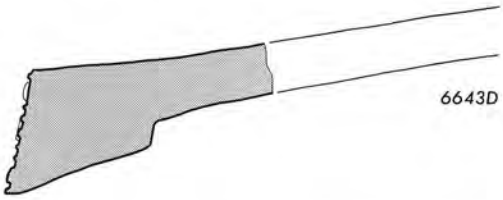
6652A



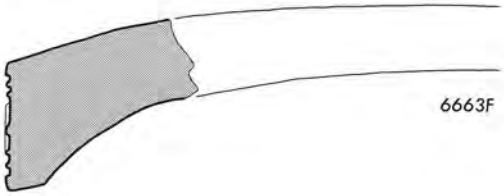
6643C



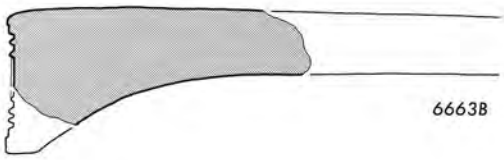
6663A(1)



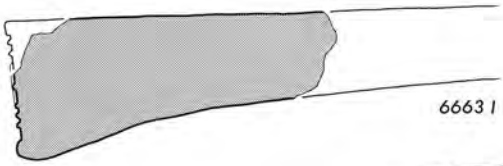
6643D



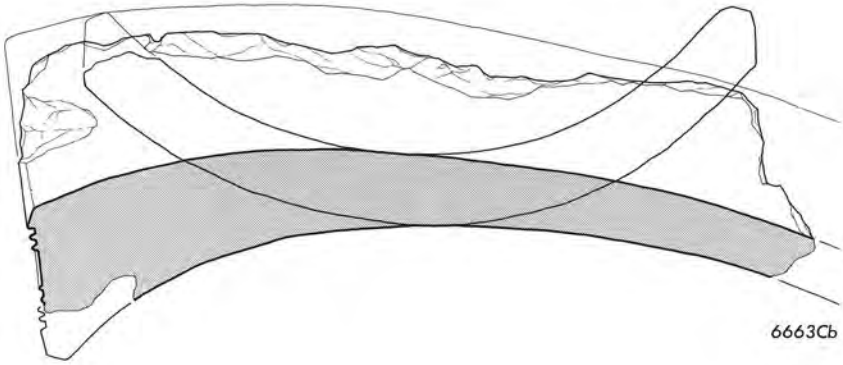
6663F



6663B



6663 I



6663Cb

1 : 3

6543A

6641C

6641E

6642A

6643C

6652A

6643D

6663A(1)

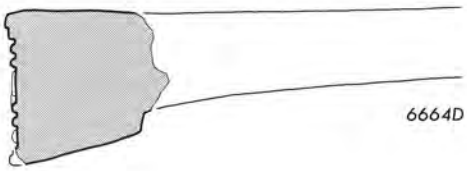
6663F

6663B

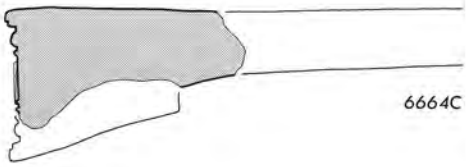
6663I

6663Cb

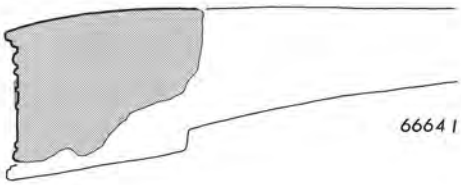
1 : 3



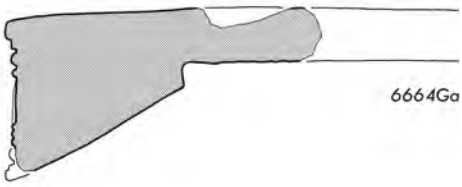
6664D



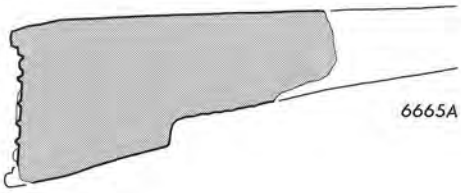
6664C



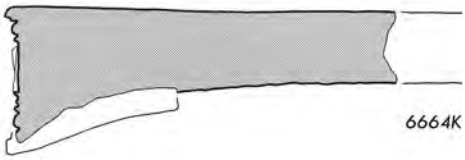
6664 I



6664Ga

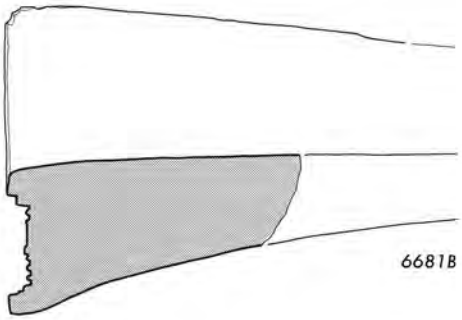


6665A

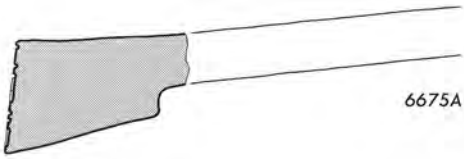


6664K

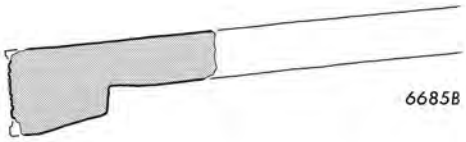
6668A



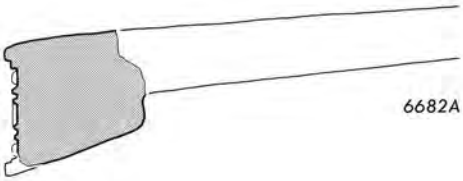
6681B



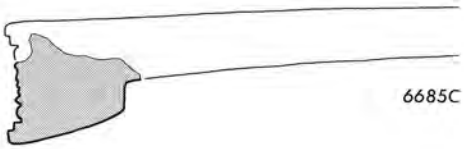
6675A



6685B



6682A



6685C

1 : 3

6664D

6664C

6664I

6664Ga

6665A

6664K

6668A

6681B

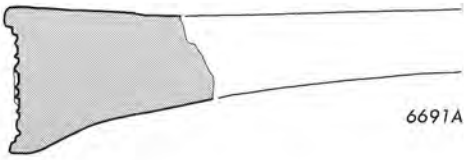
6675A

6685B

6682A

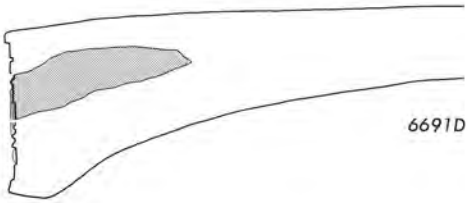
6685C

1 : 3

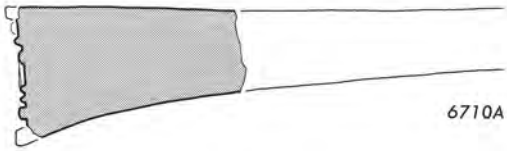


6691A

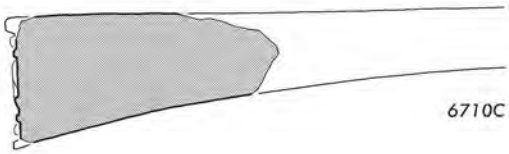
6702B



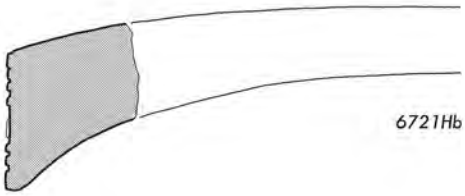
6691D



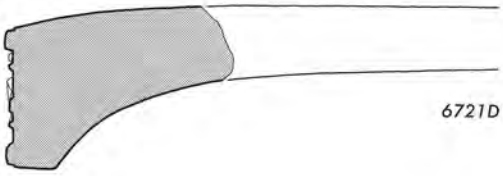
6710A



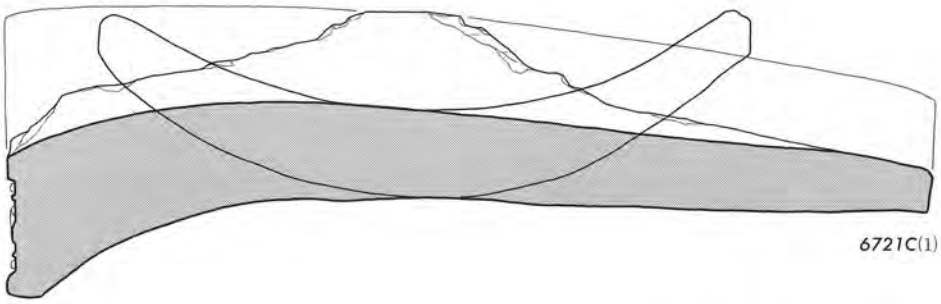
6710C



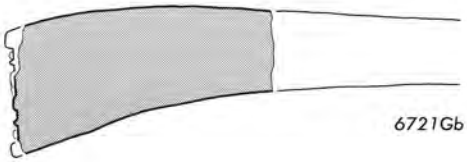
6721Hb



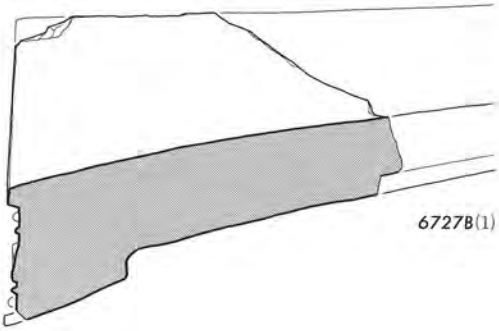
6721D



6721C(1)



6721Gb



6727B(1)

1 : 3

6691A

6702B

6691D

6710A

6721Hb

6710C

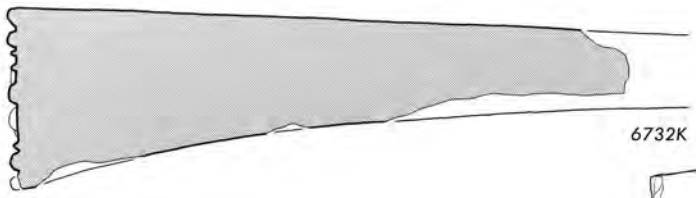
6721C(1)

6721D

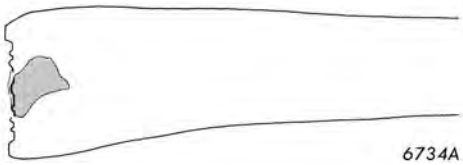
6721Gb

6727B(1)

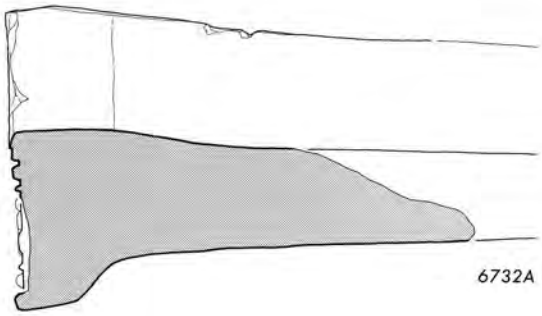
1 : 3



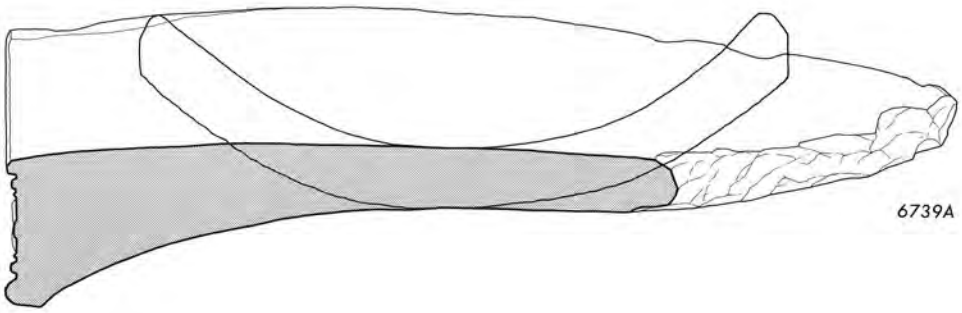
6732K



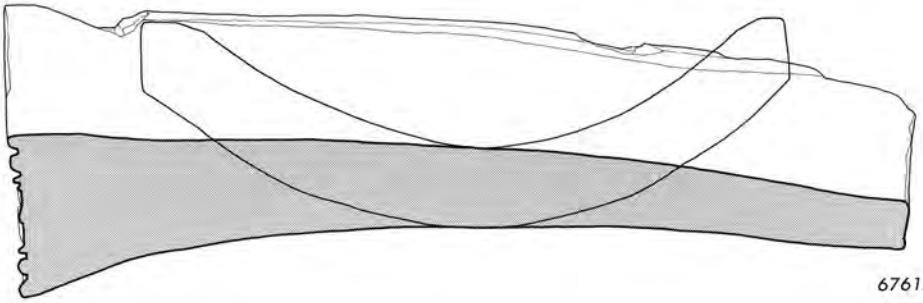
6734A



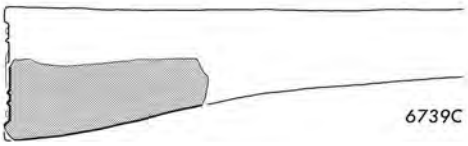
6732A



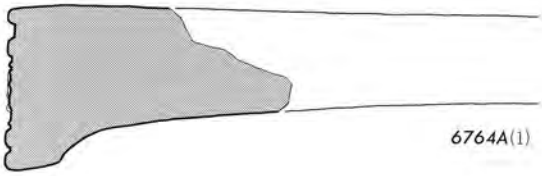
6739A



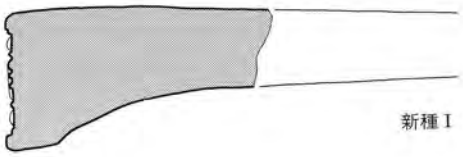
6761A(1)



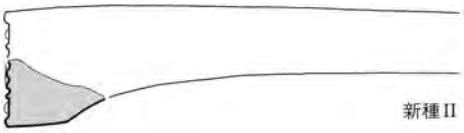
6739C



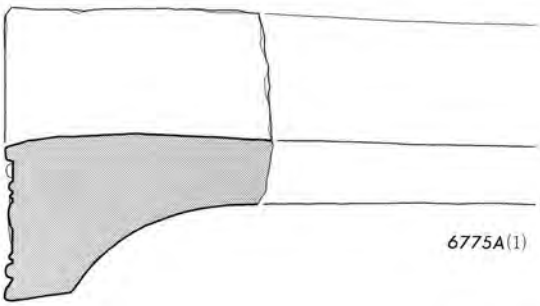
6764A(1)



新種 I



新種 II



6775A(1)

1 : 3

6732K

6732A

6734A

6739A

6739C

6761A(1)

新種 I

6764A(1)

新種 II

6775A(1)

1 : 3

6663A(2)

6652A

6663A(1)

6663Cb

6664C

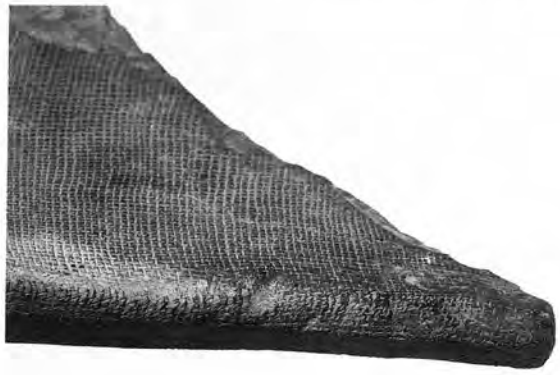
6721C(2)

6721D

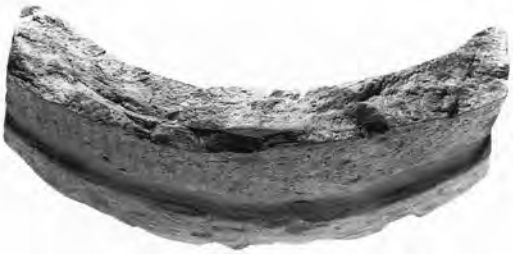
6721C(1)

6727B(2)

6727B(1)



6739A



6727B(1)

6775A(2)

6775A(1)

6764A(2)

6764A(3)

6761A(5)

6761A(2)

6761A(3)

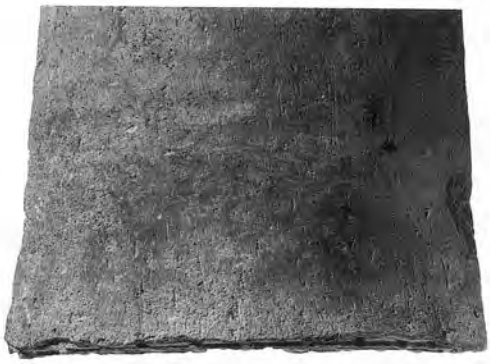
6761A(2)

6761A(3)

6761A(4)

6761A(1)

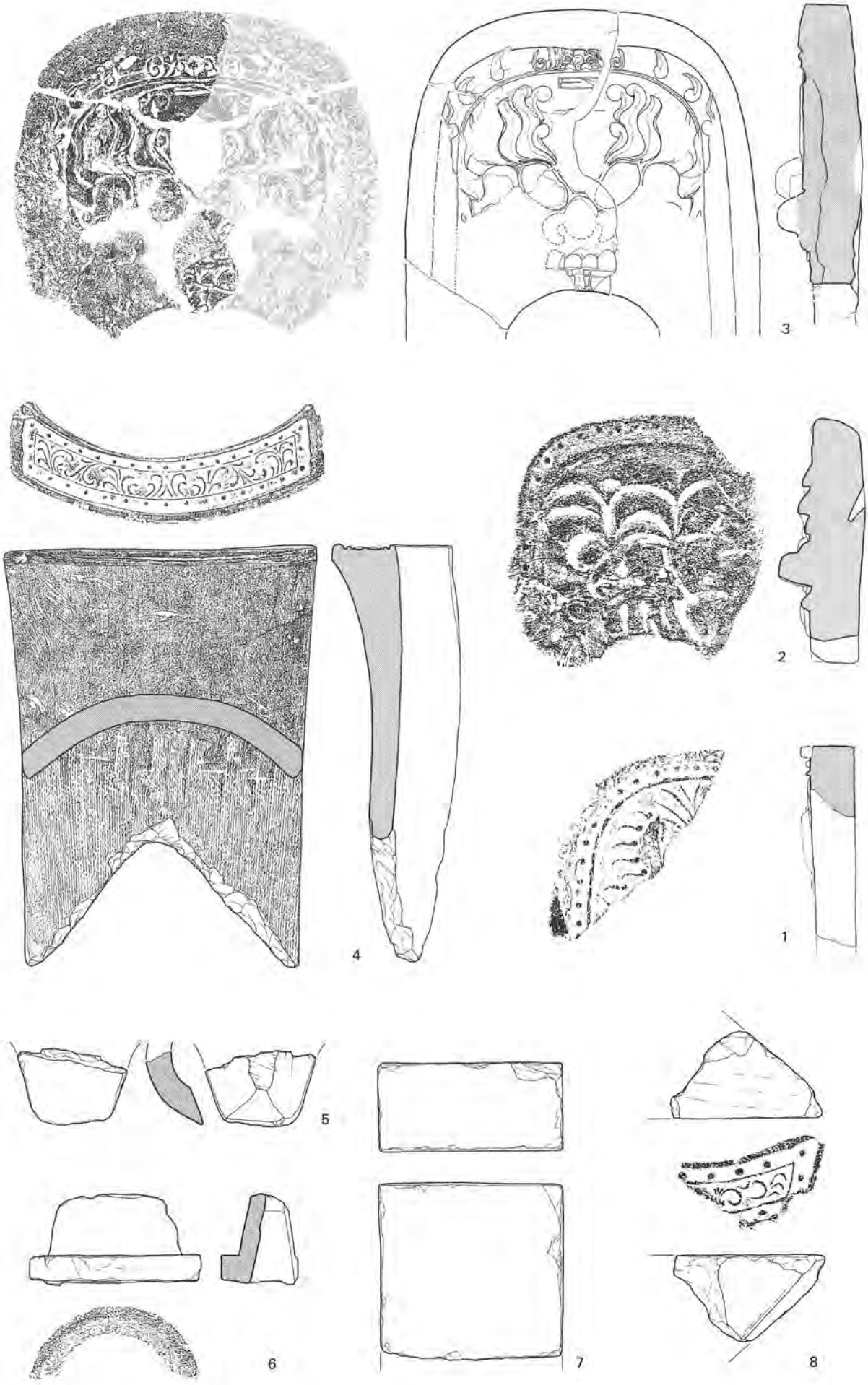
6761A(4)



6761A(1)

6761A(4)

6761A(1)



1 : 5

1

2

3

4

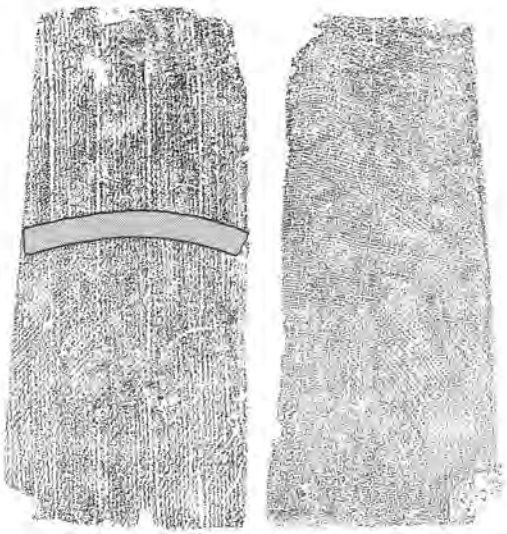
5

6

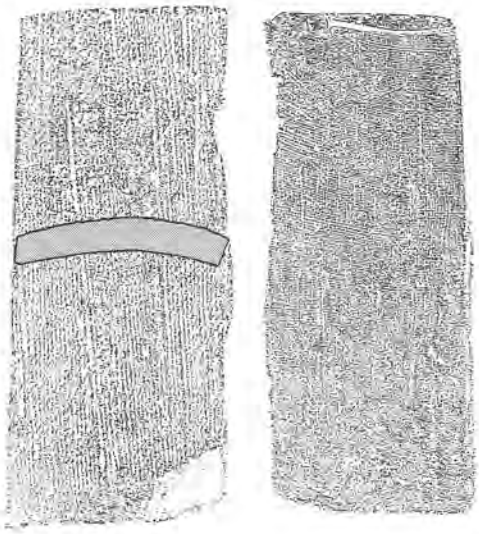
7

8

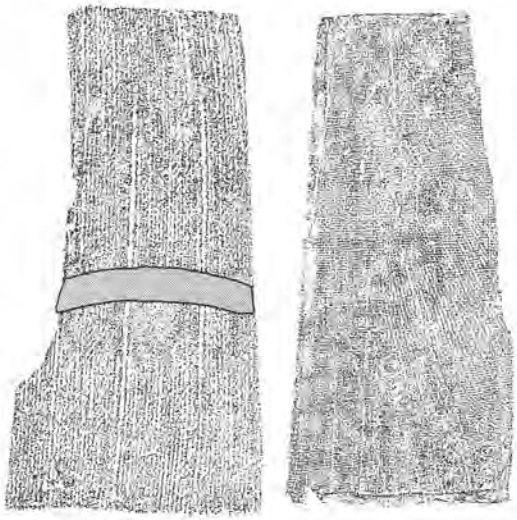
1 : 5



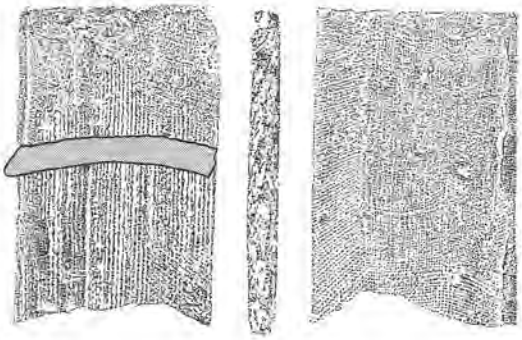
1



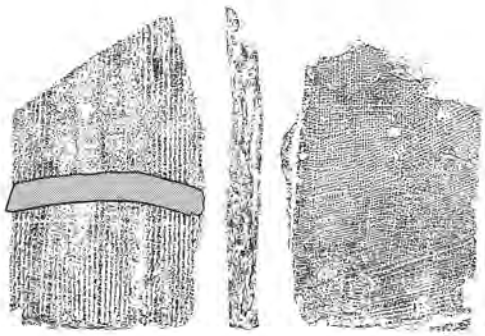
2



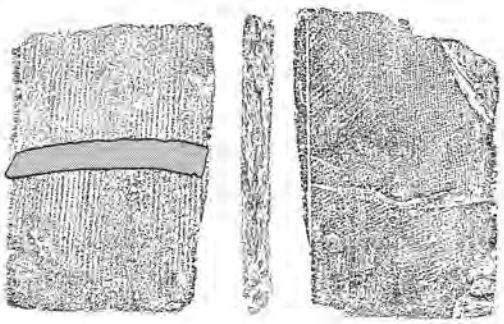
3



4

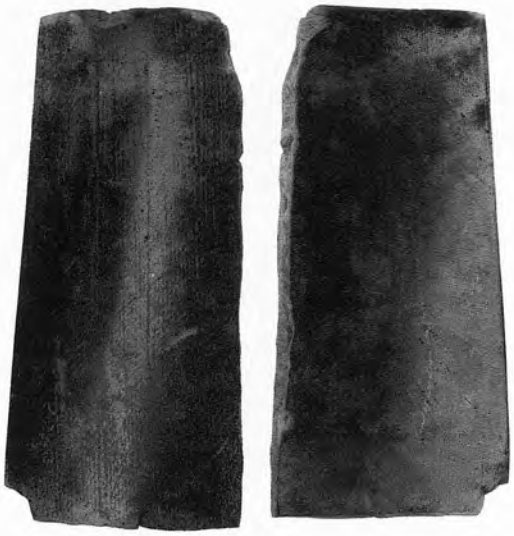


5



6

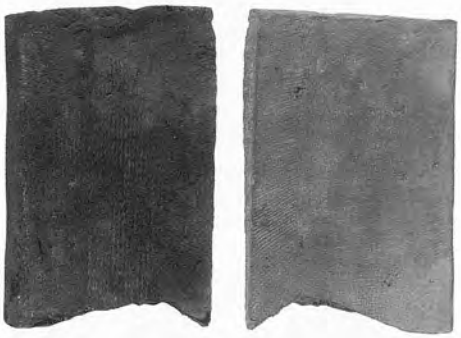
1 : 5



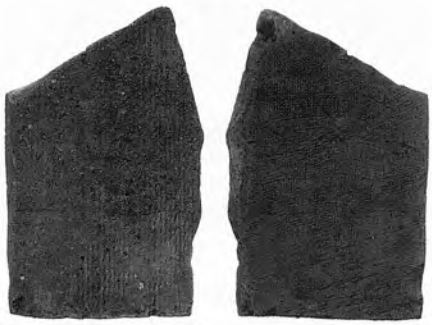
1

2

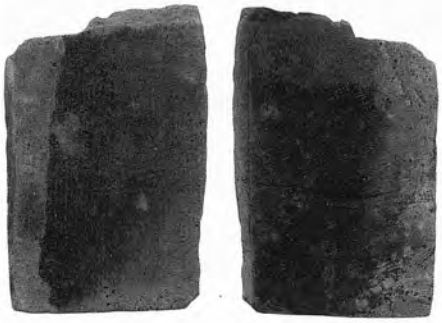
3



4

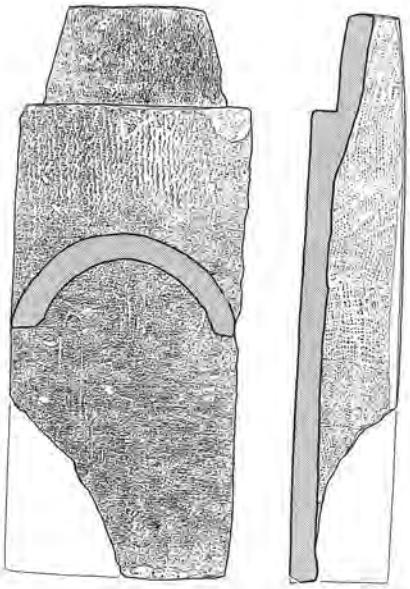


5

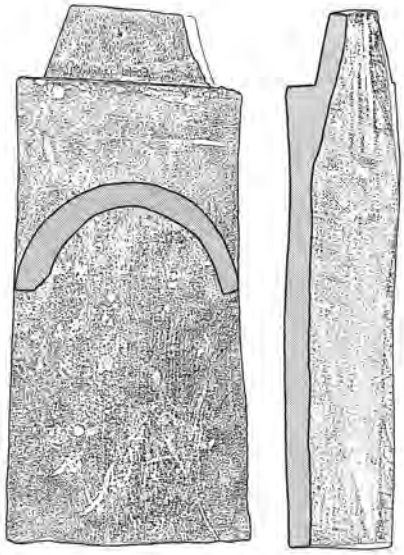


6

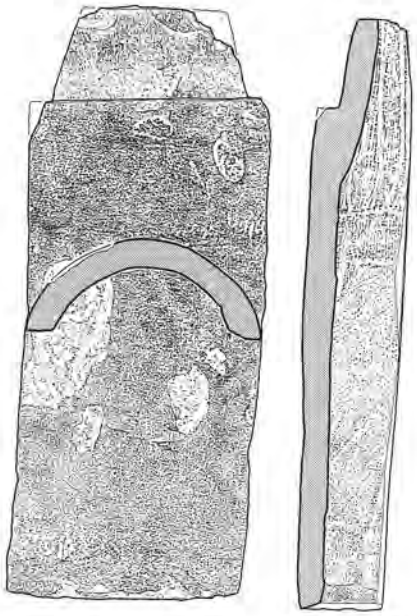
1 : 5



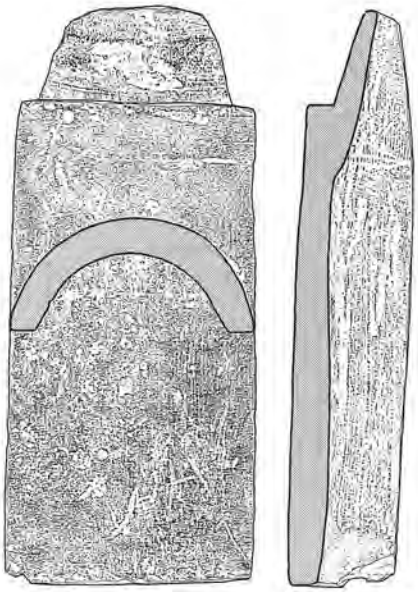
1



2



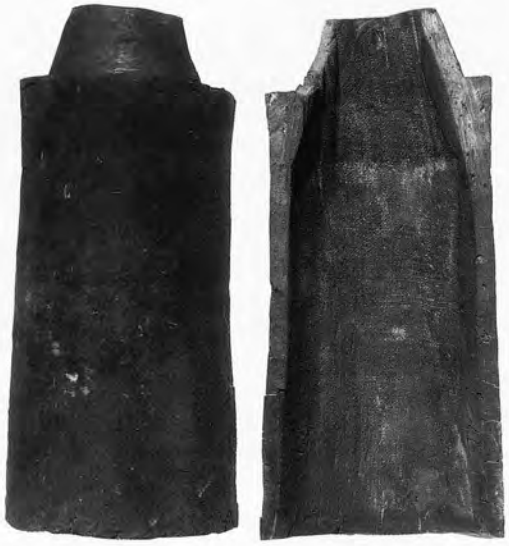
3



4

1 : 5

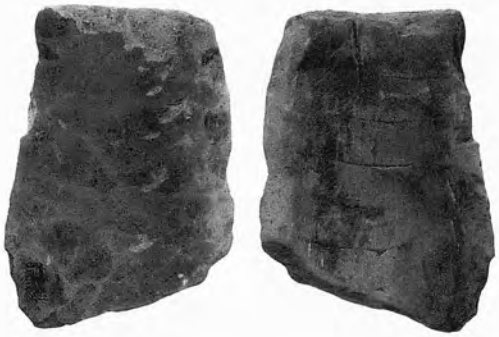
1



2

3

4

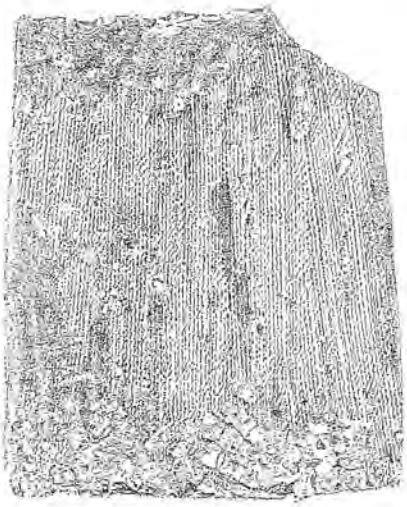


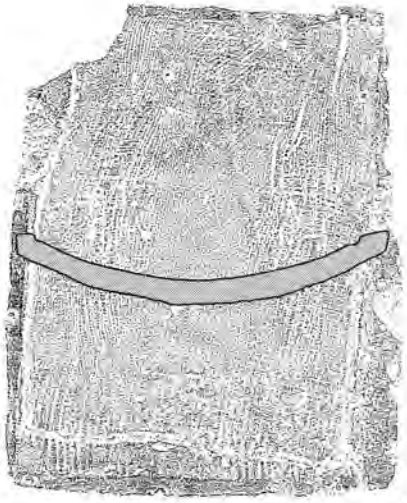
5

6

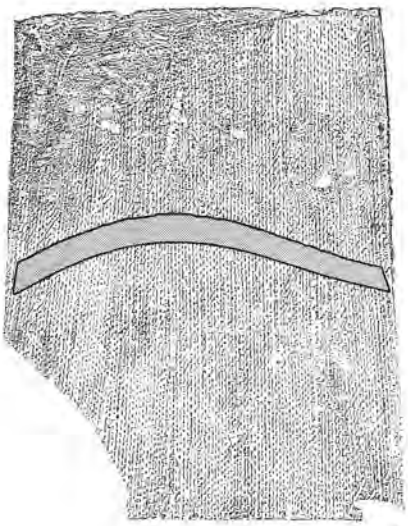
7

1～5　1：5
6・7　1：3

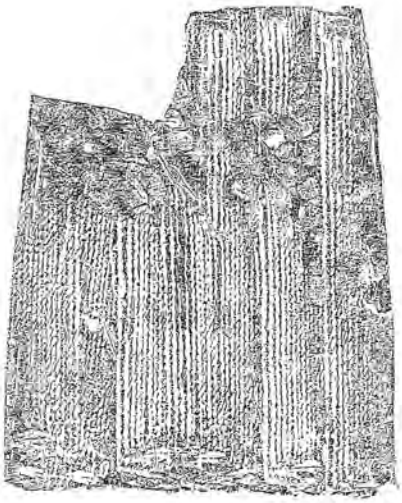


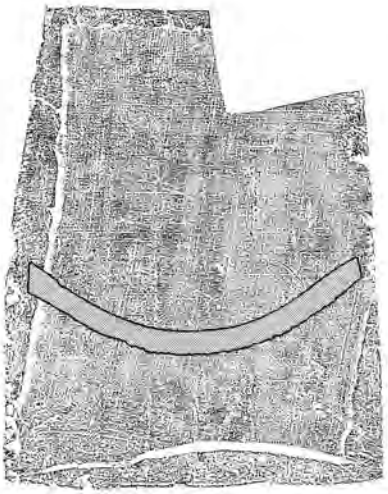


1

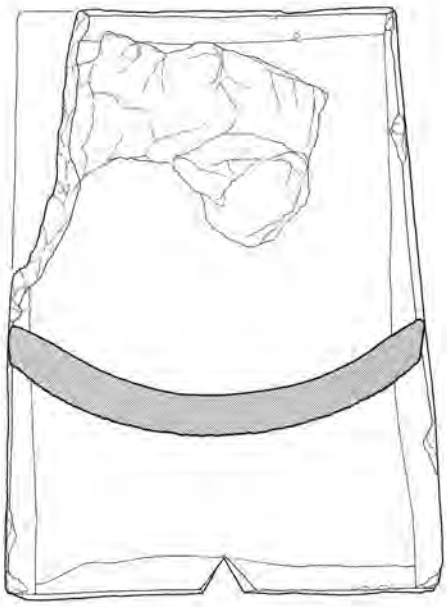


4

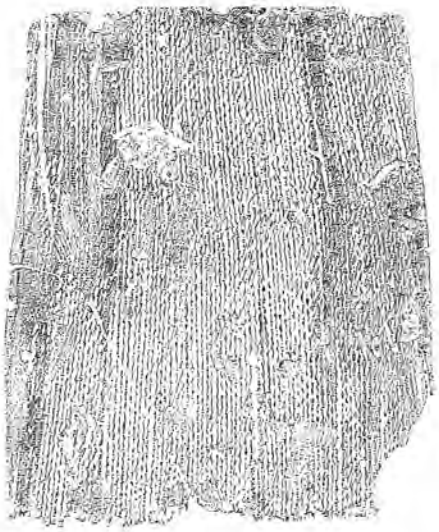


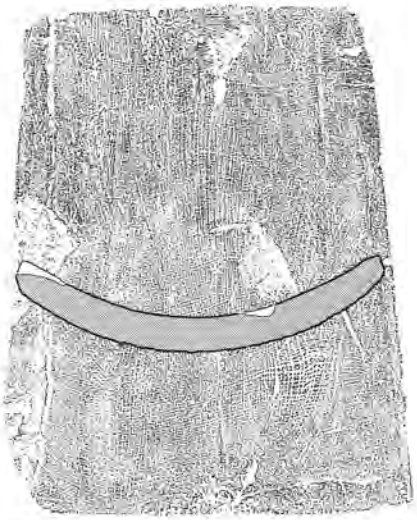


2

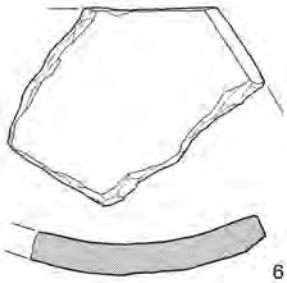


5





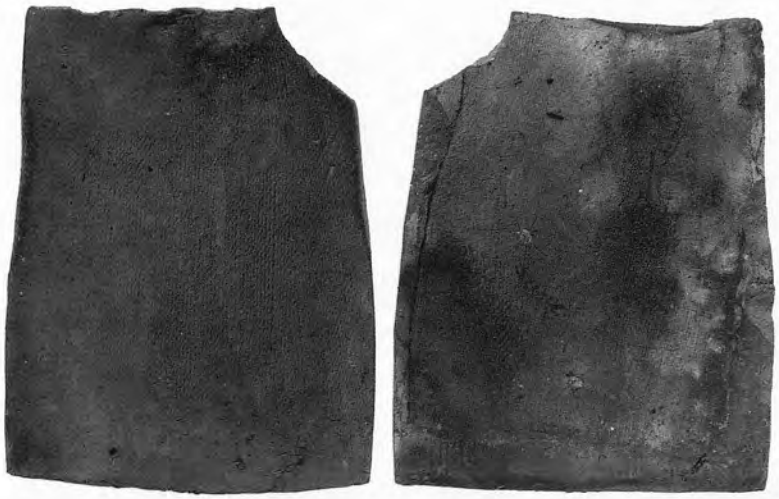
3



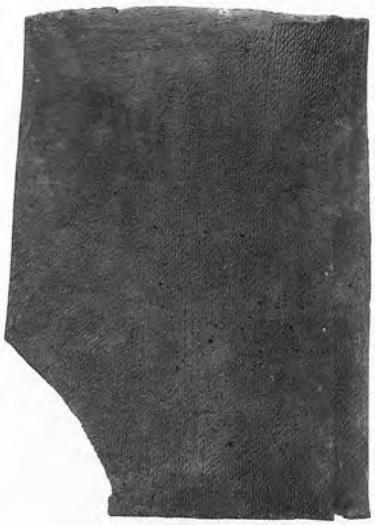
6

7

1 : 5



1



4

2

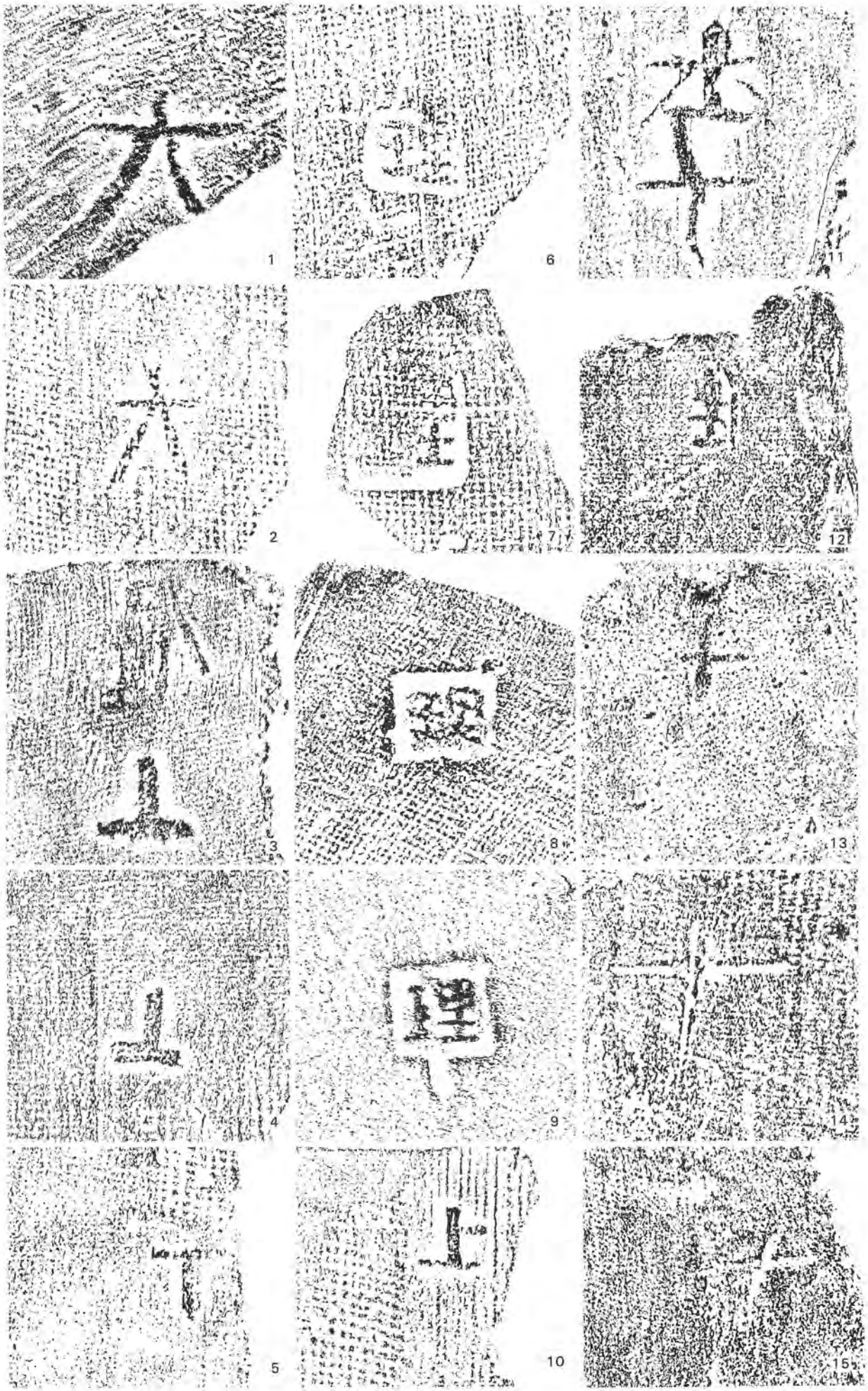
5

3

6

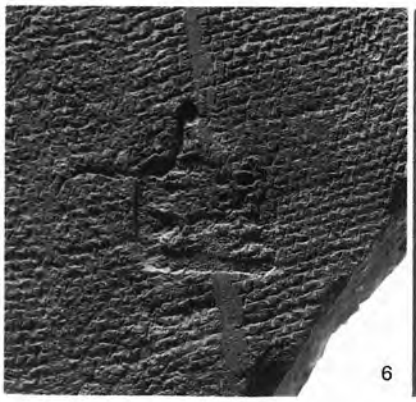
7

1 : 5

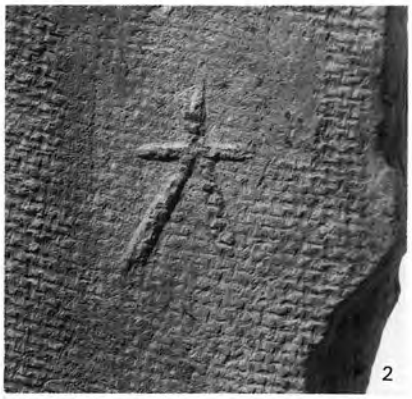


1 : 1

1


6

11


2

7

12

3

8

13

4

9

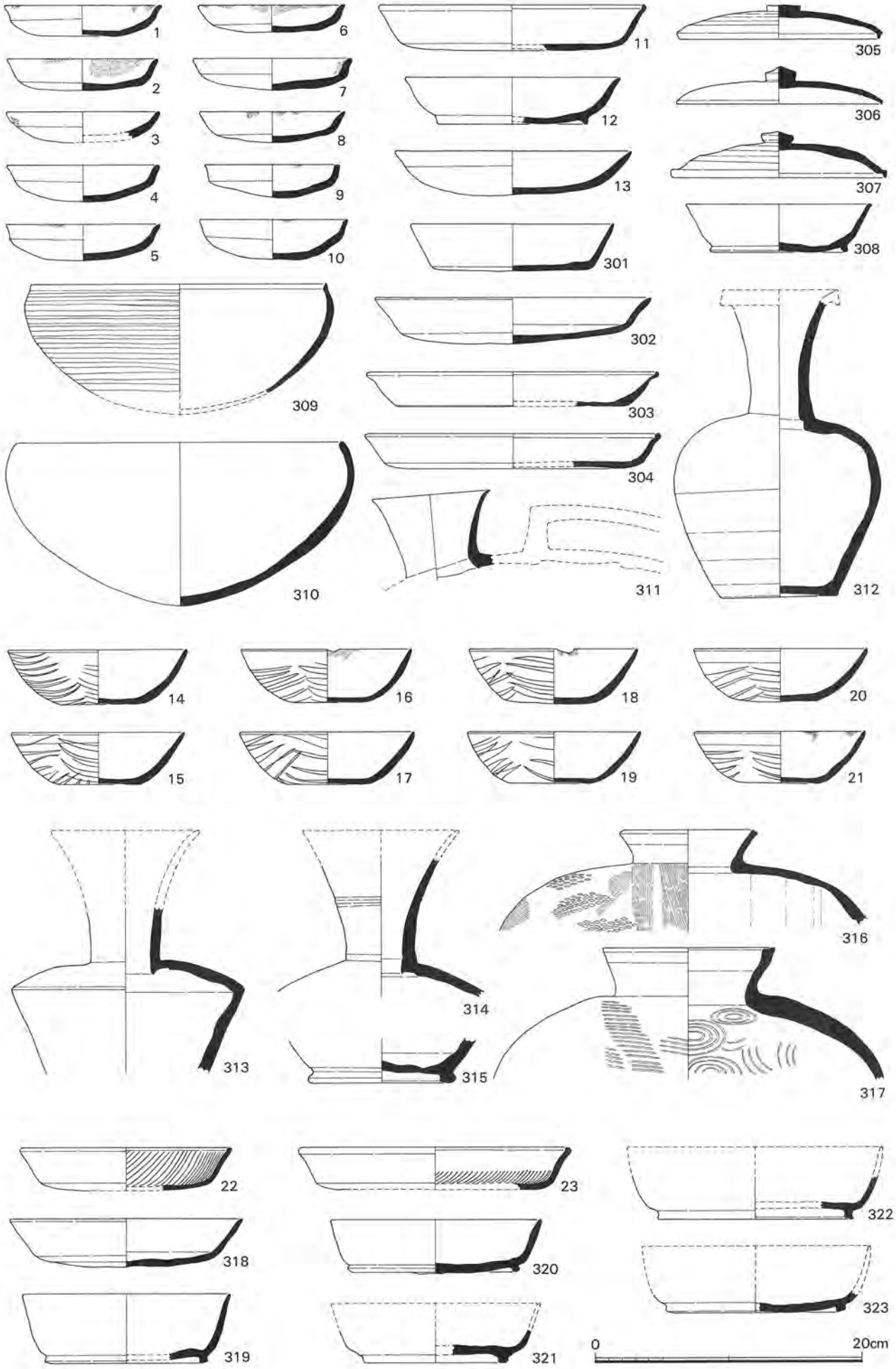
14

5

10

15

1 : 1


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
14
15
16
17
18
19
20
21
313
314
315
316
317
22
23
318
319
320
321
322
323
0
20cm

307

8

6

2

1

306

10

5

308

13

12

302

312

304

310

14

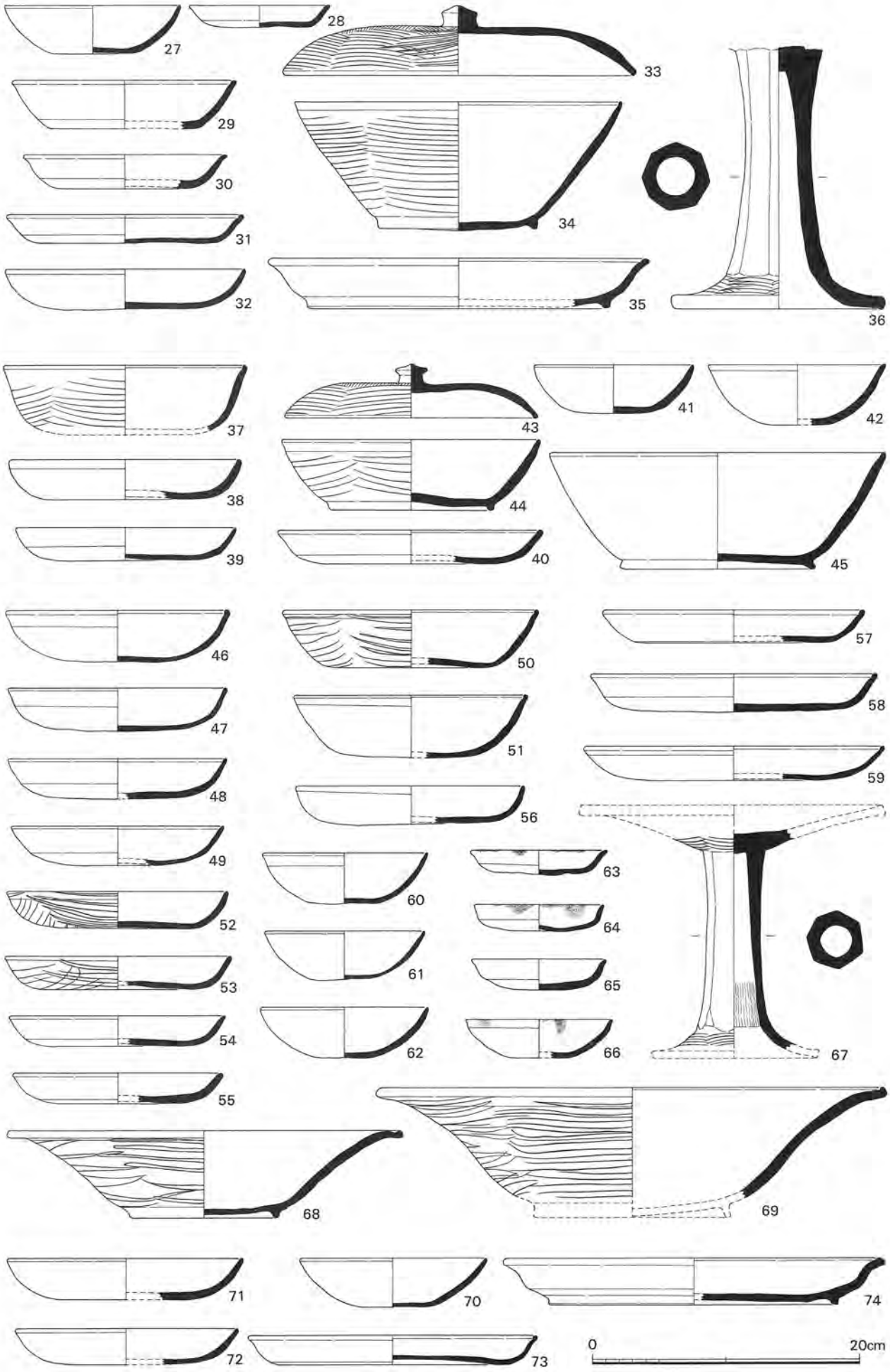
16

15

17

18

20


27
28
33
29
34
30
31
35
32
36
37
43
41
42
38
44
39
40
45
46
50
57
47
58
51
48
59
56
49
63
60
52
64
61
53
65
54
62
66
67
55
68
69
71
70
74
72
73
0
20cm

28

60

47

63

61

48

65

66

62

52

50

53

58

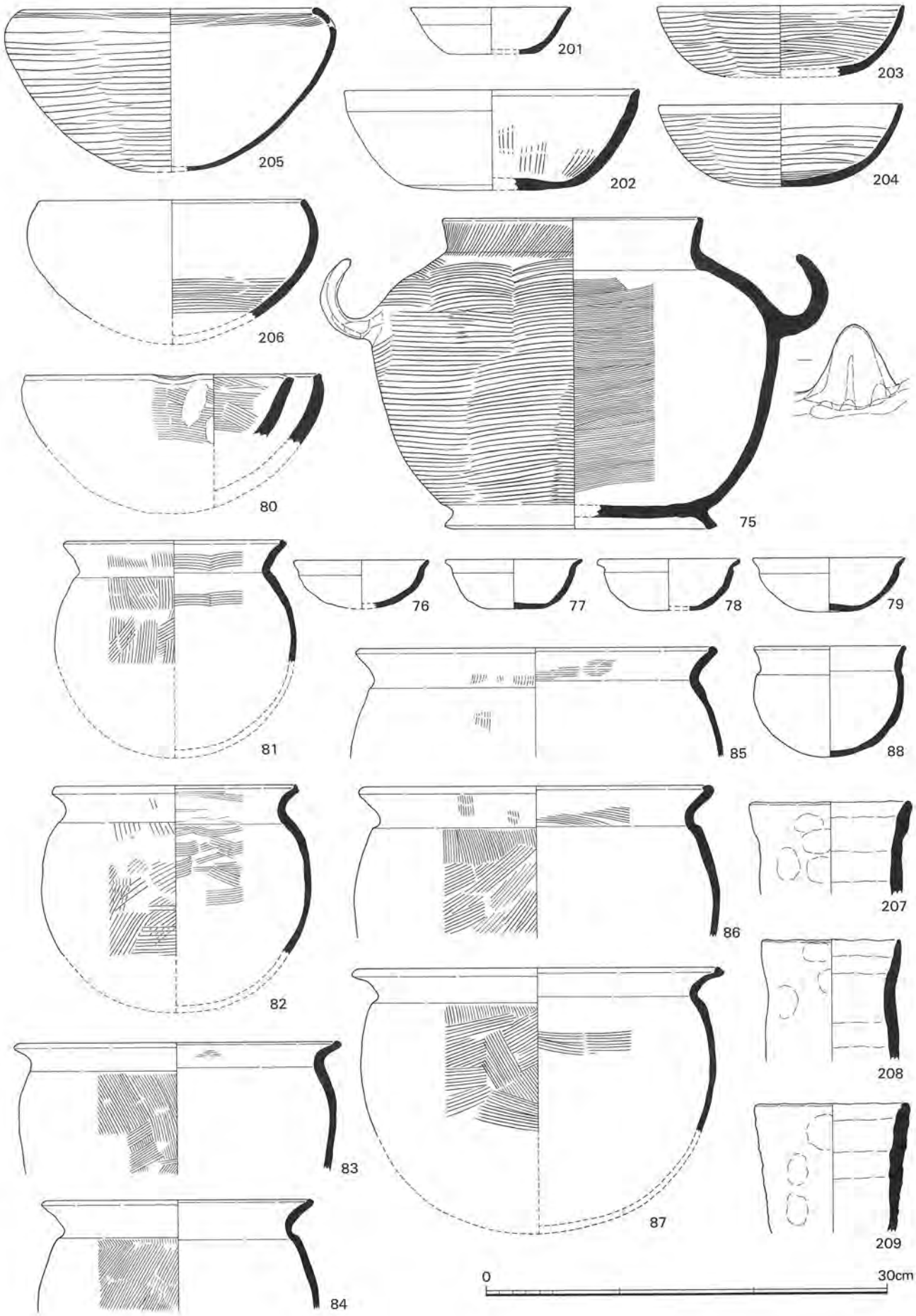
56

33

36

34

68


205
201
203
202
204
206
80
75
76
77
78
79
81
85
88
82
86
207
208
83
87
209
84
0
30cm

208

205

88

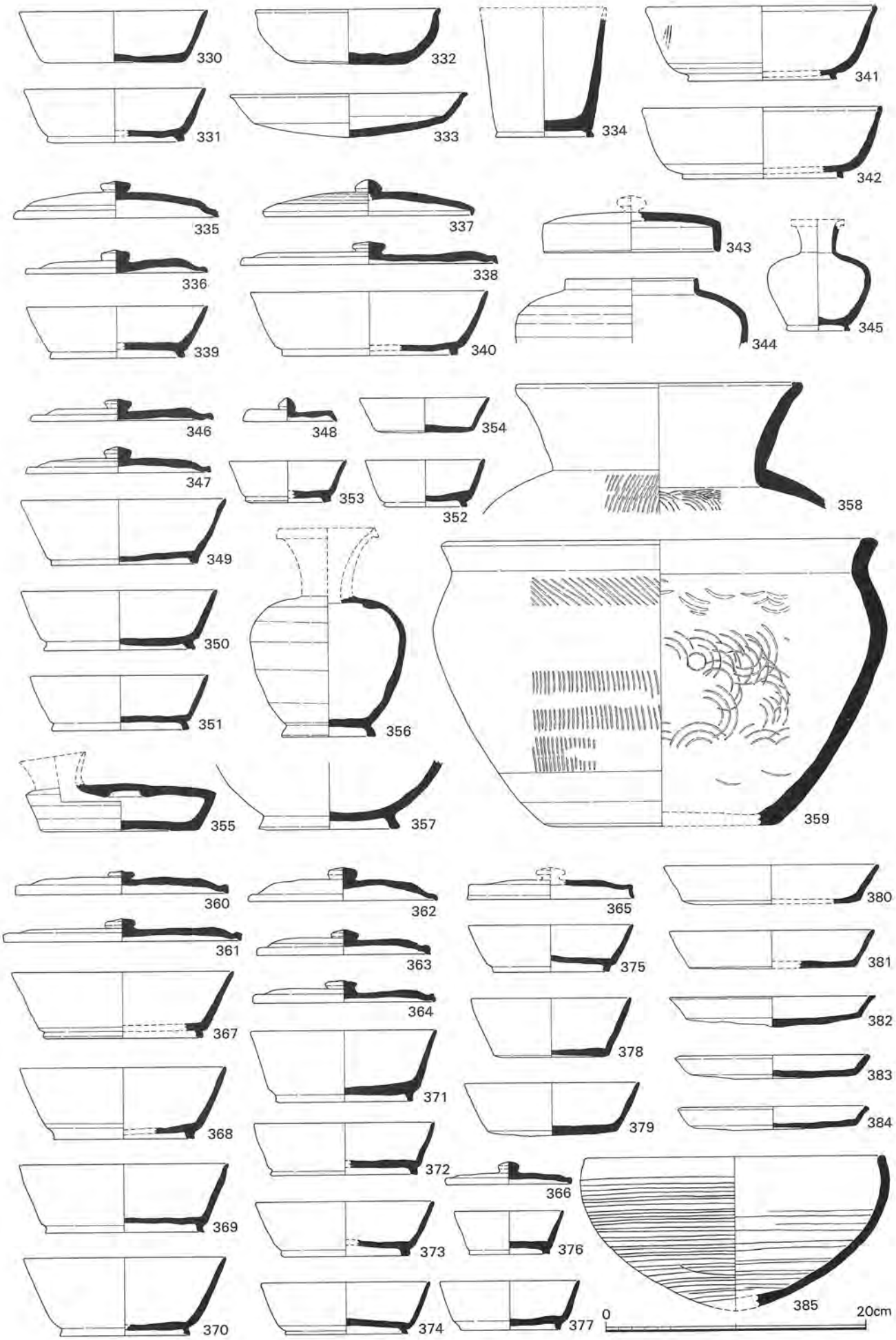
202

82

203

204

75


330
332
334
341
331
333
342
335
337
343
336
338
345
339
340
344
346
348
354
347
353
352
358
349
350
356
359
351
355
357
360
362
365
380
361
363
375
381
367
364
382
378
383
368
371
379
384
372
366
369
373
376
385
370
374
377
0
20cm

345

366

337

353

371

333

332

382

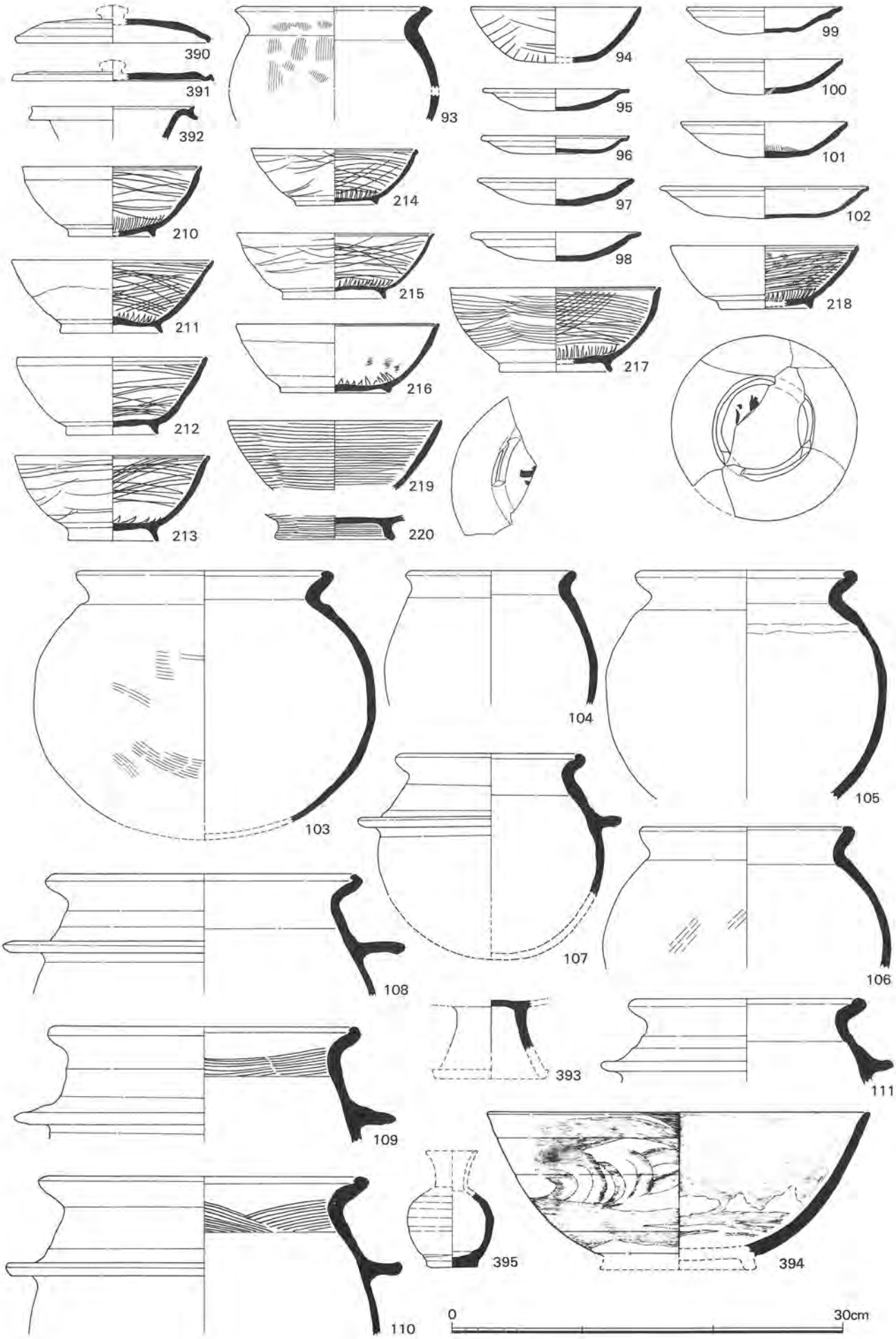
379

369

341

334

359


390
391
392
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
103
104
105
106
107
108
109
110
111
393
394
395
0
30cm

394

214

215

395

96

100

102

212

211

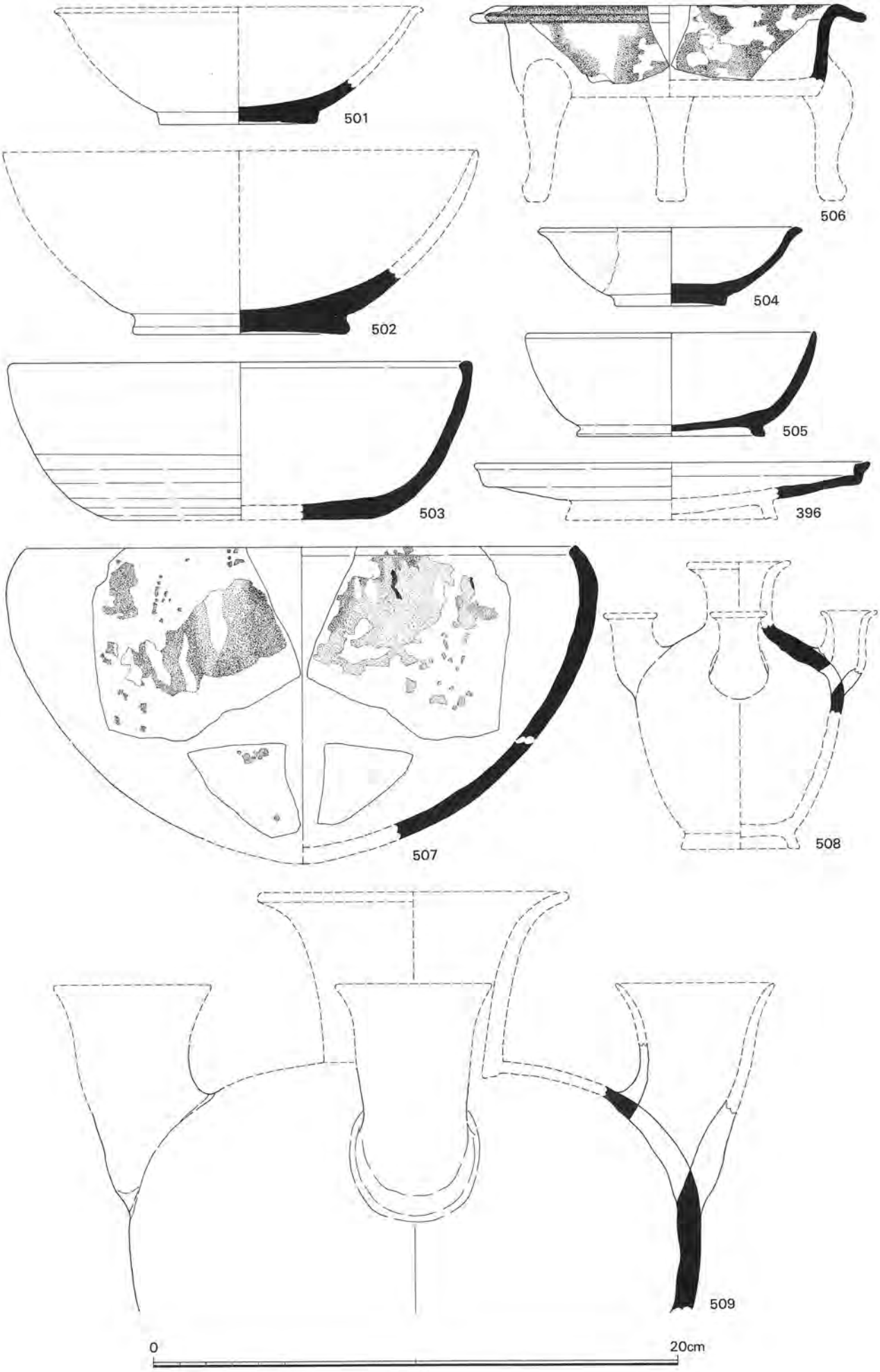
105

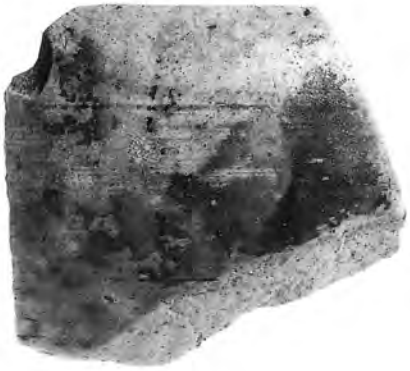
216

213

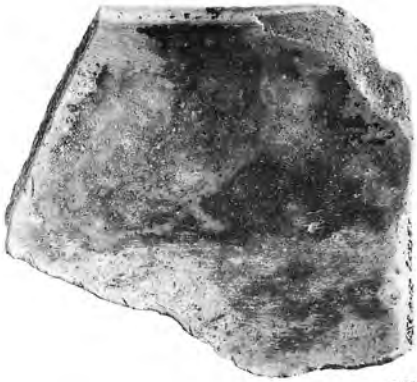
107

104

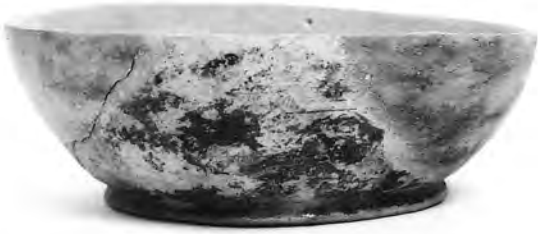

501
502
503
506
504
505
396
507
508
509
0
20cm



503

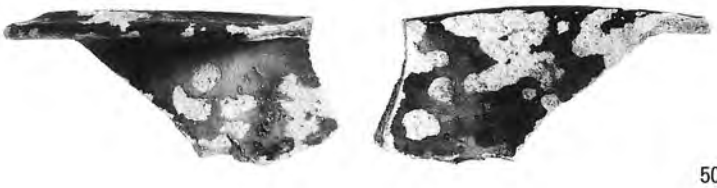


507



505

396



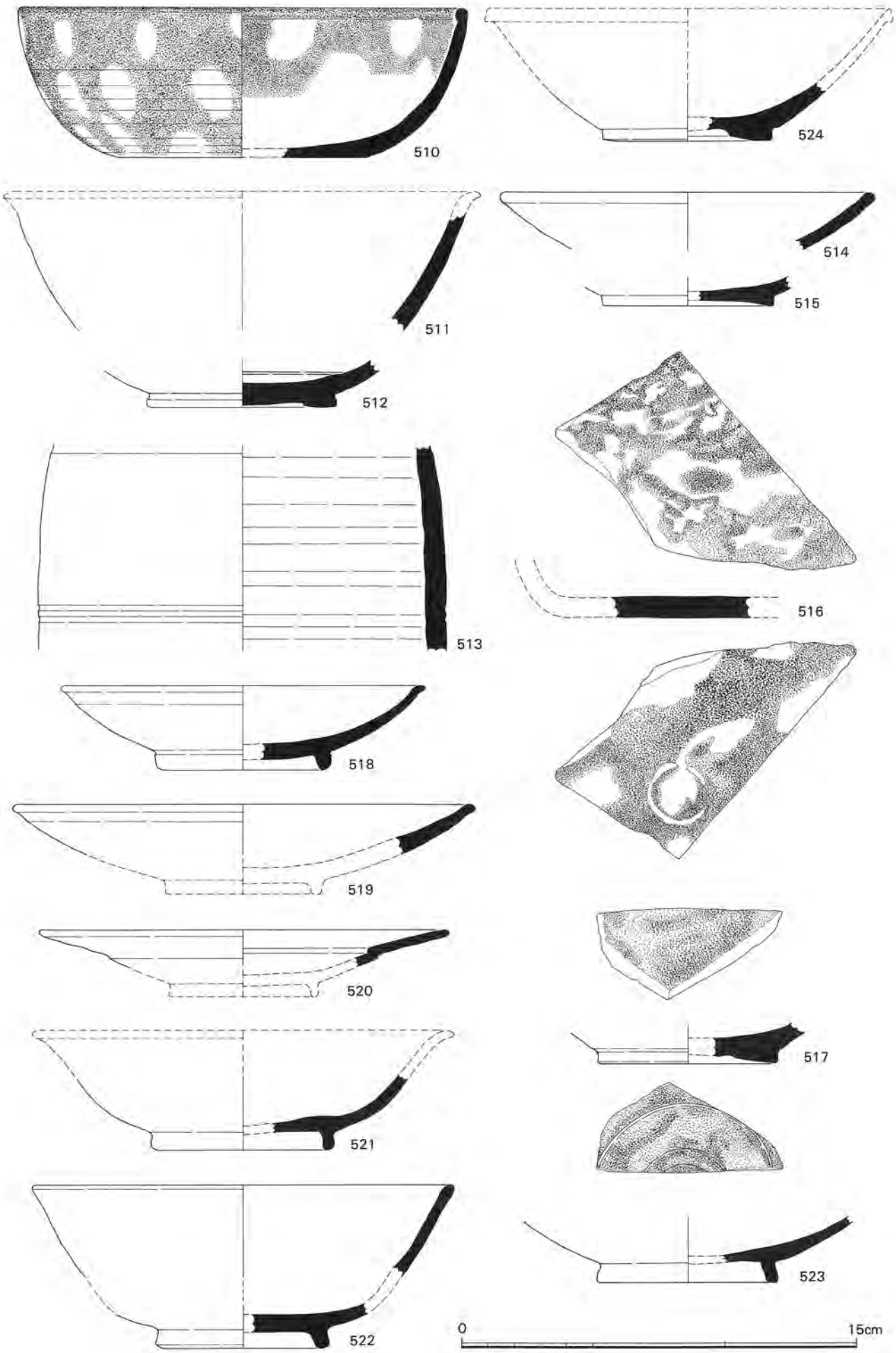
506

508

504

502

509


510
524
511
514
515
512
516
513
518
519
520
517
521
523
522
0
15cm

510

517

518

513

520

521

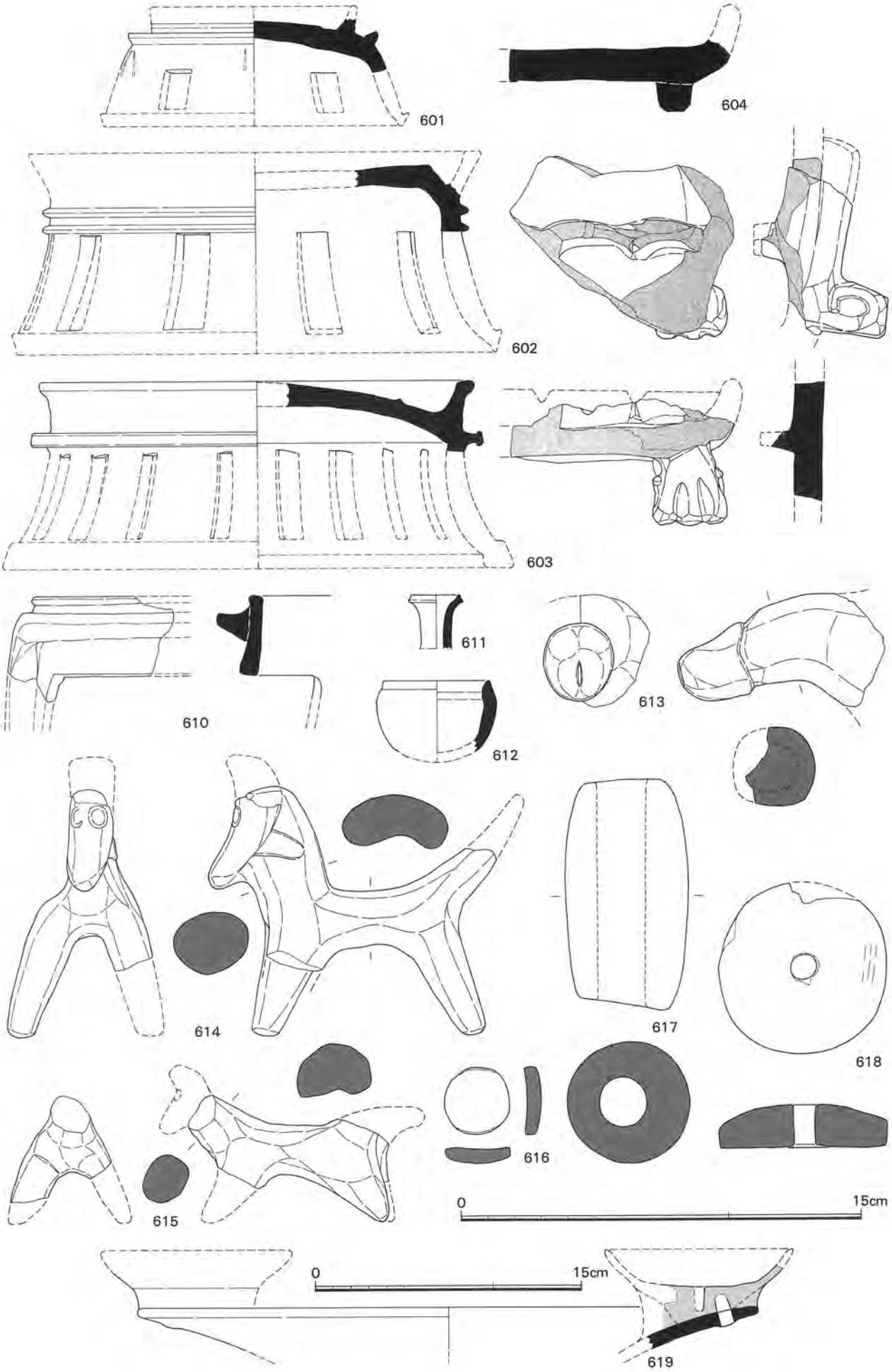
512

522

515

524

516


601
604
602
603
610
611
612
613
614
615
616
617
618
0
15cm
0
15cm
619

601

602

605

603

606

607

608

609

1 : 2

604

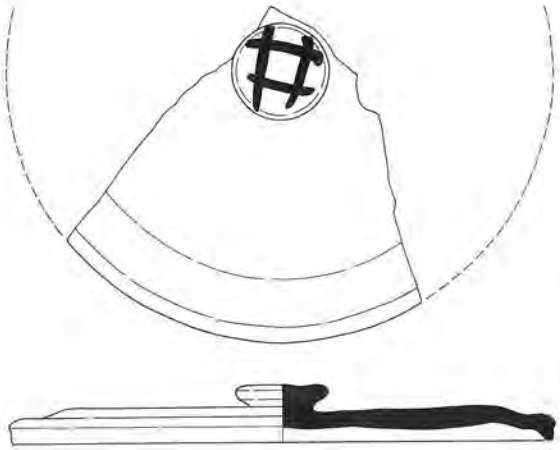
614

2 : 3

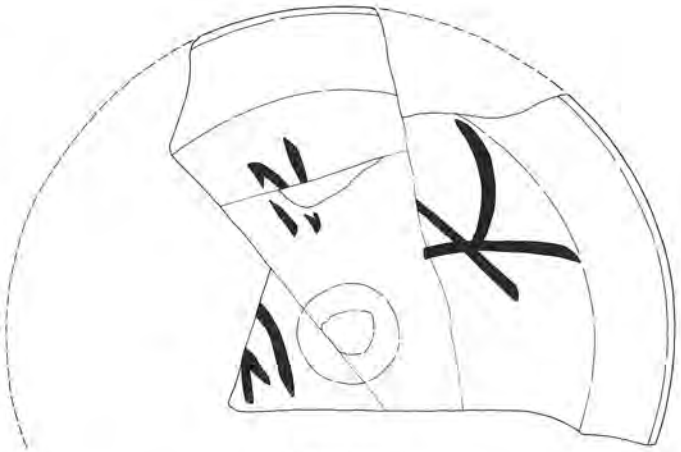
619

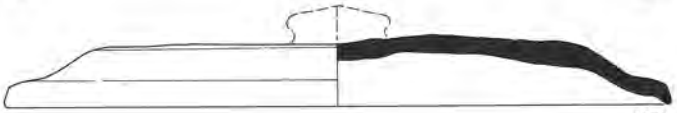
610

613

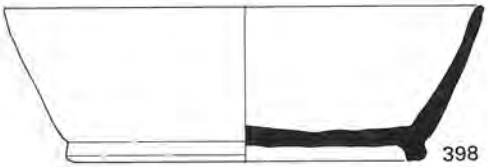


397

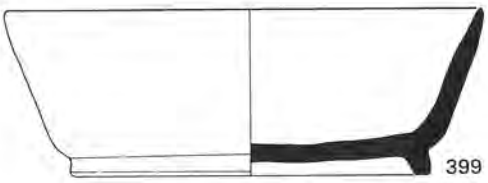




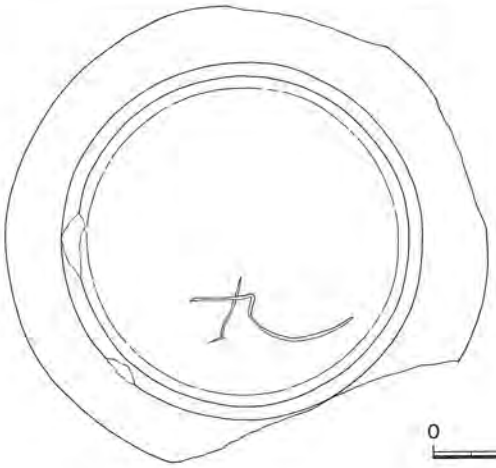
400

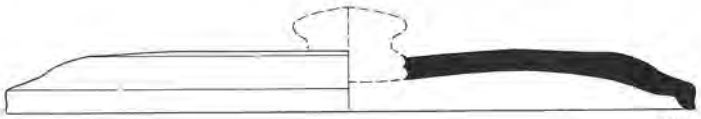


398



399





401

0 20cm

398

400

400

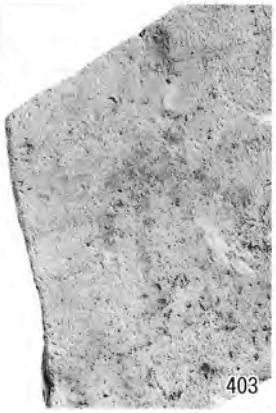
401

397

400

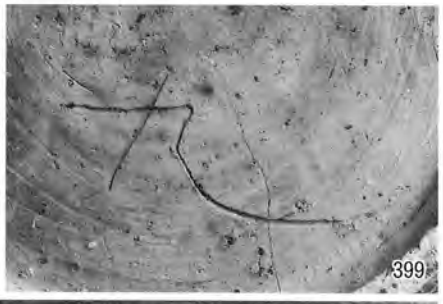
329

402


403

404

22


399

405

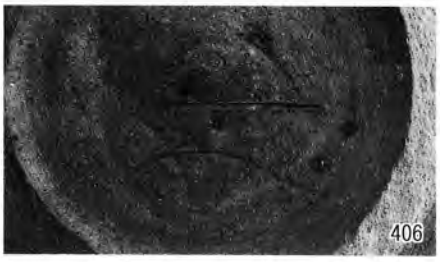
217

62

391

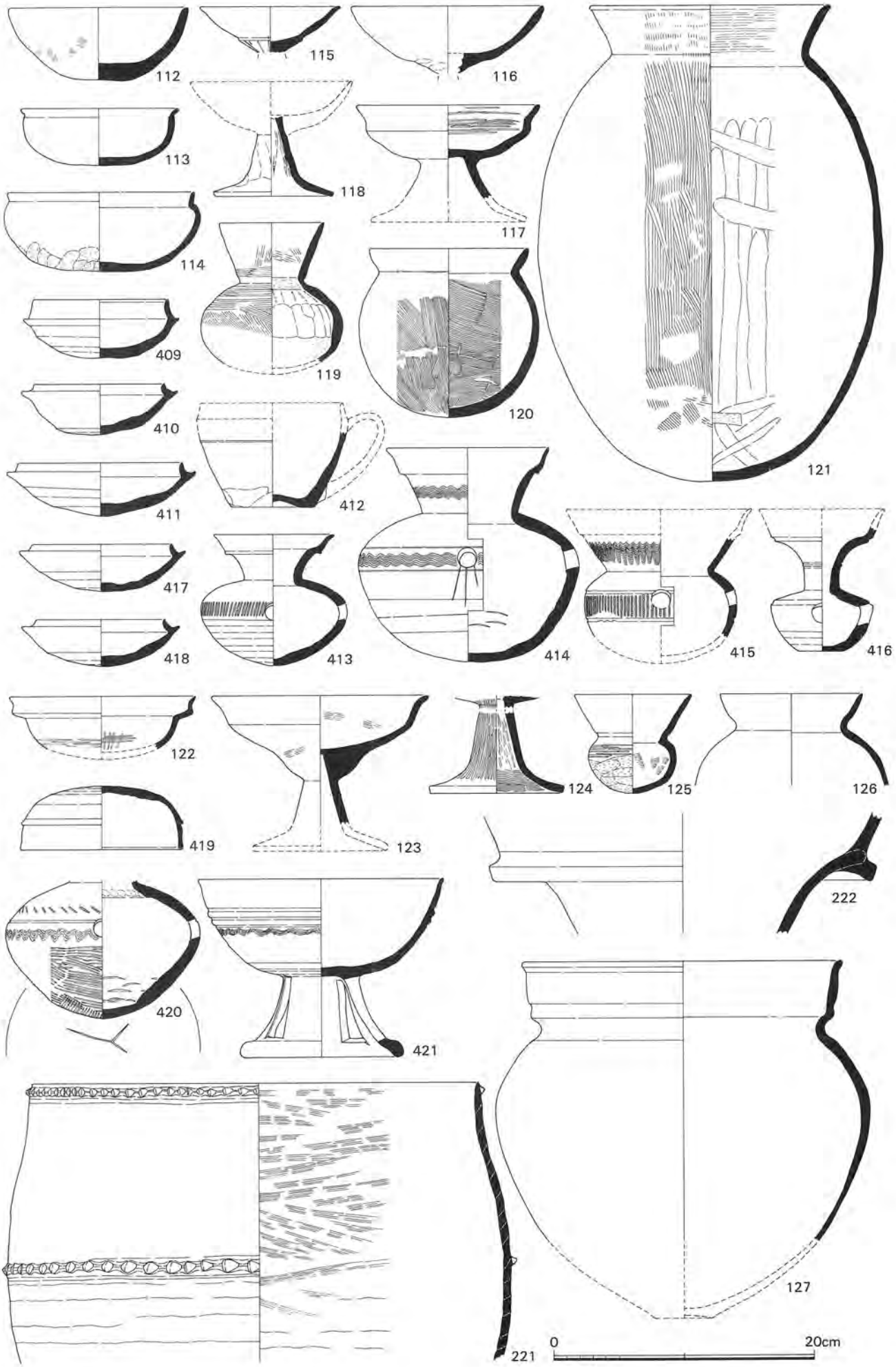
218

521


406

407

408


112
115
116
113
118
117
114
409
119
120
121
410
412
411
417
413
414
415
416
418
122
124
125
126
419
123
222
420
421
127
221
0
20cm

409

419

112

114

121

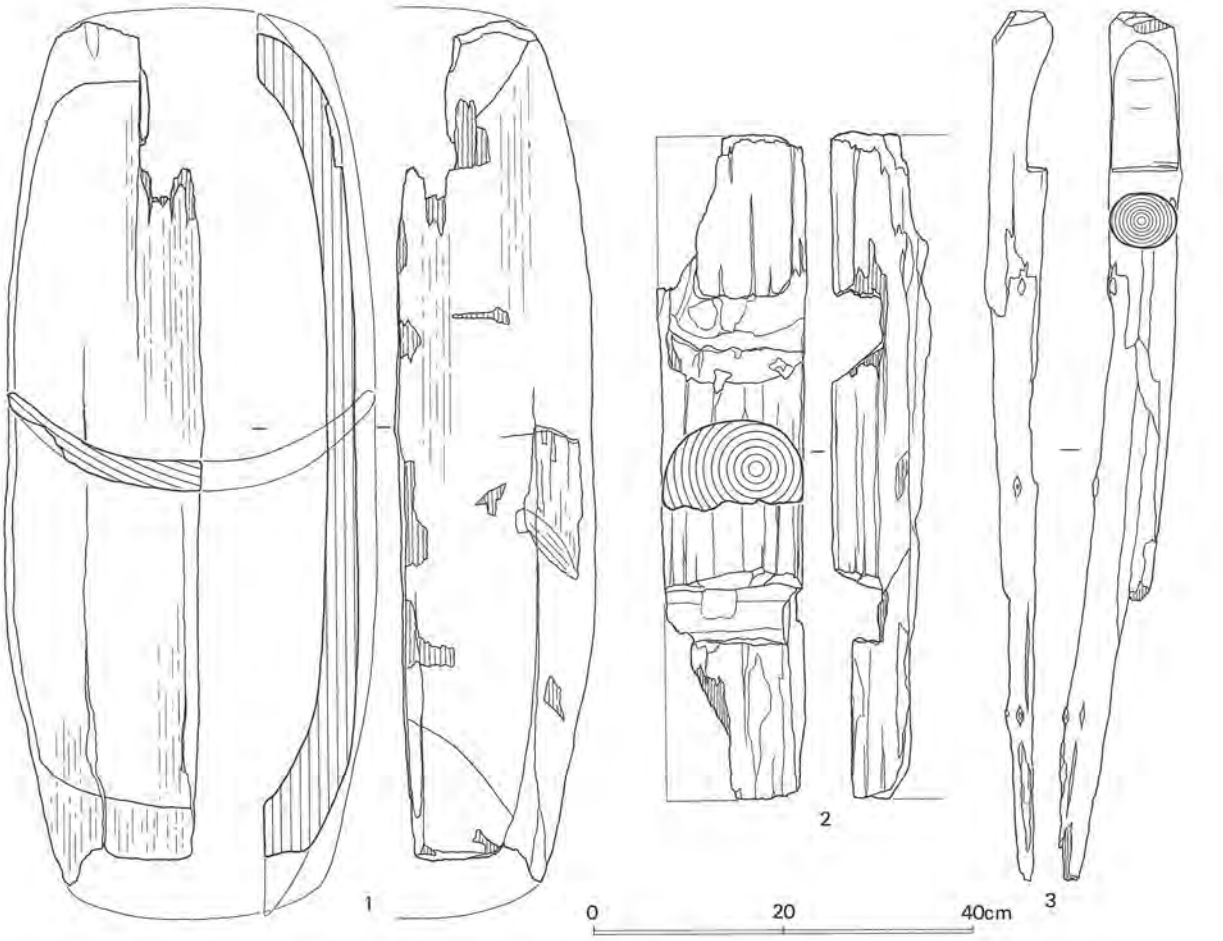
123

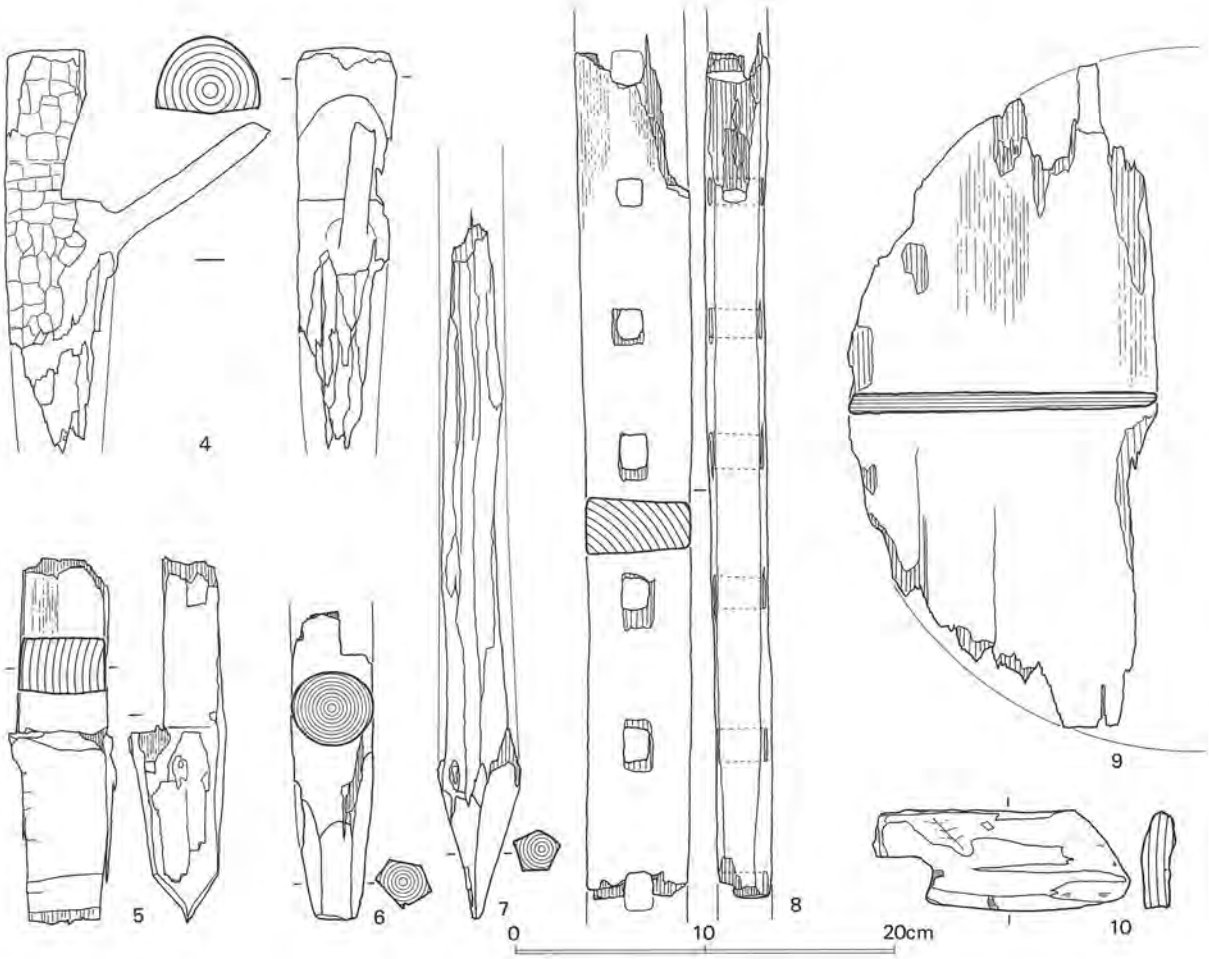
421

221

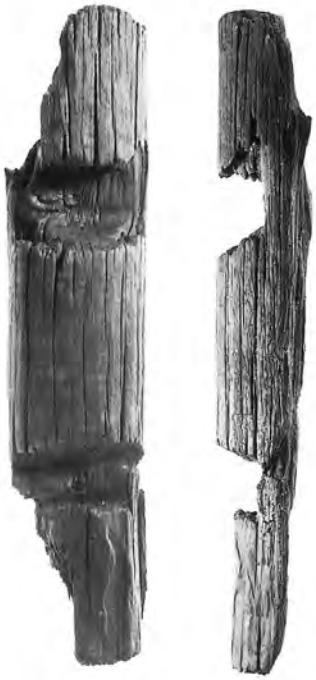
125

413


1
2
3
0
20
40cm


4
5
6
7
8
9
10
0
10
20cm

1



2

3

4

5

6

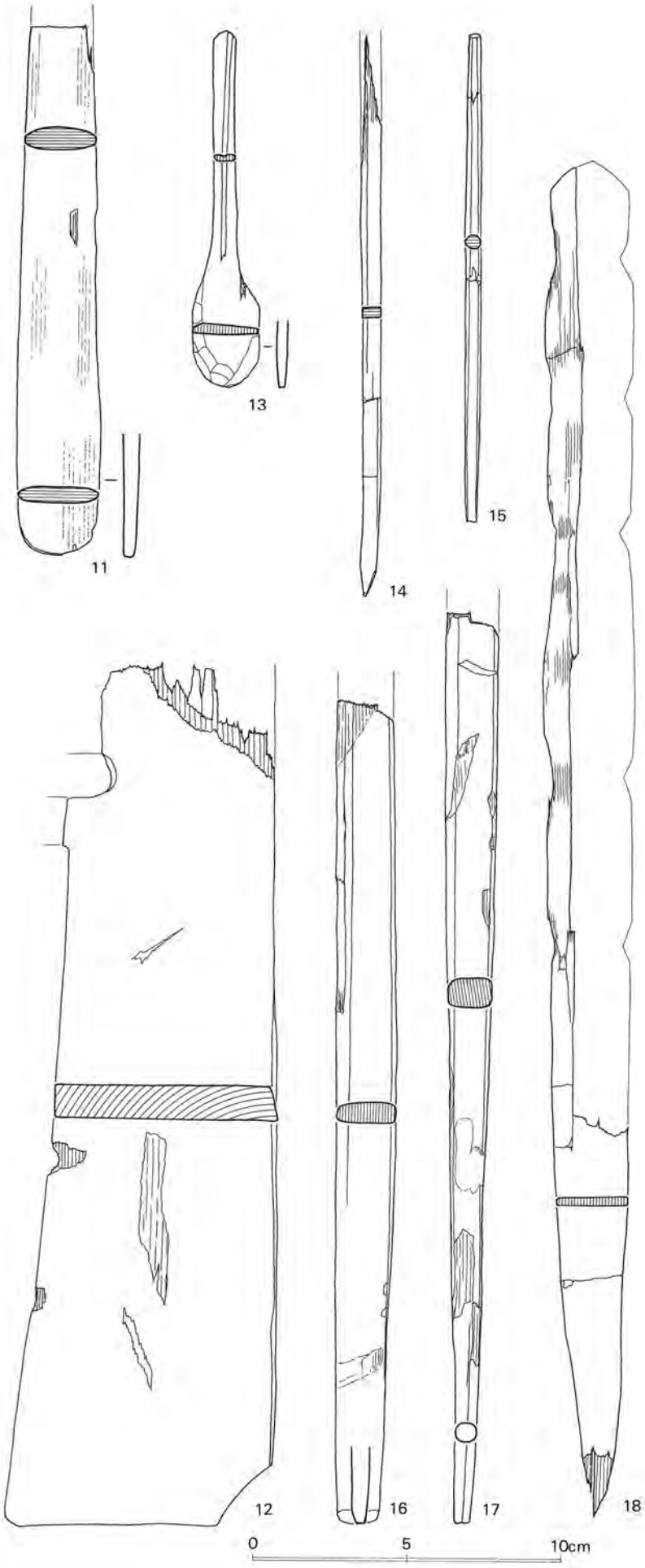
7

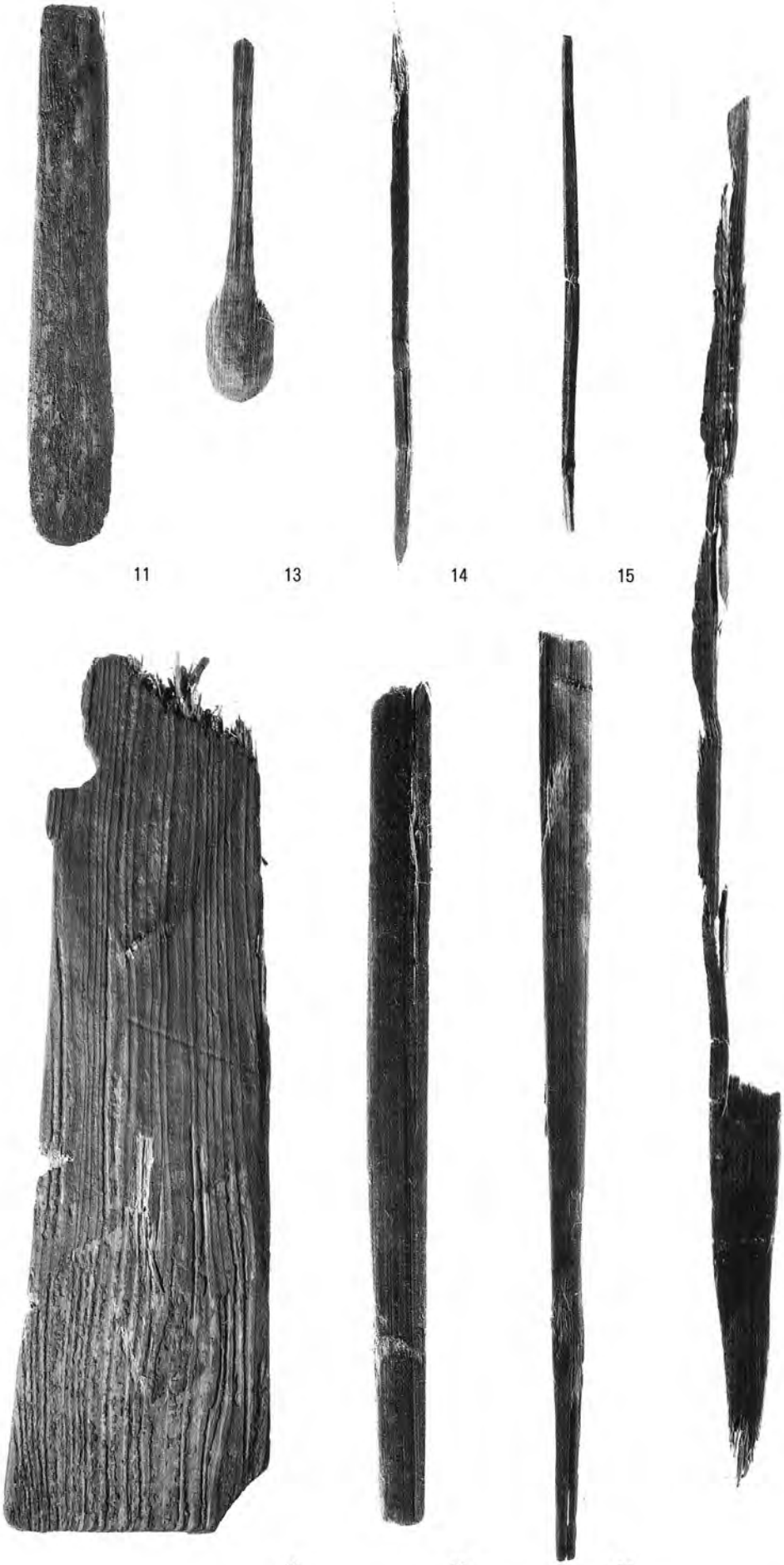
8

9

10

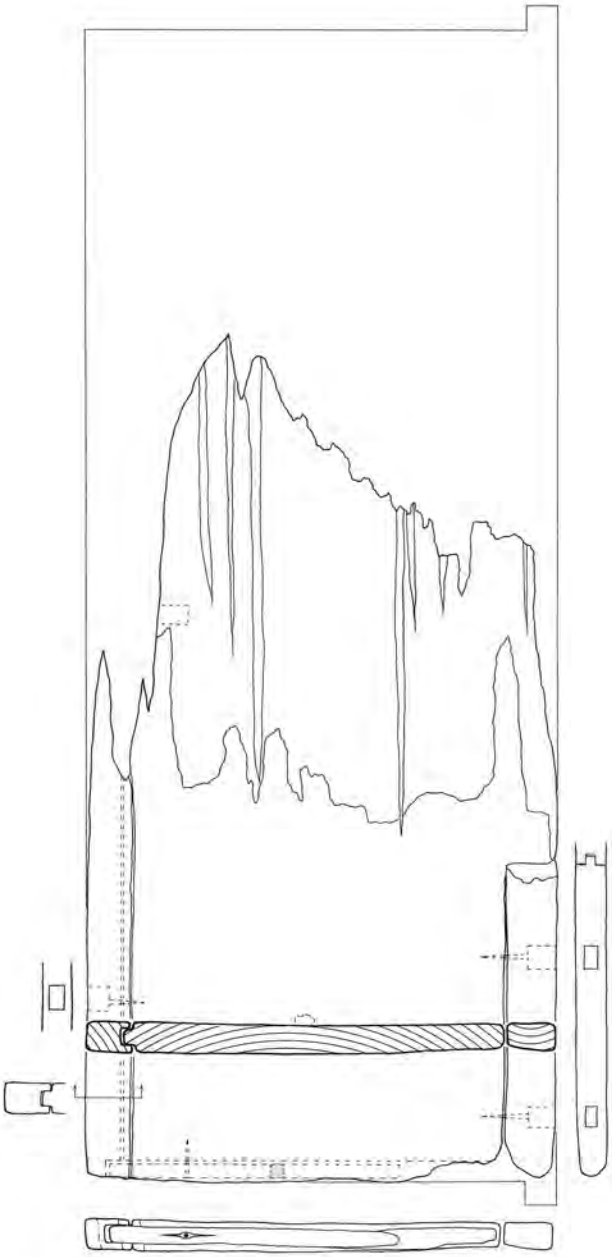
1～3（1：8）　4～10（1：4）


11
13
14
15
12
16
17
18
0
5
10cm



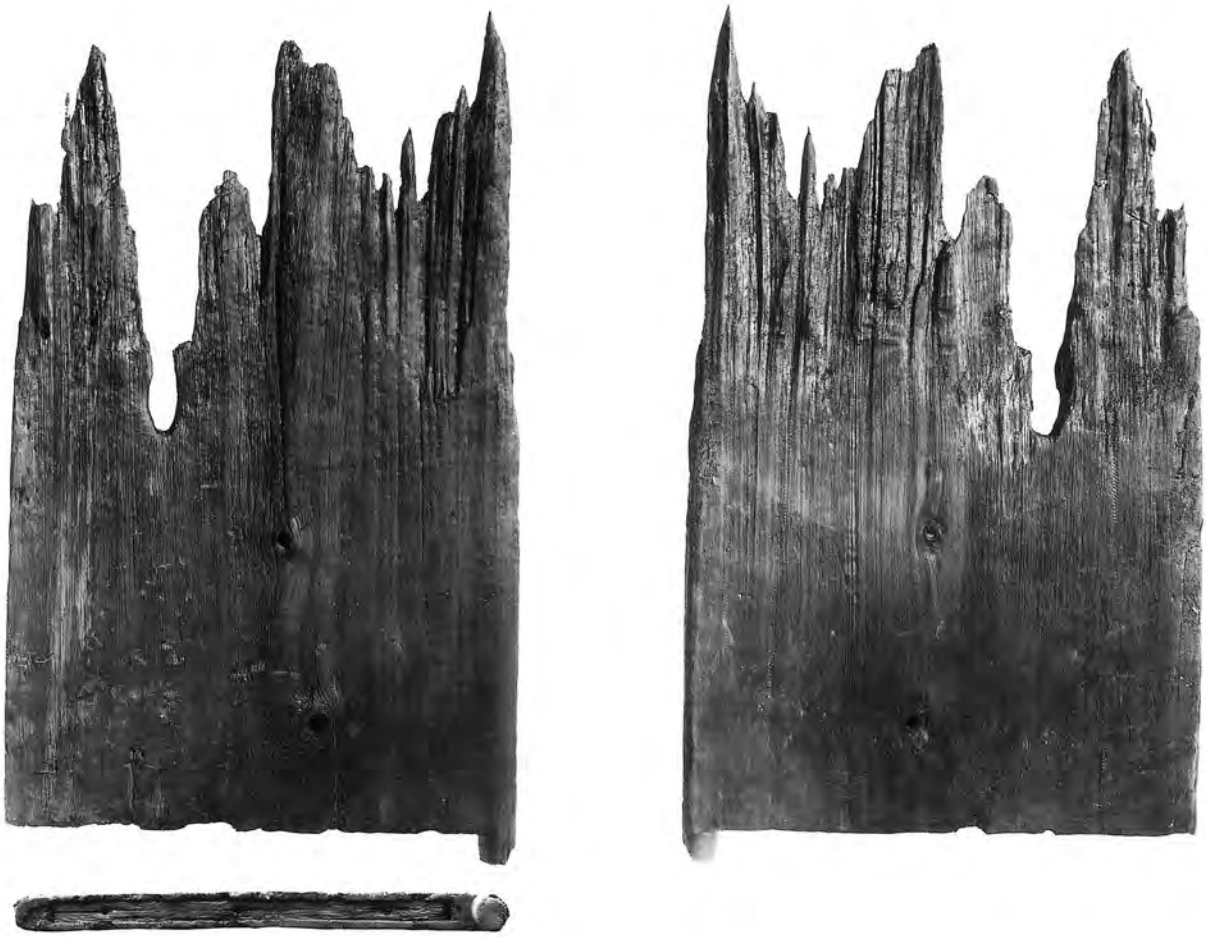
1 : 2

19

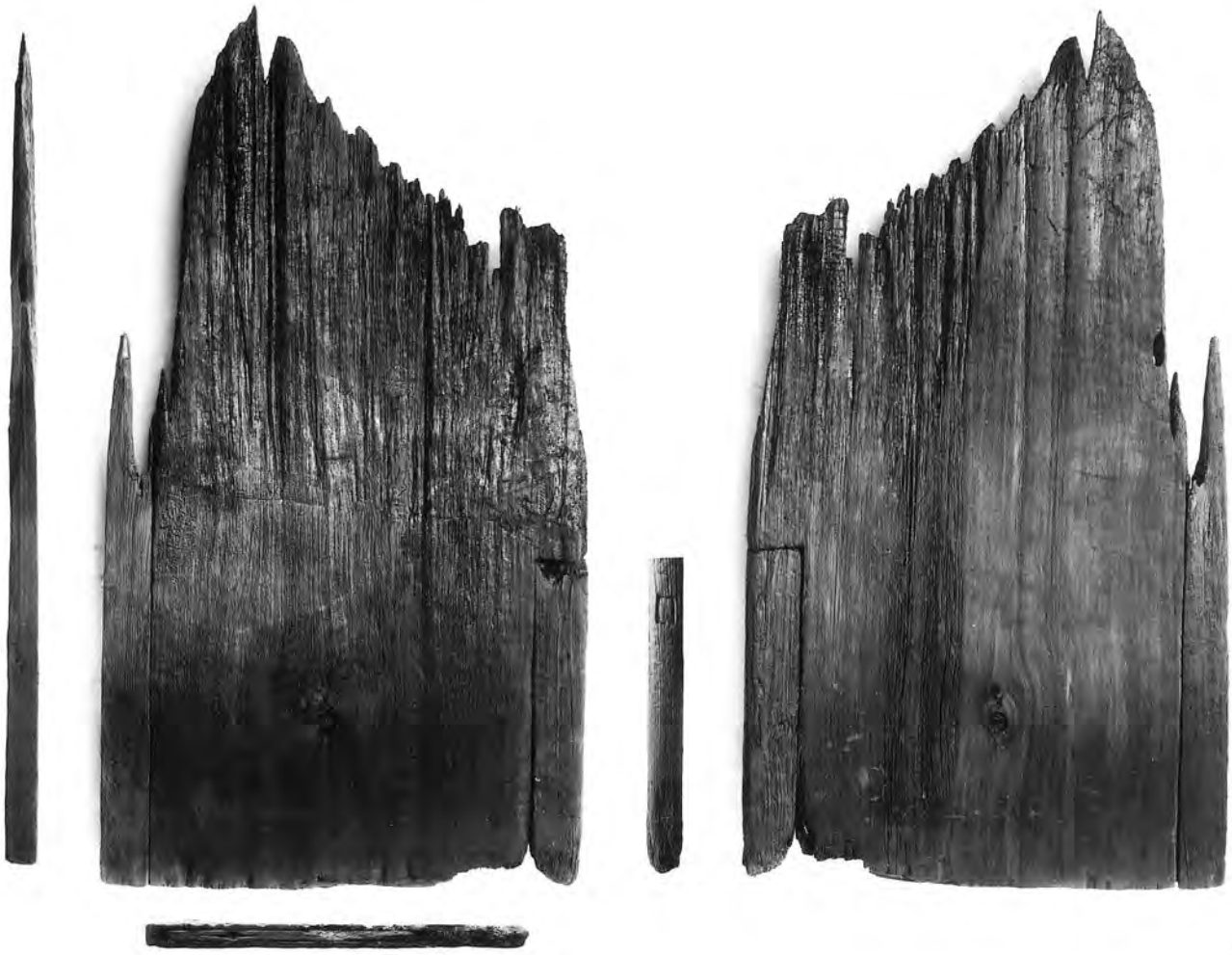


20

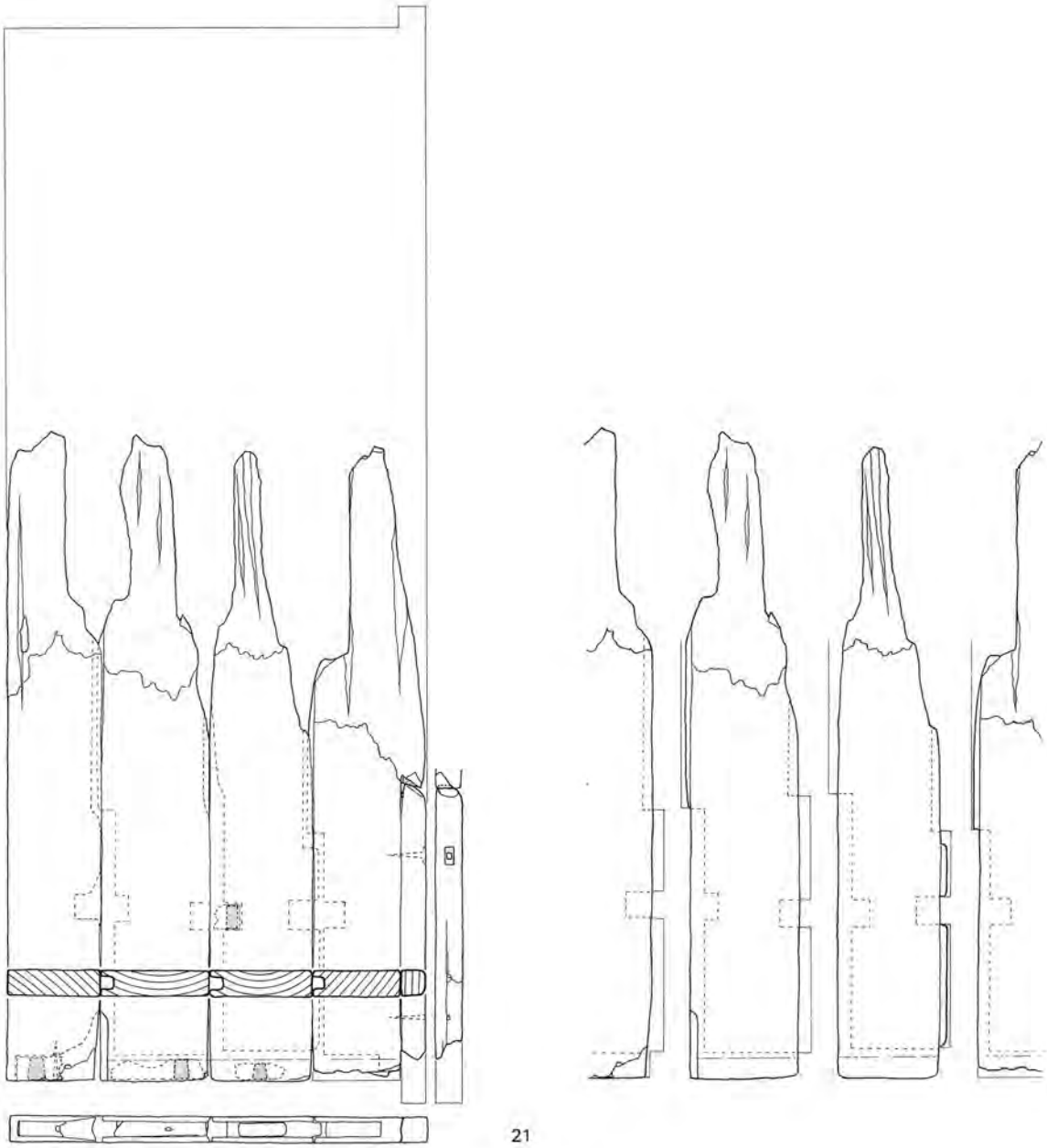
0 50 100cm



19

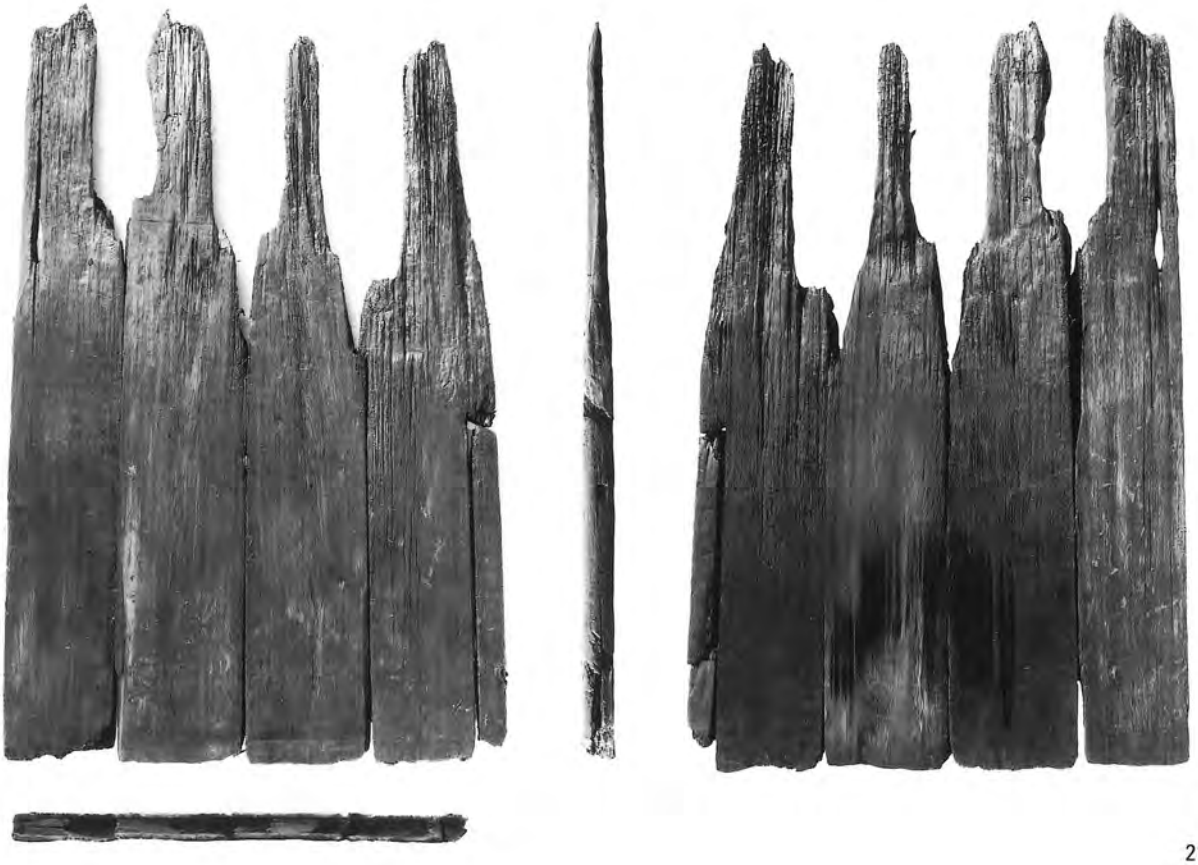


20

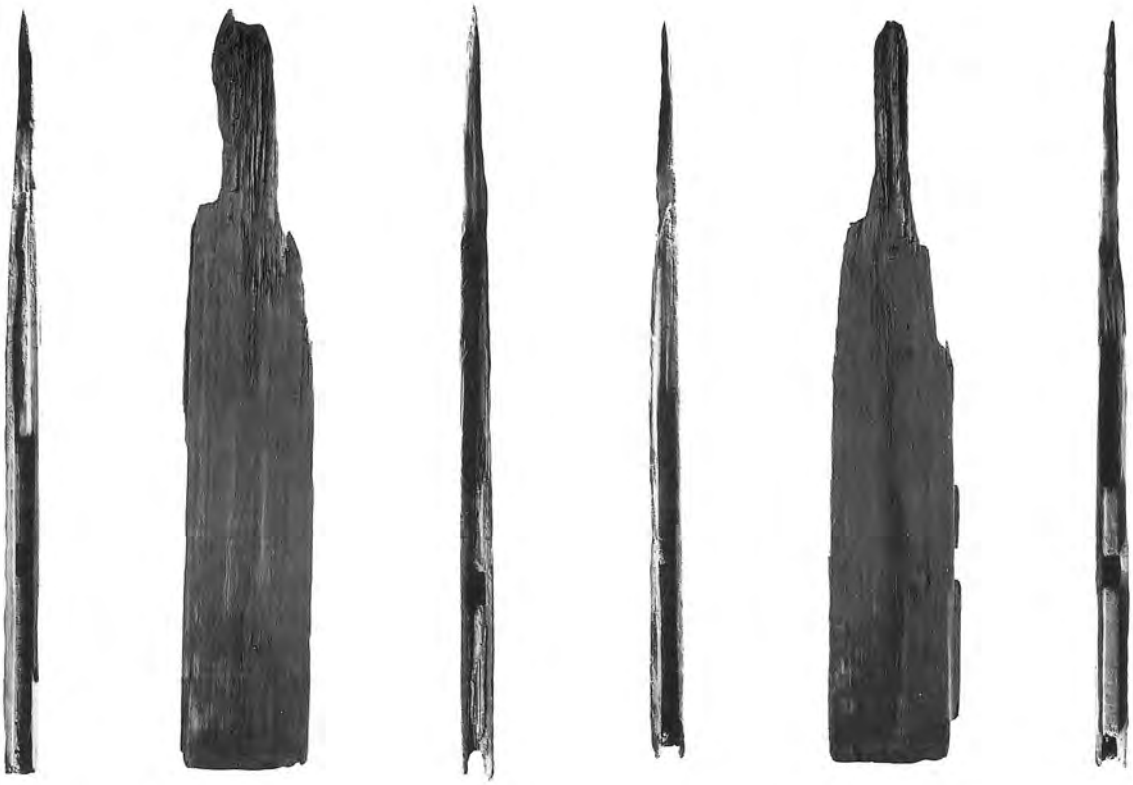


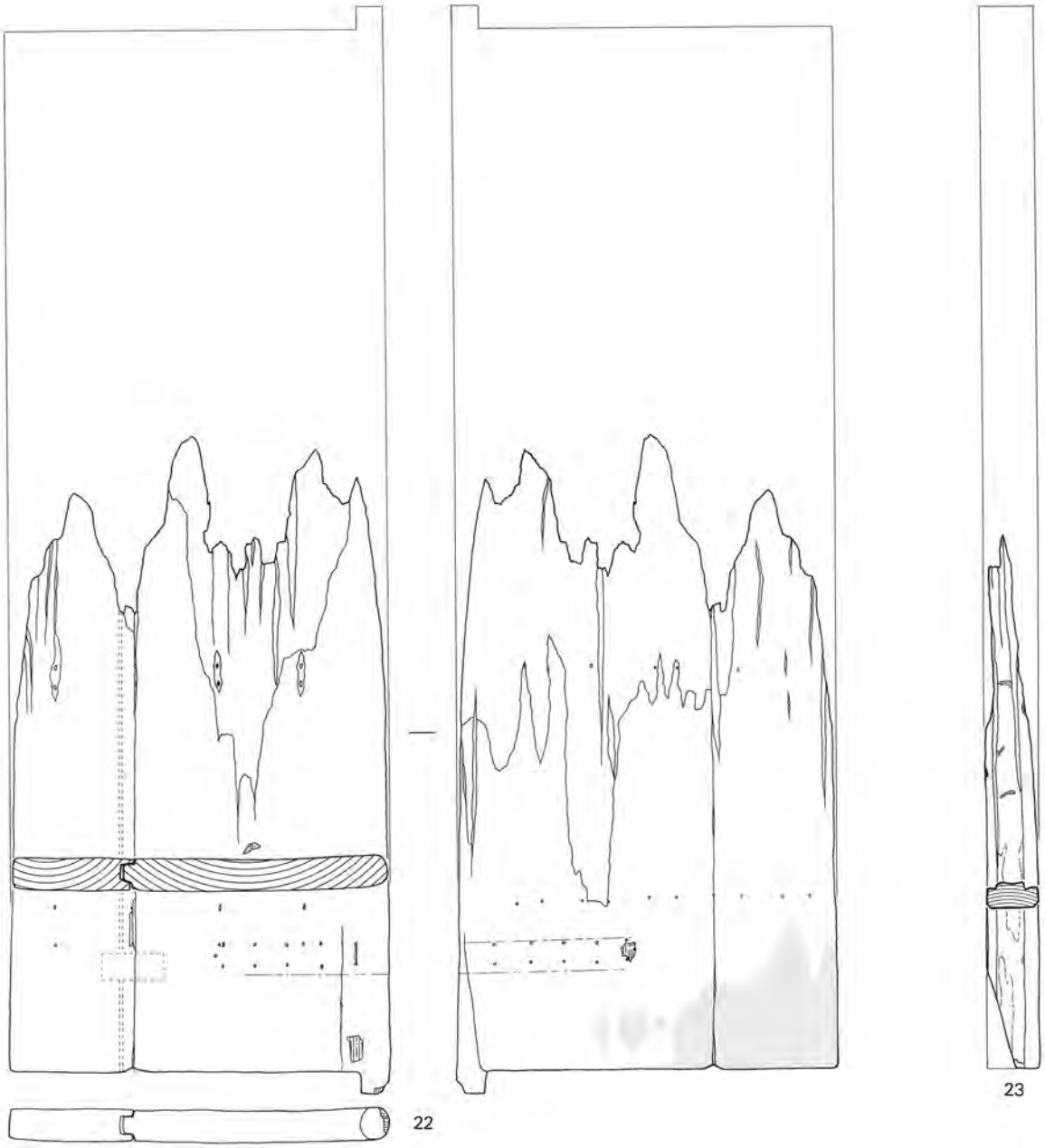
21

0 50 100cm



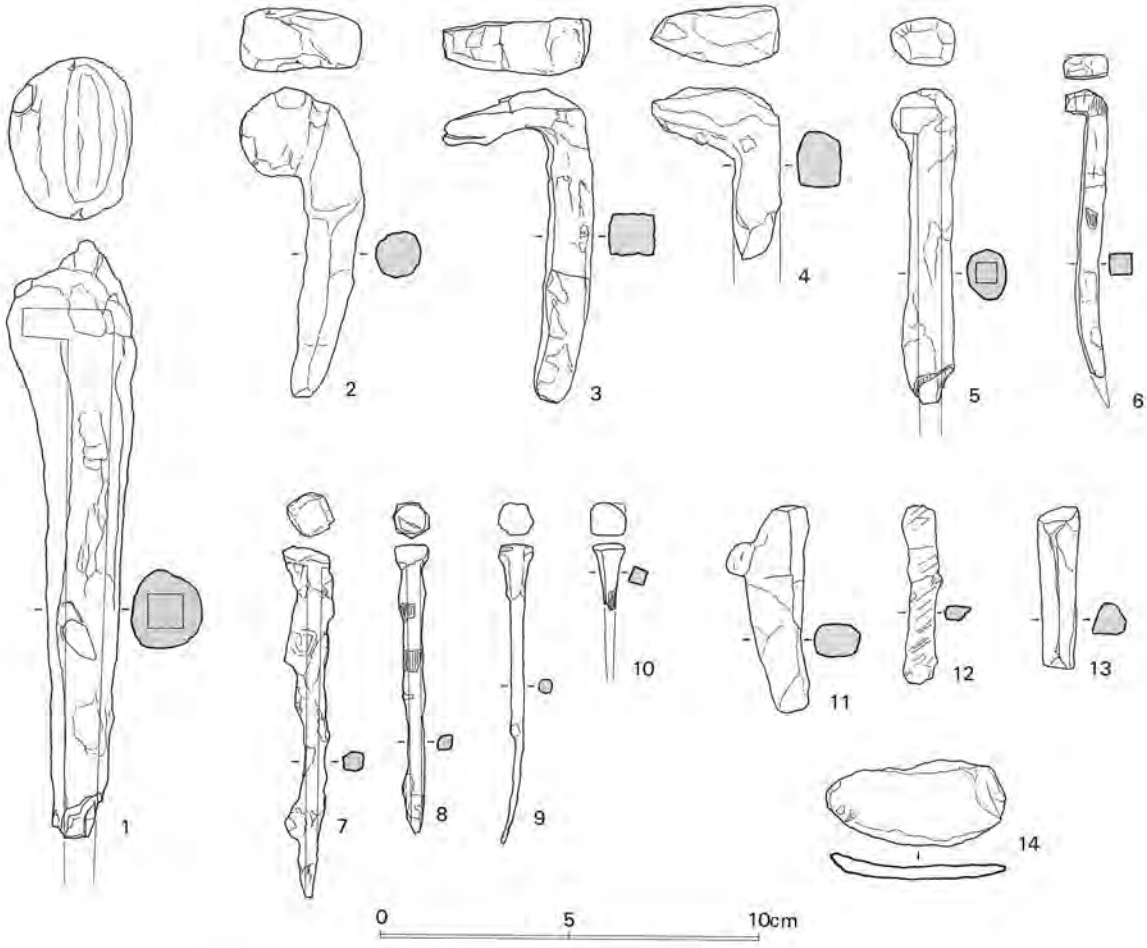
21

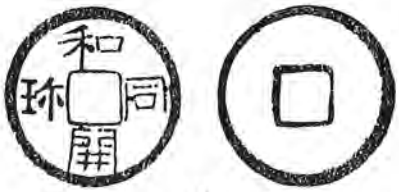



22
23
0
50
100cm

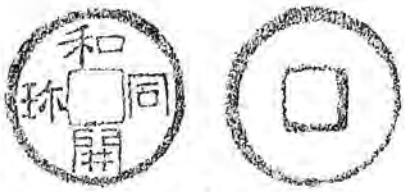
23

22



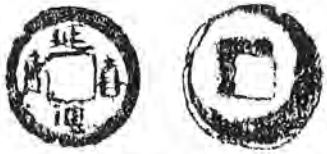


15

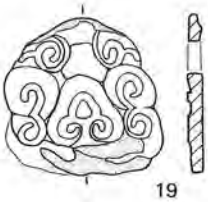


16

17

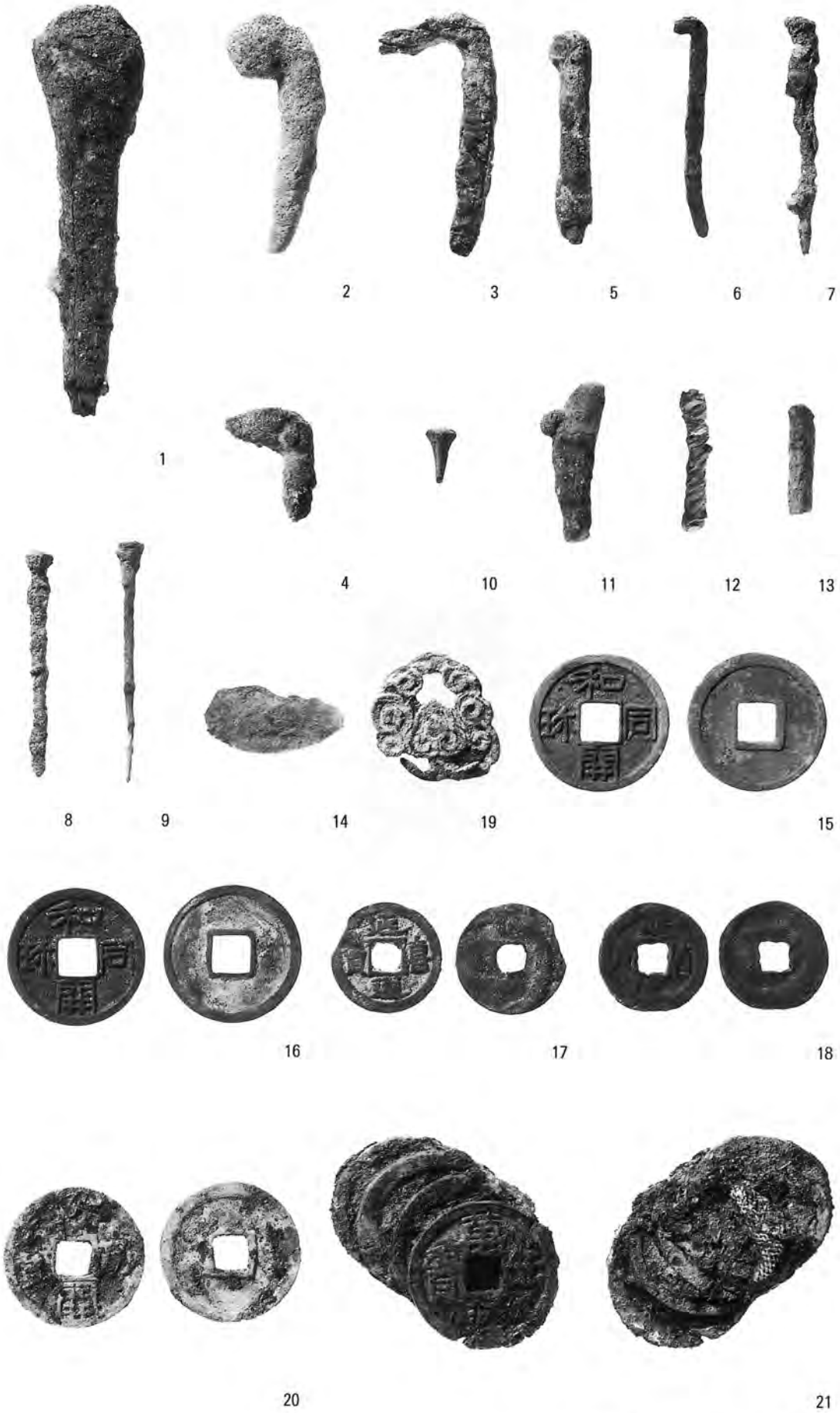


18

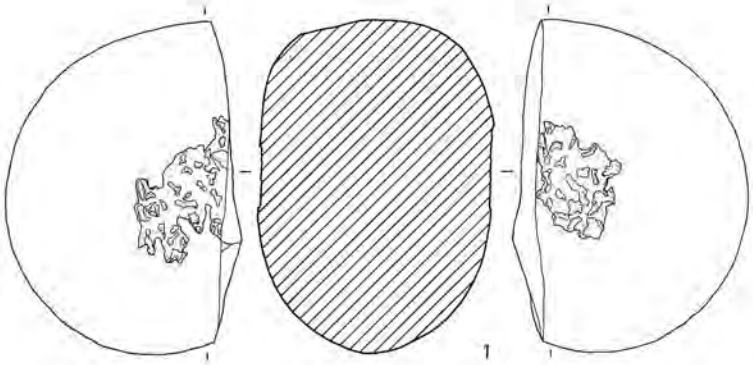


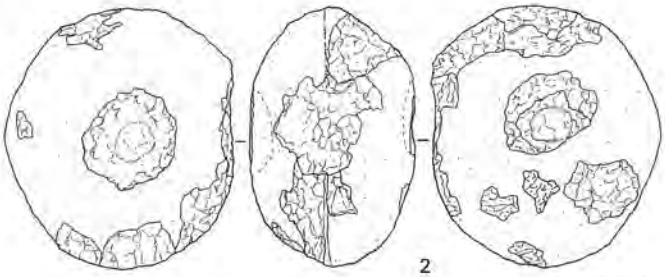
19

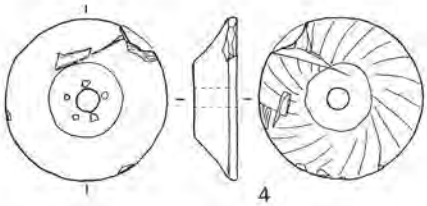
0 5cm

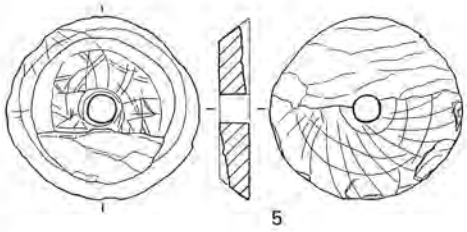


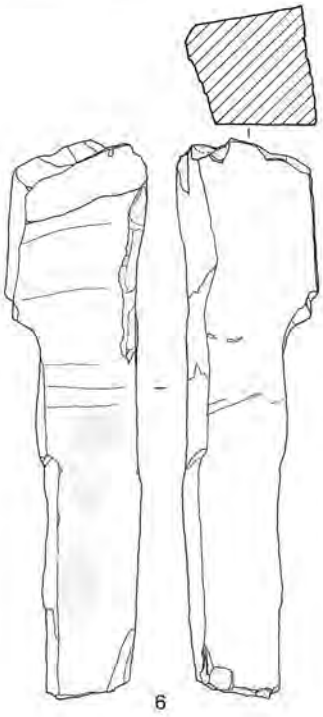
1～14（1：2）　15～19（1：1）

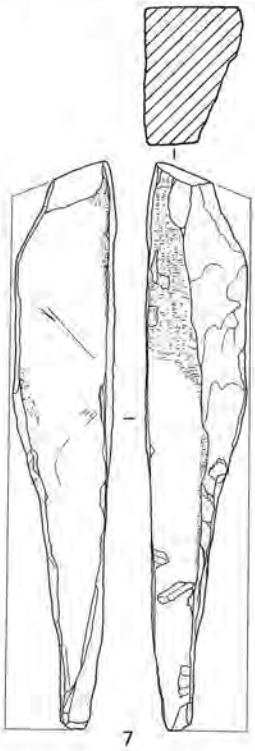


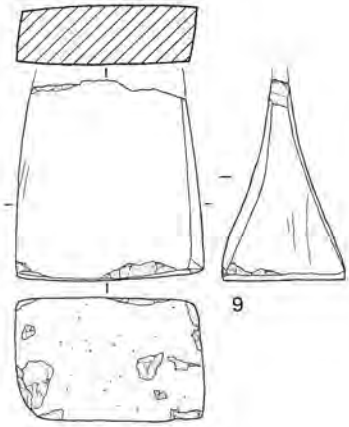


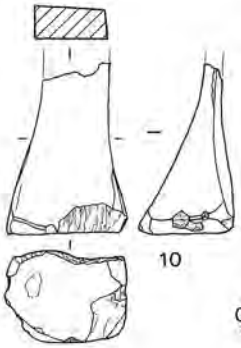


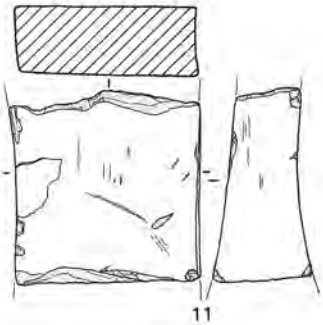


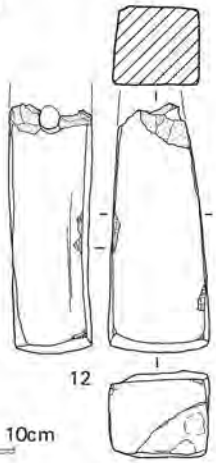




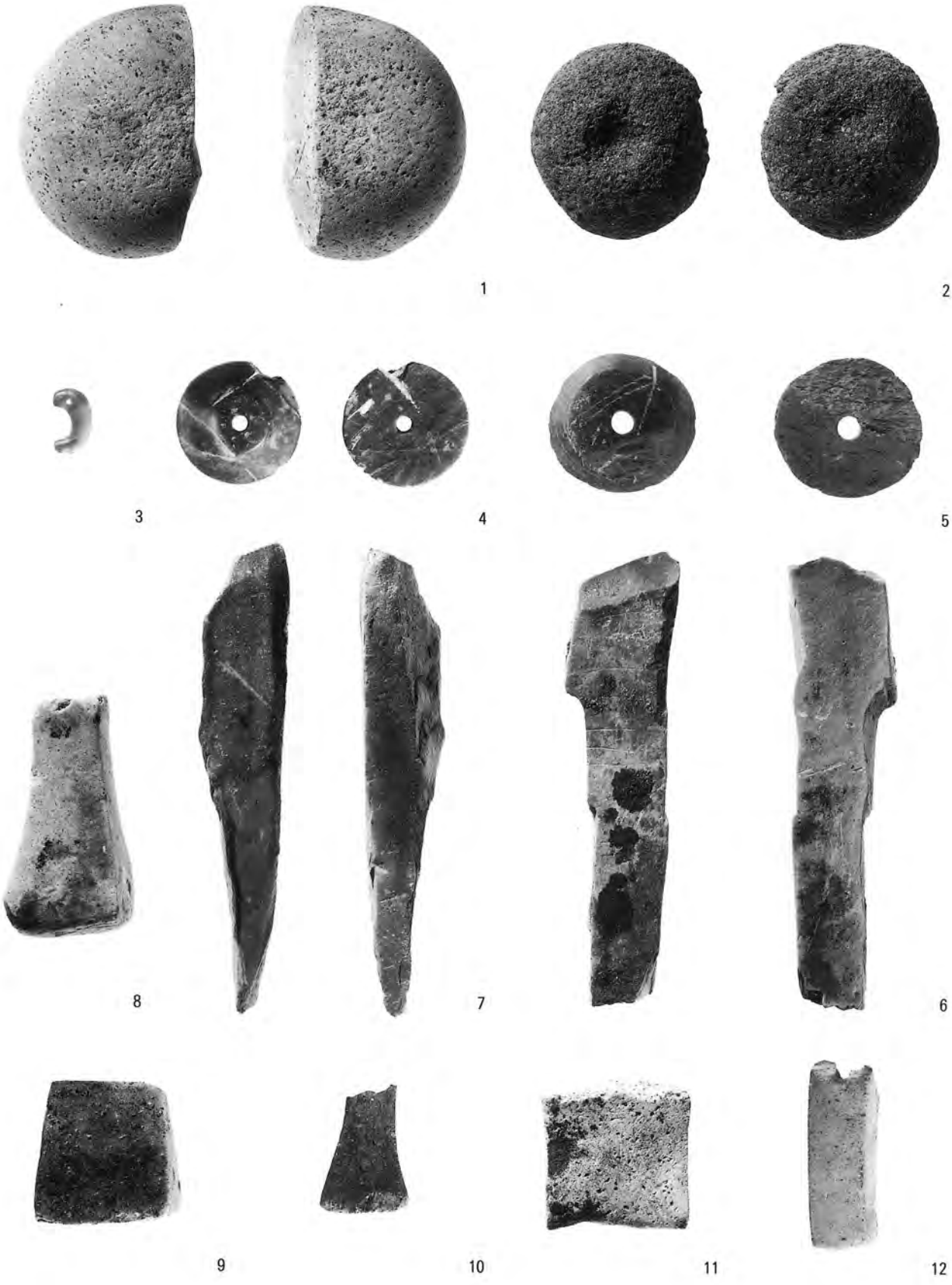




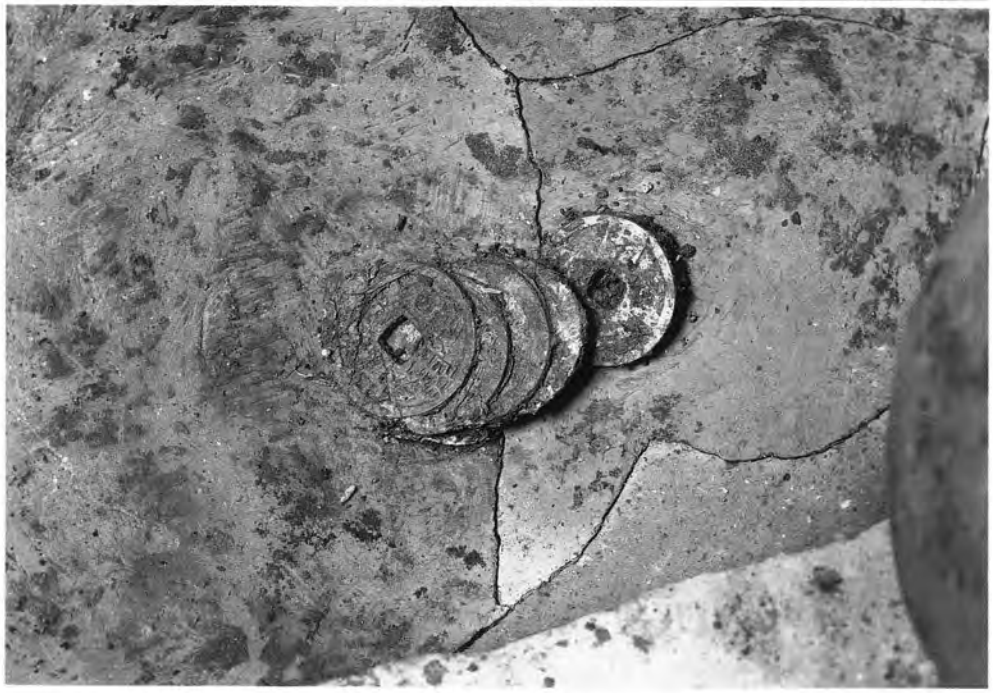


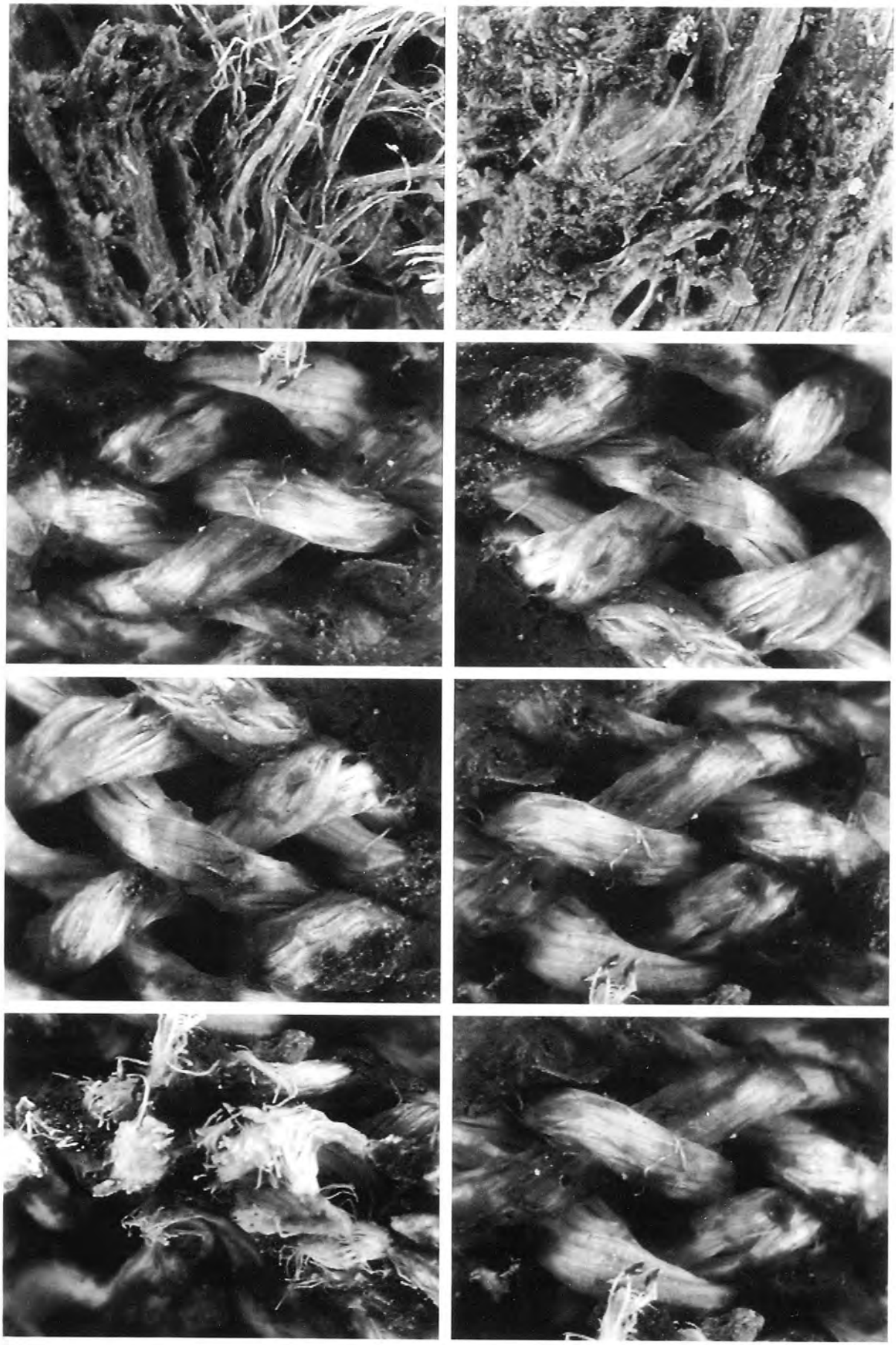


0 5 10cm

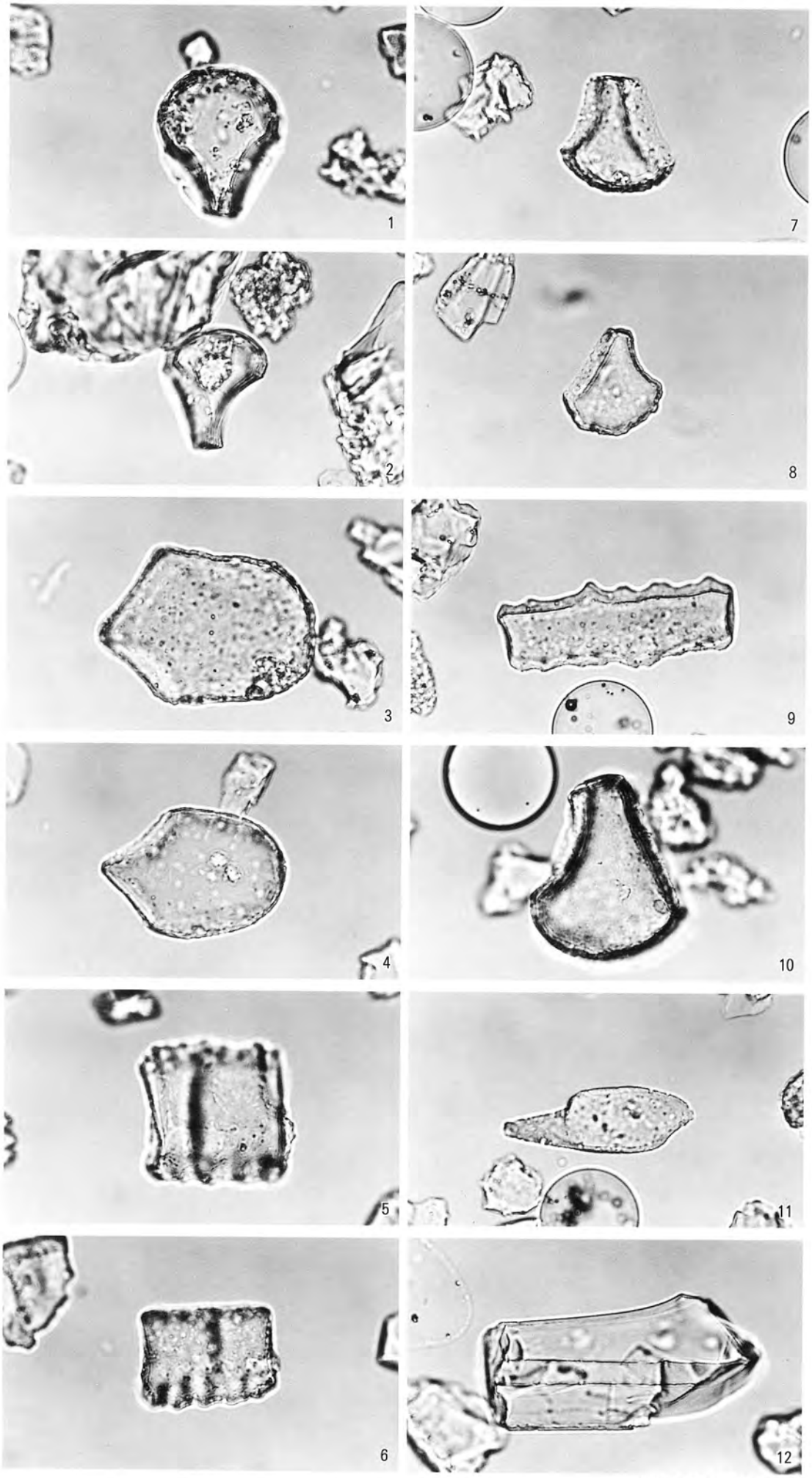


1 : 2





100 : 1



400倍の写真を0.8倍に縮小

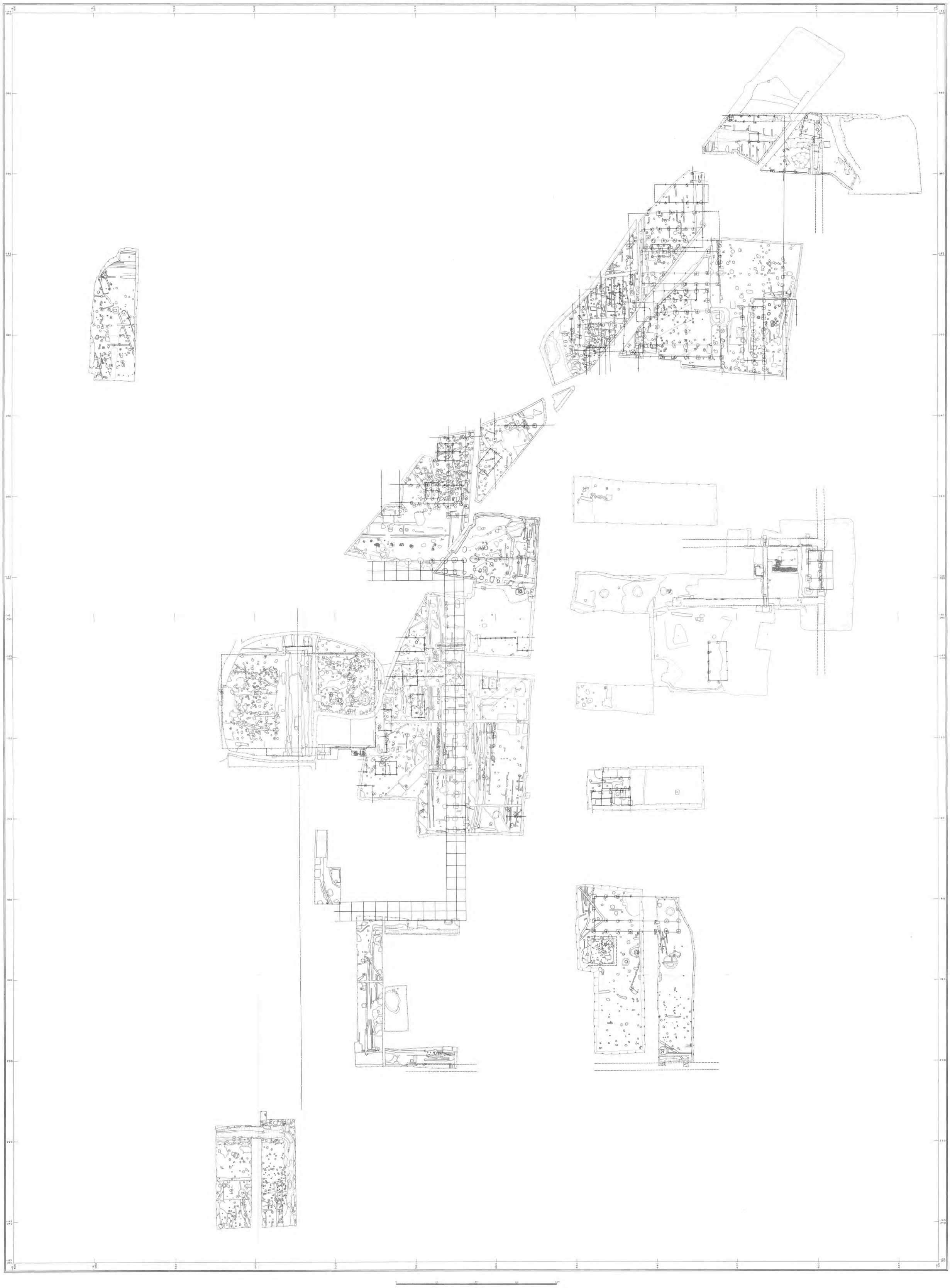
1993年３月15日　印刷
1993年３月30日　発行

西隆寺発掘調査報告書
奈良国立文化財研究所40周年記念学報　第52冊

著作権所有
発行所　奈良市二条町二丁目九番一号
奈良国立文化財研究所

印刷者　奈良市南京終町３丁目464番地
明新印刷株式会社

西隆寺跡遺構図(1：400)



小塔院跡
野神村
弥勒金堂跡
小坊村
発火門跡